

Oracle® Fusion Cloud EPM

Oracle Enterprise Performance Management
Cloud データ統合の管理



F29017-16



Oracle Fusion Cloud EPM Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理、

F29017-16

Copyright © 2017, 2024, Oracle and/or its affiliates.

著者: EPM Information Development Team

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, MySQL, and NetSuite are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

For information about Oracle's commitment to accessibility, visit the Oracle Accessibility Program website at <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>.

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて

ドキュメントのフィードバック

1 EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行

2 データ統合

前提条件	2-1
データ統合での EPM Cloud ビジネス・プロセスの使用	2-3
Planning を使用されるお客様	2-4
フリーフォーム・アプリケーションへのデータのロード	2-4
Financial Consolidation and Close を使用するお客様	2-6
Tax Reporting を使用されるお客様	2-8
Account Reconciliation を使用するお客様	2-9
Strategic Workforce Planning を使用されるお客様	2-11
Enterprise Profitability and Cost Management を使用するお客様	2-12
Profitability and Cost Management を使用するお客様	2-12

3 データ統合の起動

データ統合ホーム・ページの表示	3-1
デフォルト POV 期間の選択	3-3
データ統合ワークフローの操作	3-4

4 統合タスク

システム設定	4-1
ロケーションの表示	4-7

5 アプリケーションの登録

アプリケーション・オプションの起動	5-1
アプリケーションのナビゲート	5-2
EPM ローカル・アプリケーションの登録	5-5
EPM Cloud アプリケーションの登録	5-6
データ・ソース・ベースのアプリケーションの登録	5-7
Oracle ERP Cloud General Ledger アプリケーションの登録	5-8
Oracle NetSuite アプリケーションの登録	5-8
Oracle NetSuite アプリケーションの更新	5-11
増分ファイル・アプリケーションの登録	5-11
オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションの定義	5-13
Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録	5-14
Oracle ERP Cloud アプリケーションの更新	5-16
Oracle ERP Cloud カスタム・アプリケーションの登録	5-16
Peoplesoft GL 残高アプリケーションの登録	5-18
E-Business Suite アプリケーションの登録	5-19
E-Business Suite および Peoplesoft データ・ソースへの接続	5-20
Oracle HCM Cloud アプリケーションの登録	5-22
オンプレミス・ファイルの登録	5-23
ファイル・アプリケーションの登録	5-24
ディメンション・クラスまたはディメンション・タイプのアプリケーションの登録	5-25
データ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの登録	5-27
クイック・モード統合用のデータ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの登録	5-28
アプリケーション詳細	5-30
アプリケーションのディメンションの詳細の定義	5-30
参照ディメンションの追加	5-32
アプリケーション詳細オプションの定義	5-33
Oracle ERP Cloud データ・ソースのアプリケーション詳細の定義	5-41
オプションの編集	5-41
デフォルト・オプションの設定	5-44

6 ソース接続の構成

Oracle ERP Cloud 接続の構成	6-1
Oracle HCM Cloud 接続の構成	6-2
Oracle NetSuite 接続の構成	6-4

7 期間マッピングの管理

グローバル・マッピング	7-3
アプリケーション・マッピング	7-5
ソース・マッピング	7-6
ファイル・ソース・タイプのソース・マッピング	7-7
データ・ソース・タイプのソース・マッピング	7-8
EPM Cloud ソース・タイプのソース・マッピング	7-9
Oracle ERP Cloud ソース・タイプのソース・マッピング	7-10
Oracle HCM Cloud ソース・タイプのソース・マッピング	7-12
Oracle NetSuite ソース・タイプのソース・マッピング	7-13
期間マッピング・オプション	7-14
Excel からの期間マッピングのインポート	7-14
Excel への期間マッピングのエクスポート	7-15
期間マッピング・インポート・テンプレートのダウンロード	7-15
期間マッピングの削除	7-16
EPM Cloud またはファイルベースのソース・システムの複数期間のロード	7-18

8 カテゴリ・マッピングの管理

グローバル・マッピング	8-1
アプリケーション・マッピング	8-2
ターゲット・カテゴリのメンバーの選択	8-3

9 データ統合の定義

ファイルベース統合の作成	9-2
ロケーションの属性の選択	9-4
ファイルのマッピング	9-5
ファイル・オプションのプレビュー	9-7
ファイル列ヘッダーの編集	9-7
ファイル・ブラウザの使用	9-8
ファイルベースのロードでのクイック・モードの使用	9-9
ファイルベース・ロードのクイック・モードに関する考慮事項	9-9
ファイルベースのロードでクイック・モードを使用する場合のプロセスの説明	9-10
ファイルベース・ロードのクイック・モードでの期間の定義	9-17
ファイルのページ	9-17
直接統合の作成	9-17
ディメンションのマッピング	9-18
ディメンション・マップの作成	9-18

ターゲット式の使用	9-22
ソース式の使用	9-28
Account Reconciliation マージ残高ディメンションの追加	9-31
メンバーのマッピング	9-33
メンバー・マッピングの追加	9-33
「明示」マッピングの使用	9-37
「範囲」マッピングの使用	9-38
「含む」マッピングの使用	9-39
「類似」マッピングの使用	9-40
「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用	9-40
ターゲット値式での特殊文字の使用	9-43
マルチディメンショナル・マッピングの使用	9-43
マルチディメンショナル・マッピングでの特殊文字の使用	9-45
ターゲット値のフォーマット・マスク・マッピング	9-46
# FORMAT マッピング・タイプのコンポーネント	9-46
# FORMAT マッピングの例	9-47
セグメントの置換	9-47
文字列演算を伴うセグメントの置換	9-48
文字列演算と接頭辞および接尾辞を使用するセグメントの置換	9-48
メンバーの選択	9-48
メンバーのフィルタ処理	9-49
メンバー・マッピングのインポート	9-50
Excel マッピングのインポート	9-51
Excel テンプレート(マッピング・テンプレート)のダウンロード	9-52
メンバー・マッピングの復元	9-54
メンバー・マッピングのエクスポート	9-55
現在のディメンションまたはすべてのディメンションのマップのエクスポート	9-55
Excel へのマップのエクスポート	9-56
データ統合オプションの設定	9-57
ファイルベース・オプションの定義	9-58
直接統合オプションの定義	9-59
ターゲット・オプションの定義	9-62
データ・エクスポートのターゲット・アプリケーション・オプション	9-69
Oracle General Ledger ターゲット・オプションの定義	9-71
Budgetary Control アプリケーションのターゲット・オプションの定義	9-71
Financial Consolidation and Close のアプリケーション・オプションの定義	9-72
フィルタの定義	9-80
Planning フィルタの定義	9-81
Oracle NetSuite フィルタの定義	9-81

Budgetary Control フィルタの定義	9-82
Oracle HCM Cloud フィルタの定義	9-83
MDX 問合せに対するカスタム・フィルタの定義	9-84
領域のクリアの定義	9-85
ビジネス・ルールの使用	9-87
独立モードでのビジネス・ルールの登録	9-88
ビジネス・ルールでサポートされるイベント	9-89
ビジネス・ルールへの実行時プロンプトの追加	9-90
埋込みモードでのビジネス・ルールの登録	9-92

10 データ・マップの定義

データ・マップの理解	10-1
アプリケーションについて	10-2
レポート・キューブについて	10-3
データ・マップでサポートされていない機能	10-3
データ・マップの作成	10-3
データ・マップのリフレッシュ	10-4
データ・マップの管理	10-4
データ・マップの表示	10-5
ディメンションのマッピング情報の変更	10-6
詳細なメンバー・レベルのマッピングの使用	10-6
単純なメンバー・レベルのマッピングの定義	10-6
ロールアップ・マッピングの定義	10-7
マルチディメンション・マッピングの定義	10-8
代替変数マッピングの定義	10-10
マップされていないディメンションの移動	10-12
詳細マッピングの移入	10-13
データ・マップからのメンバーの除去	10-14
データ・マップ・オプションの定義	10-16
データ・マップの詳細の編集	10-20
データ・マップの複製	10-20
Excel へのデータ・マップのエクスポート	10-21
データ・マップのインポート	10-22
データ・マップの削除	10-24
データ・オプションの設定	10-24
デフォルト・メンバーの検証ルール	10-24
データの移動	10-25
レポート・キューブへのデータの移動	10-25

スマート・プッシュを使用したあるキューブから別のキューブへのデータの移動	10-26
スマート・プッシュについて	10-27
スマート・プッシュを使用する場合の考慮事項	10-27
フォームのスマート・プッシュの構成	10-28
クロス・アプリケーション・スマート・プッシュの使用	10-31
マージ・オプションの構成	10-32
スマート・プッシュ構成後のデータの移動	10-33
スマート・プッシュのステータスの表示	10-33
データ・マップ・プロセスとスマート・プッシュ・プロセスの同時実行	10-34
データ・マップおよびスマート・プッシュのリアルタイム進捗ステータスのチェック	10-34

11 統合の実行

統合ジョブの表示	11-4
----------	------

12 パイプラインの使用

パイプラインに関する考慮事項	12-1
パイプライン・プロセスの説明	12-2
パイプラインのコマンド・リファレンス	12-9
パイプラインのジョブ・タイプ	12-10
「ビジネス・ルール」ジョブ・タイプの使用	12-11
「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプの使用	12-12
「キューブのクリア」ジョブ・タイプの使用	12-14
オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプの使用	12-17
オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプの使用	12-20
Planning ジョブでの「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用	12-23
Financial Consolidation and Close および Tax Reporting ジョブでの「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用	12-34
Enterprise Profitability and Cost Management での「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用	12-36
名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプの使用	12-37
名前別のディメンション・マッピングのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプの使用	12-41
「マッピングのエクスポート」ジョブ・タイプの使用	12-44
「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプの使用	12-45
ファイル操作ジョブ・タイプの使用	12-46
「マッピングのインポート」ジョブ・タイプの使用	12-52
「メタデータのインポート」ジョブ・タイプの使用	12-54
「統合」ジョブ・タイプの使用	12-56
「オープン・バッチ」ジョブ・タイプの使用	12-60

「オープン・バッチ - ファイル」 ジョブ・タイプの使用	12-61
「オープン・バッチ - ロケーション」 ジョブ・タイプの使用	12-63
「オープン・バッチ - 名前」 ジョブ・タイプの使用	12-65
「プラン・タイプ・マップ」 ジョブ・タイプの使用	12-66
「代替変数の設定」 ジョブ・タイプの使用	12-67
ランタイム変数の編集	12-69
カスタム変数のパラメータの追加	12-71
代替変数を入力パラメータとして追加	12-71
パイプラインの実行	12-72
パイプラインの電子メール通知の送信	12-73

13 プロセス詳細の確認およびワークベンチでの結果の表示

プロセス詳細の表示	13-1
エラー・メッセージ出力ファイルの表示	13-2
ワークベンチの使用	13-4
ワークベンチ・ワークフローの使用	13-5
ソース・データのインポート	13-6
ソース・データの検証	13-7
ターゲット・アプリケーションへのデータのエクスポート	13-7
データの確認	13-8
ワークベンチでのデータの表示	13-8
ワークベンチでのデータのエクスポート	13-9
ターゲット・データの表示	13-11
ワークベンチでのインポートされたデータの削除	13-12
ワークベンチでのマッピングの表示	13-13
ワークベンチでのソース・ドキュメントの表示	13-13
ワークベンチ・データのフィルタ処理	13-14
ワークベンチのカスタム・ビューの定義	13-15
ソース・データの検証	13-18
マッピング・エラーのない検証	13-19
マッピング検証エラー	13-19
マッピング・エラーの修正	13-19

14 データのエクスポート

標準ワークフローの使用	14-1
データをエクスポートするためのクイック・モード	14-1

データを抽出するためのクイック・モード・プロセスの説明	14-3
-----------------------------	------

15 ドリル・スルー

ソースへのドリル・スルーの使用	15-1
直接ドリルの使用	15-3
直接ドリル定義の定義	15-3
カスタム・ドリル領域の定義	15-7
ドリルスルー・ランディング・ページへのカスタム・ビューの追加	15-9
アプリケーションのドリル詳細の定義	15-11
Oracle ERP Cloud へのドリル・スルー	15-15
Oracle ERP Cloud での BI Publisher レポートへのドリルダウン	15-16
Oracle ERP Cloud での BI Publisher レポートへのドリルダウン・プロセスの説明	15-16
EPM 統合エージェントのドリルダウンの作成	15-21
EPM 統合エージェントを使用したソースへのドリル・スルー	15-22
ランディング・ページがないソース・システムへのドリル・ダウンの作成	15-23

16 データの同期

データ同期プロセスの説明	16-1
クイック・モード・データ同期	16-4
クイック・モード・データ同期プロセスの説明	16-4

17 データの統合

Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger 残高の統合	17-1
統合プロセスの説明	17-1
ソース接続の構成	17-3
Oracle General Ledger アプリケーションの登録	17-4
Oracle ERP Cloud (GL 残高)との統合の作成	17-4
ロケーション属性の定義	17-6
カテゴリ・マッピングの使用	17-7
ディメンションのマッピング	17-7
メンバーのマッピング	17-8
Oracle General Ledger フィルタの定義	17-12
Oracle General Ledger の調整期間の処理	17-13
統合の実行	17-15
Oracle ERP Cloud へのライトバック	17-19
Oracle General Ledger への実績のライトバック	17-19
Oracle General Ledger への予算のライトバック	17-23

Oracle ERP Cloud からのメタデータの統合	17-25
メタデータのロード・プロセスの説明	17-26
Oracle ERP Cloud データの統合	17-30
事前パッケージ化済問合せを使用した Oracle ERP Cloud データの統合プロセスの説明	17-30
Oracle ERP Cloud 接続の構成	17-31
Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録	17-32
Oracle ERP Cloud データ・ソースへのアプリケーション・フィルタの適用	17-34
Oracle ERP Cloud からの期間レポート・パラメータの選択	17-37
カスタム問合せを使用した Oracle ERP Cloud データの統合プロセスの説明	17-37
Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブとしての BI Publisher レポートの登録	17-46
ESS ジョブの登録プロセスの説明	17-47
データ抽出プロセスの定義	17-47
BI Publisher レポート抽出のデータ・モデルの作成	17-49
BI Publisher レポート抽出の作成	17-56
Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブの作成	17-61
EPM Cloud と BI Publisher レポート抽出間の統合定義の作成	17-65
Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ 役割の要件	17-70
統合ユーザーの権限	17-70
統合ユーザーの事前定義済役割	17-70
統合ユーザーのカスタム役割	17-70
許可リスト	17-71
EPM Planning プロジェクトと Oracle Fusion Cloud Project Management (プロジェクト管理)の統合	17-71
EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合について	17-71
EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合のプロセスの説明	17-72
EPM Cloud とプロジェクト管理統合のセキュリティ 役割の要件	17-75
BI Publisher のセキュリティ	17-75
プロジェクトおよび予算ファイルベース・データ・インポート・プロセスのセキュリティ	17-75
プロジェクト管理ソースの登録	17-76
統合の定義	17-77
EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの登録	17-77
EPM Planning プロジェクト・アプリケーションのプロジェクト・ディメンションの分類	17-78
レポート・タイプ・アプリケーションの登録	17-79
ディメンション・アプリケーションの登録	17-80
統合の初期化	17-81
統合定義の参照	17-83
初期化マッピングの転記	17-83
カスタム・ディメンションのマッピング	17-85

期間マッピングの定義	17-86
アプリケーション・マッピングの定義	17-87
ソース・マッピングの適用	17-88
予算改訂の Budgetary Control との統合	17-91
プロセスの説明	17-91
OEP_FS を入力キューブとする Planning アプリケーションの登録	17-93
Oracle ERP Cloud ソース・システムの登録	17-93
Budgetary Control のデータ・ソースとしての登録およびアプリケーションのインポート	17-94
プランニング予算改訂の登録	17-96
予算調整要求の登録	17-97
プランニング予算改訂と予算調整要求の統合	17-98
プランニング予算改訂および予算調整要求ディメンションのマッピング	17-100
カスタム予算改訂属性のマッピング	17-101
予算調整オプションの定義	17-101
Oracle NetSuite の統合	17-102
Oracle NetSuite を統合するプロセスの説明	17-103
NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成	17-107
NetSuite に対するトークンベースの認証用の Oracle EPM Connector SuiteApp の構成	17-111
Oracle NetSuite データ・ソースの作成	17-115
保存された検索内の列のディメンションへのマップ	17-116
Oracle NetSuite データ・ソースのターゲット・ディメンションの追加	17-116
Oracle NetSuite アプリケーションのオプションの定義	17-117
Oracle NetSuite アプリケーション・フィルタの適用	17-118
インポート・フォーマットのドリル URL へのフィルタの追加	17-118
Oracle NetSuite での期間の管理	17-119
Oracle NetSuite データ・ソースのターゲット・ディメンションの追加	17-120
インポート・フォーマットのドリル URL へのフィルタの追加	17-121
Oracle NetSuite へのドリル・スルー	17-122
Oracle NetSuite へのドリル・スルー・パラメータの定義	17-122
ドリル・スルーでの保存された検索の要件	17-123
ドリル・スルー URL の追加	17-124
インポート・フォーマットのドリル URL へのフィルタの追加	17-125
Oracle HCM Cloud との統合	17-125
Oracle HCM Cloud からのデータを統合するプロセスの説明	17-126
Oracle HCM Cloud 抽出のダウンロード	17-129
Oracle HCM Cloud 抽出定義の Oracle HCM Cloud へのインポート	17-131
Oracle HCM Cloud 抽出定義のインポート	17-131
BI Publisher eText テンプレートのインポート	17-134

Oracle HCM Cloud 抽出定義の検証と送信	17-136
Oracle HCM Cloud 接続の構成	17-138
Oracle HCM Cloud アプリケーションの登録	17-139
既存の Oracle HCM Cloud 抽出の更新	17-140
Oracle HCM Cloud メタデータの統合	17-142
Oracle HCM Cloud メタデータのロード	17-142
Oracle HCM Cloud 抽出定義フィールドの参照	17-146
勘定科目功績抽出定義フィールド	17-146
アサイメント抽出定義フィールド	17-147
コンポーネント抽出定義フィールド	17-148
従業員抽出定義フィールド	17-148
エンティティ 抽出定義フィールド	17-149
ジョブ抽出定義フィールド	17-149
ロケーション抽出定義フィールド	17-149
ポジション抽出定義フィールド	17-150
SAP の統合	17-150
JD Edwards との統合	17-151
Account Reconciliation データの統合	17-151
BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクシ ョンおよび残高の統合	17-151
BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザク ションの統合	17-152
BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高の統合	17-159
照合コンプライアンス 残高のロード	17-167
照合コンプライアンス 残高のロード・プロセスの説明	17-167
照合コンプライアンス 残高アプリケーションの登録	17-167
照合コンプライアンス 残高統合の作成	17-168
ディメンションへの照合コンプライアンス 残高属性のマッピング	17-169
照合コンプライアンス 残高のデータ・メンバーのマッピング	17-170
照合コンプライアンス 残高統合の実行	17-171
照合コンプライアンス・トランザクションのロード	17-172
照合コンプライアンス・トランザクションのロード・プロセスの説明	17-172
照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションの登録	17-173
照合コンプライアンス・トランザクション統合の作成	17-174
ディメンションへの照合コンプライアンス・トランザクションの属性のマッピング	17-176
照合コンプライアンス・トランザクションのデータ・メンバーのマッピング	17-178
照合コンプライアンス・トランザクションの期間の定義	17-179
照合コンプライアンス・トランザクション統合の実行	17-180
エクスポートされた仕訳のロード	17-181

増分ファイル・アダプタを使用したデータのロード	17-186
増分ファイル・アダプタの設定	17-187
要員新規採用データの一括ロード	17-191
一括ロード・プロセスの説明	17-191

18 EPM 統合エージェント

EPM 統合エージェントのインストールと構成	18-2
EPM 統合エージェントの構成と開始プロセスの説明	18-2
JAVA_HOME の設定	18-4
EPMAgent ZIP のダウンロード	18-5
アプリケーション・フォルダの作成	18-5
Secure Sockets Layer (SSL)証明書	18-6
EPM 統合エージェントでの SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバの構成	18-6
Oracle データベースへの SSL 接続の構成	18-7
EPM 統合エージェントでの SQL データ・ソース用のカスタム JDBC ドライバの構成	18-8
EPM 統合エージェントの開始パラメータの構成	18-9
EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化	18-15
OCI (Gen2)環境での OAuth 2.0 承認プロトコルの使用	18-17
OAuth 2.0 承認の使用のプロセスの説明	18-18
Oracle Cloud Identity Services のパブリック・クライアントとしてのアプリケーションの登録	18-18
EPM 統合エージェントでの OAUTH オプションの有効化	18-23
createoauth token.bat または createoauth token.sh ファイルの実行によるトークンの生成	18-25
EPM 統合エージェントの Windows サービスとしての実行	18-26
EPM 統合エージェントの開始	18-27
診断モードでの EPM 統合エージェントの実行	18-28
同期モードの構成	18-29
EPM 統合エージェントを使用した EPM Cloud とオンプレミス間の接続	18-31
EPM 統合エージェントの使用	18-32
EPM 統合エージェントの理解	18-33
EPM 統合エージェント・プロセスの説明	18-33
オンプレミス・データ・ソースからのデータの抽出	18-33
アプリケーション・オプションの編集	18-38
SQL 問合せの作成	18-39
事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタの使用	18-44
E-Business Suite 一般会計 GL の事前シード済の問合せリファレンス	18-47
Peoplesoft General Ledger の事前シード済問合せリファレンス	18-49
EPM 統合エージェント受信ボックス内のファイルからのデータのインポート	18-50

エージェント・ファイル・アダプタの使用	18-52
EPM 統合エージェントを使用したクイック・モード・ロードの実行	18-55
クイック・モード・プロセスの説明	18-57
EPM 統合エージェントでのライトバック	18-69
EPM 統合エージェント・ライトバックのプロセスの説明	18-69
オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの登録	18-71
ライトバックのアプリケーション詳細ディメンションの設定	18-72
データ・エクスポート・アプリケーションのアプリケーション詳細の定義	18-73
EPM 統合エージェントにライトバックするための実践的なテクニック	18-76
EPM 統合エージェント・ライトバックのイベント・スクリプト	18-86
エージェント・クラスタの理解	18-90
クラスタの追加	18-91
統合ジョブの割当て	18-92
EPM 統合エージェント・スクリプト	18-93
イベント	18-94
EPM 統合エージェントの API メソッド	18-95
EPM 統合エージェントのコンテキスト関数	18-97
EPM 統合エージェント・スクリプト例	18-98
EPM 統合エージェントを使用した Oracle Autonomous Database データの統合	18-99
Oracle Autonomous Database への接続プロセスの説明	18-100
Oracle Cloud Infrastructure への接続	18-101
Oracle Autonomous Database に接続するための EPM 統合エージェントの構成	18-105
ローカル・ネットワーク上での EPM 統合エージェントの構成	18-105
Cloud Infrastructure (OCI) コンピュート・インスタンスへの EPM 統合エージェントのデプロイ	18-107
Oracle Autonomous Database から EPM Cloud へのデータのロード	18-118
EPM Cloud から Oracle Autonomous Database へのデータのライトバック	18-123

A データ統合でのパフォーマンス・チューニング

ジョブ・ログの分析	A-1
ステップ 1: TDATESEG_T 表へのファイルのステージングおよびロード	A-2
ステップ 2: 以前のデータ・ロードのクリーンアップ	A-3
ステップ 3: マッピング・ルールの処理	A-3
ステップ 4: TDATESEG の以前の統合のクリーンアップ	A-4
ステップ 5: TDATESEG_T から TDATESEG へのマッピング結果のコピー	A-4
ステップ 6: マッピング結果の検証	A-5
ステップ 7: ファイルの生成とターゲットへのロード	A-5
ジョブ・ログに関するその他の考慮事項	A-5

チューニングに関する考慮事項	A-6
SQL マッピング	A-6
式	A-7
「単純」 ワークフロー・モード	A-8
クイック・モード	A-9
その他の考慮事項	A-9

B データ統合スキーマに対するレポートの作成

AIF_BALANCE_RULES 表の定義リファレンス	B-2
TDATESEG 表の定義リファレンス	B-3
TLOGPROCESS 表の定義リファレンス	B-11
TLOGPROCESSTATES 表の定義リファレンス	B-12
TPOVCATEGORY 表の定義リファレンス	B-12
TPOVPARTITION 表の定義リファレンス	B-12
TPOVPERIOD 表の定義リファレンス	B-13

C データ統合の問題のトラブルシューティング

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle サポートへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントに対するフィードバックを送るには、Oracle Help Center トピックのページの下部にあるフィードバック・ボタンをクリックします。
epmdoc_ww@oracle.com に電子メールを送信することもできます。

1

EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行

EPM のベスト・プラクティスは、CoE (センター・オブ・エクセレンス)を作成することです。

EPM CoE は、導入およびベスト・プラクティスを確実にするための統合された取組みです。パフォーマンス管理およびテクノロジー対応ソリューションの使用に関連するビジネス・プロセスの変革を促進します。

クラウドの導入により、組織がビジネス・アジリティを改善し、革新的なソリューションを促進することが可能になります。**EPM CoE** はクラウド・イニシアチブを監督し、投資を保護および維持し、効果的な使用を促進するのに役立ちます。

EPM CoE チーム:

- クラウドの導入を確実にし、組織が **Cloud EPM** の投資を最大限に活用することを支援します
- ベスト・プラクティスの運営委員会として機能します
- **EPM** 関連の変更管理イニシアチブをリードし、変革を促進します

すでに **EPM** を実装済の顧客を含めて、すべての顧客が **EPM CoE** からメリットを得られます。

使用を開始する方法

クリックして、**EPM CoE** のベスト・プラクティス、ガイダンスおよび戦略を取得します: **EPM センター・オブ・エクセレンスの概要**。

さらに学習

- クラウド・カスタマ・コネクト Web セミナーを見る: [Cloud EPM のセンター・オブ・エクセレンス\(CoE\)の作成および実行](#)
- ビデオを見る: [概要: EPM センター・オブ・エクセレンスおよびセンター・オブ・エクセレンスの作成](#)。
- **EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行**の **EPM CoE** のビジネス上のメリットおよび価値提案の確認。



2

データ統合

データ統合は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud での統合プロセスの実行の基礎となるメカニズムです。忙しい管理者やユーザー向けに設計されたものであり、ファイルベース統合と直接統合のソースの定義、ソース・データを必要なターゲット・フォーマットに変換するためのマッピング・ルールの作成、および定期的なデータ・ロード・プロセスの実行と管理が可能になります。一般的な統合タスクは、作業方法をサポートし、それに準拠する、ナビゲートしやすいインターフェースを使用して行います。



✎ ノート:

データ統合は、従来のデータ管理に代わるものではありません。従来の機能のサブセットで同じワークフローをサポートする追加機能です。データ統合は、データ管理と 100%同等になるまで強化が続けられます。

データ統合の使用について学習するには、次の概要ビデオを参照してください。



概要: [Planning and Budgeting Cloud](#) でのデータ統合の使用.

前提条件

データ統合を使用するための前提条件は、次のとおりです。

データ統合は、次の役割が、Planning、Tax Reporting、Financial Consolidation and Close、Account Reconciliation、Profitability and Cost Management および Enterprise Profitability and Cost Management のビジネス・プロセスで使用できます:

- サービス管理者

- パワー・ユーザー
- ユーザー

Profitability and Cost Management および Oracle Enterprise Data Management Cloud では、データ統合にアクセスできません。

 **ノート:**

Sales Planning は、データ統合のターゲット・アプリケーションとして使用可能です。

Account Reconciliation では、データ統合へのアクセスは、事前定義済のサービス管理者の役割を割り当てられたユーザーのみに制限されています。

データ管理は引き続き完全にサポートされ、「ナビゲータ」メニューの選択肢として使用可能です。データ統合とデータ管理の間で、統合関連のアクティビティは双方向的に行われ、同期されます。たとえば、データ統合でディメンションをマッピングすると、保存されたマッピングはすべて自動的にデータ管理に移入されます。

EPM 統合エージェントを使用するお客様については、[EPM 統合エージェント](#)を参照してください。

データ統合を使用する際の特別な考慮事項は、次のとおりです。

機能	データ統合の特別な考慮事項/特筆事項
役割	<p>データ統合は、次のビジネス・プロセスで使用できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Planning および Planning モジュール • Tax Reporting • Financial Consolidation and Close • フリーフォーム • Account Reconciliation • Enterprise Profitability and Cost Management <p>サービス管理者は、次のようなカスタム役割を設定することもできます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 管理 - フル・アクセスを持ち、すべてのタスクを実行できます。 • 統合の作成 - 統合および関連する設定を定義し、統合を実行します • 統合の実行 - 統合を実行し、マッピングを表示します <p>Profitability and Cost Management Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting および Oracle Enterprise Data Management Cloud では、データ統合にアクセスできません。</p>
サポートされているビジネス・サービス	<p>サポートされているサービスは次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Planning • Tax Reporting • Financial Consolidation and Close • Account Reconciliation • Enterprise Profitability and Cost Management • フリーフォーム

機能	データ統合の特別な考慮事項/特筆事項
接続	データ統合の接続の構成オプションを使用して、次のソースへの直接接続情報を登録、管理および削除します： <ul style="list-style-type: none"> • Oracle ERP Cloud • Oracle Human Capital Management Cloud • Netsuite
アプリケーション	「アプリケーション」は、データ管理の「ターゲット・アプリケーション」オプションの既存の機能を共有し、最新のルック・アンド・フィールおよびレスポンス・デザインによってエクスペリエンスを強化します。「アプリケーション」という名前が付いているのは、異なるソース・システムとターゲット・アプリケーションの間でデータを統合するためのプライマリ・ゲートウェイとして使用されるためです。
インポート・フォーマット	固定長のファイル(「固定幅 - 数値データ」および「固定幅 - すべてのデータ型」)はサポートされていません。
「マップ・メンバー」ページ	<ul style="list-style-type: none"> • 「列のインデックス」(列名)は「処理順序」に変更されました。 • マッピング・スクリプトは使用できません。
オプション	複数期間ロードで列ヘッダーは使用できません。
統合の実行	「スケジュール」は使用できません。

 **ノート:**

ビジネス・プロセスからビジネス・プロセスへの統合については、両方のビジネス・プロセスが同じリリース・レベルである必要があります。

データ統合で作業する際には、次の用語変更にご注意してください:

データ管理での名前	データ統合での名前
ターゲット・アプリケーション	アプリケーション
インポート・フォーマット	ディメンションのマッピング
データ・ロード・マッピング	メンバーのマッピング
データ・ロード・ルール/データ・ロード・ルール名	統合

データ統合での EPM Cloud ビジネス・プロセスの使用

データ統合は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の次のビジネス・プロセスのための統合オプションとして使用できます:

- Planning モジュール
- Planning
- フリーフォーム
- Financial Consolidation and Close
- Tax Reporting

- Strategic Workforce Planning
- Profitability and Cost Management
- Enterprise Profitability and Cost Management

Oracle Fusion Cloud EPM デプロイメント(ビジネス・プロセス)間でデータを変換およびロードする場合、またはネイティブ・データ・ロード機能を超えるデータ統合機能が必要な場合、アプリケーションへのネイティブ・ロードに必要なフォーマットでないソース・データ・ファイルを処理するためにデータ統合を使用できます。

次の各項では、お客様がデータ統合を使用して製品のオンプレミス・バージョンからクラウド・バージョンに移行する際の顕著な相違について説明します。

Planning を使用されるお客様

Planning のお客様がデータ統合を使用する場合の重要な考慮事項は次のとおりです:

- 部分的なデータ・ロード - データをロードすると、有効なすべてのデータがロードされます。たとえば、一部のデータがセル・レベルの検証ルールに合格しない場合、そのデータはロードされませんが、その他の有効なデータはすべてロードされます。部分的なロードは失敗した統合として反映されますが、有効なデータはすべてロードされます。ユーザーが管理者として定義されている場合、セル・レベルの検証は無視され、データがロードされます。
- すべてのデータ・タイプ・ロードというタイプのロードを使用する場合は、「システム設定」の「**ジョブを使用したすべてのデータ・タイプ・ロード**」で「はい」を選択すると、Planning でジョブを作成できます。 [システム設定](#) を参照してください。
- お客様がターゲット・オプションとして「**セキュリティ保護されたすべてのデータ型**」を選択すると、数値データ、テキスト、スマートリストおよび日付データ型がロードされます。Planning 管理者がデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されません。Planning の管理者以外のユーザーがデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されます。Planning の管理者以外のユーザーがロードできるデータは、500,000 セルのみです。

フリーフォーム・アプリケーションへのデータのロード

フリーフォーム・アプリケーション・タイプは、必要な分析をサポートするために、Planning 環境内にネイティブの Oracle Essbase アプリケーションを再作成するビジネス・プロセスです。フリーフォームでは、任意のディメンションをキューブに関連付けることができます。Planning 固有の「通貨」、「エンティティ」、「シナリオ」および「バージョン」ディメンションとそのメンバー階層は、フリーフォーム・ビジネス・プロセスでは必要ありません。フリーフォームを使用して、プラットフォーム機能をそのまま活用しながら、独自のモデリングを実行したり独自のキューブを作成します。サービス管理者は、Essbase アウトライン(OTL)ファイルを使用するか、ディメンションナリティを手動で定義して、フリーフォーム・アプリケーションを作成します。詳細は、[フリーフォームの管理と作業のフリーフォーム・アプリケーションの作成](#)を参照してください。

フリーフォーム・アプリケーションは、なんらかの用途の Essbase アプリケーションを作成するか、またはオンプレミス・アプリケーションを Oracle Enterprise Performance Management Cloud に移行するお客様に適しています。これは、Planning のフリーフォーム・アプリケーションにはディメンション要件がないためです。

これらのフリーフォーム・アプリケーションをデータ統合でロードできますが、いくつかの考慮事項があります:

ノート:

次のロード要件と考慮事項はフリーフォーム・アプリケーションの**エクスポート**にも適用されます。これは、ユーザーがフリーフォーム・アプリケーションを作成して、ネイティブ・ロード・プロセスでロードすることはできるが、データ統合で正しく分類できないため、データのエクスポートで問題が発生するためです。

1. フリーフォーム・アプリケーションには、最小限、**3**つのディメンション(「勘定科目」、「期間」および「シナリオ」)が必要です。データ管理およびデータ統合内のアプリケーション定義には、ディメンション・タイプが「勘定科目」、「期間」および「シナリオ」の**3**つのディメンションが必要です。
2. データのロード先をシステムが認識できるように、期間マッピングを設定する必要があります。たとえば、フリーフォーム・アプリケーションで作成された期間メンバーである **Jan-20** という期間で期間マッピングを設定できます。データ管理およびデータ統合で期間マッピングを設定する場合、期間マッピングのユーザー・インタフェース検証に合格するように、フリーフォーム・アプリケーションで作成された期間および年のエントリーを入力します。これは、フリーフォーム・アプリケーションで年ディメンションを定義する必要がない場合です。期間のみが必要です。
3. 「シナリオ」ディメンションを指定する必要がありますが、**Planning** では、これはどのようなものでも構いません。必要なのは、そのディメンションがデータ管理およびデータ統合で「シナリオ」ディメンションとして分類されることのみです。次に、プロセスが成功するようにカテゴリ・マッピングを設定する必要があります。
 - ディメンションの **1** つにディメンション分類「勘定科目」を割り当てます。
 - ドリル・スルー機能を使用する場合は、「シナリオ」ディメンションが必要です。ディメンションの **1** つにディメンション分類「シナリオ」を割り当てます。ディメンションが「シナリオ」として分類されると、カテゴリ・マッピングを使用してターゲット値が割り当てられるため、データは **1** つの値にのみロードできます。この要件を満たすディメンションを選択し、カテゴリ・マッピングを定義します。
 - 確認機能を使用する場合は、「エンティティ」ディメンションが必要です。ディメンションの **1** つにディメンション分類「エンティティ」を割り当てます。

ASO タイプのアプリケーションは、作成時に自動登録されません。データ管理の「ターゲット・アプリケーション」ページを使用して、「**Essbase**」アプリケーション・タイプを選択し、アプリケーションを手動で登録します。
4. **ASO** キューブのみを使用するフリーフォーム・アプリケーションにメタデータをロードするには、ディメンション・アプリケーションを次のように登録します:
 - a. キューブをすべての入力キューブとして、新しい **EPM** ローカル・アプリケーションを追加します。

BSO アプリケーションがないため、このアプリケーションではディメンションは表示されません。
 - b. 新しいディメンション・アプリケーションを追加します。

詳細は、[アプリケーションの登録](#)を参照してください。

ディメンション・アプリケーションをソースとして使用して適切なソースとの統合を定義することによって、メタデータを **ASO** キューブにロードできます。

Financial Consolidation and Close を使用するお客様

Financial Consolidation and Close に移行する Oracle Hyperion Financial Management のお客様は、2 つの製品の主な違いに注意してください。

- Financial Consolidation and Close では、正の金額は借方として表示され、負の金額は貸方として表示されます。
- プラン・タイプは、Financial Consolidation and Close の概念ではありません。
- Financial Consolidation and Close ユーザーは、自分のアプリケーションに Oracle General Ledger データをロードできます。
- ユーザーは、Financial Consolidation and Close から Fusion GL にデータを実績としてエクスポートできます。
- データ同期では、Planning または Financial Consolidation and Close から Financial Consolidation and Close ターゲット・アプリケーションにデータをプッシュできます。
- Financial Consolidation and Close は、インポート・フォーマットでソース・システムとして使用できます。この方法では、Financial Consolidation and Close をソース・システムとして、別のクラウド・サービス(Planning モジュール、Account Reconciliation、Planning、Profitability and Cost Management など)をターゲットとして使用し、Financial Consolidation and Close からこれらの他のクラウド・サービスへデータを移動できます。

また、Financial Consolidation and Close からデータを抽出してファイルにプッシュし、別のアプリケーションで使用できます。

- 連結ディメンションの場合は、ロケーションごとに、異なる上書き金額または上書きレートを異なるソース・メンバーにロードできます。これにより、連結プロセスの各ステージの実行に使用する詳細をレポートできます。
- システムで事前定義されたディメンションに加え、アプリケーションの必要性に基づいて最大 4 つの追加カスタム・ディメンションを作成できます。カスタム・ディメンションは勘定科目ディメンションと関連付けられており、勘定科目に関する追加の詳細を提供します。アプリケーションで拡張ディメンションが有効な場合、最大 4 つのカスタム・ディメンションを作成できます。アプリケーションで「複数 GAAP レポート」オプションが有効化されている場合、3 つのカスタム・ディメンションを作成できます。
- データ統合では、Financial Consolidation and Close の期間はデータ・ファイルの列としてサポートされます。1 つのファイルに複数期間のデータがある場合、各データ行に年と期間を含めることができます。「ディメンションのマッピング」でソース期間行である年と期間を選択すると、これらの列がファイル内にあることがシステムに示され、ターゲット・システムの適切なディメンションにマップされます。EPM Cloud またはファイルベースのソース・システムの複数期間のロードを参照してください。
- データ統合では、Financial Consolidation and Close に仕訳をロードする場合に明示的なロード方法がサポートされます。仕訳は、「仕訳」タイプの統合を定義することでロードされます。Excel とテキスト・ベース両方の仕訳のロードがサポートされます。Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理の Financial Consolidation and Close への仕訳のロードを参照してください。
- ドリル・スルー機能は、為替レート・データに対してはサポートされません。

- **Financial Consolidation and Close** で使用可能なインポート・モードは、追加と置換です。
- **DSO** アプリケーションでない(密/疎最適化対応アプリケーションでない)場合は、**Financial Consolidation and Close** からデータをインポートして明示マッピング・セットを使用する際、属性列 **ATTR2** および **ATTR3** はディメンション・マッピングで使用しないでください。データ統合では、これらの列は行の正しい期間キーを判断するために使用されます。
- **Financial Consolidation and Close** のお客様は、直接統合オプションの「すべてのデータ」オプションを選択して、動的計算値を抽出できません(詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください)。動的計算値を抽出するには、**Financial Consolidation and Close** の **CONTROL TO-DATE VIEW STORAGE** 設定が有効になっているか、**Financial Consolidation and Close** アプリケーションが **DSO** (密/疎最適化対応アプリケーション) ベースであることが、データ統合の前提条件です。詳細は、次を参照してください [累計ビューの管理オプションの使用](#)
- **Financial Consolidation and Close** のターゲット・アプリケーションで使用可能なエクスポート・モードは次のとおりです:
 - **マージ** - すでにアプリケーションにデータが存在する場合は、既存のデータにロード・ファイルの値が追加されるのみです。既存のデータは削除されません。データがない場合は、新しいデータが作成されます。
 - **置換** - ロードの発行前に、シナリオ、年、期間、エンティティおよびデータ・ソースに基づいて、すべての値が削除されます。
 - **累計** - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで累計します。
 - **ドライ・ラン** - データをターゲット・アプリケーションにロードせずに、データ・ロード・ファイルをスキャンして無効なレコードを探します。データ・ファイルの一意の視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。
- 通貨が固定されている場合に、エンティティ通貨ではなく実際の通貨に対してデータをロードするには、「ロケーション」オプションの「機能通貨」フィールドで通貨を設定します。インポート・フォーマットに「通貨」行を追加してマップすることもできます。
- 部分的なデータ・ロード - データをロードすると、有効なすべてのデータがロードされます。たとえば、一部のデータがセル・レベルの検証ルールに合格しない場合、そのデータはロードされませんが、その他の有効なデータはすべてロードされます。部分的なロードは失敗した統合として反映されますが、有効なデータはすべてロードされます。ユーザーが管理者として定義されている場合、セル・レベルの検証は無視され、データがロードされます。
- インスタンス間の統合をプッシュ・モードで実行すると、処理のために統合を送信したユーザーではなく、接続詳細からの資格証明を使用してロード・ユーザーが判別されます。逆の方法のプル・モードで統合を設定すると、統合を実行するユーザーが連結アプリケーションにロードするときにセキュリティが推進されます。
- 管理者としてロードすると、データ・ロードは検証ルールなどのセキュリティをバイパスし、すべてのデータがロードされます。
- 検証ルールがオンに設定されていて、管理ユーザーがデータをロードする際に「管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする」オプションが有効になっている場合、または管理者以外がロードする場合、検証が適用されるセルに対するデータのロードはブロックされますが、残りのデータはロードされます。セキュリティがオンに設定されている場合の動作は、部分的なロードが実行され、統合ルールは失敗として表示されません。

- インスタンス間のデータ・ロードでは、接続に定義されているユーザーが使用され、データをロードするモードについても、ルールを実行しているユーザーではなく、接続に定義されているユーザーを使用して決定されます。

Tax Reporting を使用されるお客様

Oracle Hyperion Tax Provision から Tax Reporting に移行するお客様は、主に次のような違いがありますのでご注意ください。

- 残高データや為替レートは、ファイルを使用して Tax Reporting アプリケーションにロードします。(同じファイルを使用して、データや為替レートをロードすることはできません。)また、Oracle Financials Cloud の残高データも、Tax Reporting アプリケーションに直接統合できます。現時点では、Oracle ERP Cloud からの為替レートのロードはサポートされていません。
- データは、サマリー勘定科目レベルで Tax Reporting にロードされます。Tax Reporting では、ライン・アイテムの詳細はサポートされていません。
- 現時点では、Tax Reporting では仕訳はサポートされていません。データ統合において、Tax Reporting アプリケーションでサポートされているのは、データのロード・タイプのみです。
- Tax Reporting Web フォームまたは(Tax Reporting に動的にリンクされている) Oracle Smart View for Office からデータ統合へのドリル・スルーがサポートされています。
- データ統合から Tax Reporting Web フォームへのドリル・スルーは、Tax Reporting に、データ統合から呼び出せる URL が含まれる場合のみ使用可能です。
- ドリル・スルー機能は、為替レート・データに対してはサポートされません。
- データ統合から Tax Reporting にロードされるデータは、データ統合のディメンションナリティに基づいて要約され、このサマリー・データが Tax Reporting にロードされます。計算または連結ロジックは、Tax Reporting 内でのみ実行されます。
- Tax Reporting でサポートされているのは YTD データのみであるため、ロードされてもデータは変更されません。
- Tax Reporting のお客様は、直接統合オプションの「すべてのデータ」オプションを選択して、動的計算値を抽出できます(詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください)。動的計算値を抽出するには、Tax Reporting の CONTROL TO-DATE VIEW STORAGE 設定が有効になっているか、Tax Reporting アプリケーションが DSO (密/疎最適化対応アプリケーション)ベースであることが、データ統合の前提条件です。詳細は、[累計ビューの管理オプションの使用](#)を参照してください。
- Tax Reporting ターゲット・アプリケーションで使用できるエクスポート・モードには次のものがあります:
 - **マージ** - すでにアプリケーションにデータが存在する場合は、既存のデータにロード・ファイルの値が追加されるのみです。既存のデータは削除されません。データがない場合は、新しいデータが作成されます。
 - **置換** - ロードの発行前に、シナリオ、年、期間、エンティティおよびデータ・ソースに基づいて、すべての値が削除されます。
 - **累計** - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで累計します。

- **ドライ・ラン** - データをターゲット・アプリケーションにロードせずに、データ・ロード・ファイルをスキャンして無効なレコードを探します。データ・ファイルの一意的視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。

 **ノート:**

置換モードでは、特定のシナリオ/年/期間/エンティティ/マップ済データ・ソースの最初のレコードが出現する前に、そのシナリオ、年、期間、エンティティおよびマップ済データ・ソースのデータの組合せ全体が、手動入力か以前のロードかに関係なくクリアされます。**Planning** アプリケーションに1年分のデータがある場合に1か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、1年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

- データ・ロード・プロセスの一環として、すべてのエンティティを連結する必要がある場合は、データ統合で、「確認エンティティ・グループ」オプションを使用してください (*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理の確認ルール・グループの作成*を参照)。
- このリリースでは、**Tax Reporting** のデータの所有権機能はサポートされていません。
- **EPM** 自動化ユーティリティの `rundatarule` コマンドは、開始期間および終了期間に基づいてデータ統合の統合を実行するもので、**Tax Reporting** アプリケーションに対して実行できます。
- データ統合を使用して、ビジネス・プロセス間でデータを移動できます。つまり、**Tax Reporting** アプリケーション間でデータを移動することや、**Tax Reporting** のデータを別の **Oracle Enterprise Performance Management Cloud** ビジネス・プロセスに移動すること (あるいはその逆)が可能です。
- 通貨が固定されている場合に、エンティティ通貨ではなく実際の通貨に対してデータをロードするには、統合を作成するときに「機能通貨」フィールドで通貨を設定します。[直接統合の作成](#)を参照してください。
- インポート・フォーマットに「通貨」行を追加してマップできます。[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。
- **Tax Reporting** でデータ・ロード・サイクルが完了したら、カスタム・アプリケーションで作成されたテキスト・ファイルにデータを書き出して、外部アプリケーションで使うことや、(オンプレミスの)ロケーションに書き出すことが可能です。カスタム・アプリケーションが定義されている場合は、**EPM** 自動化を使用して、ファイルのエクスポートとダウンロードを実行できます。
- **Tax Reporting** ユーザーが使用できるその他の機能については、このガイドの目次を参照してください。

Account Reconciliation を使用するお客様

Account Reconciliation に統合を実装するプロセスでは、まず、データ統合のインポートおよび検証ステップをテストします。結果に問題がなければ、**Account Reconciliation** 内で「データ・ロード」オプションから残高をロードするための実際の統合を起動します。標準の **Oracle Enterprise Performance Management Cloud** プロセスに従って、トランザクション照合または照合コンプライアンス・トランザクションがデータ統合からプッシュされます。

ロケーション・セキュリティは、Account Reconciliation ユーザー・インタフェースでは使用できません。ロケーション・セキュリティは、データ統合ユーザー・インタフェースでのみ使用できます。

データ統合のアプリケーション・ページの「POV のロック」/「POV のロック解除」は、管理者のみが使用できます。データ管理ユーザー・インタフェースでは、POV ページから非管理者として個別のロケーションをロックできます。

Account Reconciliation に移行するオンプレミスの Accounts Reconciliation Manager のお客様は、データ統合の次の点に注意してください:

- Account Reconciliation を EPM Cloud アプリケーション以外のソースとして使用することは、現在 Account Reconciliation ではサポートされていません。
- Account Reconciliation 環境にリモートでロードすることはできません。Account Reconciliation で別のビジネス・プロセスからアプリケーション・データを統合する場合は、Account Reconciliation の他のビジネス・プロセスからアプリケーションを登録する必要があり、その逆ではありません。
- Account Reconciliation からデータ統合のドリルスルー・ランディング・ページへのドリルスルーはサポートされています。Account Reconciliation では、ハイブリッド統合機能を使用してデータを先にデータ統合にインポートすると、オンプレミスの Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のデータ・ソースにもドリル・スルーできます。ランディング・ページにドリルスルーするには、「ターゲット・アプリケーション」ページの「ターゲット・ディメンション・クラス」で Account Reconciliation プロファイル・セグメントを参照ディメンションにマップする必要があります。
- Oracle NetSuite からのデータの統合は、Account Reconciliation でサポートされています。
- Oracle Financials Cloud からのデータの統合は、Account Reconciliation でサポートされています。
- Account Reconciliation 残高に「データ・ロード・マッピング」オプションで「ソース・タイプ」ディメンションをマッピングする場合、「ターゲット値」をソース・システムまたはサブシステム(補助元帳)として使用します。これらのオプションは、データのソースを定義する分類です。たとえば、ソース・システムを選択した場合、このオプションは必ずしもソース・データが同じソース・システムからのデータであるわけではなく、データのソースが売掛金(AR)や買掛金(AP)などの補助元帳ではないことを示しています。
- マッピング目的で追加する参照ディメンションの分類は「参照」である必要があります。「汎用」分類のディメンションは追加しないでください。
- Account Reconciliation 内の照合勘定科目 ID にマップする際には、空白のターゲット・セグメントに関する考慮事項があります。ターゲット照合で 2 つの移入済セグメント間に空白のセグメントがある場合、Account Reconciliation によって、照合勘定科目 ID の中にある空白および null のセグメント値はそれぞれ 3 つの空白文字として処理されます。また、Account Reconciliation によって、最後の移入済セグメントに続く NULL セグメントが切り捨てられます。

たとえば、グループ化照合で照合 ID が "001-null-null-1925 XXX" の場合(照合/プロファイルを表示すると、Account Reconciliation 内の "null" は存在しません(文字の無効化)。)Account Reconciliation の設計では、移入済セグメントの間の空白および null のセグメントごとに、データベース層の "null" が 3 つの空白文字に置き換えられます。データ管理内のターゲット・マップ済プロファイルでは、Account

Reconciliation に合わせるために、"ACCOUNT ID 001- -1925 XXX"となる必要があります。

- 銀行取引明細書ファイル(BAI (Bank Administration Institute)ファイル・フォーマットまたは SWIFT MT940 ファイル・フォーマットを使用)を Account Reconciliation のトランザクション照合モジュールにロードする必要がある Account Reconciliation のお客様は、データ統合を統合メカニズムとして使用できます。データ統合では、ロード用に事前作成のアダプタがサポートされます:
 - BAI フォーマットの銀行ファイル・トランザクション
 - BAI フォーマットの銀行ファイル残高
 - SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション
 - SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル残高
 - CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション
 - CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高

ノート:

また、データ統合でサポートされる他のファイル・フォーマットもトランザクション照合モジュールへのインポート、マップおよびロードに使用できます。

- 統合メカニズムとしてデータ統合を使用すると、Account Reconciliation のお客様は照合コンプライアンス・トランザクションを照合にロードできます。次のものを含むトランザクションを Oracle ERP Cloud から EPM Cloud に直接取り込むことができます:
 - 残高の説明
 - ソース・システムの調整
 - サブシステムの調整
 - 差異の説明
- 「トランザクション照合」では、調整またはトランザクションを、二面性を持つ仕訳としてエクスポートし、その後、ERP システムにインポートできます。データ管理はエクスポートした仕訳をロードするためのメカニズムとして使用されます。
- Account Reconciliation のお客様は、トランザクションごとに最大 64 個のフィールドを使用して、データ統合を使用してトランザクション照合にデータをロードできます。
- Account Reconciliation ユーザーが使用できるその他の機能については、このガイドの目次を参照してください。

データ管理を使用してファイルから Account Reconciliation の一般会計残高および補助元帳残高をロードする方法は、[概要: Account Reconciliation のデータ管理を使用した GL 残高および補助元帳残高のファイルからのロード](#)を参照してください。

Strategic Workforce Planning を使用されるお客様

人事データを Oracle Fusion Human Capital Management からロードして、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の Strategic Workforce Planning ビジネス・プロセスで使用できます。

企業の長期的戦略を実行計画に転換する必要がある Strategic Workforce Planning のお客様は、戦略データを調整して Human Capital Management から取り込むことができます。デー

タ管理は統合メカニズムです。これにより提供される即時利用可能なソリューションによって、お客様は Human Capital Management データ・モデルから Strategic Workforce Planning 内のターゲット・ディメンションへの事前定義されたマッピングを適用できます。他のマッピングを必要に応じてビジネス要件に合うように適用するなどして、これらの統合をカスタマイズおよび拡張もできます。

Enterprise Profitability and Cost Management を使用する場合

Enterprise Profitability and Cost Management との間でデータを統合し、Oracle Enterprise Performance Management Cloud で使用できます。Enterprise Profitability and Cost Management は、製品、顧客、地域、支店などのビジネス・セグメントの収益性を計算するために必要な、コストおよび収益の配賦を管理する分析ソフトウェア・ツールです。Enterprise Profitability and Cost Management では、費用分解、消費ベースの費用計算およびシナリオ再生を使用して、有効な計画および意思決定支援の収益性を測定できます。

データ統合を使用する Enterprise Profitability and Cost Management のお客様は、次の点に注意してください:

- Enterprise Profitability and Cost Management アプリケーションは、ソースとターゲットの両方として登録できます。
- データ統合を使用して、Enterprise Profitability and Cost Management は次のものと統合されます:
 - EPM Cloud 内のビジネス・プロセス
 - Oracle ERP Cloud の一般会計および補助元帳の残高

Enterprise Profitability and Cost Management は、EPM Planning プロジェクトおよび Oracle Fusion Cloud Project Management (プロジェクト管理)とは統合されません

- Enterprise Profitability and Cost Management インスタンスで統合を設定する場合は、ローカル・アプリケーションとして登録します。別のインスタンスから取得する場合は、アプリケーションを EPM Cloud アプリケーションとして登録します。
- Enterprise Profitability and Cost Management アプリケーションは、アプリケーションの作成ウィザードを使用して作成されるときに自動的に登録されます。
- Enterprise Profitability and Cost Management のお客様は、EPM Cloud および Oracle ERP Cloud の他のインスタンスへのソース接続を構成する必要があります。
- ドリル・スルーを使用できます。
- Enterprise Profitability and Cost Management から値をエクスポートする場合は、丸めメソッドを使用して値を小数点第 2 位に丸め処理できます。
- データ・マップおよびスマート・プッシュを使用できます。データ・マップでは、集約ストレージ(ASO)キューブがソース・キューブとしてサポートされます。
- EPM 統合エージェントを使用できます。

Profitability and Cost Management を使用する場合

Profitability and Cost Management は、製品、顧客、地域、支店などのビジネス・セグメントの収益性を計算するために必要な、コストおよび収益の配賦を管理する分析ソ

ソフトウェア・ツールです。このため、Profitability and Cost Management は、主な Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスと統合するように設計されています。データ統合を使用して、EPM Cloud で使用するデータを Profitability and Cost Management との間で統合します。

統合メカニズムとして、データ統合は、Profitability and Cost Management のお客様が Oracle ERP Cloud などの Enterprise Resource Planning (ERP)、連結プロセス、プランニングおよび予測プロセスからおよびこれらのプロセスにデータをロードできるようにします。

データ統合を使用する Profitability and Cost Management のお客様は、次の点に注意してください:

- Profitability and Cost Management アプリケーションは、ソースとターゲットの両方として登録できます。
- データ統合を使用して、Profitability and Cost Management は次のものと統合されます:
 - EPM Cloud 内のビジネス・プロセス
 - Oracle ERP Cloud の一般会計および補助元帳の残高

Profitability and Cost Management は、EPM Planning プロジェクトおよび Oracle Fusion Cloud Project Management (プロジェクト管理)とは統合されません

- Profitability and Cost Management インスタンスで統合を設定する場合は、ローカル・アプリケーションとして登録します。別のインスタンスから取得する場合は、アプリケーションを EPM Cloud アプリケーションとして登録します。


Profitability and Cost Management では、環境ごとに 1 つのアプリケーションのみがサポートされます(単一 ASO データベース)


- Profitability and Cost Management アプリケーションは、アプリケーションの作成ウィザードを使用して作成されるときに自動的に登録されます。
- Profitability and Cost Management のお客様は、EPM Cloud および Oracle ERP Cloud の他のインスタンスへのソース接続を構成する必要があります。
- ドリル・スルーを使用できます。
- Profitability and Cost Management から値をエクスポートする場合は、丸めメソッドを使用して値を小数点第 2 位に丸め処理できます。
- データ・マップおよびスマート・プッシュを使用できます。データ・マップでは、集約ストレージ(ASO)キューブがソース・キューブとしてサポートされます。
- EPM 統合エージェントは Profitability and Cost Management のお客様が利用できます。



3


データ統合の起動

データ統合を起動するには:

1. ホーム・ページで、「アプリケーション」クラスタをクリックします。

2. 「データ交換」アイコンをクリックし、「データ統合」タブを選択します。




オプションで、をクリックして「データ統合」を起動し、「アプリケーション」から  Data Exchange を選択できます。



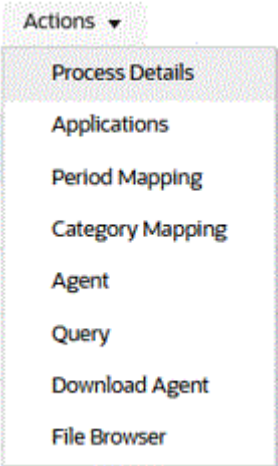


ホーム・ページ以外の場所からホーム・ページに戻るには、をクリックします。








データ統合ホーム・ページの表示

サービス管理者は、データ統合のホーム・ページですべての統合を確認できます。ロケーション・セキュリティが有効な場合、パワー・ユーザーには、許可されたロケーションに割り当てられた統合のみが表示されます。そうでない場合は、パワー・ユーザーはすべての統合を表示できます。

機能は次のとおりです。

機能	説明
検索	いずれかのフィールドで選択したテキストに基づいて、統合のリストを検索します。 たとえば、 File と入力した場合、「名前」、「ロケーション」、「ソース」または「ターゲット」フィールドに "File" という名前が含まれるすべての統合が返されます。
(ソート)	条件に基づいて統合のリストをソートします。 使用可能な条件: <ul style="list-style-type: none">• 名前• ロケーション• ソース• ターゲット• 最終実行• 結果 ソート結果は、昇順  (A から Z) または降順  (Z から A) で表示できます。  新しい統合または新しいパイプラインを追加できます。

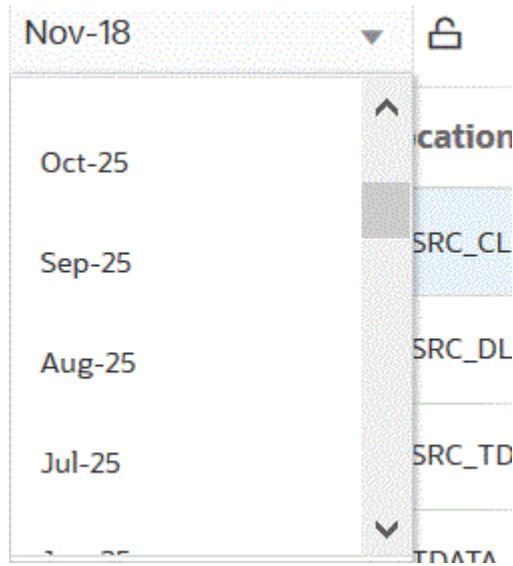
機能	説明
	<p>統合を削除します。</p> <p>削除する統合を選択すると、削除確認ページが次のメッセージとともに表示されます: 「統合<integration name>を削除すると、すべての関連アーティファクト(ディメンション・マッピング、メンバー・マッピングおよびこの統合を使用してロードされたデータなど)が削除されます。続行しますか。」</p>
	<p>ホーム・ページをリフレッシュします。</p>
	<p>次のような主要なデータ統合機能にすばやくアクセスできます:</p> <ul style="list-style-type: none"> プロセスの詳細 プロセス詳細の表示を参照してください アプリケーション: ソース・システムとターゲット・アプリケーションの間でデータを統合し、ビジネス・ルールを適用するためのゲートウェイ。アプリケーションの登録を参照してください。 期間マッピング: ビジネス要件および法的要件に基づき、各種のカレンダー(たとえば、月、週、また日のカレンダー)を定義および管理します。期間マッピングの管理を参照してください。 カテゴリ・マッピング: ソース・システムのデータを分類してターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップできるようにする、カテゴリ・マッピングを定義および管理します。カテゴリ・マッピングの管理を参照してください。 「エージェント」、「問合せ」および「エージェントのダウンロード」オプション(EPM 統合エージェント)。EPM 統合エージェントを参照してください。 ファイル・ブラウザ: inbox、outbox,に移動してファイルを選択できるファイル・ブラウザを起動します。
	<p>統合の実行時に使用される POV 期間を選択して保存できます。POV 期間が選択されていない場合は、ブラウザのキャッシュに基づき、最後に使用された期間にデフォルト設定されます。</p> <p>別の期間の横にロック解除アイコン ()が表示されている場合、その期間を選択できます。</p>


機能	説明
(データ統合の詳細)	<p>次のような各統合の詳細を表示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ステータス - 各統合のステータスを示します。統合のプロセス詳細を表示するには、「ステータス」アイコンをクリックします。 <ul style="list-style-type: none"> -  - 統合は正常に実行されました。 -  - 統合の実行に失敗しました。 -  - 新規統合 -  - 統合は処理されましたが、警告があります。 • タイプ: 次のような機能のタイプを示します: <ul style="list-style-type: none"> -  - 「統合」ジョブ・タイプ -  - 「パイプライン」ジョブ・タイプ • (データ統合)名前 • (データ統合)ロケーション • ソース • ターゲット • 最終実行 • アクション(...) - 次のようなワークフロー・プロセスに移動します: <ul style="list-style-type: none"> - 全般 - ディメンションのマッピング - メンバーのマッピング - オプション - プロセスの詳細 - ワークベンチ • (統合の実行/パイプラインの実行) <p style="text-align: center;"></p>

デフォルト POV 期間の選択

統合の実行時に使用される POV 期間を選択して保存すると、毎回 POV 期間を選択する必要がありません。POV 期間が選択されていない場合、ブラウザのキャッシュに基づいて最後に使用された期間にデフォルト設定されます。

POV 期間のオプションは、データ統合のホーム・ページで使用できます。



「POV 期間」ドロップダウンの横にロック解除アイコン ()

が表示されている場合、別の期間を選択できます。

データ管理のシステム設定でグローバル POV モードが有効になっている場合、その期間はグローバル POV 期間にデフォルト設定され、別の期間を選択できません(*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理*のシステムレベルのプロファイルの設定を参照。)この場合、次に示すように、「POV 期間」ドロップダウンの横にロック・アイコンが表示されます。



POV のロックおよびロック解除の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理*のすべてをロックおよびロック解除を参照してください。

データ統合ワークフローの操作


データ統合ワークフロー・バーは、次のタスクで構成されます。




ワークフロー・バーのタスクをクリックするだけで、異なるタスク間を移動できます。

タスク	説明	詳細情報
全般	ファイルベース統合および直接統合のソースの統合を追加または編集します。	データ統合の定義
ディメンションのマッピング	データ・ソースの列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。	ディメンションのマッピング

タスク	説明	詳細情報
メンバーのマッピング	ディメンションをマッピングして、ソース・フィールドの値をターゲット・ディメンション・メンバーに変換する方法を指定します。	メンバーのマッピング
オプション	データをインポートおよびエクスポートするためのオプションを定義します。また、ソース・フィルタおよびビジネス・ルールを定義します。	データ統合オプションの設定

また、「データ統合」ホーム・ページのすべてのタスクには、統合またはパイプラインの右側にある  をクリックしてタスクを選択することにより、アクセスできます。次に、統合ジョブに関連付けられているすべてのタスクを示します。

VF_USA_Accounting_Flexfie	Mar 17, 2018 12:00:00 AM	
VF_USA_Accounting_Flexfie		<ul style="list-style-type: none"> General Map Dimensions Map Members Options Process Details Workbench
VF_USA_Accounting_Flexfie	Mar 20, 2018 12:00:00 AM	
Vision - Custom	Apr 10, 2018 12:00:00 AM	
Vision - Custom	Jun 14, 2018 12:00:00 AM	
Vision - Entity	Mar 23, 2018 12:00:00 AM	

統合を実行してソースからデータを抽出し、全般およびフィルタ条件に基づいてターゲットにロードするには、統合を選択して



をクリックします。

パイプラインを実行し、パイプラインのステージで一連のジョブを実行し、統合プロセスを実行し、電子メールを送信して、ログを添付するには、パイプラインを選択して



をクリックします。

詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

4

統合タスク

この章のタスクを使用して、システムレベルのプロファイルを設定します。

システム設定

システム設定は、システム全体に適用されるシステムレベルのオプションを設定、更新またはクリアする場合に使用します。

システム設定を定義するには:

1. 「アクション」メニューで、「システム設定」を選択します。
2. システム設定ページで、追加または変更するオプションを選択し、「保存」をクリックします。

使用可能なシステムレベルのオプション:

Table 4-1 システムレベルの設定

オプション	値
ロケーション・フォルダの作成	ロケーションの作成時に、inbox にロケーション・フォルダを作成するようにシステムに指示します。指定できる値は「はい」または「いいえ」です。このオプションは一度設定したら変更しないでください。この設定はオプションですが推奨します。
アーカイブ・モード	アーカイブされたファイルをアーカイブ・ロケーションにコピーするか移動するかを指定します。「コピー」、 「移動」 または 「なし」 を設定します。「コピー」を選択すると、ファイルは inbox に残されます。「移動」を選択すると、ファイルはアーカイブ・フォルダにコピーされ、inbox から削除されます。data という名前のフォルダがアーカイブ・フォルダです。ファイルがアーカイブ・ロケーションに移動されると、ファイル名が次のように変更されます: <Process ID><Year><Month><Day>.<Original Extension> たとえば、ソース・ファイル名が BigFile.csv であり、このファイルが期間 Mar-07 に期間キー 03/01/2023 でロードされ、プロセス ID が 983 であった場合、結果のファイル名は 98320230301.csv となります。

Table 4-1 (Cont.) システムレベルの設定


オプション	値
ファイル・アップロードのワイルド・カードを除外	<p>アップロードできないファイル拡張子を指定します。</p> <p>たとえば、*.jsp または *.py を指定できます。</p> <p>**と入力すると、すべてのファイルをアップロードできなくなります。</p>
バッチ・サイズ	<p>ファイルからメモリーに一度に読み込まれる行数を指定します。このパラメータは主にパフォーマンスのために使用されます。データがロードされる時、この設定により、キャッシュに格納されるレコード数が決まります。</p> <p>たとえば、1000 を指定した場合、1,000 件のレコードがキャッシュに格納されます。同様に、5000 を指定した場合、5,000 件のレコードがキャッシュに格納されてコミットされます。この設定をサーバー・メモリーによって決定し、必要に応じて調整します。</p>
ファイルの文字セット	<p>テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法をドロップダウンから選択します。</p> <p>各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。</p> <p>テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法を指定します。</p> <p>各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。</p> <p> をクリックして使用可能な文字セットを表示します。</p> <p>エンコーディングとは、テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングすることです。</p> <p>ソース・ファイルがサポートされている形式のいずれでもない場合、エンコーディングを UNICODE に変換します。</p>
デフォルト POV ロケーション	<p>デフォルト POV のロケーションをドロップダウンから指定します。</p>

Table 4-1 (Cont.) システムレベルの設定

オプション	値
デフォルト POV 期間	デフォルト POV 期間をドロップダウンから指定します。 これらのプリファレンスが優先されるのは、「アプリケーション設定」または「ユーザー設定」で同等の設定が定義されていない場合です(詳細は、 Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理のアプリケーションレベルのプロファイルの設定 および ユーザー・レベルのプロファイルの設定 を参照してください。)
デフォルト POV カテゴリ	デフォルト POV カテゴリをドロップダウンから指定します。 これらのプリファレンスが優先されるのは、「アプリケーション設定」または「ユーザー設定」の「データ管理」で同等の設定が定義されていない場合です(詳細は、 Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理のアプリケーションレベルのプロファイルの設定 および ユーザー・レベルのプロファイルの設定 を参照してください。)
グローバル POV モード	この値が「はい」に設定されている場合、他の POV (アプリケーション・レベルとユーザー・レベルの POV 設定)は無視されます。
デフォルトの確認レポート	デフォルトの確認レポートとして使用する確認レポートのタイプをドロップダウンから指定します。 次にシード済確認レポートを示しますが、新しいレポートを作成してここに指定できます: <ul style="list-style-type: none"> 確認レポート - 現在のロケーションに対する検証ルールの結果(成功または失敗ステータス)を表示します。 確認レポートの期間範囲(カテゴリ、開始期間、終了期間) - カテゴリと選択した期間について検証ルールの結果を表示します。 確認レポート検証エンティティ・シーケンス別 - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します(成功または失敗ステータス)。検証エンティティ・グループに定義されたシーケンスでソートされています。 確認レポート(警告) - 現在のロケーションについて検証ルールの結果を表示します。警告の条件が一致する場合に、検証が検証ルールに記録されて表示されます。このレポートには、検証に合格したルールは表示されません。
バッチ・タイムアウト(分)	バッチ・ジョブを同期モード(即時処理)で実行する場合、ジョブの最大実行時間を指定します。同期モードでは、データ管理はジョブの完了を待ってから制御を戻します。

Table 4-1 (Cont.) システムレベルの設定

オプション	値
ログ・レベル	<p>ログに表示される詳細のレベルを指定します。ログ・レベル 1 を指定すると、詳細が最も少なく表示されます。ログ・レベル 5 を指定すると、詳細が最も多く表示されます。</p> <p>ログは、「ログ」リンクを選択すると「プロセスの詳細」に表示されます。</p>
レポート精度の確認	<p>最も重要な数字が一番左の 0(ゼロ)以外の数字で、最も重要でない数字が一番右の既知の数字の場合の丸め処理に使用する 10 進数の合計数を指定します。</p>
データ・エクスポート・オプション「すべてのデータを上書き」を表示します	<p>「ルールの実行」画面にある「エクスポート・モード」ドロップダウンに「すべてのデータを上書き」オプションを表示する場合は、「はい」を指定します。</p> <p>すべてのデータの上書きを選択した場合は、次のメッセージが表示されます: 警告: 「すべてのデータを上書き」オプションでは、アプリケーション全体のデータがクリアされます。これは現在の視点に制限されません。このアクションを実行しますか?</p>
マップ監査を使用可能にする	<p>マップ・モニター・レポート(ロケーションのマップ・モニターおよびユーザーのマップ・モニター)の監査レポートを作成するには、「はい」に設定します。この設定のデフォルト値は「いいえ」です。</p>
アクセスしてソース・ドキュメントを開く	<p>データ統合のランディング・ページにドリルダウンすると、この設定によって「ソース・ドキュメントを開く」リンク(データのロードに使用されたファイル全体を開きます)へのアクセス権が決定されます。</p> <p>使用可能な値:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 管理者 - 「アクセスしてソース・ドキュメントを開く」リンクは管理者ユーザーに限定されます。 • すべてのユーザー - 「アクセスしてソース・ドキュメントを開く」リンクはすべてのユーザーが使用できます。「すべてのユーザー」がデフォルト設定です。
マップ・エクスポート・デリミタ	<p>メンバー・マッピングのエクスポート時に、列の区切り記号の値を指定します。</p> <p>使用可能な区切り記号は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • !(感嘆符) • ,(カンマ) • ;(セミコロン) • (縦線)

Table 4-1 (Cont.) システムレベルの設定

オプション	値
マップ・エクスポートの Excel ファイル形式	メンバー・マッピングをエクスポートするときに使用する Excel ファイル形式をドロップダウンから選択します: 使用可能な値: <ul style="list-style-type: none">Excel 97-2003 ワークブック(*.xls)Excel マクロ対応ワークブック(*.xlsm)
マップ LCM 形式	移行(ライフサイクル管理)へのデータ・ロード・マッピングのエクスポート・オプションをドロップダウンから選択します 使用可能な値: <ul style="list-style-type: none">個別データ・ロード・マッピング—マップは、ロケーションごとに個別にエクスポートされ、ロケーションごとに個別にインポートされます。各ロケーションにマップが多数ある場合、ロケーションごとに小さい単位でマップをロードできるため、この方法を使用します。この方法は、特定のロケーションのマップを選択的に移行する場合にも役立ちます。この方法では、既存のマップは削除され、スナップショットの新しいマップで置き換えられます。すべてのロケーションの結合データ・ロード・マッピング—マップは、すべてのロケーションについて、1つのアーティファクトでエクスポートされます。この方法では、スナップショットのマップがターゲット・システムの既存のマップにマージされます。これがデフォルトの設定です。

Table 4-1 (Cont.) システムレベルの設定

オプション	値
LCM モード	<p>ライフサイクル管理スナップショットをエクスポートするときに使用する LCM モードをドロップダウンから選択します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> <p>個々のアーティファクト – 設定のみ—このモードでは、ロケーションやマッピングなど、移行する個々のアーティファクトを選択します。スナップショットをターゲット・システムにインポートすると、データがターゲット・システムの既存のデータとマージされます。このモードには、ワークベンチ・データは含まれません。</p> <p>これが、LCM プロセスで使用されるデフォルト・モードです。</p> <p>個々のアーティファクトのスナップショットは、XML ファイルとしてエクスポートされて ZIP ファイルに格納されます。スナップショットの ZIP ファイルは、移行の「スナップショット」タブから入手できます。</p> <p>単一スナップショット – 設定のみ—このモードでは、スナップショットをターゲット・システムにインポートすると、既存の設定データがすべて削除され、スナップショットのデータがインポートされます。</p> <p>設定アーティファクトのリストは、<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理</i>のスナップショット・エクスポートの設定アーティファクトを参照してください。</p> <p>設定アーティファクトは、CSV ファイルに表形式でエクスポートされて ZIP ファイルに格納されます。スナップショットの ZIP ファイルは、移行の「スナップショット」タブから入手できます。</p> <p>単一スナップショット – 設定のみモードで実行されるスナップショットは、個々のアーティファクト – 設定のみモードで実行されるスナップショットよりも高速であり、データベースのタイムアウトの問題を回避できる可能性があります。</p> <p>単一スナップショット – 設定とデータ—このモードでは、ターゲット・システムのデータが完全に削除され、スナップショットのデータがインポートされます。ワークベンチ・データの量に応じてインポート・プロセスに時間がかかることがあり、ステージング表内のデータのサイズに応じて LCM バックアップのパフォーマンスに影響が生じる可能性があります。</p> <p>設定アーティファクトとデータ・アーティファクトのリストは、<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理</i>のスナップショット・エクスポート</p>

Table 4-1 (Cont.) システムレベルの設定

オプション	値
	<p>の設定アーティファクトおよび Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理のスナップショット・エクスポートのデータ・アーティファクトを参照してください。</p> <p>このモードを使用する前に、個々のアーティファクトのベースライン・スナップショットを作成してください。</p> <p>設定およびすべてのデータ(ワークベンチを含む)が CSV ファイルに表形式で増分エクスポートされて ZIP ファイルに格納されます。スナップショットの ZIP ファイルは、移行の「スナップショット」タブから入手できます。</p>
ジョブを使用したすべてのデータ・タイプ・ロード	統合がすべてのデータ・タイプ・ロードというタイプのロードである場合に Planning ジョブを作成するには、「はい」を指定します。


ロケーションの表示

ロケーション・ページを使用して、統合で使用されているすべてのロケーションを表示します。表示されるロケーションをフィルタし、必要に応じて使用されているロケーションを削除できます。

ロケーションは、統合がデータ統合で実行されるレベルです。ロケーションを定義することにより、データのロード先を指定できます。さらに、ロケーションによって、ディメンションナリティが同じである複数のターゲット・アプリケーションに対して同一のインポート・フォーマットを使用できます。

すべてのロケーションを表示するには、「アクション」メニューから「ロケーション」を選択します。

選択した基準でロケーションの表示をフィルタするには、「フィルタ」でフィルタする文字列、テキストまたは文字を指定します。

ロケーションを削除するには、ロケーションを選択して  をクリックします。削除の確認を求めると表示されます。ロケーションが削除されると、そのロケーションが含まれている他のすべてのデータ統合ページから削除されます。

5

アプリケーションの登録

統合を定義する際にソースおよびターゲット・アプリケーションを登録するには、「アプリケーション」オプションを使用します。ローカルの Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーション、ビジネス・プロセス間統合(Planning と Financial Reporting の間など、クラウド・アプリケーション間)、ファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションおよび汎用データ・ソース・エンティティを既存の EPM ポートフォリオに登録できます。

アプリケーションを登録するプロセスにより、データの可視性、整合性および検証システムが提供されます。「アプリケーション」オプションを選択すると、アプリケーション・ページが表示され、新しいアプリケーションを登録できます。また、既存のアプリケーションを選択し、アプリケーション・オプションの更新、アプリケーションの削除またはアプリケーション定義のリフレッシュを行うこともできます。

データ統合で登録されたアプリケーションは、全般ページでソースおよびターゲットを選択するときすぐに選択できるようになります。また、データ管理でも使用できるようになります。

ノート:

「アプリケーション」オプションは、「データ統合」ホーム・ページの「アクション」ドロップダウンで管理者のみが使用できます。

アプリケーションの各行の横にある「アクション」ドロップダウンを使用して、アプリケーション・タイプに関連付けられている、アプリケーション関連の次のような様々なタスクを選択できます:

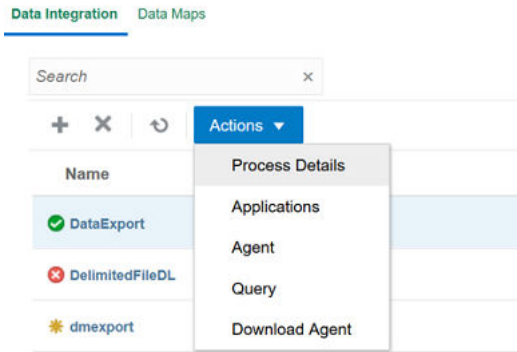
- ディメンションの表示
- アプリケーション・オプションの変更
- データ・ソース・アプリケーションの値の追加、更新または削除。
- Oracle NetSuite および Oracle ERP Cloud アプリケーションの更新(再初期化)。

アプリケーション・オプションの起動

ノート:

管理者のみがアプリケーションを登録および変更できます。

アプリケーション・オプションを起動するには、「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。



アプリケーションのナビゲート

サービス管理者は、アプリケーション・ページで次の基準によって、すべての登録済アプリケーションを表示できます:

- 名前
- カテゴリ
- タイプ
- システム名

表示アイテムの右側にある ▲ をクリックして、前述の各表示アイテムをアルファベット順に並べ替えることができます。

機能は次のとおりです。

機能	説明
+	新規アプリケーションが作成されます。
×	<p>アプリケーションを削除します。</p> <p>「削除確認」メッセージが次のメッセージとともに表示されます: このターゲット・アプリケーションにはルールが関連付けられている可能性があります。このアプリケーションを削除すると、そのルールがすべて削除されます。それでも続行しますか?</p> <p>ターゲット・アプリケーションを削除すると、そのアプリケーションには削除のマークが付き、インポート・フォーマット・オプションやロケーション作成オプションを含むメタデータや統合の処理に使用できなくなります。また、そのアプリケーションに関連する既存の統合もすべて削除されます。</p>

機能	説明
名前	<p>Oracle Enterprise Performance Management Cloud で、すべての入力キューブ・アプリケーションを登録すると、このフィールドにはサービス・アプリケーション名 (Planning や Financial Consolidation and Close など) が一意の接頭辞とともに表示されます。</p> <p>EPM Cloud では、個別のキューブを登録すると、このフィールドにはアプリケーション名、キューブ名および接頭辞が表示されます。</p> <p>Oracle NetSuite アプリケーションでは、このフィールドにはユーザーにわかりやすい、アプリケーションの検索名が表示されます。</p> <p>その他のすべてのアプリケーションでは、このフィールドにはアプリケーションの名前が接頭辞とともに表示されます。</p>
カテゴリ	<p>アプリケーションが属するクラスまたは区分が表示されます。</p> <p>使用可能なアプリケーション・カテゴリ:</p> <ul style="list-style-type: none"> • EPM ローカル。次のものが含まれます: <ul style="list-style-type: none"> - 入力キューブ (BSO) - レポート・キューブ (ASO/Essbase) • EPM Cloud。次のものが含まれます: <ul style="list-style-type: none"> - 入力キューブ - レポート・キューブ • データ・ソース。次のものが含まれます: <ul style="list-style-type: none"> - データ・ソース - Oracle Financials Cloud、Oracle Human Capital Management Cloud、Oracle NetSuite および増分ファイル。 - SQL 問合せのデータ・ソース • データ・ターゲット。ファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーション・タイプが含まれます • デイメンション (メタデータのロード用)

機能	説明
タイプ	<p>登録済アプリケーションのタイプを示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • EPM ローカルおよび EPM Cloud アプリケーション • Oracle ERP Cloud • Oracle HCM Cloud • Oracle Netsuite • Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション) • オンプレミス・データベース • Peoplesoft GL 残高 • Oracle ERP Cloud (試算表平均) • 増分ファイル • EBS GL 残高 • Oracle ERP Cloud (カスタム) • Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション) • Oracle ERP Cloud (試算表) • EPM ディメンション • ファイルへのデータ・エクスポート • オンプレミス・データベースへのデータ・エクスポート
システム名	<p>EPM Cloud で、すべての入力キューブ・アプリケーションを登録すると、このフィールドにはサービス・アプリケーション名(Planning や Financial Consolidation and Close など)が接頭辞なしで表示されます。</p> <p>EPM では、個別のキューブを登録すると、このフィールドには Planning、Financial Consolidation and Close などのアプリケーションのアプリケーション名が表示されます。</p> <p>Oracle NetSuite アプリケーションでは、このフィールドにはアプリケーションの内部名が表示されます。</p>
アクション	<p>その他のすべてのアプリケーションでは、このフィールドにはアプリケーションの名前が接頭辞なしで表示されます。</p> <p>アプリケーションの各行の横にある「アクション」ドロップダウンによって、アプリケーションのカテゴリおよびタイプに関連付けられた様々なアプリケーション関連タスクを選択できます。</p> <p>EPM ローカル、EPM Cloud およびディメンション・アプリケーションでは、「アプリケーション詳細」オプションを使用できます。</p> <p>データ・ソースおよびデータ・エクスポート・アプリケーションでは、「アプリケーション詳細」オプション、「編集」オプションおよび「デフォルトの設定」オプションを使用できます。</p>

EPM ローカル・アプリケーションの登録

Planning などのプライマリ・サービス・アプリケーションから Oracle General Ledger データを統合する場合、「EPM ローカル」カテゴリを使用してアプリケーションを登録します。EPM ローカル・アプリケーションは 1 つのインスタンスで使用され、インスタンスごとに存在できるアプリケーションは 1 つのみです。

EPM ローカル・アプリケーションを使用すると、データまたはレポート・キューブ間で同期したり、異なる入力キューブ間でデータを移動できます。

たとえば、Financial Consolidation and Close のお客様が Planning のデータを追加したり、Planning のお客様が他の Planning アプリケーションを追加できます。また、この統合では、クラウドからオンプレミス・アプリケーションまたは他の外部レポート・アプリケーションへのライトバックも可能です。

EPM ローカル・アプリケーションを作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「EPM ローカル」を選択します。

Create Application ✕

Category

Application

Cubes

Prefix

4. 「アプリケーション」から、プライマリ・サービス・アプリケーションのアプリケーションを選択します。
5. 「キューブ」から、アプリケーションに関連付けるソース・プラン・タイプを選択します。

ソース・キューブによって、アプリケーションのモデルまたはプラン・タイプ間のデータのフローが定義されます。

6. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されます。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

EPM Cloud アプリケーションの登録

リモート・サービスで **Planning** などのビジネス・プロセス・インスタンスを使用して、**Financial Consolidation and Close** などの別のビジネス・プロセス・インスタンスとデータを統合する場合、EPM Cloud アプリケーションを作成して登録します。この場合、2つのビジネス・プロセス・サービス・インスタンス間の接続情報を選択する必要があります。

この機能を使用して、EPM のお客様はクラウド・デプロイメントを次のような既存の EPM ポートフォリオに適用できます:

- Planning
- Oracle Essbase
- Financial Consolidation and Close
- Tax Reporting
- Account Reconciliation

EPM Cloud アプリケーションを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. **アプリケーションの作成**ページで、「**カテゴリ**」から「**EPM Cloud**」を選択します。
4. 「**URL**」で、サービスへのログオン時に使用するサービス URL を指定します。
5. 「**ユーザー名**」で、クラウド・サービス・アプリケーションのユーザー名を指定します。

ユーザー名は、接続を定義するためにアプリケーション・ページで定義されている管理者ユーザーの名前です。詳細は、[Oracle ERP Cloud 接続の構成](#)を参照してください。

6. 「**パスワード**」で、クラウド・サービス・アプリケーションのパスワードを指定します。
7. 「**ドメイン**」で、クラウド・サービス・アプリケーションに関連付けられたドメイン名を指定します。

アイデンティティ・ドメインは、サービス・インスタンスへのアクセスを必要とするユーザーのアカウントを制御します。また、権限を持つユーザーがアクセスできる機能を制御します。サービス・インスタンスはアイデンティティ・ドメインに属します。

 ノート:

管理者はユーザーに表示されるドメイン名を更新できますが、データ統合は、お客様がサービスの契約をした際に指定された元のドメイン名を必要とします。データ統合から Oracle Enterprise Performance Management Cloud 接続を設定するときに、ドメイン別名を使用することはできません。

8. 「アプリケーション」から、アプリケーションのタイプを選択します。
9. 「OK」をクリックします。

データ・ソース・ベースのアプリケーションの登録

データ・ソースは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud へのソース・データとして使用できるアプリケーション(Oracle NetSuite や Oracle E-Business Suite (EBS)など)の汎用フレームワークに適用されるアプリケーション・カテゴリです。

データ統合で使用可能なデータ・ソースベースのアプリケーションは次のとおりです:

- Oracle ERP Cloud - General Ledger。General Ledger からの実績のロードと予算および実績の修正仕訳のライトバック
- Oracle ERP Cloud - Budgetary Control。契約、債務および支出のロードと予算のライトバック
- Oracle ERP Cloud - Sub-Ledgers。補助元帳トランザクション・データのロード
- Oracle NetSuite - Oracle NetSuite からの実績およびメタデータのロード
- Oracle Human Capital Management Cloud - 従業員属性、給与およびその他の関連ジョブ情報のロード
- E-Business Suite - EPM 統合エージェントを使用して、一般会計から実績をロードします
- Oracle Peoplesoft - EPM 統合エージェントを使用して、一般会計から実績をロードします
- 増分ファイル - ソース・データ・ファイルを前のバージョンのソース・データ・ファイルと比較して、新しいレコードや変更されたレコードを特定し、そのデータ・セットのみをロードできます。
- オンプレミス・データベース
- オンプレミス・ファイル
- Oracle Autonomous Database
- Oracle ERP Cloud (勘定体系)
- Oracle ERP Cloud (カスタム)
- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表 - 平均)
- Oracle ERP Cloud (試算表)
- Oracle Projects (アクティブ・プロジェクト)

- Oracle Projects (実績)
- Oracle Projects (予算)
- Oracle Projects (統合ステータス)
- Oracle Projects (組織)
- Oracle Projects (テンプレート)
- プランニング予算改訂
- Planning プロジェクト統合ステータス
- Planning プロジェクト・ステータス

Oracle ERP Cloud General Ledger アプリケーションの登録

Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger データを Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションと統合する場合、「アプリケーション」を使用して Oracle ERP Cloud General Ledger アプリケーションをデータ・ソース・アプリケーション・タイプとして指定し、アプリケーションをインポートして、EPM Cloud ターゲット・アプリケーションでソースとして使用できるようにします。アプリケーションをインポートすると、ソースの Oracle ERP Cloud General Ledger データが EPM Cloud システムに Essbase キューブとして取り込まれます。それぞれの Essbase アプリケーションは、ソースの Oracle ERP Cloud General Ledger の勘定体系定義を表します。

Oracle ERP Cloud アプリケーションをデータ・ソースとして定義するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、**Oracle ERP Cloud** を選択します。
5. 「**接続**」から、「**Fusion**」を選択します。
6. 「**アプリケーション・フィルタ**」で、ロードのフィルタを指定します。
アプリケーション・フィルタは、Oracle ERP Cloud からインポートするアプリケーションの名前をフィルタ処理するために使用されます。たとえば、Vision USA やワイルド・カード Vision%などの特定のアプリケーション名でフィルタ処理できます。
7. 「**アプリケーションのインポート**」をクリックしてアプリケーションを登録し、Oracle ERP Cloud アプリケーションを初期化します。

Oracle NetSuite アプリケーションの登録

アプリケーション・タイプをデータ・ソースとして Oracle NetSuite を登録し、Oracle NetSuite の保存された検索をインポートします。インポート時に、Oracle NetSuite の保存された検索結果がロードされます。インポートの後、Oracle NetSuite ソース・システムで登録されたユーザー名のもとで Oracle NetSuite の保存された検索結果それぞれについてアプリケーション・レコードが作成されます。

Oracle NetSuite 接続を定義して Oracle NetSuite アプリケーションをインポートするには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
4. 「タイプ」から、「NetSuite」を選択します。

5. 「接続」から、「NetSuite」を選択します。

接続ステップで Oracle NetSuite への接続が提供され、Oracle NetSuite アプリケーションがインポートされます。後で、接頭辞付きのアプリケーションを追加する場合は、ドロップダウンから選択して追加できます。

Oracle NetSuite ソース・システムおよび接続の設定の詳細は、[NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成](#)を参照してください。

6. 「アプリケーション」から、NSPB Sync SuiteApp の保存された検索の名前を選択します。
メタデータの保存された検索には保存された検索名に「メタデータ」が含まれ、データの保存された検索には保存された検索名に「データ」が含まれます。
7. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
8. 「アプリケーションのインポート」をクリックしてアプリケーションを登録し、Oracle NetSuite アプリケーションを初期化します。

Oracle NetSuite の検索結果は、アプリケーション・タイプ「データ・ソース」に登録されます。初期化中に、Oracle NetSuite ソース・システムで登録されたユーザー名のもとで使用可能な保存された検索の結果に基づき、データ・ソースが自動的に作成されます。

NSPB Sync SuiteApp の保存された検索は次のとおりです:

保存された検索名	ID	タイプ
PBCS 全転記トランザクション最終期間		サマリー
PBCS 全転記トランザクション最終期間		詳細
PBCS 全転記トランザクション最終期間 - 試算表		試算表
PBCS - トランザクションのサマリー	customsearch_nspbcs_all_transactions_sum	トランザクション
PBCS - トランザクションの詳細	customsearch_nspbcs_all_transactions_det	トランザクション
PBCS - 試算表	customsearch_nspbcs_trial_balance	トランザクション
PBCS 同期(データ)損益計算書トランザクション [.csv]	customsearch_pbcs_sync_is_csv	トランザクション
PBCS 同期(データ)貸借対照表トランザクション [.csv]	customsearch_pbcs_sync_bs_csv	トランザクション
PBCS 同期(データ)期首残高 [.csv]	customsearch_pbcs_sync_begbal_csv	トランザクション
PBCS 同期(データ)損益計算書トランザクション	customsearch_nspbcs_sync_is	トランザクション
PBCS 同期(データ)貸借対照表トランザクション	customsearch_nspbcs_sync_bs	トランザクション
PBCS 同期(データ)期首残高	customsearch_nspbcs_sync_begbal	トランザクション
PBCS 同期(データ)連結為替レート	customsearch_nspbcs_sync_fx	連結為替レート
PBCS 同期(メタデータ)損益計算書勘定科目	customsearch_nspbcs_sync_acct_inc_stmt	勘定科目
PBCS 同期(メタデータ)貸借対照表勘定科目	customsearch_nspbcs_sync_acct_bs	勘定科目
PBCS 同期(メタデータ)クラス	customsearch_nspbcs_sync_class	クラス
PBCS 同期(メタデータ)カスタマ	customsearch_nspbcs_sync_cust	カスタマ
PBCS 同期(メタデータ)部門	customsearch_nspbcs_sync_dept	部門
PBCS 同期(メタデータ)アイテム	customsearch_nspbcs_sync_item	アイテム
PBCS 同期(メタデータ)ロケーション	customsearch_nspbcs_sync_loc	ロケーション

保存された検索名	ID	タイプ
PBCS 同期(メタデータ)プロジェクト	customsearch_nspbcs_sync_prj	プロジェクト
PBCS 同期(メタデータ)カスタマ・プロジェクト	customsearch_nspbcs_sync_cprj	プロジェクト
PBCS 同期(メタデータ)子会社	customsearch_nspbcs_sync_sub	子会社
PBCS 同期(メタデータ)ベンダー	customsearch_nspbcs_sync_vend	ベンダー

9. 「OK」をクリックします。

Oracle NetSuite アプリケーションの更新

「アプリケーションの更新」オプションを使用して Oracle NetSuite アプリケーションを再初期化します。この方法で、最新の会計レポートを NSPB Sync SuiteApp または EPM Connector SuiteApp の保存された検索から抽出し、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスとの統合で使用できます。

Oracle NetSuite アプリケーションを更新するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページの「アクション」メニューで、「アプリケーションの更新」を選択します。
3. アプリケーションの更新ページの「タイプ」で、Oracle NetSuite を選択します。
4. 「接続」ドロップダウンから、更新する Oracle NetSuite アプリケーションに関連付けられる接続の名前を選択します。
5. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

6. 「アプリケーションの更新」をクリックしてアプリケーションを再初期化します。

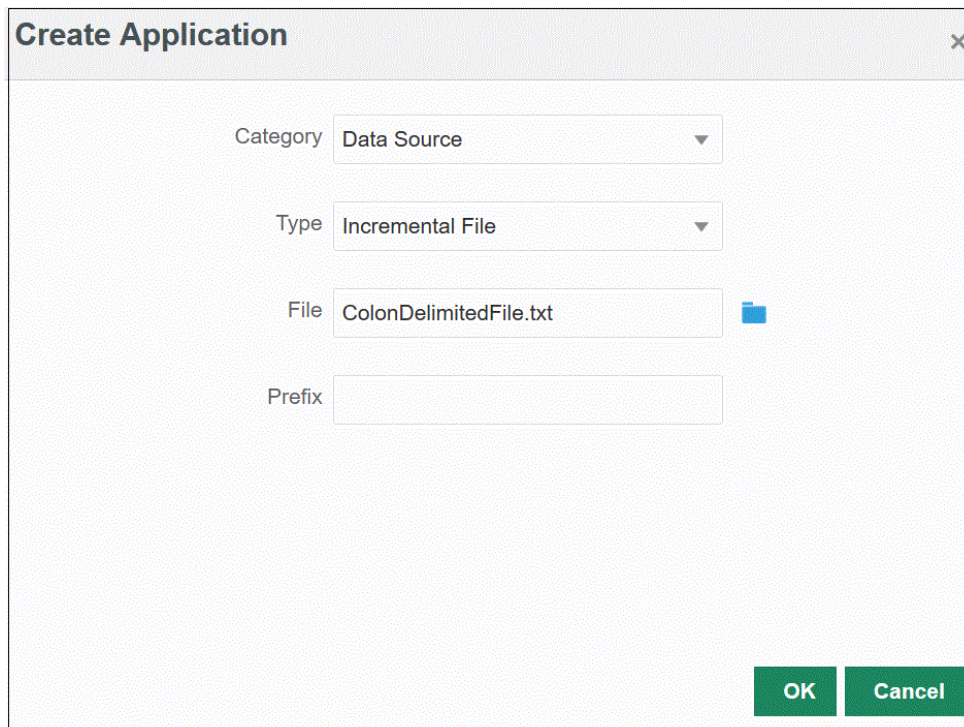
増分ファイル・アプリケーションの登録

増分ファイル・アダプタ機能を使用すると、ソース・データ・ファイルを前のバージョンのソース・データ・ファイルと比較して、新しいレコードや変更されたレコードを特定し、そのデータ・セットのみをロードできます。


増分ファイル・アダプタ機能を使用するには、初期ソース・データ・ファイルを増分ファイル・アダプタのデータ・ソースとして登録します。この初期ソース・データ・ファイルは、テンプレートとして使用されます。実際の統合は、統合の実行プロセスで指定されたファイルから実行され、初期ソース・データ・ファイルと後続のファイルの間でファイル比較が実行されます。それ以降は、1回、2回または何回でもロードできます。最後に実行されたファイルが、後続のロードの評価基準となります。このデータ・ソースでは差異のみがロードされるため、ファイル・インポート中のロードが高速になります。残りのデータ・インポート・プロセスは、ファイルの標準データ・ロードの場合と同じです。

増分ファイル・データ・ソースを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. **アプリケーションの作成**ページで、「**カテゴリ**」から「**データ・ソース**」を選択します。



4. 「**タイプ**」から、**増分ファイル**を選択します。
5. 「**ファイル**」で、テンプレートとして使用する初期ソース・データ・ファイルを指定します。

 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。

ファイルを選択するときには、次のことに注意してください：

- ソース・データ・ファイルは、区切りデータ・ファイルである必要があります。
 - 使用されるデータ・ファイルには、区切り列を説明する 1 行のヘッダーが含まれる必要があります。
 - 数値データと数値以外のデータの両方をロードできます。
6. **オプション: 「接頭辞」**で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
 7. 「**OK**」をクリックします。

オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションの定義


EPM 統合エージェントを使用して、オンプレミス・データ・ソースからデータを抽出し、そのデータを Oracle Enterprise Performance Management Cloud に直接ロードする必要がある場合、オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションを作成します。EPM 統合エージェントでは、オンプレミス・リレーショナル・データベースに対して問合せを実行し、データを EPM Cloud にロードします。

抽出用に作成されたオンプレミス・データ・ソース・アプリケーションを作成して登録するには、サンプル・データおよび 1 つのヘッダー・レコードのみが含まれたファイルを作成する必要があります。このファイルにアプリケーション名や SQL 問合せなどを含めることはできません。ファイル名はアプリケーション名である必要があります。

ノート:

詳細は、[オンプレミス・データ・ソースからのデータの抽出](#)を参照してください。


オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションを作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「データ・ソース」を選択します。


Create Application ×

Category

Type

File 

Prefix

4. 「**タイプ**」から、**オンプレミス・データベース**を選択します。
 5. 「**ファイル**」で、オンプレミス・アプリケーションに使用する、サンプル・データおよび1つのヘッダー・レコードのみが含まれたファイルを指定します。
ヘッダー行は、ターゲット・ディメンションのディメンション名と完全に一致する必要があります。ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できません。
-  をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。
6. **オプション: 「接頭辞**」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
 7. 「**OK**」をクリックします。

Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録

Oracle ERP Cloud データ・ソースから一般会計以外のデータを抽出して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードできます。このようなタイプのデータ・ソースを使用すると、データ統合で参照される Oracle Business Intelligence Publisher データ抽出を定義して、Oracle ERP Cloud ソースから、買掛/未払金、売掛/未収金、固定資産、サプライ・チェーンなどのデータを直接抽出できます。

データ統合には、次のように、Oracle ERP Cloud ソースに対する事前パッケージ化済問合せが用意されています:

- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表 - 平均)
- Oracle ERP Cloud (試算表)

また、BI Publisher データ抽出に対するカスタム問合せを作成して実行できます。この場合、データ統合で Oracle ERP Cloud (カスタム)データ・ソース・アダプタを使用して、BI Publisher からソース CSV ファイルをインポートし、使用するレポート・パラメータを設定します。

ノート:

Oracle ERP Cloud 統合には、権限またはユーザー役割およびすべての ERP 元帳へのデータ・アクセス権が必要です。

システム・タイプ「**Oracle ERP Cloud**」を使用して Oracle ERP Cloud データ・ソースのソース・システムを登録し、ユーザー資格証明を指定する必要があります。このステップには、接続の詳細の指定および接続のテストが含まれます。詳細は、[Oracle ERP Cloud 接続の構成](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、Oracle ERP Cloud の事前パッケージ化済問合せのタイプを選択します。

使用可能な Oracle ERP Cloud タイプは次のとおりです:

- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表 - 平均)
- Oracle ERP Cloud (試算表)

「**アプリケーション**」に表示される事前パッケージ化済アプリケーションの名前は、このフィールドで選択した Oracle ERP Cloud の事前パッケージ化済問合せのタイプによって異なります。

The screenshot shows a 'Create Application' dialog box with the following fields and values:

- Category: Data Source
- Type: Oracle ERP Cloud (Payables Tr...)
- Application: Payables Transactions
- Prefix: (empty)

Buttons: OK, Cancel

5. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
6. 「**OK**」をクリックします。

Oracle ERP Cloud アプリケーションの更新

「アプリケーションの更新」オプションを使用して Oracle ERP Cloud アプリケーションを再初期化します。アプリケーションを再初期化すると、ソース・システムによって、元帳や勘定体系など、すべての新規追加がフェッチされます。

アプリケーションを更新するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、再初期化する Oracle ERP Cloud アプリケーションを選択します。
3. 「**アクション**」メニューから、「**アプリケーションの更新**」を選択します。
4. **アプリケーションの更新**ページの「**タイプ**」で、「**Oracle ERP Cloud**」を選択します。
5. 「**接続**」ドロップダウンから、データ・ソースに関連付けられる接続の名前を選択します。
6. 「**アプリケーション・フィルタ**」から、アプリケーションのアプリケーション・フィルタを指定します。
アプリケーション・フィルタの詳細は、[Oracle ERP Cloud データ・ソースへのアプリケーション・フィルタの適用](#)を参照してください。
7. 「**予算管理**」を有効にして、アプリケーションを予算管理データ・ソースとして登録します。
8. 「**アプリケーションの更新**」をクリックしてアプリケーションを再初期化します。

Oracle ERP Cloud カスタム・アプリケーションの登録

カスタム問合せを使用して Oracle ERP Cloud からデータをインポートして、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードできます。カスタム問合せは、CSV フォーマット済データ・ファイルを作成する Oracle Business Intelligence Publisher のレポートに対して実行されます。そのデータが EPM Cloud にロードされます。この場合、データ統合ではレポートを実行してデータを抽出し、そのデータを EPM Cloud にロードします。データ統合で Oracle ERP Cloud (カスタム)データ・ソース・アダプタを使用して、Oracle Business Intelligence Publisher からソース CSV ファイルをインポートし、使用するレポート・パラメータを設定します。


 **ノート:**

Oracle ERP Cloud 統合では、Oracle ERP Cloud からのデータを統合するには権限またはユーザー役割およびすべての ERP 元帳へのデータ・アクセス権を持っている必要があります。詳細は、**Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ役割の要件**を参照してください。

システム・タイプ「**Oracle Financials Cloud**」を使用して Oracle ERP Cloud データ・ソースのソース・システムを登録し、ユーザー資格証明を指定する必要があります。このステップには、接続の詳細の指定および接続のテストが含まれます。詳細は、**Oracle ERP Cloud 接続の構成**を参照してください。

カスタム問合せを使用した Oracle ERP Cloud データの統合の詳細は、**カスタム問合せを使用した Oracle ERP Cloud データの統合プロセスの説明**を参照してください。


カスタム Oracle ERP Cloud アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、**Oracle ERP Cloud (カスタム)**を選択します。

Create Application ✕


Category

Type

File 

Prefix

5. 「ファイル」で、データのロード元の Oracle Business Intelligence Publisher レポートに関連付けられた CSV ファイルの名前を指定します。

 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。

6. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

7. 「OK」をクリックします。


Peoplesoft GL 残高アプリケーションの登録

EPM 統合エージェントを使用すると、事前シード済の問合せを使用して Peoplesoft ソースから一般会計残高をインポートし、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ターゲット・アプリケーションにロードできるアプリケーションを作成して登録できます。Peoplesoft General Ledger の GL データ・ソースには、選択したチャートフィールドの組合せに基づいて元帳要約および詳細な元帳情報が含まれます。

これにより、EPM Cloud からオンプレミスの Peoplesoft データへの直接接続が可能になります。

EPM 統合エージェントを使用した Peoplesoft GL 残高アプリケーションの登録の詳細は、[事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタの使用](#)を参照してください。

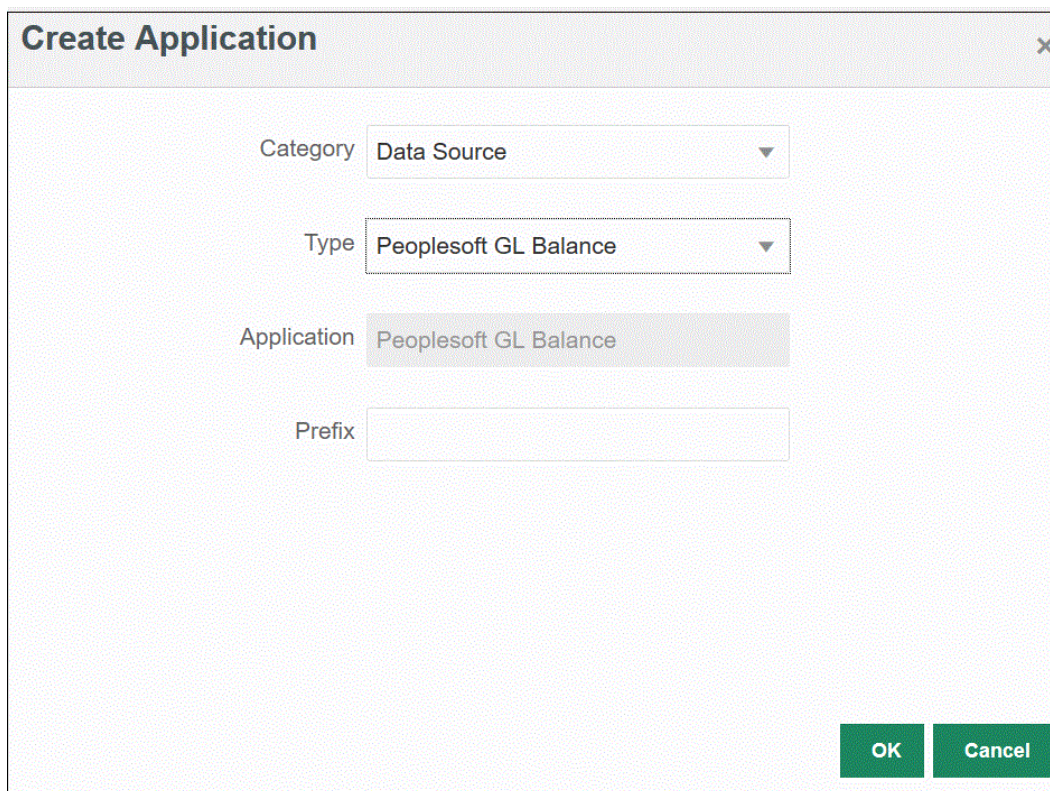
Peoplesoft GL 残高アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、**Peoplesoft GL 残高**を選択します。
5. このページで「OK」をクリックすると、「**アプリケーション**」に表示されているアプリケーションが作成され、登録されます。

「アプリケーション詳細」の「オプション」タブで Peoplesoft データ・ソース・アプリケーションの接続情報を指定します。

6. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。



7. 「OK」をクリックします。

E-Business Suite アプリケーションの登録

EPM 統合エージェントを使用すると、事前シード済の問合せを使用して Oracle E-Business Suite ソースから一般会計残高をインポートし、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ターゲット・アプリケーションにロードできるアプリケーションを作成して登録できます([EPM 統合エージェントのインストールと構成](#)を参照)。

これにより、EPM Cloud からオンプレミスの E-Business Suite データへの直接接続が可能になります。詳細は、[事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタの使用](#)を参照してください。

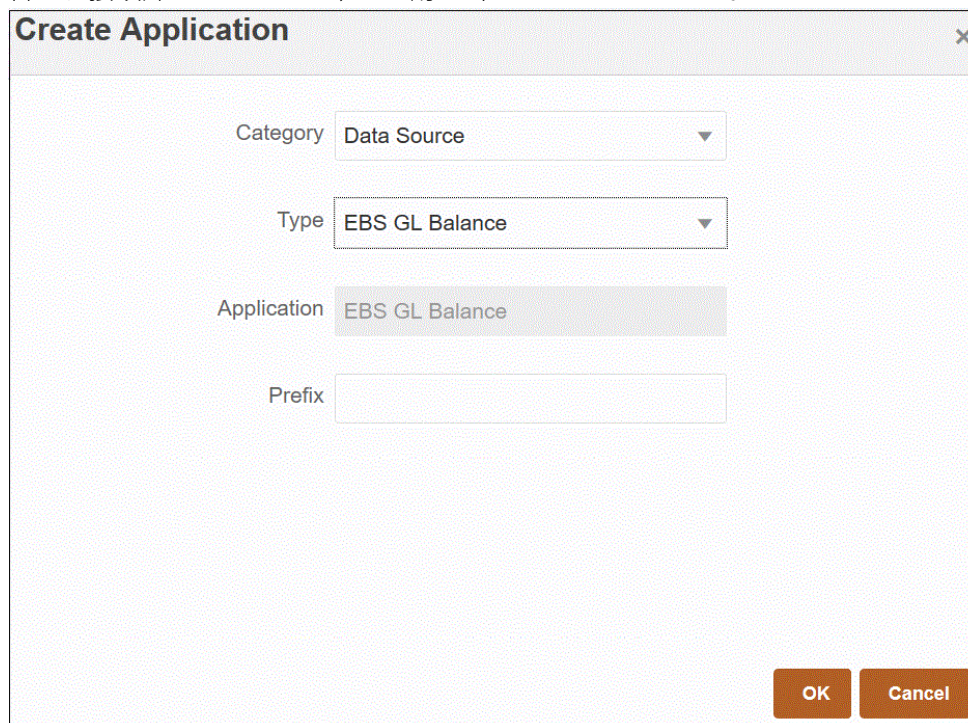
E-Business Suite アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、**EBS GL 残高**を選択します。
5. 「**OK**」をクリックすると、「**アプリケーション**」に表示されているアプリケーションが作成され、登録されます。

「アプリケーション詳細」の「オプション」タブで E-Business Suite データ・ソース・アプリケーションの接続情報を指定します。

6. **オプション**: 「**接頭辞**」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。



7. 「OK」をクリックします。

E-Business Suite および Peoplesoft データ・ソースへの接続

事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタを使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud からオンプレミス・データ・ソースへの直接接続が可能です。これらのアダプタを使用すると、次からデータをインポートできます：


- EBS GL 残高
- Peoplesoft GL 残高

事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタを使用してデータをロードするには：

1. Oracle E-Business Suite または Peoplesoft データ・ソース・アプリケーションを登録します。

E-Business Suite データ・ソース・アプリケーションの登録の詳細は、[E-Business Suite アプリケーションの登録](#)を参照してください。

Peoplesoft データ・ソース・アプリケーションの登録の詳細は、[Peoplesoft GL 残高アプリケーションの登録](#)を参照してください。

2. **アプリケーション** ページで、E-Business Suite または Peoplesoft データ・ソース・アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
3. 「**アプリケーション・フィルタ**」タブを選択します。
4. 「**オプション**」タブをクリックします。

5. 「区切り文字」で、ファイルで使用する区切り文字のタイプを選択します。

使用可能な区切り記号:

- カンマ(,)
- 感嘆符(!)
- 該当なし(NA)
- セミコロン(;)
- コロン(:)
- 垂直棒(|)

6. **資格証明ストア**で、接続に使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプ:

- クラウド
- ファイル

「クラウド」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションにユーザー名/パスワード/接続文字列を格納します。

「ファイル」資格証明ストア・タイプの場合は、JDBC URL、ユーザー名およびパスワードを格納するためにオンプレミス環境にファイルを作成します。ファイル名は `appname.cred` という名前で、`config` ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@slc04aye.us.oracle.com:1523:fzer1213
username=apps
password=w+Sz+WjKpL8 [
```

ノート:

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` ユーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

7. **Peoplesoft のみ: 「JDBC ドライバ」**で、データベース管理システム(DBMS)への接続時に使用する JDBC ドライバのタイプを選択します。

JDBC ドライバの使用可能なタイプは次のとおりです:

- Microsoft SQL Server
- Oracle

JDBC ドライバは、Java アプリケーションとデータベースの通信を可能にするソフトウェアです。JDBC ドライバは、データベースへの接続情報を通信し、クライアントとデータベース間で問合せや結果を転送するのに使用されるプロトコルを送信します。

8. **JDBC URL** で、JDBC ドライバ URL 接続文字列を指定します。

JDBC ドライバ URL 接続文字列により、Java を使用してリレーショナル・データベースに接続できます。

Oracle Thin JDBC ドライバの場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:

```
jdbc:oracle:thin:@host:port:sid
```

```
jdbc:oracle:thin:@host:port/service
```

SQL Server の場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:

```
jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname
```

9. 「**ユーザー名**」で、オンプレミス・データベースのユーザー名を指定します。
10. 「**パスワード**」で、オンプレミス・データベースのパスワードを指定します。
11. 「**フェッチ・サイズ**」で、問合せに対する各データベースのラウンド・トリップでフェッチされる(ドライバで処理される)行数を指定します。

次に、「オプション」タブの PeopleSoft 接続オプションを示します。

Application Details: Peoplesoft GL Balance		Save	< Return
Property Name		Property Value	
Delimiter	.		
Credential Store	Cloud		
JDBC Driver	Oracle		
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<server>.us.oracle.com:xxxx:xxxxxxx		
Username	emdbo		
Password		
Fetch Size	1000		

次に、「オプション」タブの E-Business Suite 接続オプションを示します。

Application Details: AG#EBS GL Balance		Save	< Return
Property Name		Property Value	
Delimiter	.		
Credential Store	Cloud		
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<server>.us.oracle.com:xxxx:xxxxxxx		
Username	apps		
Password		
Fetch Size	1000		

12. 「**保存**」をクリックします。

Oracle HCM Cloud アプリケーションの登録

Oracle Human Capital Management Cloud アプリケーションの登録の詳細は、[Oracle HCM Cloud との統合](#)を参照してください。


オンプレミス・ファイルの登録

EPM 統合エージェントを使用したファイルのロードにクイック・モードを使用する場合、オンプレミス・ファイル・アプリケーションを登録します。このタイプのアダプタを使用すると、非常に大きいファイルをオンプレミス・ファイル・データ・ソースから Oracle Fusion Cloud EPM にロードできます。これにより、クイック・モード方法が拡張され、ステージングおよび処理、パフォーマンス・ボトルネックの除去、およびロード・プロセスのパフォーマンスとスケーラビリティの向上のために、Oracle Fusion Cloud EPM データベースがバイパスされます。

オンプレミス・ファイル・アダプタには、接続パラメータや問合せは必要ありません。ただし、ロードには、インポート・フォーマットで使用されるヘッダーを含む区切りファイルが必要です。

オンプレミス・ファイル・データ・ソースの使用の詳細は、[エージェント・ファイル・アダプタの使用](#)を参照してください。

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から**オンプレミス・ファイル**を選択します。

5. 「**ファイル**」で、テンプレートとして使用するソース・データ・ファイルを指定します。
 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。

ファイルを選択するときには、次のことに注意してください:

- ソース・データ・ファイルは、区切りデータ・ファイルである必要があります。
 - 使用されるデータ・ファイルには、区切り列を説明する 1 行のヘッダーが含まれる必要があります。
 - 数値データと数値以外のデータの両方をロードできます。
6. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
 7. **「OK」** をクリックします。

ファイル・アプリケーションの登録

ファイルをデータ・ソースとして登録できます。ファイル・データ・ソースを使用すると、ビジネス・ユーザーは、固定幅ファイルであっても区切りファイルであってもファイルベースのソースからデータをファイル形式で簡単にインポートして登録でき、EPM Cloud アプリケーションにロードする際に技術的な支援がほとんど必要ありません。また、様々なファイル・ソースを指定して、コンテンツに基づいてファイルを論理的にグループ化することもできます。

ファイルをデータ・ソース・アプリケーションとして登録するには:

1. **「データ統合」** ホーム・ページの **「アクション」** から、**「アプリケーション」** を選択します。
2. **アプリケーション** ・ページで、+ (「追加」アイコン) をクリックします。
3. **アプリケーションの作成** ページで、**「カテゴリ」** から **「データ・ソース」** を選択します。
4. **「タイプ」** から **「ファイル」** を選択します。
5. **「名前」** に、ファイル・アプリケーションのユーザー定義名を指定します。
6. **「説明」** に、ファイル・アプリケーションの説明を指定します。
7. **「ドリル URL」** に、カスタム・ドリルのカスタム URL を指定します。
ドリル URL には、サーバー、ポートおよび URL パラメータが含まれている必要があります(例: `https://server:port/<URL Parameters>`)。
8. **「OK」** をクリックします。

Create Application ×

Category

Type

Name

Description

Drill URL

ファイル・ブラウザから統合を作成するときに、ファイル・アプリケーションに使用する実際のファイルを選択します。詳細は、[ファイル・ブラウザの使用](#)を参照してください。

ディメンション・クラスまたはディメンション・タイプのアプリケーションの登録


1つのディメンション・クラスまたはディメンション・タイプのみを含むタイプのアプリケーションを登録できます。このようなタイプのアプリケーションは、メタデータをロードするために使用され、システムによって自動的に作成される次のアプリケーションを含みます:

- 勘定科目
- エンティティ
- カスタム
- シナリオ
- バージョン
- スマートリスト

 ノート:

ターゲット・アプリケーションのメタデータ/ディメンションには、「汎用」タイプのディメンションのみが許可されます。ただし、ソース抽出のフィールドは、ディメンションのマッピング・ページの「属性」列にマップできます。つまり、LOOKUP ディメンションの場合のように「属性」列にはマッピングを適用できませんが、この方法は、属性にさらなるマッピングの必要がなく、他のフィールドのマッピングを導出するためにのみ使用される場合に役立ちます。

ディメンション・クラスまたはディメンション・タイプのアプリケーションを登録するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「ディメンション」を選択します。

Create Application
×

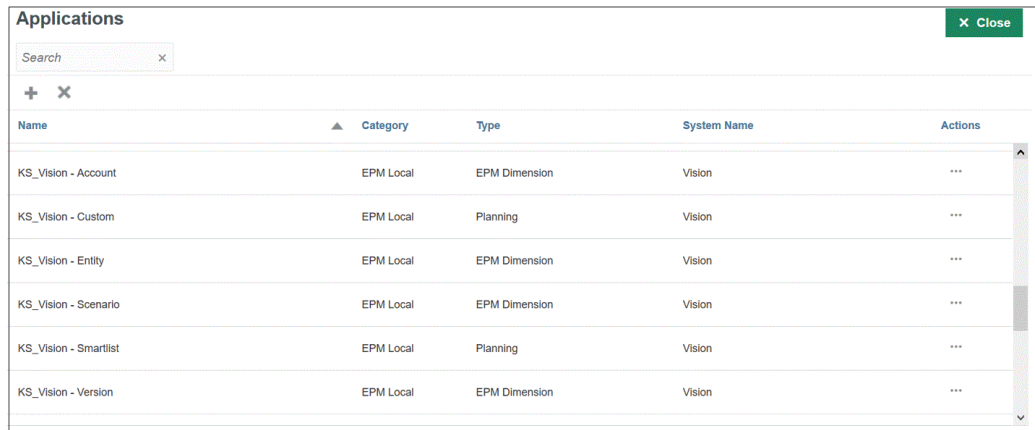
Category

Application

Prefix

4. 「アプリケーション」から、プライマリ・サービス・アプリケーションのアプリケーションを選択します。
5. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
6. 「OK」をクリックします。

次の例では、KS_Vision アプリケーションのアプリケーション(KS_Vision - Account、KS_Vision - Custom、KS_Vision - Entity、KS_Vision - Scenario、KS_Vision - Smartlist および KS_Vision - Version)が自動的に作成されています。



Name	Category	Type	System Name	Actions
KS_Vision - Account	EPM Local	EPM Dimension	Vision	...
KS_Vision - Custom	EPM Local	Planning	Vision	...
KS_Vision - Entity	EPM Local	EPM Dimension	Vision	...
KS_Vision - Scenario	EPM Local	EPM Dimension	Vision	...
KS_Vision - Smartlist	EPM Local	Planning	Vision	...
KS_Vision - Version	EPM Local	EPM Dimension	Vision	...

データ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの登録

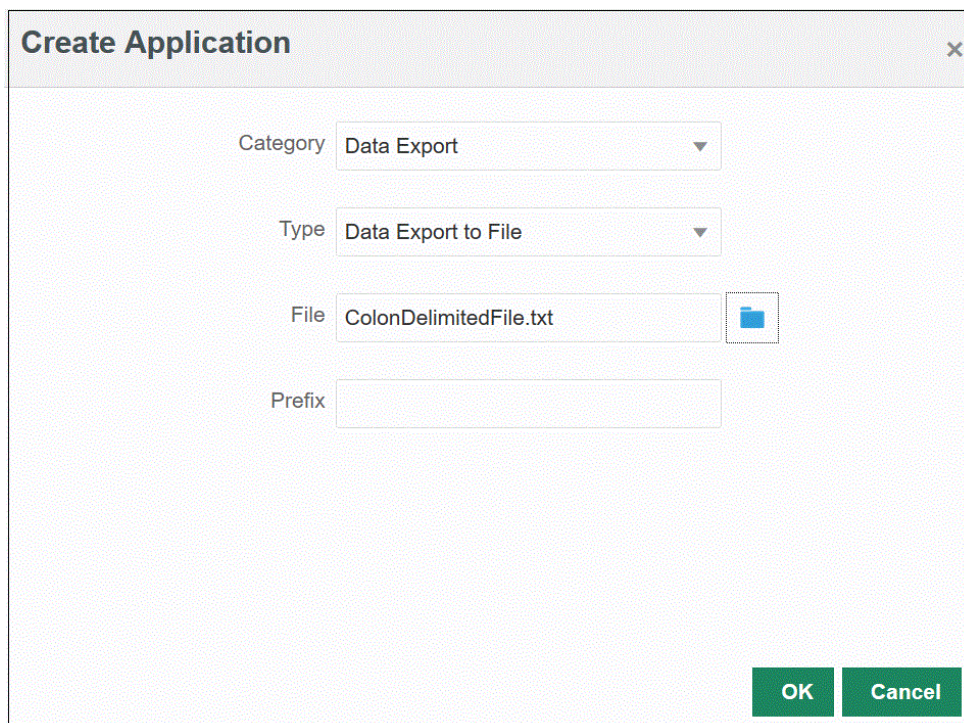
Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータをエクスポートする必要がある場合、データ・エクスポート・ファイルのアプリケーションを作成します。


ノート:

オンプレミス・データベースへのデータ・エクスポート・アプリケーション・タイプの詳細は、[オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

データ・エクスポート・ファイルのアプリケーションを登録するには:

1. **データ統合**ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. **アプリケーションの作成**ページで、「**カテゴリ**」から「**データ・エクスポート**」を選択します。



4. 「タイプ」から、**ファイルへのデータ・エクスポート**を選択します。
5. 「ファイル」から、アプリケーションの作成元のソース・ファイルの名前を選択します。
 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索することもできます。
6. **オプション: 「接頭辞」**で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はファイル名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
7. 「OK」をクリックします。

クイック・モード統合用のデータ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの登録

クイック・モード統合でデータが書き込まれるデータ・エクスポート・ファイル・アプリケーションを作成して登録できます。


ノート:

クイック・モードの詳細は、[データをエクスポートするためのクイック・モード](#)を参照してください

 **ノート:**

オンプレミス・データベースへのデータ・エクスポート・アプリケーション・タイプの詳細は、[オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの登録](#)を参照してください。


クイック・モード統合で使用するデータ・エクスポート・ファイル・アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. **アプリケーションの作成** ページで、「**カテゴリ**」から「**データ・エクスポート**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、登録するデータ・エクスポート・ファイルのタイプを選択します。

データ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの使用可能なタイプ:

- ファイルへのデータ・エクスポート
- オンプレミス・データベースへのデータ・エクスポート
- Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート
- EPM データ・ファイル

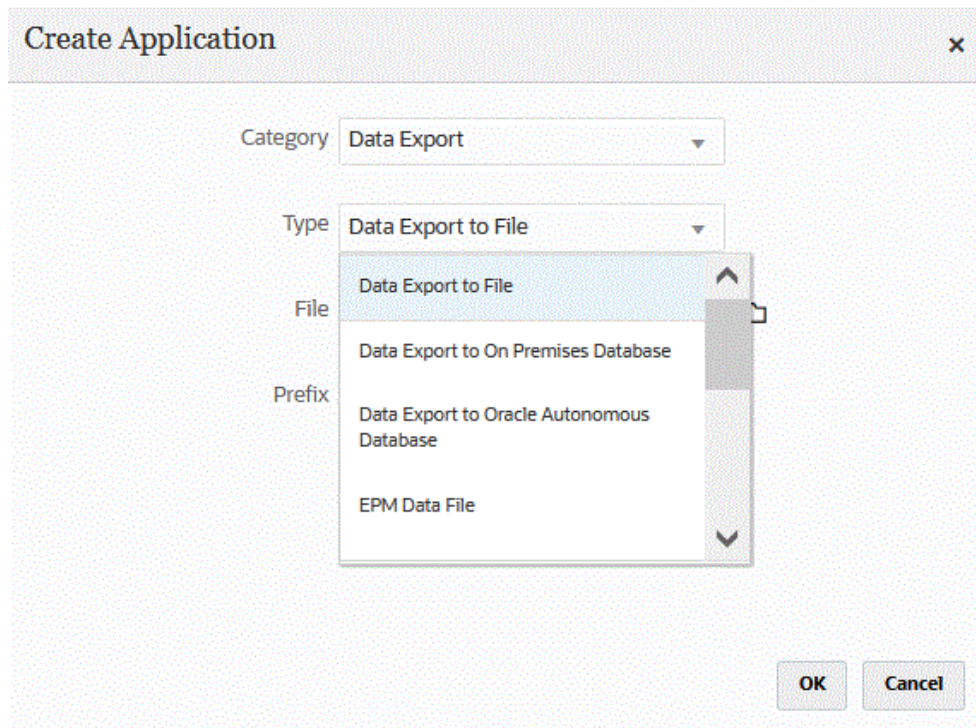
5. 「**ファイル**」から、アプリケーションの作成元のソース・ファイルの名前を選択します。

 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。

EPM データ・ファイル・タイプではファイルは選択できません。

6. **オプション: 「接頭辞**」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はファイル名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。



7. 「OK」をクリックします。

アプリケーション詳細

アプリケーション詳細ページを使用して、アプリケーションに関連付けられている詳細を表示、編集または選択します。

アプリケーション詳細には次のものがあります:

- ディメンション—選択したアプリケーションのディメンションをリストします。選択したアプリケーション・タイプに対して、必要に応じてディメンションを再分類し、ディメンション・クラスを変更できます。

詳細は、[アプリケーションのディメンションの詳細の定義](#)を参照してください。

- オプション—ロード方法、日付フォーマット、バッチ、ページ・オプションなど、日付のロード方法をサポートするオプションを選択できます。

[アプリケーション詳細オプションの定義](#)。


アプリケーションのディメンションの詳細の定義

アプリケーション・ディメンション・ページには、選択したアプリケーションのディメンションがリストされます。ディメンションは、ユーザーが業務上の質問に回答できるようにするためにデータを分類する構造です。通常、それぞれのディメンションには関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。よく使用されるディメンションは、顧客、製品および時間です。

たとえば、**Planning** には、7つの標準ディメンション(勘定科目、エンティティ、シナリオ、バージョン、期間、年、通貨)があります。さらに、汎用 **Planning** アプリケーションには、最大 25 個のカスタム・ディメンションを含めることができます。

ディメンションの詳細は、アプリケーション・タイプごとに異なります。選択したアプリケーション・タイプに対して、必要に応じてディメンションを再分類し、ディメンション・クラスを変更できます。


ディメンションの詳細を定義するには:

1. **アプリケーション** ページで、アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
2. 「**ディメンション**」タブを選択します。
3. 「**ドリル領域の作成**」オプションを選択して、ドリル領域のデータ・スライス定義にディメンションを含めます。データ・ロード・プロセス中にディメンションを選択すると、ディメンションごとに一意の値リストを含めることによって、データ・スライスが作成されます。

ノート:

ドリル領域では、単に、データ・フォームおよび SmartView でドリル・アイコンが有効になるセルが定義されます。ドリル領域は最小限の一連のディメンションを使用して定義することをお勧めします。多数のディメンションをドリル領域に含めると、ドリル領域のサイズが大きくなり、フォームがレンダリングされるたびにシステム・リソースが消費されます。Planning アプリケーションについては、シナリオ、年、期間、バージョンなど、メンバー数が少ないディメンションを使用してドリル領域を定義します。Financial Consolidation and Close アプリケーションについては、データ・ソースのみをドリル領域の定義に使用します。

複数のディメンションを含む、より粒度の高いドリル領域を定義する場合は、Calculation Manager のドリル領域ページを使用して、領域の定義を編集します。「子孫(含む)」などのメンバー関数を使用して、個々のメンバーではなく、領域を定義できます。アクセスするには、「ナビゲート」、「ルール」の順に選択します。次に、「データベース・プロパティ」をクリックし、アプリケーションを展開して、キューブを選択します。右クリックし、「ドリル・スルー定義」を選択します。「領域」定義のみを編集し、XML コンテンツは変更しないでください。ドリル領域を手動で編集する場合は、「アプリケーション・オプション」で「ドリル領域」オプションを「いいえ」に設定します。

4. アプリケーションで定義されていないそれぞれのディメンション名について、「**追加**」() をクリックし、「**ターゲット・ディメンション・クラス**」ドロップダウンからターゲット・ディメンション・クラス名を選択します。
ディメンション・クラスは、ディメンション・タイプによって定義されるプロパティです。たとえば、期間(Period)ディメンションがある場合、そのディメンションのクラスも Period となります。Oracle Essbase アプリケーションの場合は、勘定科目、シナリオおよび期間の各ディメンションに対して適切なディメンション・クラスを指定する必要があります。Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションの場合は、従業員、職階、ジョブ・コード、予算アイテムおよび要素の各ディメンションに対してディメンション・クラスを指定する必要があります。
5. 「**データ表列名**」には、ディメンション値が格納されるステージング表(TDATASEG)の列の表列名が表示されます。
「データ表列名」は情報フィールドであり、変更できません。
6. 「**マッピング・シーケンス**」で、マップが処理される順序を指定します。

たとえば、「勘定科目」が**1**、「製品」が**2**、「エンティティ」が**3**に設定されているとき、データ統合では、まず「勘定科目」ディメンションのマッピングが処理された後、「製品」、「エンティティ」の順に処理されます。

7. **データ・エクスポート・アプリケーションのみ: 「シーケンスの表示」**で、データ・エクスポート・ファイル内の各列の順序を指定します。

たとえば、「勘定科目」が**1**、「製品」が**2**、「エンティティ」が**3**に設定されているとき、データ統合では、「勘定科目」が最初に表示され、「製品」が2番目に表示され、「エンティティ」が3番目に表示されます。

データ統合では、順序の最初の列として「勘定科目」ディメンションがデフォルトで割り当てられます。

8. **「保存」**をクリックします。

アプリケーションがデータ統合で使用できるようになります。

Application Details: AEPBCS-EPBCS				
Dimensions		Options		
Dimension Name	Create Drill Region	Target Dimension Class	Data Table Column Name	Mapping Sequence
Account	<input type="checkbox"/>	Account	ACCOUNT	
Currency	<input type="checkbox"/>	Currency		
Entity	<input type="checkbox"/>	Entity	ENTITY	
Period	<input type="checkbox"/>	Period		
Scenario	<input type="checkbox"/>	Scenario		
Version	<input type="checkbox"/>	Version	UD3	
Years	<input type="checkbox"/>	Year		
	<input type="checkbox"/>	LOOKUP		
	<input type="checkbox"/>	LOOKUP		

💡 ヒント:

ディメンションの詳細を編集するには、アプリケーションを選択し、必要に応じてアプリケーションまたはディメンションの詳細を編集します。

参照ディメンションの追加

参照ディメンションは、ターゲット・アプリケーションに対して作成し、データ列を割り当てることができます。マッピングおよび参照に使用されます。

ターゲット・アプリケーション内に対応するディメンションを持たない参照ディメンションをデータ統合で追加できます。このようなタイプのディメンションは、別の列を変換する方法を決定するコンテンツを追加する必要がある場合に便利です。メンバー・マッピング機能とともに使用して、複数のソース・セグメントやチャートフィールドをクロス参照し、ターゲット値を割り当てることができます。

参照ディメンションを追加するには:

1. **アプリケーション**・ページから、Oracle Hyperion Workforce Planning アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。

2. 「**ディメンション**」タブを選択します。
3. 「**追加**」(+)をクリックし、「**ターゲット・ディメンション・クラス**」ドロップダウンからターゲット・ディメンション・クラス名を選択します。
「**参照**」ディメンション・エントリが「**ターゲット・ディメンション・クラス**」ドロップダウンに追加されます。
4. 「**ディメンション名**」に参照ディメンションの名前を入力して、「**保存**」をクリックします。

参照ディメンションが、ターゲット・ディメンション・クラス名「参照」で、ディメンション詳細リストに追加されます。参照ディメンションをソース・ディメンションとして使用するには、参照ディメンションをインポート・フォーマットでマッピングします。

Application Details: SUIDEFile				
Dimensions		Options		
Dimension Name	Target Dimension Class	Data Table Column Name	Mapping Sequence	
Account	Generic	ACCOUNT		
Company	Generic	ENTITY		
Period	Period			
Product	Generic	UD2		
ICP/Custom dimension	LOOKUP	ICP		


アプリケーション詳細オプションの定義

ソース・アプリケーションをターゲット・アプリケーションに統合するとき、ロード方法、日付フォーマット、バッチ、ページ・オプションを含めて、日付をロードする方法をサポートするオプションを選択できます。

ノート:



Oracle ERP Cloud データ・ソースのアプリケーション詳細の詳細は、[Oracle ERP Cloud データ・ソースのアプリケーション詳細の定義](#)を参照してください。

ターゲット・オプションを定義するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
3. 「**オプション**」タブを選択します。
4. オプションを選択し、必要なアクションを選択します。

オプション	説明
ロード方法	<p>データをターゲット・アプリケーションにロードするための方法を選択します。</p> <p>使用可能な方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 数値 - 数値データのみをロードします。この方法では、Planning データ・セキュリティは適用されません。 • ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型 - この方法では、データとドライバのディメンション、および Planning アプリケーションの一意識別子を定義する必要があります。下の「自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション」フィールドと「自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション」フィールドで、データ・ロードとドライバ・ディメンションを定義します。 <p>置換モードは、ロード方法「ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型」ではサポートされていません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • セキュリティ保護されたすべてのデータ型 - 数値、テキスト、スマートリスト、日付のデータ型をロードします。Planning 管理者がデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されません。Planning の管理者以外のユーザーがデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されます。Planning の管理者以外のユーザーがロードできるデータは、500,000 セルのみです。
バッチ・サイズ	<p>ファイルからメモリーに一度に読み込まれる行数を指定します。</p> <p>このパラメータは主にパフォーマンスのために使用されます。データがロードされる時、この設定により、キャッシュに格納されるレコード数が決まります。たとえば、1000 を指定すると、1,000 件のレコードがキャッシュに格納されます。同様に、5000 を指定すると、5,000 件のレコードがキャッシュに格納されてコミットされます。</p> <p>この設定をサーバー・メモリーによって決定し、必要に応じて調整します。</p>

オプション	説明
ドリル領域	<p>スライダをタップしてオンにし、ドリル領域を有効にします。</p> <p>このオプションが有効になっている場合、ドリル・スルー機能を使用するためのドリル可能領域が作成されます。</p> <p>データのロード時に、ドリル領域が Planning データにロードされます。</p> <p>シナリオごとのドリル領域が作成されます。どのキューブ(Planning キューブまたは Planning データベース)でも、ドリル領域の名前は、FDMEE_<シナリオ・メンバーの名前>になります。ドリル領域を作成する場合、ディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認されます。</p> <p>データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。</p>

オプション	説明
サマリーからのドリルを有効にします	<p>「はい」を選択すると、Planning データ・フォームまたはレポートでサマリー・メンバーからドリルダウンし、数字を構成する詳細ソース・データを表示できます。</p> <p>このオプションを有効にし、「ドリル領域の作成」オプションを「はい」に設定した状態でデータをロードすると、「ドリル」アイコンがサマリー・レベルで有効になります。1つのディメンションに対して、ドリルできる下位メンバーの数は 1000 に制限されています。</p>
	<p> ノート:</p> <p>サマリー・ドリルが有効な場合、ドリル領域定義で親メンバーからドリルするディメンションは含めないでください。このディメンションを含める必要がある場合、自動ドリル領域の作成を無効にし、Calculation Manager ユーザー・インタフェースを使用してドリル領域を手動で保持します。</p> <p>Descendants などの Essbase メンバー関数を使用して、ドリル領域に含めるメンバーを列挙します。</p> <p>サマリー・ドリルは、ローカル・サービス・インスタンスでのみ使用可能です。異なるサービス・インスタンス間またはハイブリッド・デプロイメントでは使用できません。</p>
	<p> ノート:</p> <p>サマリー・ドリルをサポートするには、ドリルの問合せで SQL の WHERE 句に演算子を含めないでください。たとえば、問合せを次のようにする必要があります: WHERE COMPANY ~ENTITY~。 子孫の数に基づいて、適切な条件 (IN、LIKE) が決定されます。</p>
データ・ファイルのページ	<p>ファイルベースのデータ・ロードが成功した場合、スライダをタップしてオンにし、データ・ファイルをアプリケーションの outbox ディレクトリから削除します。</p> <p>ファイルを削除する場合はスライダをタップしてオンにし、ファイルを保持する場合はスライダをタップしてオフにします。</p>

オプション	説明
日付データの日付フォーマット	<p>日付データのロードに使用するフォーマットを選択します。</p> <p>ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YYという形式を使用して日付を入力します。</p>
自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション	<p>Planning で指定したデータ・ディメンションに一致するデータ・ディメンションを選択します</p> <p>このオプションは、LINEITEM フラグを使用して増分データをロードする場合に使用します。LINEITEM フラグを使用した増分データのロードを参照してください。</p>
自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション	<p>Planning で指定したドライバ・ディメンションに一致するドライバ・ディメンションを選択します</p> <p>この設定は、LINEITEM フラグを使用して増分データをロードする場合に使用します。LINEITEM フラグを使用した増分データのロードを参照してください。</p>
メンバー名にはカンマを使用できません	<p>メンバー名にカンマが含まれており、次のいずれかのサービスにデータをロードしている場合は、このオプションを「はい」に設定してデータをロードします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Planning モジュール • Planning • Financial Consolidation and Close • Tax Reporting

オプション	説明
ワークフロー・モード	<p>データ・ワークフロー・メソッドを選択します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> <p>• 完全 — データは TDATASEG_T 表で処理されてから、TDATASEG 表にコピーされます。</p> <p>4つのワークベンチ・プロセスがすべてサポートされています(インポート、検証、エクスポートおよび確認)。データはワークベンチに表示できます。</p> <p>ドリルダウンがサポートされています。</p> <p>「完全」ワークフロー・モードがデフォルト・モードです。</p> <p>• 完全、アーカイブなし — データは TDATASEG_T 表で処理されてから、TDATASEG 表にコピーされます。</p> <p>4つのワークベンチ・プロセス(インポート、検証、エクスポートおよび確認)がすべてサポートされています。データはワークベンチに表示できますが、表示できるのはインポート・ステップが完了した後のみです。データはワークフロー・プロセスの終了時に TDATASEG から削除されます。</p> <p>ドリルダウンはサポートされていません。</p> <p>• 単純 — データは TDATASEG_T で処理された後、TDATASEG_T 表から直接エクスポートされます。</p> <p>すべてのデータ・ロードに、インポートとエクスポート両方のステップが含まれます。</p> <p>データは検証されず、マップされていないデータはロード失敗の原因となります。</p> <p>マップは TDATAMAPSEG にアーカイブされません。</p> <p>データはワークベンチに表示できません。</p> <p>ドリルダウンはサポートされていません。</p>

オプション	説明
管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする	<p>管理ユーザーがデータをロードする際に、データ検証を有効にします。この場合、データのロード中にデータ入力フォーム内のすべてのデータ検証が実施されます。強化された検証のために、データ・ロードのパフォーマンスは低下します。</p> <p>「管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする」が「いいえ」(デフォルト値)に設定されていると、管理者によるデータ・ロードはアウトライン・ロード・ユーティリティ(OLU)を使用して実行されます。この場合、パフォーマンスは向上しますが、なんらかの理由で無視された行の詳細なエラー・レポートは取得できません。</p> <p>このオプションが「はい」に設定されると、管理者および非管理者のデータ・ロードに対して同じ方法でデータが検証されます。検証には、セキュリティ・チェック、交差検証、読取り専用セル、動的計算セルなどが含まれます。</p> <p>また、拒否または無視された行の詳細なエラー・リストを使用でき、追加の Planning 権限は必要ありません。ただし、管理者の場合であってもパフォーマンスが低下することがあります。</p>
検証失敗の理由を表示	<p>データ検証レポートで、データをロードする際に拒否されたデータ・セルおよび拒否理由をレポートできるようにします。</p> <p>拒否されたデータ・セルおよび拒否理由をレポートするには、「はい」を選択します。</p> <p>レポートされる拒否数の制限は 100 です。</p> <p>データ検証レポートは、プロセスの詳細ページから、「出力」リンクをクリックしてダウンロードできます。また、エラー・ファイルのコピーが Outbox フォルダに格納されます。</p> <p>拒否されたデータ・セルおよび拒否理由をレポートしない場合は、「いいえ」を選択します。</p>

オプション	説明
Smart View からのビューのドリル	<p>Oracle Smart View for Office のドリルスルー・レポートでカスタマイズされた属性ディメンション・メンバー名を表示するときに、ワークベンチから列のカスタム・ビューを指定します。</p> <p>カスタム・ビューは、データ統合のワークベンチ・オプションで作成および定義します。カスタム・ビューが定義され、Smart View からのビューのドリル・フィールドで指定されている場合、Smart View でドリルスルー・セルをクリックして「新規シートとして開く」を選択すると、ワークベンチで定義されているビューに基づいてドリルスルー・レポートが開きます。</p> <p>アプリケーション・オプション・ページでビューが定義されていない場合は、デフォルト・ビューが使用されます。つまり、属性ディメンションではカスタマイズされたメンバー名が Smart View に表示されません。</p> <p>詳細は、次を参照してください ワークベンチのカスタム・ビューの定義</p>
非管理者用ロード方法の場合は「置換」	<p>管理者以外のユーザーが Planning アプリケーションにデータをロードするときの置換方法を選択します。</p> <p>使用可能な方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし - 置換を実行しません。 • 数値データのみ - ロード方法が数値データの場合に置換を実行します。 • すべてのロード方法 - すべてのロード方法について置換を実行します。
子孫が 1000 を超える場合のサマリー・ドリル動作	<p>子孫が 1,000 を超える場合にサマリー・ドリルがどのように機能するかを選択します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 無視 • 制限 <p>サマリー・ドリルの子孫数が 1,000 を超え、「子孫が 1000 を超える場合のサマリー・ドリル動作」オプションが「無視」の場合、システムはフィルタのディメンションを無視し、他のディメンションのフィルタに基づいてドリルされたデータを返します。最大 3 つのディメンションを無視できます。</p> <p>サマリー・ドリルの子孫数が 1,000 を超え、「子孫が 1000 を超える場合のサマリー・ドリル動作」オプションが「制限」の場合、システムはデータ行を返すときにディメンションの最初の 1,000 メンバーのみを考慮しません。</p>

5. 「保存」をクリックします。

Oracle ERP Cloud データ・ソースのアプリケーション詳細の定義

Oracle ERP Cloud データ・ソース・アプリケーションを登録した後、アプリケーションに関連付けられている選択した詳細を管理できます。

Oracle ERP Cloud のアプリケーション詳細を定義するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、Oracle ERP Cloud データ・ソース・アプリケーションの右側にある  をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
3. アプリケーション詳細ページから、「オプション」タブをクリックします。
4. アプリケーションの変更する設定を選択し、「保存」をクリックします。

Oracle ERP Cloud のアプリケーション詳細	説明
期間トークンを大文字に変換	結果の期間名が Jan や Feb のように大/小文字混在の場合、\$START_PERIODKEY\$などのレポートの期間トークンを大文字に変換できます。この設定を有効にすると、大/小文字混在の期間が JAN や FEB のように大文字のみに変換されます。 期間トークンの変換を有効にする場合は、「Y」を選択します。 期間トークンを有効にしない場合は、「N」を選択します。
通知タイプ	Oracle Business Intelligence Publisher レポートが Oracle ERP Cloud で実行されたときに送信する通知のタイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • 電子メール通知 • ベル通知 • 電子メールおよびベル通知
通知イベント	BI Publisher レポートが Oracle ERP Cloud で実行されたときに通知の送信をトリガーするイベントを選択します: <ul style="list-style-type: none"> • 常時 • 成功時 • 失敗時
COA アプリケーション名	統合に使用する勘定体系アプリケーション名を Oracle ERP Cloud から選択します。
セグメント名	統合に使用するセグメント名をセグメント・グループから選択します。
階層最上位名	統合に使用するソース・ビューポイントの一部をフィルタするために使用される階層最上位ノードを選択します。

オプションの編集

ユーザーが統合オプションを選択したときにデータ・ソース・アプリケーションまたはファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションに関連付けられるアプリケーション・フ

フィルタを追加および編集できます。フィルタ条件は1つのみでも、複数でも指定でき、さらに戻す値も厳密に指定できます。

次の例では、フィルタ入力条件がオプションの編集ページで「事業部門」、「元帳」、「年」および「期間」について定義されています。

Edit Options: Peoplesoft GL Balance						
Name	Display Prompt	Display Order	Display Level	Validation Type	Validation Object	Condition Li
BU	Business Unit	110	▼	None		
LEDGER	Ledger	120	▼	None		
YEAR	Fiscal Year	130	▼	None		
PERIOD	Period	140	▼	None		
DELIMITER	Delimiter	20	Application ▼	Lookup Validate ▼	COLUMN_DE...	
CREDSTORE	Credential Store	22	Application ▼	Lookup No Validate ▼	ONPREMDB_...	
JDBC_DRIVER	JDBC Driver	24	Application ▼	Lookup No Validate ▼	JDBC_DRIVER ▼	
JDBC_URL	JDBC URL	26	Application ▼	None		
DB_USER	Username	28	Application ▼	None		

次に、フィルタがデータ・ソース・アプリケーションについてどのように定義されているかを示します：

Edit Options: Peoplesoft GL Balance						
Name	Display Prompt	Display Order	Display Level	Validation Type	Validation Object	Condition Li
BU	Business Unit	110	▼	None		
LEDGER	Ledger	120	▼	None		
YEAR	Fiscal Year	130	▼	None		
PERIOD	Period	140	▼	None		
DELIMITER	Delimiter	20	Application ▼	Lookup Validate ▼	COLUMN_DE...	
CREDSTORE	Credential Store	22	Application ▼	Lookup No Validate ▼	ONPREMDB_...	
JDBC_DRIVER	JDBC Driver	24	Application ▼	Lookup No Validate ▼	JDBC_DRIVER ▼	
JDBC_URL	JDBC URL	26	Application ▼	None		
DB_USER	Username	28	Application ▼	None		

アプリケーション・フィルタがデータ値について明示的に定義されることもあります。たとえば、Oracle Human Capital Management Cloud データ・ソースを操作する場合、Oracle HCM Cloud との事前定義された統合を使用する場合はフィルタ定義を変更しないことをお勧めします。

データ・ソース・アプリケーションまたはファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションのフィルタを定義するには：

1. **アプリケーション**・ページで、データ・ソース・アプリケーションまたはファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「**オプションの編集**」を選択します。
2. 「**オプションの編集**」で、「**追加**」(+)をクリックします
空白のエントリ行が表示されます。

3. 「名前」で、ユーザー・インタフェースにおける表示プロンプトの名前を指定します。

 ノート:

Oracle E-Business Suite、Peoplesoft またはカスタムのインポート・データベース・ソース・アプリケーションを登録すると、即時利用可能な設定によって、「期間」のフィルタが表示名「期間」として自動的に追加されます。この場合、エラー EPMAT-1:EPMFDM-ERROR: 'periodName'パラメータ・フォーマットが無効ですがスローされます。対処方法として、アプリケーションを選択し、オプションの編集ページで「期間」の表示名を別の名前に変更します。さらに、新しい名前を EPM 自動化コマンドで使用して、フィルタとして渡すことができます。

4. 「表示順」で、「アプリケーション・フィルタ」タブのフィルタの表示順を指定します。このフィールドが空白の場合、カスタム・フィルタを表示できず、デフォルト値がフィルタ値として使用されます。

たとえば、フィルタ・リストの 99 番目にフィルタを表示するには 99 と入力します。表示順は低い順にリストされます。


5. 「プロパティ・レベル」で、フィルタを表示する場所を選択します。使用可能なオプションは次のとおりです:

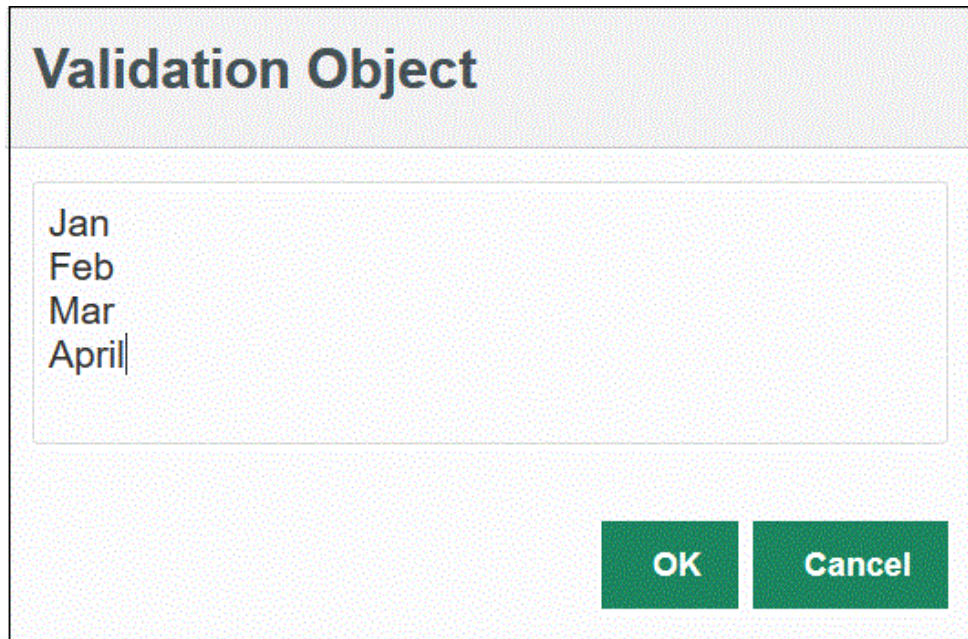
- アプリケーションのみ
- アプリケーションおよび統合
- 統合のみ

6. 参照タイプを使用してリストされる値のドロップダウンを提供するには、「検証タイプ」で次のいずれかを選択します:

- なし
- 数値
- 参照の検証
- 参照の検証なし
- はいいいえ
- 日付
- 問合せ
- 選択リスト - 「検証オブジェクト」フィールドに値リストを入力できます。それぞれの値を新しい行に入力します。オプション・ページの値リスト(LOV)には、値がリストとして表示されます。

7. 「検証オブジェクト」に、タイプによって検証される参照オブジェクトのリストを入力します。

前の手順で**選択リスト**検証タイプを選択した場合に値リストを入力するには、 をクリックし、検証オブジェクト・ページで値リストを入力して、「OK」をクリックします。



8. 「条件リスト」で、次のいずれかまたはすべてに基づいて条件リストを提供します:

- EQ (等しい)
- 含む
- 類似

条件値としては「等しい」、「類似」または「含む」が可能です。条件値はドロップダウン・リストとして `CONDITION_LIST` フィールドに格納されます。値が `EQ`, `IN` の場合、「条件」ドロップダウンには `Equal` と `In` のみが表示されます。値が `EQ LIKE` の場合、ドロップダウンには `Equal`, `Like` のみが表示されます。`EQ`, `IN`, `LIKE` の任意の組合せがフィールドに格納されます。1つのみの値が条件リストで提供される場合、条件は変更できません。デフォルト値は `EQ` です。複数の条件を指定する場合は、条件の前にカンマを付けてください。たとえば、`IN` 条件と `LIKE` 条件を使用するには、`,IN,LIKE` を入力します

9. 「保存」をクリックします。

デフォルト・オプションの設定

「デフォルトの設定」オプションを使用して、統合オプション・ページでアプリケーション・フィルタとして使用するデフォルト値を定義します。

次の例では、「デフォルトの設定」オプションを使用して、`QECustomAgent_2` アプリケーションの「ロケーション」、「カテゴリ」および「期間」フィルタについてデフォルト値が定義されています。

Set Defaults: QECustomAgent_2 Save < Return

Property Name	Property Value
Location	FiletoDEFile
Category	OEP_ACTUAL
Period	Apr-0

ユーザーが QECustomAgent_2 に基づく統合を選択すると、「ロケーション」、「カテゴリ」および「期間」フィルタについてデフォルト値が表示されます。

The screenshot shows the 'Edit Integration: dmtestapp' window. It has a title bar with 'Back', 'Save And Continue', 'Save', and 'Cancel' buttons. Below the title bar, there are two tabs: 'Filters' (selected) and 'Options'. The main content area is a table with the following data:

Name	Condition	Value
Location		FiletoDEFile
Category		OEP_ACTUAL
Period		Apr-0

デフォルト・オプションを設定するには:

1. **アプリケーション・ページ**で、**データ・ソース・アプリケーション**または**ファイル**へのデータ・エクスポート・アプリケーションの右側にある ******* をクリックし、「**デフォルトの設定**」を選択します。
2. 「**デフォルトの設定**」から、「**プロパティ名**」に移動し、「**プロパティ値**」を指定します。たとえば、プロパティ名「**期間**」について、プロパティ値として「**Jan-10**」を指定します。
プロパティに下矢印ボタンがある場合は、デフォルト値として使用する値を値リストから選択できます。

The screenshot shows the 'Set Defaults: SUANTEST_ONPremDB' window. It has a title bar with 'Save' and '< Return' buttons. Below the title bar, there are two columns: 'Property Name' and 'Property Value'. The 'Category' property is selected, and its dropdown menu is open, showing the following options:

Property Name	Property Value
Location	
Period	Jan
Category	Actual
	Actual
	Budget
	Collect
	Distribute

3. 「**保存**」をクリックします。

6

ソース接続の構成

接続の構成を使用して、次のソースへの直接接続情報を登録、管理および削除します:



- [Oracle ERP Cloud 接続の構成](#)
- [Oracle HCM Cloud 接続の構成](#)
- [NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成](#)

Oracle ERP Cloud 接続の構成

Oracle ERP Cloud ソース接続を使用して、次のデータ・ソースを登録および管理できます:

- Oracle ERP Cloud
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表平均)
- Oracle ERP Cloud (カスタム)
- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表)
- プロジェクト管理
- Budgetary Control の契約、債務、支出およびデータ・ソースのライトバック。予算レビューのデータ・ソース

Oracle ERP Cloud 接続を作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。
3. **接続**ページで、 (「追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「**Oracle ERP Cloud**」を選択します。



4. 「名前」に、ソース・システム名を入力します。
5. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
6. サービス URL に、Web サービスのサービス情報を入力します。
7. 「ユーザー名」に、Oracle ERP Cloud のユーザー名を入力します。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud と Oracle ERP Cloud の間で情報を送信するためのプロセス要求を開始する Oracle ERP Cloud ユーザーの名前を入力します。このユーザーには、"Financial Analyst"、"General Accountant"、"General Accounting Manager"などの Oracle General Ledger のジョブ役割が割り当てられている必要があります。



8. 「パスワード」に、Oracle ERP Cloud のパスワードを入力します。
このパスワードは、Oracle ERP Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。
9. 「接続のテスト」をクリックします。
接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。
10. 「OK」をクリックします。

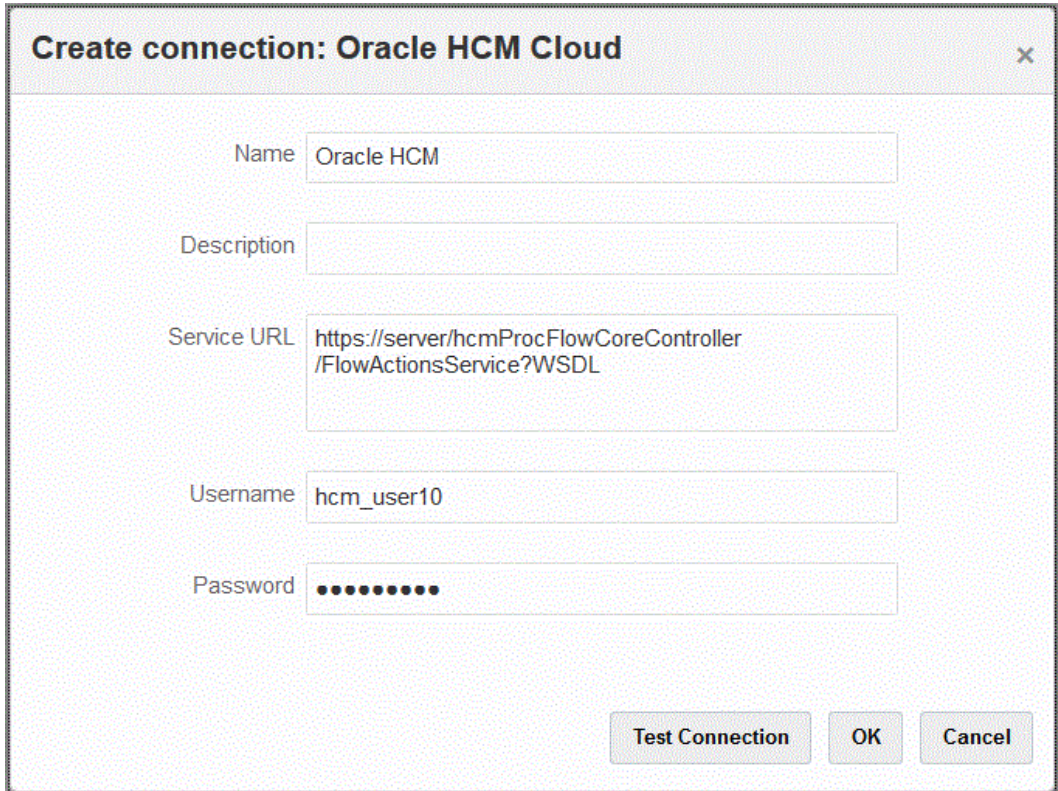
Oracle HCM Cloud 接続の構成

Oracle Human Capital Management Cloud と Planning モジュールの要員ビジネス・プロセスまたは Strategic Workforce Planning との統合を開始するには、最初にソース・システムを「Oracle HCM Cloud」タイプで作成して登録します。

ソース・システムと接続情報を指定した後、ソース・システムを初期化します。このプロセスで、各 Oracle HCM Cloud 抽出に対するターゲット・アプリケーションが作成されます。

Oracle HCM Cloud 接続を構成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。
3. 接続ページで、 (「追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「Oracle HCM Cloud」を選択します。



The image shows a dialog box titled "Create connection: Oracle HCM Cloud" with a close button (X) in the top right corner. The dialog contains several input fields and three buttons at the bottom right.

- Name:** Oracle HCM
- Description:** (empty field)
- Service URL:** https://server/hcmProcFlowCoreController/FlowActionsService?WSDL
- Username:** hcm_user10
- Password:** (masked with 10 dots)

Buttons at the bottom right: Test Connection, OK, Cancel.

4. 「名前」に、ソース・システム名を入力します。
5. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
6. サービス URL に、Web サービスのサービス情報を入力します。
7. 「ユーザー名」に、Oracle HCM Cloud のユーザー名を入力します。
8. 「パスワード」に、Oracle HCM Cloud のパスワードを入力します。

このパスワードは、Oracle HCM Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。

9. 「接続のテスト」をクリックします。

接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。

10. 「OK」をクリックします。

Oracle NetSuite 接続の構成

Oracle NetSuite 接続の構成の詳細は、次を参照してください:

- [NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成](#).
- [NetSuite に対するトークンベースの認証用の Oracle EPM Connector SuiteApp の構成](#)

期間マッピングの管理

Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションでは、アプリケーションの要件(異なるレベルの期間など)に応じて異なるカレンダー(月、週または日など)を使用することもできます。データ統合では ERP ソース・システムのデータがターゲットの EPM Cloud アプリケーションへ抽出されるため、ソース・システムの期間とターゲットである EPM Cloud アプリケーションの期間の間の期間マッピングを定義することにより、マッピング関係を確立します。

データ統合は、2つのタイプの期間処理をサポートします:

1. デフォルトの期間処理
2. 明示期間処理

ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションで一貫した期間定義および期間命名を使用する場合は、デフォルトの期間処理を使用します。つまり、統合では、データ統合で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、統合の実行時、各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。たとえば、両方のシステムで月次カレンダー使用され、Jan-20 のような期間の名前が両方のシステムで一致する場合、統合ではデフォルトの期間マッピング・タイプを使用します。追加のマッピングは必要ありません。

ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションで期間定義または期間命名規則が異なる場合は、明示期間処理を使用します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の Oracle General Ledger データ・ソースをサポートすることもできます。明示マッピングは、ソース・システム・オプションのカレンダー期間を使用して設定されます。「カレンダー」ドロップダウンから、統合に使用する実際のカレンダーを選択します。

この場合、アプリケーション期間とソース期間のマッピングを定義する必要があります。

次の 3 つの方法で期間マッピングを定義できます:

- **グローバル・マッピング** - 様々なタイプのソース・カレンダーのある複数のソース・システムからデータを取得するターゲット・アプリケーションが多くない場合は、グローバル・マッピングを定義します。グローバル・マッピングを使用すると、個々のマッピングにおいて、様々な期間を使用できます。最初のステップとして、グローバル・マッピングを定義します。
- **アプリケーション・マッピング** - 複雑な期間のタイプがある様々なソース・システムからデータを取得しているターゲット・アプリケーションが多数存在する場合は、グローバル・マッピングの他にアプリケーション・マッピングを作成できます。アプリケーション・マッピングを定義すると、ターゲット期間の月を必要に応じて変更できます
- **ソース・マッピング** - ファイルおよびアダプタに基づく統合のソース期間マッピングを指定します。

グローバル・マッピング - サンプル月期間マッピング

次の表に、ソースの 1 か月ごとのカレンダーと、ターゲット・アプリケーションの月ごとの期間とのマッピングを示します。

 ノート:

グローバル・マッピングは、最も小さな粒度で定義する必要があります。たとえば、1か月ごとのカレンダーと1週間ごとのカレンダーがある場合は、最も小さい粒度レベルでグローバル・マッピングを定義します。この場合、期間キーは週レベルとなり、週を月にマッピングすることになります。粒度レベルがより大きな期間に対してはアプリケーション・マッピングを作成できません。

表 7-1 サンプル月期間マッピング

期間キー	前期間キー	期間名	ターゲット 期間の月	ターゲット 期間の四半 期	ターゲット 期間の年	ターゲット 期間の日	ターゲット 年度
Jan 1 2021	Dec 1 2020	2021 年 1 月 1 日	1 月	Q1			FY21
Feb 1 2021	Jan 1 2021	2021 年 2 月 1 日	2 月	Q1			FY21
Mar 1 2021	Feb 1 2021	2021 年 3 月 1 日	3 月	Q1			FY21
April 1 2021	March 1 2021	2021 年 4 月 1 日	4 月	Q2			FY21
May 1 2021	April 1 2021	2021 年 5 月 1 日	5 月	Q2			FY21

グローバル・マッピング - サンプル週期間マッピング

次の表に、Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムの週次カレンダーが EPM Cloud アプリケーションの月次の期間にマッピングされる方法を示します。

表 7-2 サンプル週期間マッピング

期間キー	前期間キー	期間名	ターゲット 期間の月	ターゲット 期間の四半 期	ターゲット 期間の年	ターゲット 期間の日	ターゲット 年度
Jan 26 2020	Jan 19 2020	2021 年 1 月 26 日	1 月	Q1			FY20
Feb 2 2020	Jan 26 2020	2021 年 2 月 2 日	2 月	Q1			FY20
Feb 9 2020	Feb 2 2020	2021 年 2 月 9 日	2 月	Q1			FY20
Feb 16 2020	Feb 9 2020	2021 年 2 月 16 日	2 月	Q1			FY20

アプリケーション・マッピング - 1か月ごとのカレンダー・ソースをソースとするターゲット・アプリケーションの例

次の表に、1か月ごとのカレンダーをソースとするターゲット・アプリケーションの例を示します。このマッピングは、「アプリケーション・マッピング」タブで実行します。

表 7-3 アプリケーション・マッピングの例 - 1 か月ごとのカレンダー・ソースを使用したターゲット・アプリケーション#1

期間キー	ターゲット期間 の月	ターゲット期間 の四半期	ターゲット期間 の年	ターゲット期間 の日	ターゲット年度
Jan 1 2020	1 月	Q1			FY20
Feb 1 2020	2 月	Q1			FY20
Mar 1 2020	3 月	Q1			FY20

アプリケーション・マッピング - 1 週間ごとのカレンダー・ソースをソースとするターゲット・アプリケーション#2 の例

次の表に、1 週間ごとのカレンダーから導出されるターゲット・アプリケーションの例を示します。このマッピングは、「アプリケーション・マッピング」タブで実行します。


表 7-4 アプリケーション・マッピングの例 - 1 週間ごとのカレンダー・ソースを使用したターゲット・アプリケーション#2

期間キー	ターゲット期間 の月	ターゲット期間 の四半期	ターゲット期間 の年	ターゲット期間 の日	ターゲット年度
Jan 26 2020	1 月	Q1			FY20
Feb 2 2020	2 月	Q1			FY20
Feb 9 2020	2 月	Q1			FY20
Feb 16 2020	2 月	Q1			FY20

グローバル・マッピング

1 つのグローバル・マッピングを定義して、個々のマッピングに対する様々な期間をマッピングできます。


グローバル・マッピングを定義するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「期間マッピング」を選択します。
2. 「グローバル・マッピング」タブを選択します。
3.  をクリックします。
4. 「期間キー」で、ソースからマップする、現在の会計年度の月の最終日を指定します。これは、試算表ロード・プロセス中にデータベースに格納され、試算表レコードのセットを識別するキーの一部となる日付値です。

MM/dd/yyyy 形式で日付を指定します。



をクリックし、日付を選択して、期間キーを選択することもできます。

 **ノート:**

統合では、データ統合で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、統合の実行時、各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。

5. 「**前期間キー**」で、(ゴーストを回避するために)先に**\$0.00**を入力する必要があるかどうかを判断するためにエクスポート中に使用される前会計期間キーを指定します(YTD 値が期別カテゴリにロードされた場合、入力する必要があります。)

前期間キーは、現在の期間キーのちょうど **1** か月前です。

MM/dd/yyyy 形式で日付を指定します。



をクリックし、日付を選択して、前期間キーを選択することもできます。

Period Mapping Save

Global Mapping Application Mapping Source Mapping

+ 食 ▼ ○ Actions ▼

Period Key	Prior Period Key	Period Name	Target Year	Target Period - Month	Target Period - Quarter	Target Period - Year	Target Period - Day
MM/dd/yyyy	MM/dd/yyyy						
01/31/2016	12/31/2015	Jan-16	FY16	Jan			
02/29/2016	01/31/2016	Feb-16	FY16	Feb			
03/31/2016	02/29/2016	Mar-16	FY16	Mar			
04/30/2016	03/31/2016	Apr-16	FY16	Apr			
05/31/2016	04/30/2016	May-16	FY16	May			
06/30/2016	05/31/2016	Jun-16	FY16	Jun			
07/31/2016	06/30/2016	Jul-16	FY16	Jul			
08/31/2016	07/31/2016	Aug-16	FY16	Aug			
09/30/2016	08/31/2016	Sep-16	FY16	Sep			
10/31/2016	09/30/2016	Oct-16	FY16	Oct			
11/30/2016	10/31/2016	Nov-16	FY16	Nov			
12/31/2016	11/30/2016	Dec-16	FY16	Dec			

6. 「**期間名**」で、期間の現在の会計期間キーを指定します。
7. 「**ターゲット年**」で、期間キーをマッピングするターゲット・アプリケーションの年の値を指定します。

期間キーをマッピングするターゲット・アプリケーションの年の値。

8. 次のターゲット期間で、データをロードするターゲット期間値を指定します。

ターゲット期間値のオプションには、次のものがあります:

- a. **ターゲット期間の月**; 8月など。
- b. **ターゲット期間の四半期**
- c. **ターゲット期間の年**
- d. **ターゲット期間の日**

ターゲット期間オプションでは、「カテゴリ・マッピング」で定義されている「頻度」の値を使用します。

統合を実行する際、システムでは、「カテゴリ・マッピング」の「頻度」の値を確認し、その値を使用して、ターゲット期間値の期間マッピングを問い合わせます。

たとえば、「カテゴリ・マッピング」で「頻度」の値として「月次」を選択した場合、システムではデータをロードする場所を決定する際に「ターゲット期間 - 月」に入力されている値を使用します。同様に、「頻度」の値として「四半期ごと」が


選択されている場合は、システムは「ターゲット期間 - 四半期」に入力されている値を使用します。

9. 「保存」をクリックします。

アプリケーション・マッピング

特定のターゲット・アプリケーションに対して特別な期間マッピングを定義する場合には、アプリケーション・マッピングを定義できます。ここで作成するマッピングは個別のターゲット・アプリケーションに適用されます。エクスポート・ターゲット・アプリケーションにアプリケーション・マッピングが選択されていない場合は、グローバル・マッピングで期間に対して定義されたグローバル・マッピングが使用されます。

アプリケーションに対して期間マッピングを作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「期間マッピング」を選択します。
2. 「アプリケーション・マッピング」タブを選択します。
3. 
をクリックします。
4. 「ターゲット・アプリケーション」で、アプリケーション期間マッピングを追加または変更するターゲット・アプリケーションを選択します。
5. 「期間キー」で、ソース・システムからマップする、現在の会計年度の月の最終日を指定します。

MM/dd/yyyy 形式で日付を指定します。



をクリックし、日付を選択して、期間キーを選択することもできます。

ノート:

統合では、データ統合で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、統合の実行時、各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。

6. 「前期間キー」で、ソース・システムからマップする、現在の会計の月の最終日の前日付を指定します。

MM/dd/yyyy 形式で日付を指定します。



をクリックし、日付を選択して、前期間キーを選択することもできます。

Period Mapping Save

Global Mapping Application Mapping Source Mapping

Target Application: OperationsAccountingFlex_2

Period Key	Prior Period Key	Period Name	Target Year	Target Period - Month	Target Period - Quarter	Target Period - Year	Target Period - Day
02/28/2017	01/31/2017	February 2017	2017	Feb-17			
03/31/2017	02/28/2017	March 2017	2017	Mar-17			
04/30/2017	03/31/2017	April 2017	2017	Apr-17			
05/31/2017	04/30/2017	May 2017	2017	May-17			
06/30/2017	05/31/2017	June 2017	2017	Jun-17			
07/31/2017	06/30/2017	July 2017	2017	Jul-17			
08/31/2017	07/31/2017	August 2017	2017	Aug-17			

7. 「ターゲット年」で、期間キーをマッピングするターゲット・アプリケーションの年の値を指定します。

期間キーをマッピングするターゲット・アプリケーションの年の値。

8. 次のターゲット期間で、データをロードするターゲット期間値を指定します。

ターゲット期間値のオプションには、次のものがあります:

- a. ターゲット期間の月; 8月など。
- b. ターゲット期間の四半期
- c. ターゲット期間の年
- d. ターゲット期間の日

ターゲット期間オプションでは、「カテゴリ・マッピング」で定義されている「頻度」の値を使用します。

統合を実行する際、システムでは、「カテゴリ・マッピング」の「頻度」の値を確認し、その値を使用して、ターゲット期間値の期間マッピングを問い合わせます。

たとえば、「カテゴリ・マッピング」で「頻度」の値として「月次」を選択した場合、システムではデータをロードする場所を決定する際に「ターゲット期間 - 月」に入力されている値を使用します。同様に、「頻度」の値として「四半期ごと」が選択されている場合は、システムは「ターゲット期間 - 四半期」に入力されている値を使用します。

9. 「保存」をクリックします。

ソース・マッピング

ソース・マッピングには、明示期間マッピングと調整期間マッピングがあります。明示期間マッピングを作成して、データ統合の期間がソース・システムのカレンダー期間に正しくマップされるようになります。調整期間マッピングは、統合を作成するときに「調整期間を含む」オプションを選択する場合にのみ使用されます。

ソース期間マッピングは、ソース・システム・タイプによって変わります。ソース・システム・タイプに基づくソース期間マッピングの詳細は、次を参照してください:

- [ファイル・ソース・タイプのソース・マッピング](#)
- [データ・ソースのソース・タイプのソース・マッピング](#)
- [Oracle EPM Cloud ソース・タイプのソース・マッピング](#)
- [Oracle ERP Cloud ソース・タイプのソース・マッピング](#)

- Oracle HCM Cloud ソース・タイプのソース・マッピング

ファイル・ソース・タイプのソース・マッピング

ファイルベースのソース・システムとターゲット・アプリケーションの間のソース期間マッピングを追加する必要がある場合は、ソース・マッピングをファイルベース統合に追加できます。


Period Mapping Save

Global Mapping Application Mapping Source Mapping

Source Type: File Source: File Calendar: 1

Calendar	Source Period	Source Period Year	Source Period Number	Target Period Key	Target Period Name	Description
1	Jan	2010	1	2020-01-31	Jan-20	File Jan 1 2010

ファイル・ソース・タイプのソース・マッピングを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**ソース・マッピング**」タブを選択します。
3. 「**ソース・タイプ**」から、「**ファイル**」を選択します。
4. 「**ソース**」で、ファイルの名前を選択します。
5. 「**カレンダー**」から、ソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。
6.  をクリックします。
7. 「**ソース期間**」に、ファイルベースのソース期間の日付値を入力します。
たとえば、「Jan-20」を選択します。

Note:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

8. 「**ソース期間の年**」に、ファイルベースのソース期間の日付値に関連付けられた年を指定します。
9. 「**ソース期間番号**」に、会計年度内の期間の番号を入力します。
10. 「**ターゲット期間キー**」に、ターゲット・システムにマップする現在の会計年の月の最終日を入力します。



をクリックし、期間を選択して、ターゲット期間キーを選択することもできます。

11. 「**ターゲット期間名**」で、ターゲット期間の期間名を選択します。マッピングの説明を入力します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間の情報を選択することもできます。検索

して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、ソースのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。

12. 「説明」に、期間マッピングの説明を入力します。
13. 「保存」をクリックします。

データ・ソース・タイプのソース・マッピング

データ・ソース・アプリケーションと Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの間の期間を追加する必要がある場合は、データ・ソースのソース・タイプのソース期間マッピングを作成できます。

Period Mapping Save

Global Mapping Application Mapping **Source Mapping**

Source Type: Data Source Calendar: 2

Calendar	Source Period	Source Period Year	Source Period Number	Target Period Key	Target Period Name	Description
2	Mar	2020		2020-03-31	Mar-20	
2		2020	4	2020-04-30	Apr-20	
2	May		5	2020-05-31	May-20	
2				2020-06-30	Jun-20	
2	Sep	2025	9	2025-09-30	Sep-25	

データ・ソースのソース・タイプのソース・マッピングを作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「期間マッピング」を選択します。
2. 「ソース・マッピング」タブを選択します。
3. 「ソース・タイプ」ドロップダウンから、「データ・ソース」を選択します。
4. 「カレンダー」から、ソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。
5. **+** をクリックします。
6. 「ソース期間」に、ソース期間名を入力します。
通常、ソース期間名は、Jan-20 などの日付値を参照します。

Note:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

7. 「ソース期間の年」に、ソース期間の日付値に関連付けられた年を指定します。
8. 「ソース期間番号」に、会計年度内の期間の番号を入力します。
9. 「ターゲット期間キー」に、ターゲット・システムにマップされる現在の会計年の月の最終日を入力します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間名を選択することもできます。検索して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、ソースのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。

10. 「**ターゲット期間名**」で、ターゲット期間の期間名を選択します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間名を選択することもできます。

11. 「**説明**」に、ソース期間マッピングの説明を入力します。
12. 「**保存**」をクリックします。

EPM Cloud ソース・タイプのソース・マッピング

Oracle Enterprise Performance Management Cloud のビジネス・プロセス間の期間マッピングを追加する必要がある場合は、ソース・マッピングを定義できます。

Period Mapping Save

Global Mapping Application Mapping **Source Mapping**

Source Type: Enterprise Performance Manag... Source Application: 44AEPBCS-EPBCS Target Application: 44AEPBCS-EPBCS

+ 歯 下 上 Actions

Source Period Key	Source Period Name	Source Period	Source Period Year	Target Period Key	Target Period Name	Target Period - Month	Target Year
2021-01-31	Q	Jan-21	Jan	FY21	Q		

Period Mapping Save

Global Mapping Application Mapping **Source Mapping**

Source Type: Enterprise Performance Manag... Source Application: 44AEPBCS-EPBCS Target Application: 44AEPBCS-EPBCS

+ 歯 下 上 Actions

Source Period Key	Source Period Name	Source Period	Source Period Year	Target Period Key	Target Period Name	Target Period - Month	Target Year
2021-01-31	Q	Jan-21	Jan	FY21	Q		

EPM Cloud ソース・タイプのソース・マッピングを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」メニューから、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**ソース・マッピング**」タブを選択します。
3. 「**ソース・タイプ**」ドロップダウンから、「**Enterprise Performance Management**」を選択します。
4. 「**ソース・アプリケーション**」から、期間マッピングの追加元のソース・アプリケーションの名前を選択します。
5. 「**ターゲット・アプリケーション**」から、ソース期間マッピングの追加先のターゲット・アプリケーションの名前を選択します。
6. **+**
をクリックします。
7. 「**ソース期間キー**」から、ソース・システムからマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。

 **Note:**

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

8. 「**ソース期間名**」に、ソース期間の名前を指定します。
9. 「**ソース期間の年**」に、ソース期間の日付値に関連付けられた年を指定します。
10. 「**ターゲット期間キー**」に、ターゲット・システムにマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間名を選択することもできます。検索して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、ソースのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。

11. 「**ターゲット期間名**」に、ターゲット期間の期間名を指定します。
12. 「**ターゲット期間 - 月**」に、ターゲット期間の期間の月を指定します。
13. 「**ターゲット年**」に、会計年度が終了する年を指定します。

たとえば、会計年度が2020年に開始して2021年に終了する場合は、会計年度のすべての期間に2021を入力します。

14. 「**説明**」に、ソース期間マッピングの説明を入力します。
15. 「**保存**」をクリックします。

Oracle ERP Cloud ソース・タイプのソース・マッピング

Oracle ERP Cloud と Oracle Enterprise Performance Management Cloud のアプリケーション間のソース期間マッピングを定義するときは、Oracle ERP Cloud ソース・タイプを使用します。

たとえば、EPM Planning プロジェクト・モジュール(プロジェクト)と Oracle Fusion Cloud Project Management (プロジェクト管理)の間の明示期間マッピングを定義する必要がある場合があります。

EPM Cloud ソース・タイプのソース・マッピングを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」メニューから、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**ソース・マッピング**」タブを選択します。
3. 「**ソース・タイプ**」ドロップダウンから、「**Oracle ERP Cloud**」を選択します。

Period Mapping							
Source Type	Connection	Source Application	Target Application	Mapping Type			
Oracle ERP Cloud	zbot	OperationsAccounting...	44AEPBCS-EPBCS	Explicit			
Source Period Key	Source Period Name	Source Period	Source Period Year	Target Period Key	Target Period Name	Target Period - Month	Target Year
2035-11-30	November 2035	Nov-35	2035	2035-04-30	Apr-35	Apr	FY35

4. 「**接続**」から、ソース期間マッピングで使用する Oracle ERP Cloud 統合に関連付けられた接続名を選択します。
5. 「**ソース・アプリケーション**」から、期間マッピングの追加元のソース・アプリケーションの名前を選択します。
6. 「**ターゲット・アプリケーション**」から、ソース期間マッピングの追加先のターゲット・アプリケーションの名前を選択します。
7. 「**マッピング・タイプ**」から、「**明示**」または「**調整**」を選択します。

明示 - 統合では、データ統合で定義されている明示期間マッピングを使用して、統合の実行時に含まれる各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の General Ledger データ・ソースをサポートできます。

調整 - 統合では、通常期間と調整期間が使用されます。調整期間が存在しない場合は、通常期間のみが処理されます。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理*の Oracle General Ledger の調整期間の処理を参照してください。

8. **+**
をクリックします。
9. 「**ソース期間キー**」から、ソース・システムからマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。
10. 「**ソース期間名**」に、ソース期間の名前を指定します。

 **Note:**

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

11. 「**ソース期間の年**」に、ソース期間の日付値に関連付けられた年を指定します。
12. 「**ソース期間**」に、ソース期間を作成する(GL)期間を指定します。
13. 「**ターゲット期間キー**」に、ターゲット・システムにマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間の情報を選択することもできます。検索して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、ソースのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。

14. 「**ターゲット期間名**」に、ターゲット期間の期間名を指定します。
15. 「**ターゲット期間 - 月**」に、ターゲット期間の期間の月を指定します。
16. 「**ターゲット年**」に、会計年度が終了する年を指定します。

たとえば、会計年度が 2020 年に開始して 2021 年に終了する場合は、会計年度のすべての期間に 2021 を入力します。

17. 「**説明**」に、ソース期間マッピングの説明を入力します。
18. 「**保存**」をクリックします。

Oracle HCM Cloud ソース・タイプのソース・マッピング

Oracle HCM Cloud と Oracle Enterprise Performance Management Cloud のアプリケーション間のソース期間マッピングを定義するときは、Oracle Human Capital Management Cloud ソース・タイプを使用します。

Oracle HCM Cloud ソース・タイプのソース・マッピングを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」メニューから、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**ソース・マッピング**」タブを選択します。
3. 「**ソース・タイプ**」ドロップダウンから、「**Oracle HCM Cloud**」を選択します。

Calendar	Source Period	Source Period Year	Source Period Number	Target Period Key	Target Period Name	Description
3	August	2020	8	2020-08-31	Aug-20	
3	Seo	2020		2020-09-30	Sep-20	

4. 「**接続**」から、ソース期間マッピングで使用する Oracle HCM Cloud 統合に関連付けられた接続名を選択します。
5. 「**カレンダー**」から、データの統合に使用されるソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。
6. **+** をクリックします。
7. 「**ソース期間**」に、ソース期間を作成する(GL)期間を指定します。
8. 「**ソース期間の年**」から、ソース・システムからマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。
9. 「**ソース期間名**」に、ソース期間の名前を指定します。

Note:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

10. 「**ソース期間番号**」に、会計年度内の期間の番号を指定します。
11. 「**ターゲット期間キー**」に、ターゲット・システムにマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間の情報を選択することもできます。検索して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、ソースのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。

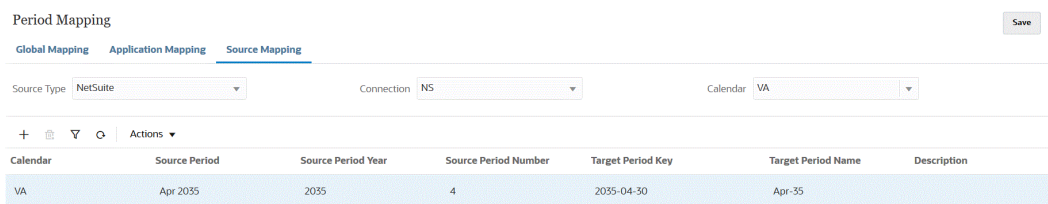
12. 「**ターゲット期間名**」に、ターゲット期間の名前を指定します。
13. 「**説明**」に、ソース期間マッピングの説明を入力します。
14. 「**保存**」をクリックします。

Oracle NetSuite ソース・タイプのソース・マッピング

Oracle NetSuite と Oracle Enterprise Performance Management Cloud のアプリケーション間のソース期間マッピングを定義するときは、Oracle NetSuite ソース・タイプを使用します。

Oracle NetSuite ソース・タイプのソース・マッピングを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」メニューから、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**ソース・マッピング**」タブを選択します。
3. 「**ソース・タイプ**」ドロップダウンから、「**NetSuite**」を選択します。



Calendar	Source Period	Source Period Year	Source Period Number	Target Period Key	Target Period Name	Description
VA	Apr 2035	2035	4	2035-04-30	Apr-35	

4. 「**接続**」から、ソース期間マッピングで使用する Oracle NetSuite 統合に関連付けられた接続名を選択します。
5. 「**カレンダー**」から、データの統合に使用されるソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。
6. **+** をクリックします。
7. 「**ソース期間**」に、ソース期間を作成する(GL)期間を指定します。
8. 「**ソース期間の年**」から、ソース・システムからマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。
9. 「**ソース期間名**」に、ソース期間の名前を指定します。

Note:

バッチ・スクリプトで使用する場合、期間名にスペースを含めることはできません。

10. 「**ソース期間番号**」に、会計年度内の期間の番号を指定します。
11. 「**ターゲット期間キー**」に、ターゲット・システムにマップされる現在の会計年の月の最終日を指定します。



をクリックし、名前を選択して、ターゲット期間の情報を選択できます。検索して選択:

期間キー・ページが表示されます。このページには、ソースのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。

12. 「**ターゲット期間名**」に、ターゲット期間の期間名を指定します。
13. 「**説明**」に、ソース期間マッピングの説明を入力します。
14. 「**保存**」をクリックします。

期間マッピング・オプション

期間マッピングでは、「**アクション**」で使用できる期間オプションを使用して、次のことを実行できます:


- Excel からインポート - Excel スプレッドシートから期間マッピングをインポートします
- Excel にエクスポート - 期間マッピングを Excel スプレッドシートにエクスポートします、
- インポート・テンプレートのダウンロード - 期間マッピングの詳細を入力してアップロードできるテンプレートを提供します。
- 期間の削除 - すべて、または一定範囲の期間を削除します。

Excel からの期間マッピングのインポート

期間マッピングを Excel スプレッドシートからインポートできます。インポートされた期間マッピングは、期間マッピング・ページで自動的に移入されます。


Excel から期間マッピングをインポートするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**アクション**」メニューから、「**Excel からインポート**」を選択します。
3. **インポートするファイルの選択**ページの「**ファイル**」で、期間マッピングのインポート元の Excel ファイルの名前を指定します。

ファイル・ブラウザ・ページで  をクリックして、Excel ファイルに移動することもできます。

Excel スプレッドシートがローカルに保管されているか、別のドライブにある場合は、ファイルに移動して「**アップロード**」をクリックします。

オプション: Excel スプレッドシートからインポートされた期間マッピングをダウンロードするには、**ファイル・ブラウザ**・ページでスプレッドシート(xls または

xlsx 拡張子)を選択し、 をクリックします。スプレッドシートを開くか保存するように要求されます。

4. 「**OK**」をクリックします。

Excel への期間マッピングのエクスポート

期間マッピングを Excel スプレッドシートにエクスポートできます。

期間マッピングを Excel にエクスポートするには:

1. 「データ統合」 ホーム・ページの「アクション」 から、「期間マッピング」 を選択します。
2. 「アクション」 メニューから、「Excel にエクスポート」 を選択します。

別のウィンドウが起動され、そこからエクスポートされた期間マッピングを開くか保存できます。

3. ワークシートを開くか保存して、「OK」 をクリックします。

次に、Excel スプレッドシート内のエクスポートされた期間マッピングを示します。

Period Key	Prior Period Key	Period Name	Target Year	Target Period - Month	Target Period - Quarter	Target Period - Year	Target
6/30/2005	5/31/2005	Jun-5	FY05	Jun			
7/31/2005	6/30/2005	Jul-5	FY05	Jul			
8/31/2005	7/31/2005	Aug-5	FY05	Aug			
9/30/2005	8/31/2005	Sep-5	FY05	Sep			
10/31/2005	9/30/2005	Oct-5	FY05	Oct			
11/30/2005	10/31/2005	Nov-5	FY05	Nov			
12/31/2005	11/30/2005	Dec-5	FY05	Dec			
1/31/2006	12/31/2005	Jan-6	FY06	Jan			
2/28/2006	1/31/2006	Feb-6	FY06	Feb			
3/31/2006	2/28/2006	Mar-6	FY06	Mar			
4/30/2006	3/31/2006	Apr-6	FY06	Apr			
5/31/2006	4/30/2006	May-6	FY06	May			
6/30/2006	5/31/2006	Jun-6	FY06	Jun			
7/31/2006	6/30/2006	Jul-6	FY06	Jul			
8/31/2006	7/31/2006	Aug-6	FY06	Aug			
9/30/2006	8/31/2006	Sep-6	FY06	Sep			
10/31/2006	9/30/2006	Oct-6	FY06	Oct			
11/30/2006	10/31/2006	Nov-6	FY06	Nov			
1/31/2019	12/31/2018	Jan-19	FY19	Jan			
2/28/2019	1/31/2019	Feb-19	FY19	Feb			
3/31/2019	2/28/2019	Mar-19	FY19	Mar			
4/30/2019	3/31/2019	Apr-19	FY19	Apr			
5/31/2019	4/30/2019	May-19	FY19	May			

期間マッピング・インポート・テンプレートのダウンロード

期間マッピングの詳細を入力してアップロードできる期間マッピング・インポート・テンプレートをダウンロードできます。

Excel から期間マッピングをインポートするには:

1. 「データ統合」 ホーム・ページの「アクション」 から、「期間マッピング」 を選択します。
2. 「アクション」 メニューから、「インポート・テンプレートのダウンロード」 を選択します。

別のウィンドウが起動され、そこから Excel ワークシートでインポート・テンプレートを開くか保存できます。

3. インポート・テンプレートを開くか保存して、「OK」 をクリックします。

ダウンロードされたインポート・テンプレートを次に示します:

1	Period Key	Prior Period Key	Period Name	Target Year	Target Period - Month	Target Period - Quarter	Target Period - Year	Target Period - Day		
4										
5										
6										
7										
8										

- オプション:** 期間マッピングの詳細をインポート・テンプレートに追加したら、[Excel からの期間マッピングのインポート](#)を使用して、Excel スプレッドシートを期間マッピングにアップロードできます。

期間マッピングの削除

このタスクについて

個々の期間マッピング、期間マッピングの範囲またはすべての期間マッピングを削除できます。

個々の期間マッピングの削除

個々の期間マッピングを削除するには:

- 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「期間マッピング」を選択します。
- 「グローバル・マッピング」タブ、「アプリケーション・マッピング」タブまたは「ソース・マッピング」タブから、削除する個々の期間マッピングを選択します。



- をクリックします。

期間マッピングの削除の確認を求めるプロンプトが表示されます。



- 「OK」をクリックします。

期間マッピングの範囲の削除

期間マッピングの範囲を削除するには:

- 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「期間マッピング」を選択します。
- 「グローバル・マッピング」タブ、「アプリケーション・マッピング」タブまたは「ソース・マッピング」タブから、削除する期間マッピングの範囲を選択します。
- 「アクション」メニューの「期間の削除」から、「範囲の選択」を選択します。

4. **範囲の選択**ページの「**開始日**」フィールドで削除する範囲の開始日を選択し、「**終了日**」で削除する範囲の終了日を選択します。

日付を入力する場合は、MM/dd/yyyy のフォーマットを使用します。たとえば、**08/31/2021** と入力します。



をクリックし、カレンダーから日付を選択して、日付を指定することもできます。

5. 「**OK**」をクリックします。

すべての期間マッピングの削除

すべての期間マッピングを削除するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**期間マッピング**」を選択します。
2. 「**グローバル・マッピング**」タブ、「**アプリケーション・マッピング**」タブまたは「**ソース・マッピング**」タブから、削除する期間マッピングを選択します。
3. 「**アクション**」メニューの「**期間の削除**」から、「**すべて**」を選択します。

すべての期間の削除の確認ページが表示されます:

4. 「**OK**」をクリックします。

EPM Cloud またはファイルベースのソース・システムの複数期間のロード

Oracle Enterprise Performance Management Cloud またはファイルベースのソース・システムの場合、データ統合では、データ・ファイルの列として期間がサポートされます。1つのファイルに複数期間のデータがある場合、各データ行に年と期間を含めることができます。インポート・フォーマットでソース期間行である年と期間を選択すると、これらはファイル内の列として識別され、ターゲット・システムの適切なディメンションにマップされます。データ・ロード・ルールを実行し、ロードする日付の範囲を選択します。日付の範囲は、デフォルトまたは明示期間マッピング・タイプに基づきます。

たとえば、次のサンプル・ファイルには、1つのデータ・ファイル内に複数の期間のデータ("Jan"および"Feb")があります。

```
E1,100,2022,Jan,USD,100  
E2,100,2022,Jan,USD,200  
E3,100,2022,Feb,USD,300  
E4,100,2022,Feb,USD,400
```

別の例で、**Jan-March** 期間範囲を選択し、ファイルに **Jan**、**Feb**、**Mar** および **Apr** が含まれている場合、データ統合は **Jan**、**Feb** および **Mar** のみロードします。

```
E1,100,2022,Jan,USD,100  
E2,100,2022,Jan,USD,200  
E3,100,2022,Feb,USD,300  
E4,100,2022,Feb,USD,400  
E4,100,2022,Mar,USD,400  
E4,100,2022,Mar,USD,400  
E4,100,2016,Apr,USD,400  
E4,100,2016,Apr,USD,400
```

データ統合は、統合の実行ページで指定された期間をロードし、ロードするよう選択した期間と一致しないファイル内の行は無視します。

8

カテゴリ・マッピングの管理

カテゴリ・マッピングを定義して、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマッピングします。たとえば、**Planning** アプリケーションでは、同じソース・システム・データは、シナリオ・ディメンション・メンバー「現在」を使用して格納されます。データ統合で、シナリオ・ディメンション・メンバーに対するカテゴリ・マッピングを作成できます。指定されたターゲット・カテゴリ値が **Planning** のシナリオ・ディメンション下に存在することを確認します。

グローバル・マッピング

1つのグローバル・マッピングを定義すると、個々のマッピングに対して様々なシナリオ・ディメンションをマッピングできます。

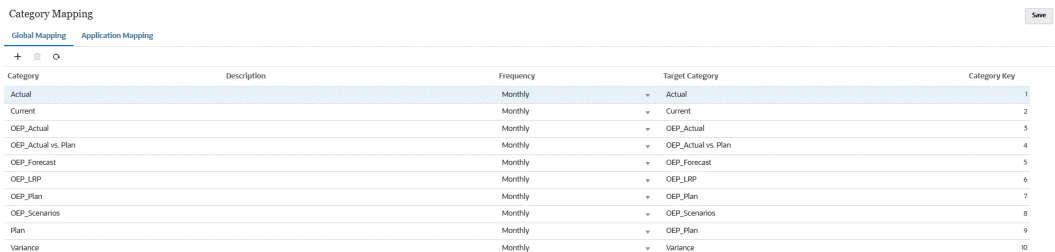
グローバル・カテゴリ・マッピングでは、複数のアプリケーションにわたってマッピングを定義できます。たとえば、ほとんどの場合、実績のソース・カテゴリを実績のターゲットにマップするケースです。しかし、実績を現在にマップするターゲット・アプリケーションがある場合もあります。この場合、アプリケーションごとにグローバル・マッピングを上書きできます。

ノート:


バッチ・スクリプトを使用する場合、特殊文字を含む名前、およびスペースを使用しないでください。コマンドラインから実行する場合、一部の文字は問題を発生させる可能性があります。

グローバル・データ種別マッピングを定義するには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページの 「**アクション**」 メニューから、「**カテゴリ・マッピング**」を選択します。
2. 「**グローバル・マッピング**」 タブをクリックします。



Category	Description	Frequency	Target Category	Category Key
Actual		Monthly	Actual	1
Current		Monthly	Current	2
CEP_Actual		Monthly	CEP_Actual	3
CEP_Actual vs. Plan		Monthly	CEP_Actual vs. Plan	4
CEP_Forecast		Monthly	CEP_Forecast	5
CEP_IRP		Monthly	CEP_IRP	6
CEP_Plan		Monthly	CEP_Plan	7
CEP_Scenarios		Monthly	CEP_Scenarios	8
Plan		Monthly	CEP_Plan	9
Variance		Monthly	Variance	10

3.  (「追加」アイコン)をクリックします。
空白のエントリ行が表示されます。
4. 「**カテゴリ**」 ドロップダウンで、カテゴリ・マッピングに使用するディメンションを選択します。



5. 「説明」に、カテゴリの説明を入力します。
6. 「頻度」で、各マッピングのカテゴリの頻度を選択します。

「頻度」オプションには次のものがあります:

- 月次
- 日次
- 四半期ごと
- 年次

カテゴリは、期間マッピングで使用される頻度(「ターゲット期間 - 月」、「ターゲット期間 - 四半期」、「ターゲット期間 - 年」および「ターゲット期間 - 日」)を示します。統合を実行する際、システムでは、「カテゴリ・マッピング」の「頻度」の値を確認し、その値を使用して、ターゲット期間値の期間マッピングを問い合わせます。

たとえば、期間マッピングのカテゴリ・マッピングで「月次」を選択した場合、システムではデータをロードする場所を決定する際に「ターゲット期間 - 月」に入力されている値を使用します。同様に、カテゴリ・マッピングで「四半期ごと」が選択されている場合は、システムは「ターゲット期間 - 四半期」に入力されている値を使用します。


7. 「ターゲット・カテゴリ」で、ターゲット・カテゴリを指定するか、 をクリックしてディメンションまたはディメンション・メンバーを選択します。
8. オプション: 「カテゴリ・キー」で、カテゴリの内部キーを指定します。このキーは、ドリルダウンまたはデータ・ロードの問題のデバッグに使用できます。
9. ターゲット・カテゴリを入力します。
たとえば、ターゲット・カテゴリは、Planning アプリケーションのシナリオ・ディメンションです。
10. 「保存」をクリックします。
11. オプション: 次のタスクを実行します:
 - マッピングを編集するには、マッピングを選択し、必要に応じて変更した後、「保存」をクリックします。
 - マッピングを削除するには、 をクリックします。

アプリケーション・マッピング

アプリケーション・マッピングは、グローバル・マッピングとは異なり、ターゲット・アプリケーションに対して定義できます。

アプリケーション・カテゴリのマッピングを定義するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「カテゴリ・マッピング」を選択します。
2. 「カテゴリ・マッピング」で、「アプリケーション・マッピング」タブを選択します。
3. 「ターゲット・アプリケーション」から、ターゲット・アプリケーションを選択します。

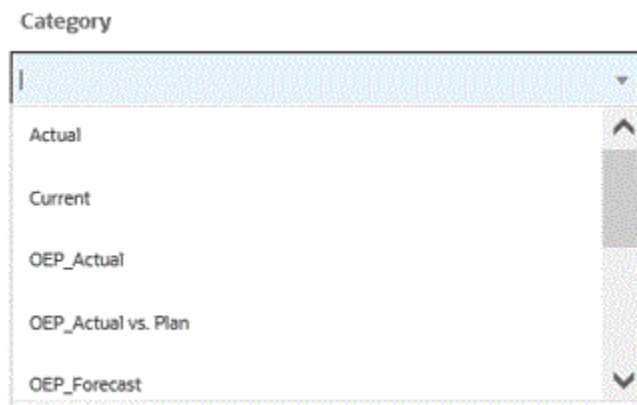
4. 「追加」をクリックします。
空白のエントリ行が表示されます。
5. 「カテゴリ」で、カテゴリを選択します。
6. 「ターゲット・カテゴリ」で、ターゲット・カテゴリを指定するか、 をクリックしてディメンションまたはディメンション・メンバーを選択します。
たとえば、Planning のシナリオ・ディメンションを指定します。
詳細は、[ターゲット・カテゴリのメンバーの選択](#)を参照してください。
7. 「保存」をクリックします。
8. オプション: 次のタスクを実行します:
 - マッピングを編集するには、マッピングを選択し、必要に応じて変更します。次に、「保存」をクリックします。
 - マッピングを削除するには、「削除」をクリックします。


ターゲット・カテゴリのメンバーの選択

ディメンション内の特定のメンバーを含めて、ターゲット・カテゴリに含めることができます。

ターゲット・カテゴリのメンバーを選択するには:

1. **アプリケーション・マッピング** ページで、「**ターゲット・アプリケーション**」からターゲット・アプリケーションを選択します。
2. + をクリックします
3. 「**カテゴリ**」ドロップダウンから、メンバーを選択するディメンションを選択します。



4. 「ターゲット・カテゴリ」で、ディメンションまたはディメンション・メンバーを指定するか、 をクリックしてディメンションまたはディメンション・メンバーで検索するかを選択します。
5. **メンバーの選択** ページで、次のことを実行します:
 - a. 「**キューブ**」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。
キューブによって、使用可能なディメンションの構造が決まります。

- b. オプション: 「メンバーの検索」に、基準(メンバー名または別名のみ)を入力し、「[Enter]」をクリックします。

検索では大文字と小文字は区別されません。検索できるのは、1つの単語、複数の単語またはワイルドカード文字です。

- c. 左から 2 番目のペインには、使用可能な第 1 レベルの親ディメンションが表示されます。選択するには、ペイン内のマッピングする各メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリックします。

選択したディメンションのメンバーにドリルダウンし、3 番目のペインに結果を表示するには、▶をクリックします。

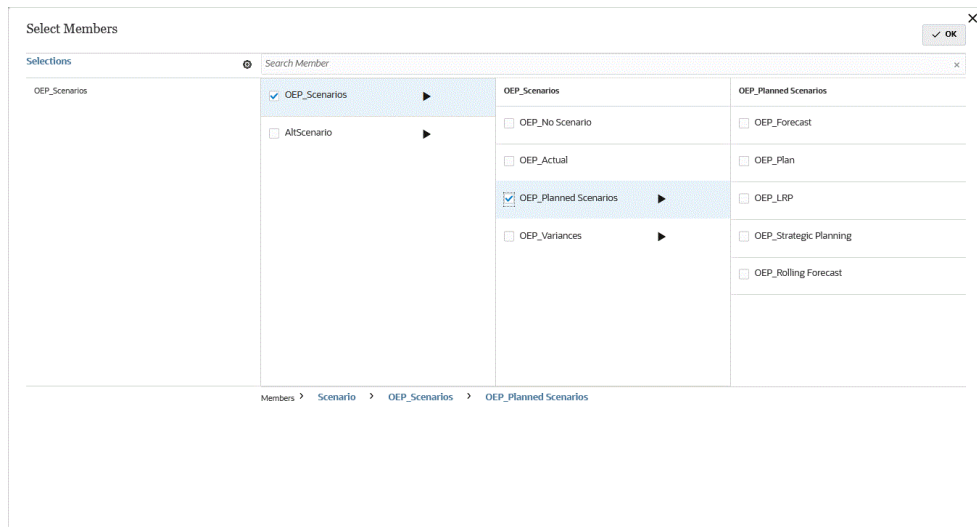
- d. 左から 3 番目のペインには、ステップ b で選択したディメンションのメンバーまたは兄弟が示されます。選択するには、マッピングする各メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリックします。


選択したディメンションのメンバーにドリルダウンし、4 番目のペインに結果を表示するには、▶をクリックします。

- e. 左から 4 番目のペインには、ステップ d で選択したメンバー/兄弟からのメンバー(リーフ・レベル)結果が示されます。選択するには、マッピングする各メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリックします。

チェック・マークが表示された選択済のディメンション/メンバーが、「選択」ペインに移動されます。

- f. 「OK」をクリックします。

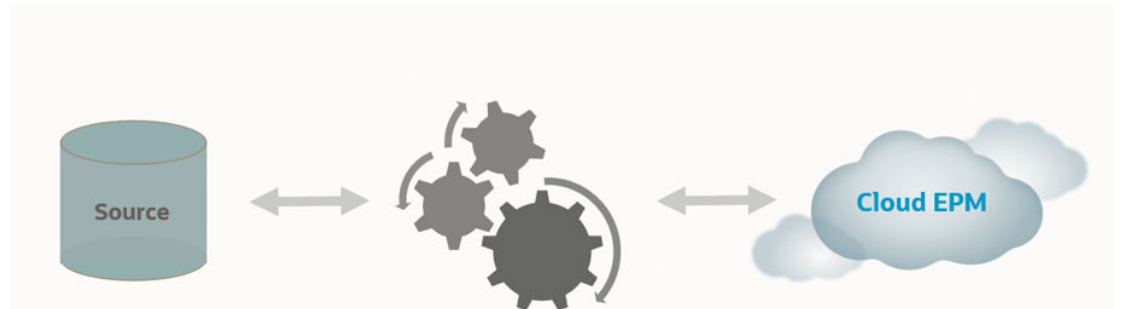


選択した内容をクリアするには、「選択」ペインからディメンション/メンバーを選択し、 ▼ ドロップダウンから「削除」または「すべて削除」を選択します。

9

データ統合の定義

データ統合を定義するには、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムからメタデータとデータを抽出する(直接統合)か、ファイルからデータを抽出し、それを Enterprise Performance Management (EPM)ターゲット・アプリケーションにプッシュします。



ファイルベースのインポートは、Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・データに直接接続できないが、テキスト・ファイルでソースのデータを使用できるユーザーのためにサポートされています。すべてのファイル(区切りファイルなど)は、ターゲット EPM アプリケーションに容易にインポートできます。勘定科目、エンティティ、データ値をファイルのどこに置くか、およびデータ・インポート時にどの行をスキップするかを選択できます。この機能を利用すると、ビジネス・ユーザーが任意のソースのデータを容易にインポートでき、ターゲット・アプリケーションにロードする際に技術的な支援がほとんど必要ありません。

ファイルベース統合の詳細は、[ファイルベース統合の作成](#)を参照してください。

他の Oracle Cloud サービス(即時利用可能な統合またはパッケージされた統合)に直接接続できるお客様は、ソース・データを定義し、データを必要なターゲット・フォーマットに変換するためのマッピング・ルールを作成し、定期的なデータ・ロード・プロセスを実行および管理します。

直接統合ベースのソースの場合、データのインポートおよびエクスポートのソースは次のいずれかです。

- Oracle ERP Cloud - General Ledger。General Ledger からの実績のロードと予算および実績の修正仕訳のライトバック
- Oracle ERP Cloud - Budgetary Control。契約、債務および支出のロードと予算のライトバック
- Oracle ERP Cloud - Sub-Ledgers。補助元帳トランザクション・データのロード
- Oracle NetSuite - Oracle NetSuite からの実績およびメタデータのロード
- Oracle Human Capital Management Cloud - 従業員属性、給与およびその他の関連ジョブ情報のロード。
- Oracle E-Business Suite - General Ledger からの実績のロード。
- Oracle Peoplesoft - General Ledger からの実績のロード。
- カスタム・オンプレミス・データ・ソース—オンプレミス・データベース・アダプタおよび EPM 統合エージェントの使用。

- Oracle Autonomous Database - Oracle Autonomous Database で実行されているステージング・アプリケーションまたはその他のアプリケーションからのソース・データの抽出。EPM Cloud から、Oracle Autonomous Database の選択したレポート用データ・ウェアハウスにデータをエクスポートすることもできます。
- ローカル Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーション - 異なる入力キューブ間でデータを移動する、入力キューブとレポート・キューブの間のデータ同期
- 別のサービス・インスタンスからの EPM Cloud アプリケーション—個別のビジネス・プロセスでのアプリケーション間のデータ同期。

ノート:

ビジネス・プロセスからビジネス・プロセスへの統合については、両方のビジネス・プロセスが同じリリース・レベルである必要があります。

関連項目:

- EPM Cloud でのデータ統合を使用したデータのロードの詳細は、[Planning and Budgeting Cloud でのデータ統合の使用](#)を参照してください
- EPM Cloud での ERP Cloud データのロードの詳細は、[データ管理を使用した EPM Cloud での ERP Cloud データのロード](#)を参照してください。
- Oracle General Ledger から Enterprise Planning アプリケーションにデータをロードするデータ統合の定義および実行方法をさらに学習するには、[データ管理を使用した Oracle Fusion Financials Cloud と Enterprise Planning Cloud の統合](#)を参照してください。
- Oracle General Ledger から EPM アプリケーションにデータをロードするデータ統合の定義および実行方法をさらに学習するには、[データ管理を使用した Oracle Fusion Financials Cloud と Enterprise Planning Cloud の統合](#)を参照してください。


ファイルベース統合の作成

ファイルベース・データ統合の作成の詳細は、次のチュートリアルを視聴してください: [Enterprise Planning Cloud でのファイルベース・データ統合の作成](#)。

ファイルベース統合用のディメンションおよびメンバーのマッピングの詳細は、次のチュートリアルを視聴してください: [Cloud EPM Planning でのファイルベース・データ統合用のディメンションおよびメンバーのマッピング](#)

ファイルベース統合に関する学習パスは、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud のデータ統合でのファイルベース・データのロード](#)を参照してください

ファイルベース統合を作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページで、 (作成)をクリックし、「統合」を選択します。
「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。
2. 「名前」および「説明」に、新しい統合の名前および説明を入力します。

3. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。

ロケーションは、ソースおよびターゲットを関連するメンバー・マッピングとともにリンクするために使用されます。異なるオプションおよびフィルタ条件を使用して、複数の統合を同じロケーション内で定義できます。

新しいロケーションを入力する場合は、ソースおよびターゲットを指定する必要があります。統合を保存すると、ロケーションは自動的に作成されます。

既存のロケーションを選択した場合、ソースおよびターゲットは自動的に入力され、変更できません。

4. 統合をクイック・モード方法に関連付けるには、「**クイック・モード**」スライダをタップしてオンにします。

クイック・モード方法では、標準ワークフロー方法よりもパフォーマンスが大幅に向上します。インポート式を使用した簡単な変換がサポートされており、メンバー・マッピングはサポートされていません。データはステージング表にロードされないため、ワークベンチでデータを表示できません。たとえば、レベル0抽出方法では、フィルタを適用して出力ファイルに含める列を選択できます。この方法は、問合せの処理制限に到達せずにシステムから大きなデータ・スライスを抽出する場合に理想的です。

統合ジョブをクイック・モード方法に関連付けてからジョブを保存した場合、クイック・モードの関連付けを元に戻すことはできません。ただし、統合ジョブを削除することは可能です。

クイック・モードに関する考慮事項は、[データをエクスポートするためのクイック・モード](#)を参照してください。

5.  (ソースの選択)をクリックします。

6. 「**ソースの選択**」ページから、「**ファイル**」をクリックします。

7. 「**ファイル・ブラウザ**」からファイルを選択し、「**OK**」をクリックします。

「**受信ボックス**」または「**送信ボックス**」フォルダ、あるいは他の任意のフォルダをダブルクリックすると、フォルダ内のファイルのリストが表示されます。

また、「**アップロード**」をクリックし、ファイルに移動してアップロードすることもできます。

オプションで、ファイルベース・ロードを作成し、実行時にロードされるファイルを指定することもできます。ただし、列番号と列名は、ディメンションをマッピングするときのみ指定します。[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

8. 「**キューブ**」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。

カスタム・キューブを個別のアプリケーションとして登録でき、登録できるカスタム・キューブ・アプリケーションの数に制限はありません。

9. 「**カテゴリ**」から、統合のカテゴリを選択します。

リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。

10. **オプション**: 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。

11. ファイルをマッピングする場合や、ファイルに関連付けられたヘッダ一行を変更する場合は、「**ファイル・オプション**」をクリックします。

12. 「**ファイルのインポート - ファイル・タイプのエンコード**」ページで、「**タイプ**」、「**エンコード**」、「**区切り文字**」および「**ドリル URL**」フィールドに値を入力します。次に、「**列名**

にヘッダーを使用します。」で、矢印キーを使用してヘッダー行を選択するか、いずれのヘッダー行も選択せずに、「次」をクリックします。

「ファイルのインポート - ファイル・タイプのエンコード」ページの詳細は、[ファイルのマッピング](#)を参照してください。

13. 「ファイルのインポート - ファイル列マッピング」ページで、必要に応じて列ヘッダーを変更し、「終了」をクリックします。

詳細は、[ファイル列ヘッダーの編集](#)を参照してください。

14. 新しいロケーションの場合のみ、 (ターゲットの選択)をクリックします。

15. 「ターゲットの選択」ページから、ターゲット・アプリケーションを選択します。

16. 「保存」をクリックします。

ロケーションの属性の選択

一般的な統合オプションを選択する際、ロケーションに割り当てる属性またはプロパティを追加または編集できます。

ロケーションの属性には次のものがあります。

ロケーションの属性	説明
機能通貨	ロケーションの通貨を選択します。 Financial Consolidation and Close および Tax Reporting のユーザーの場合: 通貨が固定されている場合に、エンティティ通貨ではなく実際の通貨に対してデータをロードするには、「ロケーション」オプションの「機能通貨」フィールドで通貨を設定します。インポート・フォーマットに「通貨」行を追加してマップすることもできます。 Financial Consolidation and Close では、親入力、コントリビューション入力および換算通貨入力をこのフィールドで指定し、仕訳を作成してエンティティ通貨以外の異なる通貨に転記することもできます。
親グループ	ロケーションに割り当てる親を選択します。 親マッピングは他のロケーションとのマッピングの共有に使用されます。親ロケーションにマッピングを入力します。関連するロケーションが同じマッピングを使用できます。複数のロケーションが親を共有できます。この属性は、複数のロケーションが1つの勘定科目表を使用する場合に役立ちます。子または親のマッピング表を変更すると、子と親のすべてのロケーションに適用されます。
ロジック勘定科目グループ	ロケーションに割り当てるロジック勘定科目グループを選択します。 ロジック・グループには、ソース・ファイルがロードされた後に生成される1つ以上のロジック勘定科目が含まれます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ロケーションの属性	説明
確認ルール・グループ	ロケーションに割り当てる確認ルール・グループを選択します。 システム管理者は、確認ルールを使用してデータの整合性を強化します。確認ルールのセットが確認ルール・グループ内に作成され、確認ルール・グループがロケーションに割り当てられます。続いて、データがターゲット・システムにロードされた後、確認レポートが生成されます。
確認エンティティ・グループ	ロケーションに割り当てる確認エンティティ・グループを選択します。 確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てた場合、確認レポートは、グループで定義されているすべてのエンティティについて実行されます。確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てない場合、確認レポートは、ターゲット・システムにロードされたエンティティごとに実行されます。確認レポートは、ターゲット・システム、ソース・データまたはデータ統合の変換済データから直接値を取得します。

ファイルのマッピング

ファイルをマッピングして、マッピング・タイプ、ドリル URL、区切り文字およびヘッダ行を指定します。

ファイルをマッピングするには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページから、ファイルベース統合の右側にある **...** をクリックし、「**全般**」を選択します。
「統合の編集」ビューに、「全般」ページが表示されます。
2. 「**ファイル・オプション**」を選択します。
3. 「**タイプ**」から、ロードするファイルのデータ型を選択します。

使用可能なタイプ:


- 区切り - 区切りファイル・フォーマットから数値データをロードします。
- 複数列の数値 - 選択したディメンションの複数のディメンション・メンバーの数値データを、1行のデータでロードします。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダ・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。
- 区切り - すべてのデータ型 - 区切りファイル・フォーマットからすべてのデータ型をロードします。
- 複数列 - すべてのデータ型 - 選択したディメンションの複数のディメンション・メンバーのすべてのデータ型を、1行のデータでロードします。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダ・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。

次のデータ型をサポートするデータ・ファイルをロードできます:

- 数値
 - テキスト
 - スマートリスト
 - 日付
4. 「ドリル URL」で、ドリルスルーに使用する URL を指定します。
5. 「区切り文字」から、出力ファイルの列の区切りに使用する文字を選択します。
区切りファイルには 1 つ以上のレコードが含まれ、指定した区切り文字で各レコードの間隔が設定されます。

使用可能なオプション:


- カンマ(,)
- パイプ(|)
- 感嘆符(!)
- セミコロン(;)
- コロン(:)
- タブ
- チルダ(~)

 **ノート:**

ファイル・エンコーディングのオプションは、データ管理の「システム設定」/「ユーザー設定」オプションで定義します。詳細は、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理のファイル文字の設定](#)を参照してください。

6. 「列名にヘッダーを使用します。」で、矢印キーを使用してヘッダー行を選択するか、いずれのヘッダー行も選択せずに、「次」をクリックします。
ヘッダーを指定しない場合は、**列名にヘッダーを使用**で「0」を選択します。

File Import - File Options x Cancel < Back Next > Finish ✓

File 

* Type * Delimiter

Drill URL

Preview:
Use Header for Column Names.

```
1100;01;Cash In Bank;122.75;145.31;;12.30;55.67
1100-1011-000-00;01;Dallas National Bank;140.320;78.42; ;09.08;07.06
1100-1012;01;Midland Bank & Trust;115000.00;654.12;45.39;05.04;0.00
1190;01;Petty Cash;130.00;41.27;999.11;01.00;12.98
1190-101;01;Sales;204.00;77.33;46.31;15.94;23.46
1515;01;Prepaid Deposits;107.00;88.00;0.00;9.32;"2.45"
1515-101;01;CPI Market Security;501.00;93.44;57.38;34.76;-145e-3
```

7. 「次」をクリックします。

ファイル・オプションのプレビュー

ファイル・プレビュー・ページを使用して、ロードされるファイルの内容を表示します。

File Import - File Preview X Cancel < Back Next > Finish ✓

File: ASO_MP_Curr.txt
Type: Delimited - Numeric Data Delimiter: Semi-Colon
Drill URL:

Preview Table:

1100	01	Cash In Bank	122.75	145.31		12.30	55.67
1100-1011-000-00	01	Dallas National Bank	140,320	78.42		09.08	07.06
1100-1012	01	Midland Bank & Trust	115000.00	654.12	45.39	05.04	0.00
1190	01	Petty Cash	130.00	41.27	999.11	01.00	12.98
1190-101	01	Sales	204.00	77.33	46.31	15.94	23.46
1515	01	Prepaid Deposits	107.00	88.00	0.00	9.32	2.45
1515-101	01	CPI Market Security	501.00	93.44	57.38	34.76	-145e-3
1516-201	01	CPK Market Security	787.00	0.00	11.35	01.4	-4.56
1520-101-11	01	PIY Market Security	45.00	19.87	47.39	-12.65	-04.56
1522-121-11	01	MyPIY Market Security	25.10	39.47	57.76	-22.85	-02.53

ファイル列ヘッダーの編集

区切りファイルの列名が定義されていない場合、またはターゲット・アプリケーションにマッピングする列の名前を変更する必要がある場合は、「ファイル列マッピング」ページを使用して列名を変更します。

ファイル内の列ヘッダーを編集するには:

1. 「ファイルのインポート - ファイル・タイプのエンコード」ページでファイルベース統合のファイル・マッピング詳細を入力した後、「次」をクリックします。
2. 「ファイルのインポート - ファイル列マッピング」ページの「プレビュー表」で、列ヘッダー・フィールドを選択し、必要に応じて値を編集します。

File Import - File Column Mapping Cancel Back Next Finish

File: ColonDelimitedFileWH.txt
Type: Delimited
Delimiter: Colon
Drill URL:

Preview Table:

Account	Description	Amount
1100	Cash In Bank	135722.75
1100-1011-000-00	Cabot National Bank	100.00
1100-1012	Swanee Bank & Trust	110000.00
1190	Petty Cash	100.00
1190-101	Sales	200.00
1515	Prepaid Deposits	100.00
1515-101	CPI Market Security	500.00
1516-201	CPK Market Security	780.00

3. 「終了」をクリックします。

ファイル・ブラウザの使用

ファイル・ブラウザを使用すると、ローカル・サーバーおよびホスティング・サーバーのデータ・ファイルに直接アクセスできます。ファイル・ブラウザから、データ統合のデフォルトの inbox および outbox に保存されているファイルに移動できます。ファイルを削除したり、ローカル・フォルダにファイルをダウンロードしたり、ローカル・フォルダからファイルをアップロードすることもできます。

inbox は、ソース・ファイルのインポート元のデフォルト・ディレクトリであり、すべての元帳抽出ファイルの中央リポジトリとして機能します。ソース・ファイルは、アクセス可能なすべてのディレクトリから取得できるため、インポート・ファイルをこのディレクトリに配置する必要はありません。

inbox には、batches ディレクトリおよび archivestore ディレクトリがあります。

outbox フォルダには、データ統合によって作成されるエクスポート・ファイル、ターゲット・アプリケーションのエラー・ログ・ファイル、ドリル領域ロード・ファイルおよびターゲットのドリル・ロード・ログが格納されます。

outbox には次のサブフォルダがあります:

- archivestore—将来の使用のために予約されています。
- logs—ロード処理で生成された EPM-APPLICATION-NAME_PROCESS-ID.log 形式のログが格納されます。これらのログは、データ統合のプロセスの詳細ページで「ログの表示」リンクを使用すると表示できます。
- reports—reports フォルダには、バッチ・レポート・プロセスによって生成されたレポート出力(PDF、HTML または XLS)が格納されます。オフライン・モードで実行したレポートの出力も含まれます。

ファイル・ブラウザの起動

「アクション」メニューで、「ファイル・ブラウザ」をクリックします。


ファイルの検索

ファイル・ブラウザ・ページの「検索」に、検索するファイルを入力します。


ファイルのアップロード

ファイル・ブラウザ・ページから、ファイルをアップロードするフォルダに移動し、「アップロード」をクリックします。次に、ローカル・フォルダから、アップロードするファイルを選択し、「開く」をクリックします。

ファイルの削除

ファイル・ブラウザ・ページから、ファイルを削除するフォルダに移動します。次に、ファイルを選択し、「アクション」の  をクリックします。

ファイルのダウンロード

ファイル・ブラウザ・ページから、ダウンロードするファイルに移動します。次に、「アクション」の  をクリックします。ローカル・フォルダから、ダウンロードするファイルのファイル名を指定し、「保存」をクリックします。

ファイルベースのロードでのクイック・モードの使用

クイック・モードを使用すると、大容量のデータ・ロードを処理できるため、複雑な変換が不要な場合は標準ワークフロー方法よりもパフォーマンスが大幅に向上します。クイック・モードでは、ワークフロー・プロセスのほとんどのステップおよびデータベース表がバイパスされます。ファイルベース・ロードのクイック・モードでは、単純な変換および明示的に表示、「類似」および「正規表現」のマッピング・タイプのソース式およびターゲット式がサポートされます。

ファイルベース・ロードのクイック・モードに関する考慮事項

ファイルベース・ロードのクイック・モードを使用する際には、次の考慮事項に注意してください：

- ファイルベース・ソースのクイック・モードでは、数値および数値以外のデータ型がサポートされません。
- ファイルベース・ロードのクイック・モードでは、データをロードするために EPM 統合エージェントを使用する必要はありません。クイック・モードを使用してオンプレミスのリレーショナル・データベースからデータを抽出するには、[データを抽出するためのクイック・モード・プロセスの説明](#)を参照してください。
- ProcessMap ターゲット式タイプは、ファイルベース・ロードのクイック・モードでのみ使用されます。このターゲット式を使用すると、マップ・メンバーで指定されたマッピングを使用して変換を実行できます。
- SQL ターゲット式タイプを、ファイルベース・ロードのクイック・モードでディメンションに適用することはできません。
- クイック・モードを使用して、メンバー・マッピングを定義できます。ディメンションのメンバー・マッピングを使用するには、ディメンションのターゲット式タイプ `processMap()` を指定する必要があります。標準モードのように、メンバー・マッピングを定義するのみでは不十分です。`processMap()` 式を明示的に定義する必要があります。

- メンバーのマッピングでは、この機能は「明示」および「類似」マッピング・タイプ、および検索および検索/置換アルゴリズム用のセットの各文字列に共通する特徴に基づいて、文字列のセットをマップするために使用される「正規表現」マッピング・タイプを使用したメンバーのマッピングをサポートします。
- クイック・モードのロードを実行する場合、有効なエクスポート・モードは次のとおりです：
 - Planning の場合は、「置換」、「マージ」および「累計」
 - Financial Consolidation and Close の場合は、「置換」、「マージ」および「累計」

「置換」がデフォルトのモードです。
インポート・モードは使用できません
- 「置換」エクスポート・モードを使用した複数年のロードは、現時点ではサポートされていません。
- クイック・モード方法を使用してデータがロードされる場合、ソースへの直接ドリル・スルーが必要です。詳細は、[直接ドリルの使用](#)を参照してください。

ファイルベースのロードでクイック・モードを使用する場合のプロセスの説明

ファイルベース・ロードのクイック・モードの統合を作成するには：


1. 「データ統合」ホーム・ページで、**+** (作成)をクリックし、「**統合**」を選択します。「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。
2. 「名前」および「説明」に、新しい統合の名前および説明を入力します。
3. 「ロケーション」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。

ロケーションは、ソースおよびターゲットを関連するメンバー・マッピングとともにリンクするために使用されます。異なるオプションおよびフィルタ条件を使用して、複数の統合を同じロケーション内で定義できます。ロケーションは、主に統合へのアクセスを制御するために使用されます。「ロケーションのセキュリティ」を使用して、エンド・ユーザーへのアクセスを制御できます。

新しいロケーションを入力する場合は、ソースおよびターゲットを指定する必要があります。統合を保存すると、ロケーションは自動的に作成されます。

既存のロケーションを選択した場合、ソースおよびターゲットは自動的に入力され、変更できません。

ロケーション属性の詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。

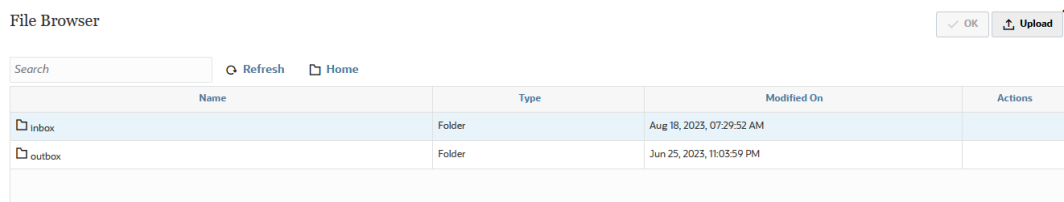
4. 「クイック・モード」スライダをタップしてオンにします。
統合ジョブをクイック・モード方法に関連付けてからジョブを保存した場合、クイック・モードの関連付けを元に戻すことはできません。ただし、統合ジョブを削除することは可能です。
5.  (ソースの選択)をクリックします。
6. ソースの選択ページで、「ファイル」を選択します。

Source	Type
EBS GL Balance	EBSGLBAL
File	FILE
PI74052_Vision	PBCS
Payables Transactions	ERPPAYABLES
POD_Vision	PBCS

7. 「ファイル・ブラウザ」からファイルを選択し、「OK」をクリックします。

ファイルベース・ロードのクイック・モードでは、数値および数値以外のデータ型がサポートされます。

「受信ボックス」または「送信ボックス」フォルダ、あるいは他の任意のフォルダをダブルクリックすると、フォルダ内のファイルのリストが表示されます。



また、「アップロード」をクリックし、ファイルに移動してアップロードすることもできます。

8. 「キューブ」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。

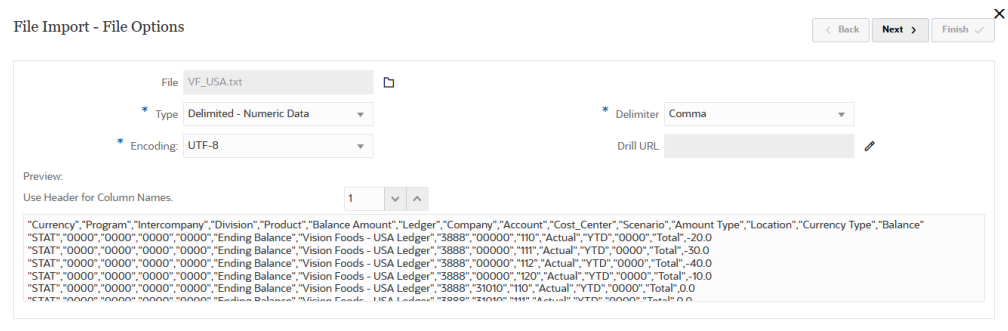
カスタム・キューブを個別のアプリケーションとして登録でき、登録できるカスタム・キューブ・アプリケーションの数に制限はありません。

9. 「カテゴリ」から、統合のカテゴリを選択します。

リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。

10. オプション: ファイルをマッピングする場合や、ファイルに関連付けられたヘッダー列を変更する場合は、[統合の作成](#)ページで、「ファイル・オプション」をクリックします。


- a. 「ファイルのインポート - ファイル・タイプのエンコード」ページで、「タイプ」、「エンコード」、「区切り文字」および「ドリル URL」フィールドに値を入力します。次に、「列名にヘッダーを使用します。」で、矢印キーを使用してヘッダー行を選択するか、いずれのヘッダー行も選択せずに、「次」をクリックします。



「ファイルのインポート - ファイル・タイプのエンコード」ページの詳細は、[ファイルのマッピング](#)を参照してください。

- b. 「ファイルのインポート - ファイル列マッピング」 ページで、必要に応じて列ヘッダーを変更し、「終了」をクリックします。

詳細は、次を参照してください [ファイル列ヘッダーの編集](#)


- 新しいロケーションの場合のみ、 (ターゲットの選択)をクリックします。
- 「ターゲットの選択」 ページから、ターゲット・アプリケーションを選択します。
- 「保存」をクリックします。

Edit Integration: VF Quick File Save


General Map Dimensions Map Members Options

* Name: VF Quick File * Location: VF Quick File

Description: Quick Mode:


 Source: File

Selected File: "VF_USA.txt"

 Target: Vision

* Cube: Plan1

* Category: Actual

- 「データ統合」 ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ディメンションのマッピング」を選択します。
- 「インポート・フォーマット」 から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
- 「タイプ」 でファイルのフォーマットを選択します。

使用可能なオプション:

- 区切り - 区切りファイル・フォーマットから数値データをロードします。
 - 複数列の数値 - 選択したディメンションの複数のディメンション・メンバーの数値データを、1行のデータでロードします。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダー・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。
 - 区切り - すべてのデータ型 - 区切りファイル・フォーマットからすべてのデータ型をロードします。
 - 複数列 - すべてのデータ型 - 選択したディメンションの複数のディメンション・メンバーのすべてのデータ型を、1行のデータでロードします。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダー・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。
- 「区切り文字」 から、出力ファイルの列の区切りに使用する文字を選択します。
区切りファイルには1つ以上のレコードが含まれ、指定した区切り文字で各レコードの間隔が設定されます。
 - カンマ(,)
 - パイプ(|)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(,)
 - コロン(:)

- タブ
 - チルダ(~)
18. マッピング・グリッドで、ソース・データロード・ファイルのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。
- ターゲット・アプリケーションのディメンションが自動的に移入されます。
- 既存のインポート・フォーマットを選択すると、ソースとターゲットが自動的にマップされます。
- 新規のインポート・フォーマットを追加する場合や、既存のインポート・フォーマットを編集する場合は、次の手順を実行します:
- 「列」で、ファイルからインポートするフィールド番号を指定します。
 - 「ソース・ディメンションの選択」で、ターゲット・アプリケーションに割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。
- 同じディメンションの複数のソース列をターゲット・ディメンションにマッピングできます。たとえば、4つの"Account"ソース列をマッピングできます。
19. (オプション): ソースまたはターゲットから直接値を操作する式を割り当てて、ソースまたはターゲットの式を追加します。
- ターゲット式タイプの詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。


 **Note:**

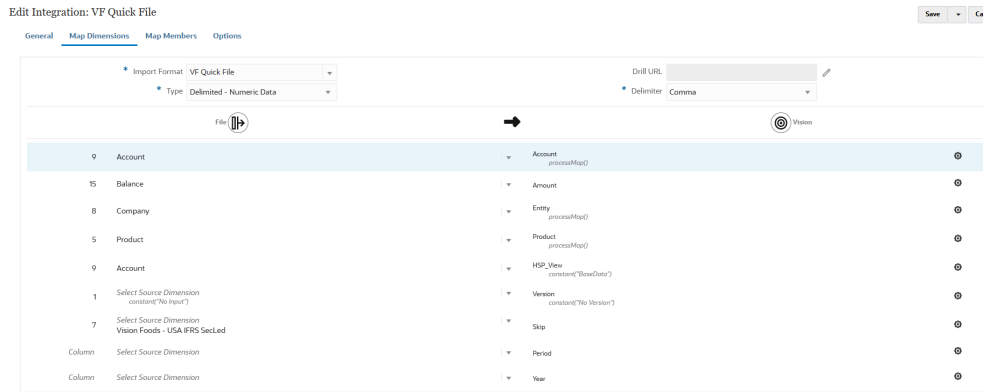
ProcessMap ターゲット式は、ファイルベース・ロードのクイック・モードでのみ使用されます。このターゲット式を使用すると、マップ・メンバーで指定されたマッピングを使用して変換を実行できます。

ソース式タイプの詳細は、[ソース式の使用](#)を参照してください


 **Note:**

SQL ターゲット式タイプは、ファイルベース・ロードのクイック・モードで使用されるディメンションでは使用できません。

20. ディメンションのメンバー・マッピングを使用するには、ディメンションのターゲット式 **processMap** を明示的に指定する必要があります。
- たとえば、「エンティティ」ディメンションのメンバーをマップする場合は、「エンティティ」ディメンションの **processMap** 式を定義する必要があります。
- a. マッピング・グリッドで、ディメンションの右にある  をクリックし、「ターゲット式の編集」を選択して、ターゲット式の追加先のターゲット値を選択します。
 - b. ターゲット式の編集ページで、「式タイプ」をクリックし、**プロセス・マップ**を選択して、「OK」をクリックします。



21. 「保存」をクリックします。

22. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。

メンバーをマップして、ソース値をそれぞれのターゲット・ディメンションの有効なメンバーに変換します。特定のディメンションのターゲット・メンバーを導出するターゲット式を定義している場合、メンバー・マッピングを定義する必要はありません。

 **Note:**


ターゲット式を使用してデータ変換を実行できる場合は、メンバーをマップするのではなく、それを使用することを強くお勧めします。データ・セットが大きい場合、ターゲット式を使用した変換ではメンバー・マッピングと比べてパフォーマンスが大幅に向上します。

23. 「ディメンション」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。

 **Note:**

ディメンションのメンバー・マッピングを使用するには、ディメンションをマップするときに、ディメンションにターゲット式 **processMap** が明示的に指定されている必要があります。

24.  をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。

また、マッピングを選択して「編集」アイコン  をクリックすると、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。

25. **メンバー・マッピングの追加** ページの「ソース」で、「マッピング・タイプ」ドロップダウンからメンバー・マッピング・タイプを選択し、ソース値を指定します。


メンバー・マッピングのタイプ:

マッピングのタイプ	説明	関連項目
== Explicit	<p>ソース値をターゲット値と照合して、完全一致したターゲット値で置換します。</p> <p>明示マッピングは、1 対 1 のマッピングです。たとえば、ソース値"ABC"はターゲット値"123"に置換されます。</p>	「明示」マッピングの使用
🔍 Is Like	<p>特殊文字を使用して、ソース値の文字列を照合し、それをターゲット値にマッピングします。</p> <p>類似マッピングでは、ソース・レコードでのみ、単一のアスタリスク(*)および疑問符(?)のワイルドカード文字を使用できます。アスタリスクは、任意の数の文字を表すプレースホルダです。</p> <p>たとえば、1190*と指定すると、勘定科目 1190、1190100 および 1190-200 が現金ターゲット勘定科目にマッピングされます。</p> <p>疑問符は、1 文字を表すプレースホルダです。たとえば、119? というソース勘定科目は、119 で始まる 4 文字を含むソース勘定科目のみにマッピングされます。</p>	「類似」マッピングの使用
.* Regular Expression	<p>テキストの一致パターンを指定する文字列を使用する正規表現。</p> <p>このマッピング・タイプはソース・レコードでのみ使用可能です。</p> <p>Java 対応の正規表現のみを使用できます。</p> <p>たとえば、ソース・レコードで 5 桁が含まれる行を無視する正規表現を適用する場合は、.*\d{5}と指定し、ターゲットで IGNORE と指定します。</p> <p>その他の例:</p> <p>110[1-9]{3}999 -先頭が 110 で、任意の 3 つの数字が続き、末尾が 999</p> <p>^[A-Z][1-5]{5} -先頭がアルファベットの大文字、その後に 1 から 5 までの 5 つの数字が続く</p> <p>^1[1-5]{5}9{3} -先頭が 1 で、1 から 5 までの任意の 5 つの数字が続き、末尾が 999</p>	<p>参照:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 演習: 正規表現 • 正規表現

 **Note:**

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先順位は、「明示」、「類似」、「正規表現」の順です。

26. 「ターゲット」に、ディメンション・メンバー名のターゲット値を入力します。

個々のメンバーをターゲットとして入力することも、 をクリックし、メンバー・セレクタを使用して値を選択することもできます。

 **Note:**

ターゲット値ではワイルドカードを使用できません。

27. 「処理順序」で、マッピングの順序を指定します。

マッピング・タイプ内の優先度レベルは、処理順序により決定されます。マッピングは、マッピング・タイプ内の名前前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、十単位または百単位で採番する場合は、既存の値の間に新しい値を挿入できます。マッピングに 10、20 および 30 の番号が付いている場合は、25 から開始するマッピングを追加でき、他のマッピングの名前を変更する必要はありません。

28. 「説明」にマッピングの説明を入力します。


29. 「OK」をクリックします。


Idit Integration: VF Quick File

General Map Dimensions Map Members Options Save Cancel


Location	Dimension	Map Type	Add a Filter			
VF Quick File	Account	All				
Source	Target	Processing Order	Description	Apply To	Change Sign	
• RECORDS=AA-ZZZZZ-9999	9999	#00		VF Quick File	<input type="checkbox"/>	
• 1000	IGNORE	#99			<input type="checkbox"/>	
Q 11*	110	#01			<input type="checkbox"/>	
Q 12*	120	#02			<input type="checkbox"/>	
Q 13*	130	#03			<input type="checkbox"/>	
Q 14*	140	#04			<input type="checkbox"/>	
Q 15*	150	#05			<input type="checkbox"/>	

Page 1 of 1 (1-7 of 7 items) 1

30. オプションで、マッピングを選択して  をクリックすると、メンバー・マッピングを編集できます。

マッピングを選択して  をクリックすると、メンバー・マッピングを削除できません。

31. 統合を実行します:

- 「データ統合」ホーム・ページから、ファイルベース・ロードのクイック・モードに関連する統合ジョブを選択し、 をクリックします。
- 統合の実行ページで、「モード」のデフォルト値は「置換」です。

- c. **オプション**・ページで期間が定義されなかった場合、「**期間**」ドロップダウンから、データのロード元のソース・ファイルの単一期間を選択します。

統合のディメンションのマッピング・ページで期間ディメンションをマップし、期間のターゲット式を指定している場合、「**期間**」ドロップダウンは選択に使用できません。期間がマッピングから導出されるためです。

ファイルベース・ロードのクイック・モードでの期間の定義

ファイルベース・ロードのクイック・モードにおける期間処理では、「期間マッピング」オプションで定義された期間は使用されません。かわりに、期間はその他のディメンションと同様に処理され、ソース・ファイルのヘッダー・レコードから導出できます。ソース・ファイルに期間および年ヘッダー・レコードがない場合は、ロードを実行するときに開始期間と終了期間を指定するように求められます。その場合、すべてのデータが単一の期間にロードされます。もう一つの選択肢は、特定の形式の `toPeriod` および `toYear` ターゲット式タイプを使用して、ヘッダー・レコードからソース・システム期間に基づいて期間ディメンションを導出することです。「期間」ディメンションで使用できるその他のターゲット式には、`substring()`、`split()` および `map()` があります。

ファイルのページ

データ統合を使用してデータをロードする場合は常に、次の3つのタイプのファイルが保管されます:

1. アップロードしたファイル。これは `inbox` ディレクトリに保管されます
2. エクスポート・ファイル。これは `outbox` ディレクトリに保管されます
3. データ・ファイル。これは `data` ディレクトリに保管されます。

これらのファイルはすべてサーバーで保持され、時間の経過とともに、ディスク・ストレージ・スペースがいっぱいになる可能性があります。その場合、管理者はデータ管理で「アプリケーション・フォルダの保持」オプションを使用して、これらのファイルの一部を削除できます。このオプションを使用すると、`inbox`、`outbox` および `data` フォルダのディレクトリからファイルをページできます。データ管理では、フォルダごとに別々の保持日数パラメータを受け入れます。特定のフォルダに値を指定しないと、データ管理はそのフォルダをスキップします。

また、データ管理では、それぞれのフォルダの下にある `inbox` および `outbox` サブディレクトリを確認して、ファイルがある場合は削除します。`data` サブディレクトリでは、`scripts` ディレクトリにはカスタム・スクリプトが保持されているため、データ管理でこのディレクトリはスキップされます。

詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理*のアプリケーション・フォルダの保守を参照してください。

直接統合の作成

他の Oracle Cloud サービス(即時利用可能な統合またはパッケージされた統合)に直接接続できるお客様は、ソース・データを定義し、データを必要なターゲット・フォーマットに変換するためのマッピング・ルールを作成し、定期的なデータ・ロード・プロセスを実行および管理します。



直接統合を作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページで、**+** (作成)をクリックし、「**統合**」を選択します。「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。
2. 「**名前**」および「**説明**」に、新しい直接統合の名前および説明を入力します。
3. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。

ロケーションは、ソースおよびターゲットを関連するメンバー・マッピングとともにリンクするために使用されます。異なるオプションおよびフィルタ条件を使用して、複数の統合を同じロケーション内で定義できます。ロケーションは主に、統合へのアクセスを制御するために使用されます。「ロケーションのセキュリティ」を使用して、エンド・ユーザーへのアクセスを制御できます。

新しいロケーションを入力する場合は、ソースおよびターゲットを指定する必要があります。統合を保存すると、データ統合によってロケーションが自動的に作成されます。

既存のロケーションを選択した場合は、データ統合によって「ソース」と「ターゲット」の値が自動的に移入され、それらを変更することはできません。

4.  (ソースの選択)をクリックします。
5. 「**ソースの選択**」ページから、直接統合ソース・システムを選択します。
6.  (ターゲットの選択)をクリックします。
7. 「**ターゲットの選択**」ページから、ターゲット・アプリケーションを選択します。
8. 「**保存**」をクリックします。

ディメンションのマッピング

ソース・データをアプリケーションのターゲット・ディメンションにマップします。また、式を使用して簡単な変換ルールを定義できます。

ファイルベース統合についてディメンションをマップする際、ソース・ファイルにヘッダー・レコードがある場合またはプレビュー・セクションで列見出しを定義した場合は、それぞれのディメンションのソース列を選択します。データ統合によって自動的に列番号が決定され、列番号が移入されます。列番号を手動で入力することもできます。


直接統合については、ソース・アプリケーションからディメンションを選択し、ターゲット・アプリケーションのディメンションにマップできます。

ファイルベース統合と直接統合のソースについてはどちらも、ソースおよびターゲット・ディメンションを操作するソースおよびターゲット式も適用できます。

ディメンションおよびメンバーのマッピングの詳細は、次のチュートリアルを視聴してください: [Enterprise Planning Cloud でのファイルベース・データ統合用のディメンションおよびメンバーのマッピング](#)

ディメンション・マップの作成

ディメンションをマッピングするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。

2. 「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。

ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。

3. **ファイルベース・ソースのみ: 「タイプ」** から、ファイルのフォーマットを選択します。

使用可能なオプション:

- 区切り - 区切りファイル・フォーマットから数値データをロードします。
- 複数列の数値 - 選択したディメンションの複数のディメンション・メンバーの数値データを、1行のデータでロードします。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダー・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。

ノート:

複数列フォーマット・タイプは、EPM 統合エージェントを使用して、オンプレミス・データ・ソースからデータまたはメタデータのサブセットをインポートして Oracle Enterprise Performance Management Cloud に直接ロードする場合は使用できません。かわりに、各金額を単一行にピボットする必要があります。ディメンションのピボットの詳細は、[データ・エクスポートのターゲット・アプリケーション・オプション](#)を参照してください。

- 区切り - すべてのデータ型 - 区切りファイル・フォーマットからすべてのデータ型をロードします。
- 複数列 - すべてのデータ型 - 選択したディメンションの複数のディメンション・メンバーのすべてのデータ型を、1行のデータでロードします。ロードするメンバーの定義は、ロード・ファイルのヘッダー・レコードまたはインポート・フォーマット定義に含めることが可能です。

ノート:

現時点では、「固定幅 - 数値データ」および「固定幅 - すべてのデータ型」はサポートされていません。

4. 「**ドリル URL**」で、ドリルスルーに使用する URL を指定します。

ノート:

Oracle Enterprise Performance Management Cloud および Oracle ERP Cloud GL のデータ・ソースには該当しません。

5. **ファイルベース・ソースのみ: 「区切り文字」** から、出力ファイルの列の区切りに使用する文字を選択します。

区切りファイルには1つ以上のレコードが含まれ、指定した区切り文字で各レコードの間隔が設定されます。

使用可能なオプション:

- カンマ(,)
- パイプ(|)
- 感嘆符(!)
- セミコロン(,)
- コロン(:)
- タブ
- チルダ(~)

6. マッピング・グリッドで、ソース・データロード・ファイルのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。


ターゲット・アプリケーションのディメンションが自動的に移入されます。

ファイルに対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。

新規のインポート・フォーマットを追加する場合や、既存のインポート・フォーマットを編集する場合は、次の手順を実行します:

- 「列」で、ファイルからインポートするフィールド番号を指定します。
- 「ソース・ディメンションの選択」で、ターゲット・アプリケーションに割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。
 同じディメンションの複数のソース列をターゲット・ディメンションにマッピングできます。たとえば、4つの"Account"ソース列をマッピングできます。
- ソースまたはターゲットの式を追加します。ソースまたはターゲットから直接値を操作する式を割り当てます。

[ソース式の使用](#)および[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

7. **オプション:** カンマ区切りファイルの場合、行の右側にある  をクリックし、追加する行をドロップダウンから選択することにより、インポート・フォーマットにマッピングする追加行を選択します。

使用可能な行:

- ソース期間
 - 年
 - 期間
 - 期間番号
- 通貨
- 属性
- 説明
- ディメンション行
 - 勘定科目
 - バージョン
 - エンティティ

– 表示


インポート定義のオプション	説明
スキップ	<p>「スキップ」オプションは、スキップする入力ファイル内の行を指定する場合に使用します。たとえば、データがない行や負の数の行、あるいは特定の勘定科目の行です。スキップ行の指定は、データ行と同じ方法で定義されます。システムは、入力ファイル内の指定されたロケーションで、「式」フィールドに入力されたテキストと完全に一致するテキストを検索します。</p> <p>データ統合は、金額のロケーションにスペースや数値以外の文字がある入力ファイルの行を自動的にスキップします。このため、スキップの指定が必要になるのは、入力ファイルの行の金額と同じロケーションに金額以外のデータが存在する場合のみです。たとえば、入力ファイルに"date"という名前のラベルが含まれる場合があります。エントリをスキップ行に追加して、テキスト"date"の開始列、テキスト長、照合のための正確なテキストを指定します。</p> <p>「スキップ」行オプションは、固定と区切りのどちらのファイル・タイプでも使用できます。</p>
属性	<p>ファイルまたはその他のデータ・ソースから最大 40 個の属性フィールドをインポートできます。ファイルについては、入力フィールドの場所を指定し、その他のデータ・ソースについては、ソース・アプリケーションからソース・ディメンションを指定できます。式を使用して固定値を代入することもできます。</p> <p>属性フィールドは、通常はドリルスルー URL の作成や、履歴またはドキュメントのニーズのために使用されます。</p>

 ノート:



Financial Consolidation and Close または **Tax Reporting** のソースを明示期間マッピング・タイプと統合する場合、マッピング年(SRCYEAR)およびマッピング期間(SRCPERIOD)が **ATTR2** 列に、年が **ATTR3** 列に格納されます。このため、**Financial Consolidation and Close** または **Tax Reporting** からデータをインポートするときは、属性列 **ATTR2** および **ATTR3** を他のディメンション・マッピングに使用しないでください。

同様に、増減のソース属性をターゲット・ディメンションにマップするときは、増減を **ATTR1** 列にマップするための別のマップが自動的に作成されます。

インポート定義のオプション	説明
説明	2つの説明列をインポートし、これらの列を属性列と同じ方法でロードできます。説明を含む入力行にロケーションを指定するか、明示的な値を指定できます(マッピング表の「式」フィールドに値を入力)。
通貨	データ統合では、選択したロケーションのデフォルト通貨と異なる通貨のデータをロードできます。このオプションを使用すると、入力行に、関連する金額フィールドの通貨を指定するロケーションを指定できます。ファイル・インポート・フォーマットでは、データの各行に通貨を指定するか、選択したインポート・フォーマットを使用するロケーションに通貨を指定します。
ソース期間	期間ディメンションは、データ・ファイルの列としてサポートされます。1つのファイルに複数期間のデータがある場合、ターゲット・アプリケーションにロードされるデータ・ファイルの各データ行に年と期間を含めることができます。インポート・フォーマットからロード定義を定義し、統合の実行時にソース期間を選択することによって、データ・ファイルから期間を列としてロードします。
ディメンション行	データ統合では、ディメンション指定が同じ行の複数のロケーションに渡るときに、インポート・フォーマットで1つのディメンションに複数のエントリを指定できます。この機能を使用すると、ファイルベースのデータのフィールドを連結できます。このオプションを使用するには、ディメンションを選択して、開始位置と終了位置および式を選択します。

 **ノート:**

通貨が正しく指定されない場合は、データをロードするときに問題が発生することがあります。

8. **オプション:** インポート・フォーマットの行を複製するには、複製する行の右側にある  をクリックし、ドロップダウンから「複製」をクリックします。
9. **オプション:** インポート・フォーマットから行を削除するには、削除する行の右側にある  をクリックし、ドロップダウンから「削除」をクリックします。
10. 「保存」をクリックします。

ターゲット式の使用

データをインポートする際、マップされたディメンションにターゲット式を適用できます。ターゲット式を使用して、ソースから読み取ったソース値をターゲット・アプリケーションにロードするターゲット・ディメンション値に変換できます。これらの式をメンバー・マッピングのかわりに使用して、単純なデータ変換を実行できます。

インポート式を使用する大規模なデータ・セットの場合、変換によってデータ・ロードのパフォーマンスが向上します。



サポートされるターゲット式タイプは次のとおりです。


- ソース値のコピー
- 接頭辞
- 接尾辞
- マップ
- 部分文字列
- 置換
- デフォルト
- Rtrim
- Ltrim
- Rpad
- Lpad
- 定数
- 丸め
丸め式は、金額ディメンションにのみ使用できます。
- 条件
- 分割
- SQL
- 大文字
- 小文字
- プロセス・マップ

 ノート:

丸め式タイプを除き、ターゲット式タイプは金額ディメンションや属性、通貨、スキップ行に適用できません。

ターゲット式を割り当てるには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. マッピング・グリッドで、ディメンションの右にある  をクリックし、「**ターゲット式の編集**」を選択して、ターゲット式の追加先のターゲット値を選択します。
3. **ターゲット式の編集** ページで、「**式タイプ**」をクリックし、ターゲット式を選択します。
4. 「**ターゲット式の編集**」画面で「**式タイプ**」をクリックし、ターゲット式を選択します。
5. ターゲット式に関連付けるすべてのパラメータを選択し、「**OK**」をクリックします。

ページに表示されるパラメータは、式タイプによって異なります。
ターゲット式タイプを削除するには、をクリックします。

ソース値のコピー

ソースの値をターゲットにコピーするには、ソースのコピー式タイプを使用します。
パラメータは、`copysource()`です。

接頭辞

固定の接頭辞を文字列に追加するには、「接頭辞」式タイプを使用します。
パラメータは、`prefix`です。

たとえば、接頭辞文字列 **LE01** をパラメータで指定するには、式 `prefix("LE01")` を使用します。

マップ

「マップ」式は、ソース値をターゲット値にマップするために使用します。



Note:

「マップ」式タイプは、ファイルベースのクイック・モードのターゲット式でのみ使用できます。

パラメータは `(null,)` です。

たとえば、ソース期間 **Jan**、**Feb**、**Mar** をターゲット期間 **P1**、**P2**、**P3** にマップする場合の式は `map(PERIOD, Jan:P1|Feb:P2|Mar:P3)` です。最初のパラメータとして、ディメンション名または式の **1** つを使用できます。

接尾辞

固定の接尾辞を文字列に追加するには、「接尾辞」式タイプを使用します。

パラメータは、`suffix("")` です。たとえば、接尾辞 **East** をカスタム・コード・ディメンションに追加するには、式として `suffix("East")` と指定します。

部分文字列

文字位置(開始位置)と部分文字列長(抽出する文字数)に基づいて文字列から文字を抽出して返すには、部分文字列式タイプを使用します。

`substr(Dimension, position, length)` という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、ソース・エンティティ番号が **"031010"** の場合、**2** 番目の文字位置から始まり、長さが **5** の部分文字列を返すには、式として `substr(Entity, 2, 5)` を指定します。この例では、結果は **31010** です。

置換

文字列を検索して特定の置換値と置き換えるには、「置換」式タイプを使用します。(置換値は、文字列内の文字にできます。)

`replace(Dimension, "x", "0")`という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、勘定科目番号が"123x456x"で、"x"を"0"に置き換える場合、式として `replace(ACCOUNT, "x", "0")`と指定します。この例では、結果は **12304560** です。

デフォルト

ソースが空白の場合にデフォルト値を割り当てるには、「デフォルト」式タイプを使用します。そうでない場合は、ソース値を割り当てます。

`default(Dimension, "Default Value")`という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、デフォルト値"**Working**"をユーザー定義の"**Version**"ディメンションに割り当てるには、`default(UD1, "Working")`を式として指定します。この例では、結果は **Working** です。

Rtrim

文字列の末尾(右側)の文字を削除するには、**Rtrim** 式タイプを使用します。

`rtrim(Dimension, "0")`という形式に従ってパラメータを使用し、ディメンションと削除する文字の両方を指定します。たとえば、ソースが"**123000**"で、末尾の"**0**"をすべて削除するには、式として `rtrim(Dimension, "0")`と指定します。この例では、結果は **123** です。

Ltrim

文字列の先頭(左側)の文字を削除するには、**Ltrim** 式タイプを使用します。

`ltrim(Dimension, "0")`という形式に従ってパラメータを使用し、ディメンションと削除する文字の両方を指定します。たとえば、ソースが"**000123**"で、先頭の"**0**"をすべて削除するには、式として `ltrim(Dimension, "0")`と指定します。この例では、結果は **123** です。

Rpad

文字列の右側を指定した長さまで特定の文字で埋めるには、**Rpad** 式タイプを使用します。式の長さより短い長さの値を指定すると、**Rpad** によって式が指定した長さに切り捨てられます。埋め込む文字が指定されていない場合、スペースがデフォルトの埋込み文字です。

`rpad(Dimension, length, "characters to pad")`という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、勘定科目値 **1234** の右側をゼロで埋めて **6** 文字の長さにするには、式として `rpad(Dimension, 6, "0")`と指定します。この例では、結果は **123400** です。

Lpad

文字列の左側を指定した長さまで特定の文字で埋めるには、**Lpad** 式タイプを使用します。式の長さより短い長さの値を指定すると、**Lpad** によって式が指定した長さに切り捨てられます。埋め込む文字が指定されていない場合、スペースがデフォルトの埋込み文字です。

`lpad(Dimension, length, "characters to pad")`という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、勘定科目値 **1234** の左側をゼロで埋めて **5** 文字の長さにするには、式として `lpad(Dimension, 5, "0")`と指定します。この例では、結果は **01234** です。

定数

定数値を列に割り当てるには、定数式タイプを使用します。ターゲット列の場合、ソース列に関係なく定数が適用されます。

パラメータは、constant("")です。たとえば、値"P_001"を **Product** 列の各行に割り当てるには、constant("P_001")と指定します。この例では、結果は P_001 です。

丸め

丸め式タイプを使用して、金額ディメンションのターゲット式で、指定した小数の長さ(精度値)で数字を丸めます。

丸め式では、-12 から 12 までの精度値を指定できます。

round(AMOUNT,<decimal_precision>)という形式のパラメータを使用します

この例では、丸め式 round(AMOUNT,1)により、小数点以下 1 桁で丸められます:

金額値の例:	結果
10.18	10.2
10.14	10.1
10.15	10.2

この例では、丸め式 round(AMOUNT,1)により、1 の位で丸められます:

金額値の例:	結果
10.18	10
10.5	11
10.491	10

丸めの精度値は負にできます(-2 など)。丸めの精度が負の場合、丸めは小数の右ではなく左で行われます。

たとえば、金額が 574.194 の場合に-2 の丸め式を使用すると、結果は 600 です。(round(574.193,-2))。

条件

if-then-else 文を指定して、条件が真と評価された場合はある値を返し、偽と評価された場合は別の値を返すようにするには、条件式タイプを使用します。

パラメータは、condition=()です。たとえば、勘定科目値が"1100"の場合は"Cash"を返し、1300-101 の場合は"ShortTermRec"を返し、1300-102 の場合は"AccruedTax"を返し、null または""の場合は"No Member"を返すには、次の式を使用します。

```
if (ACCOUNT == "1100") return "Cash"
else if (ACCOUNT == "1300-1"else return Liability 01") return
"ShortTermRec"
else if (ACCOUNT == "1300-102") return "AccruedTax"
```

```
// if then with or/and
if (ACCOUNT == null or ACCOUNT == "") return "No Member"
```

条件ソース式で、ユーザーは **RECORD** という用語を使用して、選択したディメンションだけでなく、式の入力行全体を参照できます。例:

例:

サンプル入力ファイルが次の場合:

```
account,entity,icp,100
```

サンプル式は次のとおりです:

```
if (split(RECORD,"",3)=="icp") return "icp 2022"
```

結果のソース値は次に設定されます **"icp 2022"**。ソースが式を使用して設定されると、必要に応じてソースを変換するためにターゲット式またはマッピングを使用できます。

分割

区切り文字に基づいてソースの値を分割し、値を分割した後の n 値を返すには、分割式タイプを使用します。この式タイプは、文字列を区切って分割する場合に便利です

`split(Dimension, "delimiter", component number)` という形式に従ってパラメータを使用し、文字列を区切る区切り文字と返す構成要素を選択します。たとえば、ソースの勘定科目番号が **110-20-312300-500** で、文字列の 3 番目の構成要素が必要な場合、`split(ACCOUNT, "-", 3)` と指定します。この例では、結果は **312300** です。

SQL

SQL INSERT 文で値に使用できる任意の SQL 式を割り当てるには、「SQL」式タイプを使用します。ソース値を使用するには、値を **\$ \$** で囲みます。たとえば、**UD1** を参照する場合、**\$UD1\$** と指定します。ソース式には 1 つのソース値のみを使用します。

ノート:

\$MyAccount\$ などのようにディメンション名は使用することはできません。インポート・フォーマットで使用されているディメンションのみを参照できます。**TDATESEG** 表のどの列も参照できません。(ディメンションの列の名前は、アプリケーション詳細ページの「データ表列名」フィールドでわかります。)

パラメータは、`sql("")` です。たとえば、**UD4** ソース値が **"031010"** の場合は値 **"S1"** を返し、それ以外の場合は値 **"S2"** を返すには、`sql("CASE WHEN $UD4$ = '031010' THEN 'S1' ELSE 'S2' END")` という SQL 式を指定します。

toPeriod

ソース・システムの期間名に基づいて期間ディメンション・メンバーを導出するには、**toPeriod** ターゲット式タイプを使用します。

単純な Java 日付形式を使用して、ソース期間名の形式を提供します。たとえば、ソース期間が **Jan-20** の場合、期間ディメンション名を導出するには、式 `toPeriod(PERIOD, "MMM-yy", "Mon")` を使用します。

toYear

ソース・システムの期間名に基づいて年ディメンション・メンバーを導出するには、`toYear` ターゲット式を使用します。

単純な Java 日付形式を使用して、ソース期間名の形式を提供します。たとえば、ソース期間が **Jan-20** の場合、年ディメンション名を導出するには、式 `toYear(YEAR, "MMM-yy", "FY+YY")` を使用します。

大文字

大文字式タイプは、列を大文字に変換するために使用します。

パラメータは `()` です(たとえば、`upper()`)。

小文字

小文字式タイプは、列を小文字に変換するために使用します。

パラメータは `()` です(たとえば、`lower()`)。

プロセス・マップ

プロセス・マップ式は、マップするメンバーとしてディメンションを明示的に指定する場合に使用します。

パラメータは `processMap()` です。

Note:

プロセス・マップ式タイプは、ファイルベースのクイック・モードのターゲット式でのみ使用できます。

ソース式の使用

データをインポートする際、ソース・ディメンションにソース式を適用できます。ソース式を使用して、ファイルから読み取られたソース値を拡張および変換できます。たとえば、`Rpad` 式タイプを使用してソース・ディメンション値の右側にパディング(文字を追加)し、特定の長さになるようにします。

金額ソース・ディメンションの場合、次のソース式タイプを使用できます。

- **Fill:** [ヨーロッパ式表記から米国式表記への変換\(Fill\)](#)を参照してください。
- **DRCRSplit:** [借方と貸方の列の表示\(DRCRSplit\)](#)を参照してください。
- **Sign:** [標準以外の数値符号規則の使用\(Sign\)](#)を参照してください。
- **Factor:** [整数係数および小数係数による乗算\(Factor\)](#)を参照してください。

- **NZP: ゼロの抑制の使用不可(NZP)**を参照してください。

金額ディメンションに対するソース式の適用の詳細は、[金額ディメンションに対するソース式の使用](#)を参照してください。



金額以外のソース・ディメンションには、次のソース式タイプを使用できます。


- [接頭辞](#)
- [接尾辞](#)
- [連結](#)
- [部分文字列](#)
- [置換](#)
- [デフォルト](#)
- [Rtrim](#)
- [Ltrim](#)
- [Rpad](#)
- [Lpad](#)
- [定数](#)
- [条件](#)
- [分割](#)

ノート:

ソースには SQL を除くすべてのターゲット式を使用できます
ソースには SQL を除くすべてのターゲット式を使用できることに注意してください

ソース式を割り当てるには:


1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. 「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. **ファイルベースのソースのみ**。オプション: 「**タイプ**」でファイルのフォーマットを選択します。
ファイル・フォーマットの詳細は、[ディメンション・マップの作成](#)を参照してください。
4. マッピング・グリッドで、ディメンションの右にある  をクリックし、「**ソース式の編集**」を選択して、ソース式の追加先のソース値を選択します。
5. 「**ソース式の編集**」画面で「**式タイプ**」をクリックし、ソース式を選択します。

 **ノート:**

金額ディメンションに適用できるソース式タイプは、Fill、DRCRSplit、Sign、Factor および NZP です。複数のソース式を金額ディメンションに適用することもできます。金額ディメンションには、定数、Lpad および Rpad の式タイプは使用できません。

6. 「ソース式の編集」画面から、ソース式に関連付けるすべてのパラメータを選択し、「OK」をクリックします。

ページに表示されるパラメータは、式タイプによって異なります。

ソース式タイプを削除するには、 をクリックします。

金額ディメンションに対するソース式の使用

金額ソース・ディメンションの場合、次のソース式タイプを使用できます。

- Fill - [ヨーロッパ式表記から米国式表記への変換\(Fill\)](#)を参照してください。
- DRCRSplit - [借方と貸方の列の表示\(DRCRSplit\)](#)を参照してください。
- Sign - [標準以外の数値符号規則の使用\(Sign\)](#)を参照してください。
- Factor - [整数係数および小数係数による乗算\(Factor\)](#)を参照してください。
- NZP - [ゼロの抑制の使用不可\(NZP\)](#)を参照してください。

ソース式タイプの適用の詳細は、[ソース式の使用](#)を参照してください。

ヨーロッパ式表記から米国式表記への変換(Fill)

数値フォーマットを変換するキーワードを使用して金額ディメンションに入力するには、Fill 式タイプを使用します。通常、Fill は、パラメータ fill=EuroToUS として使用し、(,)から(.)への数値フォーマットの変換をトリガーします。

パラメータは、fill=です。たとえば、fill=EuroToUS と指定すると、10.000,00 が 10,000.00 に変換されます。

標準以外の数値符号規則の使用(Sign)

標準以外の数値符号規則を管理するには、Sign 式タイプを使用します。前後にマイナス記号の付いた数値、およびカッコで囲まれた数値は、負数と解釈されます。他の先行文字や後続文字を使用して負数を表すこともできます。

<>の間の数も負数として扱われます。たとえば、(100.00)および<100.00>を指定した場合、両方とも負数として扱われます。

正数が符号なしの(1,000.00)で、負数の後に CR (1,000.00CR)が続く場合、式は Sign=,CR になります。

Sign=[Positive String],[Negative String]という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、正数の後に DR (1,000.00DR)、負数の後に CR (1,000.00CR)が続く場合、Sign=DR,CR と指定します。

整数係数および小数係数による乗算(Factor)

ソース・ファイルの金額にユーザー定義の値を掛けるには、**Factor** 式タイプを使用します。このタイプの式を使用すると、数値因子によりファイル内のデータを拡張できます。この式を使用すると、データを2倍または半分にできます。

Factor=という形式に従ってパラメータを使用し、データを乗算するためのユーザー定義の整数または小数を指定します。たとえば、金額を **12500** から **12500000** に変換するには、Factor=1000 を使用します。

借方と貸方の列の表示(DRCRSplit)

固定フォーマットのテキスト・ファイルの分割数値列を解析するには、**DRCRSplit** 式タイプを使用します。デフォルトでは、「金額」フィールドの数値が借方であるとみなされます。ただし、借方値を左側、貸方値を右側に各自配置できます。

この式を使用するには、借方の開始(たとえば、列 **56**)と、貸方列の終わりまでの列の長さ(たとえば、**40** 文字)を指定します。中間点は **20** で、**20** の左側の数字は借方、右側の数字は貸方です。

drcrsplit=Mid Point of the DR and CR columns という形式に従ってパラメータを使用します。たとえば、式 drcrsplit=16 を使用して、中間点(**16**)の左側の数字が借方で、中間点(**16**)の右側の金額が貸方であることを指定します。

ファイルのインポート時は、貸方金額には負の符号が割り当てられ(したがって、正数として解釈されます)、借方金額は変更されないままです(したがって、負数として解釈されます)。

ゼロの抑制の使用不可(NZP)

データ・ロード・プロセス時にゼロの抑制を無効にする場合、**NZP** 式を使用します。デフォルトでは、ゼロ・バランスのある試算表の勘定科目はバイパスされます。環境によっては、勘定科目をすべてロードして、ゼロである必要がある値を確実に置換する必要があります。「勘定科目」フィールドの「式」列に **NZP** と入力すると、ゼロの抑制を使用不可にできます。

パラメータは、**NZP** です。

連結

連結式タイプでは、異なる列のテキストを組み合わせて、区切り文字で列名を区切った新しい列を作成できます。たとえば、連結式タイプのパラメータ ("**1-5**", "*****")を使用すると、列 **1-5** のテキストを組み合せ、アスタリスク(*****)区切り文字で列名を区切った新しい列が作成されます。

連結式タイプのパラメータは、 ("**","**")パラメータです。

連結式タイプは、ファイルベースのクイック・モードのソース式でのみ使用できます。

Account Reconciliation マージ残高ディメンションの追加


データをロードするときに、**Account Reconciliation** のお客様は、変更された残高のみをマージし、同じロケーションの既存のデータを保持できます。このオプションにより、データが **Account Reconciliation** に最後にロードされたとき以降に変更された残高が少数である場合に、データ・ファイル全体のロードを実行する必要がなくなります。このプロセスでは、お客様は、ターゲット・アプリケーションにロードされる新しい残高ごとにマージ **ID** ディメン

ションを設定する必要があります。プロファイル・セグメントを構成する個別のディメンションすべてを通貨とともにマージ ID にマップする必要があります。

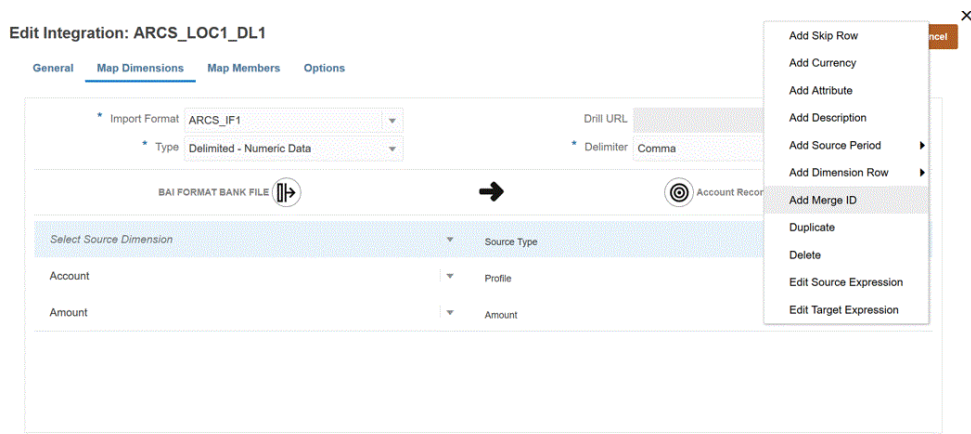
 **ノート:**

Account Reconciliation からデータ統合への正しいドリル・バック結果を確保するには、ロードする新しい残高ごとに新しいマージ ID を追加する必要があります。

マージ残高ディメンションをマップするには:

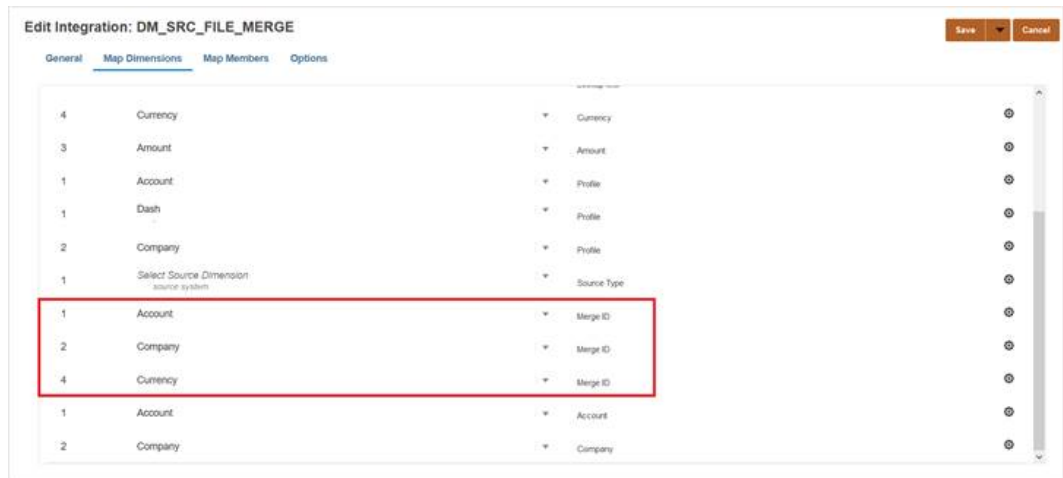
1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にあり、マージ残高を追加するための「**...**」をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. 「ディメンションのマッピング」から、統合に関連付けられるインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3.  をクリックし、「**マージ ID の追加**」をクリックします。

空白のソース・ディメンション行がソース・タイプ「**マージ ID**」で追加されます。



4. 「**ソース・ディメンションの選択**」ドロップダウンから、プロファイル・セグメントを構成する個別のディメンションすべてを通貨とともにマージ ID にマップします。

たとえば、勘定科目と会社がプロファイル・セグメントを構成する場合、マージ ID 行を 3 回追加し、合計 3 行(勘定科目、会社、さらに通貨用)のマージ ID をマップします。



5. 「保存」をクリックします。
6. 「データ統合」 ホーム・ページから、統合を選択し、▶をクリックします。
7. 統合の実行ページで、「オプション」タブを選択します。
8. 「インポート・モード」ドロップダウンから、「マージ」を選択します。
9. 「エクスポート・モード」ドロップダウンから、「エクスポートしない」を選択します。
10. 必要に応じて期間を選択します。
11. 「実行」をクリックします。

メンバーのマッピング

メンバーのマッピングによって、ソース値をそれぞれのターゲット・ディメンションの有効なメンバーに変換できます。特定のディメンションのターゲット・メンバーを導出するターゲット式を定義している場合、メンバー・マッピングを定義する必要はありません。条件付きターゲット式を使用すると、条件の対象とならない残りのソース値についてメンバー・マッピングを定義できます。ターゲット式を使用してデータ変換を実行できる場合は、メンバーをマップするのではなく、それを使用することを強くお勧めします。データ・セットが大きい場合、ターゲット式を使用した変換ではメンバー・マッピングと比べてパフォーマンスが大幅に向上します。

マッピングは、親口ケーションを使用して複数の統合で共有できます。マッピングは、勘定科目、エンティティ、ICP、UD1、UD2 などというデフォルトの順序で各ディメンションについて処理されます。アプリケーション定義で計算シーケンスを変更することによって、マッピング順序を上書きできます。


メンバー・マッピングの追加

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。

メンバー・マッピングを追加するには:



1. 「データ統合」 ホーム・ページから、統合の右側にある ******* をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。

- 別の統合からマップを共有する場合は、「**ロケーション参照**」を選択します。
現在の統合のマップを定義する場合にロケーション参照を指定する必要があります。
- 「**ディメンション**」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。
- +** をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。

また、マッピングを選択して「編集」アイコン  をクリックすると、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。

- メンバー・マッピングの追加** ページの「ソース」で、「マッピング・タイプ」ドロップダウンからメンバー・マッピング・タイプを選択し、ソース値を指定します。
メンバー・マッピングのタイプ:

マッピングのタイプ	説明	関連項目
== Explicit	<p>ソース値をターゲット値と照合して、完全一致したターゲット値で置換します。</p> <p>明示マッピングは、1対1のマッピングです。たとえば、ソース値"ABC"はターゲット値"123"に置換されます。</p>	「明示」マッピングの使用
↔ Between	<p>連続したソース値範囲を1つのターゲット値で置換します。</p> <p>たとえば、「001」から「010」までの範囲が1つの値に置換されます。</p> <p>別の例として、300000から3001999までの勘定科目を利益剰余金にマッピングするが、勘定科目310000を資本拠出または配当にする必要があるとします。</p>	「範囲」マッピングの使用
IN in	<p>1つのターゲット値にマッピングする非シーケンシャルな(連続しない)ソース値をリストします。</p> <p>この場合、1つのマッピング内で複数の値が1つの値にマッピングされるため、(明示マップでは必要な)複数のルールを作成する必要がなくなります。</p> <p>たとえば、ソース勘定科目1503、1510および1515をターゲット勘定科目15000010にマッピングできます。</p>	「含む」マッピングの使用

マッピングのタイプ	説明	関連項目
 Is Like	<p>特殊文字を使用して、ソース値の文字列を照合し、それをターゲット値にマッピングします。</p> <p>類似マッピングでは、アスタリスク(*)および疑問符(?)のワイルドカード文字を使用します。アスタリスクは、任意の数の文字を表すプレースホルダです。</p> <p>たとえば、1190*と指定すると、勘定科目 1190、1190100 および 1190-200 が現金ターゲット勘定科目にマッピングされます。</p> <p>疑問符は、1文字を表すプレースホルダです。たとえば、119?というソース勘定科目は、119 で始まる 4文字を含むソース勘定科目のみにマッピングされます。</p>	「類似」マッピングの使用
 Is Multi Dimensional	<p>マルチディメンション・マッピングを使用すると、ソース列値の特定の組合せに対してターゲット値を割り当てることができます。</p> <p>この機能を使用すると、ターゲット・アプリケーションで使用可能でないディメンションにデータをロードできません。</p> <p>たとえば、勘定科目ディメンションのマッピングは、エンティティ、製品およびプロジェクトのソース値に基づいて定義できます。</p> <p>さらに、ターゲット・アプリケーション登録に追加された参照ディメンションを選択できます。これらのディメンションは、ターゲット・アプリケーションに存在しないソース・ディメンションを含みます。これらにより、マルチディメンション・フィルタの作成の柔軟性が増します。これで、条件付きのデータ・ロードが容易になります。</p>	マルチディメンショナル・マッピングの使用

マッピングのタイプ	説明	関連項目
.* Regular Expression	<p>テキストの一致パターンを指定する文字列を使用する正規表現。</p> <p>このマッピング・タイプはソース・レコードでのみ使用可能です。</p> <p>Java 対応の正規表現のみを使用できます。</p> <p>たとえば、ソース・レコードで5桁が含まれる行を無視する正規表現を適用する場合は、.*\d{5}と指定し、ターゲットでIGNOREと指定します。</p> <p>その他の例:</p> <p>110[1-9]{3}999 -先頭が110で、任意の3つの数字が続き、末尾が999</p> <p>^[A-Z][1-5]{5} -先頭がアルファベットの大文字、その後で1から5までの5つの数字が続く</p> <p>^1[1-5]{5}9{3} -先頭が1で、1から5までの任意の5つの数字が続き、末尾が999</p>	<p>参照:</p> <ul style="list-style-type: none"> 演習: 正規表現 正規表現

 **ノート:**


「正規表現」マッピング・タイプは、クイック・モード・ファイル・ベース・ロードで使用できません。

詳細は、[ファイルベースのロードでのクイック・モードの使用](#)を参照してください。

 **ノート:**

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。「範囲」タイプと「類似」タイプ間ではマッピングが重複する場合があります。

6. 「**ターゲット**」に、ディメンション・メンバー名のターゲット値を入力します。

個々のメンバーをターゲットとして入力することも、 をクリックし、メンバー・セレクタを使用して値を選択することもできます。

7. 「**処理順序**」で、マッピングの順序を指定します。

マッピング・タイプ内の優先度レベルは、処理順序により決定されます。マッピングは、マッピング・タイプ内の名前前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、十単位または百単位で採番する場合は、既存の値の間に新しい値を挿入できます。マッピングに10、20および30の番号が付いている場合は、25から開始するマッピングを追加でき、他のマッピングの名前を変更する必要はありません。


8. 「**説明**」にマッピングの説明を入力します。
9. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転させる場合は、「**符号の変更**」を選択します。

このオプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号が負数の場合に一般会計ソース・データで使用します。アプリケーションで

は、多くの場合、数値は正の値として格納されるため、符号の変更オプションを使用して貸方残高を正にすることができます。


10. 「OK」をクリックします。

オプションで、マッピングを選択して  をクリックすると、メンバー・マッピングを編集できます。

マッピングを選択して  をクリックすると、メンバー・マッピングを削除できます。

Add Member Mapping Previous Next

* Source

* Target 

Processing Order



Description

Change Sign


OK Cancel

「明示」マッピングの使用

「明示」メンバー・マッピングを使用するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2. 「編集」をクリックします。
3. 「ディメンション」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。
4.  をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。

また、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。

5. 「ソース」で、「マッピング・タイプ」ドロップダウンから  をクリックし、ソース値を指定します。

ノート:

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。




6. 「ターゲット」に、ディメンション・メンバー名のターゲット値を入力します。
7. 「説明」にマッピングの説明を入力します。
8. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転させる場合は、「符号の変更」を選択します。

このオプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号が負数の場合に一般会計ソース・データで使用します。Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションでは、正数は貸方としてロードされることが多く、負数はすべて借方としてロードされます。その結果、符号を反転させることができます。

9. 「保存」をクリックします。

「範囲」マッピングの使用

「範囲」メンバー・マッピングを使用するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
 2. 「編集」をクリックします。
 3. 「ディメンション」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。
 4.  をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。
- また、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。
5. 「ソース」で、「マッピング・タイプ」ドロップダウンから  をクリックし、ソース値を指定します。

ソース値はカンマで区切り、100,199 のように指定します。「範囲」マッピングでは、アスタリスクなどの特殊文字はサポートされていません。

ノート:

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。

6. 「ターゲット」に、ディメンション・メンバー名のターゲット値を入力します。
 7. 「処理順序」で、マッピングの順序を指定します。
- マッピング・タイプ内の優先度レベルは、処理順序により決定されます。マッピングは、マッピング・タイプ内の名前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、「数値」を処理に使用する場合、処理順序は英数字のソート順です。10、20、30、100 が順序としてある場合、処理順序は 10、100、20、30 になります。処理順序に数値を使用する場合は、すべてのマップについて同じ桁数を使用してください。
8. 「説明」にマッピングの説明を入力します。
 9. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転させる場合は、「符号の変更」を選択します。


「符号の変更」オプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号が負数の場合に一般会計ソース・データで使用します。EPM アプリ

ケーションでは、正数は貸方としてロードされることが多く、負数はすべて借方としてロードされます。その結果、符号を反転させることができます。

10. 「保存」をクリックします。


「含む」マッピングの使用

「含む」メンバー・マッピングを使用するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2. 「編集」をクリックします。
3. 「ディメンション」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。

4.  をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。

また、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。

5. 「ソース」で、「マッピング・タイプ」ドロップダウンから  をクリックし、ソース値を指定します。

ソース値はカンマで区切り、100,199 のように指定します。「範囲」マッピングでは、アスタリスクなどの特殊文字はサポートされていません。

ノート:

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。

6. 「ターゲット」に、ディメンション・メンバー名のターゲット値を入力します。
7. 「処理順序」で、マッピングの順序を指定します。

マッピング・タイプ内の優先度レベルは、処理順序により決定されます。マッピングは、マッピング・タイプ内の名前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、「数値」を処理に使用する場合、処理順序は英数字のソート順です。10、20、30、100 が順序としてある場合、処理順序は 10、100、20、30 になります。処理順序に数値を使用する場合は、すべてのマップについて同じ桁数を使用してください。



8. 「説明」にマッピングの説明を入力します。
9. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転させる場合は、「符号の変更」を選択します。

「符号の変更」オプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号が負数の場合に一般会計ソース・データで使用します。Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションでは、正数は貸方としてロードされることが多く、負数はすべて借方としてロードされます。その結果、符号を反転させることができます。


10. 「保存」をクリックします。

「類似」マッピングの使用

「類似」メンバー・マッピングを使用するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. 「**編集**」をクリックします。
3.  をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。

また、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。

4. 「**ソース**」で、「**マッピング・タイプ**」ドロップダウンから  をクリックし、ソース値を指定します。

「類似」マッピングのソース値を指定する場合、パラメータとして特殊文字を使用できます。「[類似](#)」マッピングのソース値式での特殊文字の使用を参照してください。

ノート:

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。

5. 「**ターゲット**」に、ディメンション・メンバー名のターゲット値を入力します。
6. 「**処理順序**」で、マッピングの順序を指定します。

マッピング・タイプ内の優先度レベルは、処理順序により決定されます。マッピングは、マッピング・タイプ内の名前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、「数値」を処理に使用する場合、処理順序は英数字のソート順です。10、20、30、100 が順序としてある場合、処理順序は 10、100、20、30 になります。処理順序に数値を使用する場合は、すべてのマップについて同じ桁数を使用してください。
7. 「**説明**」にマッピングの説明を入力します。
8. 指定したターゲット勘定科目の符号を反転させる場合は、「**符号の変更**」を選択します。

「符号の変更」オプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号が負数の場合に一般会計ソース・データで使用します。EPM アプリケーションでは、正数は貸方としてロードされることが多く、負数はすべて借方としてロードされます。その結果、符号を反転させることができます。
9. 「**保存**」をクリックします。

「類似」マッピングのソース値式での特殊文字の使用

ソース値およびターゲット値の式には、1 つ以上の特殊文字を指定できます。特殊文字は、「類似」マッピングでのみサポートされています。

- **アスタリスク(*)**

アスタリスク(*)は、ソース値を表します。アスタリスク(*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。ワールド・カードは、ソース内に存在するものは何でも取得し、それをターゲット列に、通常は接頭辞を追加して入れます。

- **疑問符(?)**

疑問符(?)は、ソース値から1文字を削除します。1つ以上の疑問符(?)を式で使用できません。また、疑問符と他の式を組み合わせて使用することもできますたとえば、A??は、Aで始まり、その後に2文字が続くメンバーを検索し、そのメンバーを選択するか、2文字を取り除きます。

- **<1>、<2>、<3>、<4>、<5>**

連結された値を含む行を処理し、対応する値を抽出します。ソース・メンバーでは、区切り文字としてアンダースコア(_)記号を使用する必要があります。

 **ノート:**

<1>、<2>、<3>、<4>、<5>は疑問符(?)とは併用できますが、アスタリスク(*)とは併用できません。

- **<空白>**

空白文字(スペース)を含む行のみを処理します。

ソース・メンバーが'である場合にのみ式が<BLANK>として読み込まれます。この場合、一重引用符が単一のスペース文字を囲みます。ソースに NULL があり、,,のように、または""で囲まれるスペースとして表示される場合は、<BLANK>としての NULL は解釈されません。'<space char>式のみ解釈されます。

 **ノート:**

<BLANK>表記はソースとターゲットの両方の式で使用できます。ターゲット式で使用する場合は、ターゲットに空白が書き込まれます。

表 9-1 特殊文字を使用した式の例

使用する特殊文字	マッピング・タイプ	ソース値	ターゲット値	結果	ノート
*	データのロード	*	1000	1000 の戻り値は 1000 WXYZ の戻り値は 1000	この例では、すべての行が処理され、ソース値がデフォルト値 1000 で上書きされます。 この式では、WXYZ も 1000 を返しません。ソース値にアスタリスクを 1 つ入力したため、すべてのソース値がターゲット値 1000 に置き換わります。
*	データのロード	*	*	1000 の戻り値は 1000 WXYZ の戻り値は WXYZ	この例では、すべての行が処理され、ソース値は同じ値に置き換わります。
*	ストリップ	*	A*	101 の戻り値は A101	すべてのソース・メンバーを処理し、前に「A」を追加します。
*	ストリップ	*_DUP	*	1000_DUP の戻り値は 1000	「_DUP」で終わるソース値のみを処理して、それを除去します。
?	ストリップ	?*	*	A1000 の戻り値は 1000 B2000 の戻り値は 2000	この結果、1 文字以上のソース値のみが処理されます。 最初の文字を取り除きます。
?	ストリップ	*????	*	1000_DUP の戻り値は 1000 A1000 の戻り値は A	この結果、4 文字以上のソース値のみが処理されます。 末尾の 4 文字を取り除きます。
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	データのロード	<1>	*	01_420 の戻り値は 01	
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	データのロード	<2>	*	01_420 の戻り値は 420	
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	データのロード	<3>	*	01_420_AB_CC1_001 の戻り値は AB	

表 9-1 (続き) 特殊文字を使用した式の例

使用する特殊文字	マッピング・タイプ	ソース値	ターゲット値	結果	ノート
<1>, <2>, <3>, <4>, <5>	ストリップ	?<1>	*	A01_420 の戻り値は 01	
<BLANK>	データのロード	<BLANK>	[None]	' 'の戻り値は [None] '01_'の戻り値は [None]	一重引用符は説明用です。

ターゲット値式での特殊文字の使用

アスタリスク(*)はターゲット式でのみ使用でき、アスタリスク(*)文字には任意の数の接頭辞または接尾辞を追加できます。統合を実行すると、アスタリスク(*)は結果のソース値に置き換えられます(独自のソース式がある場合とない場合があります)。ターゲット・アプリケーションで指定した接頭辞または接尾辞に連結されます。

例:

ターゲット値:

A*

結果:

1000 = A1000

ターゲット値:

*_DUP



結果:

1000 = 1000_DUP

マルチディメンショナル・マッピングの使用

マルチディメンショナル・マッピングを使用する場合、ソースは 75 文字以下である必要があります。

マルチディメンショナル・マッピングを追加するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2.  をクリックします。
3. メンバー・マッピングの追加ページの「ソース」で、「複数ディメンション」を選択します。
4. 「ディメンション」をクリックし、ソース列値のディメンションを選択します。

5. メンバー・マッピング・タイプ・アイコンをクリックし、ソース列値のマッピングに使用する方法を選択します。

使用可能なタイプは次のとおりです。

- 明示
- 範囲
- 類似
- 含む
- 複数ディメンション

これらのタイプの詳細は、[メンバー・マッピングの追加](#)を参照してください。

6. 入力ボックスで、ソース値文字列を指定します。
7. **+** をクリックして、マルチディメンショナル条件に新規のメンバー・マッピング・タイプを追加します。
8. 「**ターゲット**」に、マップを定義するターゲット・ディメンション・メンバーを入力します。

メンバーの選択ページの



をクリックすることもできます。

マルチディメンショナル・マッピングのターゲット値は、明示的なメンバー名である必要があります。ワイルドカードまたは特殊文字はサポートされません

9. 「**処理順序**」で、マップの処理が発生する順序を指定します。

順序は、アルファベットまたは数値で指定できます。アルファベット順を指定した場合、マッピングは、マッピング・タイプ内の名前前のアルファベット順に処理されます。

アルファベット順を使用した場合、統合名を使用してマップを処理できるため、マップはマッピング・タイプ内の名前前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、十単位または百単位で採番する場合は、既存の統合の間に新しい統合を挿入できます。たとえば、統合に **10**、**20**、**30** の番号が付いている場合は、**25** から開始する統合を追加すると、他の統合の名前を変更する必要がありません。

ノート:

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。「範囲」タイプと「類似」タイプ間ではマッピングが重複する場合があります。

10. 「**説明**」にマッピングの説明を入力します。
11. 選択したターゲット勘定科目の符号を反転させる場合は、「**符号の変更**」を選択します。

「符号の変更」オプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号が負数の場合に一般会計ソース・データで使用します。EPM アプリ

ケーションでは、正数は貸方としてロードされることが多く、負数はすべて借方としてロードされます。その結果、符号を反転させることができます。

12. 「適用先」で、選択したマッピングを適用する統合を選択します。

デフォルトでは、あるロケーションで指定されたマッピングは、そのロケーションに関連付けられたすべての統合に適用可能です。

13. 「保存」をクリックします。

マルチディメンショナル・マッピングでの特殊文字の使用

ソース値とターゲット値の式では、特殊文字を使用できます。これらの文字(通常は?および*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。

特殊文字は次のとおりです。

- アスタリスク(*) - アスタリスク(*)は、ソース値を表します。アスタリスク(*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。ワイルド・カードまたはストリップ(ライトバックに対するデータ・ロード)は、ソース内に存在するものは何でも取得し、それをターゲット列に、通常は接頭辞を追加して入れます。アスタリスク(*)は、ソース値を表します。アスタリスク(*)には、1文字以上の接頭辞または接尾辞を追加でき、その接頭辞または接尾辞でソース値がフィルタ処理されます。ワイルド・カードは、ソース内に存在するものは何でも取得し、それをターゲット列に、通常は接頭辞を追加して入れます。
- 疑問符(?) - 疑問符(?)は、ソース値から1文字を削除します。1つ以上の疑問符(?)を式で使用できます。また、疑問符と他の式を組み合わせることもできますたとえば、A??は、Aで始まり、その後2文字が続くメンバーを検索し、そのメンバーを選択するか、2文字を取り除きます。

複数のディメンションの場合、ソース・ディメンションは引き渡される値であり、ワイルド・カードはその値にのみ適用されます。ディメンションは複数ディメンション・ルールに存在でき、ワイルド・カードを使用できます。接頭辞/接尾辞は、ターゲット・ディメンション(ルールが置かれているディメンション)に等しいソースにのみ適用されます。

ターゲット値のフォーマット・マスク・マッピング

フォーマット・マスクを使用して、ソース・メンバー詳細とオプションのユーザー定義テキストの組合せに基づいてターゲット・メンバーを定義します。たとえば、フォーマット・マスクを使用して、ソース・メンバーの一部、追加の接頭辞、接尾辞、またはターゲットの置換テキストに基づいてターゲット・メンバーを指定します。

フォーマット・マスクは、明示以外のすべてのマッピング・タイプのターゲット・メンバー指定で使用できます。このマッピング・タイプの一般的な用法は、ソースからのセグメントの置換、文字列操作でのセグメントの置換、接頭辞または接尾辞を使用した文字列演算でのセグメントの置換の3つのカテゴリに分けられます。

#FORMAT マッピング・タイプのコンポーネント

#FORMAT タイプ・マッピングは、次のコンポーネントで構成されます：

表 9-2 #Format マッピング・タイプのコンポーネント

コンポーネント	説明
#FORMAT	FORMAT マッピング・タイプがターゲット・メンバーに指定されたことを示します。
<format mask>	<p>ユーザー定義のフォーマット・マスク。フォーマットの定義には次の文字が使用されます：</p> <ul style="list-style-type: none"> • ?— ソース・メンバーまたはメンバー内のセグメントで特定位置にある文字を含みます。 • #— ターゲット・メンバーを作成するときにソースの 1 文字をスキップ(削除)します。 • 文字 - ユーザー定義の文字をターゲットにそのまま含めます。接頭辞、接尾辞、固定文字列または必要な文字のために使用されます。これは、特別なフォーマット・マスク文字と組み合わせて使用できます。 • *— ソース・セグメントまたはソースのすべての文字を含めます。セグメントの唯一のフォーマット・マスク文字として*を使用すると、セグメント全体の値がソースからコピーされます。 <p>#または?記号と組み合わせて*を使用すると、残りの未使用の文字すべてが引き継がれます。</p> <p>*は、ワイルドカード文字で、?または#で指定されていない残りの文字を採用します。たとえば、ソースが abcd の場合に*を使用すると、ターゲットは abcd になります。ターゲットが ?#* の場合、結果は acd になります。</p> <p>セグメント内に*が検出されると、フォーマットに指定された文字を除き、*の後の指定はすべて無視されます。</p>

表 9-2 (続き) #Format マッピング・タイプのコンポーネント

コンポーネント	説明
<segment delimiter>	オプションのセグメント区切り記号は、ソース・メンバーとターゲット・メンバーのセグメントを区切るために使用される文字を定義します。この統合タイプでは、ソースとターゲットの区切り文字を同じにする必要があります。セグメント・デリミタが指定されていない場合、フォーマット・マスクはセグメント指定またはデリミタに依存せずにメンバー全体に適用されます。

#FORMAT マッピングの例

次に、#FORMAT のすべてのオプションを使用する例を示します:

表 9-3 #Format マッピング・タイプの例

ソース	ターゲット	結果
12345-6789-012-3456ABC-001	#FORMAT("???-*GROUP-AA##?##X-GROUP","-") 説明: 最初のセグメントの最初の 3 文字を採用し、2 番目のセグメント全体を採用し、3 番目のセグメントをテキスト「GROUP」で置換し、4 番目のセグメントに接頭辞として AA を付けて、3 番目と 4 番目の文字を削除し、5 番目の文字は保持し、6 番目の文字を削除し、ABC は保持して接頭辞「X」を付けて、5 番目のセグメントをテキスト「GROUP」で置換します。	123-6789-GROUP-5ABCX-GROUP

セグメントの置換

ソース・メンバーのフォーマットをターゲット・メンバーの定義として使用する際に、ソースの値を再利用するかわりに、ソース・セグメントの一部を置換できます。たとえば、ソースを 4 番目のセグメントでフィルタリングし、7 番目のセグメントを明示的な値で置換して、その他のセグメントの値を次のように保持する必要があるとします:

ソース:

```
?????-?????-?-012000000-?????-???-??????-??????-??????-??????-???
```

ターゲット:

```
?????-?????-?-012000000-?????-???-GROUP-?????-?????-?????-???
```

文字列演算を伴うセグメントの置換

置換するセグメントに文字列演算を適用できます。たとえば、値 **11002293** があり、セグメントを書き込むときに、下 **4** 桁または上 **6** 桁だけを使用する必要があります。メンバー **11002293** を使用する例:

- 最初の 2 文字を無視すると、結果は **002293** になります。#FORMAT("##*")を使用します。
- 最後の 3 文字を切り捨てると、結果は **11002** になります。#FORMAT("?????")を使用します。
- 最初の 2 文字を無視し、最後の 3 文字を切り捨てると、結果は **002** になります。#FORMAT("##??")を使用します。




文字列演算と接頭辞および接尾辞を使用するセグメントの置換

ソースのセグメント値をターゲットの対応セグメントでそのまま使用できます。たとえば、ソースが **A100** の場合、この値をターゲットの値としてマッピングできます。この場合、ソースに対してワイルドカードを使用し、ターゲットの該当セグメントにソースに基づいて明示的な値を指定します。


メンバーの選択

「メンバーの選択」ページを使用して、ディメンションのメンバーを表示および選択します。

メンバーを選択するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. 「**編集**」をクリックします。
3. 「**ターゲット**」で、 をクリックします。
4. 「**メンバーの選択**」ページで、次のタスクを実行します:
 - a. 「**キューブ**」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。
キューブによって、使用可能なディメンションの構造が決まります。
 - b. **オプション: 「メンバーの検索」**に、基準(メンバー名または別名のみ)を入力し、「**[Enter]**」をクリックします。
検索では大文字と小文字は区別されません。検索できるのは、1 つの単語、複数の単語またはワイルドカード文字です。
 - c. 左から 2 番目のペインには、使用可能な第 1 レベルの親ディメンションが表示されます。選択するには、ペイン内のマッピングする各メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリックします。
選択したディメンションのメンバーにドリルダウンし、3 番目のペインに結果を表示するには、 をクリックします。


- d. 左から3番目のペインには、ステップbで選択したディメンションのメンバーまたは兄弟が示されます。選択するには、マッピングする各メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリックします。

選択したディメンションのメンバーにドリルダウンし、4番目のペインに結果を表示するには、をクリックします。

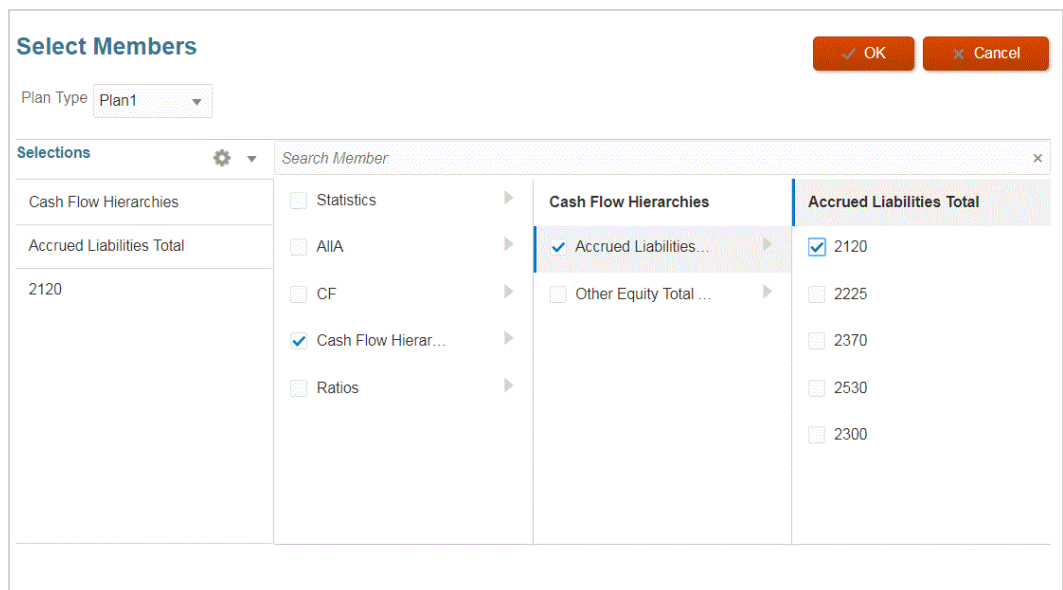
- e. 左から4番目のペインには、ステップcで選択したメンバー/兄弟からのメンバー(リーフ・レベル)結果が示されます。選択するには、マッピングする各メンバーの横にあるチェック・ボックスをクリックします。

チェック・マークが表示された選択済のディメンション/メンバーが、「**選択**」ペインに移動されます。

選択した内容をクリアするには、「**選択**」ペインからディメンション/メンバーを選択し、

 ▼ ドロップダウンから「**削除**」または「**すべて削除**」を選択します。

5. 「OK」をクリックします。




Cash Flow Hierarchies	Statistics	Cash Flow Hierarchies	Accrued Liabilities Total
Accrued Liabilities Total	<input type="checkbox"/> Statistics	<input checked="" type="checkbox"/> Accrued Liabilities...	<input checked="" type="checkbox"/> 2120
2120	<input type="checkbox"/> AllA	<input type="checkbox"/> Other Equity Total ...	<input type="checkbox"/> 2225
	<input type="checkbox"/> CF		<input type="checkbox"/> 2370
	<input checked="" type="checkbox"/> Cash Flow Hierar...		<input type="checkbox"/> 2530
	<input type="checkbox"/> Ratios		<input type="checkbox"/> 2300

メンバーのフィルタ処理

フィルタを適用して、特定のメンバーを表示できます。「含む」または「等しい」オペランドと特定の値を使用して、1つ以上のディメンションに基づくフィルタ条件を作成します。

メンバー・フィルタを適用するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. 「**フィルタの追加**」をクリックします。
3. フィルタの適用先として、「**ソース**」、「**ターゲット**」または「**処理順序**」のいずれかの値を選択します。
4. 「**オペランド**」ドロップダウンから、フィルタのオペランドと値を選択します。


使用可能なオペランドは次のとおりです。

- 含む — 「値」フィールドに文字列文字を含む値を返します。
 - 等しい — 「値」フィールドに文字列文字に等しい値を返します。
5. 「値」で、フィルタに使用する特定の値を指定します。

メンバー・マッピングのインポート

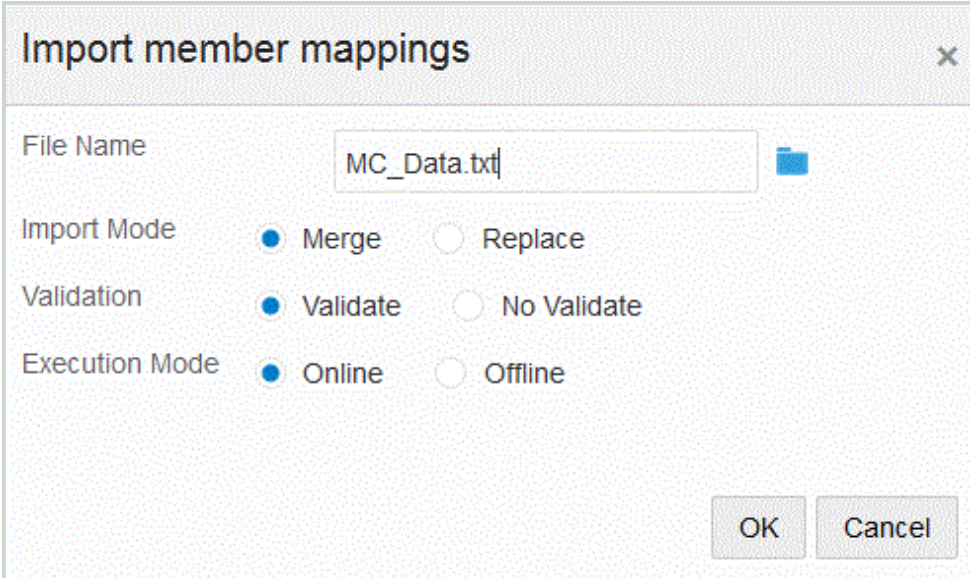
選択した CSV ファイルおよび TXT ファイルから現在のディメンションまたはすべてのメンバー・マッピングをインポートし、マッピングを作成できます。メンバー・マッピングのインポートでは、ターゲット・メンバーに対する検証または検証なしオプションとともに、マージ・モードまたは置換モードもサポートします。

メンバー・マッピングをインポートするには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、ファイルベース統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2. 「編集」をクリックします。
3. 「ディメンション」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。
4. 「アクション」ドロップダウンから、「インポート」、「現在のディメンション」の順に選択します。

すべてのディメンションをインポートするには、「すべてのディメンション」を選択します。

5. 「メンバー・マッピングのインポート」の「ファイル名」で、メンバー・マッピングのインポート元のファイルの名前を指定します。



6. 「インポート・モード」から、インポート・モードを選択します:
 - マージ - 既存のマップを更新します。既存のマップは、「ソース値」、「処理順序」および「統合名」(指定されている場合)に基づいて識別されます。マップが存在しない場合は、新しいマップが作成されます。
 - 置換 - 既存のマップを削除し、ファイルから新しいマップを作成します。

7. 「**検証**」から、メンバー・マッピングを検証することを選択します。


検証では、インポートされた一般会計におけるすべてのデータに対応するマッピングがあることが確認されます。

8. 「**実行モード**」で、インポートを実行するモードを選択します：
 - オンライン - インポートを即時に処理します。
 - オフライン - インポートをバックグラウンドで実行します。
9. 「**OK**」をクリックします。

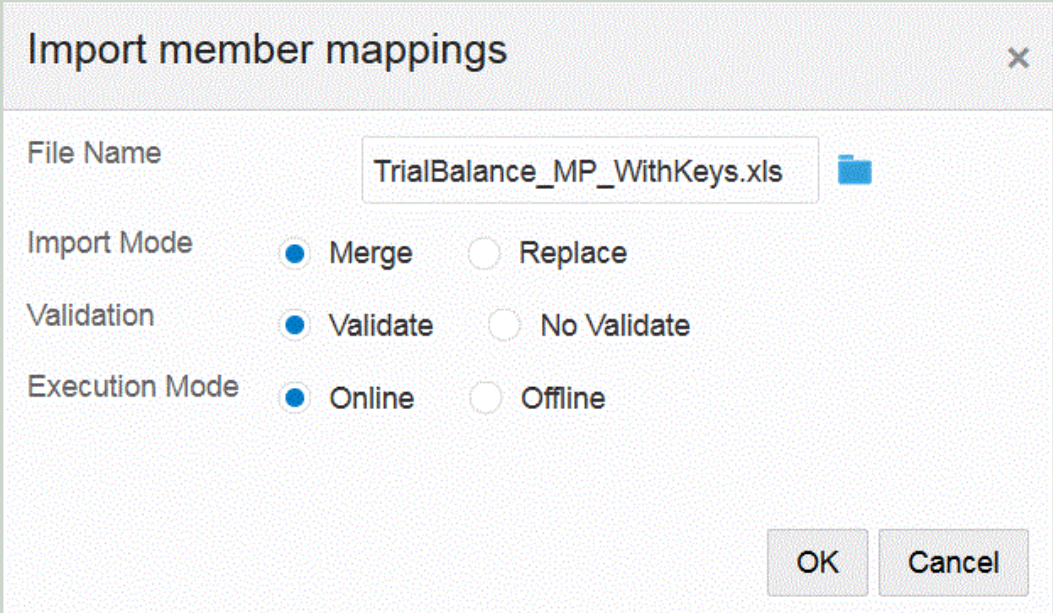
Excel マッピングのインポート

インポート・オプションを選択し、Excel マッピングを選択して、Excel マッピングをインポートできます。

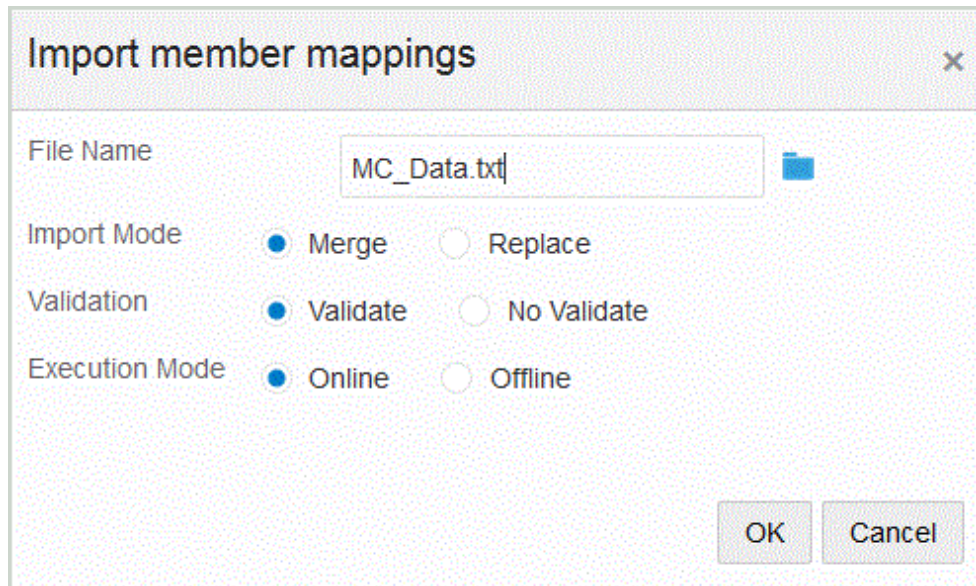
Excel マッピングをインポートするには：

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. 「**アクション**」ドロップダウンから、「**インポート**」を選択した後、「**Excel からインポート**」を選択します。
3. 「**メンバー・マッピングのインポート**」の「**ファイル名**」で、メンバー・マッピングのインポート元の Excel.XLS ファイルの名前を指定します。

 をクリックして、.XLS ファイルに移動することもできます。



4. 「**メンバー・マッピングのインポート**」の「**ファイル名**」で、メンバー・マッピングのインポート元のファイルの名前を指定します。



5. 「OK」をクリックします。
6. 「インポート・モード」から、インポート・モードを選択します:
 - マージ - アプリケーション内のデータをデータ・ロード・ファイル内のデータで上書きします。
 - 置換 - データ・ロード・ファイルのディメンションの値をクリアし、既存ファイルの値で置換します。
7. 「検証」から、メンバー・マッピングを検証することを選択します。

検証では、インポートされた一般会計におけるすべてのデータに対応するマッピングがあることが確認されます。
8. 「実行モード」で、インポートを実行するモードを選択します:
 - オンライン - インポートを即時に処理します。
 - オフライン - インポートをバックグラウンドで実行します。
9. 「OK」をクリックします。

Excel テンプレート(マッピング・テンプレート)のダウンロード

Maploader テンプレートをダウンロードし、データ統合によって入力するのではなく、これを使用して Excel からマッピング表をアップロードします。この機能を使用すると、Excel マッピングからメンバーを選択してインポートすることにより、それらをマップできます。マッピングをマージまたは置換できます。これにより、マップが更新されるわけではありません。単に新しいエントリがデータベースに追加されます。適切にフォーマットされた Excel マッピング・テンプレートは、EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialDataQuality/templates ディレクトリに保存されます。


マッピング・テンプレートには、接続するターゲット・アプリケーションから Oracle Hyperion Financial Management ディメンションを直接取り出すマクロ・スクリプトも含まれます。

Excel テンプレートを データ統合サーバーにアップロードし、統合を実行するとき、またはファイル名が空白のままの場合にシステムによって要求されたときに、ロードするファイルとして Excel ファイルを選択する必要があります。処理されるファイルが Excel ファイルかどうかはシステムによって判断され、ファイルのロードに必要なフォーマットが読み取られます。

Excel でマッピング・テンプレートを使用する場合:

- マップ・テンプレートに空白行を含めないでください。
- テンプレートに行を挿入することは可能ですが、新しい行は指定された領域に保持する必要があります。
- 各テンプレートでサポートされるのは、1つのディメンションです。

Excel テンプレートをダウンロードするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. マップ・メンバー・ページのドロップダウンから、「**アクション**」、「**インポート**」、「**Excel テンプレートのダウンロード**」の順に選択します。

Maploader.xls を開いています ページが表示されます。

3. **MaploaderTemplate.xls** を開くか、ハード・ドライブに保存します。
4. **MaploaderTemplate.xls** を開きます。
5. 「**マップ**」タブを選択します。
6. セル **B1** に「**ロケーション**」、セル **B2** に「**ロケーション ID**」と入力し、セル **B3** の「**ディメンション**」ドロップダウンからディメンションを選択します。
7. 次の各フィールドに入力します:
 - a. 「**ソース**」に、ソース・ディメンション値を入力します。

ソース・ディメンションを入力するときにワイルドカードと範囲を指定できます。

- **無制限の文字**に対応するワイルドカード — 無制限の文字を示すためにアスタリスク(*)を使用します。たとえば、「**548***」または「***87.8**」と入力します。
- **1文字プレースホルダー**に対応するワイルドカード — 1文字のプレースホルダーを示すために疑問符(?)を使用します。たとえば、
 - **548??98**
 - **??82???**
 - **??81***
- **範囲** — カンマ(,)を使用して範囲を示します(ワイルドカード文字は使用できません)。たとえば、「**10000,19999**」のように範囲を指定します。

(この範囲では、**10000** から **19999** までのすべての値が評価されます。)

この場合、データ統合で **10000** から **19999** までのすべての値が対象になります。

- 「**含む**」**マップ** — カンマ(,)を使用してエントリを区切ります(ワイルドカード文字は使用できません)。少なくとも **3** つのエントリを指定する必要があります。そうしないと、マップが「**範囲**」マップを示します。たとえば、「**10,20,30**」のように「**含む**」マップを指定します。

- **マルチディメンション・マッピング** — #MULTIDIM を使用して、マルチディメンション・マッピングを指定します。DIMENSION NAME=[VALUE]と値を入力します。値は、ワイルドカード、範囲および「含む」マップと同様に指定します。次の例の検索基準は、77 で開始し UD1 が 240 のすべての勘定科目です。たとえば、#MULTIDIM ACCOUNT=[77*] AND UD1=[240]です。
- b. **ソースの説明**に、ソース値の説明を入力します。
- c. **「ターゲット」**に、ターゲット・ディメンション値を入力します。
- d. **「符号の変更」**に **True** を入力して、「勘定科目」ディメンションの符号を変更します。「勘定科目」ディメンションの符号を保持する場合は、**False** を入力します。この設定を使用できるのは「勘定科目」ディメンションをマッピングするときだけです。
- e. マッピングを特定のデータ・ルール名に適用する際は、**「ルール名」**に統合名を入力します。

 **ノート:**

明示マッピングを追加する場合、ルール名はソース値と同じにする必要があります。

6	Source	Source Description	Target	Rule Name	Convert (True/False)
7		tdataMap			
8		SrcDesc	TargKey		ChangeSign
9	1*	Acct Like 1		*w1x9	FALSE
10	4110.4120.4140	Acct in 4110.4120.4140		4110 w411010	FALSE
11	6*	Acct in 6 range		6110 w6x11	FALSE
12	7000.7999	Acct in 7000 range		#SCRIPT w700012	FALSE


8. **「保存」** をクリックします。

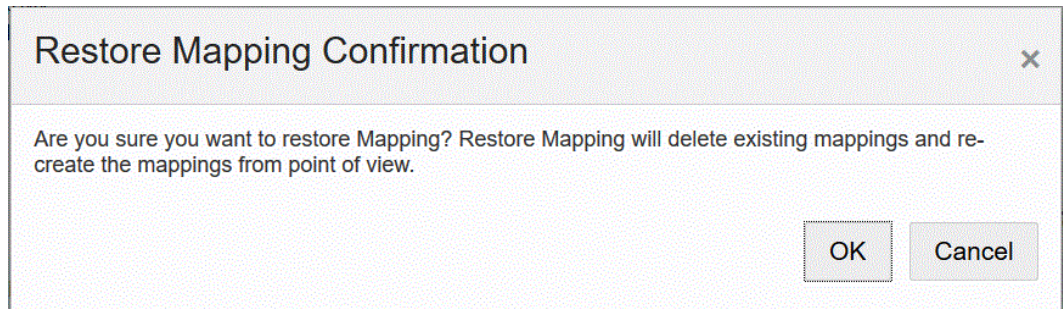
メンバー・マッピングの復元

メンバー・マッピングの復元では、現在のセッションで行われたマッピングが削除され、視点に基づいてマッピングが復元されます。

メンバー・マッピングは、POVの最後のデータ・ロードからのみ復元できます。

メンバー・マッピングを復元するには:

1. **「データ統合」** ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. マップ・メンバー・ページのドロップダウンから、「**アクション**」、「**マッピングの復元**」の順に選択します。



3. マッピングの復元の確認ページで、「OK」をクリックします。

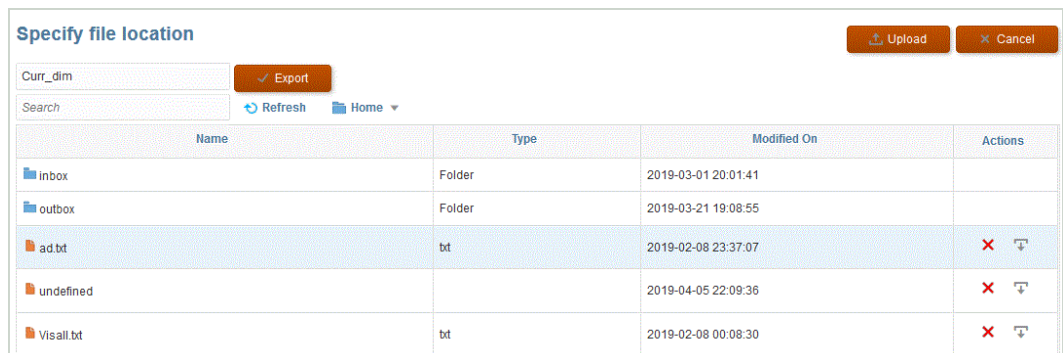
メンバー・マッピングのエクスポート

メンバー・マッピングを、選択したファイル(Excel ファイル)にエクスポートできます。

現在のディメンションまたはすべてのディメンションのマップのエクスポート

現在のディメンションまたはすべてのディメンションのメンバー・マッピングをエクスポートするには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある **...** をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2. 「編集」をクリックします。
3. 「ディメンション」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。
4. 「エクスポート」ドロップダウンから、「現在のディメンション」または「すべてのディメンション」を選択します。
5. 「ファイル・ロケーションの指定」から、マッピングをエクスポートするファイル名を指定します。




6. 「エクスポート」をクリックします。
7. オプション: 「アップロード」をクリックし、エクスポートするファイルに移動して、「OK」をクリックします。

Excel へのマップのエクスポート

Excel にエクスポートすると、その形式で再インポートすることはできません。

Excel にメンバー・マッピングをエクスポートするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. 「**ディメンション**」ドロップダウンから、メンバー・マッピングを編集または追加する先のディメンションを選択します。
3. 「**アクション**」ドロップダウンの「**エクスポート**」ドロップダウンから、「**Excel にエクスポート**」を選択します。

「Excel にエクスポート」方法の場合、マッピングは Microsoft Excel スプレッドシートにエクスポートされます。スプレッドシートでは、スプレッドシートの名前にロケーション名が使用されます。

4. XLS ファイルを開くか、ハード・ドライブに保存します。
5. スプレッドシートを開きます。
6. 「**マップ**」タブを選択します。
7. セル **B1** に「**ロケーション**」、セル **B2** に「**ロケーション ID**」と入力し、セル **B3** の「**ディメンション**」ドロップダウンからディメンションを選択します。
8. 次の各フィールドに入力します:

- a. 「**ソース**」に、ソース・ディメンション値を入力します。

ソース・ディメンションを入力するときにワイルドカードと範囲を指定できます。

- 無制限の文字に対応するワイルドカード — 無制限の文字を示すためにアスタリスク(*)を使用します。たとえば、「548*」または「*87.8」と入力します。
- 1 文字プレースホルダーに対応するワイルドカード — 1 文字のプレースホルダーを示すために疑問符(?)を使用します。たとえば、
 - 548??98
 - ??82???
 - ??81*
- **範囲** — カンマ(,)を使用して範囲を示します(ワイルドカード文字は使用できません)。たとえば、「10000,19999」のように範囲を指定します。
(この範囲では、10000 から 19999 までのすべての値が評価されます。)
この場合、データ管理で 10000 から 19999 までのすべての値が対象になります。
- 「**含む**」**マップ** — カンマ(,)を使用してエントリを区切ります(ワイルドカード文字は使用できません)。少なくとも 3 つのエントリを指定する必要があります。そうしないと、マップが「**範囲**」マップを示します。たとえば、「10,20,30」のように「含む」マップを指定します。

- **マルチディメンション・マッピング** — #MULTIDIM を使用して、マルチディメンション・マッピングを指定します。DIMENSION NAME=[VALUE] と値を入力します。値は、ワイルドカード、範囲および「含む」マップと同様に指定します。次の例の検索基準は、77 で開始し UD1 が 240 のすべての勘定科目です。たとえば、#MULTIDIM ACCOUNT=[77*] AND UD1=[240] です。
- b. **ソースの説明**に、ソース値の説明を入力します。
- c. **「ターゲット」**に、ターゲット・ディメンション値を入力します。
- d. **「符号の変更」**に **True** を入力して、「勘定科目」ディメンションの符号を変更します。「勘定科目」ディメンションの符号を保持する場合は、**「False」** を入力します。この設定を使用できるのは「勘定科目」ディメンションをマッピングするときだけです。
- e. マッピングを特定のデータ・ルール名に適用する際は、**「ルール名」**に統合名を入力します。

 **ノート:**

明示マッピングを追加する場合、ルール名はソース値と同じにする必要があります。

Source	Source Description	Target	Rule Name	Convert (True/False)
1*	Acct Like 1		*w1x9	FALSE
10 4110.4120.4140	Acct in 4110.4120.4140		4110w411010	FALSE
11 6*	Acct in 6 range		6110w6x11	FALSE
12 7000.7999	Acct in 7000 range		#SCRIPT w700012	FALSE

9. **「エクスポート」** をクリックします。

Source	Source Description	Target	Rule Name	Convert (True/False)	Data Rule Name	Conditional
9 2200.2500		2210 Debit		FALSE		BETWEEN 2200.2500
10 1190		1110 1190		FALSE		
11 1190		1150 1190		FALSE		
12 1515.1516.1520		1520 intrf		FALSE		IN 1515.1516.1520
13		1410 all		FALSE		LIKE
14 #MULTIDIM ACCOUNT=3505-1011 AND ENTITY=altered		3500 altered		TRUE	ACCOUNT=3505-1011 AND ENTITY=altered	ALTTOM

データ統合オプションの設定

「オプション」を使用して、期間処理の全般オプション、データをインポートするためのフィルタ、およびターゲット・アプリケーションにロードするときのデータの処理方法に関するオプションを定義します。

全般オプション・セクションでは、データをロードするカテゴリと、ソース期間を決定するために使用される期間マッピング・タイプを指定します。ファイルベース統合については、オプションを使用してデフォルトのフォルダおよびファイル名を指定することもできます。

ターゲット・オプション・セクションでは、特定の方法を選択して、データをターゲットにロードする方法や処理のバッチ・サイズを定義したり、アプリケーション・タイプに応じてドリル領域の作成やその他の処理オプションを有効にすることができます。

直接統合については、ソースからデータを抽出するためのフィルタを指定できます。Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションと一般会計アプリケーションのフィルタは、ディメンションおよびメンバー・フィルタを使用してデータ・スライスに関して指定されます。他のデータ・ソースについては、それぞれのフィルタ・パラメータのソース・フィルタを指定できます。


ファイルベース・オプションの定義

ファイルベース統合については、ファイル名とファイルを格納するために使用する受信ボックス・フォルダを指定できます。ファイルを使用して、1つの期間または複数の期間にデータをロードできます。複数の期間にデータをロードするには、いくつかの方法があります。1つの方法は、複数の列がある1つのファイルを使用する方法で、ヘッダー・レコードまたは期間マッピングを使用して各列を期間にマップできます。オプションは、期間ごとに1つのファイルを使用することです。期間ごとに1つのファイルを使用するには、特定のファイル名形式を使用して期間を識別できます。

ファイルに関連付けるカテゴリおよび期間の設定では、事前定義された値を使用できます。この設定によって、選択内容の編集時に使用可能なオプションが制限されることがあります。

ファイルベース・データ統合オプションの設定の詳細は、次のチュートリアルを視聴してください: [Enterprise Planning Cloud](#) での [ファイルベース・データ統合オプションおよび統合の実行の設定](#)。

ファイルベース・オプションを選択するには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページから、ファイルベースの統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
2. 「**オプション**」 タブを選択します。
3. 「**ファイル名**」 から、ソース・システム・ファイルの名前を選択します。

ディレクトリ名を指定しない場合、データ・ファイルはデータ統合ホーム・ディレクトリからインポートされます。この場合、「アプリケーション」の「受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ」で、「ファイル名」フィールドに `epminbox/<filename>` の形式を使用してファイルを参照します。 `epminbox/<filename>` は、「ディレクトリ」フィールドに指定しないでください。

ファイル名のみを指定した場合、統合の実行ページで単一の期間に対してデータを入力する必要があります。

複数の期間をロードするには、各期間用のファイルを作成し、期間名または期間キーをファイル名に追加します。複数の期間に対して統合を実行する場合、各期間のファイル名が作成され、適切な POV にアップロードされます。

4. 「**ディレクトリ**」 で、ファイルを配置するフォルダを指定します。

 ノート:

ファイルのディレクトリ名を指定しない場合、データ・ファイルはデータ統合ホーム・ディレクトリからインポートされます。この場合、「アプリケーション」の「受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ」で、「ファイル名」フィールドに epminbox/<filename>の形式を使用してファイルを参照しますが、このフィールドに epminbox/<filename>を指定しないでください。

- データを複数の期間にロードするには、「ファイル名の接尾辞タイプ」から、「期間名」か「期間キー」のどちらかを選択します。

接尾辞がファイル名に追加され、接尾辞の追加後にファイル拡張子が追加されます。ファイル名を空白にすると、接尾辞付きのファイルが検索されます。ファイル名の接尾辞タイプを指定すると、ファイル名はオプションになり、統合の実行ページでは必要ありません。

ファイル名の接尾辞タイプが期間キーの場合、接尾辞インジケータと期間の日付フォーマットがファイル名で(接尾辞セットとして)必要となり、有効な日付フォーマットとして検証される必要があります。

たとえば、次のように指定します:

- 1_Jan-2018.txt
- 1_Feb-2018.txt
- 1_Mar-2018.txt


この場合、統合を実行するときに、「ファイル名フィールドに **1.txt** を入力し、接尾辞インジケータとして「期間名」を選択します。次に、1月から3月の期間について統合を実行します。

- 「期間キーの日付フォーマット」で、JAVA 日付フォーマット(SimpleDateFormat)でファイル名に追加する期間キーのデータ・フォーマットを指定します。
- 「カテゴリ」から、カテゴリを選択します。
リストされているカテゴリは、データ統合の設定時に作成したカテゴリ(実績など)です。[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。
- 「キューブ」から、データをロードするプラン・タイプを指定します
- 「保存」をクリックします。

直接統合オプションの定義

直接統合を操作するとき、直接統合のソースおよびターゲット・システムに固有のパラメータを指定できます。たとえば、Planning ソース・システムの場合、キューブと期間マッピング・タイプを選択できます。

直接統合オプションを選択するには:

- 「データ統合」ホーム・ページから、直接統合の右側にある  をクリックし、「オプション」を選択します。
- 「全般オプション」の「カテゴリ」から、カテゴリを選択します。
リストされているカテゴリは、データ統合の設定時に作成したカテゴリ(実績など)です。[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。

3. 「**キューブ**」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。

データ統合でキューブが割り当てられます。カスタム・キューブを個別のアプリケーションとして登録でき、登録できるカスタム・キューブ・アプリケーションの数に制限はありません。

 **ノート:**

ASO キューブに対して置換モードで統合を実行する際に、シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、数値データ・ロードのみが実行されます。階層が完全に含まれた完全修飾名でメンバー名を指定してください。シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、すべてのデータ型のロード方法は機能しません。

4. 「**期間マッピング・タイプ**」から、期間のマッピング・タイプを選択します。

使用可能なオプション:

- デフォルト—統合では、データ統合で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、統合の実行時、各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
- 明示—統合では、データ統合で定義されている明示期間マッピングを使用して、各期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。明示期間マッピングでは、期間が開始日および終了日で定義されていない場合、追加の一般会計データ・ソースがサポートされます。

5. 「**カレンダー**」から、ソース・システム・カレンダーを選択します。

6. 「**統合オプション 1**」 - 「**統合オプション 4**」にフリー・フォーム・テキストまたは値を指定します。

「統合オプション 1」 - 「統合オプション 4」に指定した値は、ビジネス・ルールでランタイム・パラメータを指定するときに使用できます。詳細は、[ビジネス・ルールの使用](#)を参照してください。

7. 「**データの抽出オプション**」で、抽出するメンバー・データのタイプを選択します。

メンバーは、計算に対してどのようなフラグが設定されているかに応じて、抽出できます。メンバーに「保管済」のフラグが設定されている場合、計算後、計算されたデータ値はそのメンバーと一緒にデータベースに保管されます。メンバーに「動的計算」のタグが付いている場合、そのメンバーのデータ値は取得時に計算されます。


使用可能なオプション:

- すべてのデータ - 保管されている値と、密ディメンションと疎ディメンションの両方について動的に計算された値が抽出されます。

「すべてのデータ」抽出オプションは、ビジネス・プロセスからビジネス・プロセスへのデータの同期ではサポートされておらず、ターゲット・ビジネス・プロセスで統合を設定し、リモート・ビジネスからデータを抽出することはできません。ビジネス・プロセスからビジネス・プロセスへのデータの同期では、データが抽出されるソース環境で「すべてのデータ」オプションを使用して統合を設定し、リモート・ターゲット・システムにプッシュします。

Financial Consolidation and Close および Tax Reporting のお客様は、「**すべてのデータ**」オプションを選択して、動的計算値を抽出できます。動的計算値を抽出するには、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting の

CONTROL TO-DATE VIEW STORAGE 設定が有効になっているか、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting アプリケーションが DSO (密/疎最適化対応アプリケーション)ベースであることが、データ統合の前提条件です。詳細は、[累計ビューの管理オプションの使用](#)を参照してください。

 ノート:

Financial Consolidation and Close および Tax Reporting から YTD を取得する場合、最適な方法は、アプリケーションを DSO アプリケーションに変換するか、または DSO 対応アプリケーションを使用し、抽出データ・タイプとして「すべてのデータ」を選択して、ビュー・ディメンションのフィルタとして「FCCS_YTD」を使用します。

- 保管された動的算出データ - 疎ディメンションは除き、密ディメンションについてのみ、保管されている動的に計算された値が抽出されます。
 - 保管済データのみ - 保管されているデータのみを抽出します。動的に計算された値は、このタイプの抽出には含まれません。
8. 「データの精度」で、エクスポートされる数値で表示される小数点以下の桁数を指定します。

データ精度とは、精度(正確さ)を重視した数値データのことで、データ値のサイズおよび小数点以下の桁数に応じて、数値フィールドによっては指数形式(678123e+008 など)で書き込まれることがあります。非常に大きい値から非常に小さい値までデータに幅がある場合、データ精度の使用もあり得ます。通常、出力ファイルは小さめであり、データ値の正確さは高めです。

このオプションのデフォルト値は 16 です。

9. 「データの小数点以下の桁数」で、エクスポートする小数点以下の最大桁数を指定します。0 から 16 の値を指定します。値を指定しないと、エクスポートするデータの小数点以下の桁数(最大 16 桁)が使用されるか、「データの精度」オプションに値が指定されている場合はそれによって決まる値が使用されます。

このパラメータは、読みやすさを重視して使用します。出力データはストレート・テキスト形式です。データの小数点以下の桁数に関係なく、指定した数値が出力されます。特にデータの範囲が非常に大きい値から非常に小さい値に及ぶ場合、データが(整数部および小数部で)正確さを失う可能性があります。

デフォルトでは、数値データには 16 桁がサポートされています(小数部の桁を含む)。「データの精度」と「データの小数点以下の桁数」オプションをどちらも指定すると、「データの精度」オプションが無視されます。

10. (一般会計のみ): 「調整期間を含む」から、調整期間を処理するための次のいずれかのオプションを選択します。
- いいえ - 調整期間は処理されません。システムでは通常期間マッピング(「デフォルト」および「明示的」として設定されたマッピング)のみが処理されます。「いいえ」は調整処理のデフォルト・オプションです。
 - はい - 「はい」を選択すると、通常期間と調整期間が含まれます。調整期間が存在しない場合は、通常期間のみが処理されます。
 - はい(調整のみ) - 「はい(調整のみ)」を選択すると、調整期間のみが処理されます。ただし、調整期間が存在しない場合は、かわりに通常期間が取得されます。

11. (Planning および Oracle General Ledger の非管理者のみ) **「非管理者用ロード方法の場合は「置換」** から、管理者以外のユーザーの Planning アプリケーションにデータをロードするときの置換方法を選択します。

使用可能な方法:


- なし—置換を実行しません。
- 数値データのみ—ロード方法が数値データの場合に置換を実行します。
- すべてのロード方法—すべてのロード方法について置換を実行します。

12. **「保存」** をクリックします。

ターゲット・オプションの定義

ソース・アプリケーションをターゲット・アプリケーションに統合するとき、ロード方法、日付フォーマット、バッチ、ページ・オプションを含めて、日付をロードする方法をサポートするオプションを選択できます。

ターゲット・オプションを定義するには:

1. **「データ統合」** ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、**「オプション」** を選択します。
2. アプリケーション・オプションを選択します。

ターゲット・オプション	説明
ロード方法	<p>データをターゲット・アプリケーションにロードするための方法を選択します。</p> <p>使用可能な方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 数値 - 数値データのみをロードします。この方法では、Planning データ・セキュリティは適用されません。 • ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型 - この方法では、データとドライバのディメンション、および Planning アプリケーションの一意的識別子を定義する必要があります。下の「自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション」フィールドと「自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション」フィールドで、データ・ロードとドライバ・ディメンションを定義します。 <p>置換モードは、ロード方法「ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型」ではサポートされていません。</p> <ul style="list-style-type: none"> • セキュリティ保護されたすべてのデータ型 - 数値、テキスト、スマートリスト、日付のデータ型をロードします。Planning 管理者がデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されません。Planning の管理者以外のユーザーがデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されます。Planning の管理者以外のユーザーがロードできるデータは、500,000 セルのみです。
バッチ・サイズ	<p>ファイルからメモリーに一度に読み込まれる行数を指定します。</p> <p>このパラメータは主にパフォーマンスのために使用されます。データがロードされる時、この設定により、キャッシュに格納されるレコード数が決まります。たとえば、1000 を指定すると、1,000 件のレコードがキャッシュに格納されます。同様に、5000 を指定すると、5,000 件のレコードがキャッシュに格納されてコミットされます。</p> <p>この設定をサーバー・メモリーによって決定し、必要に応じて調整します。</p>

ターゲット・オプション	説明
ドリル領域	<p>スライダをタップしてオンにし、ドリル領域を有効にします。</p> <p>このオプションが有効になっている場合、ドリル・スルー機能を使用するためのドリル可能領域が作成されます。</p> <p>データのロード時に、ドリル領域が Planning データにロードされます。</p> <p>シナリオごとのドリル領域が作成されます。どのキューブ(Planning キューブまたは Planning データベース)でも、ドリル領域の名前は、FDMEE_<シナリオ・メンバーの名前>になります。ドリル領域を作成する場合、ディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認されます。</p> <p>データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。</p>
データ・ファイルのページ	<p>ファイルベースのデータ・ロードが成功した場合、スライダをタップしてオンにし、データ・ファイルをアプリケーションの outbox ディレクトリから削除します。</p> <p>ファイルを削除する場合はスライダをタップしてオンにし、ファイルを保持する場合はスライダをタップしてオフにします。</p>
日付データの日付フォーマット	<p>日付データのロードに使用するフォーマットを選択します。</p> <p>ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。</p>
自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション	<p>Planning で指定したデータ・ディメンションに一致するデータ・ディメンションを選択します</p> <p>このオプションは、LINEITEM フラグを使用して増分データをロードする場合に使用します。LINEITEM フラグを使用した増分データのロードを参照してください。</p>
自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション	<p>Planning で指定したドライバ・ディメンションに一致するドライバ・ディメンションを選択します</p> <p>この設定は、LINEITEM フラグを使用して増分データをロードする場合に使用します。LINEITEM フラグを使用した増分データのロードを参照してください。</p>
メンバー名にはカンマを使用できます	<p>メンバー名にカンマが含まれている場合にデータをロードするには、「はい」を選択します。</p>

ターゲット・オプション	説明
子孫が 1000 を超える場合のサマリー・ドリル動作	<p>子孫が 1,000 を超える場合にサマリー・ドリルがどのように機能するかを選択します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 無視 • 制限 <p>サマリー・ドリルの子孫数が 1,000 を超え、「子孫が 1000 を超える場合のサマリー・ドリル動作」オプションが「無視」の場合、システムはフィルタのディメンションを無視し、他のディメンションのフィルタに基づいてドリルされたデータを返します。最大 3 つのディメンションを無視できます。</p> <p>サマリー・ドリルの子孫数が 1,000 を超え、「子孫が 1000 を超える場合のサマリー・ドリル動作」オプションが「制限」の場合、システムはデータ行を返すときにディメンションの最初の 1,000 メンバーのみを考慮します。</p>
デフォルトのインポート・モード	<p>データ管理でデータ・ロード・ルールを実行するときまたはデータ統合で統合を実行するときのデフォルトのインポート・モードを設定します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 追加 • 置換
デフォルトのエクスポート・モード	<p>データ管理でデータ・ロード・ルールを実行するときまたはデータ統合で統合を実行するときのデフォルトのエクスポート・モードを設定します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 累計(データの追加) • 置換 • データのマージ(データの保管) • 減算

3. 「**ロード方法**」から、データをターゲット・アプリケーションにロードする方法を選択します。

使用可能な方法:

- **数値** - 数値データのみをロードします。この方法では、Planning データ・セキュリティは適用されません。
- **ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型** - この方法では、データとドライバのディメンション、および Planning アプリケーションの一意の識別子を定義する必要があります。下の「自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション」フィールドと「自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション」フィールドで、データ・ロードとドライバ・ディメンションを定義します。

 **ノート:**

置換モードは、ロード方法「ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型」ではサポートされていません。

- **セキュリティ保護されたすべてのデータ型** - 数値、テキスト、スマートリスト、日付のデータ型をロードします。Planning 管理者がデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されません。Planning の管理者以外のユーザーがデータをロードする場合、Planning データ・セキュリティは適用されます。Planning の管理者以外のユーザーがロードできるデータは、500,000 セルのみです。
- 4. 「**バッチ・サイズ**」で、ファイルからメモリーに一度に読み込まれる行数を指定します。

このパラメータは主にパフォーマンスのために使用されます。データがロードされる時、この設定により、キャッシュに格納されるレコード数が決まります。たとえば、**1000** を指定すると、**1,000** 件のレコードがキャッシュに格納されます。同様に、**5000** を指定すると、**5,000** 件のレコードがキャッシュに格納されてコミットされます。

この設定をサーバー・メモリーによって決定し、必要に応じて調整します。
- 5. 「**ドリル領域**」で、スライダをタップしてオンにし、ドリル領域を有効にします。

このオプションが有効になっている場合、ドリル・スルー機能を使用するためのドリル可能領域が作成されます。

データのロード時に、ドリル領域が Planning データにロードされます。

シナリオごとのドリル領域が作成されます。どのキューブ(Planning キューブまたは Planning データベース)でも、ドリル領域の名前は、**FDMEE_<シナリオ・メンバーの名前>**になります。ドリル領域を作成する場合、ディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認されます。

データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。
- 6. ファイルベースのデータロードが成功した場合、「**データ・ファイルのパージ**」で、スライダをタップしてオンにし、データ・ファイルをアプリケーションの outbox ディレクトリから削除します。

ファイルを保持するにはスライダをタップしてオフにします。
- 7. 「**日付データの日付フォーマット**」で、日付データのロードに使用するフォーマットを選択します。

ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、**MM/DD/YY** という形式を使用して日付を入力します。
- 8. 「**自動増分のライン・アイテムのデータ・ディメンション**」から、Planning で指定したデータ・ディメンションに一致するデータ・ディメンションを選択します。

このオプションは、LINEITEM フラグを使用して増分データをロードする場合に使用します。[LINEITEM フラグを使用した増分データのロード](#)を参照してください。
- 9. 「**自動増分のライン・アイテムのドライバ・ディメンション**」から、Planning で指定したドライバ・ディメンションに一致するドライバ・ディメンションを選択します。

この設定は、LINEITEM フラグを使用して増分データをロードする場合に使用します。
[LINEITEM フラグを使用した増分データのロード](#)を参照してください。

10. 「メンバー名にはカンマを使用できます」から、「はい」を選択すると、メンバー名にカンマが含まれているときにデータをロードします。

11. 「ワークフロー・モード」から、データ・ワークフロー・モードを選択します。

使用可能なモード:

- 完全 — データは TDATESEG_T 表で処理されてから、TDATESEG 表にコピーされます。

4つのワークベンチ・プロセス(インポート、検証、エクスポートおよび確認)がすべてサポートされており、データはワークベンチに表示できます。

ドリルダウンがサポートされています。

- 完全、アーカイブなし — データは TDATESEG_T 表で処理されてから、TDATESEG 表にコピーされます。

4つのワークベンチ・プロセス(インポート、検証、エクスポートおよび確認)がすべてサポートされています。データはワークベンチに表示できますが、表示できるのはインポート・ステップが完了した後のみです。データはワークフロー・プロセスの終了時に TDATESEG から削除されます。

ドリルダウンはサポートされていません。

- 単純 — データは TDATESEG_T 表で処理された後、TDATESEG_T 表から直接エクスポートされます。

すべてのデータ・ロードに、インポートとエクスポート両方のステップが含まれます。

データは検証されず、マップされていないデータはロード失敗の原因となります。

マップは TDATEMAPSEG にアーカイブされません。

データはワークベンチに表示できません。

ドリルダウンはサポートされていません。

「単純」ワークフロー・モードがデフォルト・モードです。

12. 「管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする」で、選択して管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にします。

管理ユーザーがデータをロードする際に、データ検証を有効にします。この場合、データのロード中にデータ入力フォーム内のすべてのデータ検証が実施されます。強化された検証のために、データ・ロードのパフォーマンスは低下します。

ノート:

要員増分ルール(OWP_INCREMENTAL PROCESS DATA WITH SYNCHRONIZE DEFAULTS など)を実行するときには、ターゲット・オプション「管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする」が「いいえ」に設定されていることを確認してください。このオプションは、管理者のみが設定できます。

このオプションが「はい」に設定されると、管理者および非管理者のデータ・ロードに対して同じ方法でデータが検証されます。検証には、セキュリティ・チェック、交差検証、読取り専用セル、動的計算セルなどが含まれます。

また、拒否または無視された行の詳細なエラー・リストを使用でき、追加の Planning 権限は必要ありません。ただし、管理者の場合であってもパフォーマンスが低下することがあります。

13. 「**検証失敗のメッセージを表示**」から、データをロードしたときに拒否されたデータ・セル、交差および拒否理由を示す出力ファイルを作成します。

レポートされる拒否数の制限は 100 です。データ検証レポートは、プロセスの詳細ページから、「**出力**」リンクをクリックしてダウンロードできます。また、エラー・ファイルのコピーが Outbox フォルダに格納されます。

詳細は、[プロセス詳細の表示](#)を参照してください

14. (Planning および Oracle General Ledger の非管理者のみ) 「**非管理者用ロード方法の場合は「置換」**」から、管理者以外のユーザーの Planning アプリケーションにデータをロードするときの置換方法を選択します。

使用可能な方法:

- なし—置換を実行しません。
- 数値データのみ—ロード方法が数値データの場合に置換を実行します。
- すべてのロード方法—すべてのロード方法について置換を実行します。

ノート:

ASO キューブに対して置換モードで統合を実行する際に、シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、数値データ・ロードのみが実行されます。階層が完全に含まれた完全修飾名でメンバー名を指定してください。シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、すべてのデータ型のロード方法は機能しません。

15. Oracle Smart View for Office のドリルスルー・レポートでカスタマイズされた属性ディメンション・メンバー名を表示するときに、**Smart View からのビューのドリル**で、ワークベンチの列のカスタム・ビューを指定します。

カスタム・ビューが定義されている場合、**Smart View** のドリル・スルー・セルをクリックして「**新規シートとして開く**」を選択すると、ワークベンチで定義されているビューに基づいてドリル・スルー・レポートが開きます。

アプリケーション詳細ページでビューが定義されていない場合は、デフォルト・ビューが使用されます。つまり、属性ディメンションではカスタマイズされたメンバー名が **Smart View** に表示されません。

カスタム・ビューの定義の詳細は、[ワークベンチのカスタム・ビューの定義](#)を参照してください。

16. 「**保存**」をクリックします。

データ・エクスポートのターゲット・アプリケーション・オプション

ファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションのターゲット・アプリケーション・オプションを定義するときに、次のオプションを使用できます:


オプション	説明
ダウンロード・ファイル名	<p>出力ファイルの名前を入力します。</p> <p>出力ファイルのダウンロードには EPM 自動化を使用できます。EPM 自動化ユーティリティを使用すると、サービス管理者は Oracle Enterprise Performance Management Cloud のタスクをリモートで実行できます。</p> <p>詳細は、メタデータおよびデータのエクスポートおよびダウンロードを参照してください。</p>
列の区切り	<p>出力ファイルの列を区切るために使用する文字を選択します。</p> <p>使用可能な列の区切り記号:</p> <ul style="list-style-type: none"> • , • • ! • ; • : <p>デフォルトの区切り文字はカンマ(,)です。</p>
ファイルの文字セット	<p>ファイルの文字セットを指定します。</p> <p>ファイルの文字セットによって、テキストを作成、保管および表示するためにビット組合せを文字にマッピングする方法が決まります。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。UTF-8 がデフォルトのファイルの文字セットです。</p>
行末文字	<p>行末(EOL)文字に関連するサーバーのオペレーティング・システムを選択します。</p> <p>有効なオプションは、次のとおりです</p> <ul style="list-style-type: none"> • Windows • Linux <p>EOL は行の末尾を示します。Notepad など一部のテキスト・エディタでは、Linux の EOL を使用してファイルが正しく表示されません。</p> <p>EPM Cloud の場合、データ統合では、Linux の EOL 文字がデフォルトとして使用されます。</p> <p>お客様が Windows でエクスポート・ファイルを表示すると、EOL は 1 行で表示されます。</p>
ヘッダーを含める	<p>出力ファイルにヘッダー・レコードを含めるか/含めないかを決定します。</p> <p>ヘッダー・レコードにディメンション名を含めるには、「はい」を選択します。デフォルトは「はい」です。</p> <p>ヘッダー・レコードを除外するには、「いいえ」を選択します。</p>

オプション	説明
属性列のエクスポート	<p>含める静的値がエクスポートまたはファイルにある場合は、属性列を含めます。属性列は、ソース値のマップが不要な場合も使用できます。この設定によって、データ・ロード・マッピングを定義する必要性が最小限に抑えられます。</p> <p>属性列を含めるには、「はい」を選択します。</p> <p>属性列を除外するには、「いいえ」を選択します。</p>
データの累計	<p>勘定科目データをエクスポート前に要約し、結果を1つ以上の列にグループ化します。</p> <p>結果を1つ以上の列にグループ化するには、「はい」を選択します。</p> <p>結果を1つ以上の列にグループ化しない場合は、「いいえ」を選択します。</p> <p>デフォルト値は「はい」です。</p>
データのソート	<p>データを列の順序に基づいてソートするかどうかを決定します。</p> <p>列を含めるには、「はい」を選択します。</p> <p>列を除外するには、「いいえ」を選択します。</p>
ディメンションのピボット	<p>ピボットではエクスポート・ファイル内のデータの方向が変更されるため、結果を集約して行から列に回転できます。行と列の間でピボットすると、選択したディメンションが反対の軸の最も外側の行または列に移動します。</p> <p>この機能を使用するには、エクスポート・ファイルからディメンション名を1つ指定します。</p> <p>数値インポート・フォーマットにのみ適用可能です。数値以外のインポート・フォーマット・タイプではサポートされていません。</p> <p>ディメンションのピボットを指定した場合、データの累計は強制的に「はい」になります。</p> <p>ピボット・ディメンションに含まれる値のピボット列は、SQL Insert 文内で~~で囲む必要があります。</p> <p>ピボット機能は、カスタム SQL Insert 文を使用する場合にのみ機能し、SQL Insert 文がないと機能しません。</p> <p>データ・エクスポート・アプリケーションに ACCOUNT、PERIOD および AMOUNT がディメンション名として含まれている場合、ディメンションのピボットで PERIOD を指定すると、PERIOD ディメンションに含まれるすべての期間が個別の列 Jan、Feb、Mar などにピボットされます。</p> <p>たとえば、SQL INSERT 文は次のようになります： INSERT INTO TABLE (ACCOUNT,JAN,FEB,MAR,.....,DEC) VALUES (~ACCOUNT~,~Jan~,~Feb~,~Mar~,.....,~Dec~)</p>

Oracle General Ledger ターゲット・オプションの定義

ソース・アプリケーションをターゲット・アプリケーションに統合するとき、ロード方法、日付フォーマット、バッチ、ページ・オプションを含めて、日付をロードする方法をサポートするオプションを選択できます。


ターゲット・オプションを定義するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
2. ファイルベースのデータ・ロードが成功した場合、「**ターゲット・オプション**」の「**データ・ファイルのページ**」で、スライダをタップしてオンにし、データ・ファイルをアプリケーションの **outbox** ディレクトリから削除します。
ファイルを保持するにはスライダをタップしてオフにします。
3. 「**残高タイプ**」で、データのロード先の残高のタイプを選択します。
使用可能な残高タイプ:
 - 実績
 - 予算
4. 「**仕訳ソース**」で、Oracle ERP Cloud で定義された仕訳ソースと一致する仕訳ソースの説明を入力します。
5. 「**仕訳カテゴリ**」で、Oracle ERP Cloud の仕訳カテゴリと一致する仕訳カテゴリの説明を入力します。
6. 「**保存**」をクリックします。

Budgetary Control アプリケーションのターゲット・オプションの定義

ソース・アプリケーションと **Budgetary Control** ターゲット・アプリケーションを統合する場合、データのロード方法に関するオプションを選択できます。

ターゲット・オプションを定義するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、**Budgetary Control** 統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
2. アプリケーション・オプションを選択します。

ターゲット・オプション	説明
データ・ファイルのページ	ファイルベースのデータ・ロードが成功した場合、スライダをタップしてオンにし、データ・ファイルをアプリケーションの outbox ディレクトリから削除します。 ファイルを削除する場合はスライダをタップしてオンにし、ファイルを保持する場合はスライダをタップしてオフにします。

ターゲット・オプション	説明
予算タイプ	予算のタイプを選択します。 使用可能なオプション: <ul style="list-style-type: none"> 実績 予算
仕訳ソース	Oracle ERP Cloud の仕訳ソースと一致する仕訳ソースの説明を入力します。
仕訳カテゴリ	Oracle ERP Cloud の仕訳カテゴリと一致する仕訳カテゴリの説明を入力します。
ソース予算タイプ	予算管理アプリケーションのソース予算名のディメンションに基づいて予算タイプを選択します。 使用可能なオプション: <ul style="list-style-type: none"> EPM Financials モジュール Planning

3. 「保存」をクリックします。

Financial Consolidation and Close のアプリケーション・オプションの定義

Financial Consolidation and Close ターゲット・アプリケーションに仕訳またはデータをロードする場合、仕訳情報のレベルなど、ロードするデータの多くの側面を制御できます:

Financial Consolidation and Close のアプリケーション・ターゲット・オプションを定義するには:

1. データ統合ホーム・ページで、Financial Consolidation and Close ターゲット・アプリケーションとの統合の右側にある **...** をクリックし、「オプション」をクリックします。
2. 「オプション」の「ターゲット・オプション」から、ターゲット・アプリケーション設定を選択し、「保存」をクリックします。

使用可能な Financial Consolidation and Close ターゲット・アプリケーション・オプションを次の表に示します。

表 9-4 Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
ロード・タイプ	Financial Consolidation and Close アプリケーションにプッシュするロードのタイプを選択します。 使用可能なオプション: <ul style="list-style-type: none"> データ - 数値データのみをロードします。これはデフォルトのロード・オプションです。 仕訳 - 仕訳をロードします。

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
仕訳ステータス	<p>仕訳ステータスは、仕訳の現在の状態を示します。仕訳ステータスは、仕訳を作成、送信、承認、却下、転記すると変わります。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 作業中 - 仕訳が作成されています。保存はされていますが、完了していない場合があります。たとえば、状況によっては他のライン・アイテムを追加する必要があります。 • 転記済 - 仕訳の調整がデータベースに転記されました。
仕訳の種類	<p>ロードする仕訳のタイプを選択します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自動逆仕訳 - 次の期間に逆仕訳する必要がある調整が含まれている自動逆仕訳をロードします。つまり、借方と貸方を逆仕訳して、次の期間に仕訳を転記します。 • 通常 - 置換モードで仕訳をロードし、これにより、新しい仕訳データがロードされる前に、仕訳ラベルのデータすべてがクリアされます。

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
次として仕訳転記	<p>仕訳を転記する方法を選択します: 使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> 仕訳累計 - 仕訳累計仕訳は、介在する年度末間の繰越しを含めて、仕訳の最初のインスタンスから期間から期間へ繰り越します。仕訳累計仕訳と年次累計仕訳の唯一の違いは、各年の最初の期間に、前年の最後の期間の仕訳累計仕訳のデータが逆仕訳されることです。年次累計仕訳の場合、年の最初の期間での逆仕訳はありません。 期別 - ビュー・メンバー FCCS_Periodic を選択し、仕訳が転記されると、行詳細に入力されたデータが要約され、行詳細 POV に基づいて連結キューブに転記されます。転記された仕訳のデータは、他の転記された仕訳から書き込まれたデータを上書きしません。 年次累計 - ビュー・メンバー FCCS_YTD_Input を選択すると、行詳細の借方/貸方フィールドに年次累計額を入力できます。年次累計仕訳には、すべての詳細行の年次累計仕訳が含まれる必要があります。 年次累計仕訳が転記されると、仕訳間の POV に対する適切な期間の影響が計算され、転記された期別仕訳からの累計に累計されます。年度の最初の期間、年次累計ビュー・データは期別データと同じです。 年度の最初の期間、年次累計ビュー・データは期別データと同じです。 後続の期間では、一意の POV ごとに期別ビュー・メンバーに転記された期別計算済データは、すべての年次累計仕訳から累計された現在の期間の年次累計仕訳から、すべての年次累計仕訳から累計された前期間の年次累計仕訳を差し引いたデータと等しくなります。

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
ドリル領域の作成	<p>スライダをタップしてオンにし、ドリル領域を有効にします。</p> <p>このオプションが有効になっている場合、ドリル・スルー機能を使用するためのドリル可能領域が作成されます。</p> <p>データをロードすると、ドリル領域が Financial Consolidation and Close データにロードされます。</p> <p>シナリオごとのドリル領域が作成されます。どのキューブ (Planning キューブまたは Planning データベース) でも、ドリル領域の名前は、FDMEE_<シナリオ・メンバーの名前> になります。ドリル領域を作成する場合、ディメンションがドリルに対して有効かどうかを確認されます。</p> <p>データ・ロードで選択された有効なディメンションのメンバーは、ドリル領域フィルタに含まれます。ディメンションが有効になっていない場合、シナリオ、バージョン、年および期間のディメンションがデフォルトで有効になります。追加のディメンションを有効にでき、後続のデータ・ロードでは新規に有効化されたディメンションのメンバーが考慮されます。ドリルの作成に使用されたドリル領域に以前に含まれていたディメンションを無効化する場合、それらのディメンションのメンバーは後続のデータ・ロード時に削除されません。必要に応じて、古いメンバーを手動で削除できます。</p>
ゼロのロードを使用可能にする	<p>「はい」を選択すると、複数期間ロード中に 0 値がロードされます。</p>

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする	<p>管理ユーザーがデータをロードする際に、データ検証を有効にします。この場合、データのロード中にデータ入力フォーム内のすべてのデータ検証が実施されます。強化された検証のために、データ・ロードのパフォーマンスは低下します。</p> <p>「管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする」が「いいえ」(デフォルト値)に設定されていると、管理者によるデータ・ロードはアウトライン・ロード・ユーティリティ(OLU)を使用して実行されます。この場合、パフォーマンスは向上しますが、なんらかの理由で無視された行の詳細なエラー・レポートは取得できません。</p> <p>このオプションが「はい」に設定されると、管理者および非管理者のデータ・ロードに対して同じ方法でデータが検証されます。検証には、セキュリティ・チェック、交差検証、読取り専用セル、動的計算セルなどが含まれます。</p> <p>また、拒否または無視された行の詳細なエラー・リストを使用でき、追加の Planning 権限は必要ありません。ただし、管理者の場合であってもパフォーマンスが低下することがあります。</p>

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
サマリーからのドリルを有効にします	<p>「はい」を選択すると、Planning データ・フォームまたはレポートでサマリー・メンバーからドリルダウンし、数字を構成する詳細ソース・データを表示できます。</p> <p>このオプションを有効にし、「ドリル領域の作成」オプションを「はい」に設定した状態でデータをロードすると、「ドリル」アイコンがサマリー・レベルで有効になります。1つのディメンションに対して、ドリルできる下位メンバーの数は 1000 に制限されています。</p>

 ノート:

シナリオ・ディメンション、年ディメンションおよび期間ディメンションでは、サマリー・レベルのドリルダウンは使用できません。これらのディメンションでは、リーフ・メンバーに対してドリル・スルーを実行する必要があります。

サマリー・ドリルは、ローカル・サービス・インスタンスでのみ使用可能です。異なるサービス・インスタンス間またはハイブリッド・デプロイメントでは使用できません。

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
増減	<p>階層およびシステム計算を介して使用される、自動化されたキャッシュ・フロー・レポート・ディメンションを示す増減ディメンションを指定します。</p> <p>デフォルトでは、システムは増減ディメンションのメンバーを使用して様々なタイプのキャッシュ・フロー・データおよび FX から CTA の計算を保持します。</p> <p>増減がない場合は、FCCS_No Movement として指定します。そうでない場合は、必要な増減メンバーを選択します。</p> <p>増減ディメンション・メンバーの例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • FCCS_No Movement • FCCS_Movements • FCCS_OpeningBalance • FCCS_ClosingBalance
複数 GAAP	<p>ローカル GAAP と IFRS の両方、または他の GAAP での財務諸表のレポートに使用する複数 GAAP ディメンションを指定します。</p> <p>このディメンションは、ローカル GAAP データ入力と他の GAAP 調整を追跡します。</p>
データ・ソース	<p>データ・ソース・ディメンションを指定します。</p> <p>デフォルト値は、"FCCS_Managed Source"です。</p>
データ・ファイルのパージ	<p>Essbase へのファイルベースのデータ・ロードが正常に終了したときに、データ・ファイルをアプリケーションの <i>outbox</i> ディレクトリから削除するかどうかを指定します。「はい」を選択するとファイルが削除され、「いいえ」を選択するとファイルが保存されます。</p>
メンバー名にはカンマを使用できません	<p>メンバー名にカンマが含まれており、次のいずれかのサービスにデータをロードしている場合は、このオプションを「はい」に設定してデータをロードします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Planning モジュール • Planning • Financial Consolidation and Close • Tax Reporting

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
ワークフロー	<p>データ・ワークフロー・メソッドを選択します。</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> <p>完全 — データは TDATESEG_T 表で処理されてから、TDATESEG 表にコピーされます。</p> <p>4 つのワークベンチ・プロセス(インポート、検証、エクスポートおよび確認)がすべてサポートされており、データはワークベンチに表示できます。</p> <p>ドリルダウンがサポートされています。</p> <p>「完全」ワークフロー・モードがデフォルト・モードです。</p> <p>完全、アーカイブなし — データは TDATESEG_T 表で処理されてから、TDATESEG 表にコピーされます。</p> <p>4 つのワークベンチ・プロセスがすべてサポートされています(インポート、検証、エクスポートおよび確認)。データはワークベンチに表示できますが、表示できるのはインポート・ステップが完了した後のみです。データはワークフロー・プロセスの終了時に TDATESEG から削除されます。</p> <p>ドリルダウンはサポートされていません。</p> <p>単純 — データは TDATESEG_T で処理された後、TDATESEG_T 表から直接エクスポートされます。</p> <p>すべてのデータ・ロードに、インポートとエクスポート両方のステップが含まれます。</p> <p>データは検証されず、マップされていないデータはロード失敗の原因となります。</p> <p>マップは TDATEMAPSEG にアーカイブされません。</p> <p>データはワークベンチに表示できません。</p> <p>ドリルダウンはサポートされていません。</p>

表 9-4 (続き) Financial Consolidation and Close アプリケーション・オプションと説明

オプション	説明
Smart View からのビューのドリル	Oracle Smart View for Office のドリルスルー・レポートでカスタマイズされた属性ディメンション・メンバー名を表示するときに、ワークベンチから列のカスタム・ビューを指定します。

 ノート:

Smart View にドリルするとき、データ統合ではドリルのランディング・ページで最後に使用されたビューが使用されます。最後に使用されたビューが見つからない場合は、データ統合では、この設定のデフォルトのビュー選択が使用されます。

カスタム・ビューは、データ統合のワークベンチ・オプションで作成および定義します。カスタム・ビューが定義され、Smart View からのビューのドリル・フィールドで指定されている場合、Smart View でドリルスルー・セルをクリックして「新規シートとして開く」を選択すると、ワークベンチで定義されているビューに基づいてドリルスルー・レポートが開きます。アプリケーション・オプション・ページでビューが定義されていない場合は、デフォルト・ビューが使用されます。つまり、属性ディメンションではカスタマイズされたメンバー名が Smart View に表示されません。

カスタム・ビューの定義の詳細は、[ワークベンチのカスタム・ビューの定義](#)を参照してください。

フィルタの定義

フィルタを使用すると、ソース・システムからの結果を絞り込むことができます。たとえば、Planning ソース・システムに対してフィルタを指定する場合、ディメンションを選択してから、各ディメンションのフィルタ条件を入力します。

Planning フィルタの定義

フィルタ・オプションを定義して、Planning アプリケーションから抽出するデータのサブセットを指定できます。

Planning フィルタを追加するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、Planning 統合の右側にある **...** をクリックし、「オプション」を選択します。
2. 「フィルタ」タブをクリックします。
3. **+** をクリックします。

オプションで、フィルタにすでに割り当てられている別のディメンションを選択し、「**ディメンション名**」ドロップダウンから別のディメンションを割り当てるか、フィルタ条件を変更します。

Dimension Name	Filter Condition	Select
Entity	ENT01	Select
Scenario	SC21	Select

4. 「ディメンション名」ドロップダウンから、フィルタの追加先のディメンションの名前を指定します。
5. 「保存」をクリックします。

Oracle NetSuite フィルタの定義

NSPB Sync SuiteApp の保存された検索で定義される検索基準は、アプリケーション・フィルタとして自動的に登録されます。必要に応じて、これらのフィルタを編集します。たとえば、デフォルト値を割り当てたり、エンド・ユーザーに対してフィルタを非表示にします。

選択した条件を満たすレコードのみが返されるように、NSPB Sync SuiteApp の保存された検索結果にフィルタ条件を適用します。フィルタ条件は 1 つのみ、または複数選択でき、完全な値を指定することもできます。


NSPB Sync SuiteApp の保存された検索で定義される検索基準は、アプリケーション・フィルタとして自動的に登録されます。必要に応じて、これらのフィルタを編集します。たとえば、デフォルト値を割り当てたり、エンド・ユーザーに対してフィルタを非表示にできます。

NSPB Sync SuiteApp フィルタを適用するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、Oracle NetSuite 統合の右側にある **...** をクリックし、「オプション」を選択します。
2. 「フィルタ」タブをクリックします。
3. フィルタ条件の名前を選択します。

使用可能なフィルタは次のとおりです:

- Postingperiod

 ノート:

特定の期間(特定の月など)に基づいてデータをロードする必要がある場合、期間 ID を含む NSPB Sync SuiteApp 転記期間フィルタを使用します。期間 ID は転記期間フィルタ内に作成され、データのフィルタ処理に使用される NSPB Sync SuiteApp の保存された検索によって戻されます。

Oracle NetSuite では、いくつかのタイプのデータ・フィルタが用意されています。名前付き期間(前会計年度など)、特定の開始日と終了日で定義されたカスタム日付範囲、および数日前、数週間前、数か月前、数四半期前、数年前または現在から数日後、数週間後、数か月前、数四半期後または数年後までとして定義された相対的な日付範囲です。フィルタの設定の詳細は、NetSuite の検索ガイドを参照してください。

- **Mainline**
 - **Posting**
4. 「条件」 ドロップダウンから、適用可能な条件を選択します。
フィルタによる適用可能条件は、NSPB Sync SuiteApp の保存された検索から導出されます。
 5. 「値」 ドロップダウンから、フィルタを適用する値を選択します。
 6. 「保存」 をクリックします。

Budgetary Control フィルタの定義

Budgetary Control データ・ソースからの統合が作成されると、フィルタが自動的に定義されます。必要に応じてフィルタを変更できますが、削除はできません。(フィルタが削除されると、デフォルト値が再作成されます。)

Budgetary Control からのデータのインポートに使用するデータ統合については、フィルタを使用して結果を制限します。



Budgetary Control データ・ソースからの統合が作成されると、フィルタが自動的に定義されます。必要に応じてフィルタを変更できますが、削除はできません。(フィルタが削除されると、デフォルト値が再作成されます。)

Budgetary Control のデータ・ロード・フィルタを使用して操作する場合は、次のことに注意してください。

- 管理予算 - このディメンションを追加し、消費平衡のロード元の管理予算を選択します。
- 金額タイプ予算管理ディメンション - **Budgetary Control** からロードされる明細アイテムの勘定科目は通常、損益計算書タイプであると想定して、PTD を選択します。
- 残高金額予算管理ディメンション - **Planning** アプリケーションにロードする消費金額タイプに対するビジネス要件に応じて、契約、債務、その他の見込支出、支出などの残高金額を選択します。

- その他の予算管理ディメンションについては、**Planning** アプリケーションでデータをロードする適切なレベルからメンバーを選択します。

Budgetary Control フィルタを追加するには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページから、**Budgetary Control** 統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
2. 「**フィルタ**」 タブをクリックします。
3.  をクリックします。
オプションで、フィルタにすでに割り当てられている別のディメンションを選択し、「**ディメンション名**」ドロップダウンから別のディメンションを割り当てるか、フィルタ条件を変更します。
4. 「**ディメンション名**」ドロップダウンから、フィルタの追加先のディメンションの名前を指定します。
5. 「**フィルタ条件**」で、フィルタを指定します。
6. 「**保存**」をクリックします。

Oracle HCM Cloud フィルタの定義

データ・ソースに関連付けられる **Oracle Human Capital Management Cloud** ソース・フィルタはいずれも、統合中に自動的に作成されます。「統合の編集」ページで、結果をフィルタ処理するための特定の基準を選択できます。

Oracle HCM Cloud から **Planning** モジュールまたは要員へのデータのインポートに使用するデータ統合については、フィルタを使用して結果を制限します。

データ・ソースに関連付けられるソース・フィルタはいずれも、統合中に自動的に作成されます。「統合の編集」ページで、結果をフィルタ処理するための特定の基準を選択できます。

Oracle HCM Cloud メタデータ・カテゴリに応じて、次のソース・フィルタが自動的に移入されます:

- **発効日** - ツリーを有効にする日付を選択します。
- **国別仕様データ・グループ** - 国別仕様データ・グループは、給与および関連データをパーティション化する手段の **1** つです。企業が営業する国ごとに、少なくとも **1** つの法規制データ・グループが必要です。各法規制データ・グループには、**1** つ以上の給与法定単位が関連付けられます。
- **ツリー・コード** - **Oracle HCM Cloud** 内の階層のツリー・コード(組織や職階のように階層を持つオブジェクトの場合)
- **ツリー・バージョン** - **Oracle HCM Cloud** 内の階層のツリー・バージョン
- **変更のみ** - 抽出モードを制御します。有効なオプションは、「**N**」または「**Y**」です。次の表に、各種の抽出モードとその参照値、および説明を示します:

モード	参照値	説明
N	すべての属性	抽出にはすべての値が含まれます。完全な抽出が実行され、その時点での完全なデータ出力が生成されます。アーカイブされたデータは、ベースラインとして利用されません。
Y	変更された属性	この抽出実行が以前の抽出実行と比較され、ベースラインと比較(それにより増分データを特定)することにより、変更されたデータのみが表示されます。

Oracle HCM Cloud フィルタを編集するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、Oracle HCM Cloud 統合の右側にある **...** をクリックし、「オプション」を選択します。
2. 「フィルタ」タブをクリックします。
3. 編集するフィルタの名前を選択します。
4. 「値」で、フィルタ条件を指定します。

Options		Filters
Name	Condition	Value
Changes Only	==	
Legislative Data Group	==	
Effective Date	==	2017-01-01

5. 「保存」をクリックします。

MDX 問合せに対するカスタム・フィルタの定義

「ソース・オプション」の「フィルタ」タブで、有効な MDX メンバーの選択を制限するカスタム・フィルタを指定できます。カスタム・フィルタを使用すると、メンバー選択ページで使用できないメンバーを選択できます。

MDX 問合せにカスタム・フィルタを追加するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある **...** をクリックし、「オプション」を選択します。
2. 「フィルタ」タブをクリックします。
3. カスタム・フィルタを適用するディメンションを選択します。
4. 「フィルタ条件」で、MDX 構文を使用して、メンバーを中カッコ({および})文字で囲んでカスタム・フィルタを定義し、「保存」をクリックします。

カスタム・フィルタの構文は"#Custom{<Valid MDX Member Selection Function>}"です。

次の例は、「勘定科目」、「通貨」および「エンティティ」ディメンションに適用されるカスタム・フィルタを示しています:

Edit Integration: QM_FCCS_To_EPMFile_DL1

General Map Dimensions Map Members Options

Dimension Name	Filter Condition	
Account	"Cash and Equivalents"; #Custom[[Account].levels(2).members]"	既
Consolidation	FCCS_Entity Input	既
Currency	"Entity Currency"; #Custom[[Currency].levels(1).members]"	既
Entity	"#Custom[[Entity].levels(1).members]", "West Admin"	既
Scenario	Actual	既
View	FCCS_Periodic	既

「プロセスの詳細」で、MDX 問合せに適用されたカスタム・フィルタの詳細を表示できます。

```

2023-06-26 18:21:34,149 INFO [AIF]: -----EXECUTION LOAD PARAMETERS-----
2023-06-26 18:21:34,157 INFO [AIF]: Account (SOURCE_FILTERS) : "Cash and Equivalents";"#Custom[[Account].levels(2).members]"
2023-06-26 18:21:34,157 INFO [AIF]: Consolidation (SOURCE_FILTERS) : FCCS_Entity Input
2023-06-26 18:21:34,157 INFO [AIF]: Currency (SOURCE_FILTERS) : "Entity Currency";"#custom[[Currency].levels(1).members]"
2023-06-26 18:21:34,157 INFO [AIF]: Entity (SOURCE_FILTERS) : "#Custom[[Entity].levels(1).members]", "West Admin"
2023-06-26 18:21:34,157 INFO [AIF]: Scenario (SOURCE_FILTERS) : Actual
2023-06-26 18:21:34,158 INFO [AIF]: View (SOURCE_FILTERS) : FCCS_Periodic
2023-06-26 18:21:34,158 INFO [AIF]: DataExportDynamicCalc (SOURCE_OPTIONS) : 2
2023-06-26 18:21:34,169 INFO [AIF]: Source Application Type is:HPL
2023-06-26 18:21:34,174 INFO [AIF]: Source Application Sub Type is:FCCS
2023-06-26 18:21:34,174 INFO [AIF]: Target Application Sub Type is:DIRECTFILEEXPORT

```

領域のクリアの定義

データ統合の「領域のクリア」オプションを使用すると、Planning モジュール・アプリケーションに置換モードでデータをロードする前にクリアするデータ・スライスを選択できます。また、Oracle General Ledger に予算をロードする場合、新しい予算をロードする前に、オプションで前予算をクリアできます。この機能は、Oracle Financials Cloud 20C 以上でのみ使用できます。

領域のクリアを定義するには、ディメンションのメンバー選択基準(メンバーの静的リスト、メンバー関数の選択、データから派生したメンバーなど)を指定します。デフォルトでは、データ・ロードに含まれるエンティティ、シナリオ、バージョン、年、期間の値に基づいて、デフォルトのクリア・スクリプトが定義されます。Oracle Financials Cloud の場合、メンバー関数は指定できません。親メンバーを選択でき、最下位レベルのすべての子のデータが自動的にクリアされます。統合またはデータ・ロード・ルールが実行されると、「領域のクリア」で定義されたディメンションの組合せがデータのロード前にクリアされます。

Planning の場合、期間、年およびシナリオ・ディメンションがデータに基づいて自動的に派生し、これらのディメンションに対してフィルタを指定する必要はありません。これらのディメンションに対してメンバーを指定した場合、それらは無視されます。

Oracle General Ledger の場合、元帳、シナリオおよび会計期間ディメンションがデータに基づいて自動的に派生し、これらのディメンションに対してフィルタを指定する必要はありません。これらのディメンションに対してメンバーを指定した場合、それらは無視されます。

ノート:

「アプリケーション・オプション」の**非管理の置換**設定によって、管理者以外のユーザーが使用できる置換方法が決まります。これらの方法には、「なし」、「数値データのみ」および「すべてのロード方法」があります。詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください。


 ノート:

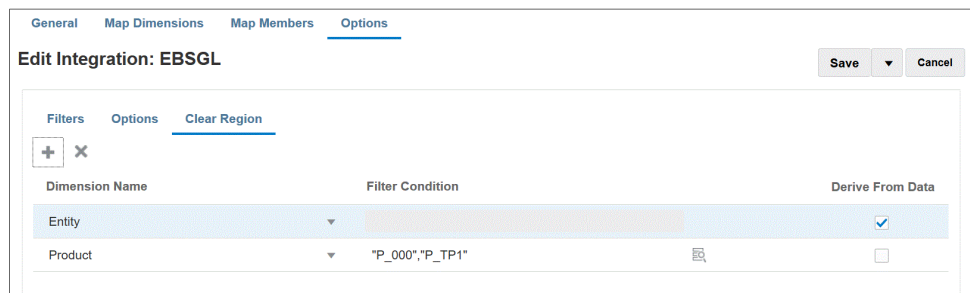
「領域のクリア」機能は、Financial Consolidation and Close、Tax Reporting、Account Reconciliation および Profitability and Cost Management ビジネス・プロセスには使用できません。

 ノート:

ASO キューブに対して置換モードで統合を実行する際に、シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、数値データ・ロードのみが実行されます。階層が完全に含まれた完全修飾名でメンバー名を指定してください。シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、すべてのデータ型のロード方法は機能しません。


「領域のクリア」を定義するには:

1. 「データ統合」 ホーム・ページから、Planning アプリケーションの右側にある  をクリックし、「オプション」を選択します。
2. オプション・ページで、「領域のクリア」 タブをクリックします。



Dimension Name	Filter Condition	Derive From Data
Entity		<input checked="" type="checkbox"/>
Product	"P_000","P_TP1"	<input type="checkbox"/>

3. 「ディメンション名」 から、 をクリックして、領域のクリアの追加元のディメンションを追加します。

ディメンションの右側にある  をクリックして、ドロップダウンからディメンションを選択することもできます。

4. 領域をクリアする方法を選択します。

ターゲット・アプリケーションにエクスポートできるデータに基づいてメンバー・リストを作成することで領域をクリアするには、**手順 5** に進みます。

メンバー(収益の子孫など)を選択することで領域をクリアするには、**手順 6** に進みます。

5. ディメンションを選択し、「データからの派生」 をクリックして選択したディメンションのデータをクリアし、ターゲットへのエクスポートに使用できるデータに基づいてメンバー・リストを作成します。

領域のクリアに対して 「データからの派生」 方法を選択する場合は、「フィルタ条件」 フィールドでフィルタを指定しないでください。

このオプションは、データの転記先の会社またはコスト・センターのデータをクリアするが、実行ごとに値を変更しない場合に便利です。

6. フィルタに基づいてデータをクリアするか、メンバー・セレクタを使用するには、「**フィルタ条件**」フィールドでフィルタまたはメンバー・セレクタを指定します。

 **ノート:**

General Ledger には関数は使用できません。親メンバーを選択でき、すべての子の値がクリアされます。

7. データ・ロード・ルールの統合を実行した後、「領域のクリア」機能の詳細を表示するには、ジョブの「プロセスの詳細」に移動し、ログを開きます。

```
2020-06-04 07:22:53,890 INFO [AIF]: EssbaseRuleFile.getReplaceDataScript - START
2020-06-04 07:22:53,914 DEBUG [AIF]: dimName: Entity, dimClassName: Entity, balColName: ENTITY, filter: DERIVE_FROM_DATA
2020-06-04 07:22:54,118 DEBUG [AIF]: dimName: Period, dimClassName: Period, balColName: null, filter: DERIVE_FROM_DATA
2020-06-04 07:22:54,121 DEBUG [AIF]: dimName: Product, dimClassName: Generic, balColName: UD3, filter: "P_000"
2020-06-04 07:22:54,121 DEBUG [AIF]: dimName: Scenario, dimClassName: Scenario, balColName: null, filter: DERIVE_FROM_DATA
2020-06-04 07:22:54,143 DEBUG [AIF]: dimName: Version, dimClassName: Version, balColName: UD1, filter: DERIVE_FROM_DATA
2020-06-04 07:22:54,344 DEBUG [AIF]: dimName: Year, dimClassName: Year, balColName: null, filter: DERIVE_FROM_DATA
2020-06-04 07:22:54,348 INFO [AIF]: Replace data script:
```

ビジネス・ルールの使用

ビジネス・ルールを使用すると、Planning アプリケーションにデータをロードする際に高度なルールを起動および管理できます。この機能により、プログラマの支援や EPM 自動化などの追加ツールを必要とせずに、ルール・ロジックを呼び出すことができます。数値データのみおよびすべてのデータ型のロード方法のビジネス・ルールを実行できます。また、個々のビジネス・ルールまたはルール・セットを実行できます。ルール・セットを使用すると、複数のルールを組み合わせて、同時または順次に行うことができます。

ビジネス・ルールの例には次のものがあります:

- データをロードする前にデータをクリアする
- 計算を実行する
- データを集約する
- キューブの 1 つのスライスにデータをコピーする

アプリケーションまたは統合レベルでビジネス・ルールを登録します。アプリケーション・レベルで登録されたビジネス・ルールは、アプリケーションにデータをロードするすべての統合に対して実行できます。統合レベルでは、選択した統合に対して実行するビジネス・ルールを「オプション」タブで登録します。

ビジネス・ルールを使用を開始するには、「アプリケーション」の新しいビジネス・ルールページに移動し、独立または埋込みモードでビジネス・ルールを登録します。

独立モードは、データ統合ワークフローのシステム・イベントにตอบสนองして実行できるルールを登録する場合に使用します。登録には、システム・イベント、ルールまたはルール・セット名、ランタイム・パラメータおよび実行シーケンスが含まれます。

埋込みモードは、データ・ロード・プロセスの後に実行されるビジネス・ルールを登録するために使用します。このモードはデータ・ロード・プロセスの一部として組み込まれ、ロードされたデータ交差へのアクセスを提供します。このモードは、すべてのデータ型ロード方法を使用している場合にのみ使用できます。埋込みルールはイベントによってトリガーされず、ランタイム・パラメータをサポートしていません。


計算スクリプトを実行するビジネス・ルールを実行できます。計算スクリプトを使用したビジネス・ルールの設計および作成の詳細は、ビジネス・ルールの設計を参照してください。

Groovy スクリプトを実行するビジネス・ルールを実行できます。Groovy スクリプトを使用したビジネス・ルールの設計および作成の詳細は、Groovy ビジネス・ルールの作成を参照してください。


独立モードでのビジネス・ルールの登録

システム・イベントに応答してルールを実行する場合は、ビジネス・ルールを独立モードで登録します。

ビジネス・ルールを独立モードで登録するには:

1. アプリケーションにロードするすべての統合のビジネス・ルールを登録するには、**アプリケーション** ページで、アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**ビジネス・ルール**」を選択します。

または

特定の統合のビジネス・ルールを登録するには、**全般** ページで、統合の右側にある  をクリックして「**オプション**」を選択し、**統合の編集** ページで「**ビジネス・ルール**」タブを選択します。

ノート:

特定のイベントに統合およびアプリケーション・レベルで登録されたビジネス・ルールがある場合、統合レベルのビジネス・ルールのみがトリガーされます。


2. **ビジネス・ルール** ページで、「**独立**」モードをクリックします。
3.
 - 抽出前
 - インポート前
 - インポート後
 - ロード前
 - ロード後
 - 確認前
 - 確認後

データ統合でビジネス・ルールをトリガーするために使用できるシステム・イベントの説明は、[ビジネス・ルールでサポートされるイベント](#)を参照してください。

4. 「**タイプ**」から、実行するビジネス・ルールが個別のルールであるか、特定のイベントのルールセットに属しているかを選択します。

使用可能なタイプ:

- ルール - 特定のイベントに対して実行できる特定のビジネス・ルールを指定します。

- ルール・セット - ルールセットに属するビジネス・ルールを指定します。ルールセットは、実行するルールのセットに複数のルールが含まれている場合に実行の単位となります。ルールセットでは、ルールの優先度は、ルールセット内のルールの起動順序を指定するために適用されます。ルールセットは、ロジック要件に応じてルールを順次または同時に起動するために使用されます。
5. 「名前」から、実行するビジネス・ルールを選択します。
- このフィールドで使用できるビジネス・ルールは、**Calculation Manager** で事前作成され、**Planning** ターゲット・アプリケーションにデータをロードするときにデータ統合で使用できるようになります。
- Planning** でビジネス・ルール名が変更された場合、ビジネス・ルール名およびロジックを検証しないデータ統合では、新しいビジネス・ルール名が自動的に変更されることはありません。
6. 「実行時プロンプト」で、 をクリックして実行時プロンプトを追加または編集します。
- 実行時プロンプトの操作の詳細は、[ビジネス・ルールへの実行時プロンプトの追加](#)を参照してください。
7. 「シーケンス」で、複数のルールまたはルールセットが1つのイベントに関連付けられている場合にルールを実行する順序を指定します。
- 複数のスクリプトを1つのイベントで実行できるため、このシーケンス値によって各ビジネス・ルールを実行する順番を指定します。任意の数を入力できますが、数がイベント内で一意である必要があります。

ビジネス・ルールでサポートされるイベント

次のシステム・イベントでは、独立モードでビジネス・ルールをトリガーできます。システム・イベントは `bin/scripts/event` フォルダに格納されます。

イベント	説明
抽出前	このイベントは、データがソース・アプリケーションから抽出される前にトリガーされます。たとえば、このイベントを使用してデータの集約や BSO キューブから ASO キューブへのコピーなどの計算を実行でき、データの同期またはデータ・エクスポート用のデータを抽出する前に「抽出前」イベントを使用します。
インポート前	このイベントは、データがステージング表にインポートされる前にトリガーされます。たとえば、このイベントを使用してビジネス・ルールを実行し、処理用のデータ・ファイルを生成できます。
インポート後	このイベントは、データがステージング表にインポートされた後にトリガーされます。
ロード前	このイベントは、データが Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションにロードされる前にトリガーされます。たとえば、このイベントを使用してカスタム・クリア・スクリプトを実行し、新しいデータをロードする前にデータをクリアできます。
ロード後	このイベントは、データが EPM Cloud アプリケーションにロードされた後にトリガーされます。たとえば、このイベントを使用して、データがロードされた後に計算を実行できます。

イベント	説明
確認前	確認ルールの前に呼び出されます。
確認後	これは、確認ステップの後で呼び出されるイベントであり、最後のイベントです。たとえば、このイベントを使用して、データを別のバージョンにコピーするビジネス・ルールをトリガーしたり、別のビジネス・ルールをトリガーして他のダウンロード・タスクを実行できます。

ビジネス・ルールへの実行時プロンプトの追加

ビジネス・ルールをデプロイするときに、実行時プロンプト変数の値を入力または編集できます。実行時プロンプトを使用すると、ルールで使用される値リストを識別および定義することにより、ルールをパラメータ化できます。ビジネス・ルールに実行時プロンプトが含まれている場合、ユーザーはビジネス・ルールを起動する前に必要な情報を入力します。ビジネス・ルールは、メンバー、テキスト、日付または数字としての変数についてユーザーにプロンプト表示します。プロンプトは特定である必要があり、どのようなタイプのデータが予期されるかをユーザーに示します。たとえば、ユーザーがルールの実行時に特定のエンティティを選択できるようにする実行時プロンプトを追加できます。

実行時プロンプトの値は、POV 期間などの事前定義済みの値リストから選択できます。


カスタム・パラメータを指定することもできます。その場合、変数を明示的に指定するか、任意の Oracle Essbase フィルタ構文を入力できます。

さらに、オプション・ページの「統合オプション 1」 - 「統合オプション 4」フィールドに保管されている値を参照して、計算ロジックを推進します。

ノート:

実行時プロンプトは、データ統合によって検証されません。

ビジネス・ルールに実行時プロンプトを追加するには:

1. **ビジネス・ルール**・ページで、「**独立**」をクリックします。
2. **+** をクリックします。
3. 実行時プロンプトを追加するビジネス・ルールを選択します。
4. 「**実行時プロンプト**」で、 をクリックして実行時プロンプトを追加または編集します。
5. **実行時プロンプト**・ページで、**+** をクリックします。
6. 「**名前**」に、(Planning の)ビジネス・ルールで定義されている実行時プロンプトの名前を入力します。


たとえば、実行時プロンプトの名前として「**Entity**」と入力します。

この時点では、LOV (値リスト)は使用できません。

7. 「**値のタイプ**」から、実行時プロンプトに期待される値のタイプを選択します:

実行時プロンプトを作成するために使用できる値タイプは次に基づきます:

- カスタム - 「**カスタム値**」フィールドで指定されたカスタム・パラメータ。Essbase フィルタ構文に基づいてカスタム値を使用することもできます。詳細は、Essbase 計算スクリプトの操作を参照してください。
- POV 期間 - 統合が実行されている期間に基づく事前定義済の POV 期間値
- POV 年 - 統合が実行されている期間に基づく事前定義済の POV 年値
- POV カテゴリ - 統合(データ・ルール)定義の POV カテゴリに基づく事前定義済のシナリオ値。
- すべてのデータ・ロード・エンティティ - データ・ロードのエンティティ・リスト
- すべてのデータ・ロード勘定科目 - データ・ロードの勘定科目リスト
- 統合オプション1 - 統合オプション4 - 「全般オプション」の「統合オプション1」から「統合オプション4」のフィールドに保存された自由形式のテキストまたは値。詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください。

 **ノート:**

デフォルトでは、ビジネス・ルールは統合で指定されたターゲット・プラン・タイプに対して実行されます。異なるプラン・タイプのビジネス・ルールを実行する場合は、「プラン・タイプ」という名前の実行時プロンプトを指定し、カスタム値タイプを指定してから、目的のプラン・タイプの名前をカスタム値として指定します。

次の例は、データのクリア・ビジネス・ルールの統合に関連付けられたデフォルトのプラン・タイプ以外のプラン・タイプを指定する方法を示しています。

Run Time Prompts: Clear Data		
+ X		
Name	Value Type	Custom Value
Plan Type	Custom	Plan Type 03

8. 実行時プロンプトにカスタム値タイプを選択した場合は、「**カスタム値**」フィールドに実際の値を指定します。
9. 「OK」をクリックします。

この例では、エンティティを求めるデータのクリア・ビジネス・ルールに対してカスタム実行時プロンプトが定義されています。

Run Time Prompts: Clear Data

+ ×

Name	Value Type	Custom Value
Entity	Custom	110

OK
Cancel

ビジネス・ルールの詳細は、「プロセスの詳細」で確認できます。


```
2020-09-24 19:06:47,108 DEBUG [AIF]: DEBUG:Parameters:{"jobName":"Clear Data","jobType":"RULES","parameters":{"Entity":"\\110\\","planType":"VisASO"}}
2020-09-24 19:06:47,108 INFO [AIF]: Calling Rest service to submit the job for event:Beflmpport, rule:Clear Data, type:RULES
2020-09-24 19:06:48,241 INFO [AIF]: Submitted Rest service job, process Id: 4
2020-09-24 19:06:48,454 INFO [AIF]: Executing rule:Clear Data completed.
```

埋込みモードでのビジネス・ルールの登録


埋込みモードは、データ・ロード・プロセスの後に実行されるビジネス・ルールを登録するために使用します。このモードはデータ・ロード・プロセスの一部として組み込まれ、ロードされたデータ交差へのアクセスを提供します。このモードは、すべてのデータ型ロード方法を使用している場合にのみ使用できます。埋込みルールはイベントによってトリガーされず、ランタイム・パラメータをサポートしていません。

ビジネス・ルールを埋込みモードで登録するには:

1. アプリケーションにロードするすべての統合のビジネス・ルールを登録するには、


アプリケーションページで、アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**ビジネス・ルール**」を選択します。

または

特定の統合のビジネス・ルールを登録するには、**全般**ページで、統合の右側にある  をクリックして「**オプション**」を選択し、**統合の編集**ページで「**ビジネス・ルール**」タブを選択します。

ノート:

特定のイベントに統合およびアプリケーション・レベルで登録されたビジネス・ルールがある場合、統合レベルのビジネス・ルールのみがトリガーされます。

2. **ビジネス・ルール**・ページで、「**埋込み**」モードをクリックします。
3.  をクリックします。
4. 「**名前**」から、実行するビジネス・ルールを指定します。

このフィールドで使用できるビジネス・ルールは、**Calculation Manager** で事前作成され、**Planning** ターゲット・アプリケーションにデータをロードするときにデータ統合で使用できるようになります。

Planning でビジネス・ルール名が変更された場合、ビジネス・ルールを検証しないデータ統合では、新しいビジネス・ルール名が自動的に変更されることはありません。

5. 「シーケンス」で、複数のルールまたはルールセットが統合またはアプリケーションに関連付けられている場合にルールを実行する順序を指定します。



6. 「保存」をクリックします。

10

データ・マップの定義

ソース・アプリケーションとターゲット・レポート・アプリケーション間のデータ・マッピングを作成します。

次も参照:

- [データ・マップの理解](#)
- [データ・マップの作成](#)
- [データ・マップのリフレッシュ](#)
- [データ・マップの管理](#)
- [データの移動](#)
- [データ・マップおよびスマート・プッシュのリアルタイム進捗ステータスのチェック](#)

データ・マップの理解

データ・マップを使用して、データ、コメント、添付およびサポート詳細を、ソース・キューブとスマート・リストからターゲット・アプリケーションに移動します。ソース・キューブとターゲット・キューブの間でディメンションをマップし、次のようなデータのプッシュを可能にすることができます:

- Planning またはフリーフォーム・アプリケーション内
- Planning アプリケーション間
- Planning から Financial Consolidation and Close および Tax Reporting へ

ノート:

Planning から Enterprise Profitability and Cost Management、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting にプッシュする場合、スマート・リストはサポートされません。

- 戦略モデリングと Planning の間
- 同じ環境内の Enterprise Profitability and Cost Management ソースと Enterprise Profitability and Cost Management ターゲットの間。

 ノート:

データ・マップでは、集約ストレージ・キューブ(ASO キューブ)がソースとしてサポートされます。レコード全体がゼロ、欠落した値、または欠落した値とゼロ値の組合せで構成されている場合、データ・マップおよびスマート・プッシュでは無視されます。

 ノート:

クロス・アプリケーション・データ・マップは、スマート・プッシュでのみサポートされます。クロス・アプリケーションのデータ・マップ・プッシュは、今後の更新でサポートされるようになります。

詳細なメンバー・レベルのマッピングを含む **Planning** データ・マップは、スマート・プッシュでのみサポートされます。これらのデータ・マップのデータ・マップ・プッシュは、今後の更新でサポートされるようになります。

ビデオ

目的

データ・マップを使用してデータを移動する方法を学習します。

視聴するビデオ



[Oracle Planning and Budgeting Cloud でのレポートのデータの即時プッシュ](#)

関連トピック

- [アプリケーションについて](#)
- [レポート・キューブについて](#)
- [データ・マップでサポートされていない機能](#)

アプリケーションについて

アプリケーションは、プランニングのニーズを満たすために使用される、関連する一連のディメンションとディメンション・メンバーです。各アプリケーションにはそれ自体の勘定科目、エンティティ、シナリオおよび他のデータ要素があります。

Planning アプリケーションの詳細は、*Planning の管理*のアプリケーションの管理を参照してください。

Enterprise Profitability and Cost Management アプリケーションの詳細は、*Enterprise Profitability and Cost Management の管理と作業*の Enterprise Profitability and Cost Management アプリケーションの作成を参照してください。

レポート・キューブについて

レポート・キューブは、Planning データを集約してレポートできるキューブです。主なユース・ケース:

- レポート・キューブに、データ・ウェアハウスなどの任意のソースからのデータが含まれています。新しい Planning データをそこに移動し、そのデータに関してレポートする必要があります。
- Planning のスマート・リストに関してレポートする必要がありますが、Planning ではできません。

データ・マップでサポートされていない機能

レポート・アプリケーションへの Planning アプリケーションのマッピングでは、次はサポートされません。

- 重複メンバー使用可能オプションが選択された集約ストレージ・データベース・アウトライン
- 属性ディメンション
- 属性メンバー選択

データ・マップの作成

アプリケーションをレポート・アプリケーションにマップするデータ・マップを作成するには:

1. 「アプリケーション」、「データ交換」、「データ・マップ」の順にクリックします。
2. ホーム・ページで、「作成」をクリックします。
3. データ・マップの名前および説明を入力します。
4. 「ソース」と「ターゲット」の選択内容を次のようにします。
 - 「ソース」で、使用可能なキューブから現在のアプリケーションのキューブを選択します。
 - 「ターゲット」で、使用可能なアプリケーションとキューブからターゲット・レポート・アプリケーションのアプリケーションとキューブを選択します。

選択したソースおよびターゲット・キューブの現在のマッピングが「ソース」と「ターゲット」に表示され、マップされていないディメンションは「マップされていないディメンション」に表示されます。

ノート:

戦略モデリングと Planning の間でデータをプッシュするためのデータ・マップを作成している場合は、「ソース」と「ターゲット」の追加オプションが表示されます:

- 「ソース」のオプションは、「モデルの選択」および「シナリオ・ロールアップの選択」です。モデルまたは連結を選択し、「選択」をクリックします。
- 「ターゲット」では、モデルが「ソース」の場合、ターゲット Planning キューブまたはターゲット「モデル」を選択します。シナリオ・ロールアップが「ソース」である場合は、ターゲット Planning キューブまたはシナリオ・ロールアップを選択します。

リストに「戦略モデリング」モデルがない場合、「アクション」メニューから「同期」を選択します。

5. **オプション**。現在のマッピングを変更し、任意のマップされていないディメンションをマップします。

現在のマッピングを変更するには、[ディメンションのマッピング情報の変更](#)を参照してください。

マップされていないディメンションをマップするには、[マップされていないディメンションの移動](#)を参照してください。

6. データ・マップ・オプションを定義します。

[データ・マップ・オプションの定義](#)を参照してください。

7. 「保存して閉じる」をクリックします。

新しいデータ・マップがデータ・マップ・リストの最後に追加されます。

データ・マップのリフレッシュ

データ・マップをリフレッシュするには:

1. 「アプリケーション」、「データ交換」、「データ・マップ」の順にクリックします。
2. 「リフレッシュ」をクリックします。

データ・マップの管理



次も参照:

- [データ・マップの表示](#)
- [ディメンションのマッピング情報の変更](#)
- [詳細なメンバー・レベルのマッピングの使用](#)
- [マップされていないディメンションの移動](#)
- [詳細マッピングの移入](#)
- [データ・マップからのメンバーの除去](#)

- [データ・マップ・オプションの定義](#)
- [データ・マップの詳細の編集](#)
- [データ・マップの複製](#)
- [Excel へのデータ・マップのエクスポート](#)
- [データ・マップのインポート](#)
- [データ・マップの削除](#)
- [データ・オプションの設定](#)
- [デフォルト・メンバーの検証ルール](#)

データ・マップの表示

データ・マップを表示するには:

1. 「[アプリケーション](#)」、「[データ交換](#)」、「[データ・マップ](#)」の順にクリックします。
2. 次のタスクを実行してリストを検索、フィルタまたはソートします。
 - 名前でマップを検索するには、「[検索](#)」にテキストを入力し、それから  をクリックします。
 - ソースまたはターゲットによりマップをフィルタするには、「[すべてのソース](#)」および「[すべてのターゲット](#)」をクリックしてフィルタ条件を選択します。
 - 各列のアイテムを昇順または降順にソートするには、カーソルを列見出しに置き、「[昇順ソート](#)」または「[降順ソート](#)」  を選択します。
3. 次のタスクを実行します:
 - データ・マップを作成します。[データ・マップの作成](#)を参照してください。
 - データ・マップ・リストをリフレッシュします。[データ・マップのリフレッシュ](#)を参照してください。
 - マッピング情報を変更します。[ディメンションのマッピング情報の変更](#)を参照してください。
 - マップされていないディメンションをマップします。[マップされていないディメンションの移動](#)を参照してください。
 - データ・マップ・オプションを定義します。[データ・マップ・オプションの定義](#)を参照してください。
 - データ・マップの詳細を編集します。[データ・マップの詳細の編集](#)を参照してください。
 - データ・マップを複製します。[データ・マップの複製](#)を参照してください。
 - データ・マップを削除します。[データ・マップの削除](#)を参照してください。
 - レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期します。[Planning の管理のレポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期](#)を参照してください。
 - リレーショナル・データ・マージ・オプションを設定します。[データ・オプションの設定](#)を参照してください。
 - デフォルト・メンバーの検証ルールをレビューします。[デフォルト・メンバーの検証ルール](#)を参照してください。

ディメンションのマッピング情報の変更

データ・マップ内のディメンションのマッピング情報を変更するには:

1. 「**データ・マップ**」 リスト・ページを表示します。
データ・マップの表示を参照してください。
2. 既存のデータ・マップをクリックします。
3. 「**ソース**」でディメンションを選択し、▼をクリックして、マッピングに使用する新しいソース・ディメンションまたはスマート・リストを選択します。
すべてのディメンションがマップされている場合、既存のソース・ディメンションをスマート・リスト(▼をクリックすると、「スマート・リスト」のみが表示されます)にマップするだけで済みます。別のディメンションにマップできるようにディメンションのマッピングを解除するには、「**ソース**」でディメンションを選択し、✖をクリックします。ディメンションは「**マップされていないディメンション**」に移動されます。

詳細なメンバー・レベルのマッピングの使用

詳細なメンバー・レベルのマッピングを使用して、例外を操作するときに、あるキューブから別のキューブにデータを移動する間にディメンションの選択したメンバーを含めます。つまり、ソース・メンバーとターゲット・メンバーが同じであるか、ロールアップ・メンバー・マッピングまたは変換を必要としない場合、メンバー・レベルのマッピングを定義する必要はありません。データを移動する間に詳細なメンバー・レベルのマッピングを含めることは、複数のディメンションとの間で、または単一のディメンションから名前が異なるメンバー間で複雑なマッピングを定義する必要がある場合に役立ちます。マッピングは、ソース・キューブのメンバーがターゲット・キューブのメンバーと一致しない場合に必要です

詳細なメンバー・レベルのマッピングには、次のものがあります:

- 単純なマッピング: ソース・メンバーとターゲット・メンバー間の 1 対 1 のマッピング
- ロールアップ・マッピング: ソースの複数のメンバーを単一のターゲット・メンバーへ。
- マルチディメンション・マッピング: 複数のディメンションのマッピングを使用すると、2 つのソース・ディメンションを 1 つのターゲット・ディメンションに、または 1 つのソース・ディメンションを 2 つのターゲット・ディメンションにマップできます。
- 代替変数マッピング: ソースのディメンション・メンバーを明示的にマップするかわりに、データ・プッシュ/スマート・プッシュ中に参照されて取得されるように、代替変数を選択します。

単純なメンバー・レベルのマッピングの定義

単純なメンバー・レベルのマッピングを定義するには:

1. 「**データ交換**」を開き、「**データ・マップ**」をクリックします。

2. 「作成」をクリックします。
3. データ・マップの名前および説明を入力します。
4. 「ソース」と「ターゲット」の選択内容を次のようにします。
 - 「ソース」で、使用可能なキューブから現在のアプリケーションのキューブを選択します。
 - 「ターゲット」で、ターゲットの使用可能なキューブからキューブを選択します。
異なるアプリケーション(クロス・アプリケーション)を使用している場合は、「ターゲット」で、「キューブ」ドロップダウンから「リモート・キューブの選択」を選択します。詳細は、[クロス・アプリケーション・スマート・プッシュの使用](#)を参照してください。

選択したソースおよびターゲット・キューブの現在のマッピングが「ソース」と「ターゲット」に表示され、マップされていないディメンションは「マップされていないディメンション」に表示されます。
5. **オプション**。現在のマッピングを変更し、任意のマップされていないディメンションをマップします。
現在のマッピングを変更するには、[ディメンションのマッピング情報の変更](#)を参照してください。
マップされていないディメンションをマップするには、[マップされていないディメンションの移動](#)を参照してください。
6. データ・マップ・オプションを定義します。
[データ・マップ・オプションの定義](#)を参照してください。
7. **オプション**: 詳細マッピングの移入機能を使用して、詳細マッピングを編集します。詳細は、次を参照してください [詳細マッピングの移入](#)
8. 「保存して閉じる」をクリックします。
新しいデータ・マップがデータ・マップ・リストの最後に追加されます。

ロールアップ・マッピングの定義



複数のソース・メンバーを単一のターゲット・メンバーにマップする必要がある場合は、ロールアップ・マッピングを使用して、選択したソース・メンバーをターゲット・メンバーに集約します。たとえば、ソースの複数の勘定科目を集約し、ターゲット内の単一の勘定科目にマップするには、ソース内のメンバーごとに行を追加し、それぞれを同じターゲット・メンバーにマップします。

ロールアップ・マッピングを使用するには:







1. 「データ・マップ」ホーム・ページで、ロールアップの詳細マッピングを定義するデータ・マップの名前をクリックします。
2. 詳細ページで、ロールアップ・マッピングを追加するディメンションを選択します。
3. マッピングを追加するディメンションの「マップ」をクリックします。
4. **データ・マップの編集**ページで、ターゲット・メンバーにロールアップするソース・メンバーを選択します。

ソース・メンバーがターゲット・メンバーと異なる場合、ソース・メンバーが表示される場合があります。表示されない場合は、「詳細マッピングの移入」機能を使用するか、「ソ

ース」の矢印ドロップダウンをクリックして各メンバーを選択することでマップする各メンバーを選択します。

- a. ソース・メンバーを追加するには、「ソース」の選択矢印()をダブルクリックし、マップするソース・メンバーを選択します。
- b. ターゲット・メンバーを追加するには、「ターゲット」の選択矢印()をダブルクリックし、マップするターゲット・メンバーを選択します。

その他のオプションは、次のとおりです:

- ソース・メンバーとターゲット・メンバー間のマッピング定義(行)を追加するには、 をクリックします。
- マッピング行を削除するには、行を選択して  をクリックします。
- マッピング行をコピーするには、コピーされる行を選択して  をクリックします。
- マッピング行を貼り付けるには、 をクリックします。
- 無効なエントリを削除するには、 をクリックします。
- 詳細マッピングを移入するには、 をクリックします。
詳細は、[詳細マッピングの移入](#)を参照してください。

5. オプション: 必要に応じて演算子を指定します。

行の演算子により、現在の行に対して使用する操作が定義されます。

メンバーの一部を減らす場合は、演算子を-に変更します。





デフォルトでは、各行の+演算子によって集約が定義されます。

6. 「完了」 をクリックします。

次の例では、ソース・メンバー 110 および 111 は、ターゲット・メンバー 120 へのロールアップ・マッピングです。

Edit Data Map ? ... Done Cancel

Basic Information Options Source Selection Target Selection Account Entity Period Product Scenario Version Year Unmap >

+    

	Source		Target
	Operator	Entity	Entity
1	+ ▼	111	120
2	+ ▼	110	120

マルチディメンション・マッピングの定義

マルチディメンション・マッピングを使用すると、2つのソース・ディメンションを1つのターゲット・ディメンションに、または1つのソース・ディメンションを2つの

ターゲット・ディメンションにマップできます。たとえば、ソース・ディメンションの年をターゲットの年および期間ディメンションの組合せにマップします。または、ソースの年および期間ディメンションの組合せを単一のターゲット・ディメンションの年にマップできます。

マルチディメンション・マッピングを使用するには:

1. 「**データ・マップ**」 ホーム・ページで、マルチディメンション・マッピングを定義するデータ・マップの名前をクリックします。
2. **詳細**ページで、マルチディメンション・マッピングを定義するディメンションを選択し、次のいずれかを選択します。

ターゲット・マッピングを追加するには、ディメンションの右側にある **...** をクリックし、「**ターゲット・マッピングの追加**」を選択します。1つのソース・ディメンションを2つのマップされていないターゲット・ディメンションに追加できます。

ソース・マッピングを追加するには、ディメンションの右側にある **...** をクリックし、「**ソース・マッピングの追加**」を選択します。2つのマップされていないソース・ディメンションを1つのターゲット・ディメンションに追加できます

3. 「**ソース・マッピングの追加**」 または 「**ターゲット・マッピングの追加**」 を選択したディメンションから 「**選択**」 をクリックし、ディメンションを選択します

「**ソース・マッピングの追加**」 を選択した場合は、このディメンションのメンバーを選択します。

「**ターゲット・マッピングの追加**」 を選択した場合は、メンバーをデフォルトのままにするか、マッピングで使用するターゲット・メンバーを選択します。

メンバーをデフォルトのままにする場合は、ディメンションの任意のメンバーを選択できます。

メンバーを選択した場合は、選択したメンバーのみをマッピングで使用できます。



4. メンバーをマップするディメンションで 「**マップ**」 をクリックします。

5. **データ・マップの編集** ページで、次のいずれかを実行します:

2つのソース・ディメンションを1つのターゲット・ディメンションにマップする場合は、2つのソース・メンバーを選択してターゲット・メンバーにマップします。

1つのソース・メンバーを2つのターゲット・メンバーにマップする場合は、ソース・メンバーを選択して2つのターゲット・メンバーにマップします。

6. **オプション**: 必要に応じて演算子を選択します。デフォルトの演算子は+です。

行の演算子により、現在の行に対して使用する操作が定義されます。

次の例では、2つのターゲット・ディメンションが1つのソース・ディメンションにマップされています。

Edit Data Map ? ... Done Cancel

Basic Information Options Source Selection Target Selection Account Entity Scenario Version Year Unmapped Source Unm >

	Source		Target	
	Operator	Year	Year	Period
1	+ ▼			
2	+ ▼	FY11	FY11	Jan
3	+ ▼	FY12	FY12	Feb ▼

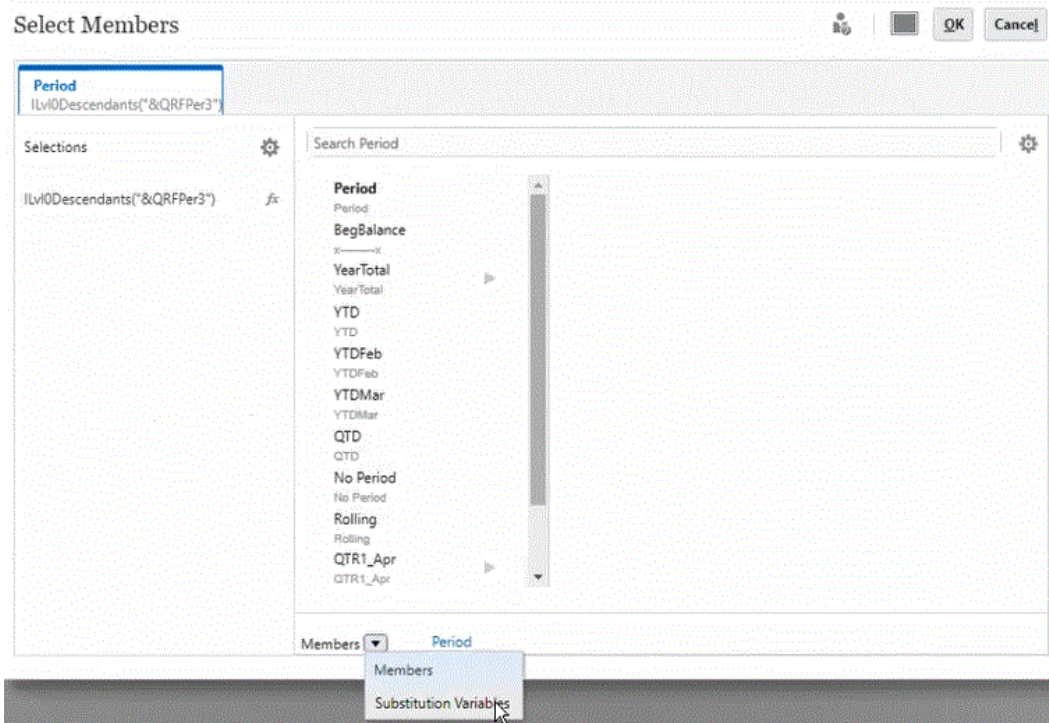
7. 「完了」をクリックします。

代替変数マッピングの定義

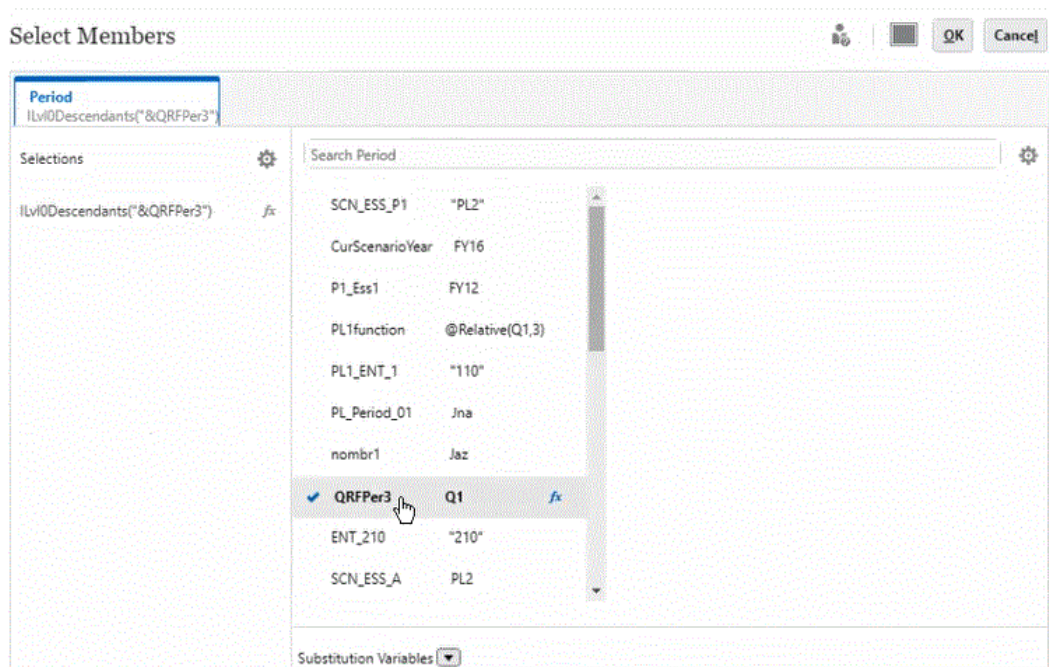
代替変数マッピングを使用して、ソースの明示的にマップされたディメンションを使用するかわりに、データ・プッシュ/スマート・プッシュ中に代替変数を取得します。


代替変数マッピングを使用するときは、次の点に注意してください：

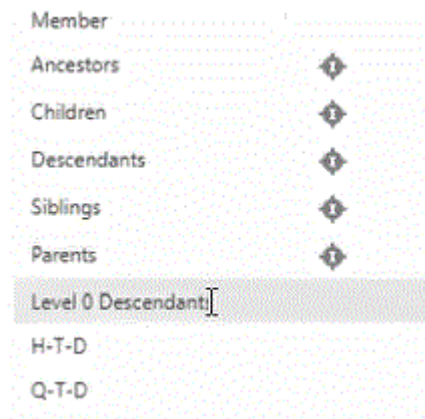
- 代替変数は、データの移動時に確認されます。
 - メンバー・セレクトには、**Planning** アプリケーションに対して定義された代替変数が表示されます。
 - ディメンション間マッピングの場合、代替変数はソース・アプリケーションに存在し、代替変数の値はターゲット・アプリケーションにプッシュするために使用されます。
 - マップされていないディメンションの場合、メンバー・セレクトには、このアプリケーションに対してのみ定義された代替変数が表示されます。
 - 代替変数は、クロス・アプリケーション・データ・マップのターゲットではサポートされません
1. 「**データ・マップ**」 ホーム・ページで、代替変数マッピングを定義するデータ・マップの名前をクリックします。
 2. **詳細** ページで、代替変数があるディメンションをクリックします。
 3. **メンバーの選択** ページの「**メンバー**」 ドロップダウンから、「**代替変数**」を選択します。



4. マップする代替変数を選択します。



5. オプション: 代替変数に対して関数を使用するには、 (「関数セレクタ」アイコン)をクリックして、リストから関数を選択します。



6. **詳細**ページで、ソースの代替変数をターゲットにマップするディメンションの「**マップ**」をクリックします。
7. **データ・マップの編集**ページで、ソースの代替変数をターゲットのメンバーにマップします。


 **Note:**

データ・マップで代替変数が使用されるときに、この代替変数に対して詳細マッピングを実行する必要がある場合は、代替変数の値が更新された後でデータ・マップの変更を避けるために、マッピングで代替変数に対して使用可能なすべての値を指定することをお勧めします。これは、そのディメンションに対して詳細マッピングを定義する必要がある場合にのみ適用されます。

8. 「**完了**」をクリックします。

マップされていないディメンションの移動

データ・マップでマップされていないディメンションを移動するには:

1. 「**データ・マップ**」リスト・ページを表示します。
[データ・マップの表示](#)を参照してください。
2. 次のいずれかを行います:
 - 新しいデータ・マップを作成するには、「**作成**」をクリックします。
 - 既存のデータ・マップのマッピングを編集するには、既存のデータ・マップをクリックします。
3. 「**マップされていないディメンション**」の「**ターゲット**」で、ディメンションの横にある  をクリックします。
 これにより、「**マップされていないディメンション**」から前述の「**ターゲット**」ディメンションの下にディメンションが移動されます。
4. 「**ターゲット**」の下に移動したディメンションを見つけます。
 「ソース」の下の対応するディメンションに「**選択**」が表示されます。

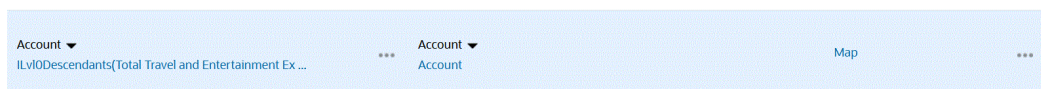
5. 「ソース」の下で「選択」の横にある ▼ をクリックし、マップされていないターゲット・ディメンションにマップするソース・ディメンションまたはスマート・リストを選択します。
6. 「保存して閉じる」をクリックします。

詳細マッピングの移入

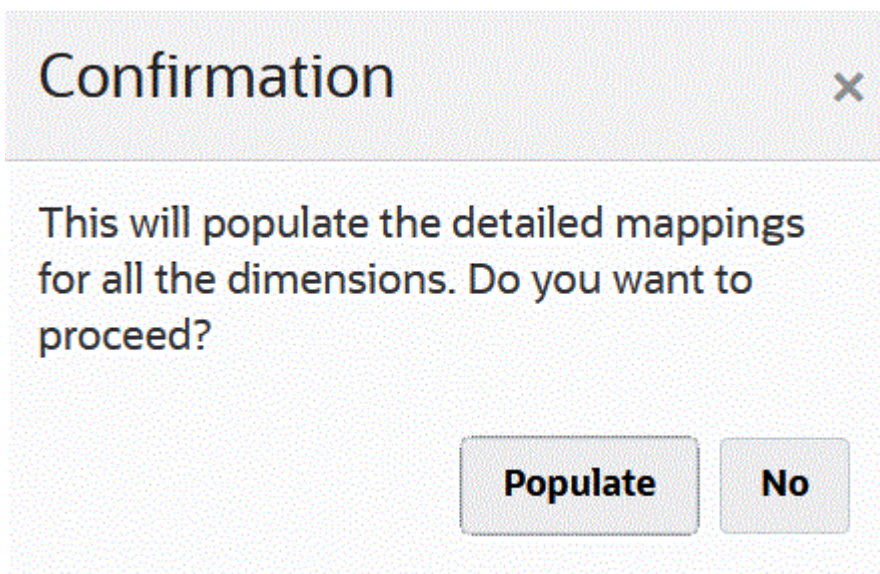
「詳細マッピングの移入」機能を使用して、ターゲットに存在しないソースのすべてのディメンションのすべてのメンバーに移入します。この機能を使用して詳細に移入することもできます。

ターゲットに存在しないソースのすべてのディメンションの詳細マッピングに移入するには:

1. 「データ・マップ」ホーム・ページで、データ・マップの名前をクリックします。
2. 詳細ページで、詳細マッピングに移入するディメンションを選択し、「マップ」をクリックします。



3. マッピングの編集ページで、... をクリックし、次に「詳細マッピングの移入」をクリックします。
4. 確認ページで、「移入」をクリックします。



次に示すように、ソースのすべてのディメンションに移入されます:

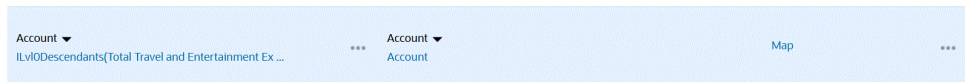
Edit Data Map ... Done Cancel

Basic Information Options Source Selection Target Selection Account Entity Period Product Scenario Version Years Unmap

	Source		Target
	Operator	Account	Account
1	+ ▼		
2	+ ▼	Hotel	
3	+ ▼	Airfare	
4	+ ▼	Meetings	
5	+ ▼	Meals	
6	+ ▼	Car Rental	
7	+ ▼	Other Travel and Entertainment	
8	+ ▼	Expense Planning	

単一ディメンションの詳細マッピングに移入するには:

1. 「データ・マップ」 ホーム・ページで、詳細マッピングについて編集するデータ・マップの名前を選択します。
2. 詳細ページで、編集用に選択されたメンバーをクリックし、「マップ」をクリックします。



3. メンバーの選択ページから、データ・マップに使用するメンバーを選択して「OK」をクリックします。
4. 既存のマッピングがあり、それを保持する場合は、警告ページで「いいえ」を選択します。

このディメンションのすべてのマッピングを削除する場合は、「はい」をクリックします。

5. 詳細ページで、マッピングを編集するディメンションのマップ済をクリックします。

6. マッピングの編集ページで、 をクリックして「完了」をクリックします。

データ・マップからのメンバーの除去

データ・マップ内の除外の定義を使用すると、キューブ間でのデータの移動中にディメンションのメンバーを除外できます。データ移動時のメンバー除外は、ターゲットの場所の特定データを上書きしたくない場合や、ターゲットの場所にデータが存在しないときに警告を受け取りたくない場合に役立ちます。また、除外では、他のすべてのソース・メンバーにデータが必要な状況で、特定のソース・メンバー・データを無視できます。除外は、ソースのマッピングされたディメンションとマッピングされていないディメンションに対して定義でき、1つのディメンションに対して複数の除外を定義できます。

各ディメンションで除外されたメンバーは、データ・マップ操作またはスマート・プッシュ操作のジョブの詳細に記録されます。

例:

勘定科目ディメンションでは、現預金勘定/銀行口座を除くすべての勘定科目に対してデータを取り込みます。そのためには、ソース・マッピングにすべての勘定科目を含

め、現預金勘定/銀行口座に対して除外を作成します。スマート・プッシュでは、定義された除外が考慮され、現預金勘定/銀行口座が無視され、他のすべての勘定科目にデータがロードされます。

ノート:

- 戦略モデリングのデータ・マップ除外も考慮されます。
- 基本メンバーを除外すると、共有メンバーもすべて除外されます。共有メンバーを除外した場合も同様に、基本メンバーも除外されます。
- 除外メンバーはソース・メンバーのサブセットである必要があります。
- ディメンションからメンバーを除外する場合、データ・マップを正常に保存および実行するには、そのディメンションのメンバー・リストに、除外メンバー・リストにないメンバーが少なくとも 1 つ含まれている必要があります。たとえば、マッピングに定義されている唯一の勘定科目メンバーが現預金勘定/銀行口座の場合、現預金勘定/銀行口座はそのマッピングから除外できません。マップ結果に少なくとも 1 つのメンバーが含まれるように選択内容を修正する必要があります。スマート・プッシュの定義についても同じことが言えます。

データ・マップからメンバーを除去するには:

1. 「**データ・マップ**」リスト・ページを表示します。
データ・マップの表示を参照してください。
2. 既存のデータ・マップをクリックします。
3. 「**ソース**」の下で、除外するメンバーが含まれたディメンション行の上にカーソルを置き、**...**をクリックし、次に「**除外の追加**」を選択します。

ノート:

マップされていないディメンションのメンバーも除外できます。

4. 除外する 1 つ以上のメンバーを選択し、「**OK**」をクリックします。
5. 後から考えが変わって除外を削除する場合は、ディメンション行の上にカーソルを置き、**...**をクリックし、次に「**除外の削除**」を選択します。

ノート:


「**除外の削除**」では、1 つのメンバーのみでなく、除外全体が削除されます。

除外リストからメンバーを削除するには、メンバー・セレクトを起動し、「**選択**」の下で削除するメンバーをハイライト表示して、




をクリックし、次に「**削除**」をクリックします。

6. 「保存して閉じる」をクリックします。

 ノート:

除外メンバーは、ディメンションに対する除外リストのメンバー・セレクトアを開くことで、いつでも追加または削除できます。

 ヒント:

あるメンバーをフォームの 1 つのセグメントから除外した場合、スマート・プッシュ・プロセスによって、そのメンバーはすべてのフォーム・セグメントから除外されます。この動作が不要な場合は、スマート・プッシュの「**選択内容の上書き**」オプションを使用して、スマート・プッシュ・プロセスのディメンション・メンバー選択を調整します。[フォームのスマート・プッシュの構成](#)を参照してください。

データ・マップ・オプションの定義

データ・マップ・オプションを定義するには:

1. 「データ・マップ」リスト・ページを表示します。
[データ・マップの表示](#)を参照してください。
2. 既存のデータ・マップをクリックします。
3. 「オプション」をクリックします。

表 10-1 データ・マップ・オプション

データ・マップ・オプション	説明
コピーするアイテムを選択	<p>対応するリレーショナル・データをコピーするアイテムを選択します。次をコピーできます：</p> <ul style="list-style-type: none"> • コメントと添付 <p>「照合順序」を選択した場合、次のようになります：</p> <ul style="list-style-type: none"> – ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングが存在する場合、コメントと添付がソース・セルからターゲット・セルにコピーされます。 – ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングが存在しない場合、ソース・セルのコメントと添付が結合され、対応するターゲット・セルに保存されます。 <p>「照合順序」を選択しない場合、次のようになります：</p> <ul style="list-style-type: none"> – ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングが存在する場合、コメントと添付がソース・セルからターゲット・セルにコピーされます。 – ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングが存在しない場合、最後のソース・セルのコメントと添付が対応するターゲット・セルにコピーされます。最後のソース・セルとは、空でないリレーショナル・データが含まれる複数のソース・セルの中の最後のソース・セルのことです。 • サポート詳細 <ul style="list-style-type: none"> – ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングが存在する場合、サポート詳細がソース・セルからターゲット・セルにコピーされます。 – ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングが存在しない場合、サポート詳細はターゲット・セルにコピーされません。 <p>「データ・マップ・オプション」ダイアログ・ボックスでコピーするように選択したリレーショナル・データ(「コメントと添付」と「サポート詳細」)は、スマート・プッシュを使用したデータの移動のみに適用されます。データの移動を参照してください。</p>

表 10-1 (続き) データ・マップ・オプション

データ・マップ・オプション	説明
スマート・リスト/ピボット・ディメンション	<p>スマート・リスト・ディメンションまたはピボット・ディメンションを選択します。</p> <p>スマート・リスト・ディメンションの選択には密ディメンションのみが許可されています。</p> <p>ディメンションをピボットすると、グリッド上のデータの向きが変わるため、別の角度からデータを見る、つまり情報をスライス・アンド・ダイスすることができます。Enterprise Profitability and Cost Management では、スマート・リスト/ピボット・ディメンション・ドロップダウン・リストに表示されたディメンションのみを選択できます。Enterprise Profitability and Cost Management でのディメンションのピボットの詳細は、<i>Enterprise Profitability and Cost Management の管理と作業のディメンションのピボット</i>を参照してください。</p>
動的計算メンバーを除外	<p>動的に計算されるメンバーのデータをデータ・マップ・プロセス中に移動しない場合に選択します。</p> <p>「動的計算メンバーを除外」は、データ・マップのプッシュのみでサポートされ、スマート・プッシュではサポートされません。</p>
同時スマート・プッシュの許可	<p>データ・マップ・プロセスとスマート・プッシュ・プロセスの同時実行を許可します。「はい」をクリックして、このオプションを有効にします。</p> <p>データ・マップ・プロセスとスマート・プッシュ・プロセスの同時実行を参照してください。</p>

表 10-1 (続き) データ・マップ・オプション

データ・マップ・オプション	説明
データの移動時にスマート・リスト・エントリ名の優先度を設定	<p>重複する別名がターゲット・キューブにある場合、データ・マップ操作またはスマート・プッシュ操作でメンバーの別名ではなく、スマート・リスト・エントリ名を使用するように要求します。</p> <p>スマート・リスト・エントリ名にはスペースや特殊文字を使用できません。関数を使用してスマート・リストが定義されている場合、かつメンバーにスペースが含まれている場合、それらのスペースはアンダースコアに変換されます。この制限により、スマート・リスト・エントリ名が使用されない場合があります。このオプションを選択すると、エントリ名に基づいてメンバーがチェックされ、エントリ名と一致するメンバーがない場合は、スマート・リスト・エントリ・ラベルを使用してメンバーがフェッチされます。</p> <p>スマート・リスト値が定義されていない交差については、スマート・プッシュ操作およびデータ・マップ操作では、スマート・リストに定義されている欠落しているラベルを使用してデータがプッシュされます。</p> <p>このオプションが有効になっていない場合、データ・プッシュ操作またはスマート・プッシュ操作によって重複する別名がターゲット・キューブで検出されると、操作は警告ありで完了し、ジョブの詳細で、重複する別名を削除するか(重複する別名はメッセージに示されている)、このデータ・マップ・オプションを選択するように求められます。</p>
#missing 値を次の形式でインポート (Planning がソースであり、戦略モデリングがターゲットであるデータ・マップに対してのみ)	<ul style="list-style-type: none"> • 無視 - インポートした#missing 値を無視し、ターゲット・セルの既存の値を保持します。 • 出力としてゼロを設定(デフォルト) - #missing 値をインポートし、ターゲット・セルで出力値を 0 に設定します。 • 数値以外 - #missing 値をインポートし、ターゲット・セルで出力値を NaN (数値以外) に設定します。 • 入力としてゼロを設定 - 入力セルを 0 に設定し、逆算は不要です。
数値以外の値を次の形式でインポート (戦略モデリングがソースであり、Planning がターゲットであるデータ・マップに対してのみ)	<ul style="list-style-type: none"> • 無視 - インポートした数値以外の値を無視し、ターゲット・セルの既存の値を保持します。 • 出力としてゼロを設定(デフォルト) - 数値以外の値をインポートし、ターゲット・セルで出力値を 0 に設定します。 • 数値以外 - 数値以外の値をインポートし、ターゲット・セルで出力値を数値以外に設定します。 • 入力としてゼロを設定 - 入力セルを 0 に設定し、逆算は不要です。

表 10-1 (続き) データ・マップ・オプション

データ・マップ・オプション	説明
インポート中でないセルの場合(戦略モデリングのみ)	<ul style="list-style-type: none"> • 入力値の保持(デフォルト) - データ・インポート時に、モデル内の既存の入力データ値を保持します • 出力値の保持 - データ・インポート時に、モデル内の既存の出力データ値を保持します
スマート・プッシュの欠落した列の抑制	<p>このオプションを有効にすると、スマート・プッシュの実行中にソース・グリッドから欠落している列が抑制されます。</p> <p>欠落している列をスマート・プッシュに含めるには、このオプションを無効にします。</p>

データ・マップの詳細の編集

データ・マップの詳細を編集する場合、データ・マッピングを変更し、マップされていないディメンションをマップできます。

データ・マップの詳細を編集するには:

1. 「**データ・マップ**」 リスト・ページを表示します。
[データ・マップの表示](#)を参照してください。
2. 次のいずれかを行います:
 - データ・マップをクリックします。
 - 編集するデータ・マップの右側にある **...** をクリックし、「**編集**」を選択します。
 - ディメンション間のマッピングを編集するには、[ディメンションのマッピング情報の変更](#)を参照してください。
 - マップされていないディメンションをマップするには、[マップされていないディメンションの移動](#)を参照してください。
 - データ・マップ・オプションを定義するには、[データ・マップ・オプションの定義](#)を参照してください。
 - データ・マップを削除するには、ソースおよびターゲット・ディメンションの右側にある **X** をクリックします。
3. 「**保存して閉じる**」 をクリックします。

データ・マップの複製

データ・マップを複製するには:

1. 「**データ・マップ**」 リスト・ページを表示します。
[データ・マップの表示](#)を参照してください。
2. 複製するデータ・マップの右側にある **...** をクリックし、「**複製**」を選択します。
3. 「**名前を付けて保存**」 ダイアログ・ボックスで、データ・マップの名前を入力し、「**OK**」 をクリックします。

複製されたデータ・マップはデータ・マップ・リストに追加されます。元のデータ・マップの詳細はすべて含まれていますが、新しい名前で保存されます。

Excel へのデータ・マップのエクスポート

データ・マップを Excel の動的なワークブックにエクスポートでき、データ・マップ定義の詳細を Excel 形式で表示できます。エクスポートされたデータ・マップには、要約された基本情報、データ・オプション、マップされたソースおよびターゲット・ディメンションごとの詳細が含まれています。

データ・マップを Excel にエクスポートするには:

1. 「アプリケーション」、「データ交換」、「データ・マップ」の順にクリックします。
2. 「データ・マップ」ホーム・ページから、Excel にエクスポートするデータ・マップを選択し、「アクション」ドロップダウンから「編集」を選択します。
3. 詳細ページの「アクション」メニューから、「データ・マップのエクスポート」を選択します。
4. 要求されたら、<datamap_name>.xlsx を開くか保存します。

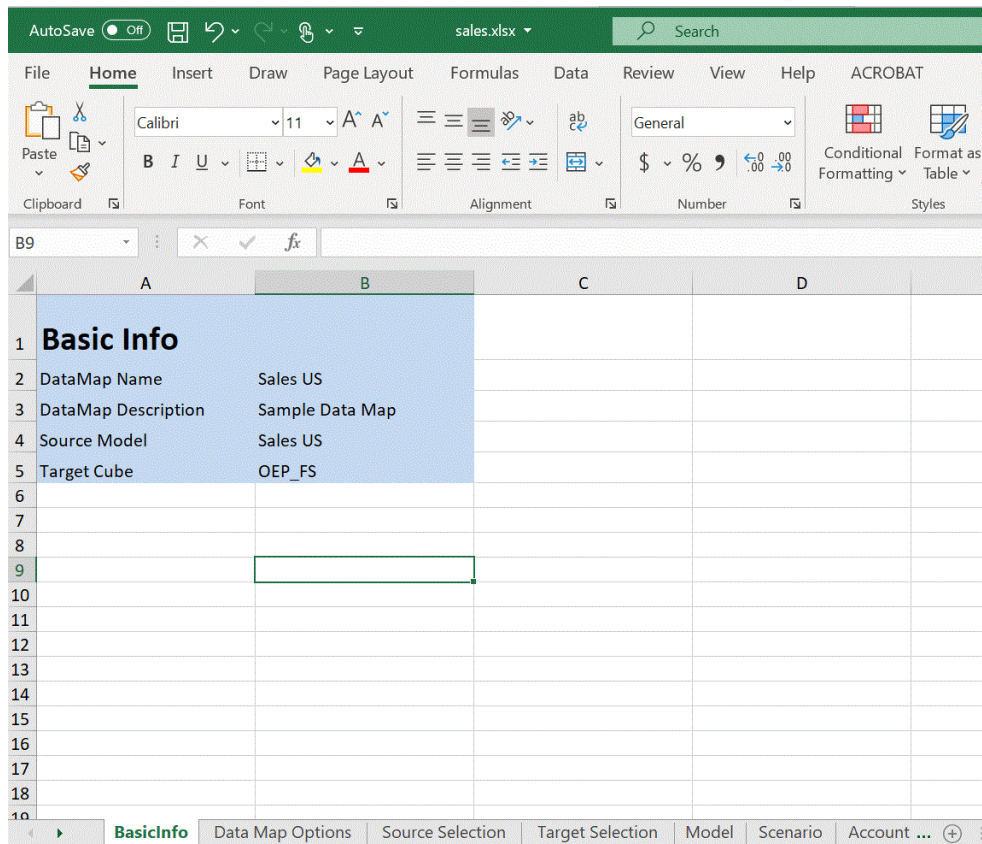
Note:

Excel のそれぞれのタブで更新を行い、保存できます。更新した Excel は、既存のデータ・マップを更新するため、または(新しいデータ・マップ名を指定して)新しいデータ・マップを作成するためにインポートできます。

5. 必要に応じて「ソース」および「ターゲット」タブ、および Excel ワークシートの各タブ内の詳細なマッピングを更新し、保存します。

Excel のそれぞれのタブで更新を行い、保存できます。たとえば、お客様は Excel のドラッグ・アンド・ドロップによるセルのグループのコピーを利用して、必要に応じてマップに移入できます。更新した Excel は、既存のデータ・マップを更新するため、または(新しいデータ・マップ名を指定して)新しいデータ・マップを作成するためにインポートできます。

次に、Excel ワークブックにエクスポートされたデータ・マップの例を示します。



データ・マップのインポート

Excel 形式の外部データ・マップをデータ・マップにインポートできます。データ・マップがインポートされると、基本的なマップ情報、オプション、ソースおよびターゲットの選択、マップされたディメンションとマップされていないディメンションを表示および更新できます。

この機能を使用する前に、ソースおよびターゲット・キューブをデータ・マップに必要なスマート・リスト・ディメンションとともにユーザー・インタフェースから、データ・マップをエクスポートする前に選択することをお勧めします。

データ・マップのインポート時に、インポート操作の実行に使用されるデータ・マップからオプションが導出されるため、エクスポート・ファイルの生成に使用された同じデータ・マップを使用してデータ・マップをインポートすることをお勧めします。インポートで新しいデータ・マップを作成する必要がある場合は、Excel データ・マップをインポートする前に、ソースおよびターゲット・キューブをスマート・リスト・ディメンションとともにユーザー・インタフェースで選択します。

Note:

データ・マップをインポートする前に、それが Excel ファイル形式(XLSX)であることを確認します。CSV ファイル形式のデータ・マップはインポートできません。

データ・マップのインポートの考慮事項:

データ・マップをインポートする場合は、次の考慮事項に留意してください:

1. **Planning** データ・マップから **Planning** データ・マップは、**Planning** データ・マップから戦略モデリング・データ・マップへのインポート、および戦略モデリング・データ・マップから戦略モデリング・データ・マップとは異なります。

Planning データ・マップへの新しい **Planning** データ・マップのインポートのオプションは、インポートの実行に使用されるデータ・マップから導出されます。オプションが初期のデータ・マップで選択されていない場合は、デフォルト設定から導出されます。

2. **Planning** データ・マップから **Planning** データ・マップは、メンバーがソースにあってターゲットにない場合に失敗する可能性があります。戦略モデリング・データ・マップの場合、ソースにあってターゲットにないメンバーは無視されます。

データ・マップをインポートするには:

1. 「アプリケーション」、「データ交換」、「データ・マップ」の順にクリックします。
2. 「データ・マップ」ホーム・ページで、「作成」をクリックします。
3. 詳細ページで、ソースおよびターゲット・キューブを選択します。
4. 「アクション」を選択し、次に「オプション」を選択します。
5. **データ・マップ・オプション** ページで、スマート・リスト・ディメンションを選択して「OK」をクリックします。
6. 詳細ページの「アクション」メニューから、「データ・マップのインポート」を選択します。
7. **データ・マップのインポート** 選択ページで、「参照」をクリックしてデータ・マップ・ソース・ファイルに移動し、「OK」をクリックします。

Import Data Map



Source File No file selected.

8. インポートされたデータ・マップが表示されたら、「完了」をクリックします。

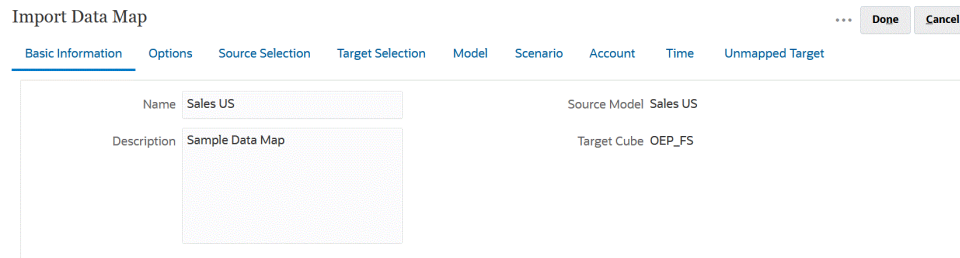
次の例は、インポートされた **Planning** データ・マップを示しています:

Import Data Map ... Done Cancel

Basic Information Options Source Selection Target Selection Account Entity Period Product Scenario Version Years Unmap

Name	Planning Data Map	Source Cube	OEP_FS
Description		Target Cube	Plan1
		Connection	PBCS_Target

次の例は、インポートされた戦略モデリング・データ・マップを示しています:



データ・マップの削除

データ・マップを削除するには:

1. 「データ・マップ」リスト・ページを表示します。
データ・マップの表示を参照してください。
2. 削除するデータ・マップの右側にある *** をクリックし、「削除」を選択します。

データ・オプションの設定

データを移動する際には、「オプション」を起動して、コメント、添付、サポート詳細などのリレーショナル・データをマージする方法を定義します。

データ・オプションを設定するには:

1. 「データ・マップ」リスト・ページを表示します。
データ・マップの表示を参照してください。
2. 編集するデータ・マップの右側で *** をクリックし、「編集」を選択します
3. 「オプション」をクリックし、コピーするアイテムを選択して、スマート・リストのディメンションを選択します。
4. データ・マップ・プロセスで動的に計算されるメンバー・データを移動したくない場合は、「動的計算メンバーを除外」を選択します。

デフォルト・メンバーの検証ルール


レポート・キューブのデフォルト・メンバーには、ソースの Planning アプリケーションから移動されたデータが格納されます。次のいずれかの制約が該当する場合、またはどちらかのアプリケーションのディメンションがマップされないために有効なデフォルト・メンバーがない場合、マッピングは無効となりエラー・メッセージが表示されます。

ルール:

- レポート・キューブが集約ストレージ・データベースの場合、デフォルト・メンバーはレベル 0 である必要があります。
- レポート・キューブがブロック・ストレージ・データベースの場合、デフォルト・メンバーはデータの格納プロパティを持つ任意のメンバーにできます。
- Planning アプリケーションにディメンションからディメンションへのマッピングしかない場合、デフォルト・メンバーは任意のレベルまたはデータ・ストレージ・タイプにできます。

- **Planning** アプリケーションにスマート・リストからディメンションへのマッピングがある場合、デフォルト・メンバーはレベル **0** でなければなりません。また、ソース・キューブに勘定科目の密ディメンションが含まれている必要があり、スマート・リストに少なくとも **1** つのメンバーが関連付けられている必要があります。
- マッピングで子孫(**Acct_Default**)が選択されている場合、レポート・キューブ内に **Acct_Default** メンバーが存在する必要があります。

ノート:

有効だったマッピングでも、ディメンション、メンバーまたはスマート・リストが名前変更、削除、追加された場合には無効になることがあります。ターゲット・キューブのディメンションに変更がある場合は、「**レポート・アプリケーションのマッピング**」画面で対応するアプリケーション・マッピングを選択し、 をクリックしてデータをリフレッシュする必要があります。

データの移動

データ・マップの設定後、次のことを実行できます:

- レポート・キューブへのデータの移動
- スマート・プッシュを使用したあるキューブから別のキューブへのデータの移動
- データ・マップ・プロセスとスマート・プッシュ・プロセスの同時実行

レポート・キューブへのデータの移動

データ・マップを設定した後、データをレポート・キューブに移動できます。選択したデータ・マップは **Planning** で検証され、マップされた **Planning** ディメンション・データはレポート・キューブのディメンションに移動されます。「ジョブ」でジョブのステータスを確認することもできます。

ノート:

ブロック・ストレージ・キューブと集約ストレージ・キューブの両方で親メンバーを動的な子に対して使用可能にし、動的メンバーを追加した場合、「**データのプッシュ**」を使用すると、データベースをリフレッシュせずにブロック・ストレージ・キューブから集約ストレージ・キューブにデータを移動できます。*Planning* の**管理**のレポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期を参照してください。

データをレポート・キューブに移動するには:

1. レポート・キューブを作成します。
2. データ・マップを作成します。
3. 「**アプリケーション**」、「**データ交換**」、「**データ・マップ**」の順にクリックします。
4. データ・マップの右側にある **...** をクリックし、「**データのプッシュ**」を選択します。

データをクリアしてから移動するかどうかを確認します。

- 「**いいえ**」をクリックすると、レポート・キューブの既存のデータに新しいデータが追加されます。このオプションを使用した場合、ターゲット・キューブ内のデータはクリアされません。

スマート・リストをディメンションにマップする場合、スマート・リストのラベルはレポート・キューブのメンバー名または別名に一致する必要があります。「**データのプッシュ**」は、スマート・リスト・エントリ名には使用できません。

- 「**はい**」をクリックすると、ターゲット・キューブにデータを移動する前に、ターゲット・キューブ内のデータがクリアされます。

ターゲットが集約ストレージ・レポート・キューブである場合は、データをクリアおよび移動する際に次の点に留意してください。

- ターゲット・レポート・キューブで一致する名前のないメンバーは無視されます。
- このオプションはメンバー名にのみ機能し、メンバーの別名には機能しません。
- このオプションを使用すると、計算スクリプトの長さ制限を超える可能性があるため、データ・マップのメンバーを選択する場合は、(子などの)メンバー関係を使用する際に注意してください。
- メンバー関係を使用する場合、このオプションによりソース **Planning** キューブのレベル 0 メンバーのリストが展開されます。ソース・キューブの少なくとも 1 つのメンバー名がレポート・キューブのメンバーに一致すれば、このオプションはエラーなしで続行されます。メンバーが 1 つも一致しない場合は、オプションを続行できません。

ターゲットがブロック・ストレージ・レポート・キューブである場合は、正常に続行するには、次の条件を満たしたうえでデータをクリアおよび移動する必要があります。

- メンバー関係を使用する場合、ソース・キューブのすべてのメンバー名がレポート・キューブのすべてのメンバー名に一致する必要があります。
- スマート・リストをディメンションにマップする場合、ソース・キューブのすべてのスマート・リスト・エントリがレポート・キューブのすべてのメンバー名に一致する必要があります。
- スマート・リストをディメンションにマップする場合、ソース **Planning** キューブのスマート・リスト・エントリ・ラベルがレポート・キューブのメンバー名に一致する必要があります。スマート・リスト・エントリ・ラベルがレポート・キューブのメンバー名に一致しない場合は、スマート・リスト・エントリ名がレポート・キューブのメンバー名に一致する必要があります。

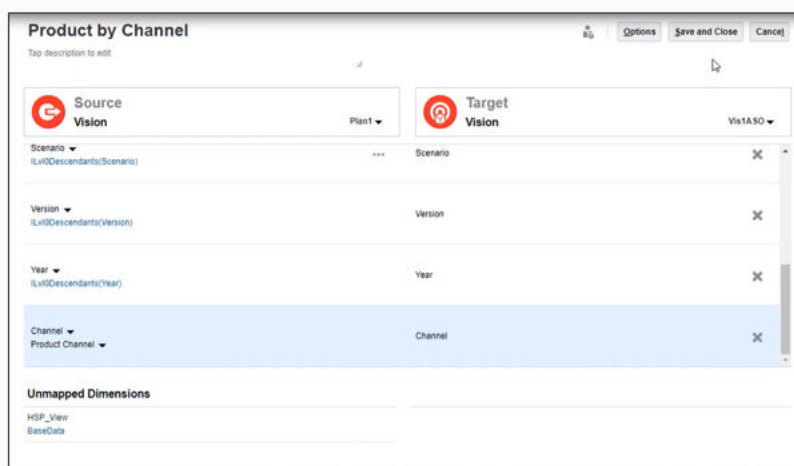
これらの条件を満たさないかぎり、データのクリアおよび移動操作を続行できません。

スマート・プッシュを使用したあるキューブから別のキューブへのデータの移動

この項では、スマート・プッシュを使用して、あるキューブから別のキューブへデータを移動する方法を説明します。

スマート・プッシュについて

有意義で包括的なレポートを作成するために、ユーザーはフォームでの操作中にコメント、添付ファイルおよびサポート詳細をソース・キューブからレポート・キューブに即時に移動できます。ユーザーは、別のキューブから取得されるプランニング・データに関する詳細な分析を実行できます。



たとえば、1つのキューブに費用プランニングがあり、別のキューブに収益プランニングがあるとします。さらに、レポート・キューブを使用してレポート作成ニーズを統合するとします。スマート・プッシュを使用しない場合、キューブのデータはサービス管理者が設定したスケジュール済ジョブによってレポート・キューブに移動されます。スマート・プッシュを使用すると、ユーザーはレポート・キューブにデータを即時に移動できます。

アプリケーション・データは次から移動できます:

- ブロック・ストレージ・キューブから集約ストレージ・キューブへ
- ブロック・ストレージ・キューブからブロック・ストレージ・キューブへ

ビデオ

目的

スマート・プッシュを使用してレポートのデータを即時にプッシュする方法を学習します。

視聴するビデオ



[Planning でのレポートのデータの即時プッシュ](#)

スマート・プッシュを使用する場合の考慮事項

スマート・プッシュを使用する場合は、次の考慮事項に留意してください。

- スマート・プッシュはメタデータと承認のセキュリティを考慮します。
- スマート・プッシュでは、少なくとも1つの密ディメンション、アカウントまたは期間がデータ・マップ定義のディメンション間マッピングとして設定されている必要があります。

- データ・マップでソース・キューブのマップされていないセクションにリストされているディメンションについて選択されたすべてのメンバーの数値データは、スマート・プッシュの定義にリストされません。
- スマート・プッシュが次のように定義されている場合、データ・マップには除外があります:
 1. フォーム・コンテキストを使用している
 2. フォーム定義に除外がない

この場合、スマート・プッシュによって除外が取得されないため、Web フォームでスマート・プッシュを「保存後に実行」として定義することをお勧めします。

Groovy によってスマート・プッシュが定義されている場合は、データ・マップからスマート・プッシュによって除外が取得されます。

フォームのスマート・プッシュの構成

スマート・プッシュを使用すると、アプリケーションで定義されているデータ・マップを使用して、フォームのデータを変更したときにデータを自動的に同期できます。こうすることで、スマート・プッシュにより、リアルタイムのデータ移動に対するデータ・マップの機能を利用できます。

複数のセグメントがあるフォームでスマート・プッシュを構成する場合は、フォーム・コンテキストを使用するかわりに「選択内容の上書き」を使用し、選択内容の上書きの適切な選択項目を提供することを推奨します。こうすると、転送されるデータが移動する必要があるデータのみ限定されるため、パフォーマンスが向上します。

フォーム・コンテキスト・オプションを選択した場合、最終的な選択内容は、選択項目のすべてのセグメントおよびすべての除外された選択項目が累積されたものになります。

たとえば、次のような選択項目のある 3 つのセグメントを選択したとします:

```
Segment-1 --> ILvl0Descendants (Q1)
```

```
Segment-2 --> ILvl0Descendants (Q2) Exclude Selection: Feb
```

```
Segment-3 --> ILvl0Descendants (Q2) Exclude Selection: Mar
```




フォーム・コンテキストを使用した場合の最終的な選択は次のようになります:

```
ILvl0Descendants (Q1) , ILvl0Descendants (Q2) Exclude Selection: Feb,Mar
```

フォームでセグメントが非表示になっており、フォーム・コンテキストを使用するようにスマート・プッシュが構成されている場合は、スマート・プッシュによって非表示のセグメントからターゲット・キューブへのデータ転送も行われます。


最終的な選択がデータを移動するための望ましい選択でない場合は、「選択内容の上書き」を使用するようにスマート・プッシュを構成します。

フォームでスマート・プッシュを構成するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。
2. 「フォーム」を展開し、フォームを選択します。
フォームのランタイム・ビューがナビゲーション・フローまたはデータ・カードから起動された後で、フォームを編集することもできます。
3. フォームを選択した状態で、を選択します。
4. 「スマート・プッシュ」をクリックします。
フォームに定義されているマッピングが表示されます。必要に応じて、をクリックして新しいマッピングを追加します。
5. 各マッピングを展開します。
6. マッピングの下に表示される各ディメンションについて、ディメンションのスマート・プッシュ領域を指定します。

ノート:

行と列のディメンションの場合、「**フォーム・コンテキストの使用**」では、フォーム上のメンバーではなく、フォームの設計メンバーを使用してプッシュします。POV ディメンションとページ・ディメンションの場合、「**フォーム・コンテキストの使用**」では、実行時にフォームに表示されるメンバーを使用します。

- 「**フォーム・コンテキストの使用**」を選択して、「**レイアウト**」でディメンションについて選択した(および除外した)すべてのメンバーのデータを移動します。
「ページ・ディメンション」では、フォームで選択されたメンバーを使用します。
- 「**フォーム・コンテキストの使用**」をクリアし、「**選択内容の上書き**」の横にあるをクリックします:

 - 「**編集**」を選択してメンバー・セレクタを使用し、操作するディメンション・メンバーを選択します。
 - 「**除外の追加**」を選択してメンバー・セレクタを使用し、スマート・プッシュ・プロセスから除外するディメンション・メンバーを定義します。「**除外の削除**」では、1つのメンバーのみでなく、除外全体が削除されます。

 ノート:

- * スマート・プッシュ除外では、スマート・プッシュに対して「**フォーム・コンテキストの使用**」オプションが選択されている場合、フォームに定義されているすべての除外が考慮されます。
- * ディメンションからメンバーを除外する場合、スマート・プッシュ・プロセスが正常に完了するには、そのディメンションのメンバー・リストに、除外メンバー・リストにないメンバーが少なくとも 1 つ含まれている必要があります。たとえば、スマート・プッシュに対して定義されている唯一の勘定科目メンバーが現預金勘定/銀行口座の場合、現預金勘定/銀行口座はそのスマート・プッシュ・プロセスから除外できません。スマート・プッシュ結果に少なくとも 1 つのメンバーが含まれるように選択内容を修正する必要があります。

除外リストからメンバーを削除するには、メンバーの除外リストの横にある



をクリックします。メンバーをメンバー・セレクタから削除するには、右ペインでそのメンバーを選択してから




または



をクリックします。

[データ・マップからのメンバーの除去](#)を参照してください

- 「**クリア**」を選択して選択内容を削除します。

 ノート:

マッピングの定義は、ソース・キューブ・ディメンションでのみ上書きできます。「**フォーム・コンテキストの使用**」を選択することでフォームからコンテキストを取得する場合は、ディメンション・メンバーを上書きできます。ディメンション・メンバーは、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスでメンバーを指定した場合、または「**選択内容の上書き**」を空白のままにした場合にも上書きできます。

 ヒント:

スマート・プッシュでは、レポート・キューブの増分更新が行われません。これを行うには、「**フォーム・コンテキストの使用**」または「**選択内容の上書き**」オプションを選択して、現在のコンテキストに移動するデータの量を制限するか、更新または計算するセクションへのデータの移動を制限します。

スマート・プッシュ領域が指定されていない場合、前述のいずれかのオプションを使用すると、メンバー選択がデータ・マップから取得されます。

7. 各マッピングについて、スマート・プッシュを自動と手動のどちらにするかを定義します。
 - フォームの保存時にデータを自動的に移動するには、「**保存後に実行**」を選択します。
 - データを手動で移動するには、「**保存後に実行**」をクリアしたままにします。
データを手動で移動する方法の詳細は、[スマート・プッシュ構成後のデータの移動](#)を参照してください。

8. 次の追加のスマート・プッシュのオプションから選択します。

- **スマート・プッシュのバックグラウンドでの実行**: スマート・プッシュがバックグラウンドで実行されている間もアプリケーションの使用を続行できます。
- **データベース抑制の使用**: アプリケーション・レベルではなくデータベース・レベルで行抑制を適用できます。これにより、問合せしきい値への影響がなくなり、スマート・プッシュの待機時間が改善されます。

スマート・プッシュを使用してブロック・ストレージ・キューブから大量のデータをロードしている場合、および不足しているブロックと行の抑制オプションを使用している場合は、「**データベース抑制の使用**」オプションをお勧めします。

Groovy ルールを使用して、「**データベース抑制の使用**」オプションを指定してスマート・プッシュを構成する場合、スマート・プッシュの実行に対してこのオプションを指定する追加のパラメータがあります。

```
public void execute(Map<String, String> overrideMembersMap, boolean  
suppressMissingRowsNative)
```

9. 「**保存**」をクリックして、フォームのスマート・プッシュ構成を保存します。

クロス・アプリケーション・スマート・プッシュの使用

クロス・アプリケーション・スマート・プッシュ機能を使用すると、複数の環境を持つお客様は、フォームでの作業中に、ソース環境内の **Planning** キューブからリモート環境内のレポートまたは他の **Planning** キューブに、データ、セル・コメントおよびサポート詳細を即時に転送できます。

Note:

クロス・アプリケーション・データ・マップは、スマート・プッシュでのみサポートされます。クロス・アプリケーションのデータ・マップ・プッシュは、今後の更新でサポートされるようになります。

Note:

クロス・アプリケーション・スマート・プッシュ機能は、戦略モデリングには使用できません。

 **Note:**

スマート・プッシュを使用した添付の転送は、同じ環境のデータ・マップでのみサポートされます。

ソース・キューブからリモートのレポート・キューブにデータ、セル・コメントおよびサポートを転送するには:

1. データを移動する必要があるクロス・アプリケーションで接続を使用できない場合は、新しい Oracle Enterprise Performance Management Cloud 接続を作成します。
詳細は、*Planning の管理*の他の EPM Cloud 環境への接続の作成、編集および削除を参照してください。
2. レポート・アプリケーションを作成します。
キューブの詳細は、*Planning の管理*のキューブの管理を参照してください。メンバーの追加の詳細は、*Planning の管理*の簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集を参照してください。
3. 「アプリケーション」、「データ交換」、「データ・マップ」の順にクリックします。
4. 「作成」をクリックします。
5. 「ソース」で、使用可能なキューブから現在のアプリケーションのキューブを選択します。
6. 「ターゲット」で、「キューブ」ドロップダウンから「リモート・キューブの選択」を選択します。
7. リモート・キューブの選択ページから、ターゲット・アプリケーションの接続およびキューブを選択して「OK」をクリックします。
 - 「接続」で、ターゲット・キューブに接続するために使用する接続を選択します。
 - 「キューブ」で、リモート・アプリケーションからキューブを選択します。
ソース・アプリケーションの使用可能なすべての接続が表示されます。リモート・アプリケーションのキューブは、選択した接続に基づいて表示されます。
8. 「OK」をクリックします。
9. ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションでメンバー名が異なる場合は、ソース・メンバーを対応するターゲット・メンバーとマップします。詳細は、を参照してください [ディメンションのマッピング情報の変更](#)
10. 詳細ページで、「保存して閉じる」をクリックします。
11. フォームを開き、スマート・プッシュをフォームに追加します。
詳細は、次を参照してください [フォームのスマート・プッシュの構成](#)

マージ・オプションの構成

コメント、添付およびサポート詳細のマージ・オプションは、レポート作成のキューブをマップする際に使用できる「データ・オプション」タブで構成します。[データ・マップ・オプションの定義](#)を参照してください。

 ノート:

スマート・プッシュを使用する場合、「サポート詳細」、「日付」、「スマート・リスト」、「テキスト」などのリレーショナル・データはマージできません。「スマート・リスト」、「日付」および「テキスト」は、ソース・セルとターゲット・セル間に 1 対 1 のマッピングがある場合にのみ移動されます。空のセルはリレーショナル・データの移動で考慮されません。

スマート・プッシュ構成後のデータの移動

データの移動方法については、[データの移動](#)を参照してください。

データを移動する方法は、フォームに対してスマート・プッシュを構成したときに「**保存後に実行**」を選択したかどうかによって異なります。

- フォームに対してスマート・プッシュを構成したときに「**保存後に実行**」を選択した場合は、フォームを保存する際にデータが移動されます。
- 「**保存後に実行**」を選択しない場合:
 1. 「**データ**」をクリックします。
 2. フォームをクリックして開きます。
 3. 開いたフォームで、「**アクション**」を選択し、「**スマート・プッシュの詳細**」をクリックします。
 4. 「スマート・プッシュ」ダイアログ・ボックスでリンクをクリックして、データを移動します。

 ノート:

- スマート・プッシュは、新しいデータを移動する前に、常にターゲット・リージョンのデータをクリアします。
- ユーザーがスマート・プッシュの実行でエラーを確認した場合、サービス管理者はスマート・プッシュ・ジョブの詳細情報にリストされたエラーを使用して、スマート・プッシュの設定方法を確認し修正する必要があります。[スマート・プッシュのステータスの表示](#)を参照してください。

スマート・プッシュのステータスの表示

データの移動のステータスを表示するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックします。
2. 「**ジョブ**」をクリックします。

スマート・プッシュ・ジョブが「ジョブ」コンソールに表示されます。エラーがある場合は、エラー・リンクをクリックして問題をトラブルシューティングします。データが移動されると、「**実行ステータス**」は「**完了**」または「**警告付きで完了**」と表示されます。さらに詳細を表示するには、ジョブ名をクリックしてログを確認してください。

データ・マップ・プロセスとスマート・プッシュ・プロセスの同時実行

データをレポート・キューブに移動する際、ユーザーがシステムを使用できない時間を最小限に抑えることができます。そのためには、Groovy ルール・ベースのデータ・マップ・プッシュで実行時プロンプトを使用して、必要なデータのみをレポート・キューブに移動します。EPM 自動化を使用するデータ・マップ・プッシュの場合は、代替変数の使用が可能で、データ・マップを使用してデータを移動する前に代替変数の値を設定できます。詳細は、次のトピックを参照してください。

- Groovy ビジネス・ルールのドキュメントや例の入手については、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud](#)、[Groovy ルール Java API リファレンス](#)を参照してください
- EPM 自動化の詳細は、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作](#)を参照してください

「データ・マップ・オプション」で「同時スマート・プッシュの許可」オプションを有効にし、ユーザーがスマート・プッシュ・プロセスとデータ・マップ・プロセスを同時に実行できるようにすることで、ダウンタイムをさらに最小化することもできます。

データ・マップとスマート・プッシュを同時に実行する際は、次のことを考慮してください。

- スマート・プッシュでは、データをプッシュする前に、レポート・キューブのデータがクリアされるのを待機します。
- 同時に処理できるデータ量には制限があります。ジョブ出力を確認し、それに合わせて設計してください。

データ・マップ・オプションの詳細は、[データ・マップ・オプションの定義](#)を参照してください。

データ・マップおよびスマート・プッシュのリアルタイム進捗ステータスのチェック

データ・マップおよびスマート・プッシュを使用してデータをプッシュするときには、ジョブの完了ステータスおよび期間を含む、各ジョブの操作に関する包括的な情報を表示できます。

サブステータス・フィールドには、データのクリアやデータのエクスポートなど、送信されたジョブの一部として実行された特定の操作の詳細が示されます。親子ジョブ関係の場合は、親ジョブに現在進行中の子ジョブが表示され、各子ジョブには実行の一部として行われている特定の操作が示されます。サブステータス・フィールドは、ジョブが正常に完了するとクリアされます。ジョブでエラーが発生した場合は、サブステータス・フィールドはそのままの状態になり、クリアされません。

プッシュされたデータ・マップとスマート・プッシュのジョブ・ステータスを使用すると、単にステータスが処理されるのみでなく、個別のジョブの詳細を開かなくても有用な詳細を確認できるようになり、お客様がジョブをモニターできるようになるという利点があります。お客様は、ジョブがブロックされた場合に簡単に識別できます。たとえば、ターゲット ASO キューブに対し、あるプロセスを通じて「データのクリア」のような排他的な操作が実行されている場合に、お客様が同じキューブに対し、

データ・マップを使用してクリア操作を実行しようとした場合、サブステータスにはキューブが待機中であることが示されます。



Note:

Enterprise Profitability and Cost Management のお客様には、サブステータスの詳細はジョブの詳細ページにのみ示され、ジョブ・リスト・ページには示されません。

データ・マップ・ジョブの実行中、「データのクリア」オプションが「はい」に設定されている場合は、次のサブステータスが表示されます:

1. データ・マップの前処理および検証中。
2. データのエクスポート中。
3. データのクリア中。
4. 変換およびインポート中[ファイルの変換中[File_Getting_Executed] / [Total_Number_Of_Files]]/変換およびインポート中[ファイルのインポート中 [File_Getting_Executed] / [Total_Number_Of_Files]](ステップ 4 で、これらのメッセージのいずれかが表示されます。)

「データのクリア」で「いいえ」が選択されている場合は、データ・マップ・ジョブの実行中に次のサブステータスが表示されます:

1. データ・マップの前処理および検証中。
2. データのエクスポート中。
3. 変換およびインポート中[ファイルの変換中[File_Getting_Executed] / [Total_Number_Of_Files]]/変換およびインポート中[ファイルのインポート中 [File_Getting_Executed] / [Total_Number_Of_Files]](ステップ 3 で、これらのメッセージのいずれかが表示されます)

「データのクリア」オプションが「はい」に設定されている場合にジョブの詳細ページに表示されるメッセージには、次のものがあります:

このジョブに対して実行できるステップは、次のとおりです:

1. データ・マップの前処理および検証中。
2. データのエクスポート中。
3. データのクリア中。
4. ファイルの変換およびインポート。

「データのクリア」オプションが「いいえ」に設定されている場合にジョブの詳細ページに表示されるメッセージには、次のものがあります:

このジョブに対して実行できるステップは、次のとおりです:

1. データ・マップの前処理および検証中。
2. データのエクスポート中。
3. ファイルの変換およびインポート。

スマート・プッシュ・ジョブの実行中、親および子ジョブに対し、次のサブステータスが表示されます:

1. **Run_Status:** [子ジョブの実行中 1 / 5: **Child_Job_Name**] → 親ジョブ・サブ・ステータス(1 と 5 は静的値ではなく、子ジョブの合計数のうち、実行されている子ジョブを示す動的値です)。
2. **Run_Satus:** [**Sub_Status**] → 子ジョブのサブ・ステータスの例=処理中: [ステップ 1/5: 検証中](1 と 5 は静的値ではなく、合計ステップ数のうち、実行されているステップを示す動的値です)。

子ジョブには次のサブステータスが表示されます:

1. 検証中。
2. ターゲット・データのフェッチ中。
3. ソース・データのフェッチ中。
4. 変換中。
5. データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中。
6. (ステップに「待機中」メッセージを追加)例: キューブがビジー状態である場合のデータのクリアでは、結果は処理中: [ステップ 5/5: データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中[待機中]。]のようになります。

ジョブの詳細に表示されるメッセージ:

このジョブに対して実行できるステップは、次のとおりです:

1. 検証中。
2. ターゲット・データのフェッチ中。
3. ソース・データのフェッチ中。
4. 変換中。
5. データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中。

戦略モデリング関連ジョブの実行中、親ジョブには次のサブステータスが示されます:

1. 現在実行されているジョブ名を示します。例: **Run_Status:** [子ジョブの実行中 1 / 5: **Child_Job_Name**] (1 と 5 は静的値ではなく、子ジョブの合計数のうち、実行されている子ジョブを示す動的値です)。
2. 子ジョブのサブ・ステータス: **Run_Status:** [ステップ 1/5: 検証中。] (1 と 5 は静的値ではなく、合計ステップ数のうち、実行されているステップを示す動的値です)。

戦略モデリング関連ジョブの実行中、子ジョブには次のサブステータスが示されます:

1. 検証中。
2. ターゲット・データのフェッチ中。
3. ソース・データのフェッチ中。
4. 変換中。
5. データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中。

ジョブの詳細に表示されるメッセージ:

このジョブに対して実行できるステップは、次のとおりです:

1. 検証中。
2. ターゲット・データのフェッチ中。
3. ソース・データのフェッチ中。
4. 変換中。
5. データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中。

戦略モデリング・タイプ・データ・マップに対する戦略モデリングの場合、子ジョブはターゲット・モデル名に基づいて作成されます。子ジョブは、シナリオ、値、期間、セル・テキストの組合せで実行されます。ターゲットの一部として選択されたモデルの組合せがそれぞれ呼び出されます。親ジョブのサブステータスは「モデルの処理中」と表示され、子ジョブのサブステータスは次のようになります：

1. ソース・データのフェッチ中。
2. データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中。

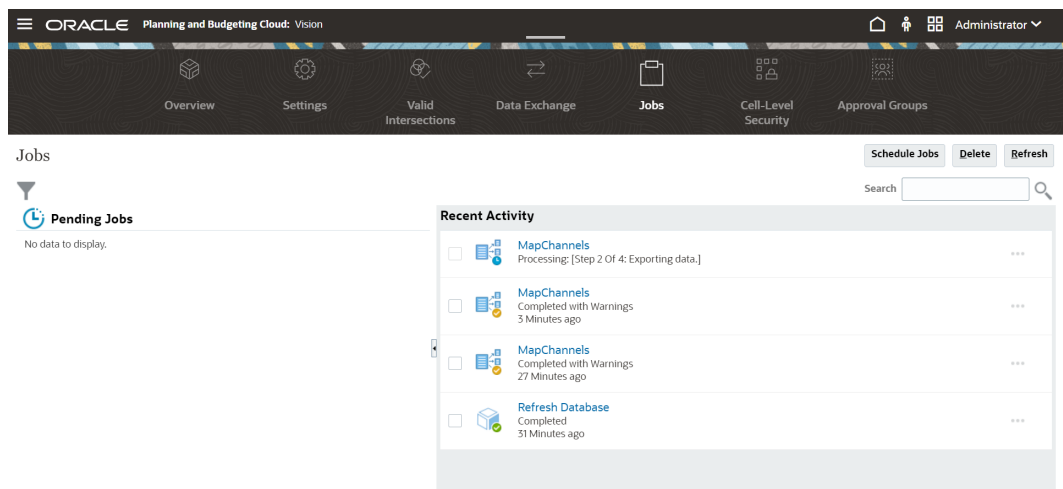
ジョブの詳細には次のメッセージが表示されます：

1. ソース・データのフェッチ中。
2. データのクリアおよびターゲットへのプッシュ中。

戦略モデリングからジョブをトリガーしているが、親ジョブがデータ・マップ・レイヤーによって作成されていない場合は、親ジョブのサブステータスは使用できません。子ジョブのサブステータスが表示され、ジョブ・リスト・ページに表示されます。

データ・マップとスマート・プッシュのリアルタイムの進捗ステータスをチェックするには：

1. ホーム・ページで、「アプリケーション」、「ジョブ」の順にクリックします。



2. オプション: 次のタスクを実行します：

- 日付やジョブ・タイプなどの条件でジョブおよびアクティビティをフィルタするには、▼をクリックします
- ジョブを名前を検索するには、「検索」にテキストを入力し、🔍をクリックします。

3. オプション: ジョブの詳細を表示するには、ジョブ名をクリックします。

Job Details Refresh Close

The possible steps to be executed for this job are:
1. Preprocessing and validating data map.
2. Exporting data.
3. Clearing data.
4. Transforming and Importing files.

Step 1: Validation completed , elapsed time: 8 ms

Step 2: Exporting data...
Exported data file(s) size is: 179 MB.
EXPORT elapsed time: 131655 ms

Step 3: Clearing data...
Length of the clear script is: 358 B.
CLEAR elapsed time: 680 ms

Step 4: Transforming and Importing File(s)...

IMPORTING - CubeName: VisIASQ
The following members are either dynamically calculated or are XRef members in the target dimension and the data associated with these members in the source cube is ignored :
Account : [N]

Job ID	4	Run Status	Completed with Warnings
Job Type	Data Map	Start Time	10/25/23 10:53:30 AM
Name	MapChannels	End Time	10/25/23 10:55:44 AM
User Name	epm_default_cloud_admin		

ジョブのサブステータスは、「リフレッシュ」をクリックした場合にのみ更新されます。

11

統合の実行

統合を実行して、ソース・システムからデータを抽出し、結果を表示して検証します。データが正しく変換された場合は、データをターゲット・システムにプッシュできます。

統合の実行ページは、「オプション」と「フィルタ」の2つのタブで構成されています。

「オプション」タブでは、変換ステージにおける選択した統合に関する全般オプションとターゲット・オプションを選択できます。このページの期間選択は、ターゲット・システムに依存します。

「フィルタ」タブでは、統合定義を毎回変更するのではなく、実行時にフィルタをすばやく追加または変更し、それらを実行できます。フィルタは、データ・ソースからデータを問い合わせるために使用します。フィルタに対する変更は保存されず、その実行のみに使用されます。

統合の実行の詳細は、次のチュートリアルを視聴してください: [Enterprise Planning Cloud のファイルベース・データ統合オプションおよび統合の実行の設定](#)。

統合を実行するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合を選択し、▶をクリックします。
2. 「**オプション**」タブを選択します。
3. 「**ソースからインポート**」を選択して、ソース・システムからデータをインポートし、データのインポート、マップおよび検証など、必要な変換を実行します。

このオプションは次の場合にのみ選択します:

- 統合を初めて実行する。
- ソース・システムのデータが変更された。たとえば、エクスポート後にワークベンチでデータをレビューし、ソース・システムのデータを変更する必要があった場合などです。

ソースからデータを初めてインポートした後では、ソース・システムのデータは変更されない場合がほとんどです。このとき、データが変更されなかった場合は、データをインポートし続ける必要はありません。

4. 「**再計算**」を選択して、データのインポートをスキップし、更新されたマッピングを使用してデータを再処理します。
5. 「**インポート・モード**」から、データをインポートする方法を選択します。

使用可能なインポート・モード:

- **追加** - POV の既存の行は変更されず、新しい行が POV に追加されます。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 50 行が含まれるとします。この場合、50 行が追加されます。このロードの後で、POV の行の合計は 150 です。
- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行が TDATASEG にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。Planning アプリケーションに 1 年分のデータがある場合に 1 か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、1 年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

ノート:

ASO キューブに対して置換モードで統合を実行する際に、シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、数値データ・ロードのみが実行されます。階層が完全に含まれた完全修飾名でメンバー名を指定してください。シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、すべてのデータ型のロード方法は機能しません。

ノート:

置換モードは、ロード方法「ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型」ではサポートされていません。

- **マージ - (Account Reconciliation のみ)**。変更された残高を同じロケーションの既存のデータとマージします。

マージ・モードにより、データが Account Reconciliation に最後にロードされたとき以降に変更された残高が少数である場合に、データ・ファイル全体をロードする必要がなくなります。2 つのロード間でマッピングが変更された場合、お客様は完全なデータ・セットをリロードする必要があります。

たとえば、あるお客様では、1 つの番号の勘定科目 ID に対して 100 行の既存の残高があり、それぞれの金額は\$100.00 です。このお客様がマージ・モードで統合を実行し、ソースには 1 つの勘定科目 ID に対する金額が\$80 の 1 行がある場合、統合の実行後は、100 行の残高があり、そのうちの 99 それぞれの残高は\$100.00、1 つの残高は\$80.00 です。

- **インポートしない** - データのインポートを全部スキップします。
- **マップして検証** - データのインポートをスキップし、更新されたマッピングを使用してデータを再処理します。

6. 「開始期間」から、データをロードする最初の期間を選択します。

フィルタする文字を入力すると、期間をフィルタできます。たとえば、**J**と入力すると、**J**で始まる月(June、July など)がフィルタされます。また、ドロップダウンをクリックして、**追加の結果があるため、さらにフィルタしてください**。の下に表示される編集ボックスに追加のフィルタ条件を指定できます

この期間名は、期間マッピングに定義されている必要があります。

 **ノート:**

単一会計年度に属する開始期間と終了期間を使用します。期間範囲が会計年度をまたがる場合は、次の問題が発生します:

- データを置換モードでロードすると、両方の年度のデータがクリアされます
- データをエクスポートすると、重複したデータが取得されます

前述の内容は、標準モードおよびクイック・モードを含むすべてのデータ・ロード・モードに適用されます。

7. 「**終了期間**」から、データをロードする最後の期間を選択します。

この期間名は、期間マッピングに定義されている必要があります。

8. 「**期間**」から、データをロードする期間を選択します。

ホーム・ページで **POV** 期間が選択されている場合は、選択された期間がここでデフォルト設定されます。POV 期間が選択されていない場合は、ブラウザのキャッシュに基づき、最後に使用された期間にデフォルト設定されます。

別の期間の横にロック解除アイコン



)が表示されている場合、その期間を選択できます。

データ管理のシステム設定でグローバル **POV** モードが有効になっている場合、その期間はグローバル **POV** 期間にデフォルト設定され、お客様は別の期間を選択できません。この場合、「期間」ドロップダウンの横にロック・アイコン



)が表示されます。

9. 「**ターゲットにエクスポート**」を選択して、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートします。

10. 「**確認の実行**」を選択してデータを生成し、「確認レポート」を実行します。

11. 「**エクスポート・モード**」から、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートする方法を選択します。

使用可能なオプション:

- **マージ** - 既存の日付をロード・ファイルからの新しいデータで上書きします。(デフォルトでは、すべてのデータ・ロードが「マージ」モードで処理されます。)データが存在しない場合は、新しいデータを作成します。
- **置換** - ターゲットのすべての **POV** データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに **100** 行、次のロードに **70** 行が含まれるとします。この場合、**100** 行が削除され、**70** 行がステージング表にロードされます。このロードの後、行の総数は **70** です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。Planning アプリケーションに **1** 年分のデータがある場合に **1** か月分のみ

をロードするとき、このオプションを使用すると、1 年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

- **累計** - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで累計します。データ・ファイルの一意の視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。
- **減算** - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションの値から引きます。たとえば、ターゲットに **300** があり、ソースに **100** がある場合、結果は **200** になります。
- **ドライ・ラン** - (Financial Consolidation and Close および Tax Reporting のみ) ターゲット・アプリケーションにデータをロードせずに、データ・ロード・ファイルで無効なレコードをスキャンします。データ・ロード・ファイルが検証され、無効なレコードがログにリストされます(ログには **100** 個以下のエラーがリストされます)。エラーごとに、エラーのある各レコードが対応するエラー・メッセージとともにログに示されます。ログの詳細は、「プロセスの詳細」で入手できます。

ノート:

「ドライ・ラン」では「管理ユーザーに対してデータ・セキュリティを使用可能にする」ターゲット・オプションは無視され、管理者ユーザーに対して常に **REST API** が使用されます。

- **エクスポートしない** - データのエクスポートを全部スキップします。
- **確認** - データをターゲット・システムにエクスポートした後、現在の **POV** の確認レポートを表示します。確認レポート・データが現在の **POV** に対して存在しない場合は、空白のページが表示されます。

12. 「フィルタ」をクリックします

13. 実行時に実行するフィルタを追加または変更します。

フィルタは、データ・ソースからデータを問い合わせるために使用します。統合の実行ページで指定したフィルタは保存されず、その実行のみに使用されます。

詳細は、を参照してください [フィルタの定義](#)

14. **ファイルベース統合のみ**: 統合用にファイル・プロファイルが選択されていない場合は、「ファイル」で、実行時に使用するファイルを指定します。

全般ページで統合を作成したときにファイルが選択されている場合は、選択されたファイル・プロファイルがこのフィールドに表示され、実行時に別のファイル・プロファイルを使用して別のファイルをアップロードすることはできません。

15. 「実行」をクリックします。


統合ジョブの表示


統合の実行ページで統合ジョブが送信されると、統合の実行の実行ポップアップに、4 つの主な統合操作(データのインポート、検証、エクスポートおよび確認)のプロセス・フローが表示されます。これらのアイコンによって、送信された各プロセスのステータスに関する視覚的なフィードバックが提供されます。ポップアップには、送信されたプロセスのステータスも表示されます。


統合をオフラインで実行することを選択できます。その場合、統合がすぐに処理されるのではなく、データがバックグラウンドで処理されます。

統合が正常に実行されたら、ワークベンチに移動するか、ログ・ファイルをダウンロードすることを選択できます。

Executing Integration: FusDL


Import


Validate


Export

Status:
Submitting Integration process..
Executing Integration process 24..
Integration process completed successfully.

[Workbench](#) [Download Log File](#) [Close](#)

12

パイプラインの使用

パイプライン機能を使用すると、一連のジョブを単一のプロセスとして編成できます。さらに、複数のインスタンスにまたがる **Oracle Enterprise Performance Management Cloud** ジョブを 1 箇所から編成できます。パイプラインを使用することで、前処理、データ・ロードおよび後処理ジョブの広範なデータ統合プロセス全体の管理と可視性が強化されます。

パイプラインでサポートされているジョブ・タイプは、次のとおりです:

- ビジネス・ルール
- ビジネス・ルールセット
- キューブのクリア
- オブジェクト・ストレージからコピー
- オブジェクト・ストレージにコピー
- Planning の EPM プラットフォーム・ジョブ
- Financial Consolidation and Close および Tax Reporting の EPM プラットフォーム・ジョブ
- Enterprise Profitability and Cost Management の EPM プラットフォーム・ジョブ
- 名前別のディメンションのエクスポート(EDMCS)
- 名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)
- マッピングのエクスポート
- メタデータのエクスポート
- ファイル操作
- マッピングのインポート
- メタデータのインポート
- 統合
- オープン・バッチ - ファイル
- オープン・バッチ - ロケーション
- オープン・バッチ - 名前
- プラン・タイプ・マップ
- 代替変数の設定

パイプラインに関する考慮事項

パイプラインに関する次の考慮事項に注意してください:

- パイプライン定義は管理者のみが作成および実行できます。

- パイプラインはデータ管理のバッチ機能に置き換わるものであり、データ統合のパイプライン機能に自動的に移行できます。
- パイプラインでのリモート・サーバーへのファイルベース統合では、パイプライン・ジョブ・パラメータでファイル名を指定すると、ローカル・ホストからリモート・サーバーの同じディレクトリに自動的にファイルがコピーされます。

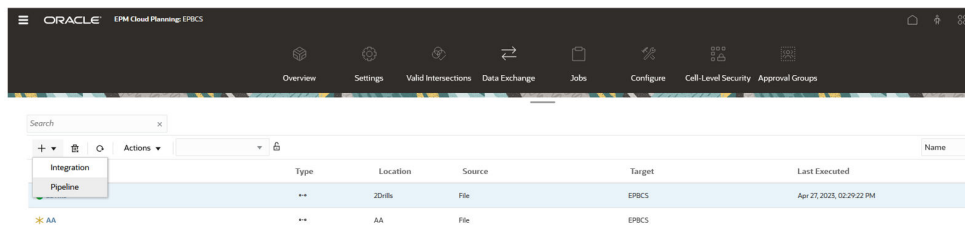
 **Note:**

サブディレクトリ文字列名の文字数の上限は 2,000 文字です。

パイプライン・プロセスの説明

パイプライン・プロセスを作成して実行するためのワークフローは次のとおりです:

- データ統合ホーム・ページから、**+** (「作成」) をクリックし、「パイプライン」を選択します。



- パイプラインの作成ページの「詳細」から、「パイプライン名」でパイプラインの名前を指定します。
- 「パイプライン・コード」で、パイプライン・コードを指定します。

コードには 30 文字までの英数字を使用でき、最小文字数は 3 文字、最大文字数は 30 文字です。パイプラインが作成された後はこのコードを更新できません。REST API を使用してパイプラインを実行するには、パイプライン・コードを使用します。

- ジョブがパラレル・モードで実行される場合、「最大パラレル・ジョブ数」でそれぞれのステージについてパラレル・モードで実行するジョブの最大数を指定します。

ジョブがパラレル・モードで実行される場合は、実行時に、ジョブが(順次ではなく)同時にまとめて実行されます。パラレル・モードで実行するジョブの数を 1 から 25 までの間で入力できます。

ジョブがシリアル・モードで実行される場合は、実行時に、ジョブが特定の順序で 1 つずつ実行されます。

Edit Pipeline : Daily Loads ✕


Details Variables

* Pipeline Name


* Pipeline Code

Maximum Parallel Jobs ▼ ▲

5. 「保存して続行」をクリックします。

新しいパイプラインがデータ統合ホームページに追加されます。それぞれのパイプラインは、「タイプ」ヘッダーの下の  で識別されます。

パイプライン・ジョブを検索するには、「検索」から"パイプライン"という単語または単語の一部を検索します。

既存のパイプラインを表示または編集するには、パイプラインの右側にある  をクリックし、「パイプライン詳細」を選択します。

6. 変数ページには、実行時にパラメータを設定できる、パイプラインの即時利用可能な一連の変数(グローバル値)が用意されています。変数は、「期間」、「インポート・モード」、「エクスポート・モード」などのような事前定義済のタイプにすることも、ジョブ・パラメータとして使用されるカスタム値にすることもできます。

たとえば、開始期間について代替変数(先頭にアンパサンド(&)が1つまたは2つ付いたユーザー変数名)を設定できます。

Create Pipeline : QE Demo ✕


①
②

Details
Variables

+ 倉

Variable Name*	Display Name*	Display Sequence*	Required	Validation Type*	Validation Parameters	Default Value
STARTPERIOD	Start Period	1	<input type="checkbox"/>	List	Global Period Name LOV Query	
ENDPERIOD	End Period	2	<input type="checkbox"/>	List	Global Period Name LOV Query	
IMPORTMODE	Import Mode	3	<input type="checkbox"/>	Lookup	DATA_LOAD_IMPORT_MODES	Replace
EXPORTMODE	Export Mode	4	<input type="checkbox"/>	List	Pipeline Export Mode LOV Qu ...	Merge
SEND_MAIL	Send Mail	5	<input type="checkbox"/>	Lookup	MAIL_CONDITION	No
SEND_TO	Send To	6	<input type="checkbox"/>	Text		
ATTACH_LOGS	Attach Logs	7	<input type="checkbox"/>	Lookup	YES_NO	No

ランタイム変数の詳細は、[ランタイム変数の編集](#)を参照してください。

7. 「保存」をクリックします。
8. **パイプライン**・ページで、 をクリックします。
新しいステージ・カードが作成されます。



ステージは、パイプラインで実行するジョブのコンテナであり、任意のタイプのジョブや複数のターゲット・アプリケーションのジョブを含めることができます。ステージ・カードをエントリ・ポイントとして使用して、各ステージに含まれるジョブを追加、管理および削除します。それぞれのステージでは、シリアルまたはパラレル・モードでジョブを実行できます。ステージはシリアルでのみ実行され、複数のステージがある場合、それぞれのステージが完了してから、次のステージのジョブが実行されます。

パイプラインのサンプルに次のようなステージを含めることができます:

ステージ 1: メタデータのロード(ジョブはシリアル・モードで実行されます)

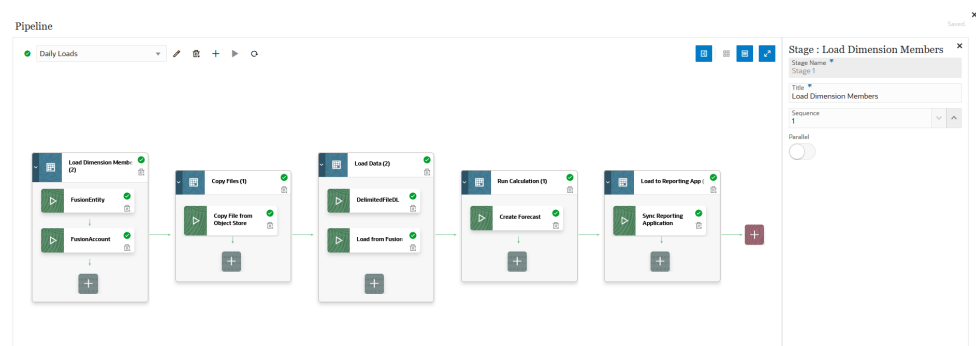
- 勘定科目ディメンションのロード
- エンティティ・ディメンションのロード

ステージ 2: (ジョブはパラレル・モードで実行されます)

- ソース 1 からのデータのロード
- ソース 2 からのデータのロード

ステージ 3: (ジョブはシリアル・モードで実行されます)

- 計算を行うビジネス・ルールの実行。
- 代替変数の実行



9. **ステージ・エディタ**で、ステージ定義を指定します:
 - **ステージ名**—ステージの名前を指定します。

- **タイトル**—ステージ・カードに表示されるステージの名前を指定します。
- **シーケンス**—ステージが実行される時系列順序を定義する数値を指定します。
- **パラレル**—ジョブを同時に実行するには、「**パラレル**」をオンにします。

実行されるパラレル・ジョブの数は、**パイプラインの作成**ページの「**最大パラレル・ジョブ数**」フィールドで指定した最大パラレル・ジョブ数によって決まります。

•  **Note:**

次の「**成功時**」および「**失敗時**」オプションは、パイプラインの後続ステージの処理を制御します。つまり、ステージが成功または失敗した場合に、パイプライン・プロセスを停止するか、続行するか、別のステージへスキップするかを制御します。このオプションでは、ステージ内のジョブの処理は制御しません。ステージ内のすべてのジョブは、他のジョブの成功または失敗にかかわらず、常に実行されます。したがって、ステージが1つのみの場合は、このオプションは意味がありません。

このため、お客様はステージ内で論理ジョブ・タイプを管理する必要があります。たとえば、1つのステージにすべてのメタデータのロードを含めた場合、そのステージが失敗すると、データはロードされません。または、データ・ロード・ステージが失敗した場合、ステージで計算ジョブは実行されません。

成功時—パイプライン定義内のステップが正常に実行された場合のステージの処理方法を選択します。

ドロップダウンのオプションは次のとおりです:

- 続行—パイプライン定義のステージ内のステップが正常に実行された場合、ステージの処理を続行します。
- 停止—失敗時にのみ実行されるステージをバイパスする場合はステージをスキップし、パイプライン定義内の次のステージに進みます。


失敗時—ステージ内のステップが失敗した場合のステージの処理方法を指定します。

ドロップダウンのオプションは次のとおりです:

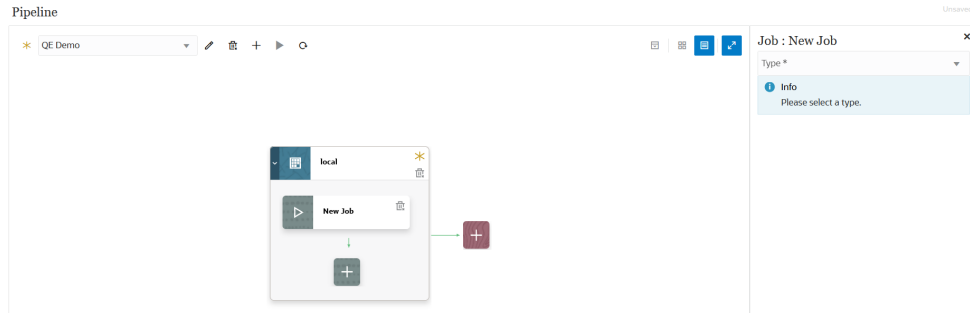
- 続行—ステージ内のステップが失敗した場合、パイプライン定義のステージ内の後続ステップの処理を続行します。
- 停止—ステップの処理に失敗した場合、パイプライン定義の現在のステージの処理を停止し、クリーンアップ・ステップにスキップして実行します。

10. ステージ・カードで、「>」をクリックして新しいジョブをステージに追加します。



11. ステージ・カードで、 (「ジョブの作成」アイコン)をクリックします。

新しいジョブ・カードがステージ・カードに表示されます。



12. **ジョブ・エディタ**で、「**タイプ**」ドロップダウンから、ステージ・カードに追加するジョブのタイプを選択します。

ジョブ・タイプは次のとおりです:

- ビジネス・ルール
 - ビジネス・ルールセット
 - キューブのクリア
 - オブジェクト・ストレージからコピー
 - オブジェクト・ストレージにコピー
 - **Planning** の EPM プラットフォーム・ジョブ
 - **Financial Consolidation and Close** および **Tax Reporting** の EPM プラットフォーム・ジョブ
 - **Enterprise Profitability and Cost Management** の EPM プラットフォーム・ジョブ
 - 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)
 - 名前別のディメンション・マッピングのエクスポート (EDMCS)
 - マッピングのエクスポート
 - メタデータのエクスポート
 - ファイル操作
 - マッピングのインポート
 - メタデータのインポート
 - 統合
 - オープン・バッチ - ファイル
 - オープン・バッチ - ロケーション
 - オープン・バッチ - 名前
 - プラン・タイプ・マップ
 - 代替変数の設定
13. **「接続」** ドロップダウンから、ジョブ・タイプに関連付ける接続名を選択します。

接続は、「ローカル」接続(接続がホスト・サーバー上にある)または「リモート」(接続が別のサーバー上にある)にすることができます。デフォルトでは、接続の値は「ロ

ーカル」です。ジョブ・タイプでリモート操作がサポートされている場合は(リモート・ビジネス・プロセスにデータを移動する統合など)、接続名を求められます。

次の例外に注意してください。

ジョブ・タイプ	説明
オブジェクト・ストレージにコピー	オブジェクト・ストレージを使用するには、「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプが必要です。接続する Web サービスへのアクセス権が必要です。場合によっては Web サービスの URL およびログイン詳細も必要です。詳細は、 <i>Planning の管理</i> の外部 Web サービスへの接続を参照してください。 また、「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプのユーザー・パスワードとして使用する 認証トークン を生成する必要があります。認証トークンの作成の詳細は、 認証トークンを作成するには を参照してください。
オブジェクト・ストレージからコピー	オブジェクト・ストレージを使用するには、「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプが必要です。接続する Web サービスへのアクセス権があることを確認する必要があります。場合によっては Web サービスの URL およびログイン詳細も必要です。詳細は、 <i>Planning の管理</i> の外部 Web サービスへの接続を参照してください。 また、「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプのユーザー・パスワードとして使用する 認証トークン を生成する必要があります。認証トークンの作成の詳細は、 認証トークンを作成するには を参照してください。

14. 「名前」から、ジョブの名前を選択します。

「名前」ジョブ・パラメータは、次のものには適用されません:

- 「代替変数の設定」ジョブ・タイプ
- オブジェクト・ストレージにコピーおよびオブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプ
- オープン・バッチ(ファイル、ロケーションおよび名前に基づく)ジョブ・タイプ

15. 「タイトル」で、ジョブ・カードに表示されるジョブ名のタイトルを指定します。

16. 「シーケンス」で、ステージに複数のジョブがある場合にジョブを実行する順序を選択します。

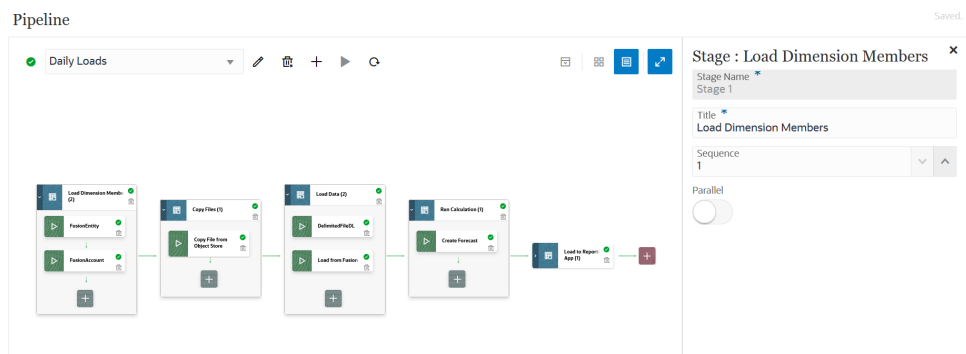
17. 「ジョブ・パラメータ」から、ジョブに関連するジョブ・パラメータを選択します。


ジョブ・パラメータは、ジョブに割り当てられた静的値にすることも、パイプライン変数から割り当てることもできます。

ジョブ・パラメータはジョブ・タイプに基づきます。ジョブ・タイプ別の関連するパラメータについては、次を参照してください:

- [「ビジネス・ルール」ジョブ・タイプの使用](#)
- [「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプの使用](#)
- [「キューブのクリア」ジョブ・タイプの使用](#)
- [オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプの使用](#)
- [オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプの使用](#)
- [Planning ジョブに対する「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用](#)
- [Enterprise Profitability and Cost Management に対する「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用](#)
- [Financial Consolidation and Close ジョブおよび Tax Reporting ジョブに対する「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用](#)


- 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS) ジョブ・タイプの使用
- 名前別のディメンション・マッピングのエクスポート (EDMCS) ジョブ・タイプの使用
- 「マッピングのエクスポート」 ジョブ・タイプの使用
- 「メタデータのエクスポート」 ジョブ・タイプの使用
- ファイル操作ジョブ・タイプの使用
- 「マッピングのインポート」 ジョブ・タイプの使用
- 「メタデータのインポート」 ジョブ・タイプの使用
- 「統合」 ジョブ・タイプの使用
- 「オープン・バッチ - ファイル」 ジョブ・タイプの使用
- 「オープン・バッチ - ロケーション」 ジョブ・タイプの使用
- 「オープン・バッチ - 名前」 ジョブ・タイプの使用
- 「プラン・タイプ・マップ」 ジョブ・タイプの使用
- 「代替変数の設定」 ジョブ・タイプの使用



18.  をクリックしてパイプラインを実行します。
19. **パイプラインの実行** ページで、実行時プロンプトを完成させ、「**実行**」をクリックします。

Run Pipeline : LocInt

Variables	
Name	Value
Start Period	Jan-18
End Period	Jan-18
Import Mode	Replace
Export Mode	Merge
Send Mail	Always
Send To	administrator@youremail.com
Attach Logs	Yes

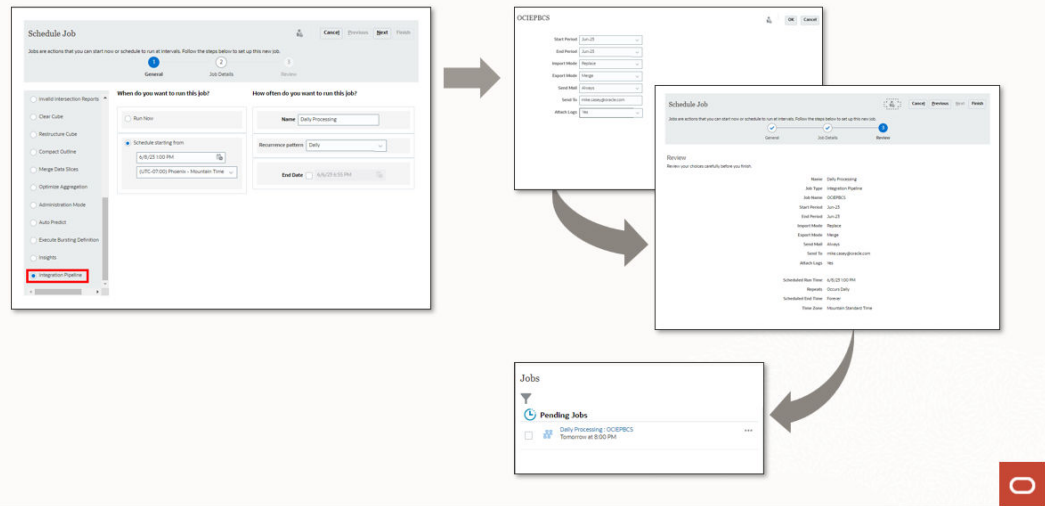
パイプラインが実行中のときには、ステータスがとして表示されます。

 **Note:**

30分経過しても現在のジョブがまだ実行中の場合、パイプラインは自動的に次のジョブに移行します。この場合、現在のジョブと次のジョブが同時に実行されます。

ステータス・アイコンをクリックして、ログをダウンロードできます。また、パイプラインのステータスを「プロセスの詳細」で確認することもできます。パイプライン内の個々のジョブは別々に送信され、個別のジョブ・ログが「プロセスの詳細」に作成されます。

20. オプションで、データ統合ユーザー・インターフェースでパイプラインに定義されたパラメータおよび変数に基づいて実行するようにパイプライン定義をスケジュールできます。詳細は、*Planning の管理*のジョブのスケジュールを参照してください



パイプラインのコマンド・リファレンス

次の表に、パイプラインで使用されるコマンド・アイコンを示します:

Table 12-1 パイプラインのコマンド・リファレンス

コマンド・アイコン	説明
	パイプラインの編集
	パイプラインの削除
	パイプラインの作成
	パイプラインの実行

Table 12-1 (Cont.) パイプラインのコマンド・リファレンス

コマンド・アイコン	説明
	すべてのステージの展開/縮小
	グリッド・ビュー
	コンテナ・ビュー
	エディタの切替え
	ステージの作成
	ジョブの作成
	成功(パイプラインの実行時)

パイプラインのジョブ・タイプ

次のジョブ・タイプをパイプラインに追加できます:

- 「ビジネス・ルール」ジョブ・タイプの使用
- 「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプの使用
- 「キューブのクリア」ジョブ・タイプの使用
- オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプの使用
- オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプの使用
- Planning ジョブに対する「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用
- Enterprise Profitability and Cost Management に対する「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用
- Financial Consolidation and Close ジョブおよび Tax Reporting ジョブに対する「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用
- 名前別のディメンションのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプの使用
- 名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプの使用
- 「マッピングのエクスポート」ジョブ・タイプの使用
- 「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプの使用
- ファイル操作ジョブ・タイプの使用

- 「マッピングのインポート」 ジョブ・タイプの使用
- 「メタデータのインポート」 ジョブ・タイプの使用
- 「統合」 ジョブ・タイプの使用
- 「オープン・バッチ - ファイル」 ジョブ・タイプの使用
- 「オープン・バッチ - ロケーション」 ジョブ・タイプの使用
- 「オープン・バッチ - 名前」 ジョブ・タイプの使用
- 「プラン・タイプ・マップ」 ジョブ・タイプの使用
- 「代替変数の設定」 ジョブ・タイプの使用

「ビジネス・ルール」 ジョブ・タイプの使用

「ビジネス・ルール」 ジョブ・タイプを使用して、**Calculation Manager** で作成されたビジネス・ルールをパイプラインに追加し、実行します。ビジネス・ルールを使用すると、**Planning** アプリケーションにデータをロードする際に高度なルールを起動および管理できます。

ビジネス・ルールの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager* での設計のビジネス・ルールについてを参照してください。

「ビジネス・ルール」 ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-2 「ビジネス・ルール」 ジョブ・タイプのパラメータ

「ビジネス・ルール」 ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ラベル	Planning ビジネス・ルールで定義されている実行時プロンプトの名前を入力します。
値	実行時プロンプトにカスタム値タイプを選択した場合は、実際の値を指定します。

「ビジネス・ルール」 ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : OWP_Add Benefit Defaults ✕

Type *
Business Rule

Connection
Local

Name *
OWP_Add Benefit Defaults

Title *
OWP_Add Benefit Defaults

Sequence
2

Label RTP1	Value	⊕ ⊖
---------------	-------	-----

Job : OPF_Rollup Project Cube 4 param ✕

Type *
Business Rule

Connection
Local

Name
OPF_Rollup Project Cube

Title *
OPF_Rollup Project Cube 4 params

Sequence
1

Label Currency	Value "USD"	⊕ ⊖
Label Entity	Value "East"	⊕ ⊖
Label Scenario	Value "OEP_Strategic Plan"	⊕ ⊖
Label Version	Value "OEP_Prior FCST"	⊕ ⊖

「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプの使用

「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプを使用して、作成されたビジネス・ルールセットをパイプラインに追加し、実行します。ビジネス・ルールセットを使用すると、データを **Planning** アプリケーションにロードするときに、ビジネス・ルールのコレクションを同時または順次に起動および管理できます。

ビジネス・ルールセットの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager* での設計のビジネス・ルールセットについてを参照してください。

「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-3 「ビジネス・ルール」ジョブ・タイプのパラメータ

「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ラベル	Planning ビジネス・ルールで定義されている実行時プロンプトの名前を入力します。
値	実行時プロンプトにカスタム値タイプを選択した場合は、実際の値を指定します。

「ビジネス・ルールセット」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : OPF_Calculate All Expenses ×

Type *
Business Ruleset ▼

Connection
Local ▼

Name ✎
OPF_Calculate All Expenses ▼

Title ✎
OPF_Calculate All Expenses

Sequence
2 ▼ ▲

Label
RTP1

Value
⊕ ⊖

Job : BRSetOPF_Calculate Imported Projects

Type *
 Business Ruleset

Connection
 Local

Name
 OPF_Calculate Imported Projects

Title *
 BRSetOPF_Calculate Imported Projects Params 4

Sequence
 2

Label Currency	Value USD	⊕ ⊖
Label Entity	Value "Manufacturing US"	⊕ ⊖
Label Scenario	Value "OEP_Strategic Plan"	⊕ ⊖
Label Version	Value "OEP_No Version"	⊕ ⊖

「キューブのクリア」ジョブ・タイプの使用

「キューブのクリア」ジョブ・タイプを使用して、入力キューブおよびレポート・キューブ内の特定のデータをクリアします。

メンバー選択を使用してデータをクリアしたり、メンバー選択を使用して有効な MDX 問合せをクリアすることができ、オプションで、関連するサポート詳細、コメントおよび添付をクリアすることもできます。データの物理的クリアを行うか、論理的クリアを行うかを選択することもできます。

このジョブ・タイプを実行しても、アプリケーションのリレーショナル表内のアプリケーション定義は削除されません。*Planning の管理のキューブのクリア*を参照してください。



オプションのランタイム・パラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。

「キューブのクリア」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-4 「キューブのクリア」ジョブ・タイプのパラメータ

「キューブのクリア」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
名前	「名前」ドロップダウンから、データをクリアするキューブの名前を選択します。使用可能なすべてのクリア・キューブのリストは、選択した接続に基づきます。

Table 12-4 (Cont.) 「キューブのクリア」ジョブ・タイプのパラメータ

「キューブのクリア」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ラベル/値	<p>オプションのランタイム・ラベルとその値を指定します。</p> <p>オプションのラベルには、次のものを含めることができます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • cube • members • mdxQuery • clearSupportingDetails • clearComments • clearAttachments • clearPhysicalOnEssbase <p>新しい「ラベル」/「値」のペアを追加するには、 をクリックします。</p> <p>「ラベル」/「値」のペアを削除するには、 をクリックします。</p>
cube	クリアする有効なキューブ名を指定します。
mdxQuery	<p>有効な MDX 問合せ。MDX 問合せのサポート付きで定義された、ASO キューブの部分クリア・ジョブにのみ適用可能です。</p> <p>例: "Crossjoin ({[Apr], [May], [Jun]}, {[Expense1]})"</p>
clearSupportingDetails	サポート詳細をクリアする必要があるかどうかを指定します。指定可能な値: true または false。メンバー選択を使用して定義された、ASO キューブの部分クリア・ジョブにのみ適用可能です。
clearComments	コメントをクリアする必要があるかどうかを指定します。指定可能な値: true または false。メンバー選択を使用して定義された、ASO キューブの部分クリア・ジョブにのみ適用可能です。
clearPhysicalOnEssbase	添付をクリアする必要があるかどうかを指定します。指定可能な値: true または false。メンバー選択を使用して定義された、ASO キューブの部分クリア・ジョブにのみ適用可能です。

BSO キューブのジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : BSOClear ✕

Type *
Clear Cube

Connection
Local

Name
BSOClear

Title *
BSOClear

Sequence
5

Label cube Value Plan1 ⊕ ⊖

コメントのクリア・パラメータが指定された「キューブのクリア」ジョブ・タイプのジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : KF_Clear_Plan1Title ✕

Type *
Clear Cube

Connection
Local

Name
KF_Clear_Plan1

Title *
KF_Clear_Plan1Title

Sequence
1

Label clearComments Value true ⊕ ⊖

MDX 問合せパラメータの「キューブのクリア」ジョブ・タイプのジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : ASORemClear ✕

Type *
Clear Cube

Connection
EPBCS_REMOTE

Name ✎
ASORemClear

Title ✎
ASORemClear

Sequence
2

Label	Value
mdxQuery	Crossjoin(Crossjoin(

MDX 問合せパラメータの「キューブのクリア」ジョブ・タイプのジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : KF_Clear_EPBCS ✕

Type *
Clear Cube

Connection
Local

Name
KF_Clear_EPBCS

Title ✎
KF_Clear_EPBCS

Sequence
4

Label	Value
clearSupportingData	true
members	"ILVIODescendants(

オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプの使用

オブジェクト・ストレージから inbox にファイルをコピーできます。これらのファイルを統合ジョブの入力データ・ソースにすることができます。オブジェクト・ストレージは、完全にプログラム可能でスケーラブルな耐久性に優れたクラウド・ストレージ・サービスです。

 **Note:**

オブジェクト・ストレージからファイルをコピーする前に、次の点に注意してください:

- オブジェクト・ストレージを使用するには、「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプが必要です。接続する Web サービスへのアクセス権があることを確認する必要があります。場合によっては Web サービスの URL およびログイン詳細も必要です。詳細は、*Planning の管理*の外部 Web サービスへの接続を参照してください。

 **Note:**

「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプのユーザー・パスワードとして使用する認証トークンを生成する必要があります。認証トークンの作成の詳細は、[認証トークンを作成するには](#)を参照してください。

- オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプでは、オブジェクト・ストレージからコピーするファイルに関連付けられた「**ネームスペース**」名と「**バケット**」情報を指定する必要があります。


Oracle Storage の詳細は、[Oracle Storage](#)。を参照してください

オブジェクト・ストレージ・ルールからコピー・ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-5 オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプのパラメータ

オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプのパラメータ	説明
オブジェクト・ストア接続	オブジェクト・ストレージ接続の名前を指定します。
ネームスペース	すべてのバケットおよびオブジェクトの最上位コンテナとして機能する名前を指定します。アカウントの作成時に、システムによって生成された変更不可の一意のネームスペース名がそれぞれのテナントに 1 つずつ割り当てられます。リージョン内のすべてのコンパートメントがネームスペースの対象となります。バケット名は自分で管理しますが、それらのバケット名はネームスペース内で一意である必要があります。ネームスペースはリージョン固有ですが、ネームスペース名自体はすべてのリージョンで同じです。

Table 12-5 (Cont.) オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプのパラメータ

オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプのパラメータ	説明
バケット	<p>ネームスペース内のコンパートメントにオブジェクトを格納するためのコンテナであるバケットの名前を指定します。</p> <p>バケットは、単一のコンパートメントに関連付けられます。コンパートメントには、バケットおよびバケット内のすべてのオブジェクトに対してユーザーが実行できるアクションを示すポリシーが含まれていることがあります。オブジェクト・ストレージ・サービスを使用するには、最初にバケットを作成してから、データ・ファイルの追加を開始します。</p> <div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p> Note:</p> <p>最上位レベル・バケットのサブディレクトリは、現時点ではサポートされていません。</p> </div>
ファイル名	<p>オブジェクト・ストレージからコピーするソース・ファイル名を指定します。</p> <p>ワイルド・カード文字* (アスタリスク)を使用して、複数のファイルをコピーできます。たとえば、GLData で始まるすべてのファイルをコピーするには、ファイル名 GLData*を指定します。</p>
ターゲット・ディレクトリ	<p>ファイルのコピー先のターゲット・ディレクトリを指定します。ターゲット・ディレクトリには、inbox、openbatch、openbatchml および epminbox を指定できます</p>
サブディレクトリ	<p>オプション: ファイルのコピー先のターゲット・ディレクトリの下サブディレクトリを指定します。</p> <p>サブディレクトリ文字列名の文字数の上限は 2,000 文字です。</p>

オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : CopyFrom ×

Type *
Copy from Object Storage ▼

Connection
Local ▼

Name
▼

Title *
CopyFrom

Sequence
2 ▼ ▲

Object Storage Connection

Namespace
epmclouddev

Bucket
bucket

File Name
ColinDelimited.txt

Target Directory *
inbox ▼

Subdirectory

オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプの使 用

完全にプログラム可能でスケーラブルかつ耐久性に優れたクラウド・ストレージ・サービスであるオブジェクト・ストレージに、入力データ・ソースとして使用されるファイルをコピーできます。

 **Note:**

オブジェクト・ストレージにファイルをコピーする前に、次の点に注意してください:

- オブジェクト・ストレージを使用するには、「**その他の Web サービス・プロバイダ**」接続タイプが必要です。接続する Web サービスへのアクセス権があることを確認する必要があります。場合によっては Web サービスの URL およびログイン詳細も必要です。詳細は、*Planning の管理*の外部 Web サービスへの接続を参照してください。

 **Note:**

「**その他の Web サービス・プロバイダ**」接続タイプのユーザー・パスワードとして使用する認証トークンを生成する必要があります。認証トークンの作成の詳細は、[認証トークンを作成するには](#)を参照してください。

- オブジェクト・ストレージからコピー・ジョブ・タイプでは、オブジェクト・ストレージからコピーするファイルに関連付けられた「**ネームスペース**」名と「**バケット**」情報を指定する必要があります。


Oracle Storage の詳細は、[Oracle Storage](#)。を参照してください

オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-6 オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプのパラメータ

オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプのパラメータ	説明
オブジェクト・ストレージ接続	オブジェクト・ストレージ接続の名前を指定します。
ネームスペース	すべてのバケットおよびオブジェクトの最上位コンテナとして機能する名前を指定します。 アカウントの作成時に、システムによって生成された変更不可の一意のネームスペース名がそれぞれのテナントに1つずつ割り当てられます。リージョン内のすべてのコンパートメントがネームスペースの対象となります。バケット名は自分で管理しますが、それらのバケット名はネームスペース内で一意である必要があります。ネームスペースはリージョン固有ですが、ネームスペース名自体はすべてのリージョンで同じです。
バケット	ネームスペース内のコンパートメントにオブジェクトを格納するためのコンテナであるバケットの名前を指定します。 バケットは、単一のコンパートメントに関連付けられます。コンパートメントには、バケットおよびバケット内のすべてのオブジェクトに対してユーザーが実行できるアクションを示すポリシーが含まれていることがあります。オブジェクト・ストレージ・サービスを使用するには、最初にバケットを作成してから、データ・ファイルの追加を開始します。

Table 12-6 (Cont.) オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプのパラメータ

オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ソース・ディレクトリ	ファイルをオブジェクト・ストレージにコピーするソース・ディレクトリを指定します サブディレクトリ文字列名の文字数の上限は 2,000 文字です。
ファイル名	オブジェクト・ストレージにコピーするソース・ファイルの名前を指定します。  をクリックしてファイル・ブラウザを起動し、コピーするソース・ファイルに移動できます。 ワイルド・カード文字* (アスタリスク)を使用して、複数のファイルをコピーできます。たとえば、GLData で始まるすべてのファイルをコピーするには、ファイル名 GLData* を指定します。
ターゲット・ファイル名	オブジェクト・ストレージにコピーするターゲット・ファイル名を指定します。 複数のソース・ファイルをコピーすると、ファイル接頭辞として指定した値が追加されます。

オブジェクト・ストレージにコピー・ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : CopyTo ✕

Type *
Copy to Object Storage ▼

Connection
Local ▼

Name ▼

Title *
CopyTo

Sequence
1 ▼ ▲

Object Storage Connection

Namespace
epmclouddev

Bucket
bucket

Source Directory *
inbox ▼

File Name
ColinDelimitedFile40522.txt

Target File Name
ColinDelimitedFile.txt

Planning ジョブでの「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプを使用して、ジョブ名、ジョブ・タイプおよびパラメータを指定することによって **Planning** ジョブを実行します。ジョブの中には、ジョブ定義内に保存された一部またはすべての必須パラメータを使用して、対応する **Planning** アプリケーションで定義する必要があるものがあります。これらのジョブ・タイプについては、パラメータをジョブ定義内で指定することも、実行時に上書きすることもできます。残りのジョブは、保存されたジョブ定義を使用せずに実行時にトリガーできます。

Planning ジョブについてサポートされている「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプには、次のものが含まれます:

- 管理モード
- 自動予測
- キューブのクリア
- キューブの圧縮
- キューブのリフレッシュ
- バースト定義の実行
- 監査のエクスポート
- 連結仕訳のエクスポート
- データのエクスポート
- ジョブ・コンソールのエクスポート
- メタデータのエクスポート
- セキュリティのエクスポート
- 連結仕訳のインポート
- データのインポート
- 為替レートのインポート
- メタデータのインポート
- セキュリティのインポート
- データ・スライスのマージ
- 集約の最適化
- プラン・タイプ・マップ
- キューブの再構築
- ルール
- ルール・セット

 **Note:**

Planning でジョブを定義する方法を理解するには、*Planning の管理*のジョブの管理を参照してください。

ジョブ・タイプのパラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。

次に示すジョブ・タイプ・パラメータの名前とパラメータは、対応する REST API でサポートされているものと一致している必要があります(*Enterprise Performance Management Cloud の REST API* のジョブの実行を参照してください)。

Table 12-7 Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ



Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ジョブ・タイプ	<p>「ジョブ・タイプ」ドロップダウンから、EPM プラットフォーム・ジョブで実行するジョブ・タイプの値または変数を選択します。</p> <p>「ラベル」/「値」フィールドで個々のラベルおよび値パラメータを指定することによって、ジョブ・タイプを絞り込むことができます。</p>
ジョブ名	このジョブの実行で使用するジョブ名を指定します。
ラベル/値	<p>ジョブ・タイプのパラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。</p> <p>新しい「ラベル」/「値」のペアを追加するには、 をクリックします。</p> <p>「ラベル」/「値」のペアを削除するには、 をクリックします。</p>
管理モード	<p>Planning アプリケーションに対するログイン・レベルを変更します。ログイン・レベルを「管理者」に設定した場合、すべての対話型ユーザーとプランナがジョブの完了時にアプリケーションからログオフされます。管理モードの詳細は、ジョブのスケジュールを参照してください。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud の REST API</i> の管理モードを参照してください。</p>
自動予測	<p>「自動予測」ジョブを使用して予測をスケジュールします。自動予測を使用すると、管理者は、履歴データに基づいて将来のパフォーマンスを予測するための予測を定義し、その予測定義を実行するためのジョブをスケジュールして、予測プロセスを自動化できます。</p> <p>自動予測の詳細は、<i>Planning の管理</i>の自動的に実行する予測の設定を参照してください。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud の REST API</i> の自動予測を参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ


Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
キューブのクリア	<p>「キューブのクリア」ジョブ・タイプを使用して、入力キューブおよびレポート・キューブ内の特定のデータをクリアします。</p> <p>メンバー選択を使用してデータをクリアしたり、メンバー選択を使用して有効な MDX 問合せをクリアすることができ、オプションで、関連するサポート詳細、コメントおよび添付をクリアすることもできます。データの物理的クリアを行うか、論理的クリアを行うかを選択することもできます。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、「キューブのクリア」ジョブ・タイプの使用を参照してください。</p>
キューブの圧縮	<p>ASO キューブのアウトライン・ファイルを圧縮します。圧縮は、アウトライン・ファイルを最適なサイズに保つのに役立ちます。アウトラインを圧縮しても、データはクリアされません。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のキューブの圧縮を参照してください。</p>
キューブのリフレッシュ	<p>Planning アプリケーション・キューブをリフレッシュします。通常、アプリケーションにメタデータをインポートした後にキューブをリフレッシュします。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のキューブのリフレッシュを参照してください。</p>
バースト定義の実行	<p>単一ディメンションの複数のメンバーに対して単一のレポートまたはブックのバーストを実行し、各メンバーの PDF または Excel 出力を公開します。</p> <div data-bbox="932 1318 1370 1556" style="border: 1px solid #ccc; background-color: #e6f2ff; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p> Note:</p> <p>burstingDefinitionName パラメータで指定したフォルダにバースト定義が存在する必要があります。</p> </div> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のキューブのリフレッシュを参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
監査のエクスポート	<p>監査レコードをカンマ区切り値(CSV)ファイルにエクスポートします。出力 CSV ファイルの最初の文字として、バイト順マーク(BOM)文字\ufeff が含まれます。API によって、BOM 文字の後に、暗号化されたアプリケーション識別子が書き込まれます。このアプリケーション識別子は、二重引用符の間に書き込まれます。CSV ファイルのヘッダーは、アプリケーション識別子の後に続きます。詳細は、タスクおよびデータの監査を参照してください。</p> <p>オプションの excludeApplicationId パラメータを使用して、アプリケーション識別子をエクスポート・ファイルに書き込まないようにすることができます。アプリケーション識別子なしでエクスポートされた監査レポートをアプリケーションにインポートして戻すことはできません。</p> <p>生成された CSV ファイルは圧縮され、出力は ZIP ファイルになります。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の監査のエクスポートを参照してください。</p>
連結仕訳のエクスポート	<p>ジョブ名を使用して、連結仕訳のエクスポート・ジョブを実行します。このジョブを実行する前に、Financial Consolidation and Close で連結仕訳のエクスポート・ジョブを作成する必要があります。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の連結仕訳のエクスポートを参照してください。</p>
データのエクスポート	<p>export data タイプの Planning ジョブで指定されたデータのエクスポート設定(ファイル名を含む)を使用して、アプリケーション・データをファイルにエクスポートします。エクスポートされたデータが含まれるファイルは、Planning リポジトリに格納されます。</p> <p>REST API を使用してこのジョブを実行するときには、ジョブ定義の一部のパラメータを上書きすることもできます。</p> <p>データのエクスポートでは、代替変数がサポートされています。rowMembers、columnMembers および povMembers の定義を上書きするときに代替変数を使用できます。<i>Planning</i> の管理の代替変数の作成および値の割当てを参照してください。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータのエクスポートを参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ジョブ・コンソールのエクスポート	<p>ジョブ・コンソール・レコードをカンマ区切り値(CSV)ファイルにエクスポートします。出力 CSV ファイルの最初の文字として、バイト順マーク(BOM)文字\ufeff が含まれます。API によって、BOM 文字の後に、暗号化されたアプリケーション識別子が書き込まれます。このアプリケーション識別子は、二重引用符の間に書き込まれます。CSV ファイルのヘッダーは、アプリケーション識別子の後に続きます。</p> <p>オプションの excludeApplicationId パラメータを使用して、アプリケーション識別子をエクスポート・ファイルに書き込まないようにすることができます。アプリケーション識別子なしでエクスポートされたジョブ・コンソール・データ・ファイルをアプリケーションにインポートして戻すことはできません。</p> <p>生成された CSV ファイルは圧縮され、出力は ZIP ファイルになります。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のジョブ・コンソールのエクスポートを参照してください。</p>
メタデータのエクスポート	<p>export metadata タイプの Planning ジョブで指定された設定を使用して、メタデータをファイルにエクスポートします。エクスポートされたメタデータが含まれるファイルは、Planning リポジトリに格納されます。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のメタデータのエクスポートを参照してください。</p>
セキュリティのエクスポート	<p>指定されたユーザーまたはグループのセキュリティ・レコードまたはアクセス制御リスト(ACL)レコードをカンマ区切り値(CSV)ファイルにエクスポートします。アプリケーション・アーティファクトに対するアクセス権の詳細は、アクセス権限の設定を参照してください。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のセキュリティのエクスポートを参照してください。</p>
連結仕訳のインポート	<p>ジョブ名を使用して、連結仕訳のインポート・ジョブを実行します。このジョブを実行する前に、Financial Consolidation and Close で連結仕訳のインポート・ジョブを作成する必要があります。</p> <p>このタスクの詳細は、<i>Financial Consolidation and Close</i> の操作の連結仕訳のインポートを参照してください。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の連結仕訳のインポートを参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
データのインポート	<p>Import Data タイプの Planning ジョブで指定されたデータのインポート設定を使用して、Planning リポジトリ内のファイルからアプリケーションにデータをインポートします。</p> <p>Planning、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting については、エラーがある、却下されたデータ・レコードを確認できます。これを行うには、それぞれのディメンションについてインポートされなかったデータ・レコードを取得するエラー・ファイルを指定します。エラー・ファイルを指定すると、ZIP ファイルが送信ボックスに格納され、受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラまたは EPM 自動化や REST API のようなツール(ダウンロード API など)を使用して、ファイルをダウンロードできます。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータのインポートを参照してください。</p>
為替レートのインポート	<p>Planning リポジトリ内の為替レート・テンプレートをインポートし、必要に応じてレートを変更します。その後、為替レートのインポート・タイプの Planning ジョブで指定された為替レートのインポート設定を使用して、レートをアプリケーションにインポートできます。詳細は、ジョブ・タイプを参照してください</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の為替レートのインポートを参照してください。</p>
メタデータのインポート	<p>import metadata タイプの Planning ジョブで指定されたメタデータのインポート設定を使用して、Planning リポジトリ内のファイルからアプリケーションにメタデータをインポートします。</p> <p>Planning、Financial Consolidation and Close および Tax Reporting については、エラーがある、却下されたデータ・レコードを確認できます。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のメタデータのインポートを参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
セキュリティのインポート	<p>セキュリティ・レコードまたはアクセス制御リスト(ACL)レコードをカンマ区切り値(CSV)ファイルからインポートします。アプリケーション・アーティファクトに対するアクセス権限の詳細は、アクセス権限の設定を参照してください。</p> <p>Excel ファイルの形式:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Object Name: ACL が定義されているオブジェクトの名前 • Name: ACL が定義されているユーザーまたはグループの名前 • Parent: オブジェクトの親の名前 • Is User: ACL の定義がユーザーに対するものかグループに対するものを決定するフラグ(Y または N) • Object Type: オブジェクトのタイプ(フォーム・フォルダなど) • Access Type: 権限のタイプ(READ や READWRITE など) • Access Mode: ACL が子孫に対して適用可能であるかどうかなどの追加情報 • Remove: 特定の ACL を削除するには、これを Y に設定します <p>使用可能なすべての値:</p> <p>Object Type:</p> <ul style="list-style-type: none"> • SL_FORM - フォーム • SL_COMPOSITE - 複合フォーム • SL_TASKLIST - タスク・リスト • SL_CALCRULE - ルール • SL_FORMFOLDER - フォーム・フォルダ • SL_CALCFCOMPOSITE - ルール・フォルダ • SL_DIMENSION - ディメンション • SL_CALCTEMPLATE - テンプレート • SL_REPORT - 管理レポート • SL_REPORTSHOT - 管理レポートのスナップショット <p>Access Type:</p> <ul style="list-style-type: none"> • NONE - なし • READ - 読取り • WRITE - 書込み • READWRITE - 読取り/書込み • LAUNCH - 起動 <p>Access Mode:</p> <ul style="list-style-type: none"> • MEMBER • CHILDREN • @CHILDREN • @DESCENDANTS • @IDESCENDANTS

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
	<p>CSV ファイルの例:</p> <p>Object Name,Name,Parent,Is User,Object Type,Access Type,Access Mode,Remove</p> <p>Object Name,Name,Parent,Is User,Object Type,Access Type,Access Mode,Remove</p> <p>"Exchange Rates to</p> <p>USD","ats_user3","Y","SL_FORM","READWRITE","MEMBER","N"</p> <p>"Exchange Rates to</p> <p>USD","ats_user4","Y","SL_FORM","READWRITE","MEMBER","N"</p> <p>"Exchange Rates to</p> <p>USD","ats_user15","Y","SL_FORM","READ","MEMBER","N"</p> <p>"Exchange Rates to</p> <p>USD","ats_user10","Y","SL_FORM","NONE","MEMBER","N"</p> <p>"Calculate</p> <p>Benefits","group_1","N","SL_COMPOSITE","READWRITE","MEMBER","N"</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のセキュリティのインポートを参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
データ・スライスのマージ	<p>ASO キューブの増分データ・スライスをマージします。スライスが少なくなると、キューブのパフォーマンスは向上します。メイン・データベース・スライスにすべての増分データ・スライスをマージしたり、メイン・データベース・スライスを変更しないまま単一のデータ・スライスにすべての増分データ・スライスをマージしたりできます。オプションで、値がゼロのセルを削除することも可能です。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータ・スライスのマージを参照してください。</p>
集約の最適化	<p>ASO キューブのパフォーマンスを改善します。このジョブには、「問合せトラッキングの有効化」と「集約プロセスの実行」という 2 つのアクションがあります。オプションで、生成されるファイルの最大ディスク・スペースを指定し、オプションで、ユーザー問合せパターンに基づいてビューの選択を行って、集約を実行します。このジョブ・タイプは、集約ストレージ・データベースにのみ適用できます。</p> <p>このジョブ・タイプを使用する前に、まず、集約ストレージ・キューブのトラッキング統計を取得するために問合せトラッキングを有効にする必要があります。問合せトラッキングを有効にしたら、問合せデータを基準とする集約プロセスを実行する前に、十分な時間をかけてユーザー・データ取得パターンを収集する必要があります。集約プロセスを実行すると、集約された既存のビューが削除され、収集された問合せトラッキング・データに基づき最適化されたビューが生成されます。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の集約の最適化を参照してください。</p>
プラン・タイプ・マップ	<p>plan type map タイプの Planning ジョブで指定された設定に基づいて、ブロック・ストレージ・キューブから集約ストレージ・キューブへ、または一方から他方へデータをコピーします。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のプラン・タイプ・マップを参照してください。</p>
キューブの再構築	<p>BSO キューブの完全な再構築を実行して、断片化を解消または削減します。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のキューブの再構築を参照してください。</p>
ルール	<p>ビジネス・ルールを起動します。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のルールを参照してください。</p>

Table 12-7 (Cont.) Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Planning の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ルール・セット	ビジネス・ルール・セットを起動します。 実行時プロンプトがないルール・セットまたはデフォルト値がある実行時プロンプトがサポートされています。柔軟性を高めるために、ルール・セットにパラメータを追加できます。ルール・セットの詳細は、 ビジネス・ルール・セットの設計 を参照してください。 渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、 <i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のルール・セットを参照してください。

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの「データのエクスポート」のパラメータのサンプルを次に示します:

Job : ExpDataRemJob ✕

Type *
EPM Platform Job

Connection
EPBCS_REMOTE

Name

Title *
ExpDataRemJob

Sequence
1

Job Type *
Export Data

Job Name
ExpDataRemJob

Label delimiter	Value tab	⊕ ⊖
Label exportFileName	Value ExpDataRemJob95.z	⊕ ⊖

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの「キューブのリフレッシュ」のパラメータのサンプルを次に示します:

Job : CubeRefreshRem ✕

Type *
EPM Platform Job

Connection
EPBCS_REMOTE

Name

Title *
CubeRefreshRem

Sequence
2

Job Type *
Cube Refresh

Job Name
RemCubeRefresh

Label
allowedUsersAfterCi

Value
All Users

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの「為替レートのインポート」ジョブのパラメータのサンプルを次に示します:

Job : ImpExchangeRateTitle ✕

Type *
EPM Platform Job

Connection
Local

Name

Title *
ImpExchangeRateTitle

Sequence
3

Job Type *
Import Exchange Rates

Job Name
KF_ExchangeRate

Label
importFileName

Value
KF_ExchangeRate.zi

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの「プラン・タイプ・マップ」ジョブのパラメータのサンプルを次に示します:

Job : JobPlanTypeMap ✕

Type *
EPM Platform Job

Connection
Local

Name

Title *
JobPlanTypeMap

Sequence
4

Job Type *
Plan Type Map

Job Name
PassingDataMap

Label	Value
ClearData	Yes

Financial Consolidation and Close および Tax Reporting ジョブでの「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプを使用して、ジョブ名、ジョブ・タイプおよびパラメータを指定することによって **Financial Consolidation and Close** および **Tax Reporting** ジョブを実行します。ジョブの中には、ジョブ定義内に保存された一部またはすべての必須パラメータを使用して、対応する **Financial Consolidation and Close** および **Tax Reporting** アプリケーションで定義する必要があるものがあります。これらのジョブ・タイプについては、パラメータをジョブ定義内で指定することも、実行時に上書きすることもできます。残りのジョブは、保存されたジョブ定義を使用せずに実行時にトリガーできます。

Financial Consolidation and Close および **Tax Reporting** についてサポートされている「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプには、次のものが含まれます:



- データのクリア
- データのコピー

ジョブ・タイプのパラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。

次に示すジョブ・タイプ・パラメータの名前とパラメータは、対応する REST API でサポートされているものと一致している必要があります:

- **Financial Consolidation and Close** の REST API については、*Enterprise Performance Management Cloud* の REST API の **Financial Consolidation and Close** の REST API を参照してください。
- **Tax Reporting** の REST API については、*Enterprise Performance Management Cloud* の REST API の **Tax Reporting** の REST API を参照してください。

Table 12-8 Financial Consolidation and Close および Tax Reporting の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Financial Consolidation and Close および Tax Reporting の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ジョブ・タイプ	<p>「ジョブ・タイプ」ドロップダウンから、EPM プラットフォーム・ジョブで実行するジョブ・タイプの値または変数を選択します。</p> <p>「ラベル」 / 「値」 フィールドで個々のラベルおよび値パラメータを指定することによって、ジョブ・タイプを絞り込むことができます。</p>
ジョブ名	<p>このジョブの実行で使用するジョブ名を指定します。</p>
ラベル/値	<p>ジョブ・タイプのパラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。</p> <p>新しい「ラベル」 / 「値」のペアを追加するには、 をクリックします。</p> <p>「ラベル」 / 「値」のペアを削除するには、 をクリックします。</p>
データのクリア	<p>プロファイル名を使用して、「データのクリア」ジョブを実行します。このジョブを実行する前に、Financial Consolidation and Close または Tax Reporting で「データのクリア」プロファイルを作成する必要があります。</p> <p>このタスクの詳細は、<i>Financial Consolidation and Close</i> の管理のデータのクリアを参照してください。</p> <p>Financial Consolidation and Close で渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータのクリアを参照してください。</p> <p>Tax Reporting で渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータのクリアを参照してください。</p>
データのコピー	<p>プロファイル名を使用して、「データのコピー」ジョブを実行します。このジョブを実行する前に、Financial Consolidation and Close または Tax Reporting で「データのコピー」プロファイルを作成する必要があります。</p> <p>Financial Consolidation and Close におけるこのタスクの詳細は、<i>データのコピー・プロファイルの使用</i> を参照してください。</p> <p>Tax Reporting におけるこのタスクの詳細は、<i>Tax Reporting</i> の管理のデータのコピー・ジョブの使用を参照してください。</p> <p>Financial Consolidation and Close で渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータのコピーを参照してください。</p> <p>Tax Reporting で渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API のデータのコピーを参照してください。</p>

Enterprise Profitability and Cost Management での「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプの使用

「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプを使用して、ジョブ名、ジョブ・タイプおよびパラメータを指定することによって Enterprise Profitability and Cost Management ジョブを実行します。ジョブの中には、ジョブ定義内に保存された一部またはすべての必須パラメータを使用して、対応する Enterprise Profitability and Cost Management アプリケーションで定義する必要があるものがあります。これらのジョブ・タイプについては、パラメータをジョブ定義内で指定することも、実行時に上書きすることもできます。残りのジョブは、保存されたジョブ定義を使用せずに実行時にトリガーできます。

Enterprise Profitability and Cost Management についてサポートされている「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプには、次のものが含まれます:

- 計算モデル
- 視点によるデータのクリア
- 視点によるデータのコピー
- POV の削除

ジョブ・タイプのパラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。

Table 12-9 Enterprise Profitability and Cost Management の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ



Enterprise Profitability and Cost Management の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプ	説明
ジョブ・タイプ	「ジョブ・タイプ」ドロップダウンから、EPM プラットフォーム・ジョブで実行するジョブ・タイプの値または変数を選択します。 「ラベル」/「値」フィールドで個々のラベルおよび値パラメータを指定することによって、ジョブ・タイプを絞り込むことができます。
ジョブ名	このジョブの実行で使用するジョブ名を指定します。
ラベル/値	ジョブ・タイプのパラメータが「ラベル」と「値」のペア(キー値のペア)として追加されます(「ラベル」は属性の名前であり、「値」は、この属性に割り当てられた値です)。 新しい「ラベル」/「値」のペアを追加するには、  をクリックします。 「ラベル」/「値」のペアを削除するには、  をクリックします。

Table 12-9 (Cont.) Enterprise Profitability and Cost Management の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプのパラメータ

Enterprise Profitability and Cost Management の「EPM プラットフォーム・ジョブ」ジョブ・タイプ	説明
計算モデル	<p>選択したキューブで指定した視点に対して計算を実行します。このジョブ・タイプでは、複数の POV を使用したバッチ計算がサポートされています。</p> <p>これは非同期呼出しであるため、ジョブ・ステータス URI を使用して、操作が完了したかどうかを確認してください。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の計算モデルを参照してください。</p>
視点によるデータのクリア	<p>選択したキューブで指定した視点のデータをクリアします。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の視点によるデータのクリアを参照してください。</p>
視点によるデータのコピー	<p>選択したキューブでソース視点から宛先視点にデータをコピーします。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の視点によるデータのコピーを参照してください。</p>
POV の削除	<p>視点に関連付けられたデータを計算キューブから削除します。</p> <p>渡すことができるジョブ・タイプ・パラメータと値の詳細は、<i>Enterprise Performance Management Cloud</i> の REST API の視点の削除を参照してください。</p>

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプの使用

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプを使用すると、Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションからステージング領域内のファイルまたは接続で定義されたターゲット環境にディメンションをエクスポートできます。

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプは、Oracle Enterprise Data Management Cloud ディメンションにバインドされているビューポイントから、次のいずれかのタイプの Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションにエクスポートする必要がある場合に役立ちます：

- Planning および Planning モジュール
- フリーフォーム
- Financial Consolidation and Close
- Enterprise Profitability and Cost Management

 **Note:**

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS) ジョブ・タイプは、パイプラインで Oracle Enterprise Data Management Cloud の他のアプリケーション・タイプをサポートしますが、EPM Cloud のお客様が最もよく使用するのは前述したアプリケーション・タイプです。他のアプリケーション・タイプの詳細は、*Enterprise Data Management Cloud の管理および操作のアプリケーション・タイプ* の理解を参照してください。

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS) ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-10 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS) ジョブ・タイプのパラメータ

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS) ジョブ・タイプのパラメータ	説明
接続	<p>パイプラインでこのジョブ・タイプに使用する Oracle Enterprise Data Management Cloud 接続を選択します。</p> <p>このジョブ・タイプは、リモート操作(非ローカル接続)でのみサポートされます。接続は「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプとして定義する必要があります。</p> <p>接続内の URL の形式は、https://hostname.com/epm である必要があります。「epm」以外の接尾辞で終わる URL は正しく機能しません。</p> <p>新しい Oracle Enterprise Data Management Cloud 接続を作成するには、<i>Financial Consolidation and Close の管理</i> の EPM Cloud 内での事前作成済の統合の追加を参照してください。</p>
名前	<p>Oracle Enterprise Data Management Cloud 接続のアプリケーションを選択します。</p> <p>ドロップダウンに移入されるアプリケーションのリストは、使用可能な Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションに基づきます(詳細は、<i>Enterprise Data Management Cloud の管理および操作のアプリケーション接続の作成</i> を参照してください)。簡単に見つけられるように、ドロップダウン・リストの各アプリケーションにはアプリケーション・タイプが付加されています。</p>
ディメンション名	<p>エクスポートする Oracle Enterprise Data Management Cloud ディメンションの名前を指定します。</p>

Table 12-10 (Cont.) 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ファイル名	<p>Oracle Enterprise Data Management Cloud ディメンションをエクスポートするターゲット・ファイル名を指定します。</p> <p>次のアプリケーション・タイプの各ディメンションのアプリケーション接続に基づいて、ローカル CSV ファイルまたはターゲット環境にディメンションをエクスポートできます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Planning • フリーフォーム • Financial Consolidation and Close • Enterprise Profitability and Cost Management <p>EDMCS アプリケーション接続 ページでアプリケーション接続を指定した場合、ファイルはターゲット EPM Cloud 環境の <i>inbox/outbox</i> フォルダにエクスポートされます。関連する EPM Cloud ビジネス・プロセスの <i>inbox/outbox</i> フォルダにエクスポートされたファイルは、「メタデータのインポート」ジョブ・タイプを使用してアプリケーションで使用できるようになります。詳細は、「メタデータのインポート」ジョブ・タイプの使用を参照してください。</p> <p>名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS) に対して指定するファイル名は、次の2つの条件のいずれかを満たしている必要があります:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプに対して指定するファイル名は、EPM Cloud アプリケーションで保存された「メタデータのインポート」ジョブで指定したファイル名と一致している必要があります(詳細は、「メタデータのインポート」ジョブ・タイプの使用を参照してください)。この場合、「メタデータのインポート」ジョブ・タイプには空白のファイル名を指定します。 2. 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブで指定されたファイル名が、EPM Cloud アプリケーションで保存された「メタデータのインポート」ジョブで指定されたファイル名と異なる場合でも、このファイル名の末尾が <dimensionname>.csv であれば、メタデータ・インポートは機能します。 <p>同じファイル名をパイプラインの「メタデータのインポート」ジョブにも提供する必要があります(たとえば、<code>myprefix_Account.csv</code> や</p>

Table 12-10 (Cont.) 名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ

名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ	説明
	<p>prefix2_Entity.csv)。ここで、<dimensionname>は EPM Cloud アプリケーション・ディメンションではなく、EPM Cloud アプリケーション・ディメンション名を指します。</p>
EDMCS アプリケーション接続	<p>オプション Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションで定義されているアプリケーション接続名を指定します。</p> <p>アプリケーション接続は、汎用アプリケーション・タイプではサポートされておらず、使用できません。</p> <p>指定された場合、エクスポート・ファイルはターゲット環境にエクスポートされます(たとえば、Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションの <i>inbox/outbox</i>)。</p> <p>Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーション接続が提供されない場合、エクスポート・ファイルは Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションのステージング領域に書き込まれます。</p> <p>ファイルは常に、汎用アプリケーション・タイプのステージング領域にエクスポートされます。ステージング領域から、「ファイル操作」ジョブ・タイプを使用してファイルをダウンロードできます(詳細は、ファイル操作ジョブ・タイプの使用を参照してください)。</p>

EPBCS メタデータ・ディメンションが CSV ファイルとして Corporate Planning アプリケーションにエクスポートされる、名前別のディメンションのエクスポート (EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータのサンプルを次に示します。

Job : EPBCS Dim Metadata ×

Type *
Export Dimension By Name (EDMCS) ▼

Connection
EDMCS ▼

Name
Corporate Planning (Planning Modules) ▼

Title ✎
EPBCS Dim Metadata

Sequence
1 ▼ ▲

Dimension Name
Entity

File Name
Entity.csv

EDMCS Application Connection
Production

名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプの使用

名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプを使用すると、特定の Oracle Enterprise Data Management Cloud ディメンションおよびロケーションのマッピング・ルールをステージング領域のファイルまたは接続で定義されているターゲット環境にエクスポートできます。

名前別のディメンション・マッピングは、カンマ区切りテキスト・ファイル(CSV)にのみエクスポートできます。ディメンション・マッピングをエクスポートできるアプリケーション・タイプのリストは、アプリケーション・タイプの理解を参照してください。

ファイルはデータ交換の *inbox* フォルダにエクスポートされるため、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションにエクスポートされたマッピングは、データ統合内で「明示」マッピングとしてインポートできます。パイプラインで「マッピングのインポート」ジョブ・タイプを使用して、インポートを実行できます。詳細は、「[マッピングのインポート](#)」ジョブ・タイプの使用を参照してください。

名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-11 名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ

名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ	説明
接続	<p>パイプラインでこのジョブ・タイプに使用する Oracle Enterprise Data Management Cloud 接続を選択します。</p> <p>このジョブ・タイプは、リモート操作(非ローカル接続)でのみサポートされます。接続は「その他の Web サービス・プロバイダ」接続タイプとして定義する必要があります。</p> <p>接続内の URL の形式は、https://hostname.com/epm である必要があります。「epm」以外の接尾辞で終わる URL は正しく機能しません。</p> <p>新しい Oracle Enterprise Data Management Cloud 接続を作成するには、<i>Financial Consolidation and Close の管理</i>の EPM Cloud 内での事前作成済の統合の追加を参照してください。</p>
名前	<p>Oracle Enterprise Data Management Cloud 接続のアプリケーションを選択します。</p> <p>ドロップダウンに移入されるアプリケーションのリストは、使用可能な Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションに基づきます(詳細は、<i>Enterprise Data Management Cloud の管理および操作のアプリケーション接続の作成</i>を参照してください)。</p> <p>簡単に見つけられるように、ドロップダウン・リストの各アプリケーションにはアプリケーション・タイプが付加されています。</p>
ディメンション名	<p>エクスポートする Oracle Enterprise Data Management Cloud ディメンション・マッピングの名前を指定します。</p> <p>ディメンションは、各ディメンションの CSV ファイルにエクスポートできます。</p>
ファイル名	<p>ディメンション・マッピングをエクスポートするターゲット・ファイル名を CSV 拡張子付きで指定します(例: mappings.csv)。</p> <p>この場合、「ファイルのダウンロード」操作を使用して、Oracle Enterprise Data Management Cloud ステージング領域からローカルの <i>inbox</i> フォルダにファイルをダウンロードできます。ファイル操作ジョブ・タイプの使用を参照してください。</p>
EDMCS マッピング・ロケーション	<p>マッピング・ルールをエクスポートする Oracle Enterprise Data Management Cloud のロケーションを指定します。</p>

Table 12-11 (Cont.) 名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ

名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータ	説明
EDMCS アプリケーション接続	<p>オプション Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションで定義されているアプリケーション接続名を指定します。</p> <p>アプリケーション接続は、汎用アプリケーション・タイプではサポートされておらず、使用できません。</p> <p>指定された場合、エクスポート・ファイルはターゲット環境にエクスポートされます(たとえば、EPM Cloud アプリケーションの <i>inbox</i>)。</p> <p>Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーション接続が提供されない場合、エクスポート・ファイルは Oracle Enterprise Data Management Cloud アプリケーションのステージング領域に書き込まれます。</p> <p>ファイルは常に、汎用アプリケーション・タイプのステージング領域にエクスポートされます。この場合、「ファイル操作」ジョブ・タイプを使用して、ステージング領域からファイルをダウンロードできます(詳細は、ファイル操作ジョブ・タイプの使用を参照してください。)</p>

名前別のディメンション・マッピングのエクスポート(EDMCS)ジョブ・タイプのパラメータのサンプルを次に示します。このサンプルでは、「勘定科目」ディメンション名が **Account.csv** ファイルにエクスポートされ、**Fusion US-Plan** ロケーションにエクスポートされます。

Job : EPBCS Member Mapping ✕

Type *
 Export Dimension Mapping By Name (EDM... ▼

Connection
 EDMCS ▼

Name
 Corporate Planning (Planning Modules) ▼

Title ✎
 EPBCS Member Mapping

Sequence
 3 ▼ ▲

Dimension Name
 Account

File Name
 Account.csv

EDMCS Mapping Location
 Fusion US-Plan

EDMCS Application Connection
 Production

「マッピングのエクспорт」ジョブ・タイプの使用

パイプラインで「マッピングのエクспорт」ジョブ・タイプを使用すると、メンバー・マッピングを.CSV または.TXT ファイル形式にエクспортできます。

「マッピングのエクспорт」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものがあります:

Table 12-12 「マッピングのエクспорт」ジョブ・タイプのパラメータ

「マッピングのエクспорт」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
名前	データ統合でメンバー・マッピングがエクспортされるロケーションの名前を選択します。メンバー・マッピングはデータ統合のロケーションに固有で、選択された接続(「ローカル」または「リモート」)に基づきます。
ディメンション名	エクспортする特定のディメンションのディメンション名(ACCOUNT など)を指定するか、すべてのディメンションをインポートする場合は ALL を指定します。

Table 12-12 (Cont.) 「マッピングのエクスポート」ジョブ・タイプのパラメータ

「マッピングのエクスポート」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ファイル名	マッピングをエクスポートする対象のファイルおよびパスを指定します。 ファイル形式は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> • .CSV • .TXT • Excel (.XLS または .XLSX) ファイル名を指定する場合は、ファイル・パスに outbox を含めます(たとえば、outbox/BESSAPPJan-06.csv)

「マッピングのエクスポート」ジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します。このサンプルでは、FCCSAPP1_ImpExp_Maps ロケーションにある「エンティティ」ディメンションが、テキスト・ファイルとして outbox にロードされます。

Job : FCCSAPP1_ImpExp_Maps ✕

Type *
Export Mapping ▼

Connection
Local ▼

Name
FCCSAPP1_ImpExp_Maps ▼

Title *
FCCSAPP1_ImpExp_Maps

Sequence
1 ▼ ▲

Dimension Name
Entity

File Name
outbox/ENT.txt

「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプの使用

「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプを使用して、.csv (カンマ区切り)または.txt (タブ区切りまたは他の区切り文字)形式でメタデータをフラット・ファイルにエクスポートします。

アーティファクトごとにエクスポート・ファイル(ファイル・タイプに応じて.csv または.txt)が作成され、すべてのエクスポート・ファイルが 1 つの ZIP ファイルに統合されます。

Note:

ファイルをインポート・ファイルとして使用する場合(たとえば、別のアプリケーションにメタデータをインポートする場合は、ZIP ファイルから.csv または.txt ファイルを抽出する必要があります)。

「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-13 「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプのパラメータと説明

「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプのパラメータ	パラメータ
ファイル名	メタデータのエクスポート先のファイルの名前を指定します。 ファイル名を指定しない場合、デフォルト名は、 Planning ジョブ名に ZIP 拡張子が付いたものです。 ファイル出力は、このパラメータで指定したファイル名拡張子に関係なく常に ZIP 形式となり、デフォルトのダウンロード場所からローカル・コンピュータにダウンロードできます。

「メタデータのエクスポート」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : Union+HED ✕

Type *
Export Metadata ▼

Connection
Local ▼

Name
Union+HED ▼

Title *
Union+HED

Sequence
1 ▼ ▲

File Name
123Union_HED.zip

ファイル操作ジョブ・タイプの使用

ファイル操作ジョブ・タイプを使用して、実行時に次の操作を実行します:

- ファイルのコピー(ローカル接続を使用)

- ファイルの削除(ローカル接続を使用)
- ファイルの移動(ローカル接続を使用)
- ファイルの解凍(ローカル接続を使用)
- ファイルのアップロード(リモート接続を使用)
- ファイルのダウンロード(リモート接続を使用)

ファイル操作ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-14 ファイル操作ジョブ・タイプのパラメータ

ファイル操作ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ファイル操作	<p>実行時に実行するファイル操作のタイプを選択します:</p> <p>オプション・タイプ:</p> <ul style="list-style-type: none"> • コピー—「コピー」ファイル操作では、ソース・ディレクトリからターゲット・ディレクトリにファイルがコピーされ、元のファイルは、ターゲット・ディレクトリへのコピー操作後にソース・ディレクトリに保持されます。ローカル接続が必要です。 • 削除—「削除」ファイル操作は、ソース・ディレクトリからファイルを削除します。ローカル接続が必要です。 • 移動—「移動」ファイル操作では、ソース・ディレクトリからターゲット・ディレクトリにファイルが移動されますが、移動されたファイルは、ターゲット・ディレクトリへの移動操作後にソース・ディレクトリに保持されません。ローカル接続が必要です。 • ファイルの解凍。ローカル接続が必要です。 • アップロード—ローカル Oracle Enterprise Performance Management Cloud サーバーから別の EPM Cloud サーバーにファイルをコピーします(ローカル EPM Cloud サーバーは、パイプライン・プロセスが実行されるサーバーです。)リモート接続が必要です。 • ダウンロード—リモート EPM Cloud サーバーからローカル EPM Cloud にファイルをコピーします(ローカル EPM Cloud サーバーは、パイプライン・プロセスが実行されるサーバーです。)リモート接続が必要です。
ソース・ディレクトリ	<p>ファイルをコピー、移動、解凍、アップロードまたはダウンロードする元のソース・ディレクトリを指定します。</p> <p>「削除」ファイル操作では、ソース・ディレクトリを指定する必要があります。</p> <p>ファイルをダウンロードするときには、ソース・ディレクトリとソース・ファイル名によって、リモート・ソース・ディレクトリとファイル名が識別されます。</p> <p>ファイルをアップロードするときには、ソース・ディレクトリとファイルによって、ローカルにアップロードするファイルのある場所が識別されます。</p>

Table 12-14 (Cont.) ファイル操作ジョブ・タイプのパラメータ

ファイル操作ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ソース・ファイル名	コピー、移動、解凍、アップロードまたはダウンロードするファイルのソース・ファイル名を指定します。
ターゲット・ディレクトリ	ファイルのコピー先のターゲット・ディレクトリを指定します。ターゲット・ディレクトリには、inbox、openbatch、openbatchml および epminbox を指定できます。 zip ファイルには、サブディレクトリを 1 レベルのみ含めることができます。 ファイルをダウンロードするときには、ターゲット・ディレクトリとファイル名によって、ファイルをローカルでダウンロードする宛先の場所が識別されます。 ファイルをアップロードするときには、ターゲット・ディレクトリとターゲット・ファイル名によって、リモート・ターゲット・ディレクトリとファイル名が識別されます。
ターゲット・ファイル名	コピー、移動、解凍、アップロードまたはダウンロードされたファイルのターゲット・ファイル名を指定します。 解凍ファイル操作には、ターゲット・ファイル名は必要ありません。

inbox ソース・ディレクトリから openbatch ターゲット・ディレクトリにファイルを解凍するために使用されるファイル操作ジョブ・タイプのパラメータのサンプルを次に示します:

Job : unziplevel ×

Type *
File Operations ▼

Connection
Local ▼

Name ▼

Title *
unziplevel

Sequence
1 ▼ ▲

File Operation *
Unzip ▼

Source Directory *
inbox ▼

Source File Name
Level1MultDMMDExp.zip

Target Directory *
openbatch ▼

Target File Name

inbox ソース・ディレクトリから openbatch ターゲット・ディレクトリに **OBT/MultDMMDExp.zip** ファイルをコピーするために使用されるファイル操作ジョブ・タイプのパラメータのサンプルを次に示します。

Job : Copy 2 ×

Type *
File Operations ▼

Connection
Local ▼

Name ▼

Title *
Copy 2

Sequence
2 ▼ ▲

File Operation *
Copy ▼

Source Directory *
openbatchml ▼

Source File Name
OBT/MultDMMDExp.zip

Target Directory *
inbox ▼

Target File Name
OBT/MultDMMDExp.zip

inbox ソース・ディレクトリから openbatch ターゲット・ディレクトリに **ABC.zip** ファイルを移動するために使用されるファイル操作ジョブ・タイプのパラメータのサンプルを次に示します:

Job : Move ✕

Type *
File Operations ▼

Connection
Local ▼

Name
▼

Title *
Move

Sequence
4 ▼ ▲

File Operation *
Move ▼

Source Directory *
inbox ▼

Source File Name
ABC.zip

Target Directory *
openbatch ▼

Target File Name
ABC.zip

ML11~MP_OB~OEP_Plan~Apr-17~Aug-17~RR.txt ファイルを epminbox ソース・ディレクトリから epminbox ターゲット・ディレクトリにダウンロードするために使用される「ファイル操作」ジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : DownloadRem ✕

Type *
File Operations ▼

Connection
EPBCS_REMOTE ▼

Name
▼

Title *
DownloadRem

Sequence
2 ▼ ▲

File Operation *
Download ▼

Source Directory *
epminbox ▼

Source File Name
ML11~MP_OB~OEP_Plan~Apr-17~Aug-17~RR.txt

Target Directory
epminbox ▼

Target File Name
Rem11~MP_OB~OEP_Plan~Apr-17~Aug-17~RR.txt

ML11~MP_OB~OEP_Plan~Apr-17~Aug-17~RR.txt ファイルを epminbox ソース・ディレクトリから epminbox ターゲット・ディレクトリにアップロードするために使用される「ファイル操作」ジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : UploadRem ×

Type *
File Operations

Connection
EPBCS_REMOTE

Name

Title *
UploadRem

Sequence
1

File Operation *
Upload

Source Directory *
openbatchml

Source File Name
11~MP_OB~OEP_Plan~Apr-17~Aug-17~RR.txt

Target Directory
epminbox

Target File Name
ML11~MP_OB~OEP_Plan~Apr-17~Aug-17~RR.txt

「マッピングのインポート」ジョブ・タイプの使用

「マッピングのインポート」ジョブ・タイプを使用すると、メンバー・マッピングを.CSV または.TXT ファイル形式からインポートできます。


「マッピングのインポート」ジョブ・タイプでは、ターゲット・メンバーに対する検証または検証なしオプションとともに、マージ・モードまたは置換モードもサポートします。

「マッピングのインポート」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものがあります:

Table 12-15 「マッピングのインポート」ジョブ・タイプのパラメータ

「マッピングのインポート」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
名前	データ統合でメンバー・マッピングがロードされる先のロケーションの名前を選択します。メンバー・マッピングはデータ統合のロケーションに固有で、選択された接続(「ローカル」または「リモート」)に基づきます。
ディメンション名	インポートする特定のディメンションのディメンション名(ACCOUNT など)を指定するか、すべてのディメンションをインポートする場合は ALL を指定します。

Table 12-15 (Cont.) 「マッピングのインポート」ジョブ・タイプのパラメータ

「マッピングのインポート」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ファイル名	マッピングのインポート元のファイルおよびパス。ファイル・フォーマットは、.CSV、.TXT、.XLS または.XLSX です。ファイルは、インポート前に、受信ボックスまたは受信ボックスのサブディレクトリのいずれかにアップロードされている必要があります。ファイル・パスに受信ボックス(inbox)を含めます(inbox/BESSAPPJan-06.csv など)
インポート・モード	<p>インポート・モードを指定します: 新規ルールを追加する、または既存ルールを置換する場合は MERGE、インポート前に以前のマッピング・ルールをクリアする場合は REPLACE</p> <p>使用可能なオプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • MERGE—新規ルールを追加するか、既存のルールを置換します。 • REPLACE—インポート前に以前のマッピング・ルールをクリアします。
検証モード	<p>検証モードを使用するかどうかを指定します。ターゲット・アプリケーションに対してターゲット・メンバーを検証する場合は、「はい」を指定します。</p> <p>検証を行わずにマッピング・ファイルをロードする場合は、「いいえ」を指定します。</p> <div data-bbox="1084 1157 1380 1444" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p> Note:</p> <p>検証モードが「はい」の場合、検証プロセスはリソースを大量に消費し、時間がかかります。</p> </div>

「マッピングのインポート」ジョブ・タイプ・パラメータのサンプルを次に示します。このサンプルでは、FCCSAPPI_ImpExp_Maps ロケーションにある「エンティティ」ディメンションが、テキスト・ファイルとして outbox にロードされます。

Job : FCCSAPP1_ImpExp_Maps ×

Type *
Import Mapping ▼

Connection
Local ▼

Name
FCCSAPP1_ImpExp_Maps ▼

Title ✎
FCCSAPP1_ImpExp_Maps

Sequence
2 ▼ ▲

Dimension Name
Entity

File Name
outbox/ENT.txt

Import Mode
Replace ▼

Validation Mode
No ▼

「メタデータのインポート」ジョブ・タイプの使用

「メタデータのインポート」ジョブ・タイプを使用して、カンマ区切り、タブ区切りまたは ZIP 形式でメタデータをフラット・ファイルからインポートします。

Note:

サーバーへのファイルのアップロードまたはコンピュータへのファイルのダウンロードの詳細は、*Planning* の管理の受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロードを参照してください。

Table 12-16 「メタデータのインポート」ジョブ・タイプのパラメータと説明

「メタデータのインポート」ジョブ・タイプのパラメータ	パラメータ
ファイル名のインポート	<p>メタデータのインポート元となる、カンマ区切り(CSV)、タブ区切り(TXT)または ZIP 形式のファイルの名前を指定します。</p> <p>指定した場合、ZIP ファイルの内容はジョブで定義されたファイル名よりも優先されます。ZIP ファイルには 1 つ以上の.csv ファイルが含まれている場合があります。ディメンションのメタデータが含まれるファイル名は、ジョブで定義されたインポート・ファイル名と一致するか、末尾が <code>_DIMENSIONNAME.csv</code> である必要があります。</p> <p>たとえば、<code>metadata_Entity.csv</code>、<code>metadata_HSP_Smart Lists.csv</code>、<code>metadata_Exchange Rates.csv</code> です。</p>
キューブのリフレッシュ	<p>アプリケーション・キューブをリフレッシュするには、「はい」を選択します。通常、アプリケーションにメタデータをインポートした後にキューブをリフレッシュします。</p> <p>キューブのリフレッシュ操作を完了するまでにかかる時間は、アプリケーション構造に対して行った変更やその変更がキューブに及ぼす影響によって変わります。たとえば、疎ブロック・ストレージ・キューブ・メンバーを更新した後のリフレッシュにはあまり時間がかかりませんが、密ブロック・ストレージ・キューブ・メンバーすなわち集約ストレージ・キューブ・メンバーを更新した後のキューブ・リフレッシュには、かなりの時間がかかることがあります。次回のメンテナンス・ウィンドウでアプリケーションがバックアップされる前に、キューブ・リフレッシュ操作を完了させる必要があります。</p>
エラー・ファイル名	<p>却下されたレコード(ある場合)をインポート操作中に記録する ZIP ファイルの名前を指定します。送信ボックスに同じ名前の ZIP ファイルがある場合は上書きされます。</p>

「メタデータのインポート」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : MDimp_HED ✕

Type *
 Import Metadata ▼

Connection
 Local ▼

Name
 MDimp_HED ▼

Title *
 MDimp_HED

Sequence
 1 ▼ ▲

Import File Name
 DMJob_Metadata_Highest Education Degree.zip

Refresh Cube
 Yes ▼

Error File Name
 MDHED_error

「統合」ジョブ・タイプの使用

「統合」ジョブ・タイプを使用して、統合をパイプラインに追加し、実行します。Enterprise Resource Planning (ERP)ソース・システムからメタデータとデータを抽出するか(直接統合)、ファイルからデータを抽出する、データ統合で作成された統合を追加した後、それを Enterprise Performance Management (EPM)ターゲット・アプリケーションにプッシュできます。

「統合」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:


Table 12-17 「統合」ジョブ・タイプのパラメータ

「統合」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
インポート・モード	オプション: 「インポート・モード」 ドロップダウンから、統合ジョブのインポート・モードを選択します。 デフォルトでは、\$IMPORTMODEパラメータは、インポート・モードについてグローバル変数で定義された変数パラメータの値を使用します。ただし、ジョブごとに異なるインポート・モードを選択できます。たとえば、一方の統合でメタデータをロードし、別の統合でデータのみをロードする場合、2つのジョブ間で異なるインポート・モードを指定できます。

Table 12-17 (Cont.) 「統合」ジョブ・タイプのパラメータ


「統合」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
エクスポート・モード	<p>オプション: 「エクスポート・モード」 ドロップダウンから、統合ジョブのエクスポート・モードを選択します。</p> <p>デフォルトでは、<code>\$EXPORTMODE</code> パラメータは、エクスポート・モードについてグローバル変数で定義された変数パラメータの値を使用します。ただし、ジョブごとに異なるエクスポート・モードを選択できます。たとえば、一方の統合でメタデータをロードし、別の統合でデータのみをロードする場合、2つのジョブ間で異なるエクスポート・モードを指定できます。</p>
開始期間	<p>オプション 「開始期間」 ドロップダウンから、統合ジョブの開始期間を選択します。</p> <p>デフォルトでは、<code>\$STARTPERIOD</code> パラメータは、開始期間についてグローバル変数で定義された変数パラメータの値を使用します。ただし、ジョブごとに異なる開始期間を選択できます。たとえば、パイプラインでメタデータをロードする場合、ジョブで「開始期間」を <code>BegBalance</code> に設定できます。</p>
終了期間	<p>オプション 「終了期間」 ドロップダウンから、統合ジョブの終了期間を選択します。</p> <p>デフォルトでは、<code>\$STARTPERIOD</code> パラメータは、開始期間についてグローバル変数で定義された変数パラメータの値を使用します。ただし、ジョブごとに異なる開始期間を選択できます。たとえば、パイプラインでメタデータをロードする場合、ジョブで「終了期間」を <code>EndBalance</code> に設定できます。</p>

Table 12-17 (Cont.) 「統合」ジョブ・タイプのパラメータ

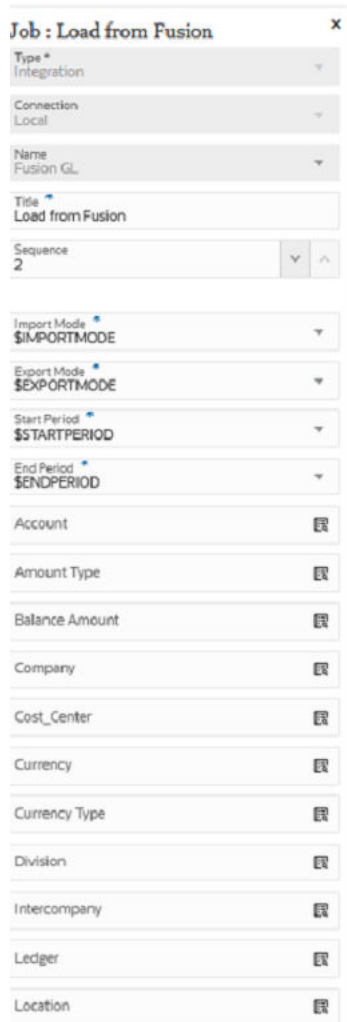
「統合」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
ファイル名	<p>統合についてファイル・プロファイルが選択されていない場合、「ファイル名」で、実行時に使用するファイル名を指定します。</p> <p><input type="checkbox"/> をクリックしてファイル・ブラウザを起動し、ターゲット・ファイルに移動します。</p> <div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p> Note:</p> <p>ここで指定したディレクトリは、統合定義のオプションのセクションで指定したディレクトリに追加されます。統合定義のディレクトリを基準にした相対ディレクトリのみを指定してください。</p> <p>たとえば、統合定義で <code>inbox</code> を指定した場合、ここには location/filename のみを含めます。ディレクトリを指定していない場合は、<code>inbox/location/filename</code> を含めません。</p> <p>パイプライン・ジョブでリモート・サーバーでの統合が指定されている場合は、ローカル・サーバーのパイプライン・ジョブ・パラメータでファイルを指定できます。このファイルがリモート・サーバーにコピーされ、リモート・サーバーでの統合の入力ファイルとして使用されます。</p> <p>統合オプションの詳細は、ファイルベース・オプションの定義を参照してください。</p> </div>

ファイルベース統合ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : DelimitedFileDL ×

Type*	Integration	▼
Connection	Local	▼
Name	DelimitedFileDL	▼
Title *	DelimitedFileDL	
Sequence	1	▼ ▲
Import Mode *	\$IMPORTMODE ▼	
Export Mode *	\$EXPORTMODE ▼	
Start Period *	\$STARTPERIOD ▼	
End Period *	\$ENDPERIOD ▼	
File Name		

Fusion からのロード統合ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:



Job : Load from Fusion

Type* Integration

Connection Local

Name Fusion GL

Title Load from Fusion

Sequence 2

Import Mode \$IMPORTMODE

Export Mode \$EXPORTMODE

Start Period \$STARTPERIOD

End Period \$ENDPERIOD

Account E

Amount Type E

Balance Amount E

Company E

Cost_Center E

Currency E

Currency Type E

Division E

Intercompany E

Ledger E

Location E

「オープン・バッチ」ジョブ・タイプの使用

「オープン・バッチ」ジョブ・タイプを使用して、次のタイプのオープン・バッチをパイプラインに追加できます:

- [「オープン・バッチ - ファイル」ジョブ・タイプの使用](#)
- [「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブ・タイプの使用](#)
- [「オープン・バッチ - 名前」ジョブ・タイプの使用](#)

オープン・バッチを使用すると、次のことができます:

- バッチ内で1つ以上のロード統合を組み合わせ、一度に実行します。
- バッチ処理でのジョブ実行をシリアル・モードまたは並列モードで行います。
- バッチのパラメータを定義します。

「オープン・バッチ - ファイル」ジョブ・タイプの使用

「オープン・バッチ - ファイル」ジョブ・タイプを使用して、複数のファイルをバッチで Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードし、実行します。ファイル名形式によって、データをロードする POV が特定されます。

「オープン・バッチ - ファイル」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-18 「オープン・バッチ - ファイル」ジョブのパラメータ

「オープン・バッチ - ファイル」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
オープン・バッチ・ディレクトリ	インポートされるファイルのコピー先となる、inbox\batches\openbatch サブディレクトリの下フォルダを指定します。 このフィールドが空白または null の場合、inbox\batches\openbatch 内のすべてのファイルが処理されます。
ファイル名セパレータ	バッチ・ファイル名の 5 つのセグメントを区切る際に使用する文字を選択します。 次のオプションがあります: <ul style="list-style-type: none"> • ~ • @ • - • ;
実行モード	「 実行モード 」で、次のものを選択します <ul style="list-style-type: none"> • シリアル—シリアル実行モードでは、ファイルは順に処理され、1 つのファイルのプロセスが完了するまで、次のファイルのプロセスは開始されません。 • パラレル—パラレル実行モードでは、ファイルが同時に処理されます。
パラレル・ジョブの数	パラレル実行モードで処理できる「オープン・バッチ - ファイル」ジョブの最大数を指定します。
統合の自動作成	ファイルベース統合について統合を自動的に作成するには、「 はい 」を選択します。 データ統合が統合名を割り当てるとき、「Location_Category」という名前の統合が存在するかどうかを確認します。この名前が存在しない場合、データ統合は、次のファイル命名規則を使用して統合を作成します: <ul style="list-style-type: none"> • 統合名—Location_Category • 説明 - 自動的に作成されるデータ・ルール • カテゴリ — カテゴリ • ファイル名 — Null • モード — 置換
プラン・タイプ	ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。 カスタム・キューブを個別のアプリケーションとして登録することもでき、登録できるカスタム・キューブ・アプリケーションの数に制限はありません。

Table 12-18 (Cont.) 「オープン・バッチ - ファイル」 ジョブのパラメータ

「オープン・バッチ - ファイル」 ジョブ・タイプのパラメータ	説明
複数期間	<p>複数期間のファイルベースのデータ・ソースを読み取り、ファイル名に応じて適切な POV にインポートするには、「はい」を選択します。</p> <p>複数期間バッチ・ファイルの名前は、次に示すセグメントで次の順序で構成されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • ファイル ID - ロードの順序を制御するためのフリーフォームのフィールドです。バッチ・ファイルは、ファイル名のアルファベット順にロードされます。 • ロケーション • カテゴリ • 開始期間 • 終了期間 • ロード方法 - 2 文字のアイテム (文字 1 = 追加または置換、文字 2 = ターゲットの追加または置換)。有効な値は A と R です。 <p>複数期間のオープン・バッチのファイル名の例:</p> <p>a_Texas_Actual_Jan-2023_Jun-2023_RR.txt (Loc, Cat, Start Period, End Period)</p> <p>および</p> <p>b_TexasDR1_Jan-2023_Jun-2023_RR.txt (Data Rule, Start Period, End Period)</p> <p>複数期間のファイルベースのデータ・ソースを含めずに、ファイル名に応じて適切な POV にインポートするには、「いいえ」を選択します。</p>

「オープン・バッチ - ファイル」 ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : OB1 ×

Type *
Open Batch - File ▼

Connection
Local ▼

Name ▼

Title *
OB1

Sequence
1 ▼ ▲

Open Batch Directory
openbatchml 📁

File Name Separator *
~ ▼

Execution Mode *
Serial ▼

Number of Parallel Jobs

Auto Create Integration
Yes ▼

Plan Type
Plan1

Multi Period
Yes ▼

「オープン・バッチ - ロケーション」 ジョブ・タイプの使用

「オープン・バッチ - ロケーション」 ジョブ・タイプを使用して、特定のロケーションに割り当てられたすべての統合ジョブを追加し、実行します。

Note:

データ統合が統合名を割り当てるとき、"Location_Category"という名前の統合が存在するかどうかを確認します。この名前が存在しない場合、データ統合は、次のファイル命名規則を使用して統合を作成します:

- 統合名—Location_Category
- 説明—自動作成された統合
- カテゴリ — カテゴリ
- ファイル名 — Null
- モード — 置換

「オープン・バッチ - ロケーション」 ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-19 「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブ・タイプのパラメータ

「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
場所名	「 場所名 」ドロップダウンで、「オープン・バッチ - ロケーション」に含めるジョブのロケーションを選択します。
実行モード	「 実行モード 」で、次のものを選択します <ul style="list-style-type: none">シリアル—シリアル実行モードでは、ファイルは順に処理され、1つのファイルのプロセスが完了するまで、次のファイルのプロセスは開始されません。パラレル—パラレル実行モードでは、ファイルが同時に処理されます。
パラレル・ジョブの数	パラレル実行モードで処理できる「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブの最大数を指定します。
インポート・モード	「 インポート・モード 」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブのインポート・モードを選択します。
エクスポート・モード	「 エクスポート・モード 」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブのエクスポート・モードを選択します。
開始期間	「 開始期間 」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブの開始期間を選択します。
終了期間	「 終了期間 」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブの終了期間を選択します。

「オープン・バッチ - ロケーション」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : OBLocation ×

Type*
Open Batch - Location

Connection
Local

Name

Title *
OBLocation

Sequence
2

Location Name *
FileSumDrill

Execution Mode *
Serial

Number of Parallel Jobs

Import Mode
Replace

Export ` Mode
Replace

Start Period
Jan-16

End Period
Jan-16

「オープン・バッチ - 名前」 ジョブ・タイプの使用

「オープン・バッチ - 名前」ジョブ・タイプを使用して、マスキング(ワイルドカード*および?)文字を含む統合名と一致するすべての統合ジョブを追加し、実行します。

「オープン・バッチ - 名前」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-20 「オープン・バッチ - 名前」 ジョブ・タイプのパラメータ

「オープン・バッチ - 名前」 ジョブ・タイプのパラメータ	説明
統合名	<p>実行する統合ジョブと一致する、マスキング文字を含む統合名を指定します。</p> <p>?ワイルドカードでは、任意の 1 文字と一致する統合名が実行されます。*文字では、任意の一連の文字と一致する統合名が実行されます。たとえば、統合名 DL?ABC*を指定した場合、DL_ABC123、DL-ABC456666 などという名前のすべての統合が実行されます。</p>
実行モード	<p>「実行モード」 で、次のものを選択します</p> <ul style="list-style-type: none"> シリアル—シリアル実行モードでは、ファイルは順に処理され、1 つのファイルのプロセスが完了するまで、次のファイルのプロセスは開始されません。 パラレル—パラレル実行モードでは、ファイルが同時に処理されます。

Table 12-20 (Cont.) 「オープン・バッチ - 名前」ジョブ・タイプのパラメータ

「オープン・バッチ - 名前」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
パラレル・ジョブの数	パラレル実行モードで処理できる「オープン・バッチ - 名前」ジョブの最大数を指定します。
インポート・モード	「インポート・モード」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - 名前」ジョブのインポート・モードを選択します。
エクスポート・モード	「エクスポート・モード」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - 名前」ジョブのエクスポート・モードを選択します。
開始期間	「開始期間」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - 名前」ジョブの開始期間を選択します。
終了期間	「終了期間」ドロップダウンから、「オープン・バッチ - 名前」ジョブの終了期間を選択します。

「オープン・バッチ - 名前」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを示します:

Job : OBName ×

Name ▼

Title *
OBName

Sequence ▼ ▲
1

Integration Name
Fil*

Execution Mode *
Parallel ▼

Number of Parallel Jobs
2

Import Mode *
Replace ▼

Export Mode *
Merge ▼

Start Period
Jun-18 ▼

End Period
Jun-18 ▼

「プラン・タイプ・マップ」ジョブ・タイプの使用

「プラン・タイプ・マップ」ジョブ・タイプを使用して、プラン・タイプ・マップ・タイプの Planning ジョブで指定された設定に基づいて、ブロック/集約ストレージ・キュー

ープから集約ストレージ・キューブへ、またはブロック/集約ストレージ・キューブから別のブロック/集約ストレージ・キューブへデータをコピーします。

「プラン・タイプ・マップ」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-21 「プラン・タイプ・マップ」ジョブ・タイプのパラメータと説明

「プラン・タイプ・マップ」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
名前	アプリケーションで定義された plan type map タイプのジョブ名を選択します。
データのクリア	データをコピーする前にターゲット・データベース内のデータを削除する必要があるかどうかを指定します。 データをコピーする前にデータを削除するには、「はい」を選択します。 データをコピーする前にデータを保持するには、「いいえ」を選択します

「プラン・タイプ・マップ」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : OWP_Compensation Data for Reporting

Type *
Plan Type Map

Connection
Local

Name *
OWP_Compensation Data for Reporting

Title *
OWP_Compensation Data for Reporting

Sequence
2

Clear Data
No


「代替変数の設定」ジョブ・タイプの使用

代替変数は定期的に変化する情報のグローバルなプレースホルダとして機能します。たとえば、月が変わったときに、ジョブで月の値を手動で更新しなくてもよいように、現在の月メンバーを代替変数 CurMnth に設定できます。アプリケーション内で代替変数を作成し、値を割り当てます。これらの代替変数は、フォームのメンバーを選択するときにアプリケーションで使用できます。

詳細は、*Planning* の管理の代替変数についてを参照してください。

「代替変数の設定」ジョブ・タイプのパラメータには、次のものが含まれます:

Table 12-22 「代替変数の設定」ジョブ・タイプのパラメータ

「代替変数の設定」ジョブ・タイプのパラメータ	説明
プラン・タイプ	ターゲット・システムのプラン・タイプ(キューブ)を入力します。「すべてのキューブ」をプラン・タイプとして使用する場合は、「プラン・タイプ」(キューブ名)を空白のままにします。
代替変数名	代替変数の名前を入力します。 名前には 80 文字まで入力できます。
代替変数値	<p>代替変数の値(255 文字まで)を入力します。</p> <p>代替変数を定義する際に、FY16:FY18 のように値の範囲を指定できます。</p> <p>基本メンバーと親メンバーの代替変数範囲を定義できます。基本メンバーの場合は、単一のコロンの(:)または二重コロンの(::)を区切り文字として使用できます(例: SunEnT 110::111)。一方、親メンバーの場合は、単一のコロンの(:)のみ使用できます。</p> <p>代替変数がブロック・ストレージ・キューブのデータ・エクスポート・ジョブ定義で使用され、メンバー名が数字のみの場合、「値」フィールドでは、メンバー名を二重引用符で囲む必要があります(例: "1100", "000")。英数字のメンバー名に対する二重引用符は不要です(例: a1110)。</p> <p>ただし、この変数が集約ストレージ・キューブのデータ・エクスポート・ジョブ定義で選択される場合、「値」フィールドでメンバー名を二重引用符で囲むことはできません。</p> <p>両方のタイプのキューブに対して定義されたデータ・エクスポート・ジョブの代替変数で同じメンバー名を使用するには、2つの異なる代替変数(引用符があるものとないもの)を定義します。</p> <div style="border-left: 2px solid #0070C0; padding-left: 10px; margin-top: 10px;"> <p> Note:</p> <p>「代替変数値」でパラメータ値として使用する代替変数は、すべてのキューブについて定義する必要があります。</p> </div>

「代替変数の設定」ジョブ・タイプのジョブ・パラメータのサンプルを次に示します:

Job : RemSetSub ×

Type *	Set Substitution Variable
Connection	EPBCS_REMOTE
Name	
Title *	RemSetSub
Sequence	3
Plan Type	OEP_WFSC
Substitution Variable Name	OEP_YearRange
Substitution Variable Value	FY17:FY21

ランタイム変数の編集


変数ページでは、パイプライン・ジョブのランタイム・パラメータとして使用できる一連の変数を選択できます。パイプラインを実行するとき、これらの変数の入力値が即時利用可能な一連の値またはランタイム値として提供され、ここからのパラメータ値を個々のジョブに使用できます。変数は、「期間」、「インポート・モード」、「エクスポート・モード」などの事前定義済のタイプにすることができます。

カスタム変数パラメータをジョブ・パラメータとして追加することもできます。たとえば、開始期間について代替変数を使用して静的値を渡す場合、変数タイプを「テキスト」に変更し、&ThisMonth#&ThisYear など、代替変数をパラメータ(RESI API で受け入れられるもの)として指定します。(代替変数は、先頭にアンパサンド(&)が 1 つまたは 2 つ付いたユーザー変数名です)。

デフォルトのランタイム変数には、次のものが含まれます:

- 開始期間
- 終了期間
- インポート・モード
- エクスポート・モード
- メールの送信
- 送信先
- ログの添付

パイプラインのランタイム変数を変更するには:

1. データ統合ホーム・ページから、パイプラインの右側にある  をクリックし、「**パイプライン詳細**」を選択します。
2. **パイプライン**・ページから、「**変数**」タブを選択します。
3. 変更する変数を選択します。
4. 「**変数名**」で、事前定義済の変数名を追加または変更するには、名前を指定します。
変数名は、ジョブ・パラメータとして参照できます。名前には 20 文字まで使用でき、スペースを含めることはできません。
5. 「**表示名**」で、変数の表示プロンプト名を指定します。
6. 「**表示順**」で、変数の表示順を指定します。
7. パイプラインを実行するために変数の値が必要である場合は、「**必須**」を選択します。
8. 「**検証タイプ**」ドロップダウンから、変数を検証するために使用する値のタイプを選択します。

検証タイプには次のものが含まれます:

- リスト—LOV 問合せを使用し、バインド値が必要です。
- テキスト—フリー・フォーム・テキスト・フィールド
- ファイル—ファイル名。ファイル・ブラウザ・ウィンドウを使用して、ファイルを選択できます。
- カスタム・リスト—ユーザー定義の値リスト

この検証タイプを使用するには、「検証のパラメータ」ウィンドウで値リストを指定します。次のように、値は Value,Label 形式で指定する必要があり、それぞれの行は改行文字で終了する必要があります

```
M,Month  
Q,Quarter  
Y,Year
```

- 参照—使用可能な参照値の使用。
9. 「**検証のパラメータ**」ドロップダウンから、検証タイプに基づいて変数の事前定義済パラメータを選択します。

たとえば、リスト検証タイプに基づいて、次のような開始期間変数のパラメータを選択できます:

- パイプライン・ステータス
- パイプライン・エクスポート・モード LOV 問合せ
- グローバル期間名 LOV 問合せ
- ロケーション、セキュリティなし LOV 問合せ
- 試算表の変換済のターゲット・エンティティ/勘定科目問合せ別
- プロセス・モニター問合せ


10. 「**デフォルト値**」から、変数のデフォルト値を選択します。

デフォルト値は、静的値または Planning 代替変数にすることができます。


11. 「保存」をクリックします。

カスタム変数のパラメータの追加

パイプラインのグローバル変数を操作するとき、ジョブの入力として使用するカスタム変数を追加できます。

1. データ統合ホーム・ページから、パイプラインの右側にある  をクリックし、「パイプライン詳細」を選択します。
2. **パイプライン**・ページから、「変数」タブをクリックします。
3. カスタム・リストをパラメータとして追加する変数を選択します。
4. 「検証タイプ」から、ファイルやカスタム・リストなど、検証のタイプを選択します。
5. 「検証のパラメータ」から、job.custom 変数に使用するパラメータを指定します。

たとえば、シナリオ名をビジネス・ルールに渡し、シナリオ名を変数として受け入れるとします。これを行うには、「検証タイプ」から「カスタム・リスト」を選択します。次に、

「検証のパラメータ」で、 をクリックし、「カスタム・リストの編集」でパラメータを指定して、「OK」をクリックします。

Actual, Actual
Plan, Plan
Forecast, Forecast




代替変数を入力パラメータとして追加

パイプライン変数で代替変数を入力値として使用できます。既存の代替変数を使用することも、新しい代替変数を作成することもできます。代替変数は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud または Oracle Essbase データ・ソースで定義され、定期的に変化する特定のメンバーのプレースホルダとして機能する変数です。

代替変数を操作するときの考慮事項:

- 代替変数を入力値として使用するには、すべてのキューブについて定義する必要があります。
- 既存の代替変数については、「検証タイプ」を「テキスト」に変更します。新しい代替変数については、「検証タイプ」を「テキスト」として割り当てます。

新しいパイプライン変数を追加し、パイプライン変数の入力値を代替変数として設定するには:

1. データ統合ホーム・ページから、パイプラインの右側にある  をクリックし、「パイプライン詳細」を選択します。
2. **パイプライン**・ページから、 をクリックします
3. 「変数」タブをクリックします。
4. 新しい代替変数を入力変数として追加するには、 をクリックします
変数エントリ・フィールドの空白行が表示されます。

- 変数リストの最下部までスクロールし、代替変数について次の値を追加します:
 - 「**変数名**」で、代替変数名を指定します。
変数名は、ジョブ・パラメータとして参照できます。名前には 20 文字まで使用でき、スペースを含めることはできません。
 - 「**表示名**」で、パイプライン変数の表示プロンプト名を指定します。
 - 「**表示順**」で、代替変数の表示順を指定します。
 - パイプラインを実行するために代替変数の値が必要である場合は、「**必須**」を選択します。
 - 「**検証タイプ**」ドロップダウンから、「**テキスト**」を選択します。
- 「**デフォルト値**」に、デフォルト値として `&<Substitution Variable Name>` を入力します(255 文字まで)。

現在の月(1 月)を表す代替変数 `CurrMonth` を使用でき、それをメンバー選択としてレポートに挿入できます。変数と文字列値を作成して、データ・ソースで変数を作成します。その後、データ・ソースで変数の値をいつでも変更できます。

代替変数には、接頭辞として "&" が付きます(例: `&CurrMonth`)。

次の例では、代替変数 "MYPER" は `&CurMonth` および `&CurYr` 値を示します。

Edit Pipeline : SubVarUse x

Details Variables

Variable Name*	Display Name*	Display Sequence*	Required	Validation Type*	Validation Parameters	Default Value
STARTPERIOD	Start Period	1	<input type="checkbox"/>	Text		&OEP_CurMnth#&OEP_CurYr
ENDPERIOD	End Period	2	<input type="checkbox"/>	Text		&OEP_CurMnth#&OEP_CurYr
IMPORTMODE	Import Mode	3	<input type="checkbox"/>	Lookup	DATA_LOAD_IMPORT_MODES	Replace
EXPORTMODE	Export Mode	4	<input type="checkbox"/>	List	Pipeline Export Mode LOV Query	Merge
SEND_MAIL	Send Mail	5	<input type="checkbox"/>	Lookup	MAIL_CONDITION	No
SEND_TO	Send To	6	<input type="checkbox"/>	Text		
ATTACH_LOGS	Attach Logs	7	<input type="checkbox"/>	Lookup	YES_NO	No
MYPER	My Period	8	<input type="checkbox"/>	Text		&OEP_CurMnth#&OEP_CurYr

- 「**保存**」をクリックします。


パイプラインの実行

パイプラインを実行して、パイプラインのステージ内の一連のジョブの実行、統合プロセスの実行、電子メールの送信およびログの添付を行います。実行プロセス中に、ステージはシリアルに実行され、それぞれのステージに割り当てられたジョブは、ジョブがシリアルまたはパラレルに配置された順序で実行されます。

パイプラインが実行中のときには、それぞれのステージ・カードにステータスが表示されます。また、実行中のパイプラインのステータスを「プロセスの詳細」で確認することもできます。パイプラインに含まれているそれぞれのジョブは別々に送信され、個別のジョブ・ログが「プロセスの詳細」に作成されます。


パイプラインを実行するには:


- 「**データ統合**」ホーム・ページから、パイプラインを選択し、▶ をクリックします。

それぞれのパイプラインは、「**データ統合**」ホーム・ページ上で  で識別されます。パイプラインを選択し、▶ をクリックすることによって、パイプラインを実行できます。

パイプライン・ページで ▶ をクリックすることもできます。

2. パイプラインの実行ページで、変数を選択し、「実行」をクリックします。


ジョブが正常に実行されると、ジョブ・カードに  チェックマークが表示されます。

ジョブのログ・ファイルをダウンロードするには、ステージ・カードからジョブを選択し、 をクリックします。

パイプラインまたはパイプライン・ページでパイプラインのステータスを確認できます。パイプラインでは、それぞれのジョブ・カードにステータスが表示されます。これにより、パイプラインの実行ステータスの全体的なスナップショット・ビューが提供されます。ステータス・アイコンをクリックして、それぞれのジョブのログ・ファイルをダウンロードできます。

Note:

ステージのログはありません。

ジョブが失敗した場合は、 が表示されます。

パイプラインが実行されるたびに、次に示すような「プロセスの詳細」の個別のジョブ・ログが生成されます。

```

2023-05-18 19:35:39,456 INFO [AIF]: ----- Start Stage : Load Dimension Members -----
2023-05-18 19:35:39,456 INFO [AIF]: Executing Stage : Stage 1, Mode : Serial
2023-05-18 19:35:39,457 INFO [AIF]: Executing pipeline job:FusionEntity, Type:integration
2023-05-18 19:35:39,457 INFO [AIF]: Job Parameters :
2023-05-18 19:35:39,459 INFO [AIF]: [jobType = integration, jobName = FusionEntity, jobId = 10886, jobSeq = 1, jobObject = FusionEntity, jobConnection =
LOCAL, parameters =[{paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=COA_APP_NAME, paramValue=null}, {paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=COA_DIM_NAME, paramValue=null},
{paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=HIER_TOP_NODE, paramValue=null}, {paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=REFRESH_FROM_SOURCE, paramValue=null},
{paramLevel=JOB, paramName=endPeriod, paramValue=$ENDPERIOD}, {paramLevel=JOB, paramName=exportMode, paramValue=$EXPORTMODE}, {paramLevel=JOB,
paramName=importMode, paramValue=$IMPORTMODE}, {paramLevel=JOB, paramName=periodName, paramValue=${STARTPERIOD}{ENDPERIOD}}, {paramLevel=JOB,
paramName=startPeriod, paramValue=$STARTPERIOD}]]
2023-05-18 19:35:39,461 INFO [AIF]: Executing pipeline job:FusionAccount, Type:integration
2023-05-18 19:35:39,461 INFO [AIF]: Job Parameters :
2023-05-18 19:35:39,462 INFO [AIF]: [jobType = integration, jobName = FusionAccount, jobId = 10887, jobSeq = 2, jobObject = FusionAccount, jobConnection =
LOCAL, parameters =[{paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=COA_APP_NAME, paramValue=null}, {paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=COA_DIM_NAME, paramValue=null},
{paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=HIER_TOP_NODE, paramValue=null}, {paramLevel=SOURCE_FILTER, paramName=REFRESH_FROM_SOURCE, paramValue=null},
{paramLevel=JOB, paramName=endPeriod, paramValue=$ENDPERIOD}, {paramLevel=JOB, paramName=exportMode, paramValue=$EXPORTMODE}, {paramLevel=JOB,
paramName=importMode, paramValue=$IMPORTMODE}, {paramLevel=JOB, paramName=periodName, paramValue=${STARTPERIOD}{ENDPERIOD}}, {paramLevel=JOB,
paramName=startPeriod, paramValue=$STARTPERIOD}]]
2023-05-18 19:35:39,466 INFO [AIF]:
2023-05-18 19:35:40,105 INFO [AIF]: Job Process ID : 1708
2023-05-18 19:35:55,271 INFO [AIF]:
2023-05-18 19:35:55,837 INFO [AIF]: Job Process ID : 1709
2023-05-18 19:36:10,995 INFO [AIF]:
2023-05-18 19:36:10,998 INFO [AIF]: ----- End Stage : Load Dimension Members -----
2023-05-18 19:36:10,998 INFO [AIF]: ----- Start Stage : Copy Files -----
2023-05-18 19:36:10,998 INFO [AIF]: Executing Stage : Stage 2, Mode : Serial
2023-05-18 19:36:10,998 INFO [AIF]: Executing pipeline job:Copy File from Object Store, Type:copyFromObjectStore
2023-05-18 19:36:10,998 INFO [AIF]: Job Parameters :
2023-05-18 19:36:11,000 INFO [AIF]: [jobType = copyFromObjectStore, jobName = Copy File from Object Store, jobId = 10880, jobSeq = 1, jobObject = null,

```

パイプラインの電子メール通知の送信

パイプラインを実行した後、ランタイム変数の定義に基づいて電子メール通知にログを添付して送信できます。

qedemo : 21-03-2023 18:14:04, Status: SUCCESS



no.reply@oraclecloud.com <no.reply@oraclecloud.com>
To: email recipient name

EPM Cloud: <http://<SERVER><PORT>>

Pipeline: 'qedemo' completed with status SUCCESS

Stage Name	Job Name	Process ID	Status	End Time	Log File
S1	DelimitedFileDL	90	SUCCESS	21-Mar-23 18:13	Download
S2	174052 DelimitedFileDL	91	SUCCESS	21-Mar-23 18:14	Download

メールの送信変数により、パイプラインを実行したときにどのような場合に電子メールを送信するかが決定されます。次のオプションがあります:

- 常時
- いいえ—デフォルト値
- 失敗時
- 成功時

送信先変数により、電子メール通知の受信者の電子メール ID が決定されます。複数の電子メール ID は、カンマで区切ります。

ログの添付変数により、パイプラインのログを圧縮して添付ファイルとして電子メールに含めるかどうか決定されます。ログのダウンロード・リンクは、それぞれのジョブについて自動的に追加されます。

使用可能なオプション:

- はい—ログが圧縮されて添付ファイルとして電子メールに含められ、後でダウンロードできます。
- いいえ—デフォルト値

デフォルトでは、ログ・ファイルを表示するためのリンクが電子メールに挿入されます。リンクをクリックすると、システムにログインしてログ・ファイルをダウンロードするよう求められます。すでにログインしている場合は、ログが自動的にダウンロードされます。

ランタイム変数の詳細は、[ランタイム変数の編集](#)を参照してください。

13

プロセス詳細の確認およびワークベンチでの結果の表示

ワークフロー・プロセス中はいつでも、ロード対象のデータのステータスや品質を評価するために、統合をレビューおよび検証できます。「プロセスの詳細」およびワークベンチは、ソース・システムのデータのインポート、表示と確認、およびエクスポートを行うフレームワークを提供します。

プロセス詳細の表示


「プロセスの詳細」を使用して、発行した統合のステータスとログを表示します。

Process ID	Status	Log	Output File	Process By	ODI Session Number	Error Message	Last Execution
128	●	📄		epm_default_cloud_admin	67501		Mar 30, 2018 05:33:13 PM
127	●	📄		epm_default_cloud_admin	66501		Mar 30, 2018 05:32:22 PM
126	●	📄		epm_default_cloud_admin	65501		Mar 30, 2018 05:31:27 PM
124	●	📄		epm_default_cloud_admin	64501	Validate Data Failed	Mar 30, 2018 05:28:03 PM
123	●	📄		epm_default_cloud_admin	63501	Validate Data Failed	Mar 30, 2018 05:25:19 PM

Status	Process Step	Process Start Time	Process End Time
●	Export data to Planning application PI_Vision	Mar 30, 2018 05:33:11 PM	Mar 30, 2018 05:33:11 PM
●	Consolidate data for Planning application Jan-18	Mar 30, 2018 05:33:12 PM	Mar 30, 2018 05:33:12 PM

プロセスの詳細を表示するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」ドロップダウンから、「プロセスの詳細」を選択します。



特定の統合のプロセスの詳細を表示するには、データ統合の右側にある  をクリックし、「プロセスの詳細」を選択します。


2. 統合の「プロセス ID」を選択すると、発行した統合のステータスが表示されます。


「プロセスの詳細」ページに、統合に関して実行されたプロセスが表示されます。プロセスごとに次の列が表示されます:




- **プロセス ID** - 発行した統合ごとにシステムにより生成される識別番号
- **(ステータス)** - プロセスのステータスを示すビジュアル・インディケータが表示されます。アイコンの上にカーソルを置くと、画面のヒントが表示されます。


使用可能なステータス:


-  - データ統合は正常に処理されました。
-  - データ統合は正常に完了しませんでした。

–  - 統合は処理されましたが、警告があります。

- **ログ** -  をクリックすると、発行した統合のログが表示されます。統合ごとに、ステータス、プロセス・ステップ、プロセス開始時間およびプロセス終了時間がログに表示されます。

Status	Process Step	Process Start Time	Process End Time
	Extract data from Datasource DEV_EPBCS Employee Metadata	Apr 11, 2018 04:20:22 PM	Apr 11, 2018 04:21:41 PM
	Import data from file DEV_EPBCS Employee Metadata_148.dat for Period	Apr 11, 2018 04:21:43 PM	Apr 11, 2018 04:21:44 PM
	Transform and stage balance data to export for period Dec-18	Apr 11, 2018 04:21:45 PM	Apr 11, 2018 04:21:45 PM

- **出力ファイル** - 統合の出力ファイルが生成されると、このフィールドに  が表示されます。

データ・ファイルをエクスポートするためのオプションが有効になっている場合、出力ファイルが生成されます。データ・ファイルの名前は<target application name>_<process ID>.dat で、<application root folder>/outbox ディレクトリに書き込まれます。「プロセスの詳細」ページから出力ファイルを開くと、出力ファイルが pdf 形式で使用可能になります。出力ファイルを開く、または保存するには、 をクリックします。

出力ファイルには、データをロードしたときに拒否されたデータ・セル、交差および拒否理由を示す検証エラー・レポートが含まれることもあります。検証エラー・レポート・オプションは、**検証失敗の理由を表示**ターゲット・オプションが有効な場合にのみ有効です。[ターゲット・オプションの定義](#)を参照してください。

統合の実行ステップでデータ・ロードが失敗すると、エラー・メッセージ出力ファイルが生成され、このフィールドで使用できるようになります。詳細は、[エラー・メッセージ出力ファイルの表示](#)を参照してください。

- **処理者** - 統合を発行したユーザーの ID。
- **ODI セッション番号** - Oracle Data Integrator 内のセッション番号。これを使用して Oracle Data Integrator 内のセッションを検索できます。

ノート:

ODI セッション番号は、データがオフライン実行中に処理される場合のみ「プロセスの詳細」に存在します。

- **出力**
- **エラー・メッセージ** - 発行した統合が失敗した理由が表示されます。
- **最終実行** - 発行した統合の最終実行日が表示されます。

エラー・メッセージ出力ファイルの表示

データを **Planning** にエクスポートする際に、データのロード・ステップで発生したエラー・メッセージは、別の出力ファイルに取得されます。このファイルには、エラー・メッセージのみが含まれています。この情報は、貴重なデバッグ・ツールです。エラーは、単に出力ファイルを確認することで簡単に識別でき、ダウンロードして、電子メールによってユーザーが使用できるようにすることができます。

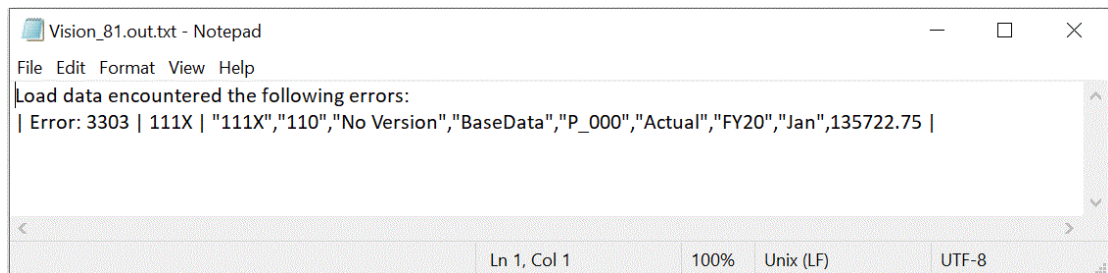
 ノート:

エラー・メッセージはプロセス・ログにも表示されますが、ログ・レベルが 1 に設定されている場合は表示されないことがあります。また、プロセス・ログには、ステータス、プロセス・ステップおよびプロセス時間も表示されるため、エラー・メッセージを見つけて識別することが難しい場合があります。

Planning にデータをロードするときに生成されるエラー・メッセージは、次の 3 つの方法のいずれかが使用されている場合に発生します。

- Essbase へのクイック・モード・ロード(「数値データのみ」がロード方法である場合に使用されます)
- アウトライン・ロード・ユーティリティ(「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」 - 管理ユーザーがロード方法である場合に使用されます)
- REST API(「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」の場合に使用されます)(管理者に対してセキュリティが有効な場合)

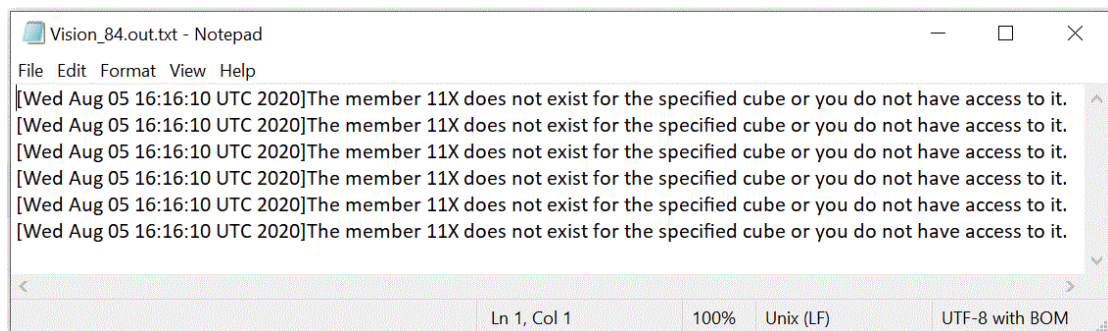
次の例では、Oracle Essbase に対するクイック・モード・ロードが失敗したときにエラー・メッセージが生成されています:



```

Vision_81.out.txt - Notepad
File Edit Format View Help
Load data encountered the following errors:
| Error: 3303 | 111X | "111X","110","No Version","BaseData","P_000","Actual","FY20","Jan",135722.75 |
Ln 1, Col 1      100%  Unix (LF)  UTF-8
    
```

この例では、エラー・メッセージによって、ロードがアウトライン・ロード・ユーティリティから行われたときに発生した無効なメンバー番号が識別されています。




```


Vision_84.out.txt - Notepad
File Edit Format View Help
[Wed Aug 05 16:16:10 UTC 2020]The member 11X does not exist for the specified cube or you do not have access to it.
[Wed Aug 05 16:16:10 UTC 2020]The member 11X does not exist for the specified cube or you do not have access to it.
[Wed Aug 05 16:16:10 UTC 2020]The member 11X does not exist for the specified cube or you do not have access to it.
[Wed Aug 05 16:16:10 UTC 2020]The member 11X does not exist for the specified cube or you do not have access to it.
[Wed Aug 05 16:16:10 UTC 2020]The member 11X does not exist for the specified cube or you do not have access to it.
[Wed Aug 05 16:16:10 UTC 2020]The member 11X does not exist for the specified cube or you do not have access to it.
Ln 1, Col 1      100%  Unix (LF)  UTF-8 with BOM
    
```

統合のエラー・メッセージ出力ファイルを表示するには:

1. 「データ統合」 ホーム・ページの「アクション」ドロップダウンから、「プロセスの詳細」を選択します。

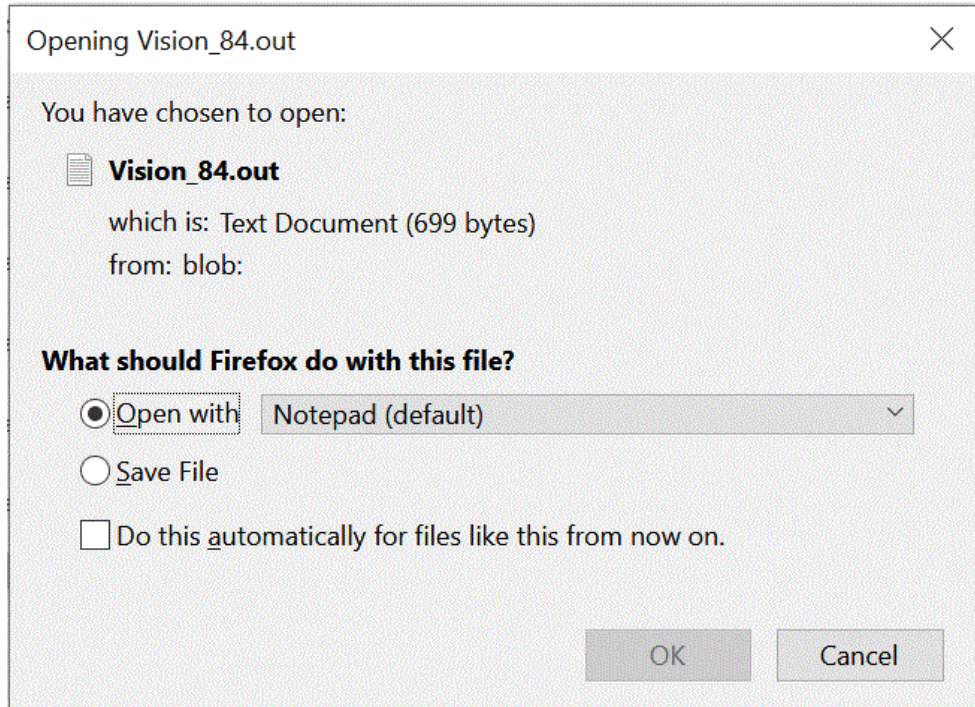
特定の統合のプロセスの詳細を表示するには、データ統合の右側にある  をクリックし、「プロセスの詳細」を選択します。

2. エラー・メッセージ出力ファイルが生成された統合の「プロセス ID」を選択します。

統合の実行が失敗した場合は、 が統合の「ステータス」列に表示されます。

3. 「出力」から、 をクリックします。

Planning アプリケーション_プロセス ID.out ページが表示されます。







4. エラー・メッセージ出力ファイルを開くか保存します。

エラー・メッセージ出力ファイルがデフォルトのテキスト・エディタで開かれます。

ワークベンチの使用

ワークベンチは、ソース・システムのデータのインポート、表示と確認、およびエクスポートを行う視点(POV)フレームワークを提供します。

ワークベンチは、ソース・システムのデータのインポート、表示と確認、およびエクスポートを行う視点(POV)フレームワークを提供します。ワークベンチの主な機能は、次のとおりです：

- データのインポート()、検証()、エクスポート()および確認()のオプションのある対話型ロード・プロセス。
- 「ソース(すべて)」 / 「ソース(マップ済)」 / 「ターゲット」 / 「ソースとターゲット」の値を表示するためのプロビジョニング
- 即時参照用の PTD/YTD 値表示

EPBCStoVision

Import Validate Export Check Close

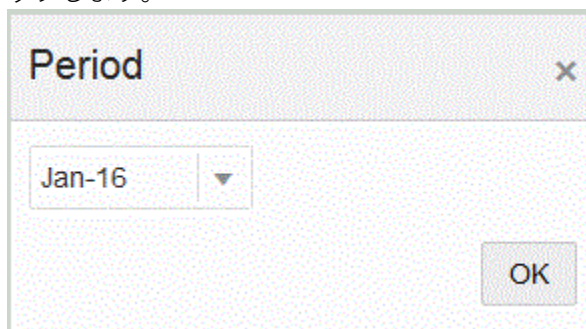
Period: Jan-16, Category: Current, Location: EPBCStoVision, Source: EPBCS, Target: Vision

Source-Account	Account	Source-Entity	Entity	Source-Version	Version	Source-HSP_View	HSP_View	Source-Product	Product	Source-Amount	Amount
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	3	3
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	90,000	90,000
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	3	3
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	110,000	110,000
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	3	3
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	150,000	150,000
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	3	3
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	175,000	175,000
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	3	3
OWP_Basic Sa...	1210	Manufacturing I...	110	OEP_Working	BU Version_1		BaseData		P_000	75,000	75,000

Page 1 of 4 (1-10 of 34 items)

ワークベンチを表示するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、データ統合の右側にある **...** をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。
2. 「期間」をクリックし、「期間」ドロップダウンから期間の POV を選択し、「OK」をクリックします。



ワークベンチ・ワークフローの使用

ワークベンチのワークフロー・バーは、次のタスクで構成されます:



タスクが正常に完了すると、アイコンが強調表示されます。タスクが完了しなかった場合、または実行されたが失敗した場合、アイコンはグレーになります。

ワークフロー・バーのタスクをクリックするだけで、異なるタスク間を移動できます。

タスク	説明	詳細情報
インポート	ソース・システムからデータをインポートし、必要な変換を実行します。	ソース・データのインポート



タスク	説明	詳細情報
検証	すべてのメンバーが有効なターゲット・システム勘定科目にマップされていることを確認します。ソース・ファイル内にマップされていないディメンション・マップがある場合、検証エラーが発生します。	ソース・データの検証
エクスポート	データをターゲット・アプリケーションにエクスポートします。	ターゲット・アプリケーションへのデータのエクスポート
確認	確認を実行して、現在の POV の確認ログを表示します。	データの確認

ソース・データのインポート

ソース・ファイルをインポートするように指定すると、**データ管理**は現在の POV を使用して、ロケーション、カテゴリおよび期間を判別し、次の処理を実行します。

- 「置換」オプションを選択した場合は、既存のファイルが削除されます。
- ソース・ファイルがロードされます。
- ソース・ディメンションがターゲット・ディメンションにマッピングされます。

ソース・データをインポートするには:


1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. **オプション**: 「**期間**」をクリックして、現在の POV から別の期間を選択します。
3. 「**インポート**」()をクリックします。
4. 「**インポート・モード**」から、データをインポートする方法を選択します。

使用可能なインポート・モード:

- **追加** - POV の既存の行は変更されず(行内のデータはマージされない)、新しい行が POV に追加されます。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 50 行が含まれるとします。この場合、50 行が追加されます。このロードの後で、POV の行の合計は 150 です。
- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行が TDATASSEG にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。Planning アプリケーションに 1 年分のデータがある場合に 1 か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、特定の月がクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

5. **ファイルベース統合のみ**: 「**ファイル**」から、データ・ファイルをアプリケーションの受信ボックスからアップロードするか、別の場所からアップロードするかに応


じて、 をクリックして、「**ファイル・ブラウザ**」でファイルに移動し、「**OK**」をクリックします。

6. 「**実行**」をクリックします。

ソース・データの検証

ソース・データの検証では、すべてのメンバーが有効なターゲット・システム勘定科目にマッピングされていることが確認されます。また、ディメンション・マッピングがソース・ファイルと比較され、マッピングされていないディメンションが特定されます。このワークフローは、すべてのディメンションが適切にマッピングされ、検証エラーがすべて修正されていないと、続行できません。

ソース・データを検証するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. **オプション**: 「**期間**」をクリックして、現在の POV から別の期間を選択します。
3. 「**検証**」




)をクリックします。

検証が実行のために発行されます。プロセスの実行が完了し、検証に失敗した場合、「ステータス・メッセージ: 失敗」というメッセージが表示され、「検証」アイコンがグレーで表示されます。検証に成功した場合は、「検証」が青色で表示されます。

ノート:



ワークベンチで検証を再実行する場合、式は選択されず、マッピング・ルールのみが選択されます。

4. **オプション**: 検証をオフラインで実行するには、**オフラインで続行**をクリックします。
5. **オプション**:  をクリックし、ログをダウンロードして開きます。

ターゲット・アプリケーションへのデータのエクスポート

ソース・データが検証プロセスに合格すると、ロード・ファイルが作成されます。データ・グリッド内のデータをレビューし、そのデータをターゲット・アプリケーションにエクスポートする必要があることを確認した後、「エクスポート」オプションを選択します。

データをターゲット・アプリケーションにエクスポートするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. **オプション**: 「**期間**」をクリックして、現在の POV から別の期間を選択します。
3. 「**エクスポート**」()をクリックします。

4. 「**エクスポート・モード**」から、データをエクスポートする方法を選択します。

使用可能なエクスポート・モード:

- **マージ** - 既存のデータをロード・ファイルからの新しいデータで上書きします。(デフォルトでは、すべてのデータ・ロードが「マージ」モードで処理されます。)データが存在しない場合は、新しいデータを作成します。
- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行が TDATASSEG にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。Planning アプリケーションに 1 年分のデータがある場合に 1 か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、必ず特定の月がクリアされてからロードが実行されることに注意してください。




- **累計** - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで累計します。データ・ファイルの一意の視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。
- **減算** - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションの値から引きます。たとえば、ターゲットに 300 があり、ソースに 100 がある場合、結果は 200 になります。

5. 「**実行**」をクリックします。

データの確認

データをターゲット・システムにエクスポートした後で、確認ステップを実行して、現在の POV の確認ログを表示します。現在の POV に確認ログ・データが存在しない場合、空のログ・ファイルが作成されます。

データを確認するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. **オプション**: 「**期間**」をクリックして、現在の POV から別の期間を選択します。
3. 「**確認**」()をクリックします。
確認ログが実行のために発行されます。
4. **オプション**: 確認ログをオフラインで実行するには、**オフラインで続行**をクリックします。
5. **オプション**:  をクリックし、ログをダウンロードして開きます。

ワークベンチでのデータの表示

ワークベンチのデータ・グリッドに表示するデータのタイプを選択できます。

データのタイプを選択するには、「**表示**」ドロップダウンから、次のオプションのいずれかを選択します。

使用可能なオプション:

- 有効なデータ - 正しくマップされ、ターゲット・アプリケーションにエクスポートされたデータ。
- 無効なデータ - 正しくマップされず、その結果、データがターゲットにエクスポートされない 1 つ以上のディメンション。
- 無視されたデータ - ターゲットへのエクスポート時にソース値を無視するユーザー定義の明示的マップ。このタイプのマップは、メンバー・マッピングで特別なターゲット・メンバーに値 `ignore` を割り当てて定義します。
- すべてのデータ - すべての有効、無効および無視されたデータを表示します。

ワークベンチでのデータのエクスポート

POV のすべてのデータを CSV ファイルにエクスポートできます。エクスポート・プロセスはオンラインまたはオフライン・モードで実行でき、任意のフィルタをエクスポートに適用できます。データは、通常はカンマ文字(,)がテキストの各フィールドを区切る、CSV (カンマ区切り値)のテキスト・ファイルにエクスポートされます。エクスポートされたデータには `WorkbenchData_<POV number>.csv` という名前が付けられ、ブラウザのダウンロード・フォルダにダウンロードされます。

Note:

CSV ファイルを開くための Windows 設定に応じて、エクスポートされたデータ・ファイルを自動的に Excel で開くことができます。

データをエクスポートするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある `...` をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. 「**アクション**」ドロップダウンから、「**データのエクスポート**」を選択します。
3. **データのエクスポート**・ページの「**エクスポート・モード**」から、データをエクスポートするためのモードを選択します。

使用可能なオプション:

- オンライン - エクスポートを即時に処理します。
- オフライン - エクスポートをバックグラウンドで実行します。(行が多数ある場合にお勧めします)。



Export Data: DelimitedFileDL

Export Mode Online Offline

Include Filters

OK

Cancel

4. 「フィルタを含む」を選択して、統合で定義されているフィルタを適用します。
5. 「OK」をクリックします。

次に、Excel 形式のエクスポートされたデータ・ファイルの例を示します：

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	GL Account	Company	Descriptio	Amount				
2	1190	1		200				
3	1190-101	1		400				
4	1515	1		200				
5	1515-101	1		600				
6	1516-201	1		880				
7	1520-101-	1		35				
8	2520-1101	1		267				
9	2215-104	1		678				
10	3315-110	1		600				
11	3400	1		0				
12	3505-101	1		600				
13	LGitem1	1		800				
14	1100	1		235722.8				
15	1100-1011	1		200				
16	1100-1012	1		210000				
17								

ターゲット・データの表示

データのロード先のディメンションなど、統合で使用されるターゲット・データに関連付けられた特定の詳細を表示できます。このビューでは、ターゲット行を選択し、そのアイテムに関連付けられたソース・データを表示することもできます。

Note:

表示するデータが大量にある場合は、ターゲット・ビュー内で **5,000** 行を超えないようにしてください。これを確実にするには、ワークベンチ・ページでデータをフィルタ処理します。

Note:

ファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションで、テストのためにワークベンチでデータを表示する場合は、「ワークフロー・モード」を「**完全**」に設定します(デフォルトでは、ファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションの「ワークフロー・モード」は「**単純**」です)。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud* データ管理の管理のワークフロー・モードの選択を参照してください。

ターゲット・ビューにデータを表示するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある **...** をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. 「**アクション**」ドロップダウンから、「**ターゲット・ビュー**」を選択します。
3. **オプション**: ターゲット行に関連付けられたソース・データを表示するには、ターゲット行をクリックします。

ソース・データ情報が「**ターゲット・データ**」の行の下に表示されます。

Period	Category	Location	Source	Target	Show	Company	Amount	Company	Amount
Jan-22	Actual	DelimitedLoc	File	Vision	All Data				
Target Data									
Entity	Account	Version	HSP_View	Product	Target-Amount				
110	1110	No Version	BaseData	P_000	235,722.75				
110	1150	No Version	BaseData	P_000	200.00				
110	1410	No Version	BaseData	P_000	213,515.00				
110	1520	No Version	BaseData	P_000	200.00				
110	3500	No Version	BaseData	P_000	600.00				
Page 1 of 1 (1-6 of 6 items) < 1 >									
Source Data									
Ent	Acct	Source-Version	Source-HSP_View	Source-Product	Source-Amount				
01	1100	No Input			235,722.75				
Page 1 of 1 (1 of 1 items) < 1 >									

ワークベンチでのインポートされたデータの削除

すべてのインポート済データの削除オプションを使用して、POV 期間についてデータ表からすべてのインポート済データをクリアします。このオプションを使用してシステムからデータをクリアすると、データをロードした時点からやり直すことができます。

実行すると、すべてのインポート済データの削除オプションによって次のものが削除されます。

- ロードに使用されたマッピング監査
- データ・ロードに関する監査情報
- プロセス・ロード・ステータス
- プロセス・パラメータ

Note:

削除されたインポート済データを復元するための**バックアップはありません**。このプロセスを実行する前に、十分に注意することをお勧めします。

削除後は、次の点に注意してください。

- その期間についてワークベンチでデータを表示できません。
- Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータ統合にドリルダウンできません。

Note:


プロセス時にドリル領域は削除されません。ドリル領域を削除する必要がある場合は、手動で削除します。

- 指定の POV 期間のマップは復元できません。

Note:

アプリケーション登録、インポート・フォーマット、マッピングなどの設定データはすべて保持され、ページ・プロセスの影響は受けません。

すべてのインポート済データを削除するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. 「**アクション**」ドロップダウンから、「**インポートしたデータの削除**」を選択します。

削除確認ページが次のメッセージとともに表示されます: 「期間 Jan-22 の関連付けられているすべてのデータをステージング表から削除してもよろしいですか。」

3. 「OK」をクリックします。

ワークベンチでのマッピングの表示

「マッピングの表示」を使用して、ソース値に基づいたターゲット・ディメンショナリティへのソース・ディメンショナリティの変換方法を表示します。データ・ロード時にメンバー・マッピングが参照されることにより、データ統合では、ターゲット・アプリケーションにロードされるときにデータがディメンション化される方法を決定できます。

マッピングを表示するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある ******* をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。
2. マッピングを表示するソース金額をクリックして、「マッピングの表示」を選択します。
次の例では、135,000.00 のソース金額について、マッピングの表示ページが起動されています。

Source-Account	Account	Source-Entity	Entity	Currency	Source-Version	Version	Target-Amount	Source-Amount	Description 1
OWP_Basic Salary	ANonCurr	B50Ch81	A1_ch81_Ent	USD	OEP_Working	OEP_Working	135,000.00	135,000.00	

Dimension Name	Type	Source	Target	Rule Name	Description
Account	EXPLICIT	OWP_Basic Salary	ANonCurr	OWP_Basic Salary	
Entity	LIKE	*	A1_ch81_Ent	ee	
Version	LIKE	*	OEP_Working	w	

ワークベンチでのソース・ドキュメントの表示

統合のソース・ファイルをワークベンチで表示できます。

ファイルのソース・ドキュメントを表示するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、ファイルベース統合の右側にある ******* をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。
2. マッピングを表示するソース金額をクリックして、「ソース・ドキュメントの表示」を選択します。
3. 要求されたら、テキスト・エディタでソース・ドキュメントを開くか保存します。

```


7720210831.txt - Notepad
File Edit Format View Help
1100:Cash In Bank:0.0000047465
1100-1011-000-00:Dallas National Bank:103.036671
1100-1012:Midland Bank & Trust:110000.00
1190:Petty Cash:100.00
1190-101:Sales:200.00
1515:Prepaid Deposits:100.00
1515-101:CPI Market Security:500.00
1516-201:CPK Market Security:780.00
1520-101-11:PIY Market Security:25.980
2520-1101:betwCPI Market Security:167.00
2215-104:bet2 CPI Market Security:578.00
3315-110:multiCPI Market Security:-98500.56890
3400:multi2 CPI Market Security:0.00
3505-101:multi3 CPI Market Security:500.00
1100-201:this is new line:785.0001

```

ワークベンチ・データのフィルタ処理

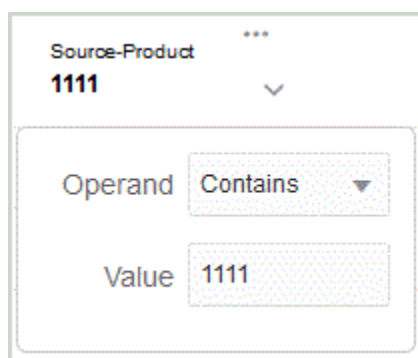
フィルタを適用して、ワークベンチに特定の値を表示できます。「含む」または「等しい」オペランドと特定の値を使用して、1つ以上のディメンションに基づくフィルタ条件を作成できます。

ワークベンチ・データをフィルタ処理するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ワークベンチ**」を選択します。
2. **オプション**: 「**期間**」をクリックして、現在の POV から別の期間を選択します。
3. 「**フィルタの追加**」をクリックします。
4. フィルタを適用する値(ディメンション)を選択します。



5. 「オペランド」ドロップダウンから、フィルタのオペランドと値を選択します。使用可能なオペランドは次のとおりです。
- 含む — 「値」フィールドに文字列文字を含む値を返します。
 - 等しい — 「値」フィールドに文字列文字に等しい値を返します。



6. 「値」で、フィルタに使用する特定の値を指定します。

ワークベンチのカスタム・ビューの定義

ワークベンチで作業する際に、表示される列のビュー定義を作成できます。この機能を使用すると、ワークベンチでアクティブなデータ・セットのカスタム・ビューを適用できます。ビューではデータの表示を再配置できるため、ワークベンチの列を様々な方法で参照できま



す。たとえば、ビューを作成して、特定の勘定科目列に焦点を当てたり、要件に基づいてエンティティ列を非表示にすることができます。カスタム・ビュー定義では、列の名前変更、再ソート、包含または除外が可能です。

管理者は、ビュー定義をパブリック・ビューとして関連付けて、すべてのユーザーが使用できるようにしたり、プライベートとして割り当てて、管理者のみが使用できるようにすることもできます。

ノート:

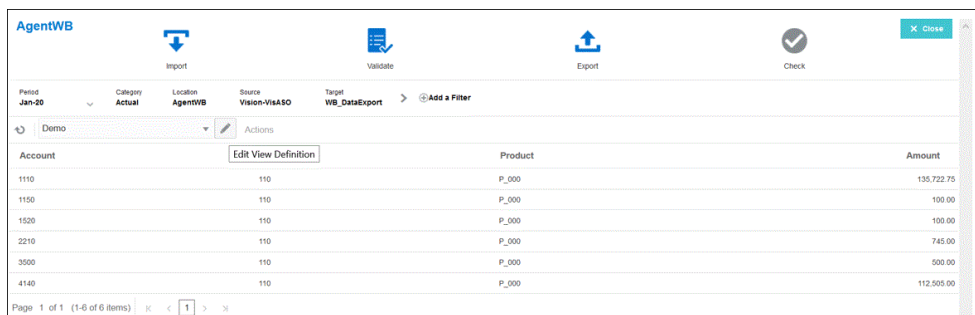
Oracle Smart View for Office にドリルするとき、データ統合ではドリルのランディング・ページで最後に使用されたビューが使用されます。最後に使用されたビューが見つからない場合は、データ統合では、この設定のデフォルトのビュー選択が使用されます

ビュー定義を作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、データ統合の右側にある  をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。
2. 「期間」をクリックし、「期間」ドロップダウンから期間の POV を選択し、「OK」をクリックします。
3. 「ビュー」ドロップダウンから、カスタム・ビュー定義を作成する基礎となるデフォルト・ビューを選択し、 をクリックします。

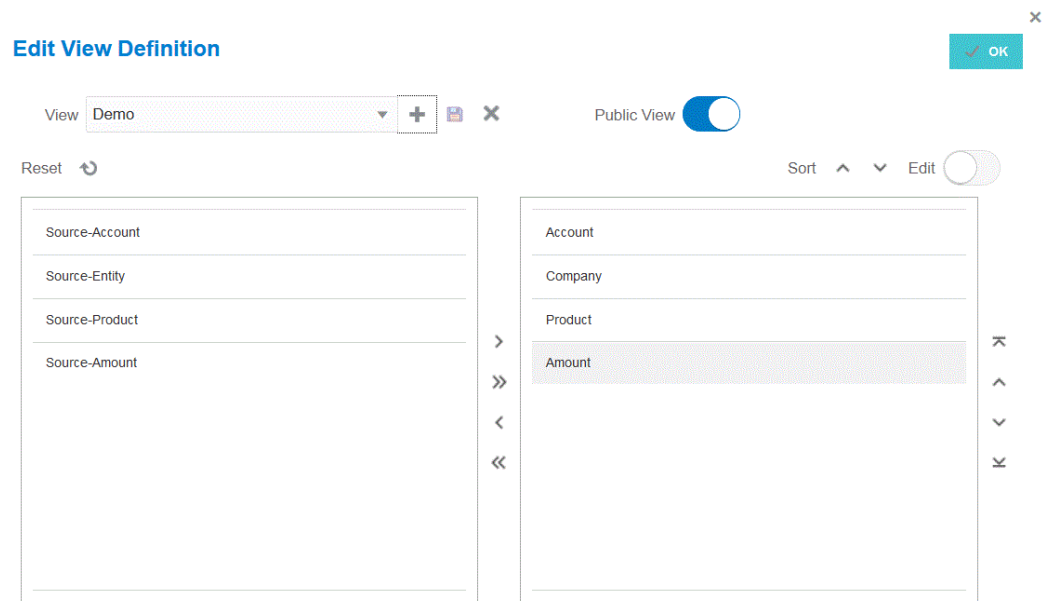
ノート:

POV に表示されるワークベンチ・ビューは、ターゲット・アプリケーションによってのみフィルタされ、統合に対して選択されたターゲット・プラン・タイプではフィルタされません。このため、POV に対して機能しないビューがドロップダウンに表示される場合があります。

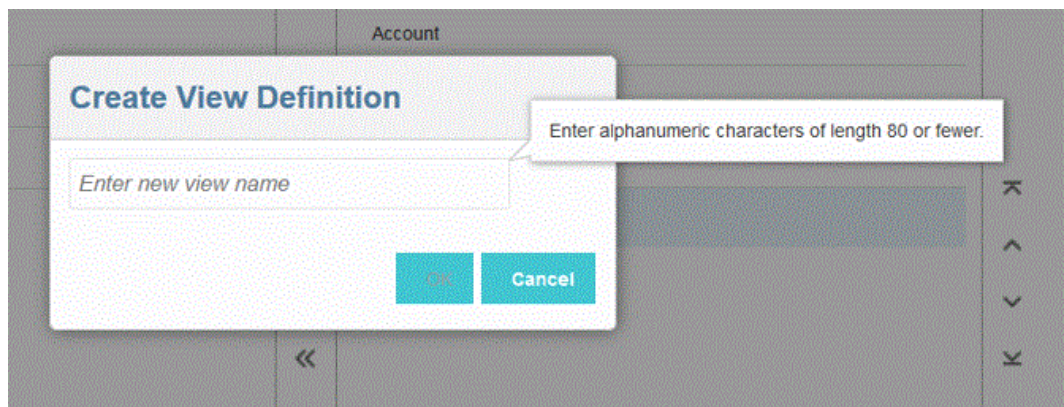


Account	Product	Amount
1110	P_000	135,722.75
1150	P_000	100.00
1520	P_000	100.00
2210	P_000	745.00
3500	P_000	500.00
4140	P_000	112,505.00

4. ビュー定義の編集ページから、 をクリックします。



5. **ビュー定義の作成** ウィンドウで、カスタム・ビュー定義の名前を入力します。ビュー定義名には英数字を使用できます。ビュー定義名は 80 文字以下です。



6. 「使用可能な列」左ペインから、「列の表示」ペインに追加する列を選択し、> をクリックします。







[Shift]を押しながら >> をクリックして、使用可能な列すべてを「列の表示」ペインに追加できます。

その他の移動オプションは、次のとおりです:

- < —選択した列を「列の表示」ペインから「使用可能な列」ペインに移動します。
- << —選択したすべての列を「列の表示」ペインから「使用可能な列」ペインに移動します。

ビュー内の移入された値をクリアするには、「リセット」をクリックします。

7. **オプション: 「列の表示」** ペインで列の名前を変更するには、列を選択し、「編集」をオンにスライドして、新しい列名を入力します。

8. **オプション:** ビュー定義をパブリックとして関連付けるには、「**パブリック**」をオンにスライドします。
パブリック・ビューに関連付けられたビュー定義は、すべてのユーザーが使用できます。
ビュー定義をプライベートとして関連付けるには、「**パブリック**」をオフにスライドします。
プライベート・ビューに関連付けられたビュー定義は、管理者のみが使用できます。
9. **オプション: 「列の表示」** ペインで列を並べ替えるには、列を選択し、次のいずれかを選択します:
 -  一列を表示の最上部に移動します。
 -  一列を表示の 1 つ上に移動します。
 -  一列を表示の 1 つ下に移動します。
 -  一列を表示の最下部に移動します。
10. **オプション: 「ソート」** をクリックして、「**列の表示**」ペインで列を昇順または降順でソートします。
11. 「OK」または  をクリックして、ビュー定義を保存および更新します。
12. **オプション:** ビューを削除するには、 をクリックします。

ソース・データの検証

ワークベンチを使用して、ソース・システムでデータのインポート、表示、確認およびエクスポートを実行すると、データ統合によって、自動的に統合されるデータが検証されます。

ソース・データの検証は、すべてのメンバーが有効なターゲット・システム勘定科目にマップされていることを確認します。ソース・ファイル内にマップされていないディメンション・マップがある場合、検証エラーが発生します。検証では、ディメンション・マッピングとソース・ファイルを比較し、マッピングされていないディメンションを特定します。すべてのディメンションが正しくマッピングされるまで、プロセス・フローを続行できません。検証プロセスの一部として、マッピングの修正機能を使用できます。ユーザーは検証ページの右側でマッピング・エラーを表示および修正できます。

Note:

ワークベンチで検証を再実行する場合、式は選択されず、マッピング・ルールのみが選択されます。


マッピング・エラーのない検証

検証に成功すると、「検証」アイコンが青色になります。

マッピング検証エラー

新たに追加されたディメンション・メンバーがマッピングされていないために、ディメンション・メンバーをソース・システムに追加すると検証エラーが生成されることがあります。ディメンション・メンバーがマッピングされていない場合、ロードを検証すると、検証エラー・ページがワークベンチで自動的に起動します。ここではマッピングされていない(未定義の)ディメンション・メンバーの数が示されます。検証を再度実行する前に、マッピングされていないディメンション・メンバーを修正する必要があります。

ソース・データを検証するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。

2. 「検証」



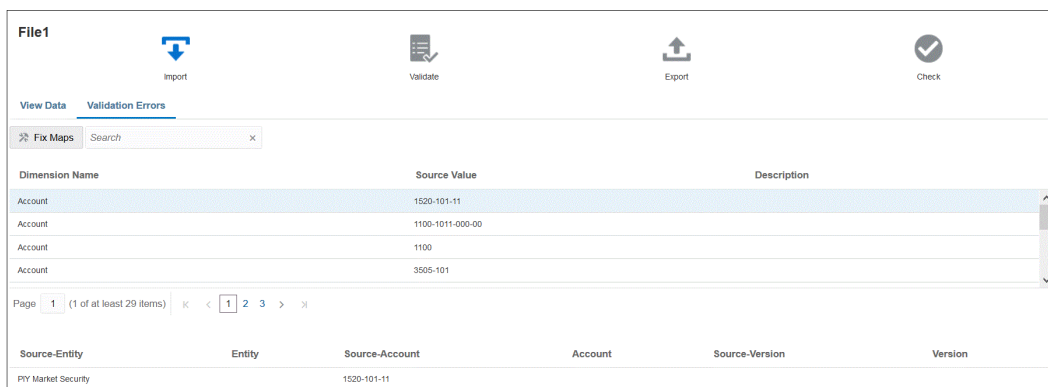
)をクリックします。

検証をオフラインで実行するには、「オフラインで続行」をクリックします。



をクリックし、ログをダウンロードして開きます。

検証が実行のために発行されます。プロセスが実行され、検証に失敗すると、検証エラー・ページが表示されます。



Dimension Name	Source Value	Description
Account	1520-101-11	
Account	1100-1011-000-00	
Account	1100	
Account	3505-101	

Page 1 (1 of at least 29 items) | 1 2 3 >


Source-Entity	Entity	Source-Account	Account	Source-Version	Version
PIY Market Security		1520-101-11			

検証に成功した場合は、「検証」アイコンが青色になり、検証エラー・ページは起動されません。

マッピング・エラーの修正

ワークベンチでは、マッピングのエラーが発生した場合にマッピング・エラーを表示し、即時に修正できます。

ソース・データを検証するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。

2. 「検証」

(



)をクリックします。

検証をオフラインで実行するには、「オフラインで続行」をクリックします。



をクリックし、ログをダウンロードして開きます。

検証が実行のために発行されます。プロセスが実行され、検証に失敗すると、検証エラー・ページが表示されます。

Dimension Name	Source Value	Description
Account	1520-101-11	
Account	1100-1011-000-00	
Account	1100	
Account	3505-101	

3. 検証エラー・ページの「ディメンション名」で、マップまたは修正する必要があるディメンション名またはメンバーを選択し、「マップの修正」をクリックします。

Source	Target	Processing Order	Description	Apply To	Change Sign
No data to display.					

4. マップ・メンバー・ページから、次のいずれかのアクションを実行します。



(「追加」) - メンバー・マッピングの追加ページでメンバー・マッピングを追加します。詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。



(「編集」) - メンバー・マッピングを編集します。



(「削除」) - メンバー・マッピングを削除します。

データのエクスポート

データ統合には、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスからファイル、オンプレミス・データベースまたは Oracle Autonomous Database にデータをエクスポートするためのツールがあります

データをエクスポートするには、ソースを EPM Cloud ビジネス・プロセスとし、ターゲットをデータ・エクスポート・アプリケーションのいずれかとして、統合を定義します。

データをエクスポートする場合、次のモードのいずれかを使用します：

- 標準ワークフロー・モード - EPM Cloud からデータを抽出し、メンバー・マッピングを使用して必要な変換を実行し、データを適切なターゲット・アプリケーションにエクスポートします。
- クイック・モード - EPM Cloud からデータを抽出し、インポート式を使用して簡単な変換を実行し、データを適切なターゲット・アプリケーションにエクスポートします。このモードでは、データはステージング表にインポートされず、パフォーマンスが大幅に向上するようにデータは直接処理されます。このモードは、大量のデータのエクスポートにも理想的です。

標準とクイック・モードの両方の方法で、次の方法のいずれかを使用し、Essbase ストレージ・オプションに基づいてデータをソースから抽出できます：

1. すべてのデータ - ASO またはハイブリッドが有効な BSO
2. 保管されたデータ - BSO
3. 動的計算を含む保管されたデータ - BSO
4. レベル 0 データ - ASO および BSO (クイック・モードでのみ使用可能)

標準ワークフローの使用

標準モードを使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータを抽出し、データをディメンション化するためのメンバー・マッピングを使用して必要な変換を実行し、データを適切なターゲット・アプリケーションにエクスポートします。

- [データ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの登録](#)
- [データ統合の定義](#)
- [統合の実行](#)

データをエクスポートするためのクイック・モード

クイック・モード方法では、標準ワークフロー方法よりもパフォーマンスが大幅に向上します。インポート式を使用した簡単な変換がサポートされており、メンバー・マッピングはサポートされていません。データはステージング表にロードされないため、ワークベンチでデータを表示できません。たとえば、レベル 0 抽出方法では、フィルタを適用して出力ファイ

ルに含める列を選択できます。この方法は、問合せの処理制限に到達せずにシステムから大きなデータ・スライスを抽出する場合に理想的です。

 **Note:**

EPM 統合エージェントを使用したクイック・モード・ロードの詳細は、[EPM 統合エージェントを使用したクイック・モード・ロードの実行](#)を参照してください。

考慮事項:

クイック・モード方法に関連する次の点について検討します:

1. クイック・モード・ロード統合ジョブを作成して保存した場合、それを後で標準統合ジョブに変更することはできません。ただし、データ・ロード統合ジョブを削除することは可能です。
2. ディメンションのマッピング時に、ターゲット式タイプはサポートされません。ターゲット式を使用すると、ソースから読み取ったソース値を、ターゲット・アプリケーションにロードされるターゲット・ディメンション値に変換できます。
期間ディメンションで使用できるターゲット式には、`substring()`、`split()`、`map()`、`toPeriod()`および `toYear()`があります。
SQL ターゲット式タイプを除いて、残りのすべてのターゲット式がサポートされます。
3. ディメンションのマッピング時に、ソース式タイプはサポートされません。
4. メンバーのマッピングはサポートされません。
5. レベル 0 データ抽出方法を選択した場合、Oracle Enterprise Performance Management Cloud からのデータ抽出を実行するために、ビジネス・ルール「DM BR データ・エクスポート」が自動的に作成されます。
6. クイック・モードを使用して複数列のロードを実行する場合、2つのヘッダー行はサポートされません。つまり、2,1 という列フォーマットはサポートされません。
7. クイック・モデルでの期間処理では、「期間マッピング」オプションで定義された期間は使用されません。かわりに、期間は他のディメンションと同じように処理され、「ソース・フィルタ」オプションでフィルタできます。実行時に単一の期間を指定することもでき、この場合、すべてのデータが単一の期間にロードされます。もう 1つの選択肢として、`toPeriod` および `toYear` ターゲット式を使用して、ソース・システムの期間名を基に期間ディメンションを導出します。
8. クイック・モードのロードを実行する場合、有効なエクスポート・モードは次のとおりです:
 - Planning の場合は、「置換」、「マージ」および「累計」
 - Financial Consolidation and Close の場合は、「置換」、「マージ」、「累計」
 「置換」がデフォルトのモードです。
インポート・モードは使用できません
9. 「置換」エクスポート・モードを使用した複数年のロードは、現時点ではサポートされていません。

10. クイック・モード方法を使用してデータがロードされる場合、ソースへの直接ドリル・スルーが必要です。詳細は、[直接ドリルの使用](#)を参照してください。

データを抽出するためのクイック・モード・プロセスの説明


ここでは、クイック・モード方法を使用して、データ・ソースからデータを抽出し、そのデータをデータ・エクスポート・ファイルに直接ロードする方法について説明します。

1. 「**アプリケーション**」で、データのエクスポート先のデータ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの次のタイプのいずれかで、「**データ・エクスポート**」ターゲット・アプリケーションを作成および登録します:
 - ファイルへのデータ・エクスポート
 - オンプレミス・データへのデータ・エクスポート
 - Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート
 - EPM データ・ファイル



Note:

クイック・モードでは、データをファイルにネイティブ・フォーマットでエクスポートできます。このようなエクスポートを実行するには、アプリケーションの EPM データ・ファイルを登録してから統合を定義します(ディメンションのマッピングやメンバーのマッピングはありません。単にシステムからファイルが提供されます)。

詳細は、[データ・エクスポート・ファイル・アプリケーションの登録](#)を参照してください。

2. データ・エクスポート・ファイルに対してソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーション間の統合ジョブを作成します:
 - a. 「**データ統合**」ホーム・ページから、 (「追加」アイコン)をクリックします。
 - b. **統合の作成**ページの「**名前**」および「**説明**」に、統合ジョブの名前および説明を入力します。
 - c. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - d. 「**クイック・モード**」スライダをタップしてオンにします。

統合ジョブをクイック・モード方法に関連付けてからジョブを保存した場合、クイック・モードの関連付けを元に戻すことはできません。ただし、統合ジョブを削除することは可能です。

- e.  「ソース」ドロップダウンから、ソース・アプリケーションを選択します。
- f.  「ターゲット」ドロップダウンから、データ・エクスポート・ファイルのターゲット・アプリケーションを選択します。

Create Integration: DEMOQE

1 General 2 Map Dimensions 3 Map Members 4 Options

* Name DEMOQE

Description

* Location DEMOQE

Quick Mode

Source Vision-VisASO

Target Data Export

* Category Current

< Back Save And Continue > Save Cancel

- g. 「保存して続行」をクリックします。
3. ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーション間でディメンションをマップします:
- a. **ディメンションのマッピング**・ページの「**タイプ**」から、データ・ロード方法のタイプを選択します。

使用可能なオプション:

- 区切り - 数値データ: 数値データ型のみサポートされます。
- 「区切り-すべてのデータ型」では、次のデータ型が **Planning** に対してサポートされます:
 - 数値
 - テキスト
 - スマートリスト
 - データ

Edit Integration: DEMOQE

General Map Dimensions Map Members Options

* Import Format DEMOQE

Vision-VisASO → Data Export

Account	Account	⊕
Amount	Amount	⊕
Entity	Company	⊕
Period	Period	⊕
Product	Product	⊕

Data Integration Data Maps


Save Cancel

- b. 次を実行して、マッピング・グリッドで、ソース列のソースをデータ・エクスポート・ファイルのターゲット・アプリケーションのディメンションにマップします:
- i. 「**ソース・ディメンションの選択**」で、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ディメンションにマップするソース・ディメンションの名前を選択します。
- ii. **オプション**: EPM Cloud ディメンションごとにターゲット式を追加します。
- ターゲット式の使用の詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

 **Note:**

クイック・モード方法で SQL ターゲット式タイプを使用することはできません。




ソース式タイプは、クイック・モード方法では使用できません。

- c. 「保存して続行」をクリックします。
4. クイック・モード方法を使用する場合、「マップ・メンバー」オプションは使用できません。
5. 「オプション」をクリックします。
オプション・ページには、「データ統合」ホーム・ページから、統合ジョブの右側にある  をクリックして「オプション」を選択することで移動することもできます。
6. クイック・モード期間の期間を選択するには、「フィルタ」タブをクリックします。
クイック・モード方法を使用する期間処理では、「期間マッピング」オプションで定義された期間は使用されません。かわりに、期間は他のディメンションと同じように処理され、(ソースの)「フィルタ」オプションでフィルタできます。年および期間に対してフィルタしない場合、実行時に単一期間を指定します。

 **Note:**

統合のディメンションのマッピング・ページで期間ディメンションをマップし、期間のターゲット式を指定している場合、「期間」ドロップダウンは選択に使用できません。期間がマッピングから導出されるためです。

年および期間に対してフィルタを指定しない場合、統合の実行時に単一期間を指定します。

7.  をクリックします。
8. 「ディメンション名」ドロップダウンから、「期間」を選択し、データのロード元のソース・ファイルの単一期間を「フィルタ条件」から選択します。
9.  をクリックします。
10. (オプション): 「ディメンション名」ドロップダウンから、「年」を選択し、データのロード元のソース・ファイルの年を「フィルタ条件」から選択します。
複数期間ロードの場合、年および期間ディメンションのフィルタを指定して、年のすべての期間を選択した場合にのみ複数年を抽出できます。複数の期間にわたる一部期間抽出はサポートされていません。
11. 「保存」をクリックします。
12. 「データ統合」ホーム・ページから、直接統合の右側にある  をクリックし、「オプション」を選択します
13. 「オプション」タブをクリックします。
14. 「カテゴリ」で、「シナリオ」ディメンションの明示的なソース・フィルタを指定します。

カテゴリはソース・システムのデータを分類し、統合内のターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするために使用されます。

カテゴリはクイック・モード処理のシナリオを決定するためには使用されません。

15. 「データの抽出オプション」で、データを抽出するための方法を選択します:

使用可能なオプション:

- すべてのデータ - 保管されている値と、密ディメンションと疎ディメンションの両方について動的に計算された値が抽出されます。
「すべてのデータ」データの抽出オプションでは、データを抽出するために MDX 問合せエクスポート方法が使用されます。
- 保管された動的算出データ - 疎ディメンションは除き、密ディメンションについてのみ、保管されているメンバーおよび動的に計算されたメンバーについて抽出されます。「保管された動的算出データ」データ・オプションでは、データを抽出するために DATAEXPORT コマンド方法が使用されます。
- 保管済データのみ - 保管されているデータのみを抽出します。動的に計算された値は、このタイプの抽出には含まれません。「保管されたデータのみ」オプションでは、データを抽出するために DATAEXPORT コマンド方法が使用されます。
- レベル 0 データ - ディメンションの最下部のメンバー全体(データベースに格納されている RAW データ)が抽出され、フィルタを適用して出力ファイルに含める列を選択できます。この抽出オプションでは、数値以外のデータをエクスポートすることもできます。「レベル 0 データ」オプションでは、データを抽出するために MAXL エクスポート方法が使用されます。この方法は、サービス管理者のみが使用できます。抽出ステップの実行中は、アプリケーションは読取り専用です。

クイック・モード方法を選択した場合、次のターゲット・オプションは使用できません:

- 属性列のエクスポート
- データの累計
- データのソート
- ディメンションのピボット

Filters Options

General Option

Category OEP_Actual

Cube

Source Cube OEP_WFP

Period Mapping Type Default

Calendar

Data Extract Option Level 0 Data

- All Data
- Level 0 Data
- Stored Data only
- Stored and Dynamic Calculated Data (Dense only)

16. オプション・ページで、必要なターゲット・オプションを選択し、「保存」をクリックします。

17. 「保存」をクリックします。

18. 統合を実行します:

a. 「データ統合」ホーム・ページから、クイック・モード・ロードに関連する統合ジョブを選択し、▶をクリックします。

b. 統合の実行ページで、「モード」のデフォルト値は「置換」です。

c. オプション・ページで期間が定義されなかった場合、「期間」ドロップダウンから、データのロード元のソース・ファイルの単一期間を選択します。

統合のディメンションのマッピング・ページで期間ディメンションをマップし、期間のターゲット式を指定している場合、「期間」ドロップダウンは選択に使用できません。期間がマッピングから導出されるためです。

d. 統合に対してフィルタが定義されている場合、「フィルタ」タブをクリックして、必要に応じて変更します。

Run Integration: DEMOQE

Dimension Name	Filter Condition
Entity	"ENTITY1" 眼
Period	"Jan" 眼
Year	"FY21" 眼

Cancel Run


- e. 「実行」をクリックします。

Run Integration: DEMOQE

Options	Filters
Mode	Replace
Period	Jan-21

Cancel Run

次の例は、エンティティおよび期間でフィルタされたデータ・エクスポートの結果を示しています。

 Data Export_1981.dat.txt - Notepad

File Edit Format View Help

```
Period,Company,Product,Account,Amount
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,-123
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,0.099999999999854481
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,333.56699999999955
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41111
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51111
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61111
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71111
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81111
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91111
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91112
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91113
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91114
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11115
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21115
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31115
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41115
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51115
```

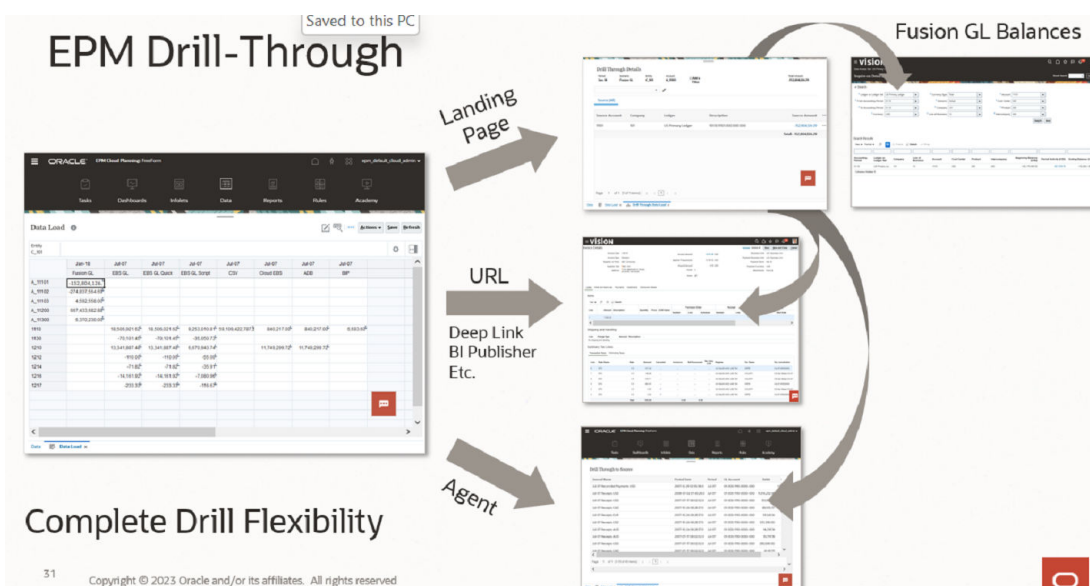
15

ドリル・スルー

データ統合ではデータにドリルでき、ドリル・スルー機能を使用することで、値を構成する内容など、質問に対する回答が得られます。ドリル・スルーを使用すると、データ統合内のソース残高から、データが抽出されたソース・システムに戻ることができます。これによって、ソース値を構成する詳細(トランザクション)データを確認できます。たとえば、期間ディメンション・メンバー「Q4」をドリルダウンすると、「Jan」、「Feb」および「Mar」を確認できます。

ドリル・スルーのタイプの詳細は、次を参照してください:

- [ソースへのドリル・スルーの使用](#)
- [Oracle ERP Cloud へのドリル・スルー](#)
- [Oracle ERP Cloud での BI Publisher レポートへのドリルダウン](#)
- [EPM 統合エージェントのドリルダウンの作成](#)



ソースへのドリル・スルーの使用

データ統合には、ターゲット・アプリケーションからソース・アプリケーションにドリル・スルーできるフレームワークが用意されています。データ値のソースを理解する場合、または値の非常に細かい詳細が必要な場合に、ドリル・スルーを使用します。

ドリル領域は、EPM データ・フォームでドリル可能なセルを識別するために定義されます。ドリル領域はドリル可能なデータ・スライスを指定することによって識別されます。ドリル領域は、次の2つの方法を使用して作成できます:

1. **データ・ロード中に自動作成**—「アプリケーション・オプション」の「ドリル領域の作成」を有効にすると、ドリル領域に参加するよう選択されたディメンションに基づいてド

リル領域が作成されます。詳細は、[アプリケーションのディメンションの詳細の定義](#)を参照してください。

2. **カスタム・ドリル領域**—Essbase メンバー関数を使用してカスタム・ドリル領域を定義できます。これにより、ドリル領域をより細かく制御でき、メンテナンスが容易になります。詳細は、[アプリケーションのドリル詳細の定義](#)を参照してください。

サポートされているドリル・フローは次の 2 つです:

1. **標準ドリル**—このモードでは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ・フォームからランディング・ページにドリルして、ソース・システム・データにドリルします。この方法では、データ統合を使用してデータをロードする必要があります。すべてのビジネス・サービス・タイプでサポートされている完全ワークフロー・モードを使用する必要があります。このモードでは、自動作成されたドリル領域またはカスタム・ドリル領域を使用できます。
2. **直接ドリル**—このモードでは、EPM Cloud データ・フォームからソース・システム・データに直接ドリルします。この場合、完全ワークフロー・モード、クイック・モードを使用してデータをロードすることも、EPM Cloud ビジネス・プロセスに直接ロードすることもできます。このモードは、Account Reconciliation および Profitability and Cost Management ビジネス・プロセスではサポートされていません。このモードでは、カスタム・ドリル領域を定義する必要があります。

ターゲット・アプリケーションからソースにドリル・スルーすると、別のランディング・ページが表示され、選択したセルからの金額を構成するすべての行が示されます。

ノート:

Oracle Essbase にデータをロードするときに別名にマップした場合、ランディング・ページのフィルタでは Essbase のメンバーが使用されるため、ドリル・スルーが失敗することがあります。この場合は、別名のかわりにメンバー名を使用してください。

次の例では、Planning のデータ・フォームからドリル・スルーを実行できます:

The screenshot shows the Oracle Planning and Budgeting Cloud interface. The main window displays a table titled "DF_NS Trial Balance". The table has columns for "Period", "Years", "Scenario", "Version", "Currency", "Entry", "Job", and "Data". The "Period" is "Dec" and "Years" is "FY17". The "Scenario" is "OEP_Forecast" and "Version" is "OEP_Working". The "Currency" is "USD". The "Entry" is "Operations Canada" and "Job" is "Sales Manager".

The table data is as follows:

Period	Years	Scenario	Version	Currency	Entry	Job	Data
Dec	FY17	OEP_Forecast	OEP_Working	USD	Operations Canada	Sales Manager	

Below the table, there is a "Drill Through to source" button. The table content is partially obscured by a modal window, but the following data is visible:

OWP_Value	No Property
E0010	E0009
E0008	E0010
E0008	E0009
E0008	E0008
HEADQUARTER	HEADQUARTER
EMEA	EMEA
EMEA	EMEA
EMEA	EMEA
OWP_Training Expense	
OWP_Basic Salary	

The "OWP_Basic Salary" row shows values: 75,151, 569,000, and 74,782.

このランディング・ページから、ソース・ドキュメントを開いたり、定義されたソース・システムのランディング・ページへのドリル・スルーを続行できます。

Amount Details										Refresh	Close
Year	Period	Scenario	Entity	Account	Version	Employee	Job	Property	Currency		
FY17	Dec	OEP_Forecast	Operations C...	OWP_Basic...	OEP_Working	E0010	Sales Manager	OWP_Value	USD		

Subsidiary - Entity	Account - Account	Description	Name - Employee	Type - Job	Source Data	
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	198.351	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	198.351	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	-149.565	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	75.151	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	75.151	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	-74.782	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	149.565	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	149.565	✕
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	-149.565	✕

ノート:

ドリル・スルー機能は、Planning アプリケーションにロードされた為替レート・データに対してはサポートされません。


直接ドリルの使用

直接ドリルを使用すると、任意のプラットフォームベースのフォームからソース・データに直接ドリル・スルーできます。ソース・データは、外部 URL または EPM 統合エージェント問合せを使用して問い合わせして起動できます。また、標準モードのデータ・ロードの場合、カスタム・ドリル領域を定義して標準ランディング・ページの使用を継続できます。カスタム・ドリル領域では、個々のメンバーではなく Oracle Essbase メンバー関数を使用して、カスタム・ドリル領域を定義できます。

直接ドリルを使用すると、データ統合でデータをステージングしないでソース・データにドリルできます。また、ランディング・ページをバイパスしてドリルを簡素化する柔軟性もあります。さらに、Essbase メンバー関数を使用してドリル領域のスコープをカスタマイズでき、これによりメンテナンスが簡素化されパフォーマンスが向上します。

直接ドリル定義の定義

直接ドリル定義を定義するには:

1. データ統合ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、ローカル・アプリケーションの右側にある  をクリックしてローカル・アプリケーションを選択し、「ドリル詳細」を選択します。

Drill Details: A_EPBCS-OEP_REP

+ ✕ 🗑️

Name	Plan Type	URL Type	Drill URL	Summary Drill
Delimit	OEP_REP	Landing Page		Disabled
Fix	OEP_REP	Landing Page		Disabled
MP	OEP_REP	Landing Page		Disabled

3. ドリル詳細ページで、+ をクリックします。

4. 「定義」タブを選択し、「プラン・タイプ」から、統合を保持するソース・プラン・タイプを選択します。

5. 「URL 名」で、直接ドリルの名前を指定します。

これは、Calculation Manager で開くときの Oracle Essbase のドリル URL 名です。

Essbase の名前の制限が直接ドリルの名前に適用され、次のものがあります：

- 非 Unicode モード・アプリケーションの直接ドリルに名前を付けるときは、8 文字以内にします。
- Unicode モード・アプリケーションの直接ドリルに名前を付けるときは、30 文字以内にします。
- 名前ではスペースを使用しないでください。
- 次の文字を使用しないでください：

Table 15-1 Essbase の命名の制限

文字	説明
*	アスタリスク
[]	大カッコ
:	コロロン
;	セミコロロン
,	カンマ
=	等号
>	大なり記号
<	小なり記号
.	ピリオド
+	プラス記号
?	疑問符
"	二重引用符
'	一重引用符
/	スラッシュ
\	バックスラッシュ

Table 15-1 (Cont.) Essbase の命名の制限

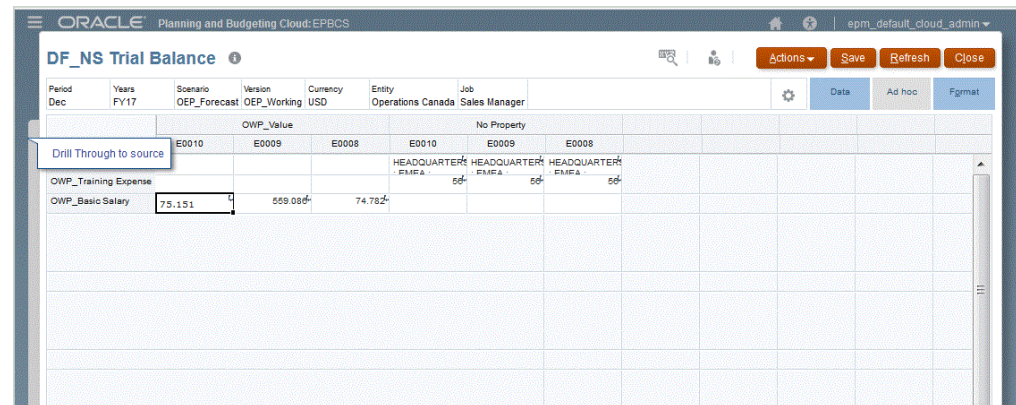
文字	説明
	垂直棒
	タブ

6. 「URL タイプ」 から、直接ドリルに使用する URL のタイプを選択します。

使用可能なタイプ:

- **ランディング・ページ** - ランディング・ページを自動的に起動します。このランディング・ページから、ソース・ドキュメントを開いたり、次に示すように、定義されたソース・システムのランディング・ページへのドリルスルーを続行できます。

次の例では、Planning のデータ・フォームからドリル・スルーを実行できます:



このランディング・ページから、ソース・ドキュメントを開いたり、定義されたソース・システムのランディング・ページへのドリル・スルーを続行できます。

Year	Period	Scenario	Entity	Account	Version	Employee	Job	Property	Currency
FY17	Dec	OEP_Forecast	Operations C...	OWP_Basic ...	OEP_Working	E0010	Sales Manager	OWP_Value	USD

Subsidiary -Entity	Account -Account	Description	Name -Employee	Type -Job	Source Data
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	198.351
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	198.351
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	-149.555
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	75.151
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	75.151
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	-74.782
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	149.555
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	149.555
HEADQUARTERS: EMEA...	Amount		Trade Industries - Spain	Invoice	-149.555

Note:

ドリル・スルー機能は、Planning アプリケーションにロードされた為替レート・データに対してはサポートされません。

Essbase にデータをロードするときに別名にマップした場合、ランディング・ページのフィルタでは Essbase のメンバーが使用されるため、ドリル・スルーが失敗することがあります。この場合は、別名のかわりにメンバー名を使用してください。

- カスタム** - カスタム直接ドリル領域定義に関連付けられた URL を使用し、ドリル・スルーの結果を別のブラウザで表示します。
 この設定をプラン・タイプに使用してカスタム・ドリルを定義すると、デフォルトのドリル作成でそのプラン・タイプのドリル領域は作成されません。カスタム・ドリルが定義されている場合、ドリル領域の作成フラグは無視されません。
- エージェント** - SQL 問合せおよびサーバー情報に基づいてパラメータを使用します。この場合、サーバー情報はエージェントから取得されますが、URL の残りの部分は SQL 問合せで指定されたパラメータから導出されます。この URL タイプを使用するには、ドリル URL にデータ・ソース、問合せ、および渡すパラメータが含まれている必要があります。

7. 「ドリル URL」で、カスタムおよびエージェント直接ドリル・スルー定義の URL アドレスを指定します。

カスタム URL タイプの場合、ドリル URL にサーバー、ポートおよび URL パラメータが含まれている必要があります(例: `https://server:port/<URL Parameters>`)。

カスタム・ドリル URL を次に示します。ランディング・ページをバイパスする場合、これは直接ドリル URL です。

URL Type Custom

Drill URL `POST@https://server:port/fscmUI/gldrillthrough?attribute=system.ds.essbase&attribute=server.ds.Essbase_FA_Cluster&attribute=app.ds.VisionOperationsRI&attribute=database.ds.db&attribute=Ledger.id.[VisionOperationsRI US]&attribute=Balance Amount.id.[Balance Amount].[Ending Balance]&attribute=Amount Type.id.[Amount Type].[YTD]&attribute=AccountingPeriod.id.[Jan-18]&attribute=Scenario.id.[Scenario].[Actual]&attribute=Currency Type.id.Total&attribute=Currency.id.[USD]&attribute=Company.id.[All Company Values].[$Entity$]&attribute=Department.id.[All Department Values].[111]&attribute=Account.id.[All Account Values].[$Account$]&attribute=Sub Account.id.[All Sub Account Values].[0000]&attribute=Product.id.[All Product Values].[000]&ssso_token=NA&linktype=SV&applicationtype=fr&applicationversion=11.1.2&format=web&bpm.logoff=false`

エージェント URL タイプの場合、ドリル URL にデータ・ソース・アプリケーション名、SQL 問合せおよび数値列が含まれている必要があります。

- DATASOURCE** - データのロードに使用されるデータ・ソース・アプリケーションの名前を指定します。ソース接続情報は、このアプリケーションから導出されます。
- QUERY** - ドリルの実行に使用される SQL 問合せを指定します。
- NUMERIC** - 適切に調整されるように数値列を指定します。

URL Type Agent

Drill URL `DATASOURCE=TDATASEG&QUERY=DRILLQUERY&ACC=|Account$|ENT=$Entity$`

EPM 統合エージェントを使用したドリル・スルーの詳細は、[EPM 統合エージェントのドリルダウンの作成](#)を参照してください。

8. 「アプリケーション詳細」で、「サマリー・ドリルを使用可能にする」オプションを選択して、データ・フォームまたはレポートでサマリー・メンバーからドリルダウンし、数字を構成する詳細ソース・データを表示します。

このオプションを有効にし、「ドリル領域の作成」オプションを「はい」に設定した状態でデータをロードすると、「ドリル」アイコンがサマリー・レベルで有効になります。1つのディメンションに対して、ドリルできる下位メンバーの数は1000に制限されています。

「アプリケーション詳細」の詳細は、[アプリケーション詳細オプションの定義](#)を参照してください。

Note:


サマリー・ドリルをサポートするには、ドリルの問合せでSQLのWHERE句に演算子を含めないでください。たとえば、問合せを次のようにする必要があります: WHERE COMPANY ~ENTITY~。子孫の数に基づいて、適切な条件(IN、LIKE)が決定されます。


9. 「保存」をクリックします。

直接ドリル定義を保存すると、Essbaseでドリル領域が自動的に作成または更新されます。ドリル詳細を削除すると、Essbaseでも削除されます。

10. 「ドリル領域」タブでドリル領域を指定します。

詳細は、[カスタム・ドリル領域の定義](#)を参照してください。


11. **オプション:** 既存の直接ドリル定義を編集するには、**ドリル詳細**ページで、定義を選択して  をクリックします。

既存の直接ドリル定義を削除するには、**ドリル詳細**ページで、定義を選択して  をクリックします。


カスタム・ドリル領域の定義

メンバー名およびメンバー関数を使用して定義された Oracle Essbase ドリル・スライスを提供するドリル領域を指定できます。

ドリル領域を定義するには:


1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、ローカル・アプリケーションを選択し、アプリケーションの右側にある  をクリックして、「ドリル詳細」を選択します。
3. **オプション:** **ドリル詳細**ページで、+ をクリックして新しい直接ドリル定義を作成します。

[直接ドリル定義の定義](#)を参照してください。

Dimension	Filter
Account	"A Curr" 
Entity	"Marketing US"
Period	"Aug"
Years	"FY17"

4. 「ドリル領域」タブを選択します。
5. + をクリックします。
6. 「ディメンション」ドロップダウンから、ドリル領域に追加するディメンションを選択します。
7. 「フィルタ」で、選択したディメンションのメンバー関数を指定して、指定したメンバーのみに結果を制限します。

引用符("")で囲んでメンバーを指定します。たとえば、メンバー July を"Jul"として指定します。

 をクリックしてメンバー・セレクタ・ページを表示し、選択するメンバーに移動します。詳細は、*Smart View for Office ユーザーズ・ガイド 22.100* のメンバー・セレクタからのメンバーの選択を参照してください。

8. 「保存」をクリックします。


ドリルスルー・ランディング・ページへのカスタム・ビューの追加


Oracle Enterprise Performance Management Cloud のランディング・ページでデータにドリル・スルーする場合、列のカスタム・ビューを作成して選択できます。この機能を使用すると、ランディング・ページの表示をカスタマイズできます。ソース列のリストをカスタマイズし、列および列タイトルを順序付けることができます。カスタム・ビューの定義は保存できます。後続のドリルでは、最後に使用したカスタム・ビューが使用されます。カスタム・ビューがない場合は、「ソース(すべて)」がデフォルト・ビューとして使用されます。


Note:


Oracle Smart View for Office にドリルするときに、データ統合ではドリルのランディング・ページで最後に使用されたビューが使用されます。最後に使用されたビューが見つからない場合は、データ統合では、この設定のデフォルトのビュー選択が使用されます。

ドリルのカスタム・ビューを定義するには:

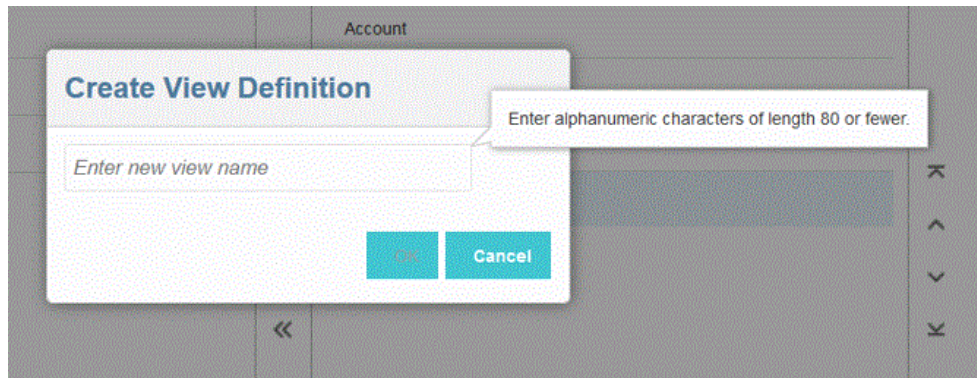
1. ホーム・ページから「ナビゲータ」をクリックし、**タスクおよびレポートの「データ」** ( Data) を選択します。
2. ロードされたソース・データを含むフォームを開きます。

セルの右上隅のアイコン  は、ドリルスルー・データがあることを示します。

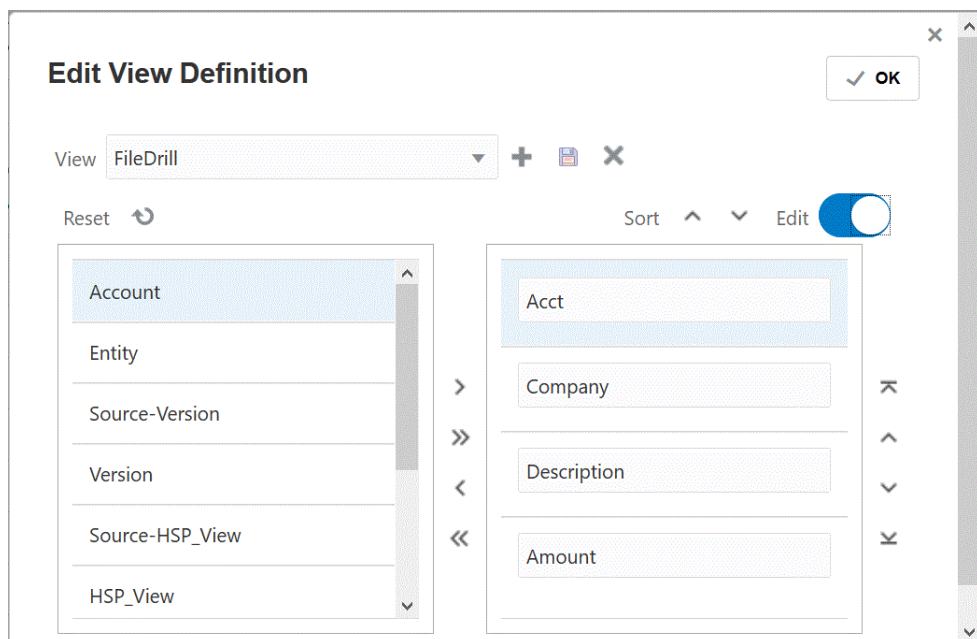
3. ドリルダウン・データを含んでいるセルで、セルを右クリックしてから「**ソースにドリル・スルー**」を選択します。
4. カスタム・ビュー定義の作成元にするデフォルト・ビューを選択します。
5.  をクリックします。

6. **ビュー定義の編集** ページから、 をクリックします。
7. 「**ビュー定義の作成**」ウィンドウで、カスタム・ビュー定義の名前を入力し、「**OK**」をクリックします。

ビュー定義名には英数字を使用できます。ビュー定義名は 80 文字以下です。



ビュー定義の編集ページが新規ビュー用に初めて表示されたとき、すべての列が(「列の表示」)右ペインに表示されます。カスタム・ビューに含めない列はすべて(「使用可能な列」)左ペインに移動します。



8. カスタム・ビューに列を含めるには、(「使用可能な列」)左ペインから列を選択し、**>** をクリックして(「列の表示」)右ペインに移動します。







ビュー内の移入された値をクリアするには、「リセット」をクリックします。

9. カスタム・ビューから列を除外するには、(「列の表示」)右ペインから列を選択し、**<** をクリックして(「使用可能な列」)左ペインに移動します。

その他の移動オプションは、次のとおりです:


- すべての列を(「使用可能な列」)左ペインから(「列の表示」)右ペインに移動するには、**>>** をクリックします。
- すべての列を(「列の表示」)右ペインから(「使用可能な列」)左ペインに移動するには、**<<** をクリックします。

10. **オプション:** (「列の表示」)右ペインで列の名前を変更するには、列を選択し、「編集」スライダをタップしてオンにしてから新しい列名を入力します。

11. **オプション:** (「列の表示」)右ペインで列を並べ替えるには、列を選択し、次のいずれかを選択します:
 -  一列を表示の最上部に移動します。
 -  一列を表示の 1 つ上に移動します。
 -  一列を表示の 1 つ下に移動します。
 -  一列を表示の最下部に移動します。
12. **オプション:** 「ソート」をクリックして、「列の表示」ペインで列を昇順または降順でソートします。
13. 「OK」または  をクリックして、ビュー定義を保存および更新します。
14. **オプション:** ビューを削除するには、 をクリックします。

アプリケーションのドリル詳細の定義

直接ドリル定義を定義するには:

1. **データ統合**ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、ローカル・アプリケーションの右側にある  をクリックしてローカル・アプリケーションを選択し、「ドリル詳細」を選択します。

Drill Details: A_EPBCS-OEP_REP

Name	Plan Type	URL Type	Drill URL	Summary Drill
Delimit	OEP_REP	Landing Page		Disabled
Fix	OEP_REP	Landing Page		Disabled
MP	OEP_REP	Landing Page		Disabled

3. **ドリル詳細**ページで、+ をクリックします。
4. **ドリル詳細の定義**・ページを選択し、「プラン・タイプ」から、統合を保持するソース・プラン・タイプを選択します。

5. 「URL 名」に、ドリルの名前を指定します。

これは、Calculation Manager で開くときの Oracle Essbase のドリル URL 名です。

Essbase の名前の制限が直接ドリルの名前に適用され、次のものがあります:

- 非 Unicode モード・アプリケーションの直接ドリルに名前を付けるときは、8 文字以内にします。
- Unicode モード・アプリケーションの直接ドリルに名前を付けるときは、30 文字以内にします。
- 名前ではスペースを使用しないでください。
- 次の文字を使用しないでください:

Table 15-2 Essbase の命名の制限

文字	説明
*	アスタリスク
[]	大カッコ
:	コロン
;	セミコロン
,	カンマ
=	等号
>	大なり記号
<	小なり記号
.	ピリオド
+	プラス記号
?	疑問符
"	二重引用符
'	一重引用符
/	スラッシュ
\	バックスラッシュ
	垂直棒
	タブ

6. 「URL タイプ」から、直接ドリルに使用する URL のタイプを選択します。

使用可能なタイプ:

- **ランディング・ページ** - ランディング・ページを自動的に起動します。このランディング・ページから、ソース・ドキュメントを開いたり、次に示すように、定義されたソース・システムのランディング・ページへのドリルスルーを続行できます。

次の例では、**Planning** のデータ・フォームからドリル・スルーを実行できます:

The screenshot shows the Oracle Planning and Budgeting Cloud interface. The main window displays a 'DF_NS Trial Balance' table. The table has columns for 'OWP_Value' and 'No Property'. The 'OWP_Value' column is further divided into sub-columns: E0010, E0009, E0008, E0010, E0009, and E0008. The 'No Property' column is divided into sub-columns: HEADQUARTERS EMEA, HEADQUARTERS EMEA, and HEADQUARTERS EMEA. The table contains data for 'OWP_Training Expense' and 'OWP_Basic Salary'. A 'Drill Through to source' button is highlighted in the top left corner of the table area.

このランディング・ページから、ソース・ドキュメントを開いたり、定義されたソース・システムのランディング・ページへのドリル・スルーを続行できます。

The screenshot shows the 'Amount Details' window in Oracle Planning and Budgeting Cloud. The window displays a table with columns: Year, Period, Scenario, Entity, Account, Version, Employee, Job, Property, and Currency. The data row shows: Year: FY17, Period: Dec, Scenario: OEP_Forecast, Entity: Operations C..., Account: OWP_Basic..., Version: OEP_Working, Employee: E0010, Job: Sales Manager, Property: OWP_Value, Currency: USD. Below the main table, there is a 'View' section with a 'Detach' button. The 'View' section displays a list of details for the account, including columns for Subsidiary-Entity, Account-Account, Description, Name-Employee, Type-Job, and Source Data. The details list includes multiple rows for 'HEADQUARTERS: EMEA...' with various amounts and source data.

Note:

ドリル・スルー機能は、**Planning** アプリケーションにロードされた為替レート・データに対してはサポートされません。

Essbase にデータをロードするときに別名にマップした場合、ランディング・ページのフィルタでは **Essbase** のメンバーが使用されるため、ドリル・スルーが失敗することがあります。この場合は、別名のかわりにメンバー名を使用してください。

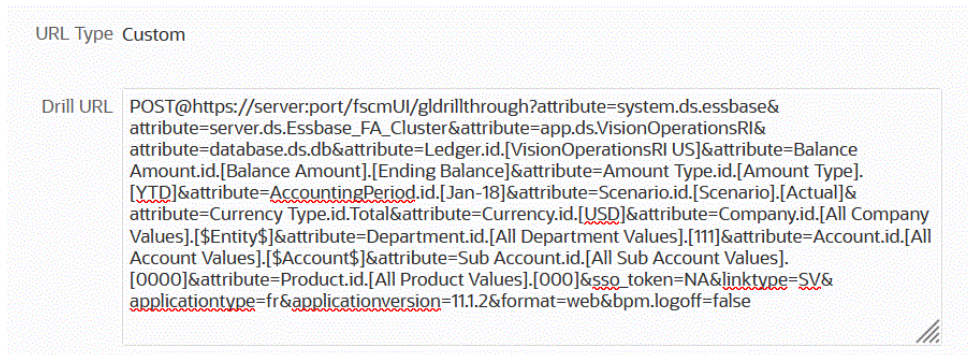
- **カスタム** - カスタム直接ドリル領域定義に関連付けられた URL を使用し、ドリル・スルーの結果を別のブラウザで表示します。

この設定をプラン・タイプに使用してカスタム・ドリルを定義すると、デフォルトのドリル作成でそのプラン・タイプのドリル領域は作成されません。カスタム・ドリルが定義されている場合、ドリル領域の作成フラグは無視されます。

- **エージェント - SQL** 問合せおよびサーバー情報に基づいてパラメータを使用します。この場合、サーバー情報はエージェントから取得されますが、URL の残りの部分は SQL 問合せで指定されたパラメータから導出されます。この URL タイプを使用するには、ドリル URL にデータ・ソース、問合せ、および渡すパラメータが含まれている必要があります。
7. 「**ドリル URL**」で、カスタムおよびエージェント直接ドリル・スルー定義の URL アドレスを指定します。

カスタム URL タイプの場合、ドリル URL にサーバー、ポートおよび URL パラメータが含まれている必要があります(例: `https://server:port/<URL Parameters>`)。

カスタム・ドリル URL を次に示します。ランディング・ページをバイパスする場合、これは直接ドリル URL です。



エージェント URL タイプの場合、ドリル URL にデータ・ソース・アプリケーション名、SQL 問合せおよび数値列が含まれている必要があります。

- **DATASOURCE** - データのロードに使用されるデータ・ソース・アプリケーションの名前を指定します。ソース接続情報は、このアプリケーションから導出されます。
- **QUERY** - ドリルの実行に使用される SQL 問合せを指定します。
- **NUMERIC** - 適切に調整されるように数値列を指定します。



EPM 統合エージェントを使用したドリル・スルーの詳細は、[EPM 統合エージェントのドリルダウンの作成](#)を参照してください。

8. 「**アプリケーション詳細**」で、「**サマリー・ドリルを使用可能にする**」オプションを選択して、データ・フォームまたはレポートでサマリー・メンバーからドリルダウンし、数字を構成する詳細ソース・データを表示します。

このオプションを有効にし、「ドリル領域の作成」オプションを「はい」に設定した状態でデータをロードすると、「ドリル」アイコンがサマリー・レベルで有効になります。1つのディメンションに対して、ドリルできる下位メンバーの数は 1000 に制限されています。

「アプリケーション詳細」の詳細は、[アプリケーション詳細オプションの定義](#)を参照してください。

 **Note:**


サマリー・ドリルをサポートするには、ドリルの問合せで SQL の WHERE 句に演算子を含めないでください。たとえば、問合せを次のようにする必要があります: **WHERE COMPANY ~ENTITY~**。子孫の数に基づいて、適切な条件(IN、LIKE)が決定されます。


9. 「保存」をクリックします。

直接ドリル定義を保存すると、Essbase でドリル領域が自動的に作成または更新されます。ドリル詳細を削除すると、Essbase でも削除されます。

10. 「ドリル領域」タブでドリル領域を指定します。

詳細は、[カスタム・ドリル領域の定義](#)を参照してください。


11. **オプション:** 既存の直接ドリル定義を編集するには、**ドリル詳細**ページで、定義を選択して  をクリックします。

既存の直接ドリル定義を削除するには、**ドリル詳細**ページで、定義を選択して  をクリックします。

Oracle ERP Cloud へのドリル・スルー

ドリル・スルーにより、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger 勘定科目残高サマリー・ページを表示できます。

Oracle ERP Cloud と統合する場合、データ統合では接続情報に基づいて、システムや固定情報などのドリル URL 定義が自動的に設定されます。Oracle ERP Cloud にドリル・スルーする場合は設定する必要はありません。

 **ノート:**

Oracle General Ledger へのドリル・スルーでは、GL セグメント値、元帳名および期間名でマルチバイト文字を使用できません。

 **ノート:**

Oracle Transactional Business Intelligence (OTBI) アドホック・レポートから Oracle Fusion Applications のトランザクション詳細へのドリル・ダウンの詳細は、[OTBI ERP レポートから Fusion Financial アプリケーションへのドリル・ダウン](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud での BI Publisher レポートへのドリルダウン

Oracle ERP Cloud で Oracle Business Intelligence Publisher レポートからのデータを統合すると、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードされた勘定科目残高データに関連付けられたソースにドリルダウンできます。

Oracle ERP Cloud での BI Publisher レポートへのドリルダウン・プロセスの説明

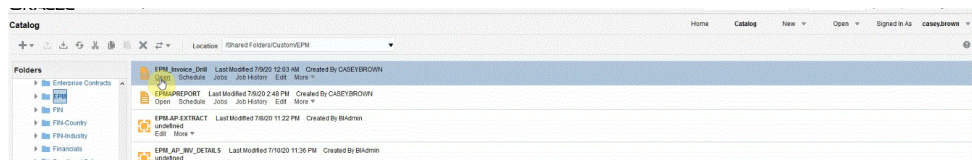
Oracle Enterprise Performance Management Cloud から Oracle Business Intelligence Publisher レポートにドリルダウンする方法の概要を次に示します

1. ドリルのターゲットとして使用する BI Publisher レポートを定義します。これには、問合せ抽出、データ・モデルおよび必須パラメータが含まれます。

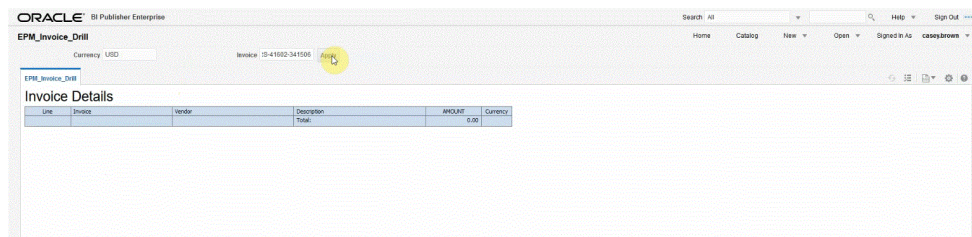
詳細は、次を参照してください:

- [データ抽出プロセスの定義](#)
- [BI Publisher レポート抽出のデータ・モデルの作成](#)

2. 元の BI Publisher レポートに基づく必要なパラメータが含まれたドリルダウン BI Publisher レポートを作成します。



たとえば、「通貨」や「請求書」を含める場合があります。



結果には、通貨および請求書詳細のパラメータを使用した EPM Cloud からのドリルスルーで使用される「請求書詳細」レポートが表示されます:

ORACLE BI Publisher Enterprise

EPM_Invoice_Drill

Currency: USD Invoice: IS-41802-341506 Apply

EPM_Invoice_Drill

Invoice Details

Line	Invoice	Vendor	Description	AMOUNT	Currency
1	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
2	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
3	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
4	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
5	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
6	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
7	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
8	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
9	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
10	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
11	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
12	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
13	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
14	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
15	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
16	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
17	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
18	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
19	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
20	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	67.00	USD
21	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	269.00	USD
22	ERS-41802-341506	Edison Co	Expense Software	269.00	USD

- データ統合で、BI Publisher レポート・データ・ソースを使用するアプリケーションを作成します。

詳細は、[Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録](#)を参照してください。

- 新しい統合を作成し、ソースとしてのデータ・ソース・アプリケーションおよびターゲット・アプリケーションを選択します。次に、残りのステップを実行して統合を作成します。

Create Integration: EPMGLBalances

< Back Save And Continue > Save Cancel

1 General 2 Map Dimensions 3 Map Members 4 Options

* Name: EPMGLBalances

Description: [Text Field]

* Location: EPMGLBalances

Direct load:

Source: EPMReport

Target: Vision

* Cube: Plan1

* Category: Actual

- インポート・フォーマット、ロケーションおよびディメンション・マッピングを作成することにより、Oracle ERP Cloud データ・ソースとターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。

[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

- ディメンションのマッピング**・ページの「ドリル URL」で、ドリルスルー・レポートのパラメータを入力します。

これらのパラメータはワークベンチから参照され、ドリルスルーを動的にします。


Edit Drill URL ✕

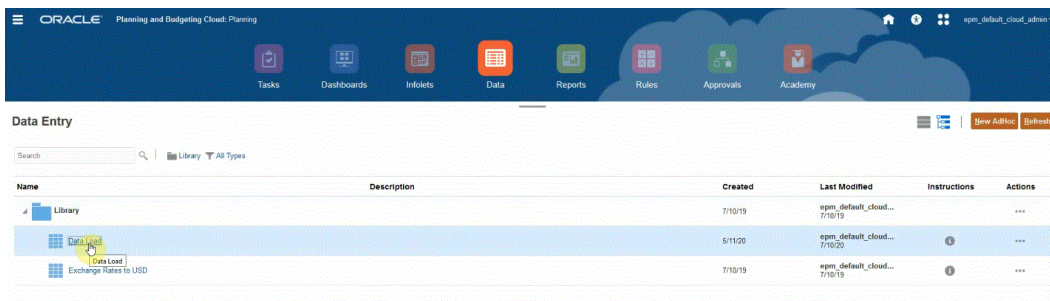
```
https://<SERVER>/xmlpserver/Custom
/EPM/EPM_Invoice_Drill.xdo?_xmode=4&
INVOICE_NBR=$ATTR1$&CURRENCY=$CURKEY$
```

OK
Cancel

- c. メンバーをソースからターゲットにマップします。
メンバーのマッピングを参照してください。
 - d. ソースおよびターゲットのオプションを選択します。
データ統合オプションの設定を参照してください。
 - e. 統合を実行します。
統合の実行を参照してください。
- 統合の実行後、ソース・データがワークベンチに表示されます。


Source-SEGMENT1	Account	Source-SEGMENT1	Entity	Source-SOURCE	Version	Amount	Source-Amount
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	2,389.96	2,389.96
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	611.01	611.01
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	1,154.66	1,154.66
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	11,156.38	11,156.38
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	473.53	473.53
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	519.59	519.59
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	7,162.92	7,162.92
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	19,269.60	19,269.60
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	2,489.24	2,489.24
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	1,851.66	1,851.66
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	2,489.24	2,489.24
22100	20-Other Cash ...	110	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	1,234.62	1,234.62
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	2,034,375.39	2,034,375.39
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	1,627,500.67	1,627,500.67
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	1,220,624.96	1,220,624.96
22100	20-Other Cash ...	120	ERP Cloud	Version1	ERP Cloud Ada...	97,613.49	97,613.49

5. ホーム・ページから「ナビゲータ」をクリックし、タスクおよびレポートの「データ」( Data)を選択します。
6. データの入力 ページの「ライブラリ」の下から、ロードされたソース・データを含むフォームを開きます。

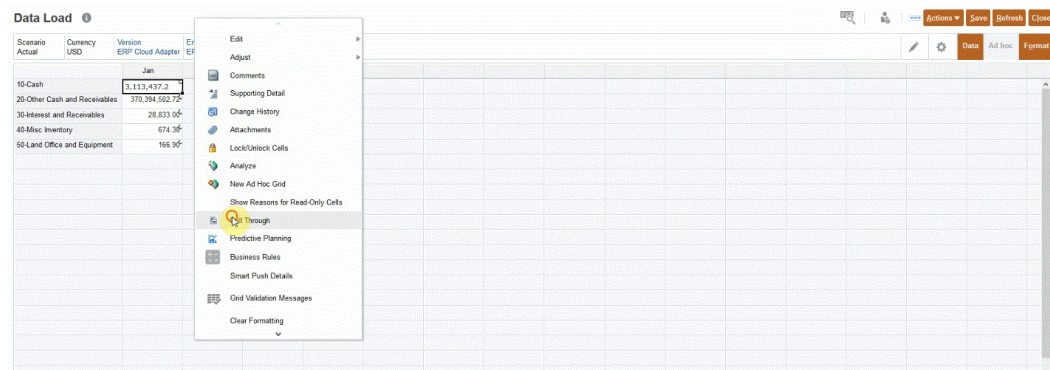


7. ドリルダウン・データを含むセルを選択します。

Scenario	Currency	Version	Entity	Years
Actual	USD	ERP Cloud Adapter	ERP Cloud	FY20
Jan				
10-Cash				5,113,437.2
20-Other Cash and Receivables				370,394,502.72
30-Interest and Receivables				28,833.00
40-Misc Inventory				674.30
50-Land Office and Equipment				166.90

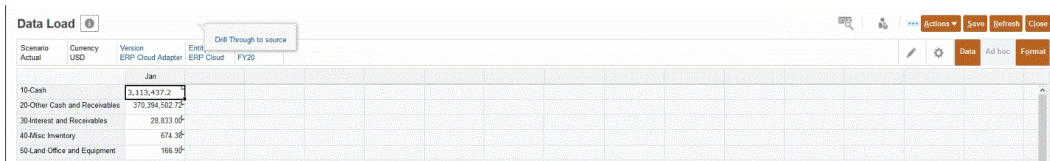
セルの右上隅のアイコン  は、ドリルスルー・データがあることを示します。

8. ドリルダウン・データを含むセルを右クリックし、「ドリル・スルー」を選択します。



「ドリル・スルー」を選択することによって、EPM Cloud のデータ・フォームから Oracle ERP Cloud の BI Publisher レポートにドリルできます。

9. データ・ロード・ページで、「ソースにドリル・スルー」リンクをクリックします。



10. 金額詳細ページで、金額を右クリックして「ソースにドリル・スルー」を選択します。

Amount Details Refresh Close

Year	Period	Scenario	Entity	Account	Version	Currency	Total Amount
FY20	Jan	Actual	ERP Cloud	10.Cash	ERP Cloud Ada...	USD	3,113,437.20

View EP Detach

SEGMENTS Entity	SEGMENTS Account	Description	Version	Amount
303	2210	Invoice ERS-41575-338479	Version1	7,772.00
303	2210	Invoice ERS-41578-338482	Version1	
303	2210	Invoice ERS-41426-312432	Version1	
303	2210	Invoice ERS-41425-312433	Version1	
303	2210	Invoice ERS-41532-331479	Version1	61,797.60
303	2210	Invoice ERS-41533-331480	Version1	20,599.20
303	2210	Invoice ERS-41426-312434	Version1	7,787.60
303	2210	Invoice ERS-41427-312435	Version1	8,656.80
303	2210	Invoice ERS-41463-320440	Version1	2,227.60
303	2210	Invoice ERS-41463-320441	Version1	12,714.00
303	2210	Invoice ERS-41464-320443	Version1	17,226.00
303	2210	Invoice ERS-41412-312420	Version1	5,762.00
303	2210	Invoice ERS-41413-312421	Version1	7,787.60
303	2210	Invoice ERS-41578-338483	Version1	9,814.00
303	2210	Invoice ERS-41463-320442	Version1	13,982.00
303	2210	Invoice ERS-41469-323489	Version1	5,496.00

11. 詳細ページで、ドリルスルーの結果を確認します。

EPM_Invoice_Drill

Invoice Details

Line	Invoice	Vendor	Description	AMOUNT	Currency
1	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	89.00	USD
2	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
3	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	89.00	USD
4	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	886.00	USD
5	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	89.00	USD
6	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	89.00	USD
7	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	89.00	USD
8	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Services	89.00	USD
9	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
10	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
11	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
12	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
13	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
14	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
15	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
16	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
17	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
18	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	1,134.00	USD
19	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
20	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
21	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
22	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	284.00	USD
23	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
24	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
25	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
26	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
27	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
28	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
29	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
30	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
31	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
32	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
33	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
34	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
35	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
36	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
37	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
38	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
39	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD
40	ERS-41575-338479	Windsor Inc	Electricity	71.00	USD

オプションで、詳細ページの下部までスクロールして、残高を構成する詳細を EPM Cloud で確認できます。

EPM_Invoice_Drill					
76	ERS-41575-338479	Windsor Inc	creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
77	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
78	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
79	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
80	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
81	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
82	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
83	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
84	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
85	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
86	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
87	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
88	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
89	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
90	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
91	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
92	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
93	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
94	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
95	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
96	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
97	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
98	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
99	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	56.80	USD
100	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	56.80	USD
101	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	28.40	USD
102	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	28.40	USD
103	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
104	ERS-41575-338479	Windsor Inc	The receipt invoice ERS-41575-338479 has a creation date of 2020-04-12.	14.20	USD
Total:				7,772.40	

EPM 統合エージェントのドリルダウンの作成

オンプレミス・データ・ソースに統合するとき、ソースをドリルダウンして、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードされた勘定科目残高データに関連する詳細を表示できます。使用可能なランディング・ページに応じて、2 タイプのドリルを実行できます:

1. ソース・システムに、詳細なソース・データを表示するランディング・ページがある場合は、**http URL** を使用して、ランディング・ページにコンテキスト・パラメータを渡してページにアクセスします。この方法を使用するには、他のソース統合と同様に、「ディメンションのマッピング」ページで **http ドリル URL** を定義し、代替変数を使用して **URL** パラメータを渡します。
2. ソース・システムに、詳細なソース・データを表示するランディング・ページがない場合は、**EPM 統合エージェント** を使用して、ソース・データベースで **SQL** 問合せを実行し、その結果をデータ統合内のポップアップ・ウィンドウに表示します。この方法を使用するには、**https** モードで稼働する **Web サーバー** が必要です。**Web サーバー** では、ドリル要求を受け入れて、エージェントにルーティングします。詳細は、[ランディング・ページがないソース・システムへのドリル・ダウンの作成](#) を参照してください。

その他の考慮事項:

- SYNC モードおよび ASYNC モードで使用できます

- HTTPS サーバーが必要です
- 内部ネットワークの場合、開かれたポートは必要ありません
- Oracle Smart View for Office のネットワーク内ドリルには、HTTPS サーバーは必要ありません。
- ネットワークの外部のパブリック・インターネットからのドリルには、パブリック対応の HTTPS サーバー/ポートが必要です
- ドリル要求をエージェント URL にリダイレクトするようにリライト・ルールを構成します。
- `https://<server>/epmagent/rest/details` でテストします

EPM 統合エージェントを使用したソースへのドリル・スルー

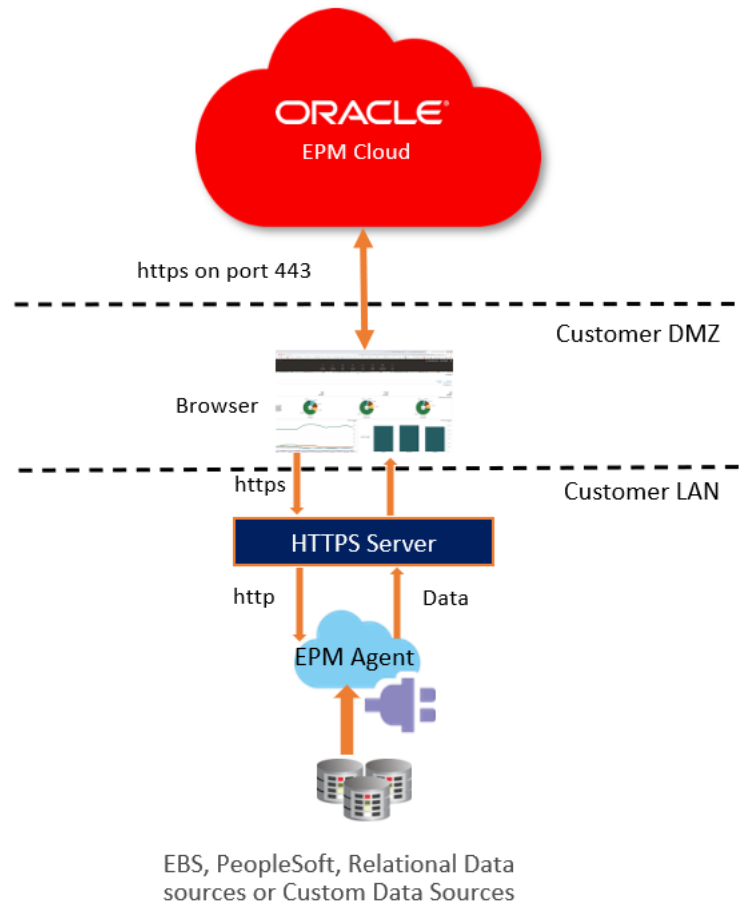
EPM 統合エージェントを使用したソースへのドリル・スルーは、EPM 統合エージェントが非同期または同期モード・オプションについてどのように構成されているかに関係なくサポートされています。

Web フォームの使用時に、EPM 統合エージェントを使用してソースにドリル・スルーすると、ブラウザがエージェントを起動し、HTTP プロトコルを使用して問合せおよび他のパラメータを渡します。エージェントは問合せリクエストを処理し、ユーザーに表示されるデータをブラウザに返します。Oracle Enterprise Performance Management Cloud へのブラウザ・セッションでは HTTPS プロトコルが使用されるため、ブラウザからエージェントへの通信では HTTPS が使用されます。

ブラウザでは、同じセッションにおける HTTP 接続と HTTPS 接続の混在は許可されません。ドリルをサポートするには、次の構成ステップを実行します:

1. オンプレミス・ネットワーク内に HTTPS Web サーバーをインストールして構成します。
2. Web サーバーのリライト・ルールを、ドリルのリクエストをエージェント URL にリダイレクトするように構成します(同期エージェントの定義と同じです。[同期モードの構成](#)を参照してください)。
3. HTTPS Web サーバーを指すようにエージェントの Web URL を構成します。
4. オプション: エージェントのドリルスルー設定をテストするには、次の URL を使用して、Web サーバーのリライト・ルールが正しく定義されていることを確認します: `https://server/epmagent/rest/details`。

設定をテストするときは、`server` をエージェント設定で定義されている Web URL に置換します。



 **Note:**

前述の構成では、ブラウザを実行するクライアント・コンピュータがオンプレミス・ネットワーク内にある場合にのみ、ドリルがサポートされます。ブラウザが内部ネットワーク内になくてもドリルを使用できるようにする場合は、**HTTPS Web** サーバーをパブリック・アクセス可能として有効にしてください。

 **Note:**

Smart View の使用時にソースへのドリル・スルーを実行する場合、**HTTPS Web** サーバーの追加構成は必要ありません。**Smart View** で、新しいシートで開くようにドリル・スルー起動を設定してください。

ランディング・ページがないソース・システムへのドリル・ダウンの作成

ランディング・ページがないソース・システムにドリルダウンするときは、ソース・データベースで **SQL** 問合せを実行し、その結果をデータ統合内のポップアップ・ウィンドウに表示します。

ドリル・スルーの問合せを作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、「**アクション**」をクリックし、「**問合せ**」を選択します。
2. 「**問合せ**」画面で、**+**をクリックします。
3. 「**問合せの作成**」画面の「**問合せ名**」で、ソース・システムからデータを問い合わせる問合せの名前を指定します。
4. 「**問合せ文字列**」で、ファイルのヘッダー行に基づいてデータを抽出するのに使用する SQL 文を指定します。

ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できます。

ヘッダー行の文字列を指定するとき、文字列が大/小文字混在の場合は、文字列を二重引用符で囲みます。大/小文字混在の文字列が二重引用符で囲まれていない場合は、大文字として解決されます。

問合せにはフィルタ条件を含めることができます。フィルタ条件のバインド変数は、~~文字内に囲む必要があります。

Create Query

Query Name	QUERY
Query String	<pre>SELECT JOURNAL_NUM, ACCOUNT, JOURNAL_DESC, DR_AMOUNT, CR_AMOUNT FROM JOURNAL_INFES WHERE ACCOUNT = ~SOURCE_ACCT~ AND PERIOD. = ~SOURCE_PERIOD~</pre>

Save

Cancel

5. 「**保存**」をクリックします。
6. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にあり、ドリル・スルーを追加するための **+** をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
7. 「**ディメンションのマッピング**」ページの「**ドリル URL**」で、ドリル・ペン・アイコンをクリックします。
「ディメンションのマッピング」ページの詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。
8. 「**ドリル URL の編集**」ページで、**#agent** タグを指定し、ドリル・スルー URL のパラメータを指定します。

たとえば、ステップ 4 に示す問合せを使用すると、**#agent?QUERY=Source Drill Query&SOURCE_ACCOUNT=\$ACCOUNT&SOURCE_PERIOD=\$ATTR1\$**と入力します。ここで:

- QUERY は、ステップ 3 で定義した問合せの名前です。
 - SOURCE_ACCOUNT は、ACCOUNT 列から導出されます。
 - SOURCE_PERIOD は、ATTR1 列から導出されます
9. ソース列の列をドリル・スルー先のターゲット・アプリケーションのディメンションにマップし、「保存」をクリックします。
 10. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「エージェント」を選択します。
 11. 「エージェント・クラスタ」画面から、ドリル・スルーで使用するエージェントの名前を選択します。
 12. 「エージェント」タブの「Web URL」で、Oracle Enterprise Performance Management Cloud からのインバウンド通信を可能にする Web サーバー・ゲートウェイを選択します。

同期モードを使用している場合は、データ・ロード操作を実行するために定義した Web サーバー URL を使用してドリルを実行します。追加の設定は必要ありません。

非同期モードでエージェントを使用している場合は、次のいずれかの方法を使用して URL を定義します:

- 同期モードを構成した方法と同様に https Web サーバーを構成します。[同期モードの構成](#)を参照してください。
- エージェント URL を Web サーバー URL として割り当てます。https ページから http URL にアクセスした結果として、ブラウザのセキュリティ設定で例外を定義する必要があります。

Chrome の場合は、「Settings」、「Privacy and security」、「Insecure content」の順に選択し、「Allow」で、サイト*.oraclecloud.com を追加します。

ノート:

非同期モードで実行しているときにドリルするには、エージェントが実行されているローカル・ネットワークにいる必要があります。

EPMCLUSTER : Synchronous

< Return

Agents			Assignments	
Name	Physical URL	Web URL	Description	Last Ping
EPMAGENT	http://[redacted].us.oracle.com:9090	http://<WebServer URL>.us.oracle.com		Sep 13, 2019 05:40:55 PM

16

データの同期

データの同期により、単一の Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセス内のキューブ(プラン・タイプ)間でデータを移動したり、異なる環境の 2 つの EPM Cloud ビジネス・プロセス間でデータを移動できます。

たとえば、データの同期を使用して次のようにデータを移動します:

- Planning の入力キューブからレポート・キューブへ
- 実績を Financial Consolidation and Close から Planning のレポート・キューブへ(差異レポートのため)。

データ同期プロセスの説明

単一の Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスにデータを移動するためにデータを同期するおおまかなステップは次のとおりです:

1. 同じ EPM Cloud ビジネス・プロセス内でレポート・キューブにデータを移動するには:
 - a. **アプリケーション・ページ**から、「**EPM ローカル**」アプリケーションを追加し、レポート・キューブを選択します。
 - b. 「**OK**」をクリックしてアプリケーションを登録します。

Create Application

Category EPM Local

Application EPBCS

Cubes Reporting Cubes - OEP_REP

Prefix

OK Cancel

詳細は、[アプリケーションの登録](#)を参照してください。

2. **全般** ページで、同期するソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーション間の統合を作成します。

データを **ASO** または **BSO** アプリケーションに同期し、ターゲットが入力キューブである場合は、「**キューブ**」からターゲットの入力キューブを選択します。

Create Integration: Data Sync

← Back Save And Continue > Save Cancel

1 General 2 Map Dimensions 3 Map Members 4 Options

* Name Data Sync

Description

* Location Data Sync

Quick Mode

Source Vision

Target EPBCS

* Cube FinCube

* Category Actual

詳細は、[直接統合の作成](#)を参照してください。

3. **ディメンションのマッピング** ページで、ソースとターゲット間でディメンションをマップします。

同期がすべての関連要素を認識できるように、各ソースおよびターゲットに対応するディメンションをマップします。

ソース・メンバーとターゲット・メンバーが同じ場合は、ターゲット式を定義し、式として **copySource()** を選択します。詳細は、次を参照してください [ソース値のコピー](#)

さらに、データを変換するための他の式を定義できます。

- ソース式の詳細は、[ソース式の使用](#)を参照してください。
- ターゲット式の詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

 **Note:**

データ統合で年次累計(YTD データ)ではなく期別データがロードされるように、ディメンションをマッピングするときに期別値ディメンションをハードコードする必要があることがあります。





Edit Integration: Data Sync

Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

* Import Format Data Sync

Vision → EPBCS

Account	Account	
Amount	Amount	
Amount	Entity	
Select Source Dimension	Component	

ディメンションのマッピングの詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

4. **マップ・メンバー** ページで、各ディメンションのメンバーをマップし、ソースからの既存のソース値に基づいてターゲット・システムのメンバーを使用します。

詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。

5. **オプション** ページで、ソース・フィルタ、全般オプション、ターゲット・オプションなどの統合パラメータを定義します。

全般オプションの詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください。

「**フィルタ**」タブでディメンションを選択し、そのフィルタ基準を入力します。たとえば、予算データのサブセットを指定して **Planning** ソースから抽出し、ターゲットにロードできます。詳細は、[Planning フィルタの定義](#)を参照してください。

General Map Dimensions Map Members **Options**

Filters Options Clear Region Business Rules

+ 窓

Dimension Name	Filter Condition	
Account	"OWP_Training Expense"	限
Age Band	"No Age Band"	限
Component	"No Component"	限
Employee	"No Employee"	限
Entity	"Operations Canada"	限
Gender	"No Gender"	限
Job	"No Job"	限
Period	"Sep"	限
Scenario	"OEP_LRP"	限

「**オプション**」タブの「**全般オプション**」の下で、ソース・キューブ、期間マッピング・タイプ(デフォルトまたは明示)およびデータの抽出オプションを選択します。

Edit Integration: Data_Sync Save Cancel

General Map Dimensions Map Members **Options**

Filters Options Clear Region Business Rules

General Option	Target Option
Category Actual	Load Method Numeric Data Only
Cube FinCube	Batch Size 10000
Period Mapping Type Default	Drill Region <input type="checkbox"/>
Calendar	Purge Data File <input type="checkbox"/>
Integration Option 1	Date format for date data MM-DD-YYYY
Integration Option 2	Data Dimension for Auto-Increment Line Item
Integration Option 3	Driver Dimension for Auto-Increment Line Item
Integration Option 4	Member name may contain comma Yes
Data Extract Option All Data	Enable Data Security for Admin Users <input type="checkbox"/>

データの抽出オプションの詳細は、[直接統合オプションの定義](#)のステップ 7 データの抽出オプションを参照してください。

「**ターゲット・オプション**」の下で、ロード方法、日付フォーマット、バッチおよびページ・オプションを含むデータのロード方法など、ターゲットへのデータのロード方法を管理するオプションを選択します

ターゲット・オプションの詳細は、[ターゲット・オプションの定義](#)を参照してください。

6. **統合の実行** ページから統合を実行して、ソースとターゲットの同期を実行します。

詳細は、[統合の実行](#)を参照してください

クイック・モード・データ同期

クイック・モード・データ同期機能を使用すると、Oracle Enterprise Performance Management Cloud のビジネス・プロセス内またはビジネス・プロセス間でデータを移動できます。この方法により、EPM Cloud ビジネス・プロセス内でのデータ移動のパフォーマンスが向上します。

クイック・モード・データ同期プロセスの説明

クイック・モードでデータを同期して単一の Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスにデータを移動するステップ、または異なる環境の 2 つの EPM Cloud ビジネス・プロセス間でデータを移動するステップをおおまかに示します。

クイック・モードを使用してデータを同期するには:

1. 同じ EPM Cloud ビジネス・プロセス内でレポート・キューブにデータを移動するには:
 - a. **アプリケーション・ページ**から、「**EPM ローカル**」アプリケーションを追加し、レポート・キューブを選択します。
 - b. 「**OK**」をクリックしてアプリケーションを登録します。

Create Application
✕


Category

Application

Cubes

Prefix

詳細は、[アプリケーションの登録](#)を参照してください。

2. **全般**ページで、同期するソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーション間の統合を作成します。
 - a. 統合を作成するときは、「**クイック・モード**」スライダをタップしてオンにします(Quick Mode )。

統合ジョブをクイック・モード方法に関連付けてからジョブを保存した場合、クイック・モードの関連付けを元に戻すことはできません。ただし、統合ジョブを削除することは可能です。

- b. データを ASO または BSO アプリケーションに同期し、ターゲットが入力キューブである場合は、「キューブ」からターゲットの入力キューブを選択します。

Edit Integration: AtoBDir3 Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

* Name: AtoBDir3 * Location: AtoBDir3

Description:

Quick Mode:

Source: EPBCS-EPBCS Target: EPBCS

* Cube: OEP_WFP * Category: OEP_LRP

詳細は、次を参照してください [直接統合の作成](#)

3. **ディメンションのマッピング**・ページで、ソースとターゲット間でディメンションをマップします。

同期がすべての関連要素を認識できるように、各ソースおよびターゲットに対応するディメンションをマップします。

Note:

データ統合で年次累計(YTD データ)ではなく期別データがロードされるように、ディメンションをマッピングするときに期別値ディメンションをハードコードする必要があることがあります。

ソース・メンバーとターゲット・メンバーが同じ場合は、ターゲット式を定義し、式として **copySource()** を選択します。詳細は、[ソース値のコピー](#)を参照してください。

さらに、データを変換するための他の式を定義できます。

- ソース式の詳細は、[ソース式の使用](#)を参照してください。
- ターゲット式の詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

Edit Integration: AtoBDir3 Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

* Import Format: AtoBDir3

EPBCS-EPBCS EPBCS

Account	Account <small>constant("AT_child")</small>
Amount	Amount
Currency	Currency <small>constant("USD")</small>
Entity	Entity <small>constant("TY US")</small>

ディメンションのマッピングの詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

4. **メンバー・マッピング**はサポートされていません。

5. **オプション** ページから、フィルタ、ソース・オプションを選択し、キューブ(プラン・タイプ)、期間マッピング・タイプ(デフォルトまたは明示)、ターゲット・オプションおよびデータの抽出オプションを選択します。

「**フィルタ**」タブでディメンションを選択し、そのフィルタ基準を入力します。たとえば、予算データのサブセットを指定して **Planning** ソースから抽出し、ターゲットにロードできます。詳細は、[Planning フィルタの定義](#)を参照してください。

Edit Integration: AtoBDir3 Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

Filters Options Clear Region Business Rules

+ 食

Dimension Name	Filter Condition	
Account	"A1_child"	既
Entity	"A1_child_Ent"	既
Scenario	"OEP_No Scenario"	既
Version	"OEP_Target"	既

「**オプション**」タブで「**全般オプション**」の下のオプションを選択して、キューブ(プラン・タイプ)、期間マッピング・タイプ(デフォルトまたは明示)、データの抽出方法などの全般オプションを追加または変更します。

 **Note:**

「データの抽出オプション」の方法をレベル 0 エクスポートとして使用し、2つのサービス間でデータを移動する場合、ソース・インスタンスで統合を定義し、データをターゲット・インスタンスにプッシュする必要があります。ターゲット・インスタンスで統合を定義してデータ・プルを実行することはできません。データ・プルを使用する場合は、保管されたデータまたは「すべてのデータ」抽出オプションを使用します。

データの抽出オプションの詳細は、[直接統合オプションの定義](#)のステップ 7 データの抽出オプションを参照してください。

Edit Integration: Data_Sync Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

Filters Options Clear Region Business Rules

General Option Target Option

Category	Actual	Load Method	Numeric Data Only
Cube	FinCube	Batch Size	10000
Period Mapping Type	Default	Drill Region	<input type="checkbox"/>
Calendar		Purge Data File	<input type="checkbox"/>
Integration Option 1		Date format for date data	MM-DD-YYYY
Integration Option 2		Data Dimension for Auto-Increment Line Item	
Integration Option 3		Driver Dimension for Auto-Increment Line Item	
Integration Option 4		Member name may contain comma	Yes
Data Extract Option	All Data	Enable Data Security for Admin Users	<input type="checkbox"/>

ソース・オプションの詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください。

「**ターゲット・オプション**」の下で、ロード方法、日付フォーマット、バッチおよびページ・オプションを含むデータのロード方法など、ターゲットへのデータのロード方法を管理するオプションを選択します

ターゲット・オプションの詳細は、[ターゲット・オプションの定義](#)を参照してください。

6. 「**統合の実行**」で、クイック・モードでデータ同期を実行します。
統合の実行の詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

17

データの統合

この章では、データ統合を使用してデータを統合する方法について説明します。

Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger 残高の統合

Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger 残高データを Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションと統合できます。この統合では、必要なソース元帳を Oracle ERP Cloud から選択し、いくつかの単純なマッピングを設定してボタンを押すのみで、データが EPM Cloud アプリケーションに取り込まれます。この統合は、手動で実行することも、特定の時間にスケジュールすることも可能です。

ノート:

平均日次残高(ADB)元帳は、現在の統合ではサポートされません。

ノート:

データ統合では Oracle General Ledger との統合の一部として、Financials Accounting Hub (FAH)および Financial Accounting Hub Reporting Cloud Service (FAHRCS)もサポートされます。

データ統合によって、Oracle General Ledger アプリケーションへのドリル定義が自動的に設定されます。

データ統合では、データのロードのみでなく、Oracle ERP Cloud へのライトバックも簡単になります。

統合プロセスの説明

Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger データを Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションと統合する方法の概要は、次のとおりです:

1. データ統合で、Oracle ERP Cloud の接続情報を構成し、Oracle ERP Cloud をデータ・ソースとして登録します。

詳細は、ソース接続の構成を参照してください。

2. Oracle ERP Cloud (GL 残高)からのデータを必要とする EPM Cloud アプリケーションを登録します。

詳細は、[EPM Cloud アプリケーションの登録](#)を参照してください。

3. 1 つ以上の EPM Cloud アプリケーションへのデータのロード元となる、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger アプリケーションを登録し、Oracle General Ledger アプリケーションをインポートします。

アプリケーションのインポート・プロセスによって、Oracle General Ledger のデータが EPM Cloud システムに Oracle Essbase キューブとして取り込まれます。それぞれの Essbase アプリケーションは、ソースの Oracle ERP Cloud の勘定体系定義を表します。

詳細は、[Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録](#)を参照してください。

4. ソース・アプリケーションとターゲットの EPM Cloud アプリケーションの間の統合を作成します。

詳細は、[Oracle ERP Cloud \(GL 残高\)との統合の作成](#)を参照してください。

5. EPM Cloud アプリケーションと Oracle General Ledger セグメント内のセグメントのディメンションの間でディメンションをマップします。

詳細は、次を参照してください [ディメンションのマッピング](#)

6. 転送中に Oracle General Ledger の勘定体系値を EPM Cloud のディメンション・メンバーに変換するためにメンバーをマップします。

詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。

7. **オプション**・ページで、フィルタとアプリケーション・オプションを選択します。

Essbase キューブのすべてのディメンションを含むデフォルト・フィルタが用意されています。キューブには重複するメンバーが含まれていることがあるため、完全修飾されたメンバー名が必要です。Essbase キューブにより Oracle General Ledger セグメントが減り、Oracle General Ledger で勘定体系と元帳は 1 対多の関係になります。

統合の作成時、データ統合でフィルタが作成されます。必要に応じてフィルタを変更できますが、削除はできません。(フィルタが削除されると、データ統合でデフォルト値が再作成されます)。これらのフィルタの詳細は、[を参照してください Oracle General Ledger フィルタの定義](#)

8. **オプション**: EPM Cloud アプリケーションに残高をロードするときのソースの Oracle General Ledger からの調整期間を定義します。

9. 任意のフィルタを使用して統合ジョブを実行します。

このプロセスによって、Oracle General Ledger からデータが抽出されて EPM Cloud にロードされます。

10. **オプション**: EPM Cloud のデータを Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger にライトバックします。



EPM Cloud ソース・システムから Oracle General Ledger にデータをライトバックするには、統合を設定して実行します。この場合、EPM Cloud アプリケーションに対してフィルタが適用されます。

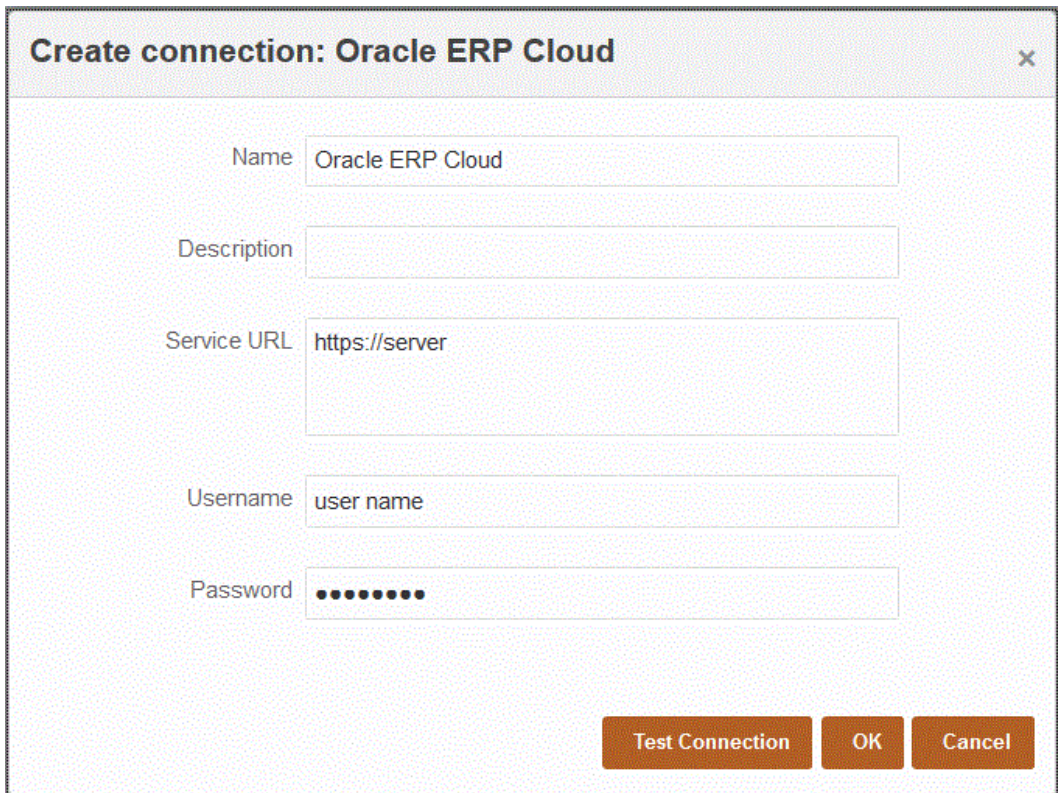
オプションで、カスタム・ターゲット・アプリケーションを使用して、予算データを EPM Cloud からフラット・ファイルにライトバックできます。この出力ファイルは、他のアプリケーションにデータをロードするために使用できます。

ソース接続の構成

Oracle General Ledger と Oracle Enterprise Performance Management Cloud との統合を開始するには、まず"Oracle ERP Cloud"への接続を作成します。

Oracle ERP Cloud への接続を定義するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。
3. 接続ページで、 («追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「Oracle ERP Cloud」を選択します。



The image shows a dialog box titled "Create connection: Oracle ERP Cloud". It contains several input fields: "Name" with the value "Oracle ERP Cloud", "Description" (empty), "Service URL" with the value "https://server", "Username" with the value "user name", and "Password" (masked with dots). At the bottom right, there are three buttons: "Test Connection", "OK", and "Cancel".

4. 「名前」に、ソース・システム名を入力します。
5. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
6. サービス URL に、Web サービスのサービス情報を入力します。
7. 「ユーザー名」に、Oracle ERP Cloud のユーザー名を入力します。

EPM Cloud と Oracle ERP Cloud の間で情報を送信するためのプロセス要求を開始する Oracle ERP Cloud ユーザーの名前を入力します。このユーザーには、"Financial Analyst"、"General Accountant"、"General Accounting Manager"などの Oracle General Ledger のジョブ役割が割り当てられている必要があります。

8. 「パスワード」に、Oracle ERP Cloud のパスワードを入力します。

このパスワードは、Oracle ERP Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。

9. 「**接続のテスト**」をクリックします。

接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。

10. 「**OK**」をクリックします。

Oracle General Ledger アプリケーションの登録

Oracle ERP Cloud からの Oracle General Ledger データを Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションと統合する場合、「アプリケーション」を使用して Oracle ERP Cloud をデータ・ソース・アプリケーション・タイプとして指定し、アプリケーションをインポートして、EPM Cloud ターゲット・アプリケーションと Oracle General Ledger 残高を統合するソースとして使用できるようにします。アプリケーションをインポートすると、ソースの Oracle General Ledger データが EPM Cloud システムに Essbase キューブとして取り込まれます。それぞれの Essbase アプリケーションは、ソースの Oracle General Ledger の勘定体系定義を表します。

Oracle ERP Cloud をデータ・ソースとして定義するには:


1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、**Oracle ERP Cloud** を選択します。
5. 「**接続**」で、接続の名前を指定します。
たとえば、**Fusion** と指定します。
6. 「**アプリケーション・フィルタ**」で、ロードのフィルタを指定します。
アプリケーション・フィルタは、Oracle ERP Cloud からインポートするアプリケーションの名前をフィルタするために使用されます。たとえば、**Vision USA** やワイルド・カード **Vision%** などの特定のアプリケーション名でフィルタ処理できます。
7. 「**アプリケーションのインポート**」をクリックし、Oracle General Ledger アプリケーションを登録して初期化します。

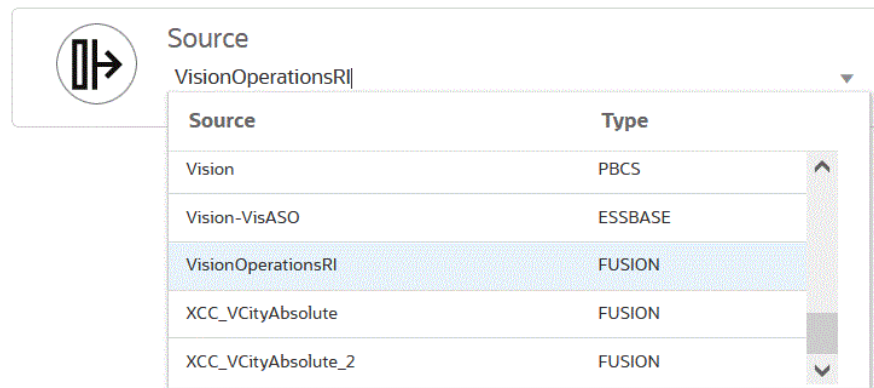
Oracle ERP Cloud (GL 残高)との統合の作成


Oracle ERP Cloud から一般会計残高をロードするには、ソース Oracle General Ledger アプリケーションと Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの間の統合を作成します。

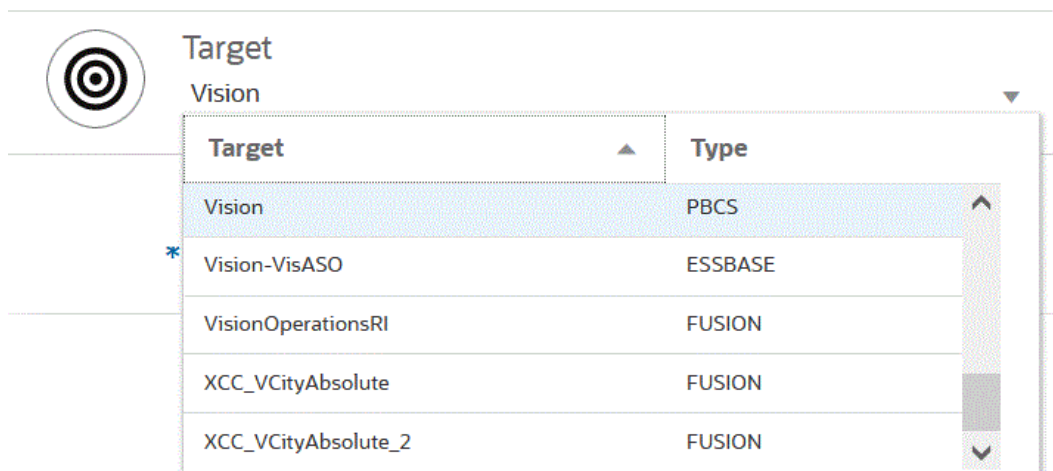
Oracle General Ledger アプリケーションと EPM Cloud ターゲット・アプリケーションの間の統合を作成するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、**+** をクリックして新しい統合を作成します。

2. **統合の作成** ページで、「名前」 および 「説明」 に、新しい統合の名前および説明を入力します。
3. 「ロケーション」 に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
4. 「ソース」 () ドロップダウンから、Oracle ERP Cloud ソースを選択します。



5. 「ターゲット」 () ドロップダウンから、EPM Cloud ターゲット・アプリケーションを選択します。




6. 「キューブ」 から、ターゲット・アプリケーションのプラン・タイプを選択します。
7. 「カテゴリ」 で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。
リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。詳細は、[カテゴリ・マッピングの使用](#)を参照してください。
8. **オプション**: 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。

9. 「保存」をクリックします。

ロケーション属性の定義

ロケーション属性を使用すると、ロードされるデータのタイプをロケーションによって絞り込むことができます。たとえば、US ドルなどの機能通貨を選択できます。

ロケーション属性を編集するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページで、ロケーション属性を定義する統合の右側にある  をクリックし、ドロップダウンから「**全般**」を選択します。
2. **統合の編集** ページで、「**ロケーション属性**」をクリックします。
3. 「**機能通貨**」で、そのロケーションの機能通貨を指定します。
4. 「**親のロケーション**」に、ロケーションに割り当てられた親を入力します。

親マッピングは他のロケーションとのマッピングの共有に使用されます。親ロケーションにマッピングを入力します。関連するロケーションが同じマッピングを使用できます。複数のロケーションが親を共有できます。この機能は、複数のロケーションが勘定科目の 1 つのチャートを使用している場合に役立ちます。子または親のマッピング表を変更すると、子と親のすべてのロケーションに適用されます。

ノート:

ロケーションに親がある場合、子にマッピングが引き継がれます。ただし、マッピングに対する変更は、親ロケーションについてのみ実行できます。

5. 「**ロジック勘定科目グループ**」で、ロケーションに割り当てるロジック勘定科目グループを指定します。

ロジック・グループには、ソース・ファイルがロードされた後に生成される 1 つ以上のロジック勘定科目が含まれます。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ロジック・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。
6. 「**確認エンティティ・グループ**」で、ロケーションに割り当てる確認エンティティ・グループを指定します。

確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てた場合、確認レポートは、グループで定義されているすべてのエンティティについて実行されます。確認エンティティ・グループをロケーションに割り当てない場合、確認レポートは、ターゲット・システムにロードされたエンティティごとに実行されます。データ管理の確認レポートは、ターゲット・システム、データ統合ソース・データまたはデータ統合の変換済データから直接値を取得します。

確認エンティティ・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。
7. 「**確認ルール・グループ**」で、ロケーションに割り当てる確認ルール・グループを指定します。

システム管理者は、確認ルールを使用してデータの整合性を強化します。確認ルールのセットが確認ルール・グループ内に作成され、確認ルール・グループがロケーションに割り当てられます。続いて、データがターゲット・システムにロードされた後、確認レポートが生成されます。

確認ルール・グループの値のリストは、作成先のターゲット・アプリケーションに基づいて自動的にフィルタされます。

8. 「保存」をクリックします。

カテゴリ・マッピングの使用

Oracle ERP Cloud のデータを統合する際、ソース・システム・データを分類し、ターゲットの Oracle Enterprise Performance Management Cloud シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするカテゴリ・マッピングを選択できます。たとえば、Oracle ERP Cloud アプリケーションの実際の残高を格納するための「実績」と呼ばれるシナリオ・ディメンション・メンバーを持つことができます。Planning アプリケーションでは、同じソース・システム・データは、シナリオ・ディメンション・メンバー「現在」を使用して格納されます。データ統合では、1つのカテゴリ・マッピングを作成して、それぞれのシナリオを表す1つの名前をどちらにも付与できます。これを行うには、「カテゴリ・マッピング」オプションを使用します。カテゴリの定義の詳細は、[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。


ディメンションのマッピング

ディメンションをマッピングすることにより、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションと Oracle General Ledger アプリケーションのディメンションの間でソース・ディメンシヨナリティをターゲット・ディメンシヨナリティに変換する方法を定義できます。

ノート:

Oracle General Ledger で、勘定体系とカレンダーの組合せごとに1つの Essbase キューブが作成されます。この場合、同じインポート・フォーマットを使用して、この勘定体系を共有する元帳からデータをインポートできます。元帳は、データ・ロード・ルールでフィルタとして指定できます。

ソース Oracle General Ledger アプリケーションと EPM Cloud ターゲット・アプリケーションの間でディメンションをマッピングするには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ディメンションのマッピング」を選択します。
2. **ディメンションのマッピング** ページの「インポート・フォーマット」で、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. マッピング・グリッドで、ソースのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。


ターゲット・アプリケーションのディメンションが自動的に移入されます。

統合に対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。

新規のインポート・フォーマットを追加する場合や、既存のインポート・フォーマットを編集する場合は、次の手順を実行します:

- 「列」で、ファイルからインポートするフィールド番号を指定します。
- 「ソース・ディメンションの選択」で、ターゲット・アプリケーションに割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。
同じディメンションの複数のソース列をターゲット・ディメンションにマッピングできます。たとえば、4 つの"Account"ソース列をマッピングできます。
- ソースまたはターゲットの式を追加します。ソースまたはターゲットから直接値を操作する式を割り当てます。

[ソース式の使用](#)および[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

オプション: カンマ区切りファイルの場合、行の右側にある  をクリックし、追加する行をドロップダウンから選択することにより、インポート・フォーマットにマッピングする追加行を選択します。

使用可能な行:

- ソース期間
 - * 年
 - * 期間
 - * 期間番号
- 通貨
- 属性
- 説明
- ディメンション行
 - * 勘定科目
 - * バージョン
 - * エンティティ
 - * 表示

行をスキップすることもできます。

4. 「保存」をクリックします。

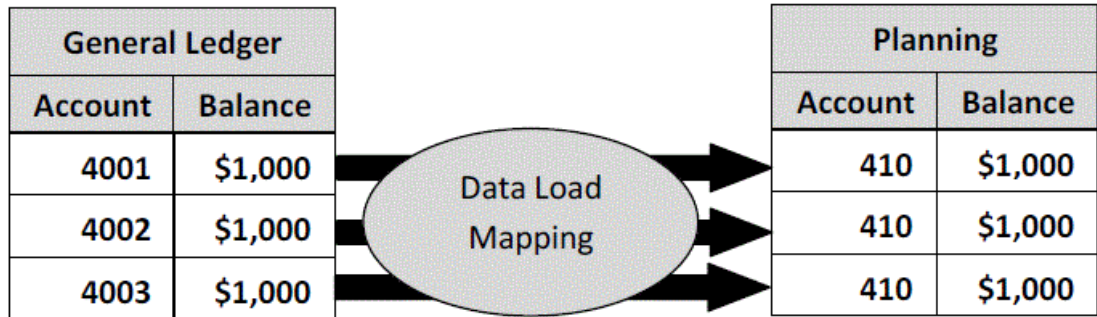
メンバーのマッピング

メンバーをマップすると、転送中に Oracle General Ledger の勘定体系値が Oracle Enterprise Performance Management Cloud のディメンション・メンバーに変換されます。これによってデータ統合で Oracle General Ledger の残高を分類できます。


次の例では、勘定体系セグメントに基づいて Oracle General Ledger で管理費用が 4001-4003 の範囲の勘定科目に分けられます。

Planning では、管理費用の予算はディメンション値 410 の管理費用とされます。

この例は、Oracle General Ledger の 4001-4003 の範囲の勘定科目の実績金額が Planning の 410 管理費用にどのようにマップされるかを示しています。



Planning のディメンション値と Oracle General Ledger の勘定体系値の間に差異が生じることがあります。また、予算策定時に勘定科目表のセグメントが使用されないことがあります。たとえば、予算策定に使用されない勘定体系セグメントに対してゼロの値(サブ勘定科目の値として"0000"など)をマップできます。

 **ノート:**

ロードの前に Oracle General Ledger の値に更新がない場合でも、ディメンションに対するメンバー・マッピングを作成してデータ統合にターゲット値を作成するよう示す必要があります。

マップ・メンバーを定義するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある **...** をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します。
2. **マップ・メンバー**・ページで、「**ディメンション**」ドロップダウンから、マップするディメンションを選択します。

勘定科目ディメンションとエンティティ・ディメンションは Oracle General Ledger から転送されたものであるため、少なくとも、これらのディメンションの値はマップします。


その他の体系セグメントを転送する場合、各宛先ディメンションに対するマッピングを用意する必要があります。

3. 「**マッピング・タイプ**」ドロップダウンからメンバー・マッピング・タイプを選択し、ソース値を指定します。

メンバー・マッピングのタイプ:

マッピングのタイプ	説明	関連項目
== Explicit	<p>ソース値をターゲット値と照合して、完全一致したターゲット値で置換します。</p> <p>明示マッピングは、1 対 1 のマッピングです。たとえば、ソース値"ABC"はターゲット値"123"に置換されます。</p>	「明示」マッピングの使用


マッピングのタイプ	説明	関連項目
↔ Between	<p>連続したソース値範囲を 1 つのターゲット値で置換します。</p> <p>たとえば、「001」から「010」までの範囲が 1 つの値に置換されます。</p> <p>別の例として、300000 から 3001999 までの勘定科目を利益剰余金にマッピングするが、勘定科目 310000 を資本拠出または配当にする必要があるとします。</p>	「範囲」マッピングの使用
IN o n	<p>1 つのターゲット値にマッピングする非シーケンシャルな(連続しない)ソース値をリストします。</p> <p>この場合、1 つのマッピング内で複数の値が 1 つの値にマッピングされるため、(明示マップでは必要な)複数のルールを作成する必要がなくなります。</p> <p>たとえば、ソース勘定科目 1503、1510 および 1515 をターゲット勘定科目 15000010 にマッピングできます。</p>	「含む」マッピングの使用
🔍 Is Like	<p>特殊文字を使用して、ソース値の文字列を照合し、それをターゲット値にマッピングします。</p> <p>類似マッピングでは、アスタリスク(*)および疑問符(?)のワイルドカード文字を使用します。アスタリスクは、任意の数の文字を表すプレースホルダです。</p> <p>たとえば、1190*と指定すると、勘定科目 1190、1190100 および 1190-200 が現金ターゲット勘定科目にマッピングされます。</p> <p>疑問符は、1 文字を表すプレースホルダです。たとえば、119? というソース勘定科目は、119 で始まる 4 文字を含むソース勘定科目のみにマッピングされません。</p>	「類似」マッピングの使用

マッピングのタイプ	説明	関連項目
 Is Multi Dimensional	<p>マルチディメンション・マッピングを使用すると、ソース列値の特定の組合せに対してターゲット値を割り当てることができます。</p> <p>この機能を使用すると、ターゲット・アプリケーションで使用可能でないディメンションにデータをロードできます。</p> <p>たとえば、勘定科目ディメンションのマッピングは、エンティティ、製品およびプロジェクトのソース値に基づいて定義できます。</p> <p>さらに、ターゲット・アプリケーション登録に追加された参照ディメンションを選択できます。これらのディメンションは、ターゲット・アプリケーションに存在しないソース・ディメンションを含みます。これらにより、マルチディメンション・フィルタの作成の柔軟性が増します。これで、条件付きのデータ・ロードが容易になります。</p>	マルチディメンショナル・マッピングの使用

 **ノート:**

変換用のソース値を処理する場合、特定のソース値に複数のマッピングが適用される場合があります。優先度の順位は、「明示」、「範囲」、「含む」、マルチディメンショナル、「類似」の順です。「範囲」タイプと「類似」タイプ間ではマッピングが重複する場合があります。

4.  をクリックして、新しいメンバー・マッピングを追加します。

また、マッピングを選択して「編集」アイコン  をクリックすると、新しいマッピングを追加せずに、必要に応じて既存のマッピングを編集することもできます。

5. **メンバー・マッピングの追加** ページの「ソース」から、ターゲット・ディメンション・メンバーにマップするソース・ディメンション・メンバーを選択します。

Oracle General Ledger からの値を入力します。値を直接入力します。

すべてのメンバーを変更せずにそのまま EPM Cloud ビジネス・プロセスにマップするには、「ソース」に*を入力し、「ターゲット」に*を入力します。

6. 「ターゲット」に、予算情報のロードに使用する会計シナリオの値を入力します。

転送される Oracle General Ledger の実際の残高を保管するために EPM Cloud ビジネス・プロセスで使用される値を入力します。

7. 「処理順序」で、マッピングの順序を指定します。

マッピング・タイプ内の優先度レベルは、処理順序により決定されます。マッピングは、マッピング・タイプ内の名前のアルファベット順に処理されます。「数字」も順序付けに使用できます。たとえば、「数値」を処理に使用する場合、処理順序は英数字のソート順です。10、20、30、100 が順序としてある場合、処理順序は 10、100、20、30 になります。処理順序に数値を使用する場合は、すべてのマップについて同じ桁数を使用してください。

8. 「説明」に、メンバー・マッピングの説明を入力します。
たとえば、「General Ledger にマップ」といった説明を入力します。
9. 「符号の変更」で、指定したターゲット勘定科目の符号を反転させることを選択します。
「符号の変更」オプションは、多くの場合、収益および負債/資本ソース勘定科目の試算表の符号がマイナスの場合に Oracle General Ledger ソース・データで使用します。EPM Cloud アプリケーションでは、正数は貸方としてロードされることが多く、負数はすべて借方としてロードされます。その結果、符号を反転させることができます。
10. オプション: 「適用先」ドロップダウンから、メンバー・マッピングの適用先の統合の名前を選択します。
11. メンバー・マッピングの追加 ページで、「OK」をクリックします。
12. メンバー・マッピング・ページで、「保存」をクリックします。



Oracle General Ledger フィルタの定義

Oracle General Ledger からのデータのインポートに使用するデータ統合については、フィルタを使用して結果を制限します。

統合が作成されると、フィルタが自動的に定義されます。必要に応じてフィルタを変更できますが、削除はできません。(フィルタが削除されると、デフォルト値が再作成されます。)

Oracle General Ledger ディメンション	フィルタ
シナリオ	実績
残高	期末残高
金額タイプ	YTD
通貨タイプ	合計
その他のすべてのディメンション	'@ILv10Descendants("All" TARGET_DIMENSION_NAME ' Values")'

Oracle General Ledger フィルタを追加するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、Oracle General Ledger 統合の右側にある  をクリックし、「オプション」を選択します。
2. 「フィルタ」タブをクリックします。
3.  をクリックします。

オプションで、フィルタにすでに割り当てられている別のディメンションを選択し、「ディメンション名」ドロップダウンから別のディメンションを選択するか、フィルタ条件を変更します。

Dimension Name	Filter Condition	Select
Account	@lLv0Descendants("All Account Values")	Select
Amount Type	"YTD"	Select
Balance Amount	"Ending Balance"	Select
Company	"[Company] [All Company Values] [3111]"	Select
Cost_Center	@lLv0Descendants("All Cost_Center Values")	Select
Currency Type	"Total"	Select
Division	@lLv0Descendants("All Division Values")	Select

4. 「**ディメンション名**」ドロップダウンから、フィルタの追加先のディメンションの名前を指定します。
5. 「**フィルタ条件**」で、フィルタを指定します。
6. 「**保存**」をクリックします。

Oracle General Ledger の調整期間の処理

Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションに残高をロードするときに、Oracle General Ledger ソース・システムからの調整期間を Oracle ERP Cloud に含めることができます。

EPM Cloud アプリケーションに残高をロードする際、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger ソース・システムからの調整期間を含めることができます。

調整期間は、ソースからの通常期間に関連する追加の期間です。「調整期間」は、その年の決算期間より前に残高を調整するために設定される会計期間を表します。これらの期間は「per12」に調整されるため、「per13」と表されます。通常、調整期間内の日付は通常の会計期間と重複します。お客様は、会計カレンダーの最初の期間を参照する「年始期間」を使用して、前年の繰越残高額を調整できます。また、お客様は会計カレンダーの最後の期間を「年末期間」として設定して、現在の会計カレンダーのトランザクション・モードを調整できます。

データ統合では、期間マッピングで調整期間をターゲット・アプリケーションの期間にマップする方法を指定して、調整が処理されます。調整の処理方法は、統合で指定されます。この機能により、Oracle General Ledger アプリケーションからのカレンダーおよび期間を Oracle ERP Cloud アプリケーションの期間にポイントするのみで、データ統合で Oracle General Ledger ソース期間をマップできます。

統合を設定する際、調整期間マッピングが存在する場合に通常期間と調整期間をロードすることも、調整期間マッピングが存在する場合は調整期間のみをロードすることもできます。

たとえば、期間 13 を 12 月/期間 12 にマップし、「調整期間を含む」オプションを選択すると、次のようになります。


- YTD 残高について、期間 13 が期末残高になります。
- PTD 残高について、期間 13 と 12 月/期間 12 が追加されます。

Oracle General Ledger ソース・システムからの調整期間を含めるには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」メニューから、「**期間マッピング**」を選択します。

2. 「ソース・マッピング」タブを選択します。
3. 「ソース・タイプ」ドロップダウンから、「Oracle ERP Cloud」を選択します。
4. 「接続」ドロップダウンから、Oracle ERP Cloud への接続に使用する接続の名前を選択します。
5. 「ソース・アプリケーション」ドロップダウンから、調整の元になる Oracle ERP Cloud ソース・アプリケーションを選択します。
6. 「ターゲット・アプリケーション」から、調整を適用する EPM Cloud アプリケーションを選択します。
7. 「マッピング・タイプ」から、「調整」を選択します。
8. 「追加」をクリックします。
9. 「ソース期間キー」で、Oracle General Ledger ソース・システムからマップする月の最終日を指定します。

ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。

 をクリックして、ソース期間キーを参照して選択することもできます。


「ソース期間キー」を選択すると、データ管理によって「ソース期間」および「ソース期間の年」フィールドに自動的に移入されます。

10. 「調整期間」で、Oracle General Ledger ソースからの調整期間の名前を指定します。

たとえば、Oracle General Ledger からの調整期間が Adj-Dec-16 である場合は、このフィールドに「Adj-Dec-16」と入力します。


11. 「ターゲット期間キー」で、ターゲット・システムからマップする月の最終日を指定します。

ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。

 をクリックして、ターゲット期間キーを参照して選択することもできます。

「ターゲット期間キー」を選択すると、データ管理によって「ターゲット期間名」、「ターゲット期間の月」、および「ターゲット期間の年」フィールドに自動的に移入されます。

12. 「保存」をクリックします。

13. 「データ統合」ホーム・ページから、直接統合の右側にある  をクリックし、「オプション」を選択します。

14. 「カテゴリ」で、デフォルトのカテゴリ値を指定します。

リストされているカテゴリは、データ統合の設定時に作成したカテゴリです。

15. 「カレンダー」から、ソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。

16. 「期間マッピング・タイプ」で、データ・ルールごとに期間マッピング・タイプを選択します。

有効なオプション:

- デフォルト—データ・ルールでは、データ統合で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、データ・ルール実行に含まれる各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
 - 明示—データ・ルールでは、データ統合で定義されている明示期間マッピングを使用して、データ・ロード・ルール実行に含まれる各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。明示期間マッピングにより、期間が開始日および終了日で定義されていない追加の Oracle General Ledger データ・ソースをサポートできません。
17. 「調整期間を含む」から、調整期間を処理するための次のいずれかのオプションを選択します。
- いいえ - 調整期間は処理されません。システムでは通常期間マッピング(「デフォルト」および「明示的」として設定されたマッピング)のみが処理されます。「いいえ」は調整処理のデフォルト・オプションです。
 - はい - 「はい」を選択すると、通常期間と調整期間が含まれます。調整期間が存在しない場合は、通常期間のみが処理されます。
 - はい(調整のみ) - 「はい(調整のみ)」を選択すると、調整期間のみが処理されます。ただし、調整期間が存在しない場合は、かわりに通常期間が取得されます。
18. 「保存」をクリックします。

統合の実行

統合を実行して、ソース・システムからデータを抽出し、結果を表示して検証します。データが正しく変換された場合は、データをターゲット・システムにプッシュできます。

統合の実行ページは、「オプション」と「フィルタ」の2つのタブで構成されています。

「オプション」タブでは、変換ステージにおける選択した統合に関する全般オプションとターゲット・オプションを選択できます。このページの期間選択は、ターゲット・システムに依存します。

「フィルタ」タブでは、統合定義を毎回変更するのではなく、実行時にフィルタをすばやく追加または変更し、それらを実行できます。フィルタは、データ・ソースからデータを問い合わせるために使用します。フィルタに対する変更は保存されず、その実行のみに使用されます。

統合を実行するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合を選択し、▶をクリックします。
2. 「オプション」タブを選択します。
3. 「ソースからインポート」を選択して、ソース・システムからデータをインポートし、データのインポート、マップおよび検証など、必要な変換を実行します。

このオプションは次の場合にのみ選択します:

- 統合を初めて実行する。
- ソース・システムのデータが変更された。たとえば、エクスポート後にワークベンチでデータをレビューし、ソース・システムのデータを変更する必要があった場合などです。

ソースからデータを初めてインポートした後では、ソース・システムのデータは変更されない場合がほとんどです。このとき、データが変更されなかった場合は、データをインポートし続ける必要はありません。

4. 「再計算」を選択して、データのインポートをスキップし、更新されたマッピングを使用してデータを再処理します。
5. 「インポート・モード」から、データをインポートする方法を選択します。

使用可能なインポート・モード:

- **追加** - POV の既存の行は変更されず、新しい行が POV に追加されます。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 50 行が含まれるとします。この場合、50 行が追加されます。このロードの後で、POV の行の合計は 150 です。
- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行が TDATASSEG にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。Planning アプリケーションに 1 年分のデータがある場合に 1 か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、1 年分すべてがクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

ノート:

ASO キューブに対して置換モードで統合を実行する際に、シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、数値データ・ロードのみが実行されます。階層が完全に含まれた完全修飾名でメンバー名を指定してください。シナリオ・メンバーが共有メンバーである場合、すべてのデータ型のロード方法は機能しません。

ノート:

置換モードは、ロード方法「ライン・アイテムの自動増分を含むすべてのデータ型」ではサポートされていません。

- **マージ** - (Account Reconciliation のみ)。変更された残高を同じロケーションの既存のデータとマージします。

マージ・モードにより、データが Account Reconciliation に最後にロードされたとき以降に変更された残高が少数である場合に、データ・ファイル全体をロードする必要がなくなります。2 つのロード間でマッピングが変更された場合、お客様は完全なデータ・セットをリロードする必要があります。

たとえば、あるお客様では、1 つの番号の勘定科目 ID に対して 100 行の既存の残高があり、それぞれの金額は \$100.00 です。このお客様がマージ・モードで統合を実行し、ソースには 1 つの勘定科目 ID に対する金額が \$80 の 1 行がある場合、統合の実行後は、100 行の残高があり、そのうちの 99 それぞれの残高は \$100.00、1 つの残高は \$80.00 です。
- **インポートしない** - データのインポートを全部スキップします。
- **マップして検証** - データのインポートをスキップし、更新されたマッピングを使用してデータを再処理します。

6. 「**エクスポート・モード**」から、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートする方法を選択します。

使用可能なオプション:

- **マージ** - 既存の日付をロード・ファイルからの新しいデータで上書きします。(デフォルトでは、すべてのデータ・ロードが「マージ」モードで処理されます。)データが存在しない場合は、新しいデータを作成します。
- **置換** - ターゲットのすべての **POV** データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに **100** 行、次のロードに **70** 行が含まれるとします。この場合、**100** 行が削除され、**70** 行がステージング表にロードされます。このロードの後、行の総数は **70** です。

Planning アプリケーションの場合、置換でロードする年、期間、シナリオ、バージョンおよびエンティティのデータをクリアし、ソースまたはファイルからデータをロードします。**Planning** アプリケーションに **1** 年分のデータがある場合に **1** か月分のみをロードするとき、このオプションを使用すると、特定の月がクリアされてからロードが実行されることに注意してください。

- **累計** - アプリケーション内のデータをロード・ファイル内のデータで累計します。データ・ファイルの一意的視点ごとに、ロード・ファイルの値がアプリケーションの値に加算されます。
- **減算** - ソースまたはファイルの値を、ターゲット・アプリケーションの値から引きまします。たとえば、ターゲットに **300** があり、ソースに **100** がある場合、結果は **200** になります。
- **ドライ・ラン** - (**Financial Consolidation and Close** および **Tax Reporting** のみ)ターゲット・アプリケーションにデータをロードせずに、データ・ロード・ファイルで無効なレコードをスキャンします。データ・ロード・ファイルが検証され、無効なレコードがログにリストされます(ログには **100** 個以下のエラーがリストされます)。エラーごとに、エラーのある各レコードが対応するエラー・メッセージとともにログに示されます。ログの詳細は、「プロセスの詳細」で入手できます。
- **エクスポートしない** - データのエクスポートを全部スキップします。
- **確認** - データをターゲット・システムにエクスポートした後、現在の **POV** の確認レポートを表示します。確認レポート・データが現在の **POV** に対して存在しない場合は、空白のページが表示されます。

7. 「**開始期間**」から、データをロードする最初の期間を選択します。

フィルタする文字を入力すると、期間をフィルタできます。たとえば、**J**と入力すると、**J**で始まる月(**June**、**July** など)がフィルタされます。また、ドロップダウンをクリックして、**追加の結果があるため、さらにフィルタしてください**。の下に表示される編集ボックスに追加のフィルタ条件を指定できます。

この期間名は、期間マッピングに定義されている必要があります。

8. 「**終了期間**」から、データをロードする最後の期間を選択します。

この期間名は、期間マッピングに定義されている必要があります。

 ノート:

ホーム・ページで POV 期間が選択されている場合は、選択された期間がここでデフォルト設定されます。POV 期間が選択されていない場合は、ブラウザのキャッシュに基づき、最後に使用された期間にデフォルト設定されます。

別の期間の横にロック解除アイコン
(



)が表示されている場合、その期間を選択できます。

データ管理のシステム設定でグローバル POV モードが有効になっている場合、その期間はグローバル POV 期間にデフォルト設定され、お客様は別の期間を選択できません。この場合、「期間」ドロップダウンの横にロック・アイコン



)が表示されます。

9. 「ターゲットにエクスポート」を選択して、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートします。
10. 「確認の実行」を選択してデータを生成し、「確認レポート」を実行します。
11. (オプション): 「フィルタ」をクリックします
12. 実行時に実行するフィルタを追加または変更します。

フィルタは、データ・ソースからデータを問い合わせるために使用します。統合の実行ページで指定したフィルタは保存されず、その実行のみに使用されます。

Run Integration: DL_EPtoFileExp1

Options Filters

Import Mode

Export Mode

Start Period

End Period

Cancel

Run

13. 「実行」をクリックします。

Oracle ERP Cloud へのライトバック

ライトバックでは、予算と実績を Oracle General Ledger にライトバックできます。

たとえば、Oracle General Ledger から予算対実績をレポートすることが必要になる場合があります。

Oracle General Ledger への実績のライトバック


Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの実績情報がすべてそろったら、EPM Cloud アプリケーションをソースとして定義し、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger ターゲット・アプリケーションにデータをライトバックできます。

必要なフィルタを指定したら、実績値を EPM Cloud から抽出し、Oracle General Ledger に書き込むことができます。「統合の実行」ステップで、データがフラット・ファイルに書き込まれ、それがファイル・リポジトリにコピーされます。データがライトバックされると、Oracle General Ledger で仕訳が作成されます。

Oracle ERP Cloud 側で ERP システムを構成するときは、「一般会計残高キューブの作成」を使用して Oracle Fusion ERP Essbase キューブが作成されていることを確認してください。また、「シナリオ・ディメンション・メンバーの作成」ジョブを使用して Oracle Fusion ERP Essbase キューブでシナリオがすでに設定されている必要があります。

Oracle ERP Cloud /EPM Cloud 統合には、権限またはユーザー役割および統合されるすべての ERP 元帳を操作するためのデータ・アクセス権が必要です。



Oracle ERP Cloud にライトバックするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、EPM Cloud ソース・アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
3. 「**オプション**」タブを選択します。
4. 「**残高タイプ**」ドロップダウンから、「**実績**」を選択します。
5. 「**仕訳ソース**」で、Oracle ERP Cloud で定義された仕訳ソースと一致する仕訳ソースの説明を入力します。
6. 「**仕訳カテゴリ**」で、Oracle ERP Cloud の仕訳カテゴリと一致する仕訳カテゴリの説明を入力します。

Application Details: VisionOperationsRI Save

Property Name	Property Value
Purge Data File	No
Balance Type	Actual
Journal Source	
Journal Category	
Source Budget Type	EPM Financials module

7. 「**保存**」をクリックします。

8. 「**データ統合**」ホーム・ページから、**+**をクリックし、**統合の作成**ページで、ソース・データとターゲットの間の統合を作成して、「**保存して続行**」をクリックします。
 - a. 「**名前**」および「**説明**」に、新しい統合の名前および説明を入力します。
 - b. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - c. 「**ソース**」()ドロップダウンで、ドロップダウンから EPM Cloud アプリケーションの名前を選択します。
 - d. 「**ターゲット**」()から、Oracle ERP Cloud アプリケーションを選択します。
 - e. 「**キューブ**」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。
 - f. 「**カテゴリ**」で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。

リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。詳細は、[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。
 - g. **オプション**: 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。
 - h. 「**保存して続行**」をクリックします。
9. **ディメンションのマッピング**・ページで、Oracle ERP Cloud ソース・アプリケーションのディメンションを EPM Cloud アプリケーションのディメンションにマップします。

新しいディメンションを追加する場合、または既存のディメンションを編集する場合は、次のことを行います:

- 「**列**」で、ファイルからインポートするフィールド番号を指定します。
- 「**ソース・ディメンションの選択**」で、ターゲット・アプリケーションに割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。

同じディメンションの複数のソース列をターゲット・ディメンションにマッピングできます。たとえば、4つの"Account"ソース列をマッピングできます。
- ソースまたはターゲットの式を追加します。ソースまたはターゲットから直接値を操作する式を割り当てます。

[ソース式の使用](#)および[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

必ず、ターゲット・ディメンション「元帳」のソースをマップしてください。

エンティティなどのディメンションを元帳にマップし、必要なデータ・ロード・マッピングを定義して Oracle General Ledger の名前に変換します。単一元帳にライトバックする場合、式列に元帳の名前を入力します。

オプション: 各仕訳に対して追加の参照データ/属性データを入力する場合は、属性列を使用して列をマップします。

属性列、属性 1 から属性 10 は、REFERENCE1 から REFERENCE10 用に予約されています。この場合、REFERENCE 列をディメンションとして追加し、ターゲ


ット・アプリケーションの ATTR 列にマップする必要もあります。たとえば、REFERENCE3 に入力するには、ディメンションの詳細を挿入して適切な名前を付け、属性タイプを割り当てて、データ列 ATTR3 を割り当てます。(ATTR11 から ATTR30 は、ATTRIBUTE1 から ATTRIBUTE20 用に予約されています。Attribute1 は ATTR11 に、Attribute2 は ATTR12 に、というように格納されます。)

詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

10. **マップ・メンバー** ページで、ソースからターゲットにメンバーをマップします。
すべてのメンバーを変更せずにそのまま Oracle ERP Cloud にマップするには、「**マッピング・タイプ**」で「**すべて**」を選択し、「**追加**」をクリックして、**マップ・メンバーの追加** ページで、「**ソース**」に*を入力し、「**ターゲット**」に*を入力します。
詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。
11. 「**保存して続行**」をクリックします。
12. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」メニューから、「**期間マッピング**」を選択します。
期間マッピングは、転送のために期間を Oracle General Ledger の会計カレンダー期間に変換する場合に使用されます。
13. 「**アプリケーション・マッピング**」タブを選択します。
14. **アプリケーション・マッピング** ページの「**ターゲット・アプリケーション**」から、データをライトバックする、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger アプリケーションを選択します。
15. **+** をクリックして、実績金額を受け取る期間ごとに別個の行を追加し、次のことを行います。

 **ノート:**

期間を指定する場合は、開始および終了期間が単一会計年度内にある必要があります。会計年度をまたがるデータ範囲を指定すると、データが重複します。

16. 「**期間キー**」、「**ターゲット期間の月**」および「**ターゲット期間の年**」を定義します。
 - **期間キー**—ターゲット・システムからマップする月の最終日を指定します。
ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。
 - **ターゲット期間の月** - このフィールドの値は、転送された金額を受け取る Oracle General Ledger の元帳の会計カレンダーと一致する必要があります。
 - **ターゲット期間の年** - («ターゲット期間の月」列で定義されている)会計期間に対応する値を使用します。値を選択すると、期間キー、前期間キー、期間名およびターゲット期間の月に関する情報が自動的に移入されます。
17. 「**データ統合**」ホーム・ページから、ファイルベースの統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
18. 次の内容を完了します。

- a. 「**ファイル名**」で、データのロード元のデータ・ファイル名を選択します。データ・ソース・アプリケーションの作成元ファイルと同じファイルにすることも、データと適切なヘッダーを含む別のファイルにすることもできます。

ファイル名しか指定しない場合、ルールの実行ウィンドウで単一の期間に対してデータを入力する必要があります。

複数の期間をロードするには、各期間用のファイルを作成し、期間名または期間キーをファイル名に追加します。ルールを複数の期間で実行する場合、各期間のファイル名が作成され、適切な **POV** にアップロードされます。
 - b. 「**ディレクトリ**」で、ファイルが割り当てられているディレクトリを指定します。

データ統合ディレクトリ内のファイルに移動するには、「**選択**」をクリックし、**選択**ページでファイルを選択します。**選択**ページで「**アップロード**」を選択し、**アップロードするファイルの選択**ページでファイルに移動することもできます。

ファイル名を指定しない場合、ルールを実行すると、データ統合によってファイル名の入力を求められます。
 - c. データを複数の期間にロードするには、「**ファイル名の接尾辞タイプ**」ドロップダウンで、「**期間名**」または「**期間キー**」を選択します。

ファイル名に接尾辞が付けられ、データ統合は接尾辞の追加後にファイル拡張子を追加します。ファイル名を空白にすると、接尾辞付きのファイルが検索されます。ファイル名の接尾辞タイプを指定すると、ファイル名はオプションになり、ルールの実行ウィンドウでは必要ありません。

ファイル名の接尾辞タイプが期間キーの場合、接尾辞インジケータと期間の日付フォーマットがファイル名で(接尾辞セットとして)必要となり、有効な日付フォーマットとして検証される必要があります。この場合、ルールを実行するときに、**1.txt**を「ファイル名」フィールドに入力し、接尾辞インジケータとして「**期間名**」を選択します。次に、1月から3月の期間についてルールを実行します。

たとえば、次のように指定します:

 - i. 1_Jan-2019.txt
 - ii. 1_Feb-2019.txt
 - iii. 1_Mar-2019.txt
 - d. 「**期間キーの日付フォーマット**」で、ファイル名に追加する期間キーの日付フォーマットを **JAVA** 日付フォーマットで指定します。(SimpleDateFormat)。
 - e. 「**保存**」をクリックします。
19. 「**保存**」をクリックします。
20. 統合を実行します。
- 「統合の実行」ステップで、データがフラット・ファイルに書き込まれ、それがファイル・リポジトリにコピーされます。データがライトバックされると、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger で仕訳が作成されます。
- 詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

Oracle General Ledger への予算のライトバック

Oracle General Ledger から予算対実績をレポートする場合は、予算を Oracle General Ledger にライトバックする必要があります。支出をオンラインで検証する場合は、予算を Budgetary Control にライトバックする必要があります。

この手順を使用して、Planning 機能を使用して策定した元の予算および改訂済予算を Oracle General Ledger にライトバックします。

この手順は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の予算改訂機能(別の手順を介して一般会計と Budgetary Control の EPM タイプ予算管理の両方で予算を自動的に更新します)を使用して策定した予算改訂をライトバックするためのものではありません。

Oracle General Ledger へのライトバックは、EPM タイプ予算管理について予算を Budgetary Control にライトバックするときにも自動的に実行されますが、Budgetary Control にライトバックする企業全体の予算の一部についてのみです。




詳細は、[公共部門のための財務の使用](#)を参照してください。


Planning ユーザーの場合、Oracle General Ledger への EPM Cloud 予算のライトバックについて学習するには、このチュートリアル・ビデオを視聴してください。

[チュートリアル・ビデオ](#)

Planning モジュール・ユーザーの場合は、[チュートリアル・ビデオ](#)を参照してください。

Oracle General Ledger にライトバックするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、EPM Cloud ソース・アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
3. 「**オプション**」タブを選択します。
4. 「**残高タイプ**」ドロップダウンから、「**予算**」を選択します。
5. 「**仕訳ソース**」で、Oracle ERP Cloud で定義された仕訳ソースと一致する仕訳ソースの説明を入力します。
6. 「**仕訳カテゴリ**」で、Oracle ERP Cloud の仕訳カテゴリと一致する仕訳カテゴリの説明を入力します。
7. 「**データ統合**」ホーム・ページから、 をクリックし、**統合の作成**ページで、ソース・データとターゲットの間の統合を作成して、「**保存して続行**」をクリックします。
 - a. 「**名前**」および「**説明**」に、新しい統合の名前および説明を入力します。
 - b. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - c. 「**ソース**」()ドロップダウンから、データのライトバック元の EPM Cloud アプリケーションの名前を選択します。

- d. 「ターゲット」() ドロップダウンから、Oracle ERP Cloud アプリケーションを選択します。
- e. 「カテゴリ」で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。
- リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。詳細は、[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。
- f. **オプション:** 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。
- g. 「保存して続行」をクリックします。
8. **ディメンションのマッピング** ページで、Oracle ERP Cloud ソース・アプリケーションのディメンションを EPM Cloud アプリケーションのディメンションにマップします。

新しいディメンションを追加する場合、または既存のディメンションを編集する場合は、次のことを行います:

- 「列」で、ファイルからインポートするフィールド番号を指定します。
 - 「ソース・ディメンションの選択」で、ターゲット・アプリケーションに割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。
- 同じディメンションの複数のソース列をターゲット・ディメンションにマッピングできます。たとえば、4 つの"Account"ソース列をマッピングできます。
- ソースまたはターゲットの式を追加します。ソースまたはターゲットから直接値を操作する式を割り当てます。
- [ソース式の使用](#)および[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

必ず、ターゲット・ディメンション「元帳」のソースをマップしてください。

エンティティなどのディメンションを元帳にマップし、必要なデータ・ロード・マッピングを定義して Oracle General Ledger の名前に変換します。単一元帳にライトバックする場合、式列に元帳の名前を入力します。


オプション: 各仕訳に対して追加の参照データ/属性データを入力する場合は、属性列を使用して列をマップします。

属性列、属性 1 から属性 10 は、REFERENCE1 から REFERENCE10 用に予約されています。この場合、REFERENCE 列をディメンションとして追加し、ターゲット・アプリケーションの ATTR 列にマップする必要があります。たとえば、REFERENCE3 に入力する場合は、ディメンションの詳細を挿入して適切な名前を付け、属性タイプを割り当てて、データ列 ATTR3 を割り当てます。(ATTR11 から ATTR30 は、ATTRIBUTE1 から ATTRIBUTE20 用に予約されています。Attribute1 は ATTR11 に、Attribute2 は ATTR12 に、というように格納されます。)

詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

9. **マップ・メンバー** ページで、ソースからターゲットにメンバーをマップします。
- すべてのメンバーを変更せずにそのまま Oracle ERP Cloud にマップするには、「**マッピング・タイプ**」で「すべて」を選択し、「追加」をクリックして、「**マップ・メンバーの追加**」ページで、「ソース」に*を入力し、「ターゲット」に*を入力します。

詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。

10. 「保存して続行」をクリックします。
11. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「期間マッピング」を選択します。
期間マッピングは、転送のために期間を Oracle General Ledger の会計カレンダー期間に変換する場合に使用されます。
12. 「アプリケーション・マッピング」タブを選択します。
13. アプリケーション・マッピング・ページの「ターゲット・アプリケーション」から、データをライトバックする、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger アプリケーションを選択します。
14.  をクリックして、実績金額を受け取る期間ごとに別個の行を追加し、次のことを行います。

ノート:

期間を指定する場合は、開始および終了期間が単一会計年度内にある必要があります。会計年度をまたがるデータ範囲を指定すると、データが重複します。

15. 「期間キー」、「ターゲット期間の月」および「ターゲット期間の年」を定義します。
 - **期間キー**—ターゲット・システムからマップする月の最終日を指定します。
ロケールのロケール設定に基づいた日付形式を使用します。たとえば、米国の場合、MM/DD/YY という形式を使用して日付を入力します。
 - **ターゲット期間の月** - このフィールドの値は、転送された金額を受け取る Oracle General Ledger の元帳の会計カレンダーと一致する必要があります。
 - **ターゲット期間の年** - («ターゲット期間の月」列で定義されている)会計期間に対応する値を使用します。
値を選択すると、期間キー、前期間キー、期間名およびターゲット期間の月に関する情報が自動的に移入されます。
16. 「保存」をクリックします。
17. 統合を実行します。
詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud からのメタデータの統合

データ統合を使用して、Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger メタデータを Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションにロードできます。この機能を使用すると、Oracle General Ledger 階層の最上位ノード、セグメント値、説明、親、子、勘定科目タイプなどをロードできます。

メタデータをロードするには、Oracle ERP Cloud (勘定体系)ソース・アダプタを使用して必要なソース元帳を Oracle ERP Cloud から選択し、いくつかの単純なマッピングを設定し、ボタンを押してデータを EPM Cloud アプリケーションに取り込みます。

次に、ワークベンチで Oracle General Ledger がターゲットにどのようにロードされるかを示します。

Segment Value	Account	Parent Value	Parent	Description	Alias: Default	Source-Account Type	Account Type	Source-Variance Reporting	Variance Reporting	Target-Data	Source-Data	Description 1	Description 2
00000	00000	All Account Val...	All Account ...	00000-Default	00000-Default	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11010	11010	All Account Val...	All Account ...	11010-Cash C...	11010-Cash Che...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11015	11015	All Account Val...	All Account ...	11015-Cash Cl...	11015-Cash Che...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11016	11016	All Account Val...	All Account ...	11016-Cash C...	11016-Cash Che...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11017	11017	All Account Val...	All Account ...	11017-Cash C...	11017-Cash Che...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11018	11018	All Account Val...	All Account ...	11018-Cash C...	11018-Cash Che...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11020	11020	All Account Val...	All Account ...	11020-Cash C...	11020-Cash Che...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11040	11040	All Account Val...	All Account ...	11040-Unapp...	11040-Unapp...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11050	11050	All Account Val...	All Account ...	11050-Unide...	11050-Unident...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11060	11060	All Account Val...	All Account ...	11060-On-Ac...	11060-On-Ac...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11110	11110	All Account Val...	All Account ...	11110-Cash Sa...	11110-Cash Ser...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11116	11116	All Account Val...	All Account ...	11116-Cash Sa...	11116-Cash Ser...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11117	11117	All Account Val...	All Account ...	11117-Cash Sa...	11117-Cash Ser...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
11118	11118	All Account Val...	All Account ...	11118-Cash Sa...	11118-Cash Ser...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
13160	13160	All Account Val...	All Account ...	13160-Credit...	13160-Credit Ca...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
14010	14010	All Account Val...	All Account ...	14010-Invent...	14010-Inventor...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				
14020	14020	All Account Val...	All Account ...	14020-Invent...	14020-Inventor...	Asset	Asset	Non-Expense	Non-Expense				

メタデータのロード・プロセスの説明

次に、データ統合を使用して Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger メタデータをターゲットの Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションにロードする方法をおおまかに示します:

- データ統合でメタデータをロードする前に、ロード前の属性の名前および値を検証します。これを行うには、ビジネス・プロセスのメタデータを.csv (カンマ区切り) または.txt (タブ区切りまたは他の区切り文字)形式でファイルにエクスポートします。次に、ロードに使用する属性の名前および値を検証します。ユーザー・インタフェースに表示される属性および値と、エクスポートされたメタデータ・ファイルに表示される属性値および名前の間に不一致がある場合は、エクスポートされたディメンション詳細に基づいてマッピングを修正します。
- 「アプリケーション」で、「データ・ソース」ソース・アプリケーションを Oracle ERP Cloud (勘定体系)アプリケーション・タイプで登録します。
 - 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
 - アプリケーション・ページで、**+** (「追加」アイコン)をクリックします。
 - 「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
 - 「タイプ」から、Oracle ERP Cloud (勘定体系)を選択します。
 - オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てます。

Create Application ✕

Category Data Source ▼

Type Oracle ERP Cloud (Chart of Accounts) ▼

Application ERP Chart of Accounts

Prefix QEJ

OK
Cancel

3. 「アプリケーション詳細」,の「ディメンション」タブで、統合に使用できるソース列を確認します。

ノート:

「勘定科目タイプ」ディメンションは「差異レポート」ディメンションに依存します。Essbaseには2つの差異レポート・プロパティ(費用および費用外(デフォルト))があり、これらによって、@VARまたは@VARPER関数がメンバー式に含まれているメンバーの実績データと予算データの差異がEssbaseで計算される方法が決まります。この場合、「差異レポート」ソース・ディメンションを追加し、対応する「差異レポート」ターゲット・ディメンションにアプリケーションでマップする必要があります。「差異レポート」の詳細は、[差異レポート](#)を参照してください。

Application Details: ERP Chart of Accounts Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 食

Dimension Name	Dimension Classification
Account Type	Generic ▼
Description	Generic ▼
Generation	Generic ▼
Hierarchy Top Node	Generic ▼
Level	Generic ▼
Parent Value	Generic ▼
Segment Value	Generic ▼
Variance Reporting	Generic ▼

4. 「アプリケーション詳細」の「オプション」の「プロパティ値」で、各プロパティのソース・プロパティ値を選択します。

このステップは、ソース・アプリケーションが登録および初期化されていることを想定しています。

Application Details: ERP Chart of Accounts		Save
Property Name	Property Value	
COA Application Name	VF_USA_Accounting_Flexfile_2	
Segment Name	Account	
Hierarchy Top Node	All Account Values	

プロパティ値はアプリケーション・レベルまたは統合レベルで選択できます。

ノート:

マップされていないアプリケーションからはメタデータを抽出できません。

5. 「データ統合」ホーム・ページで、**+**をクリックし、次に「統合の作成」をクリックして、Oracle ERP Cloud データ・ソースの Oracle General Ledger メタデータとターゲット・アプリケーションの間の統合を作成します。

詳細は、[直接統合の作成](#)を参照してください。

6. 「データ統合」ホーム・ページで、統合の右側にある **...** をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択して、ソースとターゲットの間でディメンションをマップ(インポート・フォーマットを作成)します。

階層の最上位ノードは、親ターゲットを EPM ディメンション名にマップする必要があります。たとえば、エンティティ・ディメンションがロードされている場合、最上位エンティティ・メンバーの親を「エンティティ」にマップする必要があります。Oracle ERP Cloud メタデータ統合の場合、最上位ノード・メンバーの親ソースはソース・セグメント名になります。たとえば、ソース・セグメントが「会社」の場合、親ディメンションのソースは会社になり、これを EPM ディメンション名「エンティティ」にマップする必要があります。

[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

7. マップされたディメンションにターゲット式を適用します。

詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

Edit Integration: QEACCOUNT

General 2 Map Dimensions 3 Map Members 4 Options

Import Format: QEACCOUNT
Type: Delimited - Numeric Data

Drill URL:
Delimiter: Comma

QE_ERP Chart of Accounts → Vision - Account

Segment Value	Account (copy source)
Account Type	Account Type (copy source)
Description	Alias (Default (copy source))
Parent Value	Parent (copy source)
Variance Reporting	Variance Reporting (copy source)

8. 「データ統合」ホーム・ページで、統合の右側にある **...** をクリックし、「マップ・メンバー」を選択して、ソースからターゲットにメンバーをマップします。

詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。

9. 「データ統合」ホーム・ページで、直接統合の右側にある **...** をクリックし、「オプション」を選択して、各プロパティのソース・プロパティ値と、ソースからメンバーをリフレッシュするかどうかを選択します。

ノート:

プロパティ値はアプリケーション・レベルまたは統合レベルで選択できます。

ソースからリフレッシュの「はい」/「いいえ」設定によって、メンバー・マッピングをソースからリフレッシュできます。複数のディメンションの統合を実行する場合は、最初のディメンションについて「はい」に設定します。

ノート:

メンバーは、アプリケーションがインポートされるときにリフレッシュされます。このオプションを「はい」に設定することによって、アプリケーションがインポートされた後に作成された新しいメンバーをリフレッシュできます。値を「はい」に設定すると、すべてのディメンションの値がリフレッシュされます。したがって、複数のディメンションをロードする場合、1つのディメンションについてのみ、値を「はい」に設定する必要があります。

Edit Integration: ERPACCOUNT

General Map Dimensions Map Members Options

Filters Options

Name	Condition	Value
COA Application Name	==	VF_USA_Accounting_Flexie_2
Segment Name	==	Account
Hierarchy Top Node	==	All Account Values
Refresh from Source	==	Yes

10. 統合を実行します。

Oracle ERP Cloud の Oracle General Ledger メタデータは、マージ・モードでのみエクスポートできます。マージ・モードでは、既存のデータがエクスポートの新しいデータで上書きされます。(デフォルトでは、すべてのデータ・ロードが「マージ」モードで処理されます。)データが存在しない場合は、新しいデータがターゲットに書き込まれます。

詳細は、[を参照してください 統合の実行](#)

Oracle ERP Cloud データの統合

Oracle Fusion Financials ソースに直接接続せずに、統合メカニズムとしてデータ統合を使用して、Oracle ERP Cloud からデータのサブセットを抽出できます。この機能を使用すると、Oracle Financials Cloud またはサプライ・チェーンのデータ・ソースからインポートできます。

これを行うには、データ・ソースとして Oracle Business Intelligence Publisher レポートのデータを問い合わせるデータ・ソース・アダプタベースのフレームワークを使用します。BI Publisher によって、Oracle ERP Cloud データは Fusion Financials データベース表から直接抽出されます。Oracle ERP Cloud におけるどの種類のレコードでも、問合せに含めたり、その基盤とみなすことができます。データがデータ統合に取り込まれると、データおよびメタデータを後でマップして Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードできます。

事前にパッケージ化された問合せまたはカスタマイズされた BI Publisher レポートを使用して、Oracle ERP Cloud からデータを抽出するための独自のレポート・パラメータを定義できます。

事前パッケージ化済問合せを使用した Oracle ERP Cloud データの統合プロセスの説明

データ統合には事前パッケージ化済問合せが付属しており、これは Oracle ERP Cloud をデータ・ソースとして提供するシード済データ抽出を使用します。

Oracle Business Intelligence Publisher の詳細は、[Oracle Business Intelligence Publisher 12.2.1.3.0](#) を参照してください

データ統合に付属している事前パッケージ化済問合せを使用して、Oracle ERP Cloud からデータをロードするステップは、次のとおりです。

1. Oracle ERP Cloud 統合には、権限またはユーザー役割および Oracle ERP Cloud へのデータ・アクセス権が必要です。詳細は、[Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ役割の要件](#)を参照してください。
2. ソース・システム・タイプ **Oracle ERP Cloud** のソース・システムを登録し、ユーザー資格証明を指定します。

このステップには、接続の詳細の指定および接続のテストが含まれます。

詳細は、[Oracle ERP Cloud 接続の構成](#)を参照してください。

3. アプリケーションを Oracle ERP Cloud データ・ソース・アプリケーション・タイプとして登録し、保存します。

ソース列は、アップロードされたファイル抽出から自動的に移入されます。

[Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録](#)を参照してください。

- 「アプリケーション・フィルタ」で、統合オプションに入力値を指定します。

 **ノート:**

BI Publisher 抽出によって返されるデータの量を制限するために必要なフィルタを定義します。フィルタによって最適なロード・パフォーマンスが保証されます。



- インポート・フォーマットを作成することにより、Oracle ERP Cloud データ・ソースとターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。
[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。
- インポート・フォーマットの関連付けに使用するロケーションを定義します。
- ソースとターゲット間でディメンションをマップします。
[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。
- メンバーをソースからターゲットにマップします。
[メンバーのマッピング](#)を参照してください。
- ソースおよびターゲットのオプションを選択します。
[データ統合オプションの設定](#)を参照してください。
- 統合を実行します。
[統合の実行](#)を参照してください。

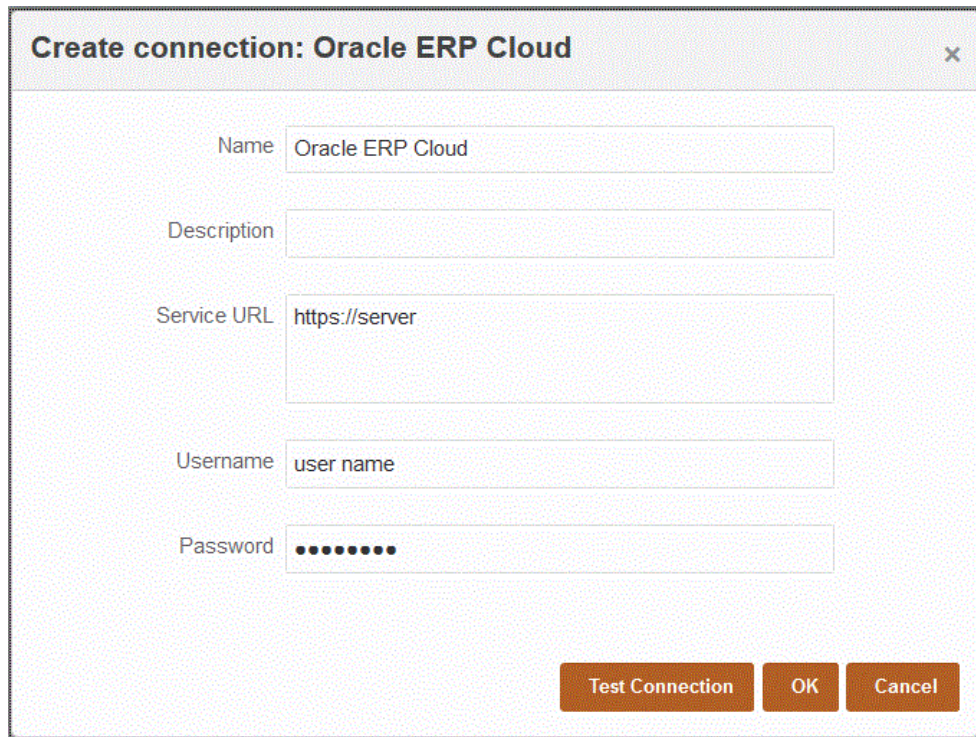
Oracle ERP Cloud 接続の構成

Oracle ERP Cloud ソース接続を使用して、次のデータ・ソースを登録および管理できます:

- Oracle ERP Cloud
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表平均)
- Oracle ERP Cloud (カスタム)
- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表)
- プロジェクト管理
- Budgetary Control の契約、債務、支出およびデータ・ソースのライトバック。予算レビューのデータ・ソース

Oracle ERP Cloud 接続を作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。
3. 接続ページで、 (「追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「Oracle ERP Cloud」を選択します。



4. 「名前」に、ソース・システム名を入力します。
5. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
6. サービス URL に、Web サービスのサービス情報を入力します。
7. 「ユーザー名」に、Oracle ERP Cloud のユーザー名を入力します。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud と Oracle ERP Cloud の間で情報を送信するためのプロセス要求を開始する Oracle ERP Cloud ユーザーの名前を入力します。このユーザーには、"Financial Analyst"、"General Accountant"、"General Accounting Manager"などの Oracle General Ledger のジョブ役割が割り当てられている必要があります。

8. 「パスワード」に、Oracle ERP Cloud のパスワードを入力します。
このパスワードは、Oracle ERP Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。
9. 「接続のテスト」をクリックします。
接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。
10. 「OK」をクリックします。

Oracle ERP Cloud アプリケーションの登録

Oracle ERP Cloud データ・ソースから一般会計以外のデータを抽出して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードできます。このようなタイプのデータ・ソースを使用すると、データ統合で参照される Oracle Business Intelligence Publisher レポート抽出を定義して、Oracle ERP Cloud ソースから、買掛/未払金、売掛/未収金、固定資産、サプライ・チェーンなどのデータを直接抽出できます。

データ統合には、次のように、Oracle ERP Cloud ソースに対する事前パッケージ化済問合せが用意されています:

- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表 - 平均)
- Oracle ERP Cloud (試算表)

また、BI Publisher データ抽出に対するカスタム問合せを作成して実行できます。この場合、データ統合で Oracle ERP Cloud (カスタム)データ・ソース・アダプタを使用して、BI Publisher からソース CSV ファイルをインポートし、使用するレポート・パラメータを設定します。

ノート:

Oracle ERP Cloud との統合には、権限またはユーザー役割およびすべての ERP 元帳へのデータ・アクセス権が必要です。詳細は、[Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ 役割の要件](#)を参照してください。

システム・タイプ「**Oracle ERP Cloud**」を使用してデータ統合データ・ソースのソース・システムを登録し、ユーザー資格証明を指定する必要があります。このステップには、接続の詳細の指定および接続のテストが含まれます。詳細は、[Oracle ERP Cloud 接続の構成](#)を参照してください。

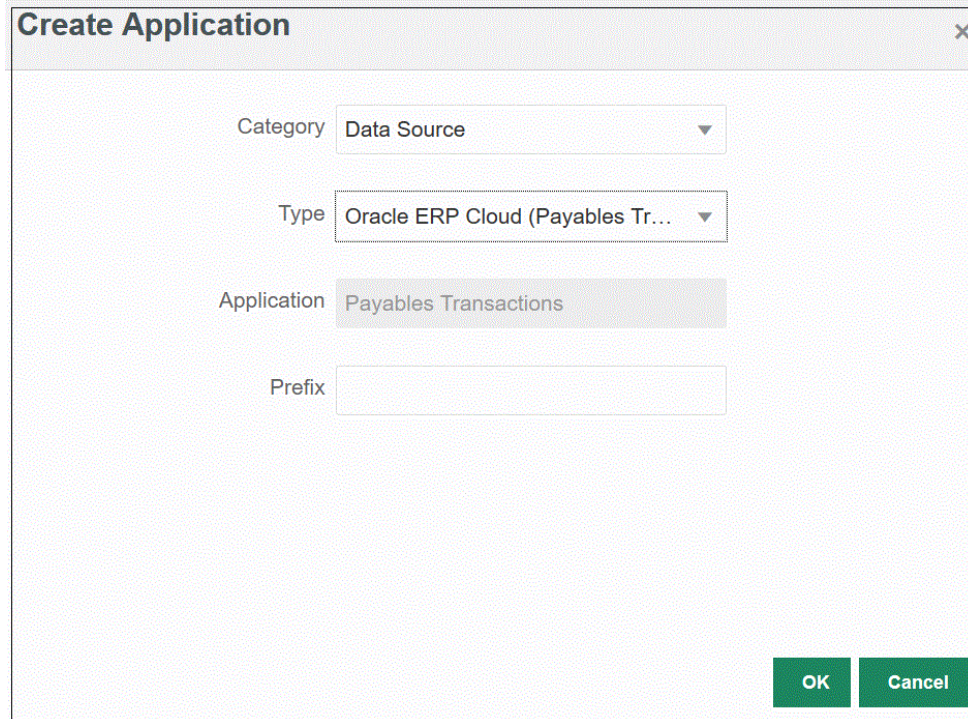
Oracle ERP Cloud アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、Oracle ERP Cloud の事前パッケージ化済問合せのタイプを選択します。

使用可能な Oracle ERP Cloud タイプは次のとおりです:

- Oracle ERP Cloud (買掛/未払金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (売掛/未収金トランザクション)
- Oracle ERP Cloud (試算表 - 平均)
- Oracle ERP Cloud (試算表)

「**アプリケーション**」に表示される事前パッケージ化済アプリケーションの名前は、このフィールドで選択した Oracle ERP Cloud の事前パッケージ化済問合せのタイプによって異なります。



5. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
6. 「OK」をクリックします。

Oracle ERP Cloud データ・ソースへのアプリケーション・フィルタの適用

Oracle ERP Cloud ソースに対する事前パッケージ化済問合せを選択するとき、すべてのアプリケーション・フィルタは事前定義されています。ただし、統合オプションに入力値を指定できます。

統合の実行またはアプリケーション・レベルで実際のパラメータ値を定義する必要がある場合は、Oracle ERP Cloud データ・ソースからレポート・パラメータとして定義する動的フィルタを選択できます。

「通貨タイプ」は動的フィルタの一例で、「入力済」、「統計」または「合計」のいずれかを選択できます。

フィルタ条件は 1 つのみでも、複数でも指定でき、さらに戻す値も厳密に指定できます。

レポート・パラメータ・リストの静的パラメータ値は、**\$\$**表記内に囲まれたパラメータ値に置換して変更できる場合があります。このタイプのフィルタは、「元帳 ID」および「期間」パラメータに適用されます。

たとえば、静的パラメータ値 `argument1 = $LEDGER_NAME$` をレポート・パラメータ・リストにパラメータとして追加できます。

オプションの編集ページでは、パラメータの表示名が入力されています。これは、オプション・ページに表示される名前です:

Edit Options: ReportDM1_ReportDM1 Save

Name	Display Prompt	Display Order	Property Level	Validation Type	Validation Object	Condition List
LEDGER_NAME	Ledger Name	1009	Integration	None		

パラメータが統合定義の「オプション」タブでどのように表示されるかを次に示します:

Edit Integration: DL_CustRpt Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

Filters	Options	Clear Region	Business Rules
Name	Condition	Value	
Ledger Name			

事前定義された 2 つのパラメータ \$START_PERIODKEY\$ および \$END_PERIODKEY\$ は、POV から日付書式を使用して特定の期間を選択するのに使用できます。これら 2 つのパラメータの使用については、[Oracle ERP Cloud からの期間レポート・パラメータの選択](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud データ・ソースのフィルタを追加するには。

1. **アプリケーション・ページ**で、Oracle ERP Cloud データ・ソースの右側にある ******* をクリックし、「**オプションの編集**」を選択します。
2. **オプションの編集** ページで、「**追加**」 (**+**) をクリックします。
空白のエントリ行が表示されます。
3. 次のことを実行して、渡すパラメータを選択します:
 - a. 「**名前**」フィールドで、パラメータの名前を指定します。
 - b. 「**表示プロンプト**」に、データ管理の「**ソース・オプション**」タブまたはデータ統合の「**統合の編集**」ページでのフィルタの表示プロンプトの名前を入力します。
 - c. 「**表示順**」で、「**ソース・オプション**」または「**統合の編集**」ページでのフィルタの表示順を指定します。
たとえば、フィルタ・リストの 99 番目にフィルタを表示するには **99** と入力します。表示順は低い順にリストされます。
このフィールドが空白の場合、カスタム・フィルタを表示できず、デフォルト値がフィルタ値として使用されます。
 - d. 「**プロパティ・レベル**」ドロップダウンで、フィルタが表示されるレベルを示すために、パラメータ(アプリケーション、統合、またはアプリケーションと統合の両方)の表示レベルを選択します。
 - e. 参照タイプを使用してリストされる値のドロップダウンを提供するには、「**検証タイプ**」で次のいずれかを選択します
 - なし
 - 数値
 - 参照の検証
 - 参照の検証なし
 - はいいいえ

- 日付
- 問合せ
- 選択リスト - 「検証オブジェクト」フィールドに値リストを入力できます。それぞれの値を新しい行に入力します。オプション・ページの値リスト (LOV) には、値がリストとして表示されます。

たとえば、「取消済請求書のみ」オプションを「いいえ」に設定するには、「**取消済請求書のみ**」のパラメータ・フィールドで「**いいえ**」を選択します。

- f. 「**検証オブジェクト**」に、タイプによって検証される参照オブジェクトのリストを入力します。

前の手順で**選択リスト**検証タイプを選択した場合に値リストを入力するには、



をクリックし、検証オブジェクト・ページで値リストを入力して、「**OK**」をクリックします。

Validation Object

Jan
Feb
Mar
April

4. 「**条件リスト**」で、次のいずれかまたはすべてに基づいて条件リストを提供します:

- EQ (等しい)
- IN
- 類似

条件値としては「等しい」、「類似」または「含む」が可能です。条件値はドロップダウン・リストとして **CONDITION_LIST** フィールドに格納されます。値が EQ, IN の場合、「条件」ドロップダウンには Equal と In のみが表示されます。値が EQ LIKE の場合、ドロップダウンには Equal、Like のみが表示されます。EQ、IN、LIKE の任意の組合せがフィールドに格納されます。1 つのみの値が条件リストで提供される場合、条件は変更できません。デフォルト値は EQ です。複数の条件を指定する場合は、条件の前にカンマを付けてください。たとえば、IN 条件と LIKE 条件を使用するには、,IN,LIKE を入力します

5. オプション「**保存**」をクリックします。

Oracle ERP Cloud からの期間レポート・パラメータの選択

Oracle ERP Cloud からデータをインポートするとき、`$START_PERIODKEY$`および`$END_PERIODKEY$`表記に日付(日付固有フォーマットを使用)を指定して、データを抽出する期間を選択できます。

日付フォーマットの有効値は次のとおりです:

- dd: 日
- MM または MMM: 月
- yy または yyyy: 年

「入力日: 自」および「入力日: 至」を `yyyy-MM-dd` のフォーマットで指定します。2021 年 1 月 1 日から 2021 年 1 月 31 日までのデータをインポートするには、「入力日: 自」フィールドにレポート・パラメータとして **2021-01-01** と入力し、「入力日: 至」フィールドにレポート・パラメータとして **2021-01-31** と入力します。

単一期間ロードを指定する場合は、`$START_PERIODKEY$`表記を選択して、データ・ロード・ルールが実行される期間キーを示します。データは、`$START_PERIODKEY$`表記に指定された期間についてインポートされます。単一期間ロードの場合、ソース期間マッピングは必要ありません。

`$START_PERIODKEY[MM-yy]$`フォーマットを使用して実際の期間を選択することにより、「会計期間名」を変更することもできます。

複数期間ロードを実行する場合は、範囲内のデータがインポートされ、`START_PERIODKEY` および `END_PERIODKEY` パラメータ・リストに指定する必要があります。システムで正しい期間にデータをロードするには、ソース期間マッピングがデータ抽出の「年」および「期間」列に完全に一致する必要があります。

レポートで期間を範囲として受け入れる場合は、複数期間のインポートを使用できます。レポートが期間名(`START_PERIODKEY` パラメータ)のみを受け入れる場合は、複数期間のインポートを使用できません。

カスタム問合せを使用した Oracle ERP Cloud データの統合プロセスの説明

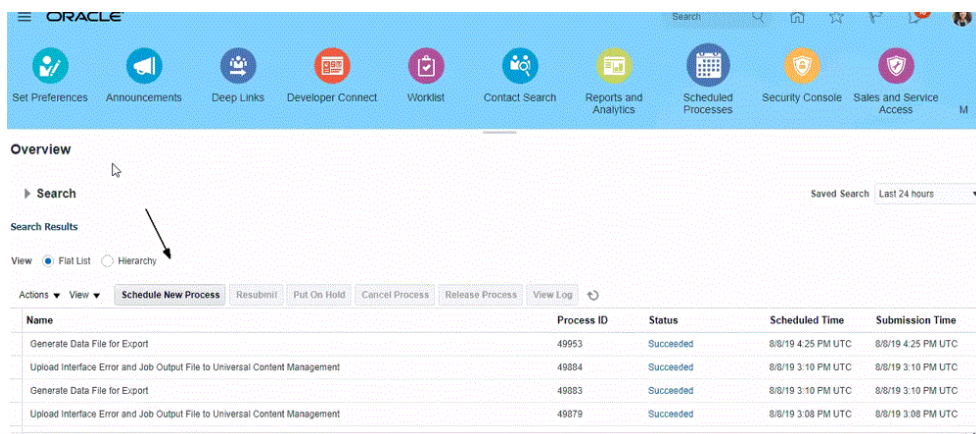
カスタム問合せを使用して Oracle ERP Cloud からデータをフェッチして、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードできます。カスタム問合せは、CSV フォーマット済データ・ファイルを作成する Oracle Business Intelligence Publisher のレポートに対して実行され、そのデータが EPM Cloud にロードされます。この場合、データ統合ではレポートを実行してデータを抽出し、そのデータを EPM Cloud にロードします。

カスタム問合せを使用し、BI Publisher レポート抽出を使用して Oracle ERP Cloud から EPM Cloud にデータをロードするステップは、次のとおりです。

 ノート:

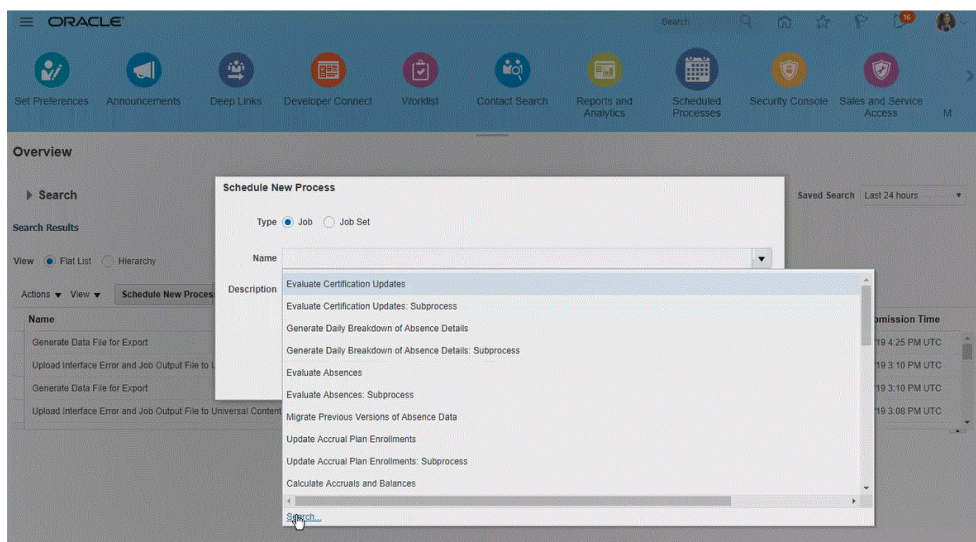
EPM Cloud とのカスタム Oracle ERP Cloud 統合定義を作成し、それを ESS ジョブとして登録するには、[Oracle Enterprise Scheduler \(ESS\)ジョブとしての BI Publisher レポートの登録](#)を参照してください。

1. Oracle ERP Cloud 統合には、権限またはユーザー役割および統合されるすべての ERP 元帳へのデータ・アクセス権が必要です。詳細は、[Oracle ERP Cloud のセキュリティ役割の要件](#)を参照してください。[Oracle ERP Cloud での ERP の保護](#)を参照してください。
2. Oracle ERP Cloud にナビゲートし、「**新規プロセスのスケジュール**」をクリックして、BI Publisher レポートを実行します。



3. 「**検索して選択**」ページの「名前」で、レポートまたは抽出を選択し、「OK」をクリックします。

BI Publisher レポートで CSV フォーマット・ファイルで出力ファイルが作成されている場合は、任意のレポートを選択できます。Fusion では必ずしもすべてのレポートで CSV フォーマット・ファイルが作成されるわけではありません。



たとえば、「**試算**」と入力して試算表レポートを検索します。

Name	Description
Average Balances Trial Balance Report	Lists account balances in...
General Ledger Trial Balance Report	Lists detail or summary a...
Payables Trial Balance Report	Lists and subtotals by sup...
Trial Balance Extract	Extracts information relat...
Trial Balance Report	Lists period debits, period...

4. 「プロセスの詳細」から、抽出またはレポートのパラメータを選択し、「送信」をクリックします。

次の例では、「元帳」が Vision Operations、「金額タイプ」が YTD または PTD です。

「会計期間」を必ず指定してください。「会計期間」は、レポートを再利用できるようにデータ統合で設定されるパラメータです。

ノート:

Oracle ERP Cloud 側で選択した抽出に、EPM Cloud から渡される 1 つ以上のバインド・パラメータがない場合、Oracle ERP Cloud と EPM Cloud の統合は失敗します。バインド・パラメータは、SQL 文の実際の値のプレースホルダです。バインド・パラメータは、チルダ文字(~)で囲まれる必要があります。たとえば、"Period"をバインド・パラメータとして使用するには、~PERIOD~と指定します。名前は、SQL 問合せで指定した名前と完全に一致する必要があります。

そのためには、データ・モデル問合せで参照されないレポートに、バインド・パラメータを直接作成します。データ統合のレポート・パラメータ・リストで、レポート定義で作成したバインド・パラメータに渡されるランダム文字(ABC など)を指定します。

Search and Select: Accounting Period

Search Advanced

PeriodName

Search Reset

PeriodName
Jan-17

OK Cancel

Process Details

Process Options Advanced Submit Cancel

Name Trial Balance Report Print output

Description Lists period debits, period credits, beginning... Notify me when this process ends

Schedule As soon as possible **Submission Notes**

Basic Options

Parameters

* Data Access Set

* Ledger or Ledger Set

* Ledger Currency

* Currency Type

* Balance Type

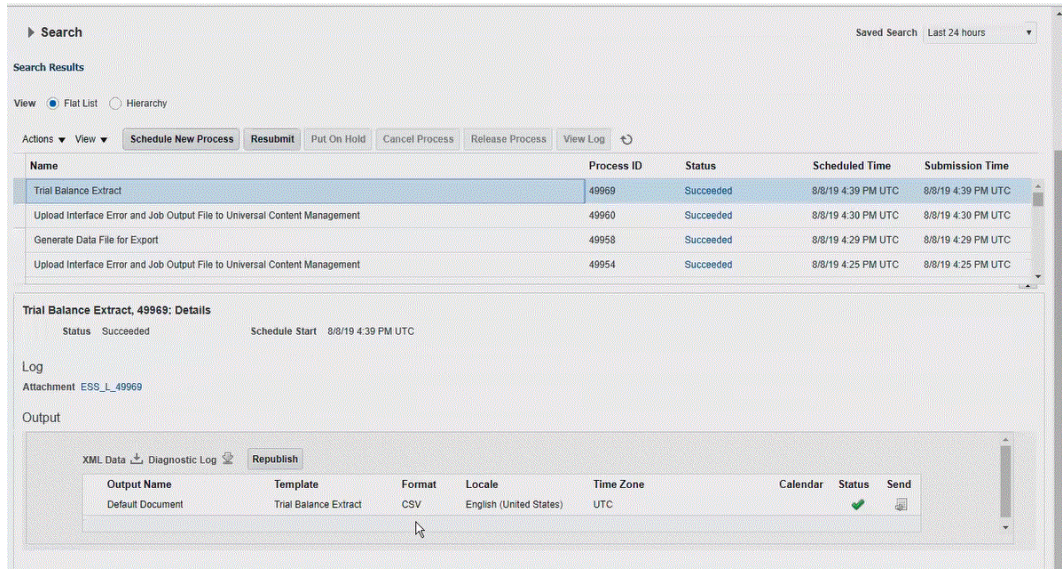
* Accounting Period

* Amount Type

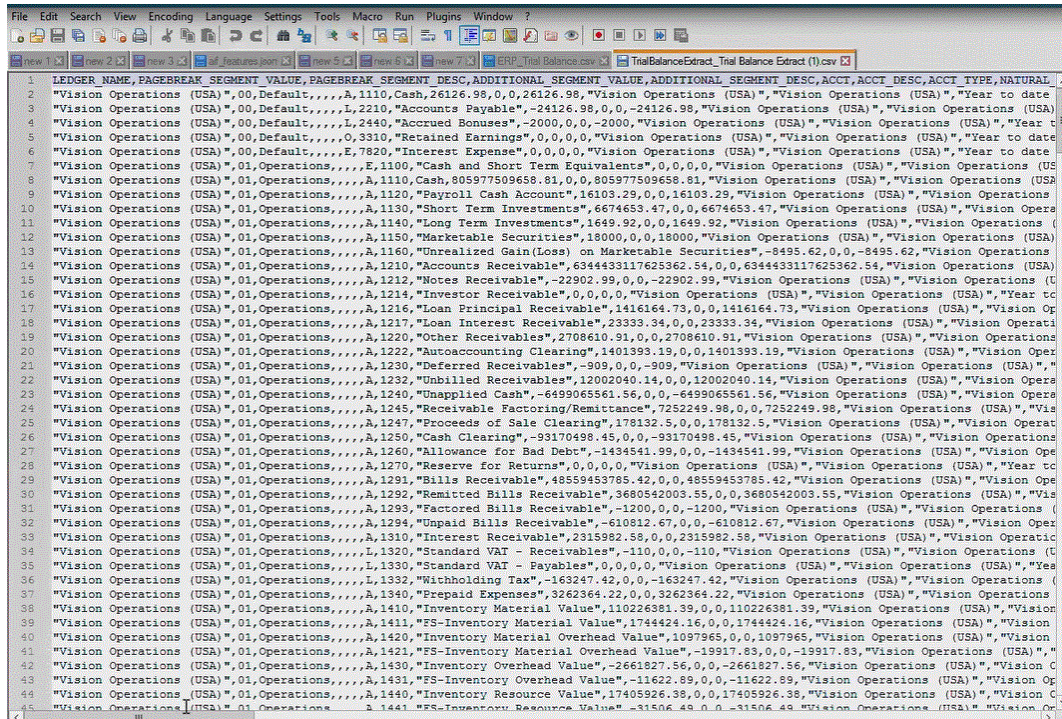
Balancing Segment 0 Filter Conditions Defined

* Summarize By

レポートが生成されると、「出力」セクションに送信の結果が表示されます。



5. 再発行をクリックし、レポート出力ページから「csv」をクリックします。
6. CSV 出力ファイルを選択して右クリックし、「開く」を選択します。

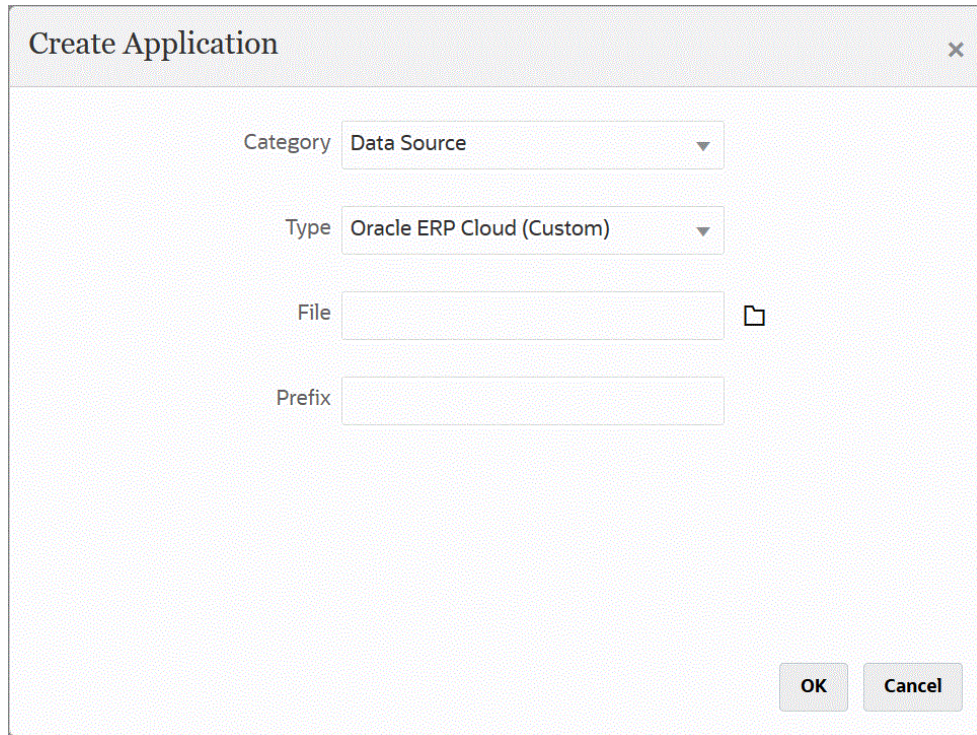


7. ファイル・システムにレポートをローカルに保存します。

ダウンロードされた出力ファイルの名前を *Appname.csv* (*Appnam* は、データ統合の「データ・ソース」アプリケーションの対象アプリケーション名)に変更します。これは、BI Publisher レポート抽出を表します。

8. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。

9. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
10. 「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
11. 「タイプ」から、**Oracle ERP Cloud (カスタム)**を選択します。



Create Application


Category Data Source

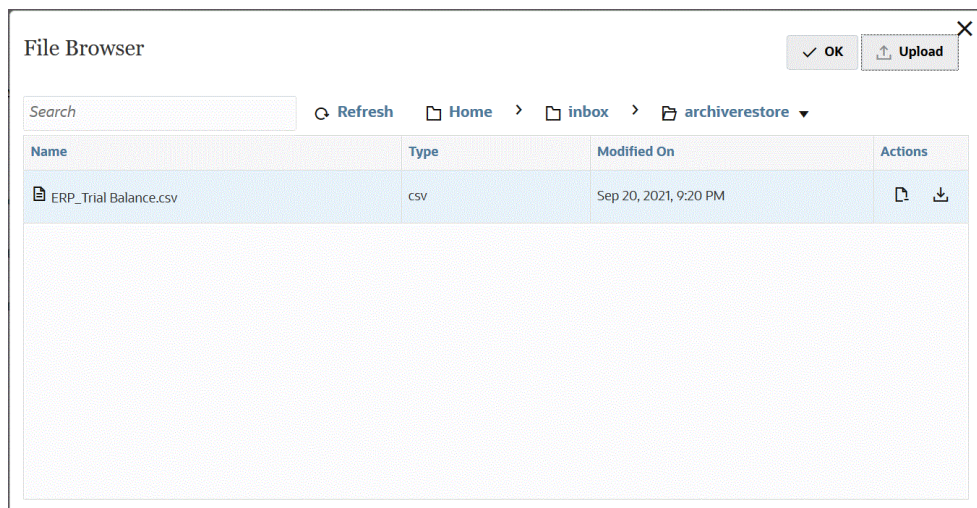
Type Oracle ERP Cloud (Custom)

File

Prefix



OK Cancel

12. 「ファイル」から、 をクリックして CSV ファイルを保存したフォルダに移動し、そのファイルを選択して「OK」をクリックします。



File Browser

Search Refresh Home > inbox > archiverestore

Name	Type	Modified On	Actions
ERP_Trial Balance.csv	csv	Sep 20, 2021, 9:20 PM	 

OK Upload

レポートがターゲット・アプリケーションとして保存され、「アプリケーション名」は自動的に移入されます。

13. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はファイル名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

14. 「OK」をクリックします。

15. 「保存」をクリックします。

データ統合でアプリケーションが登録され、「ディメンションの詳細」のすべての列が返されます。

16. **アプリケーション** ページで、データ・ソース・アプリケーションの横にある **...** をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。

17. 「**接続名**」で、ソース・システムの名前を指定します。

たとえば、ソース・システムの名前が「ERP Cloud」の場合は「**ERP Cloud**」と指定します。

Oracle ERP Cloud または GL ソース・システム名を使用するか、新しい名前を定義することもできます。

18. **実行方法** - ジョブを実行するための方法を指定します。

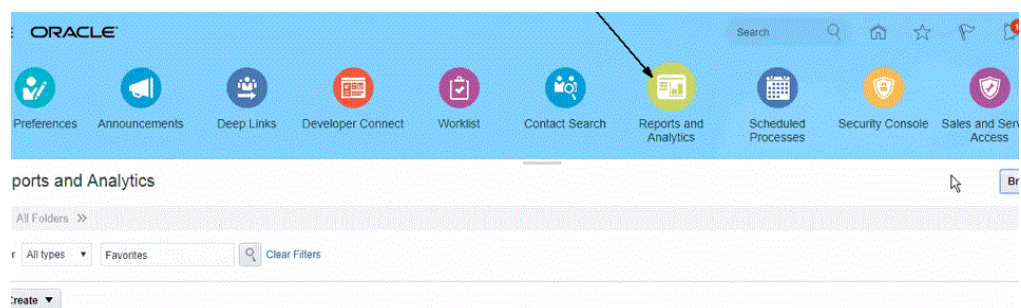
有効なオプション:

- **BIP レポート** - BI Publisher レポートを同期モードで実行します。これには、Oracle ERP Cloud インスタンス内で約 5 分のタイムアウト制限があります。この方法は、小規模なデータ・セットまたは短時間で実行される問合せに適しています。
- **ESS ジョブ** - BI Publisher レポートを非同期モードで実行します。実行時間の制限はありません。

19. **レポート名** - レポートの名前を入力し、実行方法が「**BIP レポート**」の場合はレポートのパスを入力します。たとえば、`/Custom/MyReport.xdo` と入力します。実行方法が「**ESS ジョブ**」の場合は、このフィールドは空白のままにします。

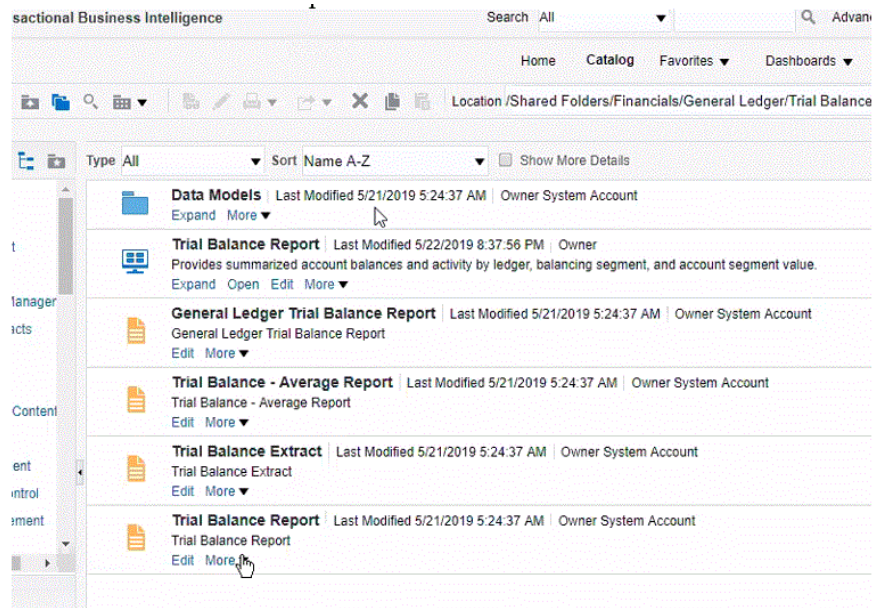
Oracle ERP Cloud でレポートの名前を見つける必要がある場合は、次のステップを実行します:

a. **Oracle ERP Cloud** に移動してレポートを検索し、「**レポートおよび分析**」を選択してパラメータ情報を取得します。

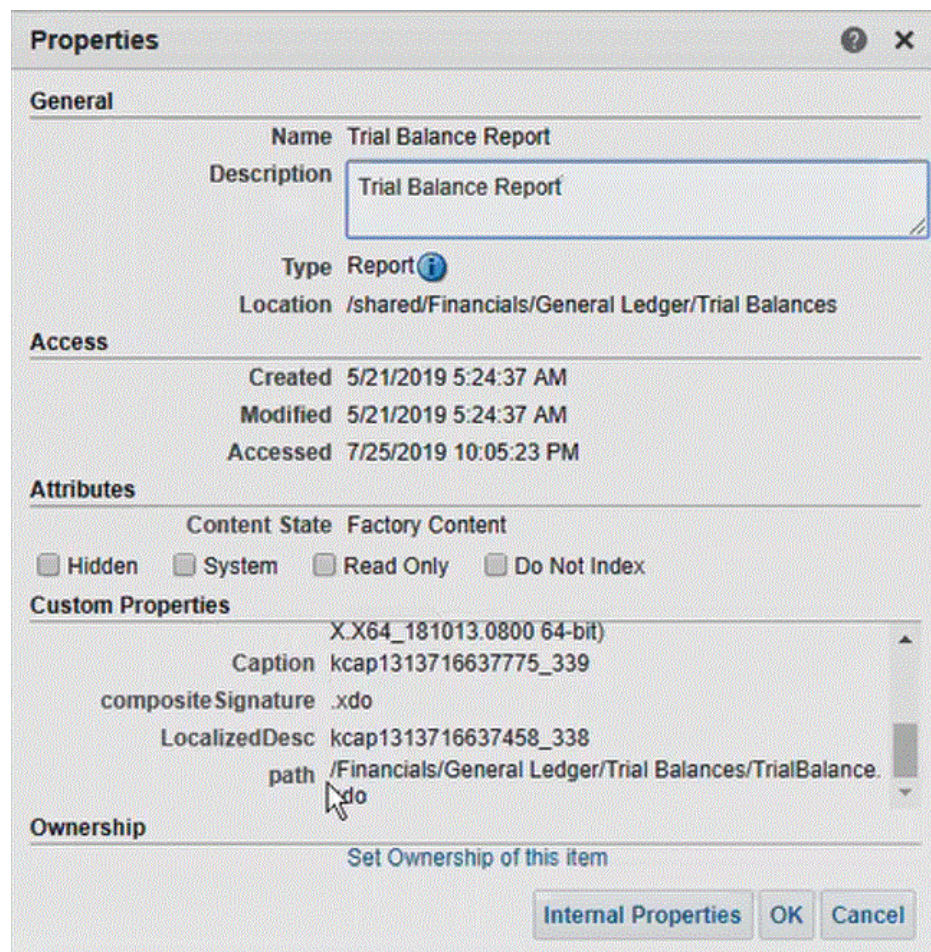


b. 「**カタログの参照**」をクリックします。

c. 抽出またはレポートを検索して選択します。



- d. 「詳細」、「プロパティ」の順にクリックします。



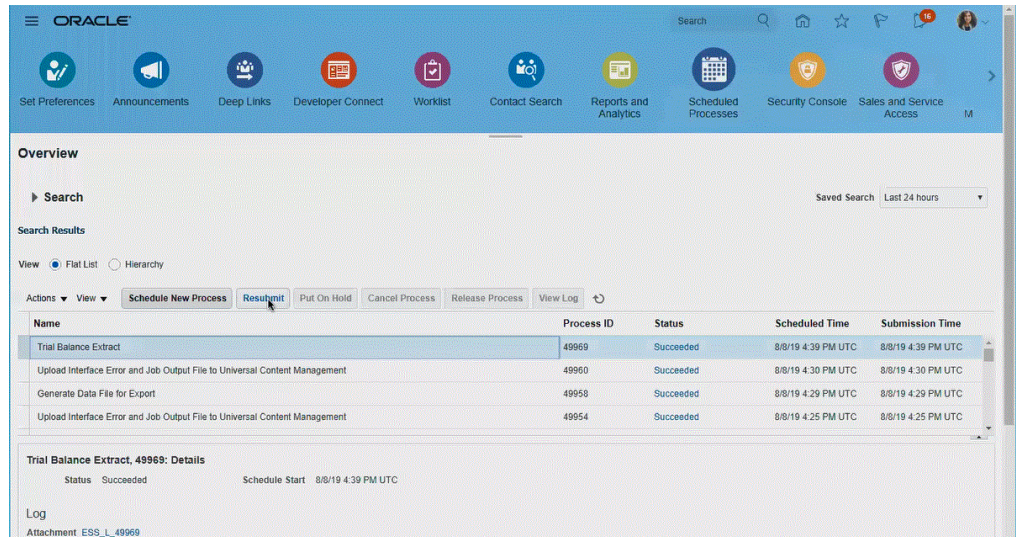
- e. 「カスタム・プロパティ」セクションで、「パス」フィールドまで下にスクロールします。

- f. データ統合にターゲット・アプリケーションを登録するとき、**パス**(および名前)をコピーして「**レポート名**」フィールドに貼り付けます。
20. データ統合に戻り、**レポート・パラメータ・リスト**で、カスタム問合せのレポート・パラメータを指定します。

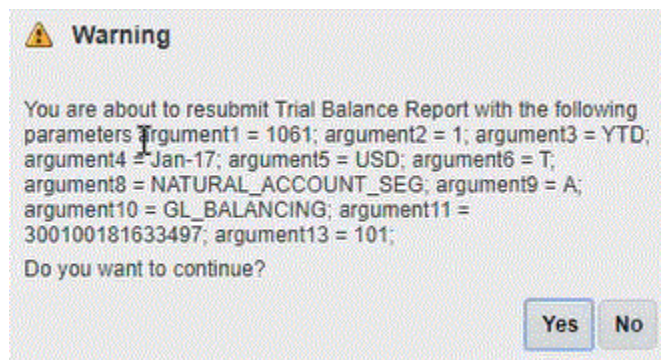
レポート・パラメータを識別する必要がある場合は、次のことを実行します:

- a. **Oracle ERP Cloud** に移動し、「**概要**」ページからレポートを選択して、**再送信**をクリックします。

このステップにより、BI Publisher の抽出またはレポートで定義したレポート・パラメータを表示して取得できます。



レポート・パラメータのリストが生成されます。



- b. 「**警告**」ウィンドウに表示されるレポート・パラメータをコピーします。

 ノート:

#NULL (null)パラメータが BI Publisher パラメータとして Oracle ERP Cloud から EPM Cloud に渡される場合、#NULL パラメータによって ERP アダプタベースのフレームワークは失敗します。

この問題を修正するには、パラメータのリストで#NULL の値を持つパラメータを削除し、値を空のままにして、空白を削除します。

次に例を示します:

現在のパラメータが次のような場合:

```
argument1=30029384;argument2=#NULL;argument3=01-JAN-2022
```

argument2=#NULL を次のように変更します:

```
argument1=30029384;argument2=;argument3=01-JAN-2022
```

- c. データ統合に移動し、「警告」ウィンドウからカスタム問合せの**レポート・パラメータ・リスト**・フィールドにレポート・パラメータ・リストを貼り付けます。

レポート・パラメータ・リストで、レポート定義で作成したバインド・パラメータに渡されるランダム文字(ABC など)を指定していることを確認します。
EPM Cloud から渡されるバインド・パラメータがない問合せを使用してレポートを作成すると、EPM Cloud 側でプロセスが失敗します。
21. データ統合で、インポート・フォーマットを作成することにより、Oracle ERP Cloud データ・ソースとターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。

[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。
22. インポート・フォーマットの関連付けに使用するロケーションを定義します。
23. メンバーをソースからターゲットにマップします。
[メンバーのマッピング](#)を参照してください。
24. ソースおよびターゲットのオプションを選択します。
[データ統合オプションの設定](#)を参照してください。
25. 統合を実行します。
[統合の実行](#)を参照してください。

Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブとしての BI Publisher レポートの登録

Oracle Business Intelligence Publisher レポート抽出を Oracle ERP Cloud との Oracle Enterprise Performance Management Cloud 統合定義の基礎として作成すると、実行時間の制限なく統合を実行できます。これを行うには、統合定義において、BI Publisher レポートを Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブとして登録します。

ESS ジョブの登録プロセスの説明

Oracle Business Intelligence Publisher レポート抽出を ESS ジョブとして登録する方法の概要を次に示します。

1. データ抽出 SQL を定義します。

BI Publisher レポートのソースはデータ・モデルであり、これによりソース問合せおよびパラメータ定義が定義されます。抽出を定義する前に、ソース抽出 SQL を定義する必要があります。

詳細は、[データ抽出プロセスの定義](#)を参照してください。

2. BI Publisher レポート抽出のデータ・モデルを作成します。

詳細は、[BI Publisher レポート抽出のデータ・モデルの作成](#)を参照してください。

3. BI Publisher レポート抽出を作成します。

詳細は、[BI Publisher レポート抽出の作成](#)を参照してください。

4. 非同期モードで実行される Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブを作成します。

このステップは、抽出を非同期モードで実行する場合にのみ必要です。抽出レポート用のカスタム ESS ジョブを作成します。

詳細は、[Oracle Enterprise Scheduler \(ESS\)ジョブの作成](#)を参照してください。

5. BI Publisher レポート抽出をソースとして使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud で統合を作成します。

詳細は、次を参照してください [EPM Cloud と BI Publisher レポート抽出間の統合定義の作成](#)

データ抽出プロセスの定義

Oracle Business Intelligence Publisher レポートのソースはデータ・モデルであり、これによりソース問合せおよび問合せで使用されるパラメータが定義されます。抽出を定義する前に、ソース抽出 SQL を定義する必要があります。

次の例は、GL_BALANCES 表から特定の期間および元帳の取引残高を抽出するサンプル問合せを示しています。ソース内の任意の表を指定できますが、明確で使いやすいように、ここでは GL 残高の例を示します。

データ抽出プロセスを定義するには:

1. SQL ツールを使用して問合せを作成します。

この例では、BI Publisher で使用する前に結果のデバッグを容易にするために、SQL ツールを使用して問合せを作成します。このステップを実行するためのツールがない場合は、BI Publisher で問合せを入力できます。これは基本問合せであり、抽出プロセスの一部として期間および元帳名が Oracle Enterprise Performance Management Cloud から渡されるように、追加のバインド変数が含まれています。

```

SELECT LED_NAME LEDGER_NAME, SEGMENT1, SEGMENT2, SEGMENT3, SEGMENT4, SEGMENT5, SEGMENT6,
GB.CURRENCY_CODE, PERIOD_NAME, (PERIOD_NET_DR - PERIOD_NET_CR) NET_AMOUNT FROM GL_BALANCES GB
INNER JOIN GL_LEDGERS LED ON LED.LEDGER_ID = GB.LEDGER_ID
INNER JOIN GL_CODE_COMBINATIONS GCC ON GCC.CODE_COMBINATION_ID = GB.CODE_COMBINATION_ID
WHERE ACTUAL_FLAG = 'A' AND TRANSLATED_FLAG IS NULL
    
```

LEDGER_NAME	SEGMENT1	SEGMENT2	SEGMENT3	SEGMENT4	SEGMENT5	SEGMENT6	CURRENCY_CODE	PERIOD_NAME	NET_AMOUNT
1 Vision Foods - USA Ledger 3111	000	0000	0000	11010	0000	USD	Jul-09	449488.02	
2 Vision Foods - USA Ledger 3111	000	0000	0000	11010	0000	USD	Aug-09	497780.01	
3 Vision Foods - USA Ledger 3111	000	0000	0000	11010	0000	USD	Sep-09	557857.25	
4 Vision Foods - USA Ledger 3111	000	0000	0000	17800	0000	USD	Apr-08	152527.32	
5 Vision Foods - USA Ledger 3121	000	0000	0000	17800	0000	USD	Apr-08	157293.78	
6 Vision Foods - USA Ledger 3211	000	0000	0000	17800	0000	USD	Apr-08	171593.11	
7 Vision Foods - USA Ledger 3231	000	0000	0000	17810	0000	USD	Apr-08	106224.08	
8 Vision Foods - USA Ledger 3241	000	0000	0000	17890	0000	USD	Apr-08	-33501.92	
9 Vision Foods - USA Ledger 3311	000	0000	0000	17890	0000	USD	Apr-08	-29824.19	
10 Vision Foods - USA Ledger 3111	000	0000	0000	17899	0000	USD	Apr-08	145990.43	
11 Vision Foods - USA Ledger 3251	000	0000	0000	17899	0000	USD	Apr-08	161957.61	
12 Vision Foods - USA Ledger 3211	000	0000	0000	21011	0000	USD	Apr-08	-9805.37	
13 Vision Foods - USA Ledger 3999	000	0000	0000	21011	0000	USD	Apr-08	-7626.78	
14 Vision Foods - USA Ledger 3121	000	0000	0000	21020	0000	USD	Apr-08	-112352.86	
15 Vision Foods - USA Ledger 3888	000	0000	0000	21020	0000	USD	Apr-08	-142994.45	
16 Vision Foods - USA Ledger 3888	000	0000	0000	21021	0000	USD	Apr-08	-54338.12	

- 問合せの実行時に問合せとともに渡すバインド・パラメータ値を追加します。

Oracle ERP Cloud 側で選択した抽出に、EPM Cloud から渡される 1 つ以上のバインド・パラメータがない場合、Oracle ERP Cloud との統合は失敗します。

ここでは、2 つのバインド・パラメータが問合せに追加されています：

```

SELECT LED_NAME LEDGER_NAME, SEGMENT1, SEGMENT2, SEGMENT3, SEGMENT4, SEGMENT5, SEGMENT6,
GB.CURRENCY_CODE, PERIOD_NAME, (PERIOD_NET_DR - PERIOD_NET_CR) NET_AMOUNT FROM GL_BALANCES GB
INNER JOIN GL_LEDGERS LED ON LED.LEDGER_ID = GB.LEDGER_ID
INNER JOIN GL_CODE_COMBINATIONS GCC ON GCC.CODE_COMBINATION_ID = GB.CODE_COMBINATION_ID
WHERE ACTUAL_FLAG = 'A' AND TRANSLATED_FLAG IS NULL
AND LED_NAME = :LEDGER_NAME AND GB.PERIOD_NAME = :PERIOD_NAME;
    
```

次に、「Vision Services (USA)」という名前の元帳および期間「Jul-20」の場合の問合せからの出力サンプルを示します：

LEDGER_NAME	SEGMENT1	SEGMENT2	SEGMENT3	SEGMENT4	SEGMENT5	SEGMENT6	CURRENCY_CODE	PERIOD_NAME	NET_AMOUNT
1 Vision Services (USA) 01	740	7844	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
2 Vision Services (USA) 01	840	1660	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
3 Vision Services (USA) 01	420	7040	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
4 Vision Services (USA) 01	420	7420	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
5 Vision Services (USA) 01	402	4130	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
6 Vision Services (USA) 01	560	7450	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
7 Vision Services (USA) 01	570	7450	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
8 Vision Services (USA) 01	830	7580	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
9 Vision Services (USA) 01	000	1640	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
10 Vision Services (USA) 01	000	1660	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
11 Vision Services (USA) 01	450	7530	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
12 Vision Services (USA) 01	470	7530	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
13 Vision Services (USA) 01	480	7530	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
14 Vision Services (USA) 01	000	1560	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
15 Vision Services (USA) 01	420	5050	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
16 Vision Services (USA) 01	430	7350	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
17 Vision Services (USA) 01	420	7690	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
18 Vision Services (USA) 01	000	2550	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
19 Vision Services (USA) 01	420	7560	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	
20 Vision Services (USA) 01	422	7360	000	(null)	(null)	USD	Jul-20	0	

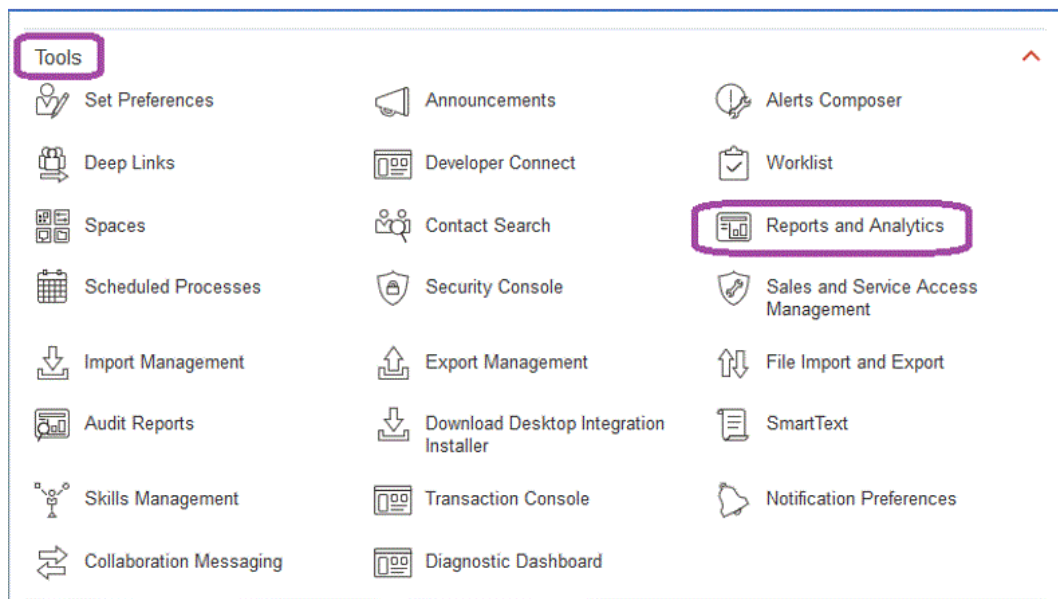
BI Publisher レポート抽出のデータ・モデルの作成

このステップでは、Oracle Business Intelligence Publisher レポート抽出のデータ・モデルを作成します。

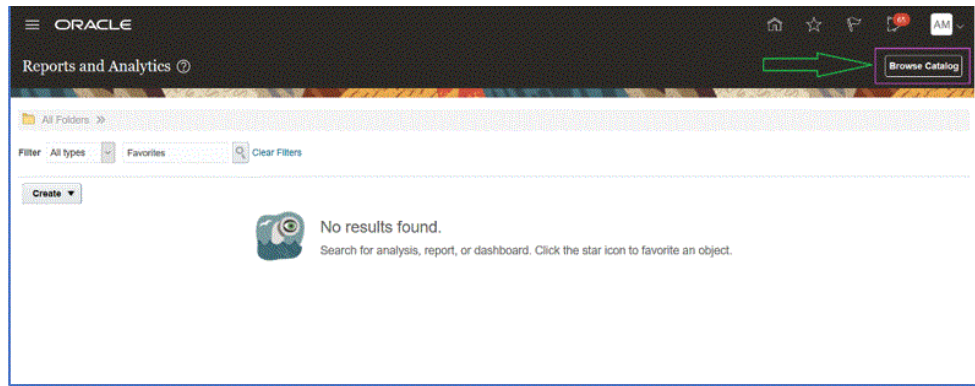
データ・モデルは、レポート用のデータを取得して構造化するための BI Publisher の一連の指示を含んだオブジェクトです。データ・モデルは、カタログ内に個別のオブジェクトとして存在します。簡単に言うと、データ・モデルは単一データ・ソースから取得された 1 つのデータ・セット(たとえば、従業員表の列から返されたデータ)です。データ・モデルは、パラメータ、トリガー、バースト定義、さらに複数のデータ・セットが含まれて複雑になることもあります。

データ・モデルを構築するには:

1. Oracle ERP Cloud の「ツール」で、「レポートおよび分析」に移動します。

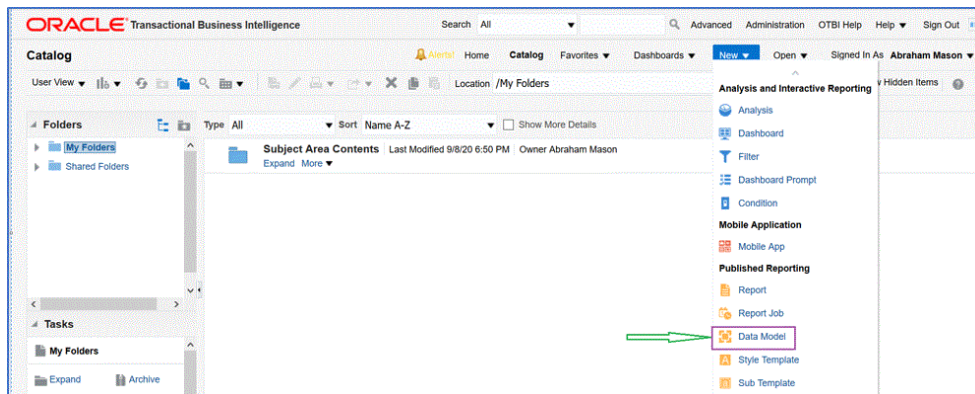


2. BI Publisher が開いたら、「カタログのブラウズ」をクリックします。

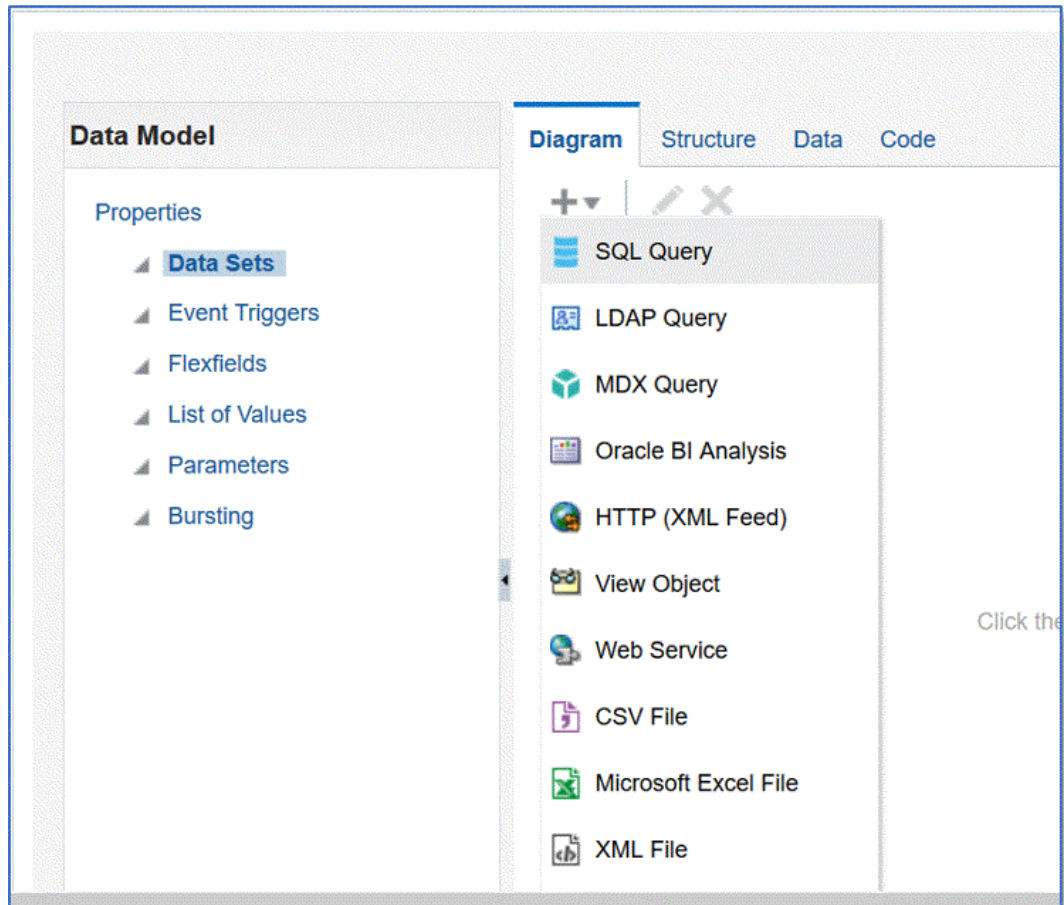


新しいタブが開き、新しいデータ・モデルを作成できます。これは、すべての BI Publisher 抽出に必要であり、BI Publisher レポートのソースです。

3. 「データ・モデル」をクリックします。



4. データ・モデル・ページから「SQL 問合せ」を選択します。



5. 問合せの名前を指定し、「SQL のタイプ」ドロップダウンで「標準 SQL」を選択します。
6. 「SQL 問合せ」で、前の項で定義した SQL を貼り付けて「OK」をクリックします。

New Data Set - SQL Query

* Name: GLBalances

* Data Source: ApplicationDB_FSCM

* Type of SQL: Standard SQL

* SQL Query

```
SELECT LED.NAME  
LEDGER_NAME,SEGMENT1,SEGMENT2,SEGMENT3,SEGMENT4,SEGMENT5,SEGMENT6,  
GB.CURRENCY_CODE,PERIOD_NAME,(PERIOD_NET_DR - PERIOD_NET_CR) NET_AMOUNT  
FROM GL_BALANCES GB  
INNER JOIN GL_LEDGERS LED ON LED.LEDGER_ID = GB.LEDGER_ID  
INNER JOIN GL_CODE_COMBINATIONS GCC ON GCC.CODE_COMBINATION_ID =  
GB.CODE_COMBINATION_ID  
WHERE ACTUAL_FLAG = 'A' AND TRANSLATED_FLAG IS NULL  
AND LED.NAME = :LEDGER_NAME AND GB.PERIOD_NAME = :PERIOD_NAME
```

Buttons: Generate Explain Plan, OK, Cancel

7. **パラメータの追加**ページから、含めるバインド・パラメータを選択して「OK」をクリックします。

バインド・パラメータは自動的に検出されます。

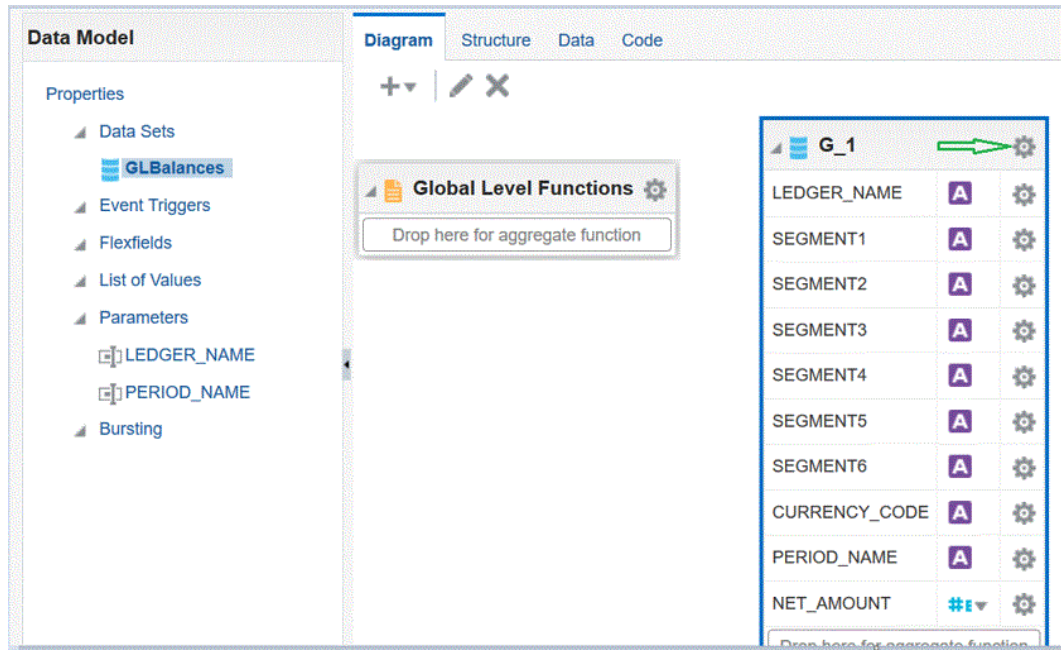
Add Parameter - GLBalances

Please select one or more bind variables to create corresponding parameters

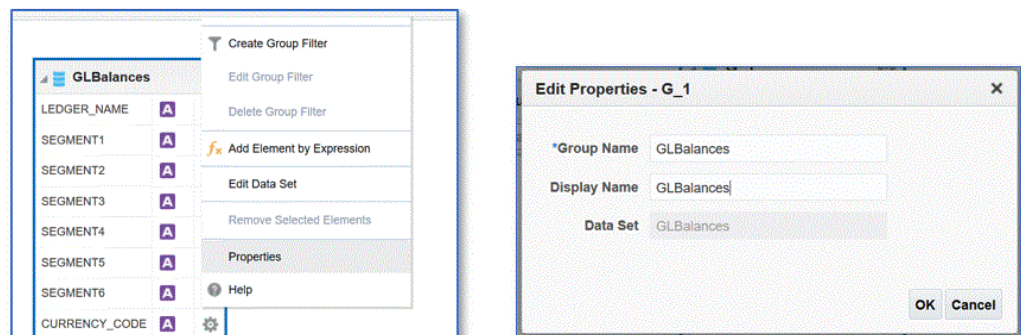
- PERIOD_NAME
- LEDGER_NAME

Buttons: OK, Cancel

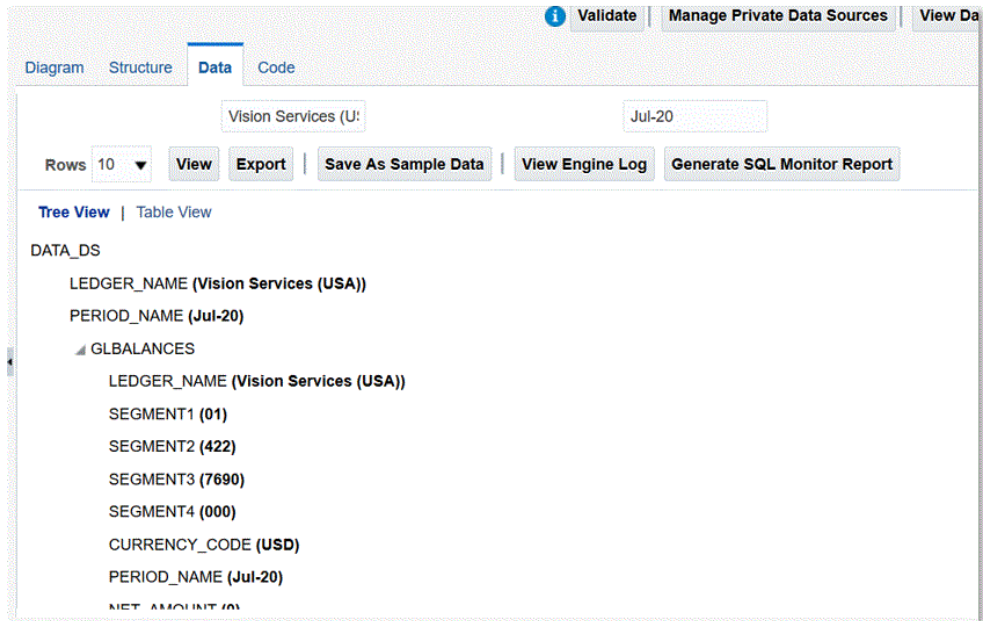
8. データ・モデル・ページの「プロパティ」の「データ・セット」から、問合せを選択します。
問合せ列が表示されます。



9. 「プロパティ」を選択して必要に応じてグループ名を編集し、「OK」をクリックします。

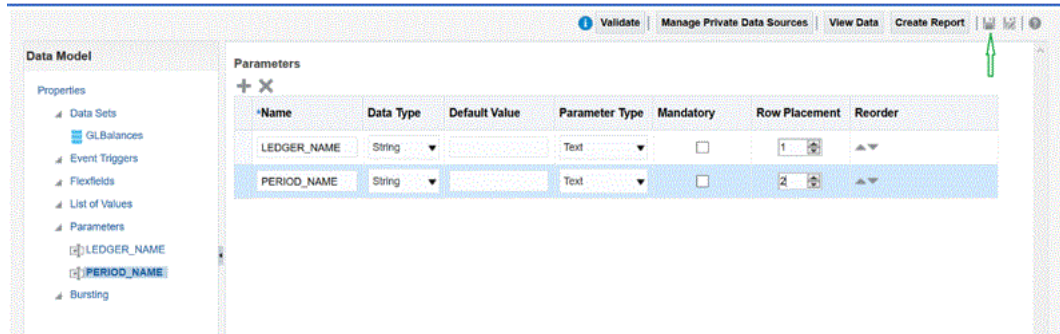


10. データ・モデル・ページから、「データ」タブをクリックし、バインド・パラメータのサンプル値を入力して問合せのサンプル・データを表示します。
データは、ツリー形式と表形式の両方で表示できます。

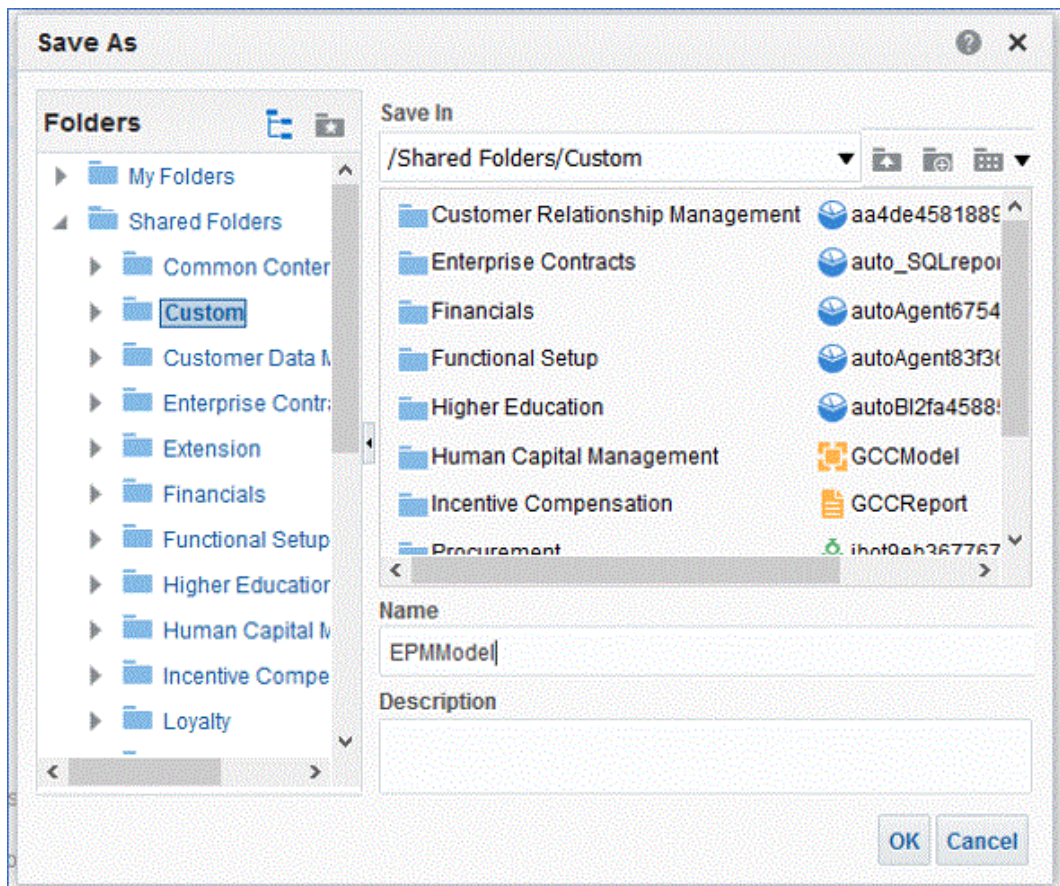


LEDGER_NAME	SEGMENT1	SEGMENT2	SEGMENT3	SEGMENT4	SEGMENT5	SEGMENT6	CURRENCY_CODE	PERIOD_NAME	NET_AMOUNT
Vision Services (USA)	01	422	7690	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	424	7690	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	495	7450	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	830	7530	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	420	7630	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	580	7440	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	830	7450	000			USD	Jul-20	0

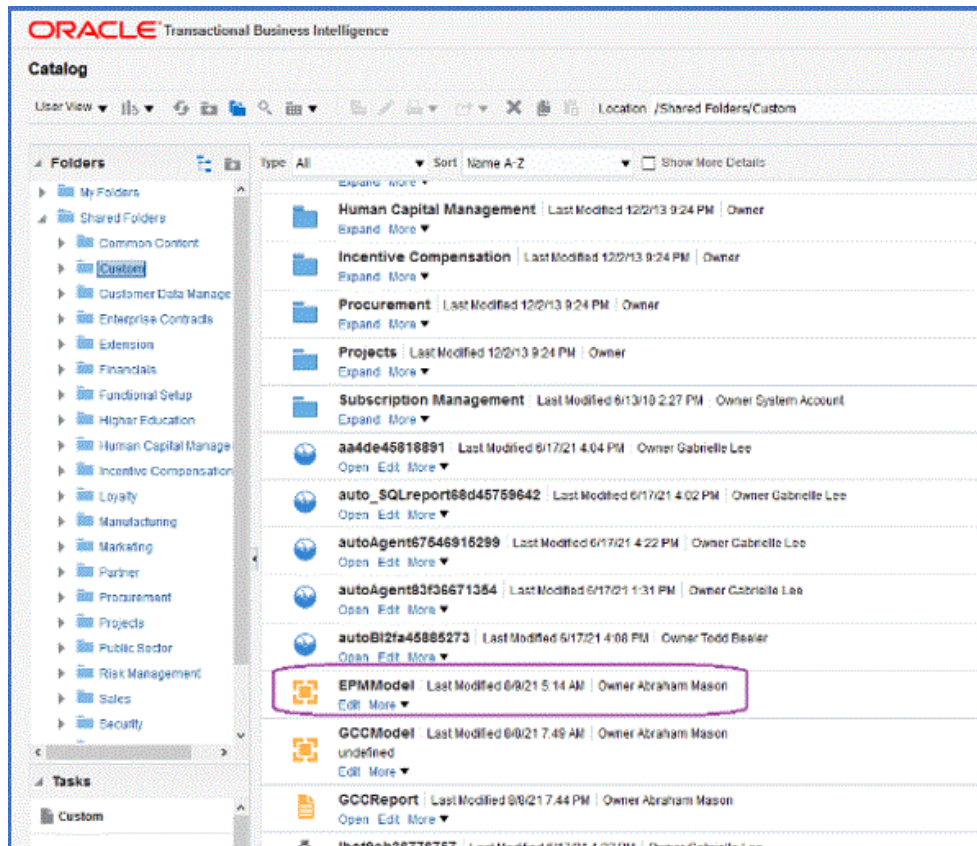
11. 「サンプル・データとして保存」をクリックします。
サンプル・データは、レポート・レイアウトを作成し、レポート定義をプレビューするために必要です。
12. 「データ・モデル」メニューから、「パラメータ」に移動し、**行配置順序**を選択します。
順序は重要であり、同じ順序をレポート定義で定義する必要があります。
13. 行を確認し、「保存」をクリックします。



14. データ・モデルを保存する場所を選択するよう求められます。



15. 保存後は、BI カタログでデータ・モデルを表示して編集します。



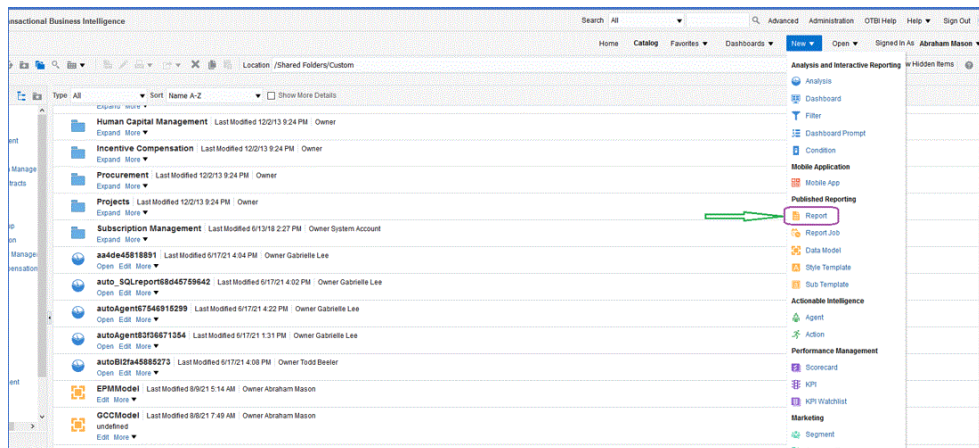
データ・モデルが保存された後は、それを BI Publisher 抽出の基礎として使用できます。

BI Publisher レポート抽出の作成

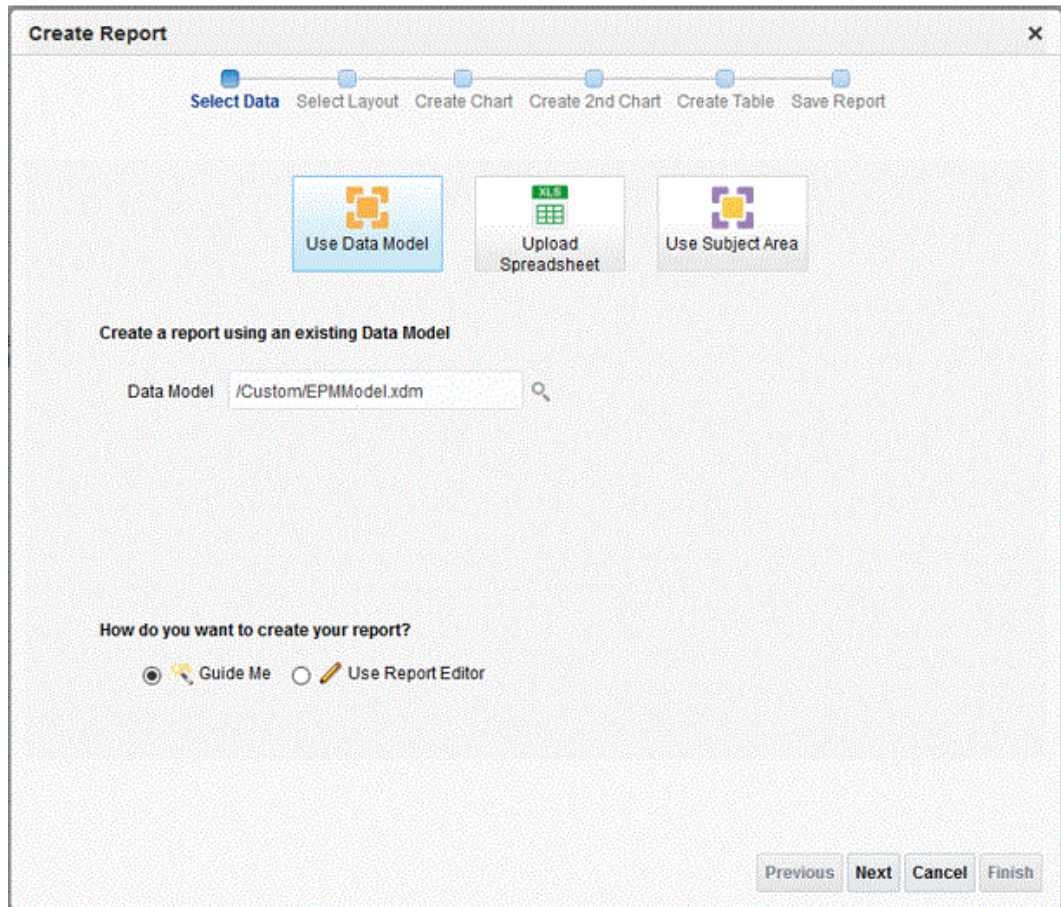
このステップでは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud との統合のデータ・ソースとして使用される Oracle Business Intelligence Publisher レポート抽出を作成します。

BI Publisher レポート抽出を作成するには:

1. BI Publisher で、「新規」を選択し、「公開レポート」の下の「レポート」メニュー・オプションを選択して新しいレポートを作成します。



2. レポートの作成ページで、既存のデータ・モデルを使用するために「データ・モデルの使用」をクリックし、次に「既存のデータ・モデルを使用してレポートを作成します」から、データ・モデルを選択して「次」をクリックします。

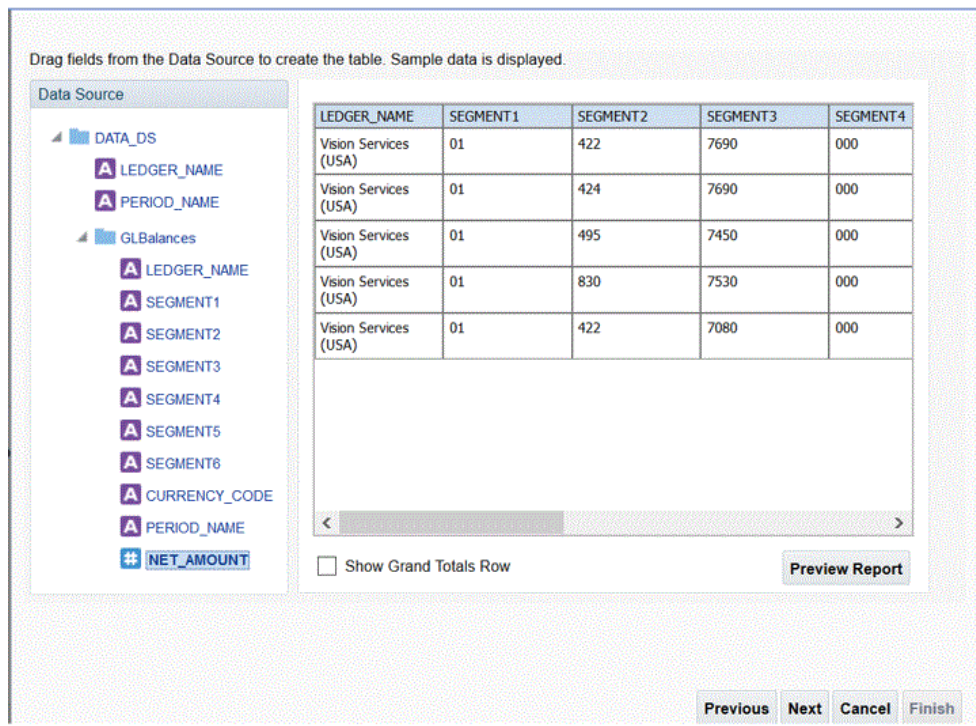


3. 次のページでは、デフォルト値のままにします。

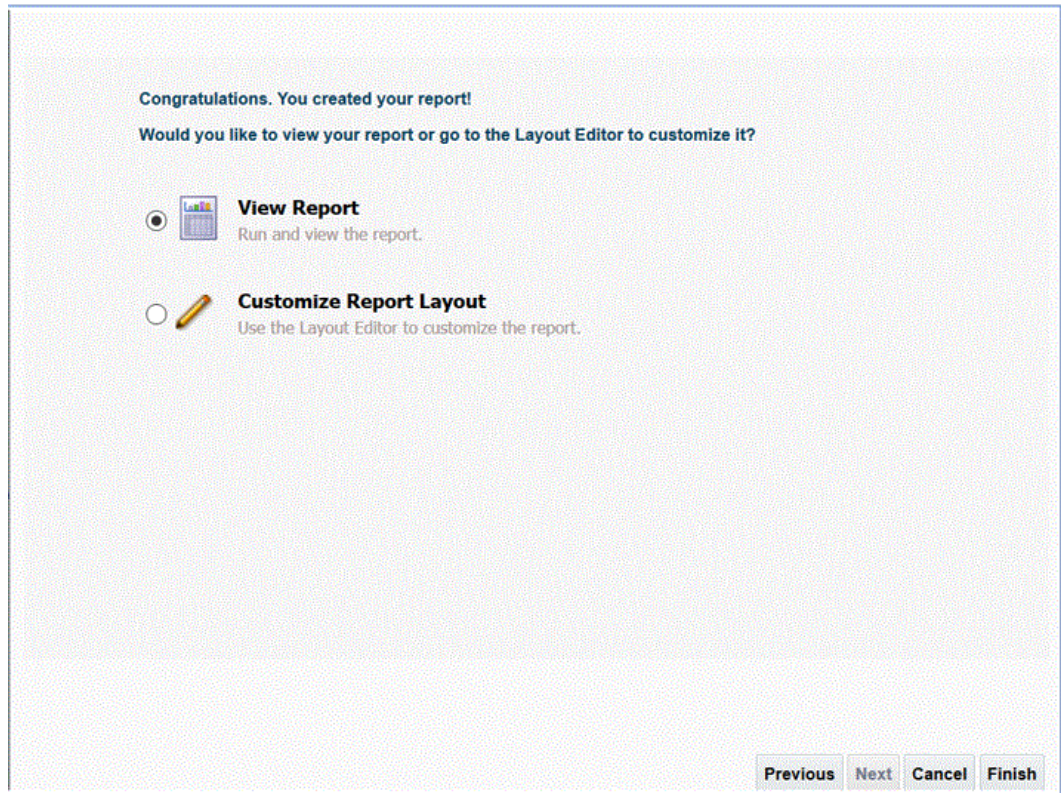


4. 次のページで、ページの下部にある「**総計行の表示**」フィールドの選択を解除します。
5. 同じページで、左ペインの「**データソース**」から右ページのレイアウト領域に列をドラッグ・アンド・ドロップして、抽出対象のすべての列を含めます。

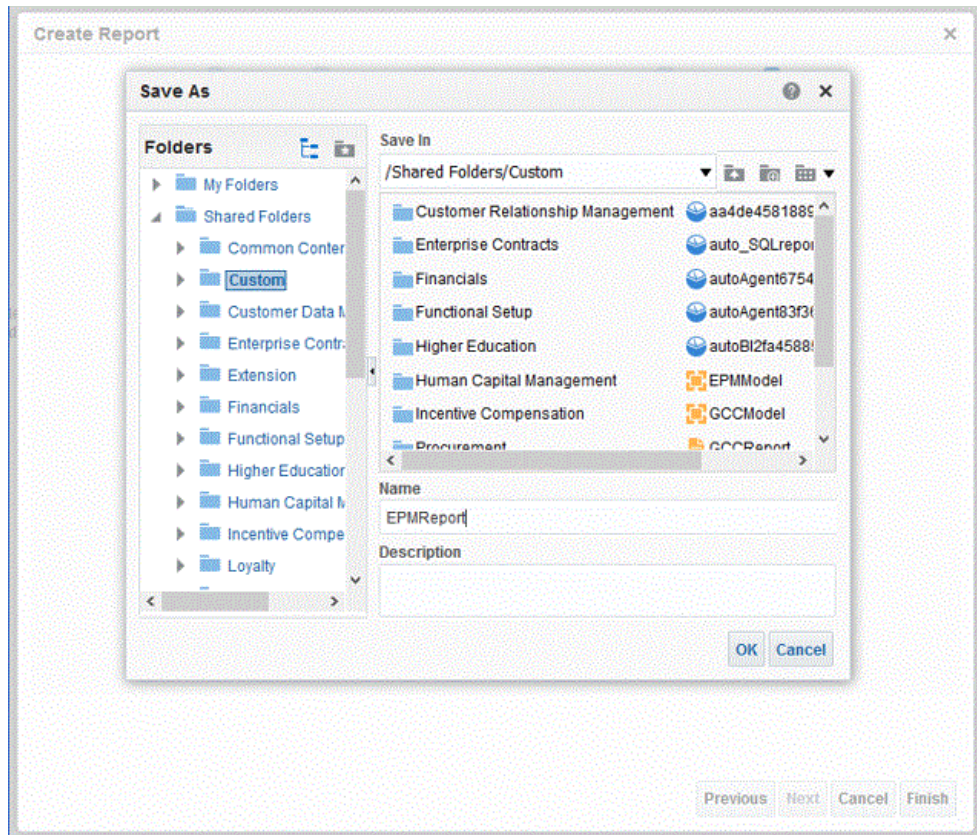
表示されるサンプル・データは、データ・モデルを作成したときに生成されたサンプル・データに基づきます。



6. 「終了」をクリックします。



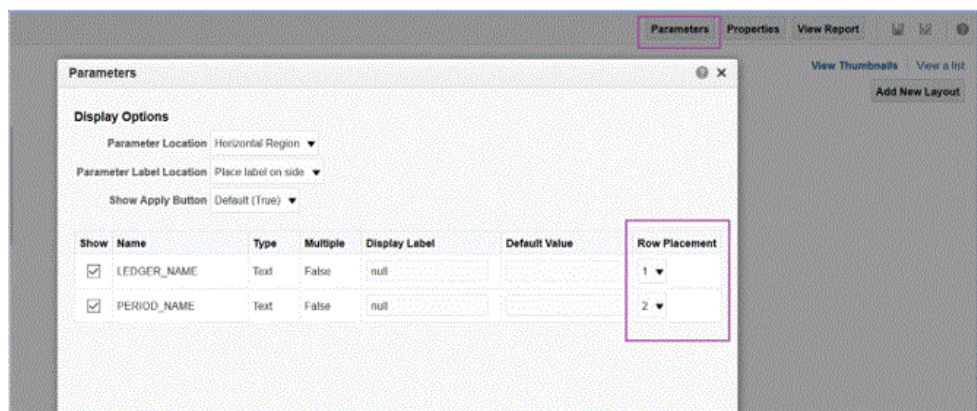
7. レポートを必要な場所に保存します。
この例では、レポート定義は */Custom/EPMReport.xdo* に保存されます。




- レポートの保存後、レポートを実行してデータが正しく表示されることを確認します。次に、必要に応じてバインド・パラメータのサンプル値を入力します。

LEDGER_NAME	SEGMENT1	SEGMENT2	SEGMENT3	SEGMENT4	SEGMENT5	SEGMENT6	CURRENCY_CODE	PERIOD_NAME	NET_AMOUNT
Vision Services (USA)	01	422	7000	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	424	7000	000			USD	Jul-20	0
Vision Services (USA)	01	896	7000	000			USD	Jul-20	0

- 行配置順序を確認し、レポートを編集して、順序がデータ・モデルと同じであることを確認します。

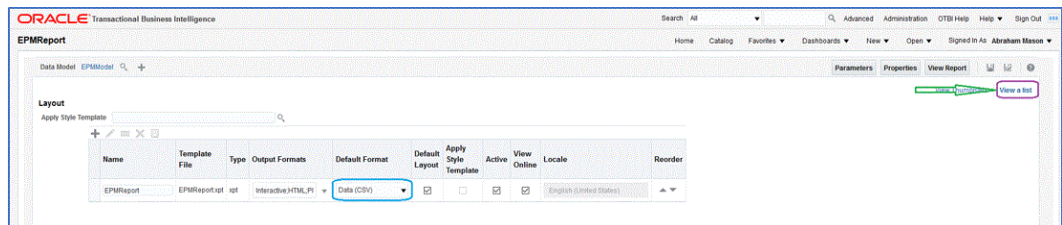


- レポートの編集で、CSV がレポートのデフォルト出力フォーマットとして含まれるようにします。

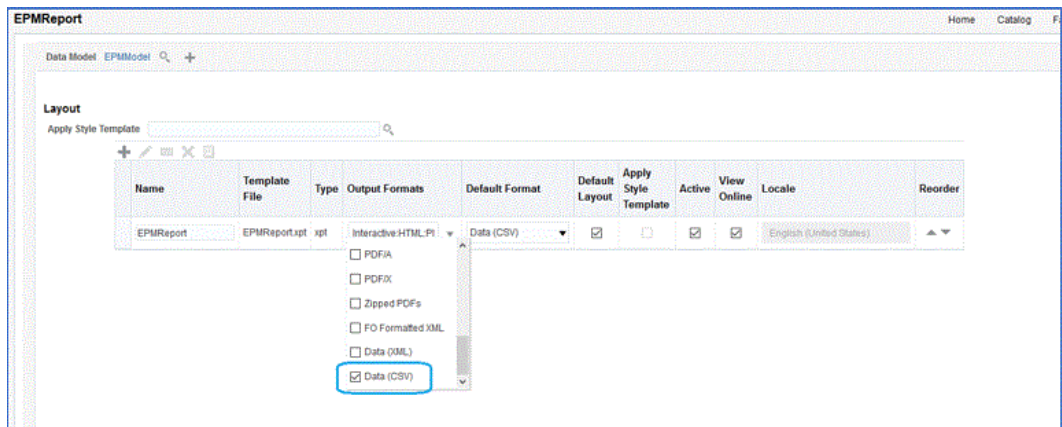
 **Note:**

抽出を同期モードで実行する場合、実行は CSV をパラメータとして呼び出されるため、デフォルト出力フォーマットを CSV に設定する必要はありません。ただし、非同期モードで実行する場合、カスタム ESS ジョブには CSV に設定されたデフォルト・フォーマットが必要です。

- デフォルト出力フォーマットとして CSV を選択するには、「リストで表示」をクリックします。



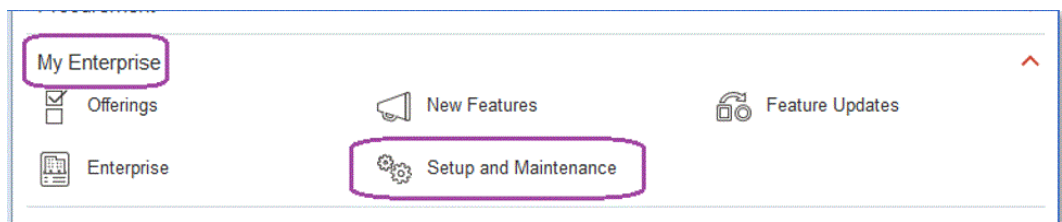
- 「出力フォーマット」から、「データ(csv)」を選択します。



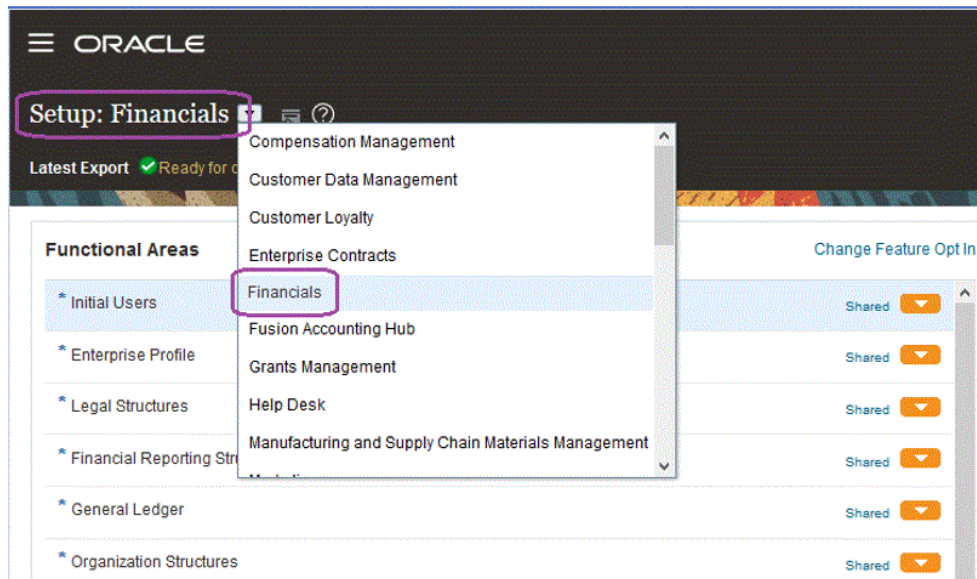
Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブの作成

Oracle Business Intelligence Publisher レポートを Oracle Enterprise Scheduler (ESS)ジョブとして登録し、統合を非同期モードで実行します。このモードでは、タイムアウト制限の対象ではない特定の間隔で実行されるようにジョブをスケジュールできます。ESS ジョブを作成して抽出を非同期モードで実行するには:

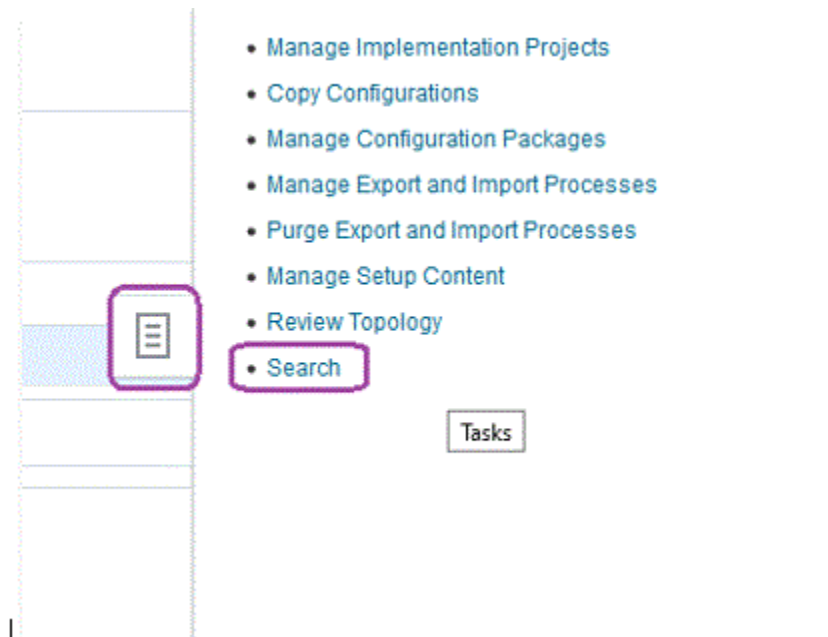
- BI Publisher で、「自分の企業」に移動し、「設定および保守」を選択します。



2. 「サブジェクト領域」ドロップダウンから、「財務」を選択します。



3. 「検索」をクリックします。



4. エンタープライズ・スケジューラの管理を検索して「財務、サプライ・チェーン管理および関連アプリケーション用のエンタープライズ・スケジューラ・ジョブ定義およびジョブ・セットの管理」を選択します。

Search

Manage Enterprise Scheduler


Match With Tasks, Task Lists, Business Objects

Name

Manage Enterprise Scheduler Job Definitions and Job Sets for Customer Relationship Management and Related Applications

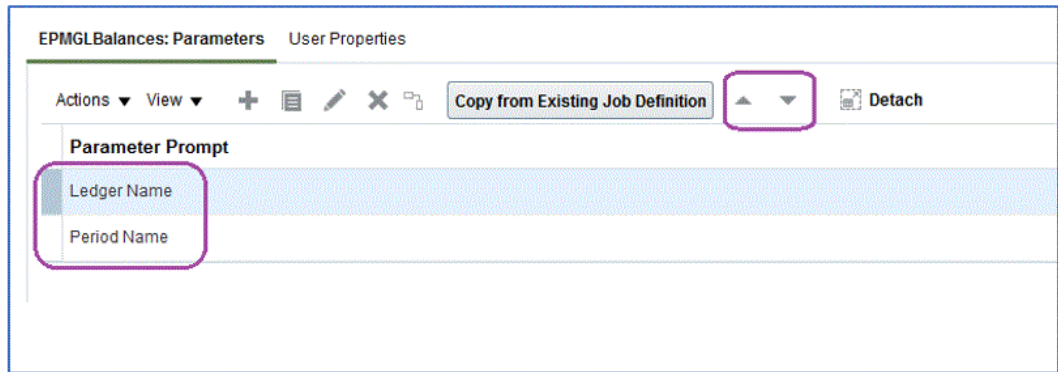
Manage Enterprise Scheduler Job Definitions and Job Sets for Financial, Supply Chain Management, and Related Applications

Manage Enterprise Scheduler Job Definitions and Job Sets for Human Capital Management and Related Applications

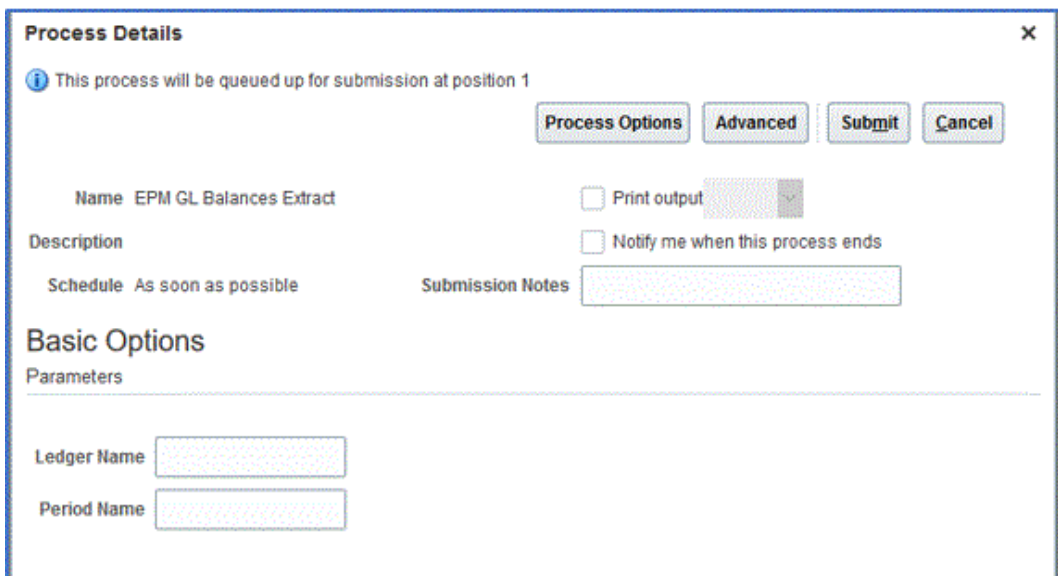
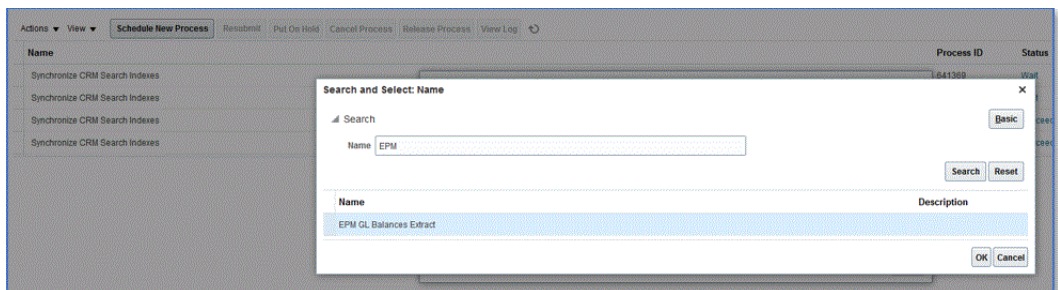
5. **ジョブ定義の管理** ページで、 をクリックして新しい ESS ジョブを追加または作成します。
6. **財務、サプライ・チェーン管理および関連アプリケーション用のエンタープライズ・スケジューラ・ジョブ定義およびジョブ・セットの管理** ページで、次のフィールドに入力します:
 - a. **表示名** - 抽出のユーザー定義名を入力します。この名前は「スケジュール済プロセス」に表示されます。
 - b. **名前** - スペースおよび特殊文字を使用せずに英数字の名前を指定します。
この名前は、データ統合アプリケーション・オプションの ESS ジョブ名に使用されます。
 - c. **パス** - ESS ジョブを保存するパスを指定します。
このパスは、/oracle/apps/ess/custom のサブフォルダとして作成されます。たとえば、epm を指定した場合、ESS ジョブ・パスは/oracle/apps/ess/custom/epm です。
ここで入力したパスは、データ統合アプリケーション・オプションの **ESS ジョブ・パス** フィールドに移入されます。
 - d. **ジョブ・アプリケーション名** - **FscmEss** を選択します。
 - e. **ジョブ・タイプ** - **BIPJobType** を選択します。
データ統合ではタイプが BIPJobType の ESS ジョブのみをトリガーできるため、これは必須パラメータです。
 - f. **デフォルト出力フォーマット** - 「XML」を選択します。
XML 出力フォーマット・パラメータは、CSV フォーマットに加えた出力ですが、CSV フォーマットを変更せず、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にストリームされません。
 - g. **レポート ID** - **BI Publisher レポート抽出の作成** ステップで定義されたカスタム・レポートのレポート・パスを指定します。
たとえば、/Custom/MyReport.xdo と指定します
 - h. **スケジュール済プロセスからの送信使用可能** - 選択して有効にします。
このオプションによって、ジョブを手動で起動でき、データ不一致の場合にジョブをトラブルシューティングできます。

7. 「データ・モデル」コンポーネント・ペインの「パラメータ」で、パラメータの作成ページをクリックします。
8. BI Publisher で定義されたカスタム・レポート・パラメータそれぞれのパラメータを、レポートに対して作成されたのと同じ順序で作成します。

9. パラメータ・ページで、必要に応じて、上/下矢印を使用してパラメータの順序を変更します。



10. Oracle ERP Cloud で、「新規プロセスのスケジュール」を選択して、BI Publisher ジョブを表示または送信します。

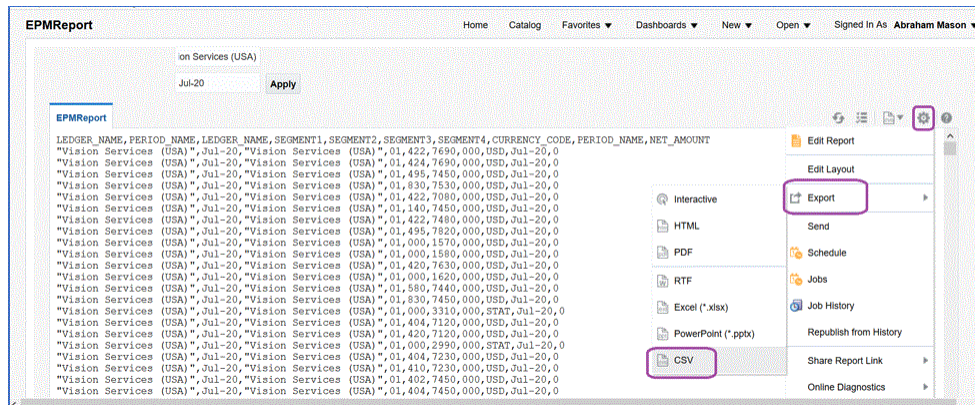


EPM Cloud と BI Publisher レポート抽出間の統合定義の作成

Oracle Business Intelligence Publisher レポートを作成して ESS ジョブとして登録した後、Oracle Enterprise Performance Management Cloud と BI Publisher レポート抽出間の統合定義を定義します。


統合定義を作成するには:

1. BI Publisher で、BI Publisher レポート抽出を実行し、それを CSV ファイル・フォーマットでファイル・システムにローカルにエクスポートします(初めて登録する場合)。



ダウンロードされた CSV 出力ファイルの名前を<Appname>.csv (<Appname>はデータ統合のデータ・ソース・アプリケーションの対象アプリケーションの名前)に変更する場合があります。これは、BI Publisher レポートを表します。

CSV ファイルをデータ統合の受信ボックス・フォルダにコピー(アップロード)する必要があります。ファイルのアップロードの詳細は、[ファイル・ブラウザの使用](#)を参照してください。

2. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
3. アプリケーション・ページで、**+**(「追加」アイコン)をクリックします。
4. 「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
5. 「タイプ」から、**Oracle ERP Cloud (カスタム)**を選択します。
6. 「ファイル」から、BI Publisher レポート抽出 CSV ファイルの名前を指定するか、 をクリックして BI Publisher レポート抽出 CSV ファイルを保存したフォルダに移動し、そのファイルを選択して「OK」をクリックします。
7. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
8. 「OK」をクリックします。
9. 「保存」をクリックします。

Create Application

Category: Data Source

Type: Oracle ERP Cloud (Custom)

File: EPMReport.csv

Prefix:

OK Cancel

アプリケーションが登録されると、「アプリケーションは正常に登録されました」というメッセージが返され、次に示すようにアプリケーションはアプリケーション・ページで使用可能になります:

Name	Category	Type	System Name
EPMReport	Data Source	Oracle ERP Cloud (Custom)	EPMReport

データ統合でアプリケーションが登録され、「ディメンションの詳細」のすべての列が返されます。

10. **アプリケーション・ページ**で、データ・ソース・アプリケーションの横にある **...** をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
11. **アプリケーション詳細** ページで、「**オプション**」タブをクリックします。
12. 次のフィールドに入力して「**保存**」をクリックします。
 - a. **接続名** - ソース・システム名を指定します。
 - b. **実行方法** - ジョブを実行するための方法を指定します。

有効なオプション:

- **BIP レポート** - BI Publisher レポートを同期モードで実行します。これには、Oracle ERP Cloud インスタンス内で約 5 分のタイムアウト制限があります。この方法は、小規模なデータ・セットまたは短時間で実行される問合せに適しています。

- **ESS ジョブ** - BI Publisher レポートを非同期モードで実行します。実行時間の制限はありません。

 **Note:**

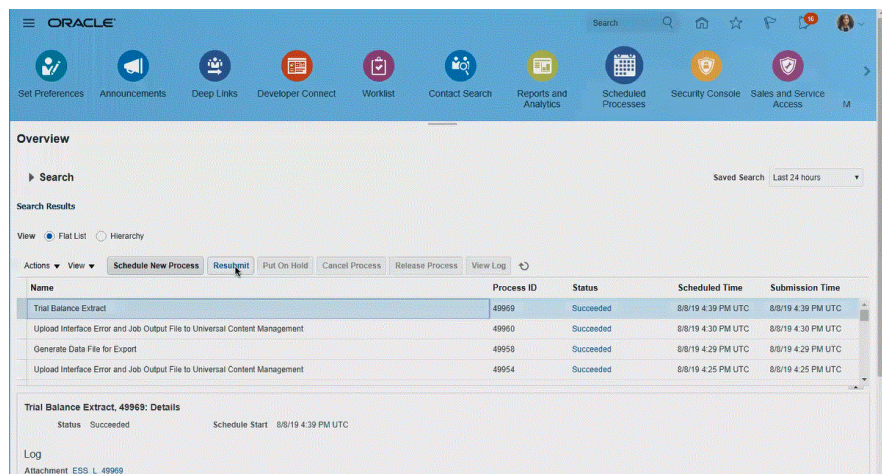
BI Publisher レポートで ESS 機能を使用しているときにデータ統合でタイムアウトが発生した場合は、データ管理のバッチ・タイムアウトを増やします。これを行うには、バッチ定義の「**タイムアウト**」フィールドでジョブの最大実行時間を指定します。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ管理の管理*のバッチ定義の操作を参照してください。

- c. **レポート名** - レポートの名前を入力し、実行方法が「**BIP レポート**」の場合はレポートのパスを入力します。たとえば、`/Custom/MyReport.xdo` と入力します。実行方法が「**ESS ジョブ**」の場合は、このフィールドはそのままにします。
- d. **ESS ジョブ・パス** - ESS ジョブ定義が含まれているフォルダのパスを入力します。カスタム ESS ジョブの場合、パスは`/oracle/apps/ess/custom/`で始まります。
- e. **ESS ジョブ名** - ESS ジョブ名を入力します。
- f. **レポート・パラメータ・リスト** - カスタム問合せのレポート・パラメータを指定します。

レポート・パラメータ・リストで、レポート定義で作成したバインド・パラメータに渡されるランダム文字(ABC など)を指定していることを確認します。EPM Cloud から渡されるバインド・パラメータがない問合せを使用してレポートを作成すると、Oracle ERP Cloud 側でプロセスが失敗します。

レポート・パラメータを識別する必要がある場合は、次のことを実行します:

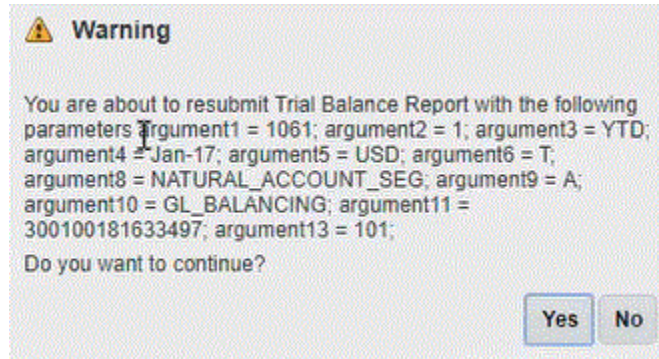
- i. **Oracle ERP Cloud** に移動し、「**概要**」ページからレポートを選択して、**再送信**をクリックします。



Name	Process ID	Status	Scheduled Time	Submission Time
Trial Balance Extract	49969	Succeeded	8/8/19 4:39 PM UTC	8/8/19 4:39 PM UTC
Upload Interface Error and Job Output File to Universal Content Management	49960	Succeeded	8/8/19 4:30 PM UTC	8/8/19 4:30 PM UTC
Generate Data File for Export	49958	Succeeded	8/8/19 4:29 PM UTC	8/8/19 4:29 PM UTC
Upload Interface Error and Job Output File to Universal Content Management	49954	Succeeded	8/8/19 4:25 PM UTC	8/8/19 4:25 PM UTC

Trial Balance Extract, 49969: Details
 Status: Succeeded Schedule Start: 8/8/19 4:39 PM UTC
 Log
 Attachment: ESS_L_49969

レポート・パラメータのリストが生成されます。



- ii. 「警告」 ウィンドウに表示されるレポート・パラメータをコピーします。
- iii. データ統合に移動し、「警告」ウィンドウからカスタム問合せのレポート・パラメータ・リスト・フィールドにレポート・パラメータ・リストを貼り付けます。

レポート・パラメータ・リストで、レポート定義で作成したバインド・パラメータに渡されるランダム文字(ABC など)を指定していることを確認します。EPM Cloud から渡されるバインド・パラメータがない問合せを使用してレポートを作成すると、EPM Cloud 側でプロセスが失敗します。

Application Details: EPMReport	
Property Name	Property Value
Connection Name	FusionERP
Execution Method	ESS Job
Report Name	
ESS Job Path	/oracle/apps/ess/custom/EPM
ESS Job Name	EPMGLBalances
Parameter List	Vision Services (USA)\$START_PERIODKEY(MMM-YY)\$
Convert Period Tokens to Upper Case	No
Notification Type	Bell Notification
Notification Event	Always

13. 新しい統合を作成し、ソースとしてのデータ・ソース・アプリケーションおよびターゲット・アプリケーションを選択します。次に、残りのステップを作成して統合を作成します。

- a. インポート・フォーマット、ロケーションおよびディメンション・マッピングを作成することにより、Oracle ERP Cloud データ・ソースとターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。
ディメンションのマッピングを参照してください。
- b. メンバーをソースからターゲットにマップします。
メンバーのマッピングを参照してください。
- c. ソースおよびターゲットのオプションを選択します。

[データ統合オプションの設定](#)を参照してください。

- d. 統合を実行します。

[統合の実行](#)を参照してください。

Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ役割の要件

Oracle Enterprise Performance Management Cloud との Oracle ERP Cloud 統合のための Oracle General Ledger のセキュリティ役割の要件は、次のとおりです:

- [統合ユーザーの権限](#)
- [統合ユーザーの事前定義済役割](#)
- [統合ユーザーのカスタム役割](#)
- [許可リスト](#)

統合ユーザーの権限

Oracle General Ledger と Oracle Enterprise Performance Management Cloud の統合に使用される、Oracle ERP Cloud で必要な統合ユーザーの権限は、次のとおりです:

権限	説明
GL_RUN_TRIAL_BALANCE_REPORT_PRIV	Oracle General Ledger からデータを EPM Cloud にインポートします。
GL_ENTER_BUDGET_AMOUNTS_FOR_FINANCIAL_REPORTING_PRIV	EPM Cloud からデータを Oracle General Ledger にライトバックします。
FUN_FSCM_REST_SERVICE_ACCESS_INTEGRATION_PRIV	統合の実行に使用される REST API を実行します

統合ユーザーの事前定義済役割

データをインポートする際に、次の事前定義済役割のいずれかを統合ユーザーに割り当てることができます:

- 一般会計担当
- 仕訳管理職務
- 期間クローズ管理職務

データをインポートおよびライトバックする際に、「一般会計担当」事前定義済役割を統合ユーザーに割り当てることができます。

統合ユーザーのカスタム役割

カスタム役割を統合用途に使用して、次の権限を割り当てることができます:

データをインポートする際に、次のカスタム役割のいずれかを統合ユーザーに割り当てることができます:

権限	説明
GL_RUN_TRIAL_BALANCE_REPORT_PRIV	Oracle General Ledger からデータを Oracle Enterprise Performance Management Cloud にインポートします。
FUN_FSCM_REST_SERVICE_ACCESS_INTEGRATION_PRIV	統合の実行に使用される REST API を実行します

データをインポートする際に、次のカスタム役割のいずれかを統合ユーザーに割り当てることができます

権限	説明
GL_RUN_TRIAL_BALANCE_REPORT_PRIV	Oracle General Ledger からデータを EPM Cloud にインポートします。
GL_ENTER_BUDGET_AMOUNTS_FOR_FINANCIAL_REPORTING_PRIV	EPM Cloud からデータを Oracle General Ledger にライトバックします。
FUN_FSCM_REST_SERVICE_ACCESS_INTEGRATION_PRIV	統合の実行に使用される REST API を実行します

許可リスト

Oracle ERP Cloud で IP 許可リストを有効にしている場合は、Oracle EPM Cloud の IP アドレスをリストに追加します。

詳細は、[Oracle Cloud アプリケーションによって開始される Web サービス・コールの IP 許可リスト\(文書 ID 1903739.1\)](#)を参照してください。

EPM Planning プロジェクトと Oracle Fusion Cloud Project Management (プロジェクト管理)の統合

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合について

EPM Planning プロジェクト・モジュール(プロジェクト)と Oracle Fusion Cloud Project Management (プロジェクト管理)を統合して、組織のプランニングおよび予算作成を行い、プロジェクトを実行できます。EPM Planning プロジェクトを使用して戦略的企業プランおよび予算を開発し、プロジェクト管理を使用して承認済プロジェクトの実行およびコストの収集を行います。実績コストは、EPM Planning プロジェクトを使用して、予算分析、予測および再プランニングに含まれます。

この相互的な統合を利用して、EPM Planning プロジェクトで新規プロジェクトを開発し、プロジェクト予算を作成して、プロジェクト・プランニング全体を実行します。続いて、プロジェクト管理を使用して実績を取得します。実績を EPM Planning プロジェクトに取り込んで、予算の差異分析を行います。

この統合により、同期の頻度に応じて EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の両方に同じ間接および資本プロジェクトが表示されるようになります。次の機能があります:

- EPM Planning プロジェクトで作成したプロジェクトおよび予算をプロジェクト管理に転送します。リソース・クラス・レベルのベースライン予算として、プロジェクト管理で戦略的予算が作成されます。
- 予算承認検証を使用して、プロジェクト・マネージャが作成した詳細予算と、EPM Planning プロジェクトで作成された戦略的予算を比較検証します(オプション)。
- プロジェクト管理から EPM Planning プロジェクトにリソース・クラス・レベルで実績コスト金額を転送します。
- EPM Planning プロジェクトからプロジェクト管理に、再プランニングされた予算をリソース・クラス・レベルで転送します。

データ管理およびデータ統合を使用して、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の間のデータ統合を推進します。データ管理およびデータ統合で提供される即時利用可能なソリューションによって、EPM Planning プロジェクトのお客様はプロジェクト管理データ・モデルからターゲット・ディメンションへの事前定義されたマッピングを適用できます。また、他のマッピングを必要に応じてビジネス要件に合うように適用するなどして、これらの統合をカスタマイズおよび拡張することもできます。

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合の詳細は、[統合されたプランニングおよび予算作成の実行とプロジェクトの分析のホワイト・ペーパー\(文書 ID 2739200.1\)](#)を参照してください。

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合のプロセスの説明

データ統合で提供される即時利用可能なソリューションによって、お客様は EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理間の双方向統合の事前定義されたマッピングを適用できます。

お客様は、たとえば、プライマリ元帳カレンダーとは異なるデフォルトのプロジェクト会計カレンダー以外のカレンダーをビジネス・ユニットに使用する必要がある場合など、これらの統合をカスタマイズおよび拡張できます。

次のほとんどのタスクを実行するには、*サービス管理者*の役割を割り当てられている必要があります。EPM 役割の詳細は、事前定義済役割の理解を参照してください。

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理を統合するおおまかなステップは次のとおりです:

1. EPM Planning を有効にし、EPM Planning プロジェクトの設定および構成要件を完了します。

統合の設定および実行の詳細なステップは、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合を参照してください。

2. この機能を使用するために必要なセキュリティ権限およびジョブ役割を割り当てます。

このステップでは、BI Publisher の権限と、プロジェクトおよび予算ファイルベース・データ・インポート・プロセスのセキュリティ役割が割り当てられている必要があります。

詳細は、[EPM Cloud とプロジェクト管理統合のセキュリティ役割の要件](#)を参照してください。

3. データ管理で、「ソース・システム」を選択し、次を実行します:

- a. **プロジェクト管理**をソース・システムとして追加し、アプリケーション・タイプとして「**Oracle ERP Cloud**」を指定します。
- b. ソース接続を**構成し、テスト**します。
このステップでは、ユーザー名、パスワード、サービス URL などの Oracle ERP Cloud への接続情報を指定する必要があります。
ユーザーにプロジェクト管理役割のみが割り当てられているが、GL 統合役割が付与されていない場合、このステップの接続テスト部分は失敗します。ただし、統合はプロジェクト管理役割のみで実行されます。
GL 統合役割の詳細は、Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ役割の要件を参照してください。
4. プライマリ EPM Planning プロジェクト・アプリケーションを **OEP_PFP** 入力キューブまたは**すべての入力キューブ**を指定して登録します。
詳細は、[EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
5. プライマリ EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの「アプリケーション詳細」で、**プロジェクト**、**プロジェクト要素**および**リソース・クラス**・ディメンションが適切なディメンション分類に分類されていることを確認します。
詳細は、[EPM Planning プロジェクト・アプリケーションのプロジェクト・ディメンションの分類](#)を参照してください。
6. **レポート・プラン・タイプ**・アプリケーションをアプリケーションとして **PFP_REP** キューブを指定して登録します。
詳細は、[レポート・タイプ・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
7. **ディメンション**・アプリケーションを登録します。
エンティティおよびカスタム・ディメンションのみが必須です。勘定科目、シナリオ、バージョンなどの他のディメンション・タイプは、登録後に必要に応じて削除できます。
詳細は、[ディメンション・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
8. **アプリケーション**・ページで、アプリケーションのリストに次が含まれていることを確認します：
 - a. プライマリ EPM Planning プロジェクト
 - b. レポート・タイプ
 - c. ディメンション
 上のアプリケーションのいずれかが登録されていない場合、統合の初期化は失敗します。
9. **アプリケーション**・ページで、EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「**統合の初期化**」を選択します。
10. **統合の初期化**ページで、「**Project Portfolio Management (PPM)**」初期化タイプ、Oracle ERP Cloud への接続、および統合の繰返しを指定するために使用する接頭辞を指定します。
詳細は、[統合の初期化](#)を参照してください。
このプロセスでは、次のような、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理を統合するために必要な即時利用可能な統合定義が作成されます：
 - プロジェクト予算のエクスポート

- プロジェクトのエクスポート
- エクスポートされたプロジェクト・ステータス同期
- プロジェクト実績のインポート
- プロジェクト予算のインポート
- プロジェクト組織のインポート
- プロジェクトのインポート
- インポートされたプロジェクト・ステータスの同期

初期化後に作成された統合定義の説明は、[統合定義の参照](#)を参照してください。

11. アプリケーションに複数の統合定義がある場合は、次の統合定義に対して必要なマッピングを定義します:

- エクスポートされたプロジェクト・ステータス同期
- プロジェクト予算のエクスポート
- 実績のインポート
- 予算のインポート
- プロジェクト・プロパティのインポート

詳細は、[初期化マッピングの転記](#)を参照してください

12. アプリケーションに追加のカスタム・ディメンションがある場合は、データ統合のディメンションのマッピング・ページでこれらのディメンションに対して必要なマッピングを定義します。

詳細は、[カスタム・ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

13. 期間マッピングを追加して、統合中に EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理間の期間および年の関係を定義します。

デフォルトでは、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理間の期間マッピングは、アプリケーションの作成時に自動的に設定されます。統合では、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の両方が、データ管理で定義されている期間マッピングで設定されたデフォルト・カレンダーを使用します。

期間マッピングを追加または変更する必要がある場合は、データ管理で定義されている「アプリケーション・マッピング」および「ソース・マッピング」オプションを使用して、期間マッピングをカスタマイズできます。期間マッピングは次の 2 つのレベルで定義できます:

- アプリケーション期間マッピングは、プロジェクト管理への予算のエクスポートで使用される特別な期間マッピングを定義するために使用されます。詳細は、[アプリケーション・マッピングの定義](#)を参照してください。
- ソース・マッピングは、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理で実績および予算のカレンダー期間マッピングを作成するために必要です。詳細は、[ソース・マッピングの適用](#)を参照してください。

EPM Cloud とプロジェクト管理統合のセキュリティ役割の要件

Oracle Enterprise Performance Management Cloud と統合するためのプロジェクト管理のセキュリティ役割の要件には、次のものがあります:

- [BI Publisher のセキュリティ](#)
- [プロジェクトおよび予算ファイルベース・データ・インポート・プロセスのセキュリティ](#)

BI Publisher のセキュリティ

この統合で使用される Oracle Business Intelligence Publisher レポートを実行するには、次の役割が必要です:

役割名	役割コード
サードパーティ・ソフトウェアへのプロジェクト・データのインポート	PJF_IMPORT_PROJECT_INTO_THIRD_PARTY_SOFTWARE_PRIV_OBI
プロジェクト設定の取得	PJF_GET_PROJECT_SETUPS_PRIV_OBI

プロジェクトおよび予算ファイルベース・データ・インポート・プロセスのセキュリティ

この機能で使用されるプロジェクトおよび予算ファイルベース・データ・インポート(FBDI)プロセスを実行するには、次の権限が必要です:

プロジェクトおよび予算 FBDI プロセスの役割は次のとおりです:

権限名	権限コード
プロジェクトのインポート・プロセスの実行	PJF_RUN_IMPORT_PROJECT_PROCESS_PRIV
プロジェクト予算のインポート・プロセスの実行	PJO_RUN_IMPORT_PROJECT_BUDGET_PROCESS_PRIV

役割の名前およびコードは次のとおりです:

役割名	役割コード
プロジェクトのインポート・プロセスの実行	PJF_RUN_IMPORT_PROJECT_PROCESS_PRIV_OBI
プロジェクト予算のインポート・プロセスの実行	PJO_RUN_IMPORT_PROJECT_BUDGET_PROCESS_PRIV_OBI

職務の名前およびコードは次のとおりです:

職務名	職務コード
FSCM インタフェースのロード管理	ORA_FUN_FSCM_LOAD_INTERFACE_ADMIN_DUTY

プロジェクト管理ソースの登録

プロジェクト管理からソースを統合する場合、まずソース・システムを作成して登録し、次にアプリケーション・タイプ「**Oracle ERP Cloud**」を指定します。

プロジェクト管理をソースとして追加するには:

1. データ管理を起動します。
2. 「設定」タブの「登録」で、「ソース・システム」を選択します。
3. 「ソース・システム」で、「追加」をクリックします。
4. ソース・システム詳細を入力します:
 - a. 「ソース・システム名」で、ソース・システム名を入力します。
プロジェクト管理など、プロジェクト管理ソースに使用する名前を入力します。
 - b. 「ソース・システムの説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
 - c. 「ソース・システム・タイプ」で、**Oracle ERP Cloud** を選択します。

- d. 「**Fusion Budgetary Control**」の選択は解除したままにします。
 - e. ドリル・スルー URL は、空白のままにしておきます。
 - f. 「アプリケーション・フィルタ」は、空白のままにしておきます。
5. 「ソース接続の構成」をクリックします。

ソース接続の構成には、Oracle ERP Cloud のユーザー名とパスワード、およびサービス URL が保管されます。

6. 「ユーザー名」に、Oracle ERP Cloud のユーザー名を入力します。

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の間で情報を送信するためのプロセス要求を開始する Oracle ERP Cloud ユーザーの名前を入力します。

 ノート:

Web サービスでは、シングル・サインオンのユーザー名とパスワードではなく、ネイティブのユーザー名とパスワードを使用する必要があります。

7. 「パスワード」に、Oracle ERP Cloud のパスワードを入力します。

このパスワードは、Oracle ERP Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。

8. サービス URL に、Fusion Web サービスのサーバー情報を入力します。たとえば、https://server と入力します。

9. 「接続のテスト」をクリックします。

ユーザーにプロジェクト管理役割のみが割り当てられている場合、テスト接続ステップは失敗します。さらに、ユーザーには GL 統合役割が付与される必要があります。ただし、統合はプロジェクト管理役割のみで実行されます。

GL 統合役割の詳細は、**Oracle ERP Cloud 統合のセキュリティ役割の要件**を参照してください。

10. 「構成」をクリックします。

ソース・システム[ソース・システム名]構成が正常に完了しましたという確認メッセージが表示されます。

11. 「保存」をクリックします。

統合の定義


関連リンク:

- [EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの登録](#)
- [EPM Planning プロジェクト・アプリケーションのプロジェクト・ディメンションの分類](#)
- [レポート・タイプ・アプリケーションの登録](#)
- [ディメンション・アプリケーションの登録](#)

EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの登録

統合を定義する最初のステップは、プライマリ EPM Planning プロジェクト・アプリケーションを登録し、EPM Planning プロジェクト・モジュールから入力キューブを選択することです。

EPM ローカル・アプリケーションを登録するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「EPM ローカル」を選択します。
4. 「アプリケーション」から、プライマリ Planning プロジェクト・アプリケーションを選択します。

5. 「キューブ」から、**入力キューブ - OEP_PFP** を選択します。

OEP_PFP 入力キューブには、Project Financial Planning (PFP)に適用できる唯一のディメンションがあります。入力キューブ全体のすべてのディメンションを表示するには、**すべての入力キューブ**を選択します。

6. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

即時利用可能な統合のためにアプリケーションを登録する場合、接頭辞を指定する必要はありません。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。


通常は、アプリケーション名を選択した統合に関連付ける場合、アプリケーション名に接頭辞を付けます。様々なビジネス要件に対応する複数の統合定義を作成できます。たとえば、プロジェクト管理のデフォルトのカレンダー期間を参照する統合と、代替カレンダーのカスタム・マッピングを持つ統合を作成できます。即時利用可能な統合を初期化する場合、接頭辞を指定する必要はありません。

7. 「OK」をクリックします。

EPM Planning プロジェクト・アプリケーションのプロジェクト・ディメンションの分類

統合定義を定義する 2 番目のステップは、EPM Planning プロジェクト・アプリケーションで**プロジェクト**、**プロジェクト要素**および**リソース・クラス**・ディメンションを再分類することです。これは、ディメンションの名前が **Planning** のデフォルト名から変更された場合に必要となります。データ統合で正しいディメンションを識別するには、ディメンションを「プロジェクト」、「プロジェクト要素」および「リソース・クラス」として分類し、プロジェクト管理の同じディメンションに対応するようにします。

プロジェクト、プロジェクト要素およびリソース・クラス・ディメンションを分類するには:

1. **アプリケーション**・ページで、EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
2. ディメンション名の行から「**プロジェクト**」を選択し、「**ディメンションの分類**」ドロップダウンから「**プロジェクト**」を選択します。
3. ディメンション名の行から「**プロジェクト要素**」を選択し、「**ディメンションの分類**」ドロップダウンから「**プロジェクト要素**」を選択します。
4. ディメンション名の行から「**リソース・クラス**」を選択し、「**ディメンションの分類**」ドロップダウンから「**リソース・クラス**」を選択します。
5. 「**保存**」をクリックします。

統合定義の残りのアプリケーション・ディメンションは、再分類する必要はありません。


統合定義に必要なディメンション分類を次に示します:

Application Details: EPBCS				
Dimensions		Options		
Dimension Name	Create Drill Region	Dimension Classification	Data Table Column Name	Mapping Sequence
Employee	<input type="checkbox"/>	Generic	UD5	
Entity	<input type="checkbox"/>	Entity	ENTITY	
Job	<input type="checkbox"/>	Generic	UD4	
Period	<input type="checkbox"/>	Period		
Phases	<input type="checkbox"/>	Generic	UD2	
Project	<input type="checkbox"/>	Project	UD6	
Project Element	<input type="checkbox"/>	Project Element	UD18	
Resource Class	<input type="checkbox"/>	Resource Class	UD19	

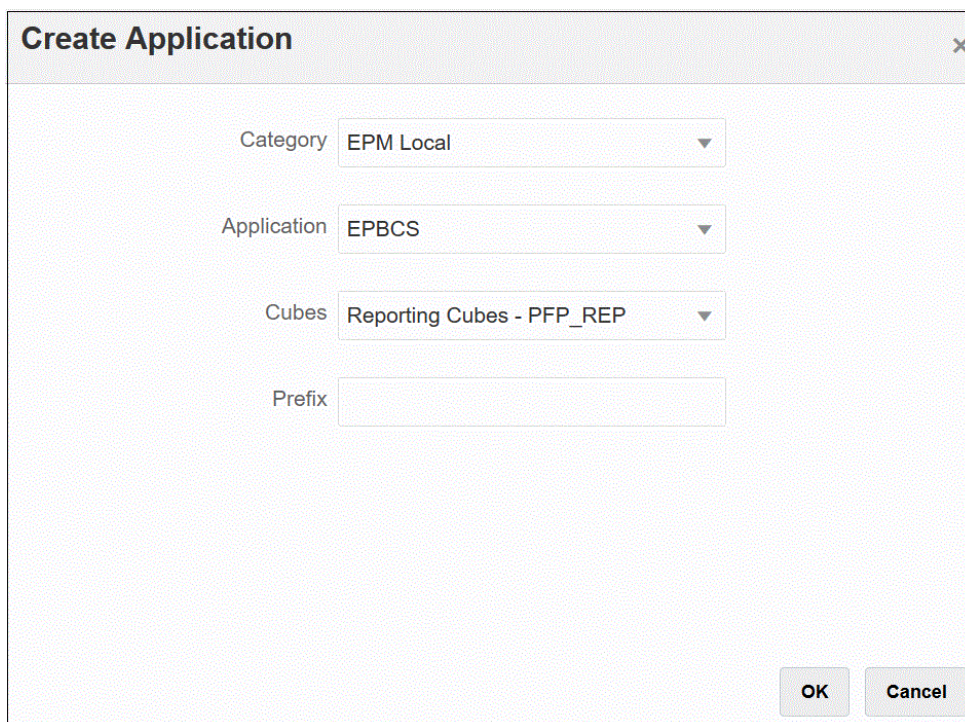
レポート・タイプ・アプリケーションの登録

統合定義を定義する 3 番目のステップは、レポート・タイプ(プロジェクト・レポート・キューブ(PFP_REP))アプリケーションを登録することです。

レポート・タイプ・アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. **アプリケーションの作成**ページで、「**カテゴリ**」から「**EPM ローカル**」を選択します。
4. 「**アプリケーション**」から、プライマリ EPM Planning プロジェクト・アプリケーションを選択します。
5. 「**キューブ**」から、**レポート・キューブ - PFP_REP** 入力キューブを選択します。
6. **オプション: 「接頭辞**」で、OEP_PFP 入力キューブ・アプリケーションに選択したものと同一接頭辞を指定します。

即時利用可能な統合のためにアプリケーションを登録する場合、接頭辞を指定する必要はありません。



The screenshot shows a 'Create Application' dialog box with the following fields:

- Category: EPM Local
- Application: EPBCS
- Cubes: Reporting Cubes - PFP_REP
- Prefix: (empty)

Buttons: OK, Cancel

7. 「OK」をクリックします。

ディメンション・アプリケーションの登録

統合定義を定義する 4 番目のステップは、ディメンション・アプリケーションの登録です。これには次が含まれます:

- カスタム・ディメンション
- 必要に応じて、エンティティ、プロジェクト、ジョブ、従業員、材料などの既存のカスタム・メンバー
- いずれかのカスタム・アプリケーションでメンバーを作成するために使用されるプロジェクト・ディメンションのメタデータ情報

ディメンション・アプリケーションを登録するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「ディメンション」を選択します。
4. 「アプリケーション」から、プライマリ EPM Planning プロジェクト・アプリケーションを選択します。
5. オプション: 「接頭辞」で、OEP_PFP 入力キューブ・アプリケーションに選択したものと同一接頭辞を指定します。

即時利用可能な統合のためにアプリケーションを登録する場合、接頭辞を指定する必要はありません。

Create Application ✕

Category Dimensions ▼

Application EPBCS ▼

Prefix

OK
Cancel

6. 「OK」をクリックします。

統合の初期化

統合を初期化すると、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理を統合するために必要な即時利用可能な統合定義が作成されます。

統合を初期化する前に、次のアプリケーションがデータ統合に登録されていることを確認します:

1. プライマリ EPM Planning プロジェクト
2. レポート・タイプ
3. ディメンション

次の例で、EPBCS はプライマリ Planning プロジェクトアプリケーション、EPBCS-PFP_REP はレポート・タイプ・アプリケーション、EPBCS - Custom はディメンション・アプリケーションです。

EPBCS	EPM Local	Planning	EPBCS	...
EPBCS - Custom	EPM Local	EPM Dimension	EPBCS	...
EPBCS-PFP_REP	EPM Local	Reporting Cubes	A_PFP_RE	...

統合を初期化するには:

1. **アプリケーション**・ページで、EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの右側にある ... をクリックし、「**統合の初期化**」を選択します。
2. **統合の初期化**ページで、「**タイプ**」ドロップダウンから「**Project Portfolio Management (PPM)**」を選択します。

3. 「**接続**」から、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理統合のソース・システム接続名の設定を選択します。

この接続は、ソース・システム登録で設定されています。詳細は、[プロジェクト管理ソースの登録](#)を参照してください。

Initialize Integration ✕

Type Project Portfolio Management (...)

Connection EPM PPM

Prefix

OK
Cancel

4. **オプション**: 複数の統合定義を使用する場合は、「**接頭辞**」に統合定義の接頭辞を指定します。

統合定義に接頭辞を追加して、他の統合定義と区別します。様々なビジネス要件に対応する複数の統合定義を作成できます。たとえば、プロジェクト管理のデフォルトのカレンダー期間を参照する統合と、代替カレンダーのカスタム・マッピングを持つ統合を作成できます。即時利用可能な統合を初期化する場合、接頭辞を指定する必要はありません。

5. 「**OK**」をクリックします。

即時利用可能なデータ・ソース・アプリケーションがアプリケーション・ページにロードされます。

Applications ✕ Close

Search

+ ✕

Name	Category	Type	System Name	Actions
EPMCUSTS	EPM Local	Planning	EPMCUSTS	...
Planning Project Data	Data Source	Planning Projects Data	Planning Project Data	...
Planning Project Status	Data Source	Planning Project Integration Status	Planning Project Status	...
Project Actuals	Data Source	Oracle Projects (Actuals)	Project Actuals	...
Project Budgets	Data Source	Oracle Projects (Budgets)	Project Budgets	...
Project Budgets Export	Data Target	Oracle Projects (Budget Export)	Project Budgets Export	...
Project Export	Data Target	Oracle Projects (Project Export)	Project Export	...
Project Integration Status	Data Source	Oracle Projects (Integration Status)	Project Integration Status	...
Project Organizations	Data Source	Oracle Projects (Organization)	Project Organizations	...

初期化後に作成された統合定義の説明は、[統合定義の参照](#)を参照してください。

統合定義の参照

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の統合の初期化が正常に完了すると、データ統合は次の即時利用可能な統合定義をアプリケーション・ページにロードします。

統合定義	説明
プロジェクト予算のエクスポート	承認済プロジェクトの予算を EPM Planning プロジェクトからプロジェクト管理にエクスポートします。
プロジェクトのエクスポート	承認済プロジェクトを EPM Planning プロジェクトからプロジェクト管理にエクスポートします。
エクスポートされたプロジェクト・ステータス同期	予算がプロジェクト管理にエクスポートされたプロジェクトの EPM Planning プロジェクトの統合ステータスを更新します。 プロジェクト予算のエクスポートが完了すると、自動的に起動します。
プロジェクト実績のインポート	EPM Planning プロジェクトに存在するプロジェクトの実績をプロジェクト管理からインポートします。
プロジェクト予算のインポート	EPM Planning プロジェクトに存在するプロジェクトの予算をプロジェクト管理からインポートします。
プロジェクト組織のインポート	エンティティ階層をプロジェクト管理から EPM Planning プロジェクトにインポートします。
プロジェクト・プロパティのインポート	プロジェクトがプロジェクト管理からインポートされるときに、開始日や終了日などのプロジェクト・プロパティをプロジェクト管理からインポートします。 プロジェクトのインポートが完了すると、自動的に起動します。
プロジェクトのインポート	EPM Planning プロジェクトでまだ利用可能でないプロジェクトをプロジェクト管理からインポートします。
インポートされたプロジェクト・ステータスの同期	プロジェクトがプロジェクト管理から EPM Planning プロジェクトに正常にインポートされると、ステータスは EPM Planning プロジェクトで統合済とマークされます。 プロジェクト予算のインポートが完了すると、自動的に起動します。

初期化マッピングの転記

複数の統合定義を使用すると、複数の通貨、会計期間および組織の境界を越えてプロジェクト統合を管理できます。統合定義を別の名前で開始してから、それを一意のカレンダーに関連付けることにより、複数の統合定義を作成できます。この場合、ビジネス・ユニット、通貨、カレンダーなど、統合に固有の一意の値を識別するために、各統合定義の設定をさらに定義する必要もあります。

たとえば、輸出事業と国内販売事業を、「輸出」と「国内販売」という 2 つの別個のビジネス・ユニットとして設定したとします。輸出ビジネス・ユニットは、国内販売用に選択され

た会計期間とは異なる会計期間を使用する場合があります。この場合、管理者は、統合定義に使用されるエンティティまたはビジネス・ユニットを明示的に定義する必要があります。

マッピングを追加または編集するには、統合ページの統合プロジェクト定義ファイルの横にある **...** をクリックし、「オプション」を選択します。次に、統合の編集ページで「オプション」または「フィルタ」タブを選択します。

次の表では、統合定義に応じて特定の設定を定義する必要があるプロジェクト統合定義ファイルについて説明します。

プロジェクト統合定義名	マッピング要件
プロジェクトのエクスポート	<p>「フィルタ」 タブで、「値」フィールドの「エンティティ」値を、特定の統合定義に関連付けられたビジネス・ユニットに置き換えます。</p>
プロジェクト予算のエクスポート	<p>「フィルタ」 タブで、事前定義済の組織フィルタ条件で使用される「エンティティ」値を、特定の統合定義に関連付けられたビジネス・ユニットに置き換えます。</p> <p>たとえば、フィルタ条件が @ILvl0Descendants("OEP_Total Entity")を示し、ビジネス・ユニットが統合定義の Domestic Sales である場合、("OEP_Total Entity")を("OEP_Domestic Sales")に置き換えます。</p>
プロジェクト実績のエクスポート	<p>「オプション」 タブで、「期間マッピング・タイプ」から「明示」を選択します。次に、「カレンダー」ドロップダウンから、プロジェクト実績のエクスポートに使用されるソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。</p> <p>「カレンダー」 フィールドが空の場合、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の間にマッピングが存在する場合は、すべての実績がエクスポートされます。</p> <p>詳細は、ソース・マッピングの適用を参照してください。</p>
プロジェクトのインポート	<p>「フィルタ」 タブで、特定の統合定義に使用されるビジネス・ユニット値を「値」フィールドに指定します。</p> <p>過去のプロジェクトの最大経過時間(日数)に、アクティブ・プロジェクトとクローズ済プロジェクトの両方を統合定義に含める日数を指定します。</p> <p>たとえば、10の値を入力すると、過去 10 日間に終了したプロジェクトが含まれます。ただし、365を入力した場合は、1 年前のプロジェクトも移行されますが、それよりも古いものは移行されません。</p>

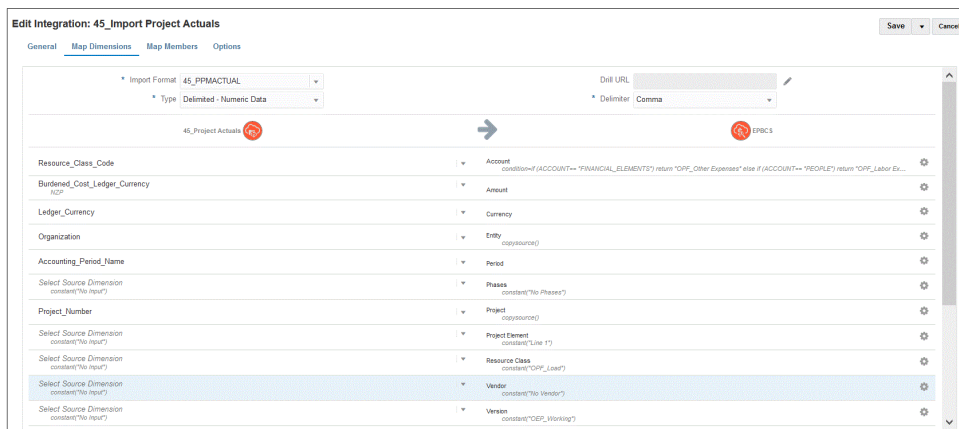
プロジェクト統合定義名	マッピング要件
プロジェクト予算のインポート	<p>「フィルタ」タブで、特定の統合定義に使用されるビジネス・ユニット値を「値」フィールドに指定します。</p> <p>過去のプロジェクトの最大経過時間(日数)に、複数の通貨がある場合、アクティブなステータスにある過去のプロジェクトを含めるオプションがあります。これを行うには、含める過去の日数を指定します。デフォルトでは、値は0とみなされます。終了日が今日以降の(それ以前ではない)プロジェクトのみがインポート時に考慮されます。将来に終了するすべてのアクティブなプロジェクトは常にインポートされます。</p>
プロジェクト実績のインポート	<p>「フィルタ」タブで、「値」フィールドに会計カレンダー名を指定します。</p> <p>「オプション」タブで、「期間マッピング・タイプ」から「明示」を選択します。次に、「カレンダー」ドロップダウンから、プロジェクト実績のエクスポートに使用されるソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。</p> <p>「カレンダー」フィールドが空の場合、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の間にマッピングが存在する場合は、すべての実績がロードされます。</p> <p>詳細は、ソース・マッピングの適用を参照してください。</p>
プロジェクト・プロパティのインポート	<p>「フィルタ」タブで、特定の統合定義に使用されるビジネス・ユニット値を「値」フィールドに指定します。</p> <p>過去のプロジェクトの最大経過時間(日数)に、複数の通貨がある場合、アクティブなステータスにある過去のプロジェクトを含めるオプションがあります。これを行うには、含める過去の日数を指定します。デフォルトでは、値は0とみなされます。終了日が今日以降の(それ以前ではない)プロジェクトのみがインポート時に考慮されます。将来に終了するすべてのアクティブなプロジェクトは常にインポートされます。</p> <p>たとえば、10の値を入力すると、過去10日間に終了したプロジェクトが含まれます。ただし、365を入力した場合は、1年前のプロジェクトも移行されますが、それよりも古いものは移行されません。</p>

カスタム・ディメンションのマッピング

EPM Planning プロジェクトまたはプロジェクト管理アプリケーションにカスタム・ディメンションがある場合は、統合定義でソース・ディメンションからターゲット・ディメンションへの必要なマッピングを定義する必要があります。たとえば、ビジネス・ユニットの元帳通貨以外の通貨を使用するプロジェクト関連のビジネス・ユニットに対応するためにプロジェクト実績のインポート統合定義が作成された場合、データ統合のディメンションのマッピング・ページでカスタム通貨ディメンションをマップします。

カスタム・ディメンションをマップするには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページから、統合の右側にある ******* をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. 左側の列の「**ソース・ディメンションの選択**」列で、ドロップダウンからソース・ディメンションの名前を選択して、右側の列のターゲット・ディメンションに割り当てます。



3. 「**保存**」 をクリックします。

期間マッピングの定義

期間マッピングでは、プロジェクト管理カレンダーと EPM Planning プロジェクト・アプリケーションの年または期間の間のマッピングを定義します。次の 2 つの方法で期間マッピングを定義できます:

- デフォルトの期間処理
- 明示期間処理

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理で一貫した期間定義および期間命名を使用する場合は、デフォルトの期間処理を使用します。たとえば、両方のシステムで月次カレンダー使用され、Jan-20 のような期間の名前が両方のシステムで一致する場合、統合ではデフォルトの期間マッピング・タイプを使用します。追加のマッピングは必要ありません。

EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理で期間定義または期間命名規則が異なる場合は、明示期間処理を使用します。この場合、アプリケーション期間とソース期間のマッピングを定義する必要があります。

- アプリケーション・マッピングを使用して、プロジェクト管理で使用される期間名を定義します。詳細は、[アプリケーション・マッピングの定義](#)を参照してください。
- ソース期間マッピングを使用して、EPM Planning プロジェクトとプロジェクト管理の期間の間のマッピングを定義します。詳細は、[ソース・マッピングの適用](#)を参照してください。

アプリケーション・マッピングの定義

アプリケーション・マッピングを使用して、プロジェクト管理予算エクスポート・ターゲット・アプリケーションのアプリケーション期間マッピングを指定します。ここで作成するマッピングは、個々のプロジェクト管理エクスポート・ターゲット・アプリケーションにのみ適用されます。エクスポート・ターゲット・アプリケーションにアプリケーション・マッピングが選択されていない場合は、グローバル・マッピングで期間に対して定義されたグローバル・マッピングが使用されます。

ノート:

プロジェクト管理では、月次、4-4-5、5-4-4 および 4-5-4 を含む 12 期間の会計カレンダーがサポートされています。4-4-4 会計カレンダーはサポートされません。

アプリケーションに対して期間マッピングを作成するには:

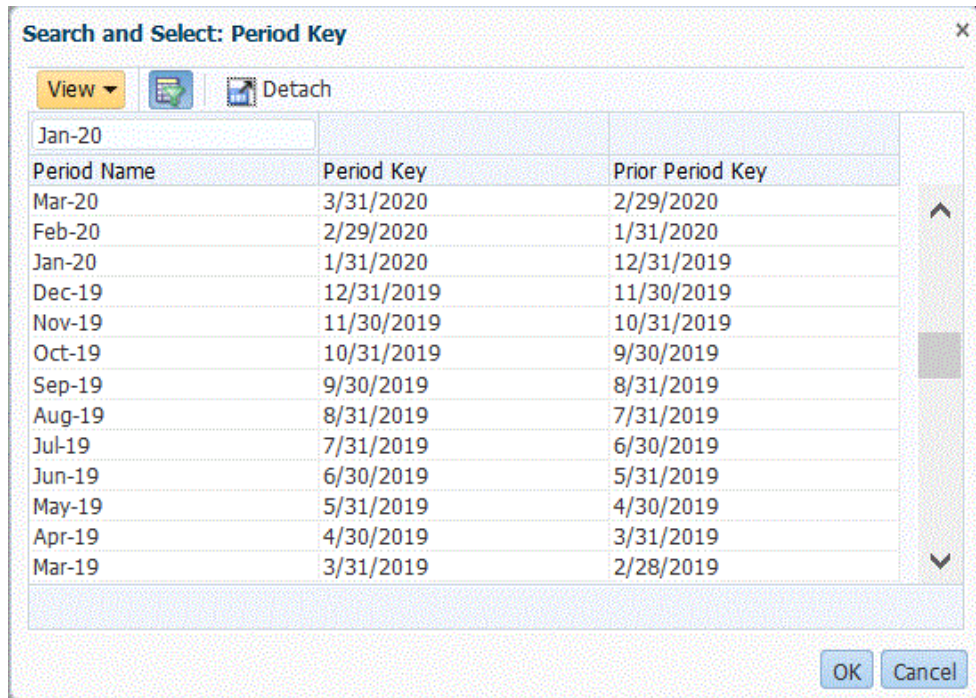
1. データ管理を起動します。
2. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
3. 「アプリケーション・マッピング」タブを選択します。
4. 「ターゲット・アプリケーション」で、アプリケーション期間マッピングを追加または変更するターゲット・アプリケーション・プロジェクト予算エクスポート・ターゲット・アプリケーションを選択します。

たとえば、複数の統合ジョブを使用する場合、複数のカレンダーを使用する場合は、初期化で作成されたプロジェクト予算エクスポート・ターゲット・アプリケーションの名前を選択してから、期間マッピングを指定する必要があります。たとえば、45_Project Budgets Export 統合に対して一意のカレンダーを設定した場合は、次に示すように、「ターゲット・アプリケーション」ドロップダウンからこの名前を選択します。

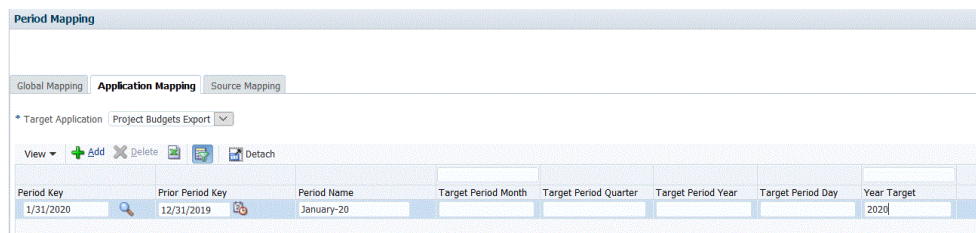
Period Name	Target Period Month	Target Period Quarter	Target Period Year	Target Period Day	Year
APR-12	APR				2012
JUL-12	JUL				2012
Jan-20	JAN				2020
Feb-20	FEB				2020
MAR-12	MAR				2012
JAN-12	JAN				2012

5. 「追加」をクリックします。

検索して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、プロジェクト予算エクスポート・ターゲット・アプリケーションのアプリケーション・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。



- 追加するプロジェクト管理期間を選択し、「OK」をクリックします。
たとえば、「Jan-20」を選択します。
- 「アプリケーション」タブで、ステップ 6 で選択した期間の「期間キー」を選択します。
- グローバル・マッピングで期間に対して定義された期間名を上書きする場合は、「期間名」にプロジェクト管理期間に対応する期間名を入力します。それ以外の場合は、グローバル・マッピングで期間に対して定義された期間名が使用されます。
たとえば、データ管理で期間名が「Jan-20」と表示される場合、プロジェクト管理で「January-20」と定義されているのであれば、この期間名に変更できます。



- 「ターゲット期間の月」にターゲット期間の月を入力します。
ターゲット期間の月は、すべてのデータ管理アプリケーション・マッピングに必須のエントリですが、プロジェクト管理へのエクスポートで使用される期間名には影響しません。
- 「保存」をクリックします。

ソース・マッピングの適用

実績と予算の間の期間マッピングを作成するには、ソース・マッピングが必要です。プロジェクト管理で複数の会計カレンダーに対応するために個別の統合を初期化した場合は、統合定義ごとにソース期間マッピングを定義する必要があります。

「ソース・マッピング」タブは、2つの領域で構成されています:

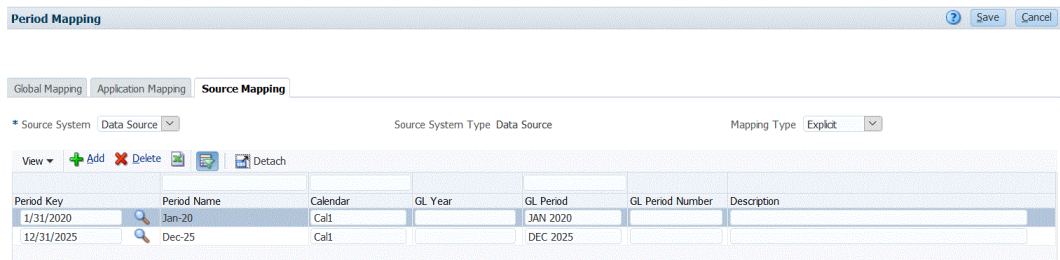
- マスター・ソース・システムおよびマッピング・タイプを選択します。
- グリッド - 期間マッピングを定義します。マッピングは、グローバル・マッピングで定義された期間に対してのみ定義できます。新規のデータ管理期間は、このタブでは作成できません。

ノート:

統合を実行する前に、デフォルト期間マッピングまたは明示期間マッピングを選択できます。ソース期間マッピングを選択した場合、ソース期間は期間キーおよび前期間に基づいてマップされます。

ソース・マッピングを作成するには:

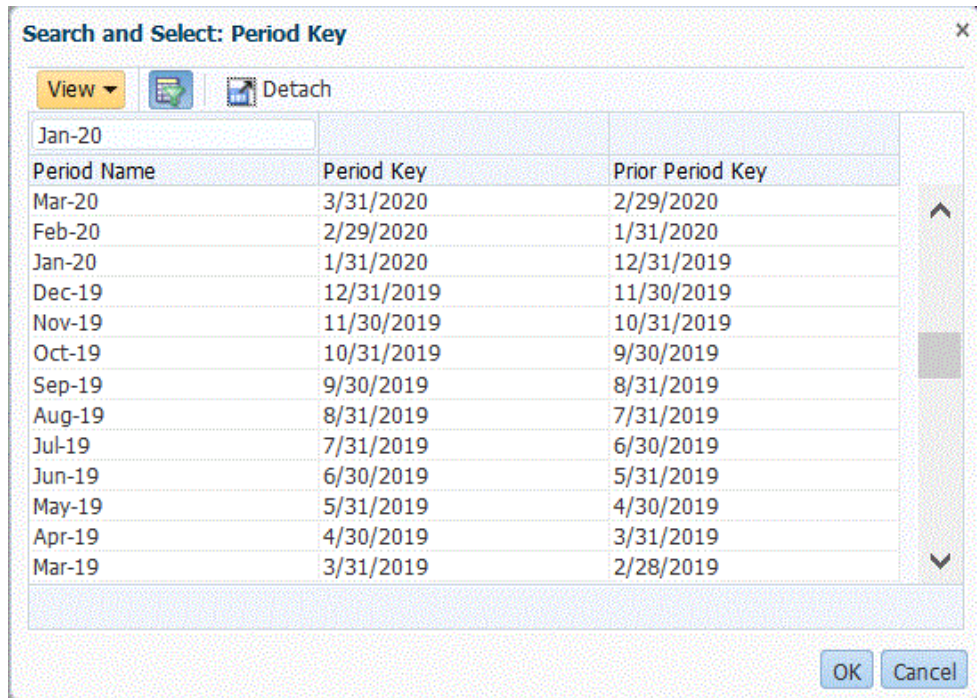
1. データ管理を起動します。
2. 「設定」タブの「統合設定」で、「期間マッピング」を選択します。
3. 「ソース・マッピング」タブを選択します。



Period Key	Period Name	Calendar	GL Year	GL Period	GL Period Number	Description
1/31/2020	Jan-20	Cal1		JAN 2020		
12/31/2025	Dec-25	Cal1		DEC 2025		

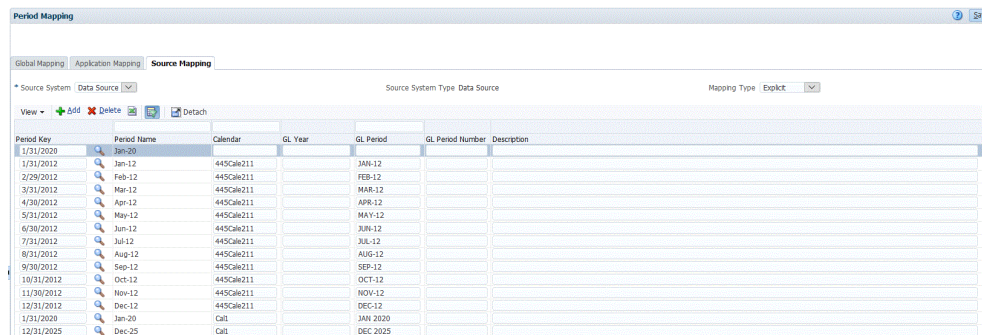
4. 「ソース・システム」で、実績および予算を作成するときにプロジェクト管理ソースに「データ・ソース」を選択します。
5. 「マッピング・タイプ」で、「明示」を選択します。
6. 「追加」をクリックします。

検索して選択: 期間キー・ページが表示されます。このページには、ソース・アプリケーションのソース・マッピングで使用されないすべてのグローバル・マッピング期間がリストされます。



- 追加する期間を選択し、「OK」をクリックします。

たとえば、「Jan-20」を選択します。



- 「ソース・マッピング」タブで、ソース・システムの「期間名」を入力し、「OK」をクリックします。
- EPM Planning プロジェクト期間を識別するソース・システムの「期間キー」を入力します。
- マッピングを識別するソース・システムの「カレンダー」名を入力します。
- 「GL 期間」に、プロジェクト管理名を入力します。
- オプション: マッピングの説明を入力します。
- 「保存」をクリックします。

💡 ヒント:

マッピングを削除するには、マッピングを選択し、「削除」をクリックします。

予算改訂の Budgetary Control との統合

一般会計から予算対実績をレポートする場合は、予算を Oracle General Ledger にライトバックする必要があります。支出をオンラインで検証する場合は、予算を Budgetary Control にライトバックする必要があります。

この項の手順を使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の予算改訂機能(一般会計と Budgetary Control の EPM タイプ予算管理の両方で予算を自動的に更新します)を使用して策定した予算改訂を Budgetary Control にライトバックします。

この手順は、Planning および予測機能を使用して策定した元の予算および改訂済予算を Oracle General Ledger および Budgetary Control にライトバックするためのものではありません。

プロセスの説明

EPM Planning 財務から Budgetary Control に予算改訂をロードする準備をするためにデータ統合で実行するおおまかなステップは次のとおりです:

- 1. Planning、プランニング予算改訂、Budgetary Control 間の統合設定ステップを実行します。**
詳細は、https://docs.oracle.com/en/cloud/saas/planning-budgeting-cloud/epbca/fin_budget_adjustment_setup_102x2f7be273.html を参照してください。
- 2. OEP_FS を入力キューブとしてアプリケーションを登録します。**
このステップでは、予算に対して行われた準備または改訂が格納され、Budgetary Control にロードされるプランニング予算改訂アプリケーションを登録できます。このアプリケーションの名前は、PRCVisionCityControlB_BAR のように、名前に BAR が付加されます
- 3. Budgetary Control をデータ・ソースとして登録し、使用する接続を指定して、Budgetary Control の残高 Essbase キューブをデータ統合にインポートします。**
「アプリケーションのインポート」ボタンによって、Budgetary Control の残高 Essbase キューブをデータ統合に Budgetary Control ターゲット・アプリケーションとして取り込みます。各 Budgetary Control ターゲット・アプリケーション内の予算管理ディメンション・メンバーは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud との間でデータをロードおよびライトバックするために使用される Budgetary Control の予算管理を表しています。
[Budgetary Control のデータ・ソースとしての登録およびアプリケーションのインポート](#) を参照してください。
- 4. 「データ・エクスポート」カテゴリを選択して予算調整改訂を登録し、予算調整改訂タイプを選択して、アプリケーションの Budgetary Control Essbase キューブを選択します。**
このタイプのアプリケーションは、PRCVisionCityControlB_BAR のように、アプリケーション名に BAR が付加されます。
[予算調整要求の登録](#)を参照してください。
- 5. プランニング予算改訂をデータ・ソースとして登録します。**これは、予算に対して行われた策定または改訂を格納し、その後 Budgetary Control にロードされます。
[プランニング予算改訂の登録](#)を参照してください。

6. **オプション:** 別の環境からの移行を使用してアプリケーションを移行する場合は、ソースから予算管理情報をインポートする必要があります。この場合は、Budgetary Control Essbase アプリケーションを選択し、アクション・メニューから「**メンバーのリフレッシュ**」オプションを選択します。

7. **全般** ページで、**プランニング予算改訂** ソース・アプリケーションと **予算調整要求** の間の統合を作成します。

[プランニング予算改訂と予算調整要求の統合](#)を参照してください。

8. **ディメンションのマッピング** ページで、**プランニング予算改訂** ソース・アプリケーションから **予算調整要求** にディメンションをマップしてインポート・フォーマットを作成します。

このステップでは、プランニング予算改訂ディメンションを予算調整要求ディメンションにマップします。

[プランニング予算改訂および予算調整要求ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

9. **オプション:** 選択した EPM Planning 財務ソースから値をインポートできる追加の属性列をマップします。

詳細は、[カスタム予算改訂属性のマッピング](#)を参照してください。

10. **オプション** ページで、期間マッピングを選択します。

期間マッピングでは、EPM Planning 財務と Budgetary Control 間のマッピングを定義します。次の 2 つの方法で期間マッピングを定義できます:

- デフォルトの期間処理
- 明示期間処理

EPM Planning 財務と Budgetary Control で一貫した期間定義および期間命名を使用する場合は、デフォルトの期間処理を使用します。たとえば、両方のシステムで月次カレンダー使用され、Jan-20 のような期間の名前が両方のシステムで一致する場合、統合ではデフォルトの期間マッピング・タイプを使用します。追加のマッピングは必要ありません。

EPM Planning 財務と Budgetary Control で期間定義または期間命名規則が異なる場合は、明示期間処理を使用します。この場合、明示ソース期間マッピングに関連付けられているカレンダーを選択する必要があります。


[予算調整オプションの定義](#)を参照してください。

EPM Planning 財務の予算改訂と Budgetary Control の統合については、次の点に注意してください:

- EPM Planning 財務から Budgetary Control への **メンバー・マッピング** を使用することは **できません**。インポート式を使用して接頭辞を追加したり追加ディメンションに定数値を割り当てることのみが可能です。
- データ統合の統合の実行ページから EPM Planning 財務と Budgetary Control の統合を実行することは **できません**。統合の実行ステップは、資金チェックまたは資金予約アクションの実行時に EPM Planning 財務からのみ呼び出されます。
- EPM Planning 財務と Budgetary Control の統合の結果をワークベンチで表示することは **できません**。

OEP_FS を入力キューブとする Planning アプリケーションの登録

OEP_FS を入力キューブとして Planning アプリケーションを登録するには。

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、（「追加」アイコン）をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「EPM ローカル」を選択します。
4. 「アプリケーション」から、OEP_FS キューブに関連付けられる Planning アプリケーションを選択します。
5. 「キューブ」から、**入力キューブ - OEP_FS** を選択します。
6. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。







接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

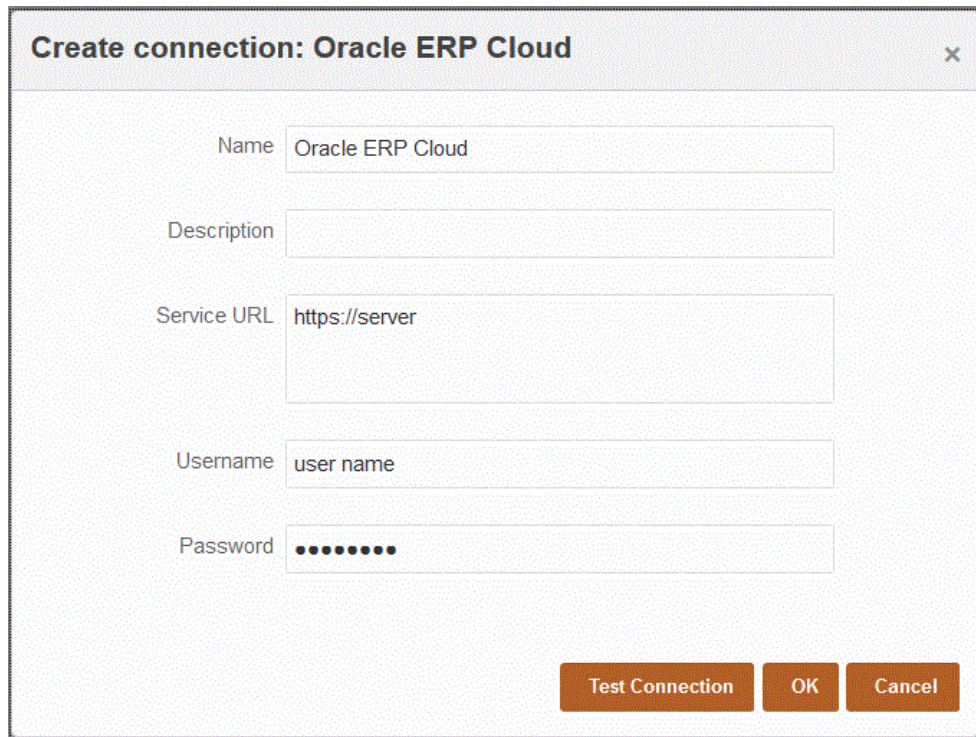
7. 「OK」をクリックします。

Oracle ERP Cloud ソース・システムの登録

プランニング予算改訂と予算調整要求を統合するには、まずタイプが **Oracle ERP Cloud** のソース・システムを作成し、次に接続情報を指定します。

Oracle ERP Cloud をソース・システム・タイプとして追加するには:

1. ホーム・ページで、（「アプリケーション」クラスター）をクリックします。
2. （「データ交換」アイコン）をクリックし、「データ統合」タブを選択します。
オプションで、 をクリックして「データ統合」を起動し、「アプリケーション」から  **Data Exchange** を選択できます。
3. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
4. アプリケーション・ページで、（接続の構成アイコン）をクリックします。
5. （「追加」ドロップダウン・アイコン）ドロップダウンから、**Oracle ERP Cloud** を選択します。



6. 「名前」に、ソース・システム名を入力します。
7. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
8. サービス URL に、Web サービスのサービス情報を入力します。
たとえば、https://server と入力します。
9. 「ユーザー名」に、Budgetary Control のユーザー名を入力します。




Oracle Enterprise Performance Management Cloud と Oracle ERP Cloud の間で情報を送信するためのプロセス要求を開始する Oracle ERP Cloud ユーザーの名前を入力します。このユーザーには、「予算マネージャ」ジョブ役割が割り当てられている必要があります。

10. 「パスワード」に、Oracle ERP Cloud のパスワードを入力します。
このパスワードは、Oracle ERP Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。
11. 「接続のテスト」をクリックします。
接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。
12. 「OK」をクリックします。


Budgetary Control のデータ・ソースとしての登録およびアプリケーションのインポート

このステップでは、Budgetary Control をデータ・ソースとして登録する方法および Budgetary Control アプリケーションをインポートする方法を示します。

Budgetary Control をデータ・ソースとして登録し、Budgetary Control の残高 Essbase キューブをデータ統合にインポートするには:


1. ホーム・ページで、 (「アプリケーション」 クラスタ) をクリックします。
2.  (「データ交換」 アイコン) をクリックし、「データ統合」 タブを選択します。
3. 「アクション」 ドロップダウンから、「アプリケーション」 を選択します。
4. アプリケーション・ページで、 (「追加」 アイコン) をクリックします。

 **ノート:**

ホーム・ページではなく、アプリケーション・ページで  をクリックしてください。

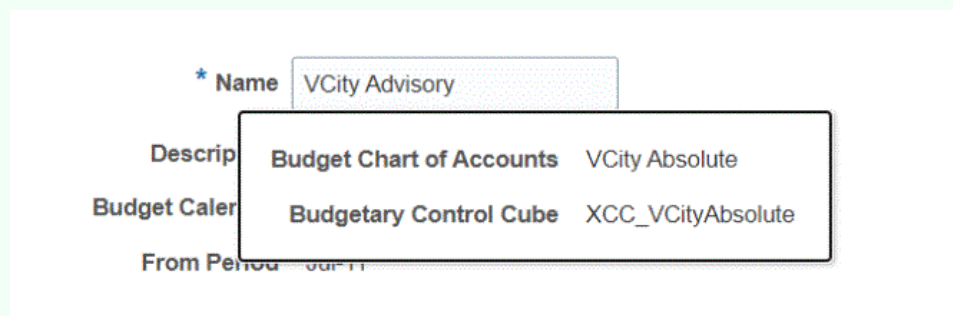
5. 「カテゴリ」 から、「データ・ソース」 を選択します
6. 「タイプ」 から、**Oracle ERP Cloud** を選択します。
7. 「接続」 から、Oracle ERP Cloud への接続に使用する接続名を選択します。
8. **Budgetary Control** を有効にします。
9. 「アプリケーションのインポート」 をクリックします。

「アプリケーションのインポート」 ボタンによって、Budgetary Control の残高 Essbase キューブをデータ統合に Budgetary Control ターゲット・アプリケーションとして取り込みます。各 Budgetary Control ターゲット・アプリケーション内の予算管理ディメンション・メンバーは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud との間でデータをロードおよびライトバックするために使用される Budgetary Control の予算管理を表しています。

 **ヒント:**

予算管理ディメンションが変更された場合、または新しい予算管理を追加した場合は、「アプリケーションのインポート」 を再実行する必要があります。




予算管理残高は、Oracle Essbase キューブに保管されます。予算管理のキューブ名を取得するには、管理予算の管理ページで予算管理名の上にマウスを置きます。予算管理キューブの名前は、ターゲット・マッピングとして使用されません。




10. 「OK」 をクリックします。

プランニング予算改訂の登録

このステップにより、EPM Planning 財務からプランニング予算改訂を登録できます。
プランニング予算改訂アプリケーションを登録するには:

1. ホーム・ページで、「アプリケーション」 クラスターをクリックします。
2. 「データ交換」 アイコンをクリックし、「データ統合」 タブを選択します。
3. データ統合ホーム・ページの「アクション」 から、「アプリケーション」 を選択します。
4. アプリケーション・ページで、「追加」 アイコンをクリックします。

ノート:

ホーム・ページではなく、アプリケーション・ページで  をクリックしてください。

5. 「カテゴリ」 から、「データ・ソース」 を選択します。
6. 「タイプ」 から、**プランニング予算改訂** を選択します。
7. 「アプリケーション」 から、OEP_FS の接尾辞が付いた Planning 入力キューブを選択します。
8. オプション: 「接頭辞」 で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

Create Application

Category Data Source ▼

Type Planning Budget Revision ▼

Application BA_787-OEP_FS ▼

Prefix SR




OK Cancel

9. 「OK」をクリックします。

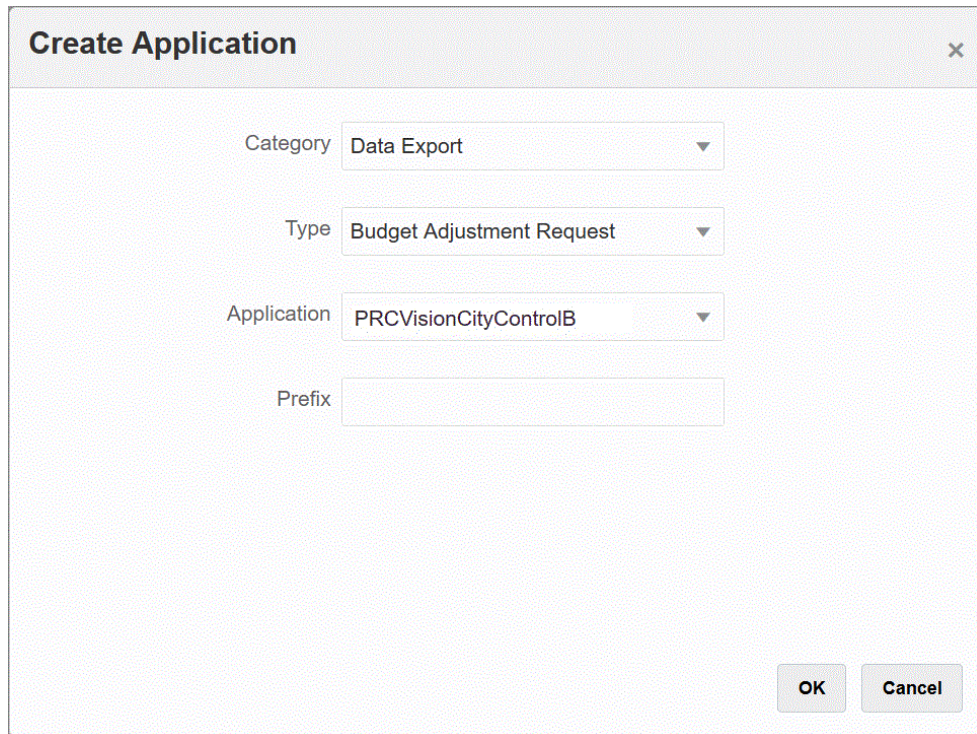
予算調整要求の登録

このステップにより、承認されたプランニング予算改訂からの改訂がロードされる予算調整要求機能を登録できます。

予算調整要求を登録するには:

1. ホーム・ページで、「アプリケーション」クラスターをクリックします。
2. 「データ交換」アイコンをクリックし、「データ統合」タブを選択します。
3. データ統合ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「アプリケーション」を選択します。
4. アプリケーション・ページで、「追加」アイコンをクリックします。
5. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「データ・エクスポート」を選択します。
6. 「タイプ」から、**予算調整要求**を選択します。
7. 「アプリケーション」から、Budgetary Control キューブの名前を選択します。
8. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。



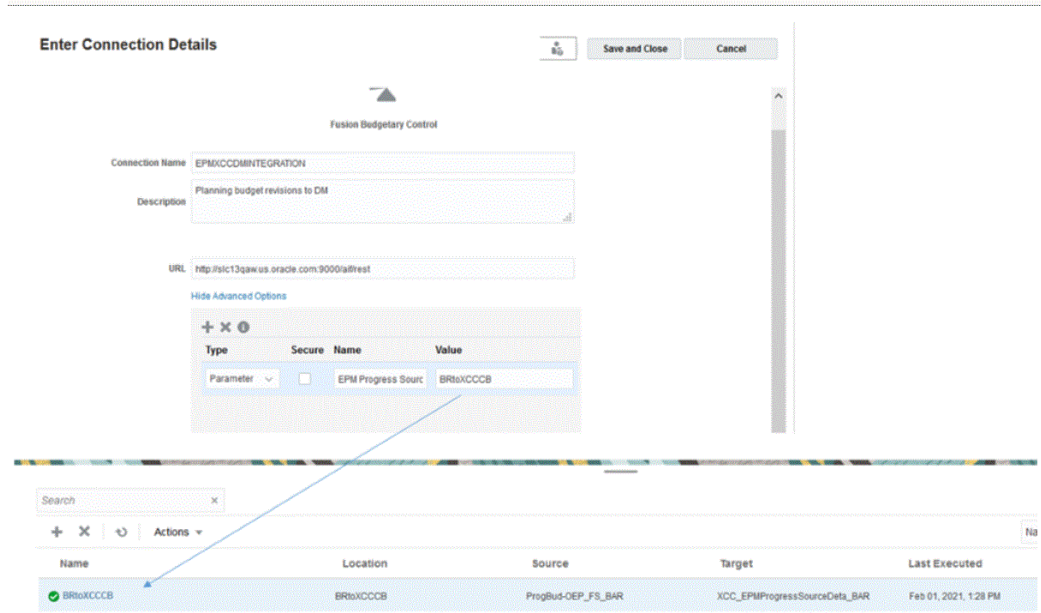
9. 「OK」をクリックします。

プランニング予算改訂と予算調整要求の統合

EPM Planning 財務で承認された予算からのプランニング予算改訂を予算調整要求に統合します。統合により、プランニング予算改訂アプリケーションを選択してターゲットの予算調整要求を指定するだけで、アプリケーション間のマッピングを設定できます。

統合を作成するには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページから、**+** をクリックします。
「統合の作成」ビューに、「全般」ページが表示されます。
2. 「**名前**」 および 「**説明**」 に、予算改訂の統合の名前および説明を入力します。
次の「**値**」パラメータに示されているように、統合の名前は、接続で EPM Planning 財務のパラメータとして使用されます。
複数の予算管理が同じキューブを共有する場合、同じマッピングを使用して、予算管理名とともにその他のパラメータを追加できます



詳細は、[EPM Planning 財務と Budgetary Control 間の統合の設定](#)を参照してください

3. 「ロケーション」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。



(ソースの選択)をクリックします。

5. **ソースの選択**ページから、プランニング予算改訂アプリケーションを選択します。

プランニング予算改訂アプリケーションの名前は、OEP_FS_BAR のように、アプリケーション名に_BAR という接尾辞が付いています。

プランニング予算改訂ソース・システムは、データ統合で登録され、**ソースの選択**ページに表示されます。

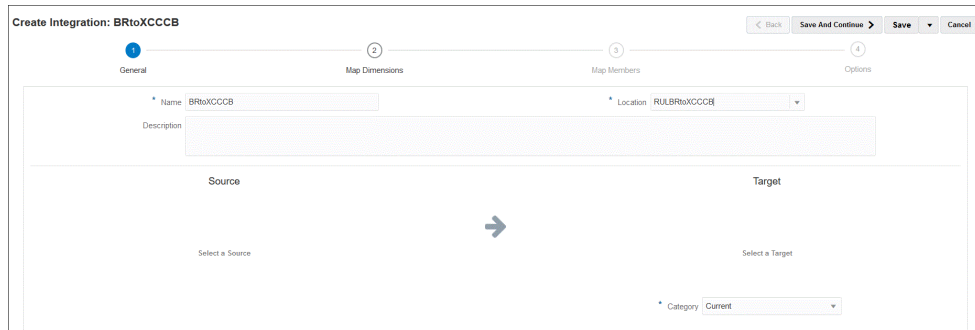
6. (ターゲットの選択)をクリックします。

これは、前のステップで作成されたターゲットです。

7. **ターゲットの選択**ページから、Budgetary Control キューブ・アプリケーションを選択します。

ターゲットの選択ページにターゲット・アプリケーションが表示されます。

Budgetary Control には BAR という接尾辞が付いています。



8. 「ロケーション属性」の「機能通貨」で、予算改訂に使用する通貨を選択します。たとえば、米ドルを指定するには、「USD」を選択します。
9. 「保存して続行」をクリックします。
 次のステップでは、ディメンションをマップします。

プランニング予算改訂および予算調整要求ディメンションのマッピング

プランニング予算改訂と予算調整要求の統合の一環として、EPM Planning 財務ディメンションを Budgetary Control ターゲット・ディメンションにマップします。必要に応じてビジネス要件に合うように式を適用するなどして、これらの統合をカスタマイズおよび拡張することもできます。

ディメンションをマッピングするには:

1. **データ統合** ホーム・ページで、プランニング予算改訂と予算調整要求の統合の右側にある **...** をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. 「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
 ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. 「**タイプ**」から、「**区切り - すべてのデータ型**」を選択し、「**保存**」をクリックして行をリフレッシュします。
4. 次を実行して、マッピング・グリッドで、ソース・データロード・ファイルのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします:
 - a. 「**ソース・ディメンションの選択**」で、予算調整要求ターゲット・ディメンションに割り当てるプランニング予算改訂ソース・ディメンションの名前を指定します。
 - b. **プラン要素**を**プラン要素**に、**期間**を**プラン期間**に、**年**を**プラン年**にマップします。
 - c. Budgetary Control ディメンションごとにターゲット・ディメンション式を追加します。最も一般的な使用事例の典型的な式は次のとおりです:
 - Copysource—EPM Planning 財務の同じメンバー名を Budgetary Control で使用します。
 - LTrim—EPM Planning、財務で使用されている接頭辞を削除します。

- 定数—Budgetary Control の追加のディメンションに定数値を割り当てます。




これは必須の手順です - ソースをターゲットにマップし、ターゲット式を追加する必要があります。

5. 「保存」をクリックします。

カスタム予算改訂属性のマッピング

選択した EPM Planning 財務ソースから値をインポートできる追加の属性列をマップできます。式フィールドに属性の値を入力することにより、処理中に値を追加できます。

カスタム予算調整改訂属性をマップするには:

1. ホーム・ページで、「アプリケーション」クラスタをクリックします。
2. （「データ交換」アイコン）をクリックし、「データ統合」タブを選択します。
3. 「アクション」ドロップダウンから、「アプリケーション」を選択します。
4. アプリケーション・ページで、予算調整改訂アプリケーションの右側にある  をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。

予算調整改訂アプリケーションは「データ・エクスポート」カテゴリに関連付けられています。

5. 属性文字 1 -属性文字 10 に追加の属性をマップし、「保存」をクリックします。

次の例では、「Header Number」が属性文字 1 の値に追加されています。

Application Details: SR_PRCVisionCityControlB_BAR Save

Dimensions Options Set Defaults

Property Name	Property Value
Workflow Mode	Simple
Control Budget	OFS_Control Budget Name
Transaction Number	OFS_Revision Number
Revision Description	OFS_Header Notes
Justification Text	OFS_Revision Justification
Header Attachment URL	OFS_Header Attachment URL
Approved By	OFS_Approved By
Approved Date	OFS_Approved Date
Approval Comments	OFS_Approval Comments
Attribute Category	
Attribute Char 1	Header Number
Attribute Char 2	
Attribute Char 3	


予算調整オプションの定義

オプションを使用して、プランニング予算改訂と予算調整要求の統合で使用される期間マッピングのタイプを定義します。デフォルト期間マッピングまたは明示期間マッピングのいずれかを使用できます。オプションでは期間マッピング・タイプのみを選択することに注意してください。他のすべてのオプションは事前選択されており、変更できません。

 **ヒント:**

日付マッピングが予算管理期間および会計年度と一致していることを確認してください。自動的に作成されたマッピングを変更する必要がある場合があります

オプションを指定するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
2. 「**期間マッピング・タイプ**」から、期間のマッピング・タイプを選択します。

使用可能なオプション:

- デフォルト - 統合では、データ管理で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、統合の実行時、各データ管理期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。

プランニング予算改訂と予算調整要求間のデフォルトの期間マッピングは、アプリケーションの作成中に自動的に設定されます。

- 明示 - EPM Planning 財務期間と Budgetary Control 期間が同じタイプでない場合に明示期間マッピングを使用できる場合、統合では、データ管理で定義されている明示期間マッピングが使用されます。たとえば、EPM Planning 財務が月次で、Budgetary Control が四半期ごとの場合です。

明示マッピングは、ソース・システム・オプションのカレンダー期間を使用して設定されます。「カレンダー」ドロップダウンから、統合に使用する実際のカレンダーを選択します。詳細は、ソース・マッピングの適用を参照してください。

3. 「**カレンダー**」から、プランニング予算改訂と予算調整要求の間のデータ統合に使用するソース期間マッピング・カレンダーの名前を選択します。
4. 「**保存**」をクリックします。

Oracle NetSuite の統合

データ統合は、データを Oracle NetSuite からロードしようとしている Oracle Enterprise Performance Management Cloud のお客様のための統合メカニズムとして使用できます。お客様は、Oracle NetSuite からクラウドベースの ERP、CRM および コマース・アプリケーションの統合スイートに直接アクセスできます。

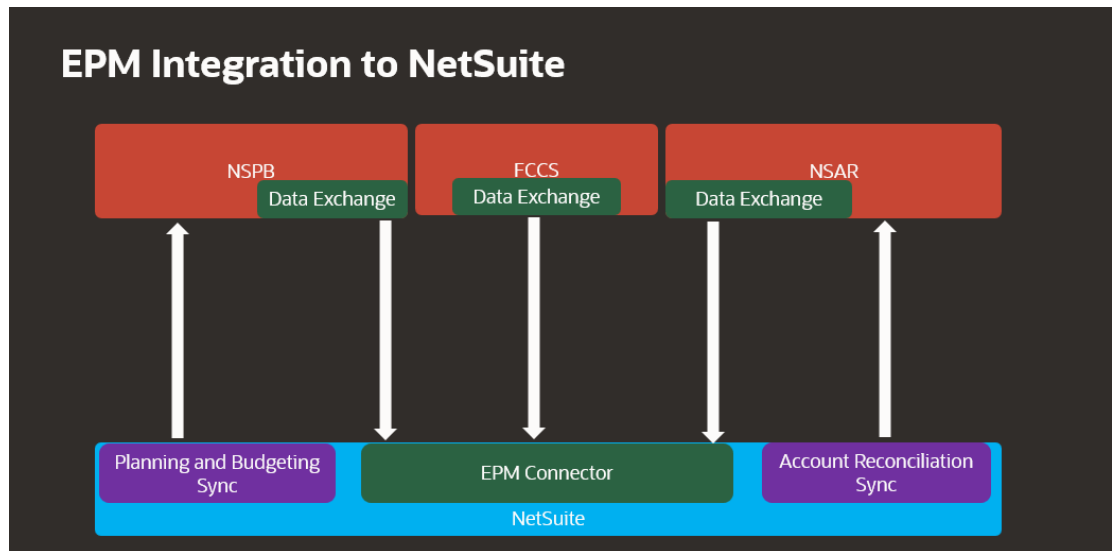
この統合では、EPM Connector SuiteApp または NSPB Sync SuiteApp を使用して Oracle NetSuite からデータをロードします。

これまで、Oracle NetSuite Planning and Budgeting (NSPB) Sync SuiteApp コネクタを使用して、Oracle NetSuite から EPM Cloud のアプリケーションにデータをロードしていたお客様は、引き続き NSPB Sync SuiteApp コネクタを使用してデータをロードしてください。NSPB 以外のお客様(既存の Oracle NetSuite Account Reconciliation (NSAR)のお客様を含む)は、Oracle NetSuite に接続する場合、EPM Connector SuiteApp を使用してください。このコネクタは、Oracle NetSuite と EPM Cloud のアプリケーションとの間の接続を容易に行えるようにします。

これまで、Oracle NetSuite Planning and Budgeting (NSPB) Sync SuiteApp コネクタを使用して、Oracle NetSuite から EPM Cloud のアプリケーションにデータをロードしていたお客様は、引き続き NSPB Sync SuiteApp コネクタを使用してデータをロードしてください。

NSPB 以外のお客様(既存の Oracle NetSuite Account Reconciliation (NSAR)のお客様を含む)は、Oracle NetSuite に接続する場合、EPM Connector SuiteApp を使用してください。このコネクタは、Oracle NetSuite と EPM Cloud のアプリケーションとの間の接続を容易に行えるようにします。

ビジネス・プロセスでどの SuiteApp が使用されるかを次に示します。



Oracle NetSuite を統合するプロセスの説明

Oracle NetSuite を Oracle Enterprise Performance Management Cloud でデータ・ソースとして使用する場合、データ統合では NSPB Sync SuiteApp または EPM Connector SuiteApp と保存された検索またはデータ・セットを使用して、Oracle NetSuite のデータを問い合わせます。

ノート:

保存された検索から生成されたデータは、データのインポートでのみ使用され、ライトバックでは使用されません。

Oracle NetSuite をライトバックするには、[予算データのインポートのための Planning and Budgeting の設定](#)のリンクから EPM Connector SuiteApp を使用してデータのプッシュ・バックを構成する方法を確認します。

次に、Oracle NetSuite データ・ソースからデータをロードするステップをおおまかに示します。

1. SuiteApp をインストールするには、管理者はまず、「EPM Connector Foundation」バンドルをインストールする必要があります。NSAR のお客様には、EPM Connector Foundation バンドルが自動的にプロビジョニングされます。

その他のお客様は、アカウント・マネージャと協力して、バンドルのプロビジョニング・リクエストを送信して承認を受ける必要があります。承認されたら、「EPM Connector Foundation」バンドルをインストールできます。

2. 管理者は、Oracle NetSuite でインストール・タスクを実行して、NSPB Sync SuiteApp または EPM Connector SuiteApp をインストールします。これらのタスクの実行の詳細は、[NetSuite](#) を参照してください。このガイドにアクセスするには、Oracle NetSuite ログインが必要です。
3. Oracle NetSuite のインストール中に、管理者は次のタスクを実行します:
 - EPM Cloud ユーザーのユーザー・レコードを作成します。これらのユーザー・レコードには、EPM Cloud 統合役割が必要で、EPM Cloud ユーザー・レコードの作成に関する項を参照してください。
 - EPM Cloud ユーザーのトークンベース認証を設定します。[NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成](#)または[NetSuite に対するトークンベースの認証用の Oracle EPM Connector SuiteApp の構成](#)を参照してください。
 - シングル・サインオン(SSO)を設定します。保存された検索では、SAML 2.0 を提供する SSO サービスを介してシングル・サインオン(SSO)をサポートしています。SSO アカウントを使用すると、ユーザーは、毎回資格証明を入力しなくても、Oracle NetSuite と EPM Cloud の間を移動できます。これにより、ユーザーは、EPM Cloud ユーザーのユーザー・レコードの作成に移動できます。Planning へのメニュー・ナビゲーションの設定に関する項を参照してください。
 - EPM Cloud 製品で Oracle NetSuite 検索を使用する場合は、管理者が、許可リストに検索 ID の接頭辞を登録する必要があります。

Oracle NetSuite の保存された検索は、基準とフィルタに基づく再利用可能な検索定義です。たとえば、保存された検索には、最後の期間以降の一般会計への転記トランザクションがすべて含まれることがあります。Oracle NetSuite でサポートされているレコードはすべて、Oracle NetSuite の保存された検索に含めたり、その基盤とみなすことができます。検索は、事前パッケージ化済か、ユーザー定義済のいずれかです。

Oracle NetSuite で新しい保存された検索を作成する場合は、EPM Connector の構成で定義した接頭辞を保存された検索 ID の一部として含める必要があります。

- 接頭辞には、保存された検索の ID またはデータセット ID の接頭辞を指定できます
- 接頭辞には次の 3 つのオプションがあります:
 - * すべての Oracle EPM 製品
 - * Account Reconciliation
 - * Planning and Budgeting

- NSPB および NSAR 固有の接頭辞は NSPB および NSAR で定義し、その他すべての接頭辞は、すべての Oracle EPM 製品で定義できます。
- すべての Oracle EPM 製品で定義したものはすべて、NSPB または NSAR を含む、すべての EPM 製品に含まれます

詳細は、[データ・ソース許可リストのドキュメント](#)を参照してください。

4. データ統合で、Oracle NetSuite へのソース接続を構成します。

このステップには、接続の詳細の指定が含まれます。

詳細は、次を参照してください。

- [NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成](#).
- [NetSuite に対するトークンベースの認証用の Oracle EPM Connector SuiteApp の構成](#)

5. **アプリケーションのインポート** オプションを選択して、ユーザーが所有するすべての保存された検索の定義をインポートします。

このオプションを選択すると、データ統合によって、ユーザーが所有するすべての保存された検索の定義がインポートされます。保存されたすべての検索定義をインポートしない場合、ターゲット・アプリケーションに移動して、保存された検索の定義を個別に 1 つ

ずつ選択します。ソース・システムを初めて初期化した場合、増分の保存された検索の定義もターゲット・アプリケーションに追加できます。

詳細は、次を参照してください: [Oracle NetSuite アプリケーションの登録](#)

Oracle NetSuite アプリケーションの更新の詳細は、[Oracle NetSuite アプリケーションの更新](#)を参照してください。

6. **オプション:** 保存された検索内の列をディメンションにマップします。
7. **EPM Cloud** アプリケーションをターゲット・アプリケーションとして定義します。
詳細は、次を参照してください: [EPM Cloud アプリケーションの登録](#)
8. 保存された検索の列をターゲット **EPM Cloud** アプリケーション・ディメンションのディメンションにマップするために、インポート・フォーマットを定義します。
詳細は、次を参照してください: [ディメンションのマッピング](#)
9. **Oracle NetSuite** を指定するドリル URL を定義します。
詳細は、次を参照してください: [Oracle NetSuite へのドリル・スルー](#)
10. 初期化プロセスの完了後は、ターゲット・アプリケーションを追加するときに、保存された検索を選択できます。**Oracle NetSuite** またはデータセットをデータ・ソースとして選択すると、選択した **Oracle NetSuite** ソースからの保存された検索のリストが表示されます。
「アプリケーション・フィルタ」タブでソース・フィルタ基準を提供することもできます。これらのソース・フィルタは、**Oracle NetSuite** の「基準」と同じであり、**Oracle NetSuite** の保存された検索からのデータをフィルタします。
11. カレンダ・マッピングのセクションで、**Oracle NetSuite** 期間を **EPM Cloud** 期間にマップするためのソース・マッピング・エントリを定義します。
12. 統合を作成し、**Oracle NetSuite** のデータ・ソースをソース・アプリケーションとして、**EPM Cloud** アプリケーションをターゲット・アプリケーションとして指定します。
詳細は、次を参照してください: [直接統合の作成](#)
13. 期間マッピングを定義します。使用可能なオプションは、明示期間マッピングとデフォルト期間マッピングです。
Oracle NetSuite 統合で使用可能な期間マッピングの詳細は、[Oracle NetSuite での期間の管理](#)を参照してください。
14. **Oracle NetSuite** のデータ・ソースと **EPM Cloud** ターゲット・アプリケーションの間のメンバー・マッピングをマップします。
15. **Oracle NetSuite** のフィルタおよびオプションを適用します。
詳細は、次を参照してください: [Oracle NetSuite アプリケーション・フィルタの適用](#)
16. **Oracle NetSuite** のデータ・ソースと **EPM Cloud** ターゲット・アプリケーションの間の統合を実行します。

これにより、データが **Oracle NetSuite** インスタンスからデータ統合に取得され、データがマップされ、結果がワークベンチに表示されます。マッピングがエラーなしで成功すると、データはターゲット・アプリケーションにロードされます。

詳細は、次を参照してください: [統合の実行](#)

NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成

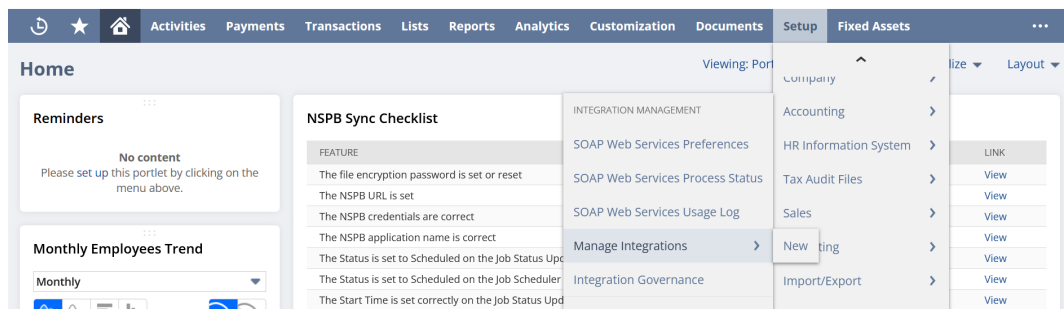
Oracle NetSuite Planning and Budgeting (NSPB) Sync SuiteApp と Oracle Enterprise Performance Management Cloud との統合を開始するには、アプリケーション・タイプが「NetSuite」のソース・システムおよび接続パラメータを構成して登録します。

NSPB Sync SuiteApp 接続を構成する前に、トークンベース認証のトークンの詳細があることを確認してください。データ統合で接続を構成する前に、この情報を NSPB Sync SuiteApp の保存された検索で定義する必要があります。

これまで、Oracle NetSuite Planning and Budgeting (NSPB) Sync SuiteApp コネクタを使用して、Oracle NetSuite から EPM Cloud のアプリケーションにデータをロードしていたお客様は、引き続き NSPB Sync SuiteApp コネクタを使用してデータをロードしてください。NSPB 以外のお客様(既存の Oracle NetSuite Account Reconciliation (NSAR)のお客様を含む)は、Oracle NetSuite に接続する場合、EPM Connector SuiteApp を使用してください。このコネクタは、Oracle NetSuite と EPM Cloud のアプリケーションとの間の接続を容易に行えるようにします。詳細は、[NetSuite に対するトークンベースの認証用の Oracle EPM Connector SuiteApp の構成](#)を参照してください。

トークンベース認証を使用して NSPB Sync SuiteApp システムに接続するには、次のステップを実行します:

1. **Oracle NetSuite** を起動します。
2. **Oracle NetSuite** ホーム・ページから、「**設定**」、「**インテグレーション**」、「**統合を管理**」、「**新規**」(新規トークンの作成)の順に選択します。



3. 「**名前**」で、Planning and Budgeting アプリケーションを表すこの統合レコードの名前を入力します。
4. 「**説明**」で、Oracle NetSuite でこの統合レコードを識別しやすくする説明を入力します。
5. 「**状態**」で、デフォルト・オプションを有効なままにします。
6. 「**認証**」セクションで、「**トークン・ベース認証**」チェック・ボックスを選択します。

7. その他の必要な変更を行ってから、「保存」をクリックします。

Oracle NetSuite により、統合レコードでコンシューマ・キーおよびコンシューマ・シークレットが生成されます。

8. コンシューマ・キーおよびコンシューマ・シークレットを保存します。

ノート:

コンシューマ・キーおよびコンシューマ・シークレットは一度のみ表示されます。これらの資格証明を紛失した場合は、新しいものを再生成できます。**コンシューマ・キーおよびコンシューマ・シークレットの再生成**を参照してください。

9. Oracle NetSuite ホーム・ページから、「設定」、「ユーザー/ロール」、「アクセス・トークン」、「新規」の順に選択します。


10. アクセス・トークン・ページで、次の手順を実行します:

- a. 「アプリケーション名」ドロップダウン・リストで、作成された統合レコードを選択します。
- b. 「ユーザー」ドロップダウン・リストで、Planning and Budgeting 統合に関連付けられているユーザーを選択します。
統合ユーザーの設定の詳細は、[統合ユーザーの設定](#)を参照してください。
- c. 「ロール」ドロップダウン・リストで、Planning and Budgeting 統合または統合ユーザーに十分な権限を付与するカスタム・ロールを選択します。

11. 「トークン名」フィールドに、アプリケーション名、ユーザーおよびロールが連結されたものが移入されます。
12. 「保存」をクリックします。
Oracle NetSuite により、ページでトークン ID およびトークン・シークレットが生成されます。
13. 生成されたトークン ID およびトークン・シークレットを保存します。

 ノート:

トークン ID およびトークン・シークレットは一度のみ表示されます。これらの資格証明を紛失した場合は、新しいトークンを作成する必要があります。

14. Planning and Budgeting アプリケーションで、「ナビゲーション」アイコン

15. 「データ統合」タブを選択します。
16. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。

Name	Location	Source	Target	Last Executed
BalSH_Beg_Bals	BalSH_Beg_Bals	NSPB (Data) PF Balance Sheet Beg Balances	NetSuite	...
BalSH_Beg_Bals_F	BalSH_Beg_Bals_FC	NSPB (Data) PF Balance Sheet Beg Balances - FL	NetSuite	...
BalSH_Trans	BalSH_Trans	NSPB (Data) PF Balance Sheet Transactions	NetSuite	...
Consol_Fx_Rate	Consol_Fx_Rate	NSPB (Data) PF Consolidated Exchange Rates	NetSuite	...
Consol_Fx_Rate_Org	Consol_Fx_Rate_Org	NSPB (Data) PF Consolidated Exchange Rates	NetSuite	...
Days_In_Month	Days_In_Month	NSPB (Data) PF Days In Month	NetSuite	...
IncStm_Trans	IncStm_Trans	NSPB (Data) PF Income Statement Transactions	NetSuite	...
IncStm_Trans_FC	IncStm_Trans_FC	NSPB (Data) PF Income Statement Transactions - ...	NetSuite	...
InvAmt_Beg_Bals	InvAmt_Beg_Bals	NSPB (Data) PF Inventory Amt Beg Balances	NetSuite	...
InvAmt_My_Mmnt	InvAmt_My_Mmnt	NSPB (Data) PF Inventory Amt My Mmnt	NetSuite	...
InvUnits_Beg_Bals	InvUnits_Beg_Bals	NSPB (Data) PF Inventory Units Beg Balances	NetSuite	...
InvUnits_My_Mmnt	InvUnits_My_Mmnt	NSPB (Data) PF Inventory Units My Mmnt	NetSuite	...
IS_Trans_FC_Ongoing	IS_Trans_FC_Ongoing	NSPB (Data) PF Income Statement Transactions - ...	NetSuite	...

17. アプリケーション・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。

18. 接続ページで、 (「追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「NetSuite」を選択します。

/

Name	Type	Description
Oracle ERP Cloud	NetSuite	
Oracle HCM Cloud	NetSuite	
NetSuite	NetSuite	Published Source System

19. 接続の作成ページの「名前」に、ソース・システム名を入力します。

NSPB Sync SuiteApp アプリケーションに使用する名前を入力します(「NetSuite ERP」など)。

20. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。

21. 「コンシューマ・キー・タイプ」で、「カスタム」を選択します。

ノート:

ステップ 10 でトークンを作成するときに、アプリケーション名として内部 NS アプリケーション NS-PBCS を選択した場合は、「デフォルト」を選択する必要があります。そうでない場合は、「カスタム」を選択します。

22. 「コネクタ・タイプ」で、NSPB Sync を選択します。

23. 「コンシューマ・キー」および「コンシューマ・シークレット」で、生成されたコンシューマ・キーおよびコンシューマ・シークレットを入力します。

24. 「トークン」および「トークン・シークレット」で、生成されたトークン ID とトークン・シークレットを入力します。

25. 「アカウント」で、統合ユーザーの Oracle NetSuite アカウント ID を入力します。値は、大文字と小文字の区別を含め、完全に一致している必要があります。

Oracle NetSuite でアカウント ID を確認するには、「設定」、「会社」、「会社情報」、「アカウント ID」の順に選択します。

Company Information

Save Cancel

COMPANY NAME *
NSPB STD for ONI Team [TSTDV2560072]

LEGAL NAME
Demo: Blank US OneWorld Account

COMPANY LOGO (FORMS)
US Flag.gif +

COMPANY LOGO (PAGES)
US Flag.gif +

DISPLAY LOGO INTERNALLY

WEB SITE

COUNTRY/STATE/PROVINCE *
California

COUNTRY
United States

RETURN EMAIL ADDRESS *
demoexcellence@netsuite.com

CURRENCY
US Dollar

EMPLOYER IDENTIFICATION NUMBER (EIN)

SSN OR TIN (SOCIAL SECURITY NUMBER, TAX ID NUMBER)

PURGE ACCOUNT

FIRST FISCAL MONTH
January

TIME ZONE
(GMT-08:00) Pacific Time (US & Canada)

ACCOUNT ID
TSTDV2560072

DATA CENTER
US Santa Clara

TAXONOMY REFERENCE +

26. 「接続のテスト」をクリックします。

接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。

27. 「OK」をクリックします。

NetSuite に対するトークンベースの認証用の Oracle EPM Connector SuiteApp の構成

Oracle NetSuite のデータと Oracle Enterprise Performance Management Cloud との統合を開始するには、Oracle EPM Connector SuiteApp を使用します。Oracle EPM Connector は、管理 SuiteApp です。新しいバージョンが使用可能になると、Oracle NetSuite により自動的にアカウントが更新されます。

Oracle EPM Connector SuiteApp を構成する前に、トークンベース認証のトークンの詳細があることを確認してください。データ統合で接続を構成する前に、この情報を Oracle EPM Connector SuiteApp で定義する必要があります。

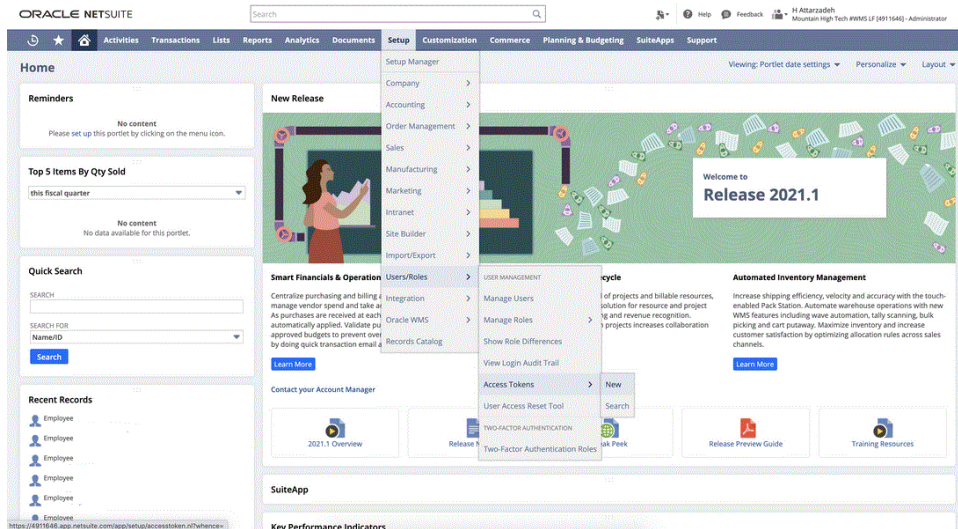
Note:

- EPM Connector SuiteApp では、即時利用可能な保存された検索やデータセットは提供していません。必要な保存された検索やデータセットはすべて、実装時に作成する必要があります。
- 保存された検索またはデータセットを使用してデータをロードする場合、結果は保存された検索またはデータセットのデータに基づきます。
メタデータ階層の保存された検索またはデータセットを利用する場合は、NSPB Sync SuiteApp バンドルを使用します。

Oracle NetSuite のデータを EPM Cloud アプリケーションにすでにロードしているお客様は、引き続き、Oracle NetSuite Planning and Budgeting (NSPB) Sync SuiteApp を使用してデータをロードする必要があります。詳細は、[NetSuite に対するトークンベースの認証用の NSPB Sync SuiteApp コネクタの構成](#)を参照してください。

トークンベース認証を使用して EPM Connector SuiteApp システムに接続するには、次のステップを実行します:

1. **Oracle EPM Connector のインストールと設定。**に記載されているステップを実行します。
2. **Oracle NetSuite** を起動します。
3. **Oracle NetSuite** ホーム・ページから、「設定」、「ユーザー/ロール」、「アクセス・トークン」、「新規」の順に選択します(新規トークンを作成します)。



4. **アクセス・トークン**・ページで、次の手順を実行します:
 - a. 「アプリケーション名」ドロップダウン・リストで、カスタム・アプリケーション名を選択します。
 - b. 「ユーザー」ドロップダウン・リストで、統合ユーザーを選択します。
 - c. 「ロール」ドロップダウン・リストで、統合ユーザーに十分な権限を付与するカスタム・ロールを選択します。
 - d. 「トークン名」フィールドに、アプリケーション名、ユーザーおよびロールが連結されたものが移入されます。

ORACLE NETSUITE

Activities Transactions Lists Reports Analytics Documents **Setup**

Access Token

Primary Information

APPLICATION NAME *

USER *

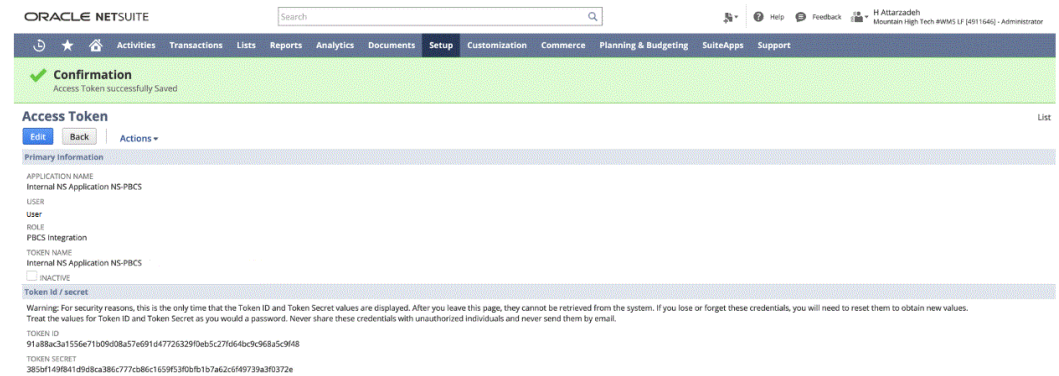
ROLE *

TOKEN NAME *

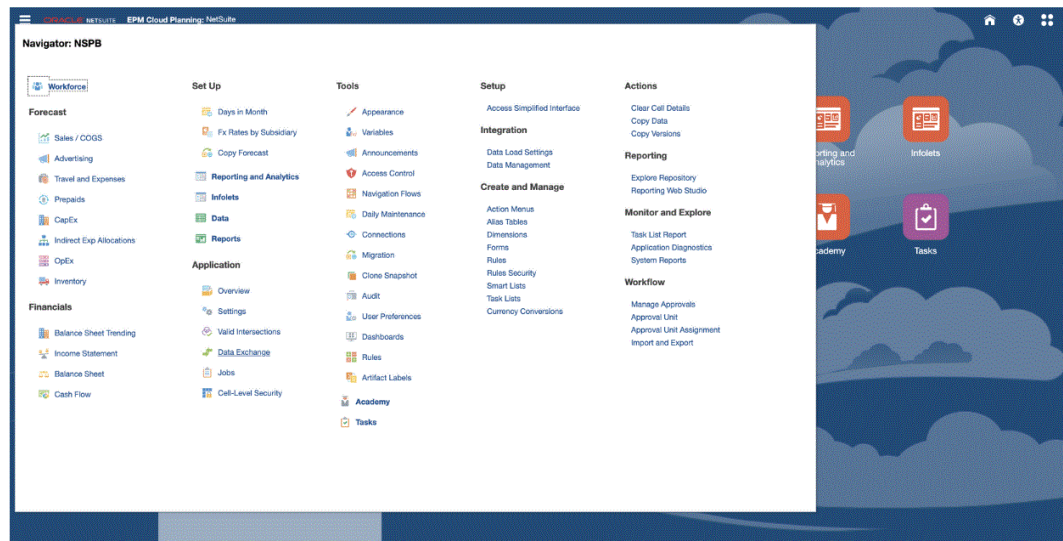
INACTIVE

- 「保存」をクリックし、このページからトークン ID およびトークン・シークレットをコピーします。

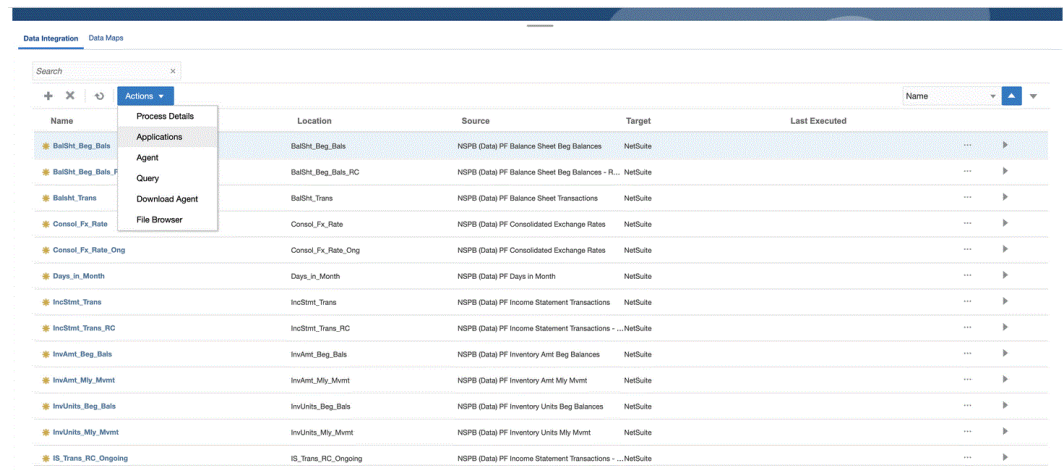
ノート: これらの値はこのタイミングでのみ表示されます。このページから離れた後は、これらの値にアクセスできません。




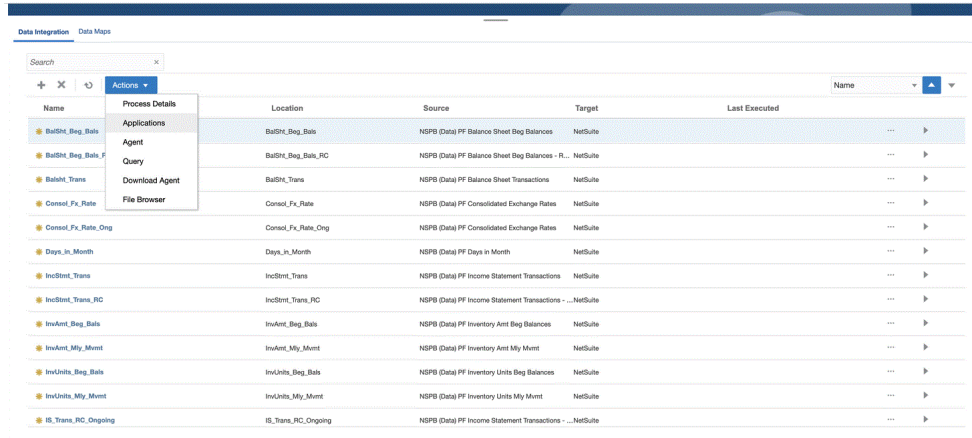
- ナビゲーション・ページの「アプリケーション」で、「データ交換」を選択します。




- 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。

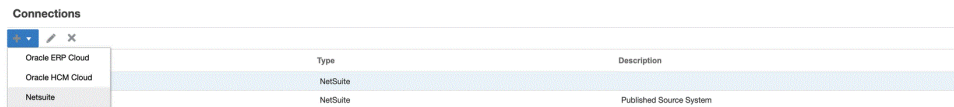


8. アプリケーション・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。



Name	Location	Source	Target	Last Executed
BalSHt_Beg_Bals	BalSHt_Beg_Bals	NSPB (Data) PF Balance Sheet Beg Balances	NetSuite	...
BalSHt_Beg_Bals_F	BalSHt_Beg_Bals_FC	NSPB (Data) PF Balance Sheet Beg Balances - F...	NetSuite	...
BalSHt_Trans	BalSHt_Trans	NSPB (Data) PF Balance Sheet Transactions	NetSuite	...
Consol_Fx_Rate	Consol_Fx_Rate	NSPB (Data) PF Consolidated Exchange Rates	NetSuite	...
Consol_Fx_Rate_Ong	Consol_Fx_Rate_Ong	NSPB (Data) PF Consolidated Exchange Rates	NetSuite	...
Days_In_Month	Days_In_Month	NSPB (Data) PF Days In Month	NetSuite	...
IncStmT_Trans	IncStmT_Trans	NSPB (Data) PF Income Statement Transactions	NetSuite	...
IncStmT_Trans_FC	IncStmT_Trans_FC	NSPB (Data) PF Income Statement Transactions ...	NetSuite	...
InvAmt_Beg_Bals	InvAmt_Beg_Bals	NSPB (Data) PF Inventory Amt Beg Balances	NetSuite	...
InvAmt_My_Mmnt	InvAmt_My_Mmnt	NSPB (Data) PF Inventory Amt My Mmnt	NetSuite	...
InvUnits_Beg_Bals	InvUnits_Beg_Bals	NSPB (Data) PF Inventory Units Beg Balances	NetSuite	...
InvUnits_My_Mmnt	InvUnits_My_Mmnt	NSPB (Data) PF Inventory Units My Mmnt	NetSuite	...
IS_Trans_RC_Ongoing	IS_Trans_RC_Ongoing	NSPB (Data) PF Income Statement Transactions ...	NetSuite	...

9. 接続ページで、 (「追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「NetSuite」を選択します。



Type	Description
NetSuite	Published Source System

10. 接続の作成 ページの「名前」に、ソース・システム名を入力します。
EPM Connector SuiteApp アプリケーションに使用する名前を入力します
(「NetSuite ERP」など)。
11. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
12. 「コンシューマ・キー・タイプ」で、「カスタム」を選択します。
13. 「コネクタ・タイプ」で、EPM Connector を選択します。
14. 「コンシューマ・キー」で、EPM Connector SuiteApp システムで生成され、カスタム・コンシューマ・キー・タイプの実装で使用される、コンシューマのグローバルに一意の識別子を指定します。
15. 「コンシューマ・シークレット」で、カスタム・コンシューマ・キー・タイプの実装で使用されるコンシューマ・キーの所有権を確立するために使用するパスワードを指定します。
16. 「トークン・キー」で、EPM Connector SuiteApp システムで生成され、ユーザーの代理で保護されたリソースへのアクセス権を取得するために使用するトークン値を指定します。
17. 「トークン・シークレット」で
18. 「アカウント」で、Oracle NetSuite Web サービスへのアカウント ID を指定します。

アカウント ID は、アカウント・タイプを識別します(たとえば、アカウントが本番アカウントか、サンドボックス・アカウントか、またはリリース・プレビュー・アカウントか)。アカウント固有のドメインは、アカウントがホストされるデータ・センターに依存しません。アカウントが別のデータ・センターに移動された場合でも、ドメインは変更されません。

Update connection: NS
✕

Name NS

Description

Consumer Key Type Default Custom

Connector Type NSPB Sync EPM Connector

Consumer Key

Consumer Secret

Token Key

Token Secret

Account

Test Connection
OK
Cancel

19. 「接続のテスト」をクリックします。

接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。

20. 「OK」をクリックします。

NetSuite と EPM Cloud の統合の詳細は、NetSuite の統合。を参照してください

Oracle NetSuite データ・ソースの作成

ターゲット・アプリケーションにより、統合できるソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの構造をデータ統合に格納できます。この方法で、ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションをマップし、インポート基準を指定できます。

Oracle NetSuite の保存された検索結果は、アプリケーション・タイプ「データ・ソース」に登録されます。初期化中に、Oracle NetSuite ソース・システムで登録されたユーザー名のもとで使用可能な保存された検索の結果に基づき、データ・ソースが自動的に作成されます。ターゲット・アプリケーションのオプションで、追加の保存された検索を Oracle NetSuite で作成でき、次にアプリケーション・ページでカスタムの保存された検索に登録できます。

ノート:

アプリケーション・ページの「アクション」メニューで「アプリケーションの更新」をクリックして、ソース・システムをデータ統合で初期化した後で Oracle NetSuite で作成されたすべての保存された検索を更新できます。

ノート:


Oracle NetSuite データ・ソースを作成するときには、ディメンションの詳細が自動的に移入され、ターゲット・ディメンション・クラス「汎用」に直接マップされます。ルールにより、Oracle NetSuite データ・ソースからデータをロードするとき、ディメンション詳細の変更、追加または削除を実行できません。

Oracle NetSuite データ・ソースの作成の詳細は、[Oracle NetSuite アプリケーションの登録](#)を参照してください。

保存された検索内の列のディメンションへのマップ

Oracle NetSuite アプリケーションに関連付けられるディメンションを管理できます。ディメンションは、ユーザーが業務上の質問に回答できるようにするためにデータを分類する構造です。通常、それぞれのディメンションには関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。よく使用されるディメンションは、顧客、製品および時間です。

保存された検索内の列をマップするには:

1. **アプリケーション・ページ**で、Oracle NetSuite アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
2. 「**ディメンション**」タブを選択します。
3. 「**ディメンション名**」から、ディメンションの分類先の列のディメンション名を選択します。
4. 列タイプに基づいて、対応する「**ディメンションの分類**」ドロップダウンから、列の分類を選択します。
5. 「**保存**」をクリックします。

Oracle NetSuite データ・ソースのターゲット・ディメンションの追加



Oracle NetSuite の保存された検索はデータ・ソースとして格納され、インポート・フォーマットを使用して、そのデータ・ソースと Oracle Enterprise Performance Management Cloud のターゲット・アプリケーションのディメンションとの間の統合マッピングを設定できます。

データ・ソース・アプリケーションによって生成されたファイルは、単一列数値や複数列データなど、サポートされるフォーマットのどれでも可能です。

Oracle NetSuite データ・ソースを選択すると、データ統合によってソースとターゲットの列に自動的に移入されます。

インポート・ファイルにある Oracle NetSuite の保存された検索データ・ソース列またはフィールドを、EPM Cloud アプリケーションのディメンションにマップします。


ターゲット・ディメンションを追加するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. **ディメンションのマッピング** ページで、「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
3. 「**ファイル・タイプ**」で、インポートするファイルのフォーマットを選択します。
使用可能なファイル・フォーマット:
 - 区切り - 数値データ
 - 複数列 - 数値データ
 - 区切り - すべてのデータ型
 - 複数列 - すべてのデータ型
4. 「**ドリル・スルー URL**」で、ドリル・スルーに使用する検索タイプ条件を入力します。
5. **ディメンションのマッピング** セクションで、ソース列を選択し、次にターゲット・ディメンションのドロップダウンからターゲット・ディメンションを選択することによって、ソース列をターゲット・ディメンションにマップします。
6. その他のディメンションをマップするには、「**マッピング**」セクションで  をクリックし、次に「**ディメンション行の追加**」ドロップダウンから、追加するディメンション行を選択します。
7. **オプション**: 「**式**」で任意のインポート式を追加します。
データ統合には、ほとんどすべてのファイルをデータ統合データベースに読み込んで解析できる、一連の強力なインポート式が用意されています。フィールドの「**式**」列に高度な式を入力します。インポート式は、インポート・ファイルから読み込まれた値を演算します。
8. 「**保存**」をクリックします。

Oracle NetSuite アプリケーションのオプションの定義

特定の Oracle NetSuite アプリケーション・プロパティのオプションを定義できます。

アプリケーション・プロパティを指定するには:

1. **アプリケーション** ページで、Oracle NetSuite アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
2. 「**プロパティ名**」で、追加または変更する値を「**プロパティ値**」ドロップダウンから選択します。
使用可能なプロパティ:
 - **Postingperiod** - データをロードする転記期間を選択します。

 **Note:**

特定の期間(特定の月など)に基づいてデータをロードする必要がある場合、期間 ID を含む転記期間フィルタを使用します。期間 ID は転記期間フィルタ内に作成され、データのフィルタ処理に使用される保存された検索によって戻されます。

Oracle NetSuite では、いくつかのタイプのデータ・フィルタが用意されています。名前付き期間(前会計年度など)、特定の開始日と終了日で定義されたカスタム日付範囲、および数日前、数週間前、数か月前、数四半期前、数年前または現在から数日後、数週間後、数か月前、数四半期後または数年後までとして定義された相対的な日付範囲です。フィルタの設定の詳細は、NetSuite の検索ガイドを参照してください。


- **Mainline** - トランザクションのタブで入力されるライン・アイテム・データではなく、トランザクションの「**主要情報**」フィールド・グループをロードするには、**True** を選択します。それ以外の場合は、**False** を選択します。
 - **Posting**
3. 「**保存**」をクリックします。

Oracle NetSuite アプリケーション・フィルタの適用

Oracle NetSuite の保存された検索で定義される検索基準は、アプリケーション・フィルタとして自動的に登録されます。必要に応じてフィルタを編集できます。たとえば、プロパティ・レベルを設定することで、デフォルト値を割り当てたり、エンド・ユーザーに対してフィルタを非表示にすることができます。

選択した条件を満たすレコードのみがデータ統合に戻るように、Oracle NetSuite の保存された検索結果にフィルタ条件を適用できます。フィルタ条件は 1 つのみでも、複数でも指定でき、さらに戻す値も厳密に指定できます。

Oracle NetSuite フィルタ条件を適用するには:


1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、Oracle NetSuite 統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
2. 「**フィルタ**」タブをクリックします。
3. フィルタ条件の名前を選択します。
4. 「**条件**」ドロップダウンから、適用可能な条件を選択します。
フィルタによる適用可能条件は、Oracle NetSuite の保存された検索から導出されます。
5. 「**値**」ドロップダウンから、フィルタを適用する値を選択します。
6. 「**保存**」をクリックします。

インポート・フォーマットのドリル URL へのフィルタの追加

Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータ統合へのドリル・スルーを実行し、続いて Oracle NetSuite の保存された検索へのドリル・スルーを実行する

と、場合によっては返されるレコードが多すぎる場合があります。ガイドラインとして、ドリル・スルーで全レコードの金額を追加する場合は、EPM Cloud でドリル・スルーを開始した時点のデータ・セル上に数値が合計される必要があります。この問題を解決するには、インポート・フォーマットのドリル・スルー URL にフィルタを追加します。

フィルタを追加するには:


1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ディメンションのマッピング」を選択します。
2. ディメンションのマッピング・ページで、「インポート・フォーマット」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。

ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。

3. 「マッピング」セクションで、フィルタとして使用するソース・ディメンション列を選択し、ターゲット「属性」列にマップします

たとえば、「Subsidiary ID」ソース列を「Attribute 4」行にマップできます。

Amount	Amount	
Select Source Dimension	Job	
Account	Account	
Internal ID	Attribute1	
Period	Attribute2	
Type	Attribute3	
Subsidiary	Attribute4	

4. 「ドリル・スルー URL」で  をクリックし、ドリル・スルーに使用する検索タイプ条件を入力します。

ドリル・スルーのフォーマットは次のとおりです:

```
searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_all_transactions_s_5&Transaction_TYPE&detailname=$ATTR3&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2&Transaction_POSTING=T&Transaction_MAINLINE=F&
```

子会社 ID など、その他のフィルタを追加する場合は、パラメータのリストに **&Transaction_SUBSIDIARY=\$ATTR4\$** と入力します。

この場合、次のようにドリル・スルー URL 定義全体を指定します:

```
Searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_trial_balance&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2&Transaction_SUBSIDIARY=$ATTR4&Transaction_POSTING=T&
```

5. 「保存」をクリックします。

Oracle NetSuite での期間の管理

Oracle NetSuite から期間をロードする場合、次の 2 つのオプションがあります:

- 「デフォルト」期間マッピング - データ・ロード・ルールに基づいて POV から単一の期間をロードする場合は、このオプションを使用します。この場合、インポート・フォーマットで期間列をマップしたり、期間マッピングでソース期間マッピングを定義することはありません。データ・ルール内に、「現在の期間」や最後の期間といったソース・フィルタを設定できます。たとえば、2018 年 2 月の期間をロードする場合、これを最後の期間として設定します。データ・ルールを実行すると、期間はチェックされず、Oracle NetSuite から抽出するすべてのデータが、選択した POV にインポートされます。

- 「明示」期間マッピング - 「明示」期間マッピングでは、Oracle NetSuite と Planning の期間が一致したときに一般会計データのロードが可能になります。複数の期間をロードする場合や、ユーザーが POV から期間を選択できないようにする場合は、このオプションを使用します。

明示期間マッピングを使用するには、インポート・フォーマットで期間列をマップし、ソース期間マッピングを定義します。一般会計期間の列が Oracle NetSuite 期間と正確に一致している必要があります。次に、統合で、期間マッピングからカレンダーを選択します。データ・ルールを実行する場合、ロードする開始から終了までの期間を指定します。データ・ルール内に、特定の期間データを抽出するためのフィルタ条件を設定できます(現行会計年度から現行会計四半期期間など)。データ統合によって、検索結果の期間列が期間マッピング内の期間と照合され、データが適切な期間にロードされます。


Oracle NetSuite データ・ソースのターゲット・ディメンションの追加


Oracle NetSuite の保存された検索はデータ・ソースとして格納され、インポート・フォーマットを使用して、そのデータ・ソースと Oracle Enterprise Performance Management Cloud のターゲット・アプリケーションのディメンションとの間の統合マッピングを設定できます。

データ・ソース・アプリケーションによって生成されたファイルは、単一列数値や複数列データなど、サポートされるフォーマットのどれでも可能です。

Oracle NetSuite データ・ソースを選択すると、データ統合によってソースとターゲットの列に自動的に移入されます。インポート・ファイルにある Oracle NetSuite の保存された検索データ・ソース列またはフィールドを、EPM Cloud アプリケーションのディメンションにマップします。

インポート・フォーマットを Oracle NetSuite ソースに追加するには:


- 「データ統合」** ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
- ディメンションのマッピング** ページで、「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
- 「ファイル・タイプ」** で、インポートするファイルのフォーマットを選択します。
使用可能なファイル・フォーマット:
 - 区切り - 数値データ
 - 複数列 - 数値データ
 - 区切り - すべてのデータ型
 - 複数列 - すべてのデータ型
- 「ドリル・スルー URL」** で、ドリル・スルーに使用する検索タイプ条件を入力します。
- ディメンションのマッピング** セクションで、ソース列を選択し、次にターゲット・ディメンションのドロップダウンからターゲット・ディメンションを選択することによって、ソース列をターゲット・ディメンションにマップします。

6. その他のディメンションをマップするには、「マッピング」セクションで  をクリックし、次に「**ディメンション行の追加**」ドロップダウンから、追加するディメンション行を選択します。
7. **オプション: 「式」** で任意のインポート式を追加します。
データ統合には、ほとんどすべてのファイルをデータ統合データベースに読み込んで解析できる、一連の強力なインポート式が用意されています。フィールドの「式」列に高度な式を入力します。インポート式は、インポート・ファイルから読み込まれた値を演算します。
詳細は、次を参照してください。
8. 「**保存**」をクリックします。

インポート・フォーマットのドリル URL へのフィルタの追加


Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータ統合へのドリル・スルーを実行し、続いて Oracle NetSuite の保存された検索へのドリル・スルーを実行すると、場合によっては返されるレコードが多すぎる場合があります。ガイドラインとして、ドリル・スルーで全レコードの金額を追加する場合は、EPM Cloud でドリル・スルーを開始した時点のデータ・セル上に数値が合計される必要があります。この問題を解決するには、インポート・フォーマットのドリル・スルー URL にフィルタを追加します。

フィルタを追加するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. **ディメンションのマッピング**・ページで、「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. 「**マッピング**」セクションで、フィルタとして使用するソース・ディメンション列を選択し、ターゲット「**属性**」列にマップします

たとえば、「Subsidiary ID」ソース列を「Attribute 4」行にマップできます。

Amount	Amount
Select Source Dimension	Job
Account	Account
Internal ID	Attribute1
Period	Attribute2
Type	Attribute3
Subsidiary	Attribute4

4. 「**ドリル・スルー URL**」で  をクリックし、ドリル・スルーに使用する検索タイプ条件を入力します。

ドリル・スルーのフォーマットは次のとおりです:

```
searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_all_transactions_s_5&Transaction_TYPE&detailname=$ATTR3$&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1$&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2$&Transaction_POSTING=T&Transaction_MAINLINE=F&
```

子会社 ID など、その他のフィルタを追加する場合は、パラメータのリストに **&Transaction_SUBSIDIARY=\$ATTR4\$** と入力します。

この場合、次のようにドリル・スルー URL 定義全体を指定します:

```
Searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_trial_balance&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1$&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2$&Transaction_SUBSIDIARY=$ATTR4$&Transaction_POSTING=T&
```

5. 「保存」をクリックします。

Oracle NetSuite へのドリル・スルー

データ統合によって、データ統合内で指定する、外部で使用可能な URL を使用して、Oracle NetSuite にドリル・スルーできます。

Oracle NetSuite にドリル・バックする場合、データ統合から格納された値をドリル URL のパラメータとして渡すことで、ドリル URL が構築されます。

Oracle NetSuite へのドリル・スルー URL は手動で構成する必要があります。

Oracle NetSuite へのドリル・スルー・パラメータの定義

Oracle NetSuite にドリル・バックするために必要なパラメータについて、次に説明します。

Oracle NetSuite にドリルするためのサーバー URL では、`https://<NetSuite Domain>/app/common/search/searchresults.nl?`というドリル URL アドレス・フォーマットが採用されます。

詳細側(検索タイプ・コンポーネントを指定する場所)では、Oracle NetSuite へのドリル URL で次のパラメータが必要です。

- "検索タイプ"
- "検索 ID"
- オプションとして、追加パラメータを指定して、勘定科目および期間に基づいてドリルをフィルタできます。

検索タイプ

ドリル・スルー・パラメータ・リストには、「トランザクション」の検索タイプが含まれます。ドリル・スルー URL で次のように指定されます。

```
Searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_trial_balance&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1$&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2$&Transaction_DEPARTMENT=$ATTR5$&Transaction_CLASS=$ATTR4$&Transaction_INTERNALID=$ATTR3$&Transaction_POSTING=T&
```

「トランザクション」検索タイプには次のものがあります。

- Transaction_POSTINGPERIOD
- Transaction_DEPARTMENT
- Transaction_SUBSIDIARY
- Transaction_CLASS
- Transaction_LOCATION
- Transaction_INTERNALID

- Transaction_POSTING=T

検索 ID

ドリル・スルー・リストには検索 ID も含まれます。検索文字列 ID を使用して、パラメータを指定します。

Oracle NetSuite の検索定義で値が見つかります。

```
https://<NetSuite Domain>/app/common/search/searchresults.nl?
searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_all_transactions_det.
```

追加パラメータ

追加パラメータを指定して、勘定科目および期間に基づいてドリルをフィルタできます。一般的に使用されるパラメータをいくつか次に示します。

表 17-1 追加のフィルタ・パラメータ

ラベル	パラメータ	値	例
勘定科目	Transaction_ACCOUNT	勘定科目の内部 ID	&Transaction_ACCOUNT=54
メイン行	Transaction_MAINLINE	T または F	&Transaction_MAINLINE=T
期間	Transaction_POSTING PERIOD	事前定義された期間の期間 ID またはキー	&Transaction_POSTINGPERIOD=21 or &Transaction_POSTINGPERIOD=LP
転記中	Transaction_POSTING	T または F	&Transaction_POSTING=T
子会社	Transaction_SUBSIDIARY	子会社の内部 ID	&Transaction_SUBSIDIARY=1

ドリル・スルーでの保存された検索の要件


コンテキスト依存のドリル・スルーを使用するには、保存された検索の検索出力には勘定科目フィールドと期間フィールドの内部 ID を含める必要があります。Oracle NetSuite で保存された検索の結果セクションにこれらのフィールドがない場合は、追加できます。

FIELD *	SUMMARY TYPE	FUNCTION	FORMULA	WHEN ORDERED BY FIELD	CUSTOM LABEL	CUSTOM LABEL TRANSLATION
Type	Group					
Account	Group					
Name						
Amount	Sum					
Amount (Debit)	Sum					
Amount (Credit)	Sum					
Period	Group					
Document Number						
Account : Internal ID	Group				Account ID	
Accounting Period : Internal ID	Group				Period ID	

内部 ID の詳細は、Oracle NetSuite ヘルプ・センターを参照してください:


ドリル・スルー URL の追加

ドリル・スルー URL を追加するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. **ディメンションのマッピング**・ページで、「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. 「**インポート・フォーマットのサマリー**」セクションから、インポート・フォーマットを選択します。
4. **インポート・フォーマットの詳細**セクションで、次に示すように、勘定科目、期間およびトランザクション・タイプの内部 ID を属性列にマップします。

たとえば、保存された検索のドリル URL フォーマットは次のとおりです。

```
searchtype=Transaction&searchid=<NAME OF SAVED SEARCH>&Transaction_TYPE&detailname=$<ATTR COLUMN FOR TRANSACTION TYPE>$&Transaction_ACCOUNT=$<ATTR COLUMN FOR ACCOUNT ID>$&Transaction_POSTINGPERIOD=$<ATTR COLUMN FOR PERIOD ID>$&Transaction_POSTING=T&Transaction_MAINLINE=F&
```

5. **インポート・フォーマットの詳細**セクションの「**ドリル URL**」で、 をクリックします。
6. 「**ドリル・スルー URL**」編集ウィンドウで、ドリル・スルーの属性を指定します。

ドリル URL を次のように指定します:


```
searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_all_transactions_sum&Transaction_TYPE&detailname=$ATTR3$&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1$&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2$&Transaction_POSTING=T&Transaction_MAINLINE=F&
```

7. 「**保存**」をクリックします。

インポート・フォーマットのドリル URL へのフィルタの追加

Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータ統合へのドリル・スルーを実行し、続いて Oracle NetSuite の保存された検索へのドリル・スルーを実行すると、場合によっては返されるレコードが多すぎる場合があります。ガイドラインとして、ドリル・スルーで全レコードの金額を追加する場合は、EPM Cloud でドリル・スルーを開始した時点のデータ・セル上に数値が合計される必要があります。この問題を解決するには、インポート・フォーマットのドリル・スルー URL にフィルタを追加します。

フィルタを追加するには:


1. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ディメンションのマッピング」を選択します。
2. ディメンションのマッピング・ページで、「インポート・フォーマット」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。

ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。

3. 「マッピング」セクションで、フィルタとして使用するソース・ディメンション列を選択し、ターゲット「属性」列にマップします

たとえば、「Subsidiary ID」ソース列を「Attribute 4」行にマップできます。

Amount	Amount
Select Source Dimension	Job
Account	Account
Internal ID	Attribute1
Period	Attribute2
Type	Attribute3
Subsidiary	Attribute4

4. 「ドリル・スルー URL」で  をクリックし、ドリル・スルーに使用する検索タイプ条件を入力します。

ドリル・スルーのフォーマットは次のとおりです:

```
searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_all_transactions_s_5&Transaction_TYPE&detailname=$ATTR3&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2&Transaction_POSTING=T&Transaction_MAINLINE=F&
```

子会社 ID など、その他のフィルタを追加する場合は、パラメータのリストに **&Transaction_SUBSIDIARY=\$ATTR4\$** と入力します。

この場合、次のようにドリル・スルー URL 定義全体を指定します:

```
Searchtype=Transaction&searchid=customsearch_nspbcs_trial_balance&Transaction_ACCOUNT=$ATTR1&Transaction_POSTINGPERIOD=$ATTR2&Transaction_SUBSIDIARY=$ATTR4&Transaction_POSTING=T&
```

5. 「保存」をクリックします。

Oracle HCM Cloud との統合

人事データを Oracle Human Capital Management Cloud からロードして、Planning モジュールの要員ビジネス・プロセスまたは Strategic Workforce Planning で使用できます。

データ統合を使用して、Oracle HCM Cloud と要員または Strategic Workforce Planning の間でデータの統合を推進します。データ統合で提供される即時利用可能なソリューションによって、要員のお客様は Oracle HCM Cloud データ・モデルからターゲット・ディメンションへの事前定義されたマッピングを適用できます。他のマッピングを必要に応じてビジネス要件に合うように適用するなどして、これらの統合をカスタマイズおよび拡張もできます。

Oracle HCM Cloud からのデータを統合するプロセスの説明

データ統合で提供される即時利用可能なソリューションによって、お客様は Oracle Human Capital Management Cloud データ・モデルから要員または Strategic Workforce Planning のターゲット・ディメンションへの事前定義されたマッピングを適用できます。

Oracle HCM Cloud とともにデータ統合では、データを抽出するためにユーザーが Oracle HCM Cloud インスタンスにロードする必要のあるテンプレートが提供されます。

Oracle HCM Cloud 抽出を使用して、大量のデータが Oracle HCM Cloud から抽出されます。Oracle HCM Cloud の事前定義された抽出はそれぞれ、データ統合でデータ・ソースとして定義されます。

データ統合で統合のデータ抽出部分が実行されると、事前定義された各 Oracle HCM Cloud 抽出がデータ・ソース・エンティティとして指定されます。次に、これらのデータ・ソースが Planning モジュールの要員または Strategic Workforce Planning のデータ・モデルに直接マップされます。

"EPBCS Initialize.xml"という名前のテンプレートがあります。これは、抽出テンプレートではなく、データ統合側でのテスト接続プロセスおよび初期化プロセスで使用されます。データ統合で提供されるテンプレートをすべてアップロードしない場合でも、"EPBCS Initialize.xml"はアップロードする必要があります。そうすると、データ統合で Oracle HCM Cloud システムからのコンテンツが正常に初期化され、テスト接続ステップを実行できます。


この統合の一部として提供されるメタデータ・テンプレートの説明を次に示します。

- エンティティ・データ(組織コード、組織名、使用可能な組織体系など)
- 従業員データ(個人番号、フル・ネーム、使用可能な統計情報など)
- ジョブ・データ(ジョブ・コード、ジョブ名、使用可能なジョブ体系など)
- ポジション・データ(ポジション・コード、ポジション名、使用可能なポジション体系など)
- コンポーネント・データ(等級コード、等級名など)
- 組合コード・データ(交渉団体コード、交渉団体名など)

抽出テンプレートを介して提供されるデータの説明を次に示します:

- FTE
- 給与基準
- 定義済ベースの給与レート
- 組合コード


職階の開始日を取得して、データ統合で要員アプリケーションへのロードの開始月に変換することもできます。また、他のマッピングを必要に応じてビジネス要件に合うように適用するなどして、これらの統合をカスタマイズおよび拡張することもできます。

 ノート:

ドリル・スルーとライトバックは Oracle HCM Cloud ではサポートされません。

Oracle HCM Cloud 抽出データ・ソースからデータをロードするためのステップを大まかに示します。

1. 人材管理統合スペシャリストのジョブ役割を割り当てられていることを確認します
 人材管理の抽出を管理するには、人材管理統合スペシャリストのジョブ役割が必要です。人材管理統合スペシャリスト(ジョブ役割)は、人材管理情報システムの統合に関連するすべてのアクティビティを計画、調整および監督する責任を負う個人です。
 詳細は、[人材管理統合スペシャリスト\(ジョブ役割\)](#)を参照してください。
2. データ統合で、「**アプリケーション**」オプションから要員アプリケーションに対応するアプリケーションを選択し、次に「**ディメンションの詳細**」タブで、Planning モジュールでのシード済ディメンションの分類を割り当てます。
 シード済ディメンションの分類には、「従業員」、「ジョブ」、「プロパティ」および「組合」ディメンションが含まれています。
3. 「**アプリケーション**」オプションで、「**アクション**」オプションから「**抽出のダウンロード**」をクリックして、Oracle HCM Cloud 抽出をダウンロードします。
 詳細は、[Oracle HCM Cloud 抽出のダウンロード](#)を参照してください。
 zip に含まれている抽出:
 次の Oracle HCM Cloud 抽出定義を含む **EPBCS HCM Extract.zip** ファイルが作成されます。これらのファイルは、要員アプリケーションに抽出およびロードできるデータのサブセットです。
 - EPBCS Assignment_<Release>.xdoz

 ノート:

EPBCS Assignment_<Release>.xdoz は、Oracle HCM Cloud ではなく、BI Publisher の/Custom フォルダにインポートする必要があります。

 ノート:

英語以外の文字が必要な場合は、EPBCS HCM Extract.zip ファイルをダウンロードして zip を解凍します。次に、BI Publisher ドキュメント・リポジトリに移動して、EPBCS Assignment.xdoz ファイルをインポートします。

- EPBCS Entity Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Employee Metadata_<Release>.xml

- EPBCS Position Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Location Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Job Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Initialize.xml

 **ノート:**

いずれの場合も、必ず EPBCS Initialize.xml を Oracle HCM Cloud にインポートする必要があります。

 **ノート:**

すべての抽出は、国別仕様グループなしでインポートする必要があります。つまり、国別仕様グループを空白にする必要があります。

- EPBCS Component Salary Metadata.xml
- EPBCS Assignment Data.xml
- EPBCS Account Merit Metadata.xml

データ統合からは、抽出に必要なテンプレートが、Oracle HCM Cloud アプリケーションにアップロードされるコンテンツとして出荷されます。このコンテンツは Oracle HCM Cloud でシードされないの、データ統合から提供されます。

4. zip を一時フォルダに保存します。
5. 一時フォルダに保存された Oracle HCM Cloud 抽出定義を Oracle HCM Cloud にインポートします。

詳細は、[Oracle HCM Cloud 抽出定義のインポート](#)を参照してください。

6. 「共有」 / 「顧客」 フォルダ内の BI Publisher eText テンプレートをインポートします。

このテンプレートによって、目的のフォーマットにデータが変換されます。

詳細は、[BI Publisher eText テンプレートのインポート](#)を参照してください。

7. Oracle HCM 抽出を検証して送信します。

統合を送信する前に、抽出を検証して送信する必要があります。統合では、送信されたこの抽出を使用して、実行中にデータがフェッチされます。

詳細は、次を参照してください [Oracle HCM Cloud 抽出定義の検証と送信](#)

8. 「アプリケーション」 オプションから、「接続」 オプションを選択し、Oracle HCM Cloud への接続を構成します。

詳細は、[Oracle HCM Cloud 接続の構成](#)を参照してください。


9. データ統合の「アプリケーション」 オプションで、統合で使用する個々の Oracle HCM Cloud 抽出(ソース・エンティティ)をデータ・ソース・カテゴリおよび Oracle HCM Cloud タイプで登録します。

このステップが完了すると、データ統合で次のものが作成されます:

- Oracle HCM Cloud 列を Planning モジュールのディメンションにマップするためのディメンション(インポート・フォーマット)。
- ロケーション。
- データを正しい Oracle Hyperion Workforce Planning 勘定科目にインポートするためのマッピング。

詳細は、[Oracle HCM Cloud アプリケーションの登録](#)を参照してください。

10. Oracle HCM Cloud ソース・アプリケーションとターゲットの Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの間の統合を作成します。

 **ノート:**

インポートされた各 Oracle HCM Cloud 抽出は自動的にターゲット・データ・ソース・アプリケーションとして登録されます。

11. 必要に応じて、ディメンション詳細を変更します。

Oracle HCM Cloud 抽出のすべての列は、タイプ「汎用」の EPM ターゲット・ディメンション・クラスにマップされます。

詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

 **ノート:**

ルールにより、Oracle HCM Cloud データ・ソースからデータをロードするとき、ディメンションのマッピング・ページでは、ディメンション詳細の変更、追加または削除を実行できません。

12. メンバー・マッピングは、Oracle HCM Cloud 抽出がアプリケーションとして登録される時に事前定義されます。

また、Oracle HCM Cloud 抽出では、データ・ディメンション列で Oracle HCM Cloud からインポートされた実際のデータの変換がサポートされます。

たとえば、Oracle HCM Cloud では従業員タイプは「F」(常勤従業員タイプ)や「T」(臨時従業員タイプ)が可能ですが、Planning モジュールでは同じ指定が「FULLTIME」や「TEMP」として表示されます。

13. Oracle HCM Cloud データ・ソースに関連付けられるアプリケーション・フィルタは、アプリケーションが登録される時に事前定義されます。

「ソース・フィルタ」タブで特定の基準をどれでも選択して、ロードされる結果をフィルタできます。

フィルタの詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください。

14. 統合を実行します。

詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

Oracle HCM Cloud 抽出のダウンロード

Oracle Human Capital Management Cloud との即時利用可能な統合では、Oracle HCM Cloud 抽出をダウンロードします。

データ統合により、**アプリケーション** ページで抽出定義がロードされます。これらのファイルは、抽出して **Planning** モジュールの要員ビジネス・プロセス・アプリケーションまたは **Strategic Workforce Planning** にロードできるデータのサブセットです。

Oracle HCM Cloud 抽出をダウンロードするには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページの 「**アクション**」 から、「**アプリケーション**」 を選択します。
2. 「**アクション**」 メニューから、「**HCM 抽出のダウンロード**」 を選択します。
3. 次の Oracle HCM Cloud 抽出定義を含む **EPBCS HCM Extract.zip** ファイルが作成されます。これらのファイルは、**Planning** モジュール・アプリケーションに抽出およびロードできるデータのサブセットです。
 - EPBCS Assignment_<Release>.xdoz

 **Note:**

EPBCS Assignment_<Release>.xdoz は、Oracle HCM Cloud ではなく、BI Publisher の/Custom フォルダにインポートする必要があります。

 **Note:**

英語以外の文字が必要な場合は、EPBCS HCM Extract.zip ファイルをダウンロードして zip を解凍します。次に、BI Publisher ドキュメント・リポジトリに移動して、EPBCS Assignment.xdoz ファイルをインポートします。

- EPBCS Entity Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Employee Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Position Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Location Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Job Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Initialize.xml

 **Note:**

いずれの場合も、必ず EPBCS Initialize.xml を Oracle HCM Cloud にインポートする必要があります。

 **Note:**

すべての抽出は、国別仕様グループなしでインポートする必要があります。つまり、国別仕様グループを空白にする必要があります。

- EPBCS Component Salary Metadata.xml
- EPBCS Assignment Data.xml
- EPBCS Account Merit Metadata.xml

データ統合からは、抽出に必要なテンプレートが、Oracle HCM Cloud アプリケーションにアップロードされるコンテンツとして出荷されます。このコンテンツは Oracle HCM Cloud でシードされないので、データ統合から提供されます。

4. zip を一時フォルダに保存します。

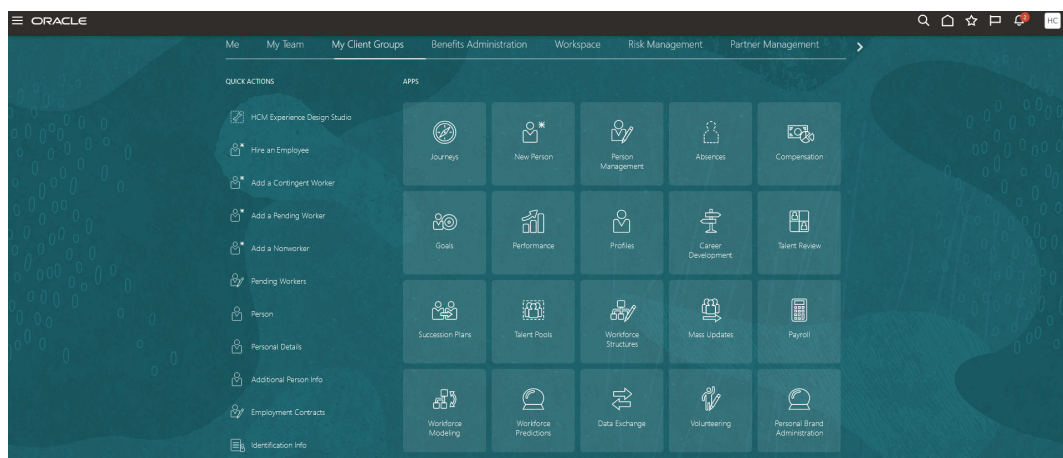
Oracle HCM Cloud 抽出定義の Oracle HCM Cloud へのインポート

Oracle Human Capital Management Cloud アプリケーションで抽出定義のシードを開始するには、Oracle HCM Cloud 抽出定義の XML ファイルと BI Publisher 電子テキスト・テンプレートの XDOZ ファイルをインポートします。ここで抽出出力はカンマ区切り値(CSV)ファイルに保存されます。CSV ファイルのフォーマットは BI Publisher レポートとして定義され、このレポート・テンプレートは Oracle HCM Cloud アプリケーションで抽出定義の一部として指定されます。

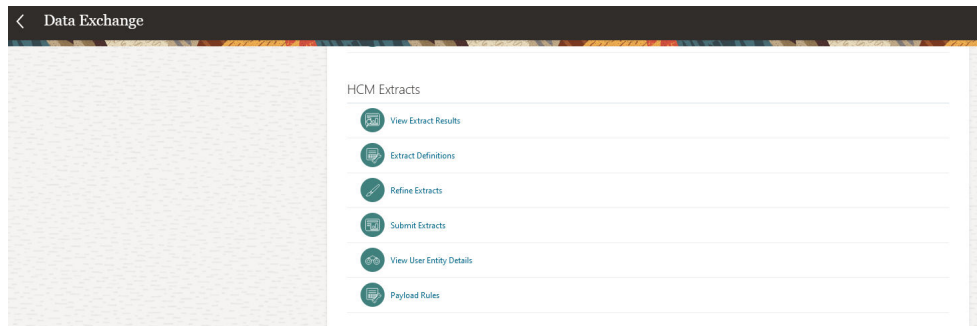
Oracle HCM Cloud 抽出定義のインポート


データ統合からエクスポートされた Oracle Human Capital Management Cloud 抽出定義をインポートするには:

1. Oracle HCM Cloud アプリケーションにログインします。
2. Fusion ナビゲーション・メニューの「自分のクライアント・グループ」から、「データ交換」アプリケーションを選択します。



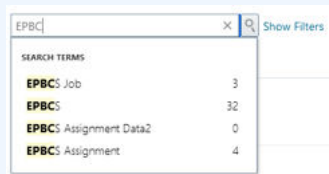
3. タスク・ページの「HCM 抽出」から、「抽出定義」を選択します。



4. **抽出定義** ページで、 Import (**「インポート」**) をクリックして、事前定義された Oracle HCM Cloud 抽出定義の XML ファイルをインポートします。

 **ノート:**

「検索」フィールドに抽出名を入力して、抽出定義名を検索できます:



5. **抽出定義のインポート** ページで、次のことを実行して、「**更新**」をクリックし、(抽出のインポートが完了したことがスロバーに示されたら) **「OK」** をクリックします:

- **抽出名**—インポートする Oracle HCM Cloud 抽出の名前を指定します。
抽出定義をインポートするとき、抽出名はファイル名の最初の名前と同じである必要があります。たとえば、"EPBCS Assignment Data_2002.xml" をインポートするとき、抽出名は "EPBCS Assignment Data_2002" と指定する必要があります。
- **国別仕様データ・グループ**—空白のままにします。
- **変更のみ**—増分変更のみを取得する抽出を作成し、完全な抽出を作成しないようにするには、このオプションを選択します。


Import Extract Definition

* Extract Name

Legislative Data Group

Changes Only

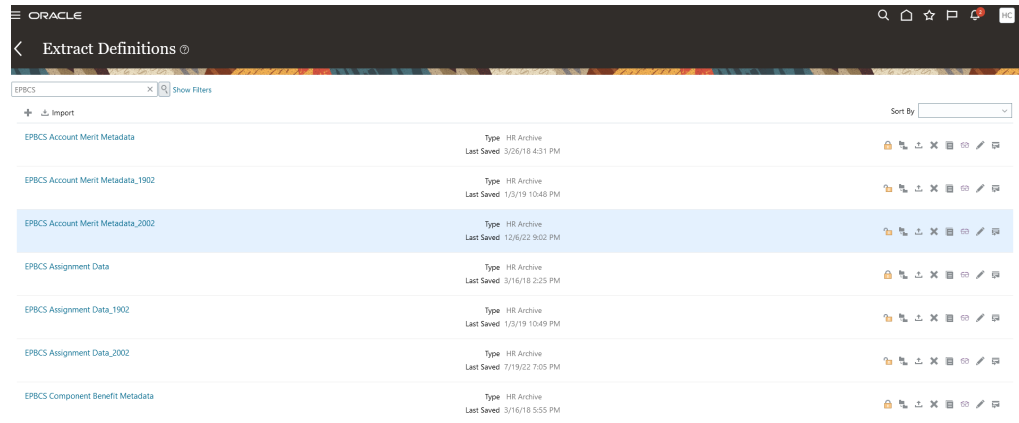
Import EPBCS Assignment Data_2002.xml



Importing Data Group: Performances

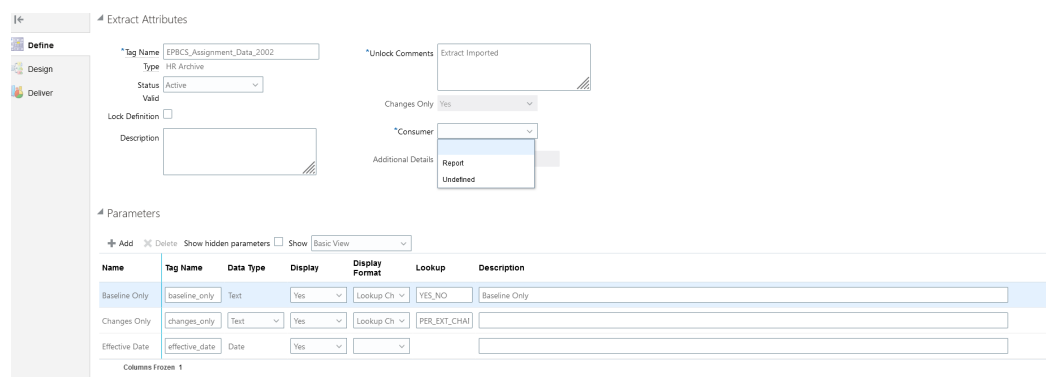
抽出定義が正常にインポートされると、確認メッセージが表示されます。確認ページからインポートのログ・ファイルをダウンロードすることもできます。

6. 事前定義されたすべての Oracle HCM Cloud 抽出定義をインポートします:
 - EPBCS 勘定科目功績メタデータ - EPBCS Account Merit Metadata_<Release>.xml
 - EPBCS 割当てデータ - EPBCS Assignment Data_<Release>.xml
 - EPBCS コンポーネント給与メタデータ - EPBCS Component Salary Metadata_<Release>.xml
 - EPBCS 従業員メタデータ - EPBCS Employee Metadata_<Release>.xml
 - EPBCS エンティティ・メタデータ - EPBCS Entity Metadata_<Release>.xml
 - EPBCS ジョブ・メタデータ - EPBCS Job Metadata_<Release>.xml
 - EPBCS ロケーション・メタデータ - EPBCS Location Metadata_<Release>.xml
 - EPBCS 職階メタデータ - EPBCS Position Metadata_<Release>.xml



インポートできるのは、Oracle HCM Cloud からロードする抽出定義か、すべての抽出(全部を使用していない場合も含む)です。ロードされた XML ファイルはすべて、すべてのファイルのロード後に検証する必要があります。

7. インポートされたそれぞれの抽出について、**抽出属性**ページで、「**コンシューマ**」から「**レポート**」を選択して、その抽出がレポート目的で使用され、データが外部アプリケーションとインタフェースされないことを指定します。それ以外の場合は、**未定義**を選択します。
8. 必要に応じて、他の属性を変更します。



Oracle HCM Cloud 抽出の詳細は、[HCM 抽出](#)を参照してください。

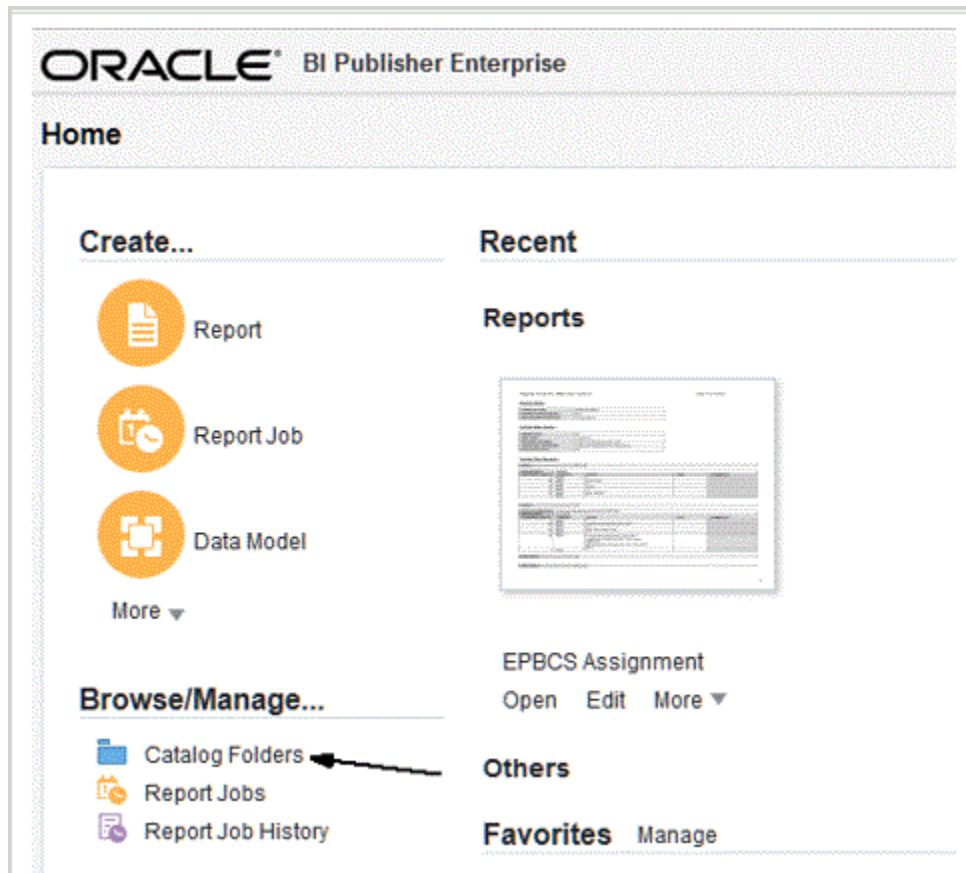
9. 「OK」をクリックします。

アプリケーションによって抽出定義が保存され、抽出のタイプに基づいてパラメータが自動的に生成されます。パラメータによって、抽出の出力が制御されます。

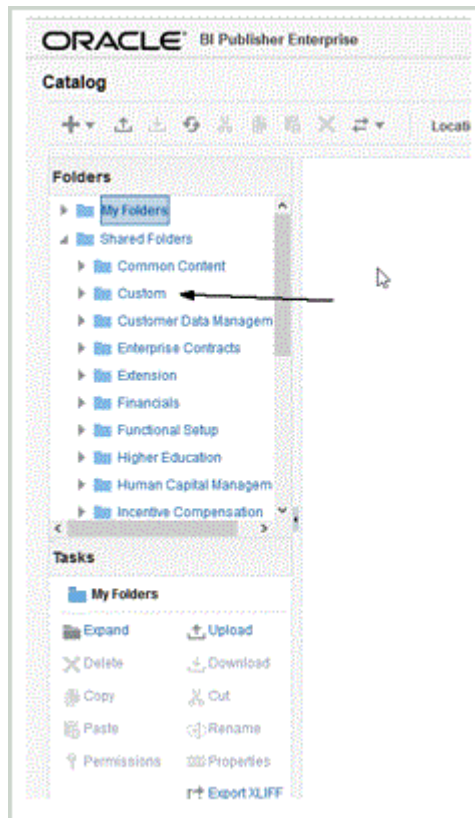
BI Publisher eText テンプレートのインポート

BI Publisher の電子テキスト・テンプレートをインポートするには:

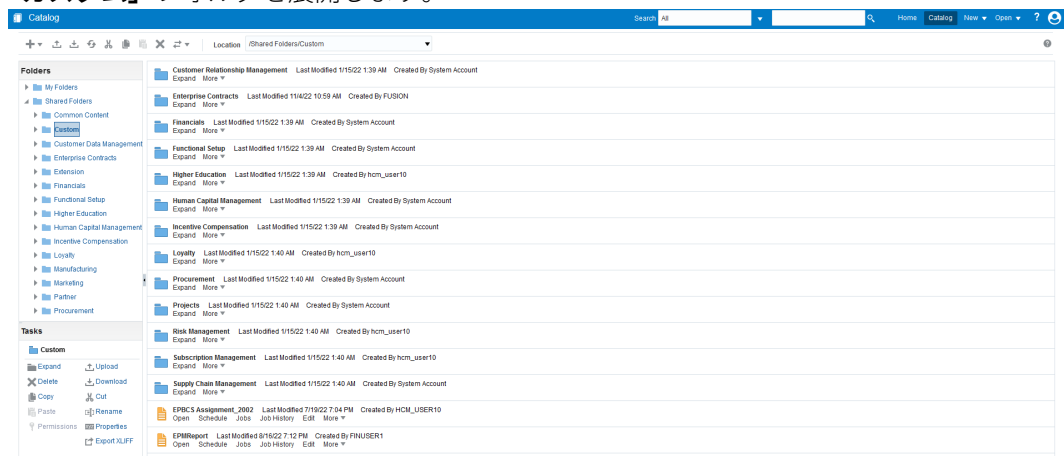
1. `https://server` というアドレスをブラウザに指定して「BI Publisher Enterprise」にログオンします。
2. 「カタログ・フォルダ」をクリックします。



3. 「カタログ」画面の「共有フォルダ」で、「カスタム」を選択します。

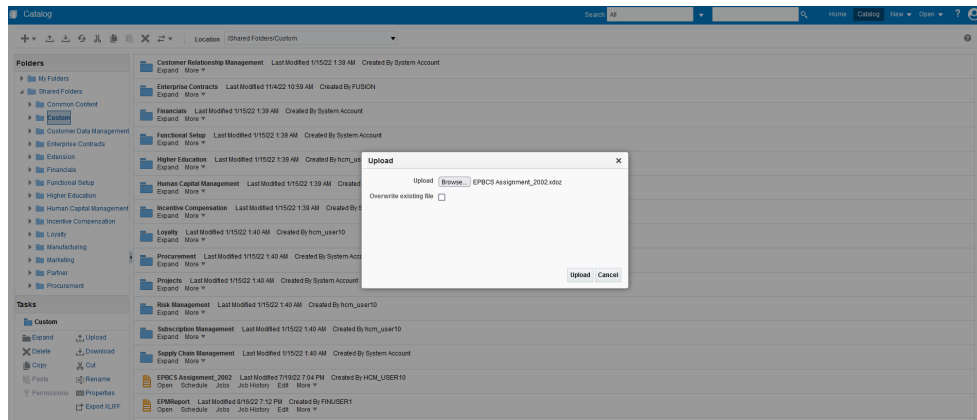


4. 「カスタム」フォルダを展開します。



5. 事前定義されたテンプレート・ファイルを参照して選択し、「アップロード」をクリックします。

たとえば、EPBCS Assignment_<Release>.xdouz テンプレート・ファイルをアップロードします。



Oracle HCM Cloud 抽出定義の検証と送信

抽出定義によって、抽出と同じ名前の抽出プロセス(給与フロー)が自動的に作成されます。抽出プロセスを使用すると、複数のタスクの実行順序(タスクの前、後など)を定義できます。HCM 抽出の調整タスクを使用して、抽出プロセスの送信パラメータを必要に応じて確認および変更できます。

抽出を検証すると、アプリケーションによって抽出設計に対する検証が実行されて、次のことが確認されます:

- ルート・データ・グループが定義されている。
- すべての非ルート・データ・グループがルート・データ・グループに直接的または間接的に(たとえば、ルート・データ・グループにリンクされている別の非ルート・データ・グループを介して)リンクされている。
- 一連のデータ・グループが定義されている場合、次のデータ・グループも処理のために定義されている。
- 抽出で使用されるすべての **FastFormula** が存在し、コンパイルされているか、有効である。
- **BI Publisher** の検証中に検出された問題がない。

検証が成功すると、アプリケーションによって抽出が有効としてマークされます。一方、検証が失敗した場合は、アプリケーションによって抽出が無効としてマークされ、抽出の送信はエラーとなります。

HCM プロセスの送信オプションを使用して、フロー・パターンを直接実行できます。

抽出を検証して送信するには:

1. **抽出定義** ページで、Oracle Human Capital Management Cloud 抽出定義をダブルクリックします。
2. **抽出属性** ページで、「**検証**」をクリックします。
3. **抽出実行ツリー** ページで、「**検証**」をクリックします。

Validation Messages
The data group hierarchy structure in the EPBCS Assignment Data_2002 extract is valid.

Export XML Schema Validate Diagnostics Refresh

Object Name	Type	XML Tag	Status
EPBCS Assignment Data_2002	Extract Defini...	EPBCS_Assi...	
Assignments	Data Group	Assignments	
performances_hierarchy	Record	performance...	
Performances	Data Group	Performances	
performances_record	Record	performance...	Fast Formula...
assignments_record	Record	assignments...	Fast Formula...
benefits_hierarchy	Record	benefits_hier...	
Benefits	Data Group	Benefits	
benefits_record	Record	benefits_record	Fast Formula...

4. FastFormula をコンパイルする必要がある場合は、FastFormula がコンパイルのために送信されたというメッセージが表示されます。必要に応じて、すべての FastFormula がコンパイルされて、「ステータス」列に緑のチェックマークが表示されるまで「リフレッシュ」をクリックします。
5. 検証メッセージ・ページで、「OK」をクリックします。
6. 検証が正常に完了した場合、メッセージは、<extract_name>抽出のデータ・グループ階層構造が有効であることを示します。
7. 「完了」をクリックします。
8. インポートされた事前定義済の Oracle HCM Cloud 抽出定義すべてについてステップ 1-7 を繰り返します:
9. 「タスク」メニューの HCM 抽出で、抽出の送信をクリックします。
10. 「検索」テキスト・ボックスに定義名の数文字を入力し、使用可能な定義のリストをインポートされた 1 つの定義に絞り込みます。
11. 抽出定義をダブルクリックし、「次」をクリックします。
12. 抽出インスタンスの送信ページで、「抽出インスタンス名」に抽出名を入力し、「有効日」に抽出の有効日を入力します。

Submit Extract Instance
EPBCS Assignment Data_2002

Submit Cancel

General Information

Extract Name
EPBCS Assignment Data_2002

Flow Name
EPBCS Assignment Data_2002

* Extract Instance Name

Criteria

* Effective Date
m/d/yy

Start Date
m/d/yy

Process Configuration Group
Select

Changes Only

Schedule

Timetable
As soon as possible



13. 「送信」をクリックして、抽出を送信します。
14. 「完了」をクリックします。

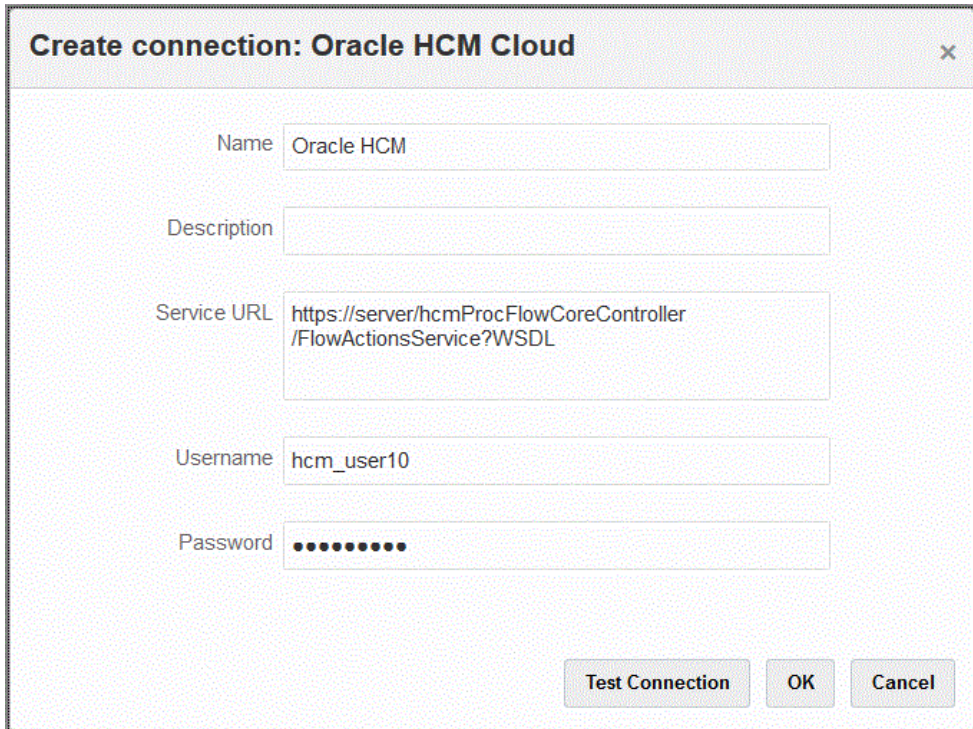
Oracle HCM Cloud 接続の構成

Oracle Human Capital Management Cloud と Planning モジュールの要員ビジネス・プロセスまたは Strategic Workforce Planning との統合を開始するには、最初にソース・システムを「Oracle HCM Cloud」タイプで作成して登録します。

ソース・システムと接続情報を指定した後、ソース・システムを初期化します。このプロセスで、各 Oracle HCM Cloud 抽出に対するターゲット・アプリケーションが作成されます。

Oracle HCM Cloud 接続を構成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (接続の構成アイコン)をクリックします。
3. 接続ページで、 (「追加」ドロップダウン・アイコン)ドロップダウンから「Oracle HCM Cloud」を選択します。



The image shows a dialog box titled "Create connection: Oracle HCM Cloud". It contains several input fields: "Name" with the value "Oracle HCM", "Description" (empty), "Service URL" with the value "https://server/hcmProcFlowCoreController/FlowActionsService?WSDL", "Username" with the value "hcm_user10", and "Password" (masked with dots). At the bottom right, there are three buttons: "Test Connection", "OK", and "Cancel".

4. 「名前」に、ソース・システム名を入力します。
5. 「説明」に、ソース・システムの説明を入力します。
6. サービス URL に、Web サービスのサービス情報を入力します。
7. 「ユーザー名」に、Oracle HCM Cloud のユーザー名を入力します。
8. 「パスワード」に、Oracle HCM Cloud のパスワードを入力します。

このパスワードは、Oracle HCM Cloud のパスワードを変更するたびに更新する必要があります。

9. 「**接続のテスト**」をクリックします。

接続が正しくテストされると、[ソース・システム名]の接続に成功しましたという情報メッセージが表示されます。

10. 「**OK**」をクリックします。

Oracle HCM Cloud アプリケーションの登録

Oracle Human Capital Management Cloud の人事データを Oracle Hyperion Workforce Planning のビジネス・プロセスと統合する場合、Oracle HCM Cloud 抽出をデータ・ソース・アプリケーション・タイプとして登録します。

データ統合で提供される即時利用可能なソリューションによって、お客様は Oracle HCM Cloud データ・モデルからの事前定義されたマッピングを適用できます。

データ統合と Oracle HCM Cloud では、データを抽出するためにユーザーが Oracle HCM Cloud インスタンスにロードする必要があるテンプレートが提供されます。

Oracle HCM Cloud 抽出を使用して、大量のデータが Oracle HCM Cloud から抽出されます。Oracle HCM Cloud の事前定義された抽出はそれぞれ、データ統合でデータ・ソースとして定義されます。


データ統合で統合のデータ抽出部分が実行される時、事前定義された各 Oracle HCM Cloud 抽出がデータ・ソース・エンティティとして指定されます。次に、これらのデータ・ソースは要員プランニングのデータ・モデルに直接マップされます。

ノート:

人材管理の抽出を管理するには、人材管理統合スペシャリストのジョブ役割が必要です。人材管理統合スペシャリスト(ジョブ役割)は、人材管理情報システムの統合に関連するすべてのアクティビティを計画、調整および監督する責任を負う個人です。

詳細は、[人材管理統合スペシャリスト\(ジョブ役割\)](#)を参照してください。

Oracle HCM Cloud アプリケーションを登録するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. 「**アプリケーションの作成**」の「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」から、「**Oracle HCM Cloud**」を選択します。
5. 「**接続**」から、Oracle HCM Cloud タイプへの接続の名前を選択します。

Oracle HCM Cloud ソース・システムを設定し、接続の構成オプションで接続情報を指定します。[Oracle HCM Cloud 接続の構成](#)を参照してください。


6. 「**ファイル**」で、データ・ソースとして登録するソース・エンティティのファイル名(XML フォーマット)を指定します。

ファイルは、受信ボックスに事前にアップロードされた Oracle HCM Cloud 抽出アプリケーション名/定義です。

7. 「OK」をクリックします。

ノート:

次のステップは、カスタム抽出を登録する場合にのみ必要です。即時利用可能な統合では、単純に前述のステップ 1-7 を実行します。

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、Workforce Planning アプリケーションの右側にある  をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
3. アプリケーション詳細ページで、Planning のシード済ディメンションの分類を割り当てます。
シード済ディメンションの分類には、「従業員」、「ジョブ」、「プロパティ」および「組合」が含まれます。
詳細は、[アプリケーションのディメンションの詳細の定義](#)を参照してください。
4. 「保存」をクリックした後、「戻る」をクリックします。

既存の Oracle HCM Cloud 抽出の更新

Oracle Human Capital Management Cloud 抽出が更新されると、新しい機能や定義が提供され、新しいファイルが作成されて、EPBCS HCM Extract.zip で提供されます。この機能を使用すると、新しい抽出定義が使用可能になり出荷された際に最新更新を取得できます。

抽出が更新されたら、データ統合の抽出定義に基づいて選択済またはすべてのターゲット・アプリケーションの既存のマッピングや定義をすべて保持できます。

新しいファイルは、ファイル名にリリース番号が示されます。たとえば、抽出がリリース 19.02 で更新された場合、抽出ファイルと名前は次のようになります。

- ファイル名 - EPBCS Assignment Data_1902.xml
- 抽出名 - EPBCS Assignment Data_1902
- XML タグ名 - EPBCS Assignment Data(リリース番号は追加されません)

 ノート:

即時利用可能なアプリケーションの新しいバージョンが Oracle から提供されると、アプリケーションを更新するために「アプリケーションの更新」ステップが提供されます。「**アプリケーションの更新**」を選択すると、即時利用可能な状態で配信される最新バージョンの XML がインポートされます。

カスタマイズや新しい属性の追加を行うには、Oracle HCM Cloud に抽出をコピーし、Oracle HCM Cloud で新しい抽出定義を作成してから編集します。続けて、XML をエクスポートし、Oracle Enterprise Performance Management Cloud で新しいアプリケーションを作成します。カスタム・アプリケーション定義の更新には「**アプリケーションの更新**」を使用しないでください。

カスタム・アプリケーション定義の更新に「アプリケーションの更新」を使用することはできません。

Oracle HCM Cloud 抽出の更新されたバージョンを選択するには:

 ノート:

次のステップでは、ソース・システムが構成され、ソース接続が定義されて EPBCS HCM Extract.zip がダウンロードされているものとします。これらのプロセスの詳細は、[Oracle HCM Cloud 抽出のダウンロード](#)を参照してください。

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、Oracle HCM Cloud アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーションの更新**」を選択します。

dim_EPBCS Employee Metadata_2002	Data Source	Oracle HCM Cloud	EPBCS Employee Metadata_2002	...
ADDEPBCS-OEP_REP	EPM Cloud	Reporting Cubes	EPBCS-OEP_REP	Application Details Edit Options Update Application
ERP Chart of Accounts	Data Source	Oracle ERP Cloud (Chart of Accounts)	ERP Chart of Accounts	

3. 「**HCM Cloud アプリケーションの更新**」で、「**選択した HCM 抽出のみまたはすべての HCM 抽出を更新しますか。**」というメッセージが表示された場合、「**すべて**」をクリックするとすべての抽出が更新され、「**選択済**」をクリックするとその抽出のみが更新されます。

Update HCM Cloud Application
✕

Do you want to update only Selected HCM Extract or All HCM Extracts?

All
Selected

Oracle HCM Cloud メタデータの統合

Oracle Human Capital Management Cloud メタデータを統合して、Planning モジュールの要員ビジネス・プロセスまたは Strategic Workforce Planning で使用できます。

データ統合は、統合メカニズムとして、次のメタデータを Oracle HCM Cloud から Planning モジュールのターゲット・アプリケーションおよびビジネス・プロセスに調整して移動できます:

- 勘定科目功績
- コンポーネント給与メタデータ
- 従業員メタデータ
- エンティティ・メタデータ
- ジョブ・メタデータ
- ロケーション・メタデータ
- 職階階層

Oracle HCM Cloud ソース・システムの初期化中、データ統合によって各メタデータ・ソースにアプリケーションが作成されます。各アプリケーションをメタデータ・アプリケーションにマップしてから、ロードを実行できます。マッピングは自動的に作成されないことに注意してください。

ノート:

事前定義された各抽出定義に属する Oracle HCM Cloud フィールドの詳細は、[Oracle HCM Cloud 抽出定義フィールドの参照](#)を参照してください。

Oracle HCM Cloud メタデータのロード

ノート:

ドリル・スルーおよびライトバックは、Oracle Human Capital Management Cloud との統合ではサポートされていません。

Oracle HCM Cloud 抽出データ・ソースからデータをロードするためのステップを大まかに示します。

1. 人材管理統合スペシャリストのジョブ役割を割り当てられていることを確認します

人材管理の抽出を管理するには、人材管理統合スペシャリストのジョブ役割が必要です。人材管理統合スペシャリスト(ジョブ役割)は、人材管理情報システムの統合に関連するすべてのアクティビティを計画、調整および監督する責任を負う個人です。

詳細は、[人材管理統合スペシャリスト\(ジョブ役割\)](#)を参照してください。

- データ統合で、「**アプリケーション**」オプションから要員アプリケーションに対応するアプリケーションを選択し、次に「**ディメンションの詳細**」タブで、Planning モジュールでのシード済ディメンションの分類を割り当てます。


シード済ディメンションの分類には、「従業員」、「ジョブ」、「プロパティ」および「組合」ディメンションが含まれています。

- アプリケーション** ページで、「**アクション**」メニューから「**HCM 抽出のダウンロード**」をクリックして Oracle HCM Cloud 抽出をダウンロードします。

詳細は、[Oracle HCM Cloud 抽出のダウンロード](#)を参照してください。

次の Oracle HCM Cloud 抽出定義を含む **EPBCS HCM Extract.zip** ファイルがダウンロードされます。これらのファイルは、要員アプリケーションに抽出およびロードできるデータのサブセットです。

- EPBCS Assignment_<Release>.xdoz

 **ノート:**

EPBCS Assignment_<Release>.xdoz は、Oracle HCM Cloud ではなく、BI Publisher の/Custom フォルダにインポートする必要があります。

 **ノート:**

英語以外の文字が必要な場合は、**EPBCS HCM Extract.zip** ファイルをダウンロードして解凍します。次に、**BI Publisher ドキュメント・リポジトリ**に移動して、**EPBCS Assignment.xdoz** ファイルをインポートします。

- EPBCS Entity Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Employee Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Position Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Location Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Job Metadata_<Release>.xml
- EPBCS Initialize.xml

 **ノート:**

いずれの場合も、常に EPBCS Initialize.xml を Oracle HCM Cloud にインポートする必要があります。

 **ノート:**

すべての抽出は、国別仕様グループなしでインポートする必要があります。つまり、国別仕様グループを空白にする必要があります。

- EPBCS Component Salary Metadata.xml
- EPBCS Assignment Data.xml
- EPBCS Account Merit Metadata.xml

データ統合からは、抽出に必要なテンプレートが、Oracle HCM Cloud アプリケーションにアップロードされるコンテンツとして出荷されます。このコンテンツは Oracle HCM Cloud でシードされないため、データ統合から提供されます。

4. zip を一時フォルダに保存します。
5. 一時フォルダに保存された Oracle HCM Cloud 抽出定義を Oracle HCM Cloud にインポートします。

詳細は、[Oracle HCM Cloud 抽出定義のインポート](#)を参照してください。

6. 「共有」 / 「顧客」 フォルダ内の BI Publisher eText テンプレートをインポートします。

このテンプレートによって、目的のフォーマットにデータが変換されます。

詳細は、[BI Publisher eText テンプレートのインポート](#)を参照してください。

7. Oracle HCM Cloud 抽出を検証して送信します。

統合を送信する前に、抽出を検証して送信する必要があります。統合では、送信されたこの抽出を使用して、実行中にデータがフェッチされます。

詳細は、次を参照してください [Oracle HCM Cloud 抽出定義の検証と送信](#)

8. **アプリケーション**・ページから、「**接続**」オプションを選択し、Oracle HCM Cloud への接続を構成します。


詳細は、次を参照してください [Oracle HCM Cloud 接続の構成](#)

9. データ統合の**アプリケーション**・ページから、統合で使用する個々の Oracle HCM Cloud 抽出(ソース・エンティティ)をデータ・ソース・カテゴリおよび Oracle HCM Cloud タイプで登録します。

このステップが完了すると、データ統合は:

- Oracle HCM Cloud 列を Planning モジュールのディメンションにマップするためのディメンション(インポート・フォーマット)を作成します。
- ロケーションを作成します。
- データを正しい Oracle Hyperion Workforce Planning 勘定科目にインポートするためのマッピングを作成します。

詳細は、[Oracle HCM Cloud アプリケーションの登録](#)を参照してください。

10. **アプリケーション**・ページで、Oracle HCM Cloud アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。

11. 「**オプション**」タブを選択します。

12. 該当するアプリケーション詳細オプションを選択し、「**保存**」をクリックします。

次のオプションがあります:

データ・ソースに関連付けられるソース・フィルタはいずれも、統合中に自動的に作成されます。「ソース・フィルタ」タブで特定の基準をどれでも選択して、ロードされる結果をフィルタできます。

Oracle HCM Cloud メタデータ・カテゴリに応じて、次のソース・フィルタが適用されます:

- 発効日 - ツリーを有効にする日付を選択します。
- 法規制データ・グループ - 法規制データ・グループは、給与および関連データをパーティション化する手段の 1 つです。企業が営業する国ごとに、少なくとも 1 つの法規制データ・グループが必要です。各法規制データ・グループには、1 つ以上の給与法定単位が関連付けられます。
- ツリー・コード—Oracle HCM Cloud 内の階層のツリー・コード(組織や職階のように階層を持つオブジェクトの場合)
- ツリー・バージョン - Oracle HCM Cloud 内の階層のツリー・バージョン
- 変更のみ - 抽出モードを制御します。有効なオプションは、「N」または「Y」です。次の表に、各種の抽出モードとその参照値、および説明を示します:

モード	参照値	説明
N	すべての属性	抽出にはすべての値が含まれます。完全な抽出が実行され、その時点での完全なデータ出力が生成されます。アーカイブされたデータは、ベースラインとして利用されません。
Y	変更された属性	この抽出実行が以前の抽出実行と比較され、ベースラインと比較(それにより増分データを特定)することにより、変更されたデータのみが表示されます。

 **ノート:**

「オプション」の「**フィルタ**」タブで前述のオプションを選択することもできます。

13. Oracle HCM Cloud ソース・アプリケーションとターゲットの Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションの間の統合を作成します。

 **ノート:**

インポートされた各 Oracle HCM Cloud 抽出は自動的にターゲット・データ・ソース・アプリケーションとして登録されます。

14. 必要に応じて、ディメンション詳細を変更します。

Oracle HCM Cloud 抽出のすべての列は、タイプ「汎用」の EPM ターゲット・ディメンション・クラスにマップされます。

詳細は、[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

 ノート:

ルールにより、Oracle HCM Cloud データ・ソースからデータをロードするとき、ディメンションのマッピング・ページでは、ディメンション詳細の変更、追加または削除を実行できません。

15. メンバー・マッピングは、Oracle HCM Cloud 抽出がアプリケーションとして登録されるときに事前定義されます。

また、Oracle HCM Cloud 抽出では、データ・ディメンション列で Oracle HCM Cloud からインポートされた実際のデータの変換がサポートされます。

たとえば、Oracle HCM Cloud では従業員タイプは「F」(常勤従業員タイプ)や「T」(臨時従業員タイプ)が可能ですが、Planning モジュールでは同じ指定が「FULLTIME」や「TEMP」として表示されます。

16. Oracle HCM Cloud データ・ソースに関連付けられるアプリケーション・フィルタは、アプリケーションが登録されるときに事前定義されます。

「ソース・フィルタ」タブで特定の基準をどれでも選択して、ロードされる結果をフィルタできます。

フィルタの詳細は、[直接統合オプションの定義](#)を参照してください。

17. 統合を実行します。

詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

Oracle HCM Cloud 抽出定義フィールドの参照

この項の各表では、事前定義された各抽出定義に属する Oracle Human Capital Management Cloud フィールドを示します。これらのフィールドは、各抽出定義から Oracle Hyperion Workforce Planning または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできるデータのサブセットです。

- [勘定科目功績抽出定義フィールド](#)
- [アサイメント抽出定義フィールド](#)
- [コンポーネント抽出定義フィールド](#)
- [従業員抽出定義フィールド](#)
- [エンティティ抽出定義フィールド](#)
- [ジョブ抽出定義フィールド](#)
- [ロケーション抽出定義フィールド](#)
- [ポジション抽出定義フィールド](#)

勘定科目功績抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできる勘定科目功績抽出定義フィールドを示します。

勘定科目功績抽出定義フィールド

抽出パフォーマンス評価の簡単な説明

抽出パフォーマンス評価の説明

アサイメント抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または **Strategic Workforce Planning** アプリケーションに抽出およびロードできるアサイメント抽出定義フィールドを示します。

アサイメント抽出定義フィールド

アサイメント交渉団体コード

アサイメント交渉団体コード名

アサイメント常勤換算値

アサイメント・フル/パートタイム

アサイメント・タイプ

アサイメント給与額

アサイメント給与ベース・コード

アサイメント給与通貨コード

アサイメント組織コード

アサイメント組織名

抽出アサイメント組織分類

個人番号

個人開始日

個人生年月日

個人性別

個人最終学歴

アサイメント・ジョブ・コード

ジョブ・ファミリー名

アサイメント等級コード

アサイメント・ポジション・コード

アサイメント番号

アサイメント・ポジション・タイプ

アサイメント・ジョブ機能コード

個人氏名

アサイメント等級名

アサイメント・ジョブ名

アサイメント事業所コード

アサイメント事業所名

アサイメント従業員カテゴリ

アサイメント雇用カテゴリ

アサイメント名

アサイメント・ポジション名

抽出アサイメント有効開始日

個人性別の意味

個人最終学歴の意味

アサイメント等級タイプ

アサイメント抽出定義フィールド

アサイメント・ビジネス・ユニット名
 アサイメント雇用主名
 アサイメント国別仕様コード
 アサイメント国別仕様名
 アサイメント GL コード組合せセグメント 1
 アサイメント GL コード組合せセグメント 2
 アサイメント GL コード組合せセグメント 2
 アサイメント GL コード組合せセグメント 3
 アサイメント GL コード組合せセグメント 4
 アサイメント GL コード組合せセグメント 5
 アサイメント GL コード組合せセグメント 6
 組織 GL コスト・センター - 会社
 組織 GL コスト・センター - コスト・センター
 抽出パフォーマンス評価の簡単な説明
 抽出パフォーマンス評価の説明
 福利厚生額
 福利厚生タイプ
 プラン - 名前
 プラン・タイプ - 名前
 年間レート値
 単位
 オプション名

コンポーネント抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできるコンポーネント抽出定義フィールドを示します。

コンポーネント抽出定義フィールド

抽出等級コード
 等級名
 抽出等級タイプ

従業員抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできる従業員抽出定義フィールドを示します。

従業員抽出定義フィールド

抽出従業員個人番号
 個人氏名
 個人生年月日
 個人企業採用日
 個人性別
 個人性別の意味

従業員抽出定義フィールド

個人最終学歴
 個人最終学歴の意味
 アサイメント従業員カテゴリ
 アサイメント従業員カテゴリの意味
 アサイメント交渉団体コード
 アサイメント交渉団体コード名
 個人名
 個人姓
 アサイメント雇用カテゴリ
 アサイメント雇用カテゴリの意味
 事業所コード

エンティティ抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできるエンティティ抽出定義フィールドを示します。

エンティティ抽出定義フィールド

抽出組織ツリー・コード
 抽出組織ツリー・バージョン名
 抽出組織ツリー距離
 抽出組織ツリーの深さ
 抽出組織ツリーはリーフ
 抽出組織ツリー・コード
 抽出組織ツリー名

ジョブ抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできるジョブ抽出定義フィールドを示します。

ジョブ抽出定義フィールド

抽出ジョブ・コード
 ジョブ名
 ジョブ・ファミリー名
 抽出ジョブ機能コード
 抽出ジョブ機能コードの意味

ロケーション抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできるジョブ抽出定義フィールドを示します。

ロケーション抽出定義フィールド

抽出事業所コード

ロケーション抽出定義フィールド

抽出事業所名
抽出事業所国
抽出事業所市区町村
抽出事業所リージョン 1
抽出事業所リージョン 2
抽出事業所リージョン 3

ポジション抽出定義フィールド

次の表に、抽出定義から要員または Strategic Workforce Planning アプリケーションに抽出およびロードできるポジション抽出定義フィールドを示します。

ポジション抽出定義フィールド

抽出ポジション・ツリー・コード
抽出ポジション・ツリー・バージョン名
抽出ポジション・ツリーの深さ
抽出ポジション・ツリー距離
抽出ポジション・ツリーはリーフ
抽出ポジション・コード
ポジション名

SAP の統合

Oracle Fusion Cloud EPM を使用すると、SAP ソース・システムと統合して、選択したビジネス・プロセスに必要なデータをロードするのが簡単になります。

次の方法を使用して、SAP から Oracle Fusion Cloud EPM にデータを統合できます：

- SAP システムからデータをファイルにエクスポートし、Oracle Fusion Cloud EPM にインポートします。
- ソース SAP データベースに直接接続するか、エージェントのスクリプト機能を使用して必要な SAP Business Application Programming Interface (BAPI) を呼び出すように EPM 統合エージェントを構成します。
- EPM 統合エージェントと JDBC ドライバを使用して、SAP の表に直接アクセスします。(直接アクセスの詳細は、SAP の契約を確認してください)。
- Oracle Integration Cloud (OIC) で使用可能な SAP アダプタを使用して統合を定義し、SAP からデータを抽出し、EPM REST API を呼び出してデータを Cloud EPM インスタンスにロードします。詳細は、*Oracle Integration 世代 2* での [SAP アダプタの使用ガイドの SAP アダプタの機能](#) を参照してください。
- SAP Open Data Protocol (Odata) へのエージェント・スクリプトの呼出し
ABAP への REST 呼出しに対する JSON または XML でのデータ戻しの許可

これらの統合方法は、ECC、S/4 HANA オンプレミス、S/4 HANA クラウドまたは SAP Business by Design などの SAP の任意のバージョンで使用できます。

JD Edwards との統合

次のいずれかの方法を使用して、選択したビジネス・プロセスの JD Edwards ソース・システム・データを簡単にロードできます:

- フラット・ファイル
 - JD Edwards チームによりデータ抽出が提供されます。
 - Oracle Enterprise Performance Management Cloud で使用するためにステージングされています。
 - EPMAutomate または REST API を使用して編成します
- EPM 統合エージェント
 - エージェントとデータ・アクセス・ドライバ(DAD)を使用します。
 - 統合例を提供する学習パスは、[Oracle Cloud Enterprise Performance Management と JD Edwards EnterpriseOne の統合](#)を参照してください
- Oracle Integration Cloud
 - JD Edward アダプタのドキュメントは、[Oracle JD Edwards EnterpriseOne アダプタの理解](#)を参照してください
 - OIC REST アダプタを使用して EPM Cloud に接続します。

Account Reconciliation データの統合

この項では、Account Reconciliation データを統合する方法について説明します。

BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクションおよび残高の統合

データ統合は統合メカニズムとしてアダプタベースのフレームワークを提供し、それによって Account Reconciliation のお客様は次のことを実行できます:

- 銀行ファイルをソース・システム(アプリケーション・タイプ「データ・ソース」で識別)として追加します。
- BAI フォーマットの銀行ファイル(Bank Administration Institute ファイル・フォーマットを使用)、SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル(SWIFT MT940 ファイル・フォーマットを使用)または CAMT.053 (Bank to Customer という XML ファイル・フォーマット)を銀行ファイル・ソース・システムと関連付け、トランザクションをステージングして Account Reconciliation ターゲット・アプリケーションにロードします。

ロケーションやメンバー・マッピングの追加などの特定のデータ統合機能は、標準のデータ統合 ワークフロー・プロセスを使用して処理されます。データ統合では、データのロードも実行されます。

- BAI フォーマットの銀行ファイル(Bank Administration Institute ファイル・フォーマットを使用)、SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイルまたは CAMT.053 を銀行ファイル・ソース・システムと関連付け、残高をステージングして Account Reconciliation ターゲット・アプリケーションにロードします。ロードされる残高は、ファイル内の各銀行口座に含まれる日末銀行残高です。

- 必要に応じてトランザクション照合データ・ソースごとにターゲット・アプリケーションを追加し、インポート・フォーマットでファイルベース・ソース・システム (BAI ファイル、SWIFTMT940 ファイルまたは CAMT.053 ファイルを含む) からトランザクション照合ターゲット・アプリケーションにディメンションをマップします。この方法で、お客様はファイル・フォーマットを使用して任意のソース・システムから簡単にデータをインポートし、それをトランザクション照合ターゲット・アプリケーションにプッシュできます。

トランザクション照合のためのターゲット・アプリケーションを作成する際は、データを正しくロードするために、「インポート・フォーマット」で、ターゲット・アプリケーションから「データ」ではなく「金額」フィールドを選択します。

BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクションの統合

銀行ファイル・データをロードする際には、銀行ファイル・ソース・システムと関連付けられたデータ・ソースを作成します。データ統合で、トランザクション照合にロードするために、BAI、SWIFT MT940 または CAMT.053 ファイル・フォーマットが CSV フォーマットに変換されます。CSV ロード・ファイルは、トランザクション照合ジョブの結果で表示できます。

BAI フォーマットの銀行ファイル・トランザクションのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数列およびヘッダーがあります。

- 勘定科目
- 金額
- トランザクション・タイプ
- 通貨
- トランザクション日
- 銀行照会
- 顧客照会
- 銀行テキスト

Swift MT940 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション・ファイルのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数列およびヘッダーがあります。

- トランザクション参照番号
- 勘定科目
- 明細番号
- 取引明細書日付
- トランザクション日
- 金額
- トランザクション・タイプ
- 顧客参照
- 銀行参照
- 銀行テキスト

- 追加情報 1
- 追加情報 2
- 追加情報 3

CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション・ファイルのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数列およびヘッダーがあります。

フィールド	説明(ISO 定義に基づく)
StatementIdentification	口座明細書を明確に識別するための一意の ID。
CreateDate	取引明細書が作成された日付。
StatementFromDate	口座明細書が発行される期間の開始日。
StatementToDate	口座明細書が発行される期間の終了日。
勘定科目	貸方エントリと借方エントリが作成される勘定科目の明確な識別。
金額	現金入力の金額。
通貨	現金入力が行われた通貨の通貨コード。
CdtDbtInd	貸方借方インジケータ
BookingDate	口座サービス機関の帳簿で仕訳が勘定科目に転記された日時。
ValueDate	貸方エントリの場合は口座所有者が資産を使用できるようになった日時、または借方エントリの場合は口座所有者が資産を使用できなくなった日時。
EntryRef	エントリの一意の参照
AccountServicerReference	口座サービス機関によってエントリを明確に識別するために割り当てられた一意の参照
DomainCode	銀行取引コードの一部。基になるトランザクションの事業領域を示します。
FamilyCode	ドメイン内のファミリーを示します。
SubFamilyCode	特定のファミリー内のサブ製品ファミリーを示します。
Proprietary	発行者が定義する、独自の形式の銀行取引コード。
ReversalIndicator	エントリが逆仕訳の結果であるかどうかを示します。この要素は、エントリが逆仕訳の結果である場合にのみ存在する必要があります。
BankTransactionIdentification	銀行間レベルでのトランザクションに関連するタスクの照合、トラッキングまたはリンクに使用できる一意の ID。
EndToEndIdentification	トランザクションを明確に識別するために、開始パーティによって割り当てられる一意の ID。
ChequeNumber	エージェントによって割り当てられる小切手の一意で明確な識別子。
InstructionIdentification	個別の指示を参照するために、指示するパーティと指示されるパーティとの間で使用できるポイント・ツー・ポイントの参照である、一意の ID。
PaymentInformationIdentification	メッセージ内で支払い情報グループを明確に識別するために、送信側パーティによって割り当てられる一意の ID。
MandateIdentification	委任を明確に識別するために、債権者によって割り当てられる一意の ID。
ClearingSystemReference	指示を明確に識別するために決済システムによって割り当てられる一意の参照。
SourceCurrency	通貨換算で金額が換算される元の通貨。
TargetCurrency	通貨換算で金額が換算された後の通貨。
UnitCurrency	通貨換算で為替レートが示される通貨。この例では、1GBP = xxxCUR、ユニット通貨は GBP です。

フィールド	説明(ISO 定義に基づく)
ExchangeRate	ある通貨から別の通貨へ金額を換算するために使用される係数。これは、ある通貨が別の通貨で購入されたときの価格を表します。 使用方法: ExchangeRate は、UnitCurrency と QuotedCurrency の間の比率を表します (ExchangeRate = UnitCurrency / QuotedCurrency)。
ContractIdentification	外国為替契約を明確に識別するための一意の ID
QuotationDate	換算レートの見積日時。
ReturnReasonCode	SWIFT 外部コードに従って、返品の原因を示します。
ReturnReasonProprietary	独自の形式で、返品の原因を示します。
Originator	返品を発行したパーティの名前。
OrgnlBkTxCdDomain	当初銀行取引コードの一部。基になるトランザクションの事業領域を示します。
OrgnlBkTxCdFamily	当初銀行取引コードのドメイン内のファミリーを示します。
OrgnlBkTxCdSubFamily	当初銀行取引コードの特定のファミリー内のサブ製品ファミリーを示します。
OrgnlBkTxCdProprietary	発行者が定義する、独自の形式での当初銀行取引コード
RemittanceInformation	売掛/未収金システムのコマーシャル・インボイスなど、支払が決済される品目とエントリを照合できるようにするために提供される、非構造化形式の情報。

Swift MT940 フォーマットの銀行ファイル・トランザクションのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数フィールドがあります。

表 17-2 Swift MT940 のフィールドおよび説明

フィールド	説明
StatementIdentification	口座明細書を明確に識別するための一意の ID。
CreateDate	取引明細書が作成された日付。
StatementFromDate	口座明細書が発行される期間の開始日。
StatementToDate	口座明細書が発行される期間の終了日。
勘定科目	貸方エントリと借方エントリが作成される勘定科目の明確な識別。
金額	現金入力金額。
通貨	現金入力が行われた通貨の通貨コード。
期末残高	
通貨	
トランザクション・タイプ	
通貨	
取引明細書日付	
account	

BAI フォーマットの銀行ファイル、SWIFT MT940 または CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション・アプリケーションを追加するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。

2. **アプリケーション**・ページで、**+**(「追加」アイコン)をクリックします。
3. 「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
4. 「**タイプ**」で、**銀行ファイル**を選択します。
5. 「**アプリケーション**」で、値のリストからアプリケーション名を選択します。

使用可能なアプリケーション・タイプは次のとおりです:

- BAI フォーマットの銀行ファイル・トランザクション
- SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション
- CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション

ノート:

BAI、SWIFT MT940、camt.053 ソース・ファイルへのデータ統合接続は、次の状況で失敗します:

- トランザクション照合で照合タイプが変更されます。
- データ・ソース ID が変わります。
- データ・ソース属性 ID が変わるか、または追加および削除されます。

この場合、データ統合でアプリケーション(ターゲット・アプリケーション全体、インポート・フォーマット、ロケーション、マッピングを含む)を再作成する必要があります。

BAI ファイルの場合、**BAI フォーマットの銀行ファイル・トランザクション**を選択します。


SWIFT MT940 ファイルの場合、**SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション**を選択します。

CAMT.053 ファイルの場合、**CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル・トランザクション**を選択します。

6. 「**接頭辞**」で、ソース・システム名を一意にする接頭辞を指定します。

追加するソース・システム名が既存のソース・システム名に基づいているときは、接頭辞を使用してください。その接頭辞が既存の名前に結合されます。たとえば、銀行ファイル・アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てます。

7. 「**OK**」をクリックします。

8. **アプリケーション**・ページで、アプリケーションの右側にある  をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。

9. 「**ディメンション**」タブを選択します。

10. 銀行ファイル・ソース・システムのディメンションを表示するには、「**ディメンションの詳細**」タブを選択します。

BAI フォーマットの銀行ファイル・トランザクション・アプリケーションのディメンション詳細を次に示します:

Application Details: dm_BAI Format Bank File Transactions Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 窓

Dimension Name	Dimension Classification
Account	Generic
Amount	Generic
Bank Ref	Generic
Bank Text	Generic
Currency	Generic
Customer Ref	Generic
Transaction Date	Generic
Transaction Type	Generic

SWIFT MT940 銀行ファイル・トランザクション・アプリケーションのディメンション詳細の例を次に示します:

Application Details: dm_Swift MT940 Format Bank File Transactions Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 窓

Dimension Name	Dimension Classification
Account	Generic
Additional Info1	Generic
Additional Info2	Generic
Additional Info3	Generic
Additional Info4	Generic
Bank Ref	Generic
Bank Text	Generic
Currency	Generic
Customer Ref	Generic
Statement Date	Generic
Statement Number	Generic


CAMT.053 銀行ファイル・トランザクション・アプリケーションのディメンション詳細の例を次に示します:



Application Details: CAMT.053 Format Bank File Transactions Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 窓

Dimension Name	Dimension Classification
Account	Generic
AccountServicerReference	Generic
Amount	Generic
BankTransactionIdentification	Generic
BookingDate	Generic
CdtDbtInd	Generic
ChequeNumber	Generic
ClearingSystemReference	Generic
ContractIdentification	Generic
CreateDate	Generic
Currency	Generic

11. 銀行ファイル・ソース・システムと Account Reconciliation ターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。
 - a. 「データ統合」ホーム・ページから、 をクリックして新規統合を追加します。
 - b. 統合の作成ページで、「名前」および「説明」に、新しい統合の名前および説明を入力します。
 - c. 「ロケーション」に、新しいロケーション名を入力するか、データのロード先である既存のロケーションを選択します。

- d. 「ソース」 () ドロップダウンから「Account Reconciliation」ソース・アプリケーションを選択します。
- e. 「ターゲット」 () ドロップダウンから、ターゲットのトランザクション照合データ・ソース・アプリケーションを選択します。
- f. 「カテゴリ」から、適切な通貨バケットを選択します。通常は、プロファイルで有効になっている最下位の通貨バケットです。

 ノート:

カテゴリ・マッピングはトランザクション照合トランザクションに関連していませんが、双方ともデータ統合には必要です。

- g. オプション: 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。

Edit Integration: > TM BAI 0628 TRX Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

* Name > TM BAI 0628 TRX * Location TM BAI Bank TRX


Description BAI 0628-5580024780 Quick Mode

Source
TM_BAI FORMAT BANK FILE

Target
TM_BANK:BANK

* Category Entered

▶ Location Attributes


12. 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ディメンションのマッピング」を選択します。
13. ディメンションのマッピング・ページで、次の手順を実行します:
 - a. 「インポート・フォーマット」で、統合に使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
 - b. マッピング・グリッドで、ソースのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。

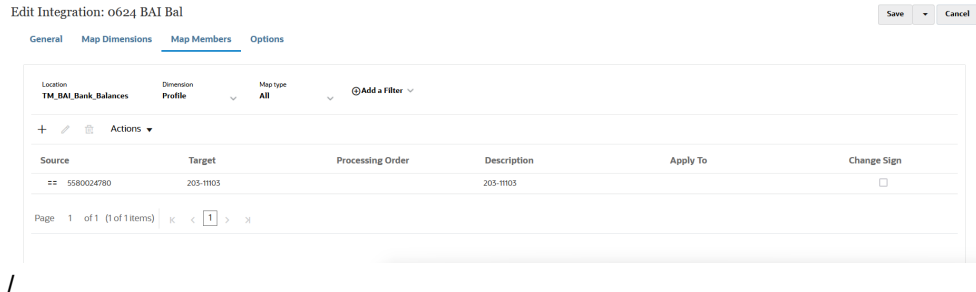
 ノート:

すべてのトランザクション照合ファイルには、対応するトランザクション照合プロファイルにマップする照合 ID ディメンションが必要です。

ターゲット・アプリケーションのディメンションが自動的に移入されます。

統合に対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。

14. 「データ統合」 ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
15. マップ・メンバー・ページで、ソースからターゲットにメンバーをマップするためのメンバー・マッピングを定義します。




 ノート:


BAI コード 100-399 は銀行貸方(正数)用、400-699 は銀行借方(負数)用です。

699 よりも大きい銀行固有の BAI コードは、データ統合ではデフォルトで銀行貸方(正数)として扱われます。この範囲の特定のコードを銀行借方(負数)として扱う必要がある場合は、SQL マッピング(SQL を参照)を使用して、次の例にあるように、金額を負数として更新します。

```
AMOUNTX=
CASE
  WHEN UD7 = '868' THEN AMOUNT*-1
  ELSE AMOUNT
END
```

 ノート:

すべてのトランザクション照合ファイルには、対応するトランザクション照合プロファイルにマップする照合 ID ディメンションが必要です。

16. 「データ統合」 ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「ワークベンチ」を選択します。
17. 「ワークベンチ」で、統合を実行してデータのテストおよび検証を行い、ロードが適切に実行されていることおよびデータが正しいことを確認します。データ統合でデータを変換し、Account Reconciliation で使用できるようステージングします。ワークベンチの使用の詳細は、[統合の実行](#) を参照してください

BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高の統合

銀行残高をロードする際には、銀行ファイル・ソース・システムと関連付けられたデータ・ソースを作成します。データ統合では、BAI、SWIFT MT940 および CAMT.053 ファイル・フォーマットから各口座の日末残高を取得して、Account Reconciliation でサブシステム残高としてロードできるようにします。

BAI フォーマットの銀行ファイル残高ファイルのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数列およびヘッダーがあります。

- 期末残高
- 通貨
- トランザクション・タイプ
- 通貨
- 取引明細書日付
- 勘定科目

Swift MT940 フォーマットの銀行ファイル残高ファイルのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数列およびヘッダーがあります。

- 期末残高
- 通貨
- トランザクション・タイプ
- 通貨
- 取引明細書日付
- 勘定科目

CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高ファイルのソース・アプリケーションには、あらかじめ定義された次の定数列およびヘッダーがあります。

- 勘定科目
- 期末残高
- 通貨
- 現日付
- CdtDbtInd

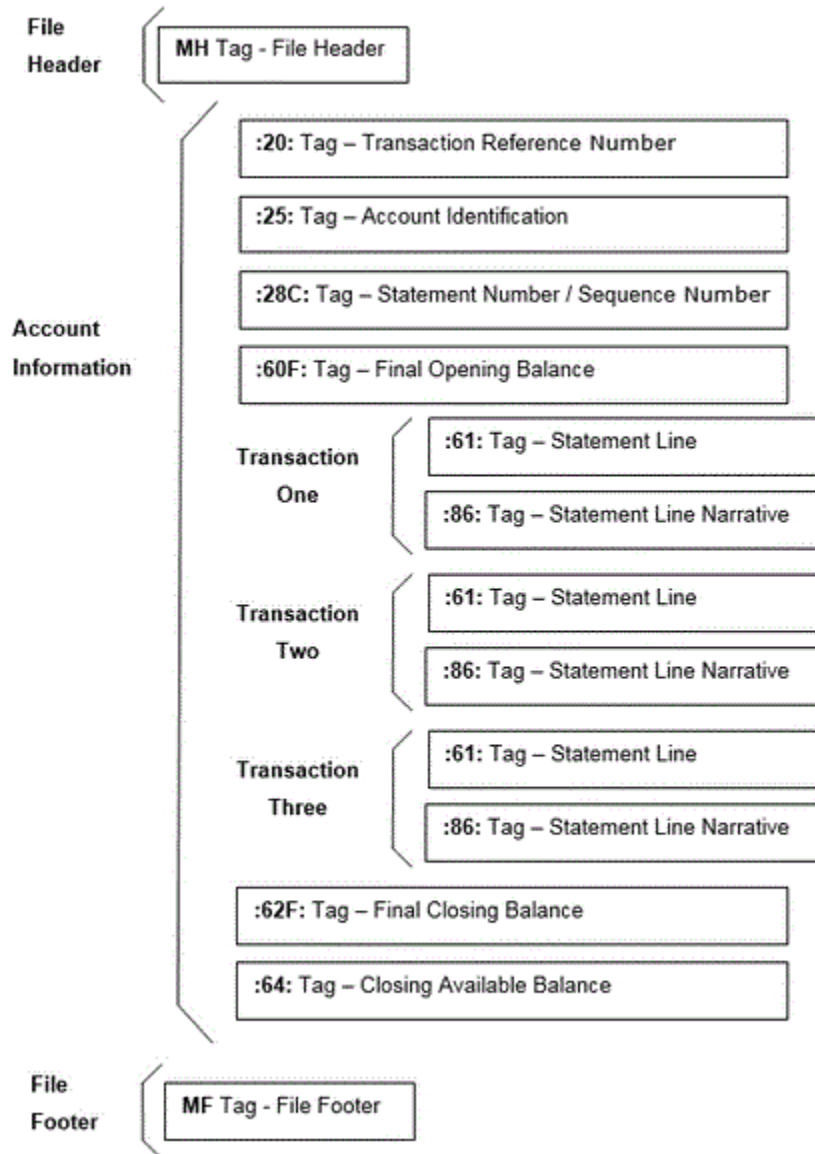
BAI フォーマットの銀行ファイル、SWIFT MT940 または CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高ソース・システムを追加するには:

1. BAI フォーマットの銀行ファイル、SWIFT MT940 または CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高ファイルを CSV フォーマット・ファイルとして保存します。
2. ターゲット・アプリケーションを登録するとき、ファイル・ブラウザを使用してファイルをアップロードします。

次に、BAI フォーマットの銀行ファイル残高ファイルを示します:

```
01,JSLTEST,JSLTEST,150828,1353,004,80,,2/  
02,JSLTEST,JSLTEST,1,150827,1435,USD,2/  
03,9000000009124,USD,010,00000006850000,,/  
88,015,00000008430000,,/  
88,100,00000004190000,,/  
88,400,00000002610000,,/  
16,354,004000000,,KB0075 IMG8650153019,,Int Inc  
16,654,000100000,,KB0075 IMG8650153019,,Int exp  
16,116,100000,,KB0075 IMG8650153019,1800000040,check(s) In,/  
88,rcode056,invoice number, text info,/  
16,116,90000,,KB0075 IMG8650153019,1800000041,check(s) In,/  
16,698,0010000,,KB0075 IMG8650153019,,Bank Fee  
16,475,1000000,,KB0075 IMG8650153019,100007,check(s) Paid  
16,475,1100000,,KB0075 IMG8650153019,100008,check(s) Paid  
16,469,4000000,,20150840796815,/  
49,0000000000010000,000007/  
98,0000000000010000,00001,000009/  
99,0000000000010000,00001,000011/
```

次に、SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル残高ファイルを示します:



3. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
4. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
5. 「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
6. 「タイプ」で、**銀行ファイル**を選択します。
7. 「アプリケーション」で、値のリストからアプリケーション名を選択します。
使用可能なアプリケーション・タイプは次のとおりです：
 - BAI フォーマットの銀行ファイル残高
 - SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル残高
 - CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高

Create Application ✕

Category Data Source ▼

Type Bank file ▼

Application BAI Format Bank File Balances ▼

Prefix

BAI Format Bank File Balances

BAI Format Bank File Transactions

Swift MT940 Format Bank File Balances

Swift MT940 Format Bank File Transactions

CAMT.053 Format Bank File Balances

OK
Cancel

SWIFT MT940 ファイルの場合、**SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル残高**を選択します。

CAMT.053 ファイルの場合、**CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高**を選択します。

8. 「**接頭辞**」で、ソース・システム名を一意にする接頭辞を指定します。

追加するソース・システム名が既存のソース・システム名に基づいているときは、接頭辞を使用してください。その接頭辞が既存の名前に結合されます。たとえば、銀行ファイル・アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てます。

9. 「**OK**」をクリックします。

10. **アプリケーション**・ページで、アプリケーションの右側にある ... をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。

11. 「**ディメンション**」タブを選択します。

12. 銀行ファイル・ソース・システムのディメンションを追加または変更するには、「**ディメンションの詳細**」タブを選択します。

銀行ファイル・アプリケーションのディメンション詳細を次に示します。

13. BAI フォーマットの銀行ファイル残高ファイル・ソース・システムのディメンションを追加または変更するには、「**ディメンションの詳細**」タブを選択します。

BAI フォーマットの銀行ファイル残高ファイル・アプリケーションのディメンション詳細を次に示します:

Application Details: TM_BAI FORMAT BANK FILE BALANCES

Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 設定

Dimension Name	Dimension Classification
Account	Generic
Closing Balance	Generic
Currency	Generic
Statement Date	Generic
Transaction Type	Generic

SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル残高アプリケーションのディメンション詳細を次に示します:

Application Details: dm_Swift MT940 Format Bank File Balances

Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 設定

Dimension Name	Dimension Classification
Account	Generic
Closing Balance	Generic
Currency	Generic
Statement Date	Generic
Transaction Type	Generic

CAMT.053 フォーマットの銀行ファイル残高アプリケーションのディメンション詳細を次に示します:

Application Details: dm_CAMT.053 Format Bank File Balances

Save

Dimensions Options Set Defaults

+ 設定


Dimension Name	Dimension Classification
Account	Generic
AsOfDate	Generic
CdtDbtInd	Generic
ClosingBalance	Generic
Currency	Generic


- ターゲット・アプリケーションで定義されていない各ディメンションを選択し、「**ディメンションの分類**」ドロップダウンからターゲット・ディメンション・クラスを選択します。

ディメンション・クラスは、ディメンション・タイプによって定義されるプロパティです。

- 「**保存**」をクリックします。

- インポート・フォーマットを作成することにより、BAI フォーマットの銀行ファイル残高ソース・システムと Account Reconciliation ターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。

- 統合の作成** ページで、「**名前**」および「**説明**」に、新しい統合の名前および説明を入力します。
- 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
- 「**ソース**」 () ドロップダウンから「Account Reconciliation」ソース・アプリケーションを選択します。


- d. 「ターゲット」() ドロップダウンで、ターゲットの照合コンプライアンス残高アプリケーションを選択します。
- e. 「カテゴリ」で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。
- f. オプション: 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、[ロケーションの属性の選択](#)を参照してください。

Edit Integration: > EBS Save Cancel


General **Map Dimensions** Map Members Options

Import Format: EBS Source Drill URL: https://hostname:port/OA_HTML/RF...

Type: Delimited - Numeric Data Delimiter: Comma

EBS Source  Reconciliation Compliance Balances

1	Account ID	Profile	⊙
3	Amount	Amount	⊙
4	CCID	Attribute1	⊙
5	Currency	Currency	⊙
1	Account	Account	⊙
2	Entity	Company	⊙
Column	Add Source Dimension	Source Type	⊙

17. 「データ統合」 ホーム・ページから、 をクリックして「ディメンションのマッピング」を選択します。
18. **ディメンションのマッピング**・ページで、インポート・フォーマットを作成することにより、BAI フォーマットの銀行ファイル残高ソース・システムと照合コンプライアンス残高ターゲット・アプリケーション間の統合マッピングを設定します。
 - a. 「インポート・フォーマット」で、統合に使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
 - b. マッピング・グリッドで、ソースのソース列を照合コンプライアンス残高プロファイルのディメンションにマッピングします。

 **ノート:**

すべてのトランザクション照合ファイルでは、照合 ID ディメンションが対応するトランザクション照合プロファイルにマッピングされている必要があります。

ターゲット・アプリケーションのディメンションが自動的に移入されます。

統合に対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。

BAI フォーマットの銀行ファイル残高アプリケーションのインポート・フォーマットの例を次に示します:

Edit Integration: 0624 BAI Bal

General **Map Dimensions** Map Members Options

Import Format: TM_BAI_Bank_Balances
Type: Delimited - Numeric Data
Drill URL:
Delimiter: Comma

TM_BAI FORMAT BANK FILE BALANCES → Account Reconciliation Manager

Account	▼	Profile	⊗
Closing Balance	▼	Amount	⊗
Currency	▼	Currency	⊗
Transaction Type	▼	Source Type	⊗
Account	▼	Account	⊗
Select Source Dimension	▼	Company	⊗

SWIFT MT940 フォーマットの銀行ファイル残高アプリケーションのインポート・フォーマットの例を次に示します:

Edit Integration: Swift MT940

< Back Save And Continue > Save Cancel

General **Map Dimensions** Map Members Options

Import Format: Swift MT940
Type: Delimited - Numeric Data
Drill URL:
Delimiter: Comma

dm_Swift MT940 Format Bank File Balances → Account Reconciliation Manager

Account	▼	Account	⊗
Closing Balance	▼	Amount	⊗
Select Source Dimension	▼	Company	⊗
Select Source Dimension	▼	Profile	⊗
Select Source Dimension	▼	Source Type	⊗

- 「データ統合」ホーム・ページから、******* をクリックして「マップ・メンバー」を選択します。
- マップ・メンバー・ページで、ファイル内の勘定科目番号を適切な照合名にマップします。

Edit Integration: 0624 BAI Bal

General Map Dimensions **Map Members** Options

Location: TM_BAI_Bank_Balances Dimension: Profile Map type: All ⊕ Add a Filter

+ Actions

Source	Target	Processing Order	Description	Apply To	Change Sign
== 5580024780	205-1103		205-1103		<input type="checkbox"/>

Page 1 of 1 (1 of 1 items) < > 1 >

ノート:

すべてのトランザクション照合ファイルには、対応するトランザクション照合プロファイルにマップする照合 ID ディメンションが必要です。

- 「データ統合」ホーム・ページから、統合の右側にある ******* をクリックし、「オプション」を選択します。
- 「フィルタ」タブを選択します。

23. ソース・タイプ・ディメンション **Source type ***をハードコードされた「source system」ターゲット値にマップして、「保存」をクリックします。

Edit Integration: 0624 BAI Bal Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options

Filters	Options	
Name	Condition	Value
Source File	==	24-203-11103 Bank File.bai

24. 「オプション」タブをクリックし、「カテゴリ」で必要なカテゴリを指定します。
デフォルトのカテゴリには次のものがあります:

- レポート
- 機能
- 入力済

通常は、銀行残高は「入力済」にロードされますが、要件によっては、「機能」または「レポート」を選択できます。

25. 「期間マッピング・タイプ」で、「デフォルト」を選択します

「デフォルト」が選択されている場合、期間マッピングは、期間キーに基づくアプリケーションまたはグローバル期間マッピングを使用した、ソース・アプリケーション期間のリストにデフォルト設定されています。ソース期間のリストは、年および期間フィルタとして追加されます。

Edit Integration: 0624 BAI Bal Save Cancel

General Map Dimensions Map Members Options


Filters Options

General Option

Category: Functional

Period Mapping Type: Default

Calendar:

26. 「保存」をクリックします。
27. 「ワークフロー」タブを選択し、「データ・ロード」で、「データ・ロード・ルール」を選択します。
28. Account Reconciliation のホーム・ページに移動します。
29. 「アプリケーション」、「構成」、「データ・ロード」の順にクリックします。
30. 統合定義を作成します。
31. 「アプリケーション」を選択し、「期間」を選択して、残高をインポートします。
32.  をクリックしてアクション・メニューに移動してから、「データのインポート」をクリックします。
33. +をクリックし、「新規データ・ロードの実行」から、「保存済データ・ロードを使用します。」を選択して、前の手順で作成したデータ・ロードを選択します。
34. 「OK」をクリックして、銀行ファイルから残高をインポートします。

銀行残高は通常、サブシステム残高としてロードされますが、必要に応じてソース残高としてロードすることもできます。

照合コンプライアンス残高のロード

Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスと照合コンプライアンス残高ターゲット・アプリケーションの間の統合メカニズムとして、データ統合を使用します。勘定科目残高を照合に割り当てるマッピング・ルールを設定し、残高がインポートされると、このルールに基づいて正しい照合に表示されるようにすることができます。

照合コンプライアンス残高のロード・プロセスの説明


次に、データ統合を使用して照合コンプライアンス残高を Account Reconciliation にロードする方法をおおまかに示します。

データ統合で照合コンプライアンス残高のロードを設定するには:

1. 照合コンプライアンス残高アプリケーションを作成します。
[照合コンプライアンス残高アプリケーションの登録](#)を参照してください。
2. ソース照合コンプライアンス残高ソースまたはファイルとターゲット照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーション間の統合を作成します。
統合を作成するときに、ロケーション情報も指定します。
[照合コンプライアンス残高統合の作成](#)を参照してください。
3. インポート・フォーマットを作成することにより、ソース・ファイルと照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションのディメンション間でディメンションをマップします。
[ディメンションへの照合コンプライアンス残高属性のマッピング](#)を参照してください。
4. 「データ」ディメンションをマップして、ロード中にソースからターゲットへのデータの交差のペアを作成するためのマッピングをシステムが作成できるようにします。
メンバー・マッピングは照合コンプライアンス残高では使用されませんが、データ統合には必要です。
[照合コンプライアンス残高のデータ・メンバーのマッピング](#)を参照してください。
5. 統合を実行します。
[照合コンプライアンス残高統合の実行](#)を参照してください。

照合コンプライアンス残高アプリケーションの登録

「EPM ローカル」カテゴリとアプリケーション・タイプとして「照合コンプライアンス残高」を選択して、照合コンプライアンス残高アプリケーションを登録します。

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、 (「追加」アイコン)をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「EPM ローカル」を選択します。
4. 「タイプ」で、「照合コンプライアンス残高」を選択します。

Create Application ×


Category

Application

5. 「OK」をクリックします。

照合コンプライアンス残高統合の作成


統合を作成して、ソース・システムおよびサブ・システム・データ・ソースとしてインポートされた残高を照合コンプライアンス・ターゲット・アプリケーションにロードできます。

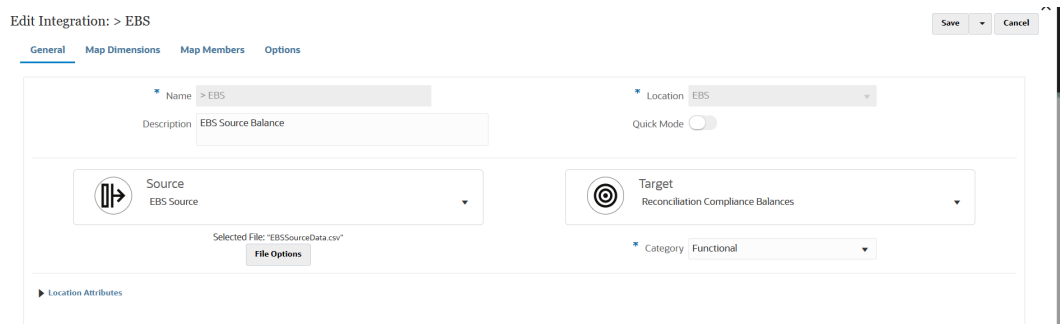
1. 「**データ統合**」 ホーム・ページで、**+** をクリックし、「**統合**」を選択します。
「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。
2. 「**名前**」および「**説明**」に、照合コンプライアンス残高統合の名前および説明を入力します。
3. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
4.  (ソースの選択)をクリックします。
5. 「**ソースの選択**」ページから、「**ファイル**」をクリックします。
6. 「**ファイル・ブラウザ**」で、照合コンプライアンス残高アプリケーションにデータをロードする元のトランザクション・ファイルを選択し、「**OK**」をクリックします。
「**受信ボックス**」または「**送信ボックス**」フォルダ、あるいは他の任意のフォルダをダブルクリックすると、フォルダ内のファイルのリストが表示されます。
また、「**アップロード**」をクリックし、ファイルに移動してアップロードすることもできます。

オプションで、ファイルベース・ロードを作成し、実行時にロードされるファイルを指定することもできます。ただし、列番号と列名は、ディメンションをマッピングするときのみ指定します。[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

次のファイル・タイプを選択できます。

- カンマ区切りファイル(CSV)
- タブ区切りファイル(TXT)
- カスタム区切りファイル

7.  (ターゲットの選択)をクリックします。
8. **ターゲットの選択**ページで、照合コンプライアンス残高ターゲット・アプリケーションを選択します。
9. **「保存」** をクリックします。




ディメンションへの照合コンプライアンス残高属性のマッピング

照合コンプライアンス残高ターゲット・アプリケーションをマップすると、そのアプリケーションのディメンションの詳細がディメンションのマッピング・ページに自動的に移入されます。

ディメンション名は、Account Reconciliation の属性名と正確に一致している必要があります。ディメンションが標準属性のものである場合、その名前は、ここで指定したとおりである必要があります、変更しないでください。

デフォルトでは、「プロファイル」は「勘定科目」(照合勘定科目 ID)ターゲット・ディメンション・クラスにマップされ、「期間」は「期間」ターゲット・ディメンション・クラスにマップされています。

照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションのディメンションの詳細を定義するには:

1. **「データ統合」** ホーム・ページで、照合コンプライアンス残高統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. **「インポート・フォーマット」** から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. **「タイプ」** で、「**区切り - すべてのデータ型**」を選択します。

「区切り - すべてのデータ型」を使用すると、区切りファイル・フォーマットからすべてのデータ型をロードできます。



4. 「区切り文字」から、出力ファイルの列の区切りに使用する文字を選択します。
区切りファイルには 1 つ以上のレコードが含まれ、指定した区切り文字で各レコードの間隔が設定されます。
使用可能なオプション:
 - カンマ(,)
 - パイプ(|)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - タブ
 - チルダ(~)
5. マッピング・グリッドで、ソース・データロード・ファイルのソース列を適切な照合コンプライアンス残高名にマッピングします。
ファイルに対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。
6. 「保存」をクリックします。

照合コンプライアンス残高のデータ・メンバーのマッピング

システムがターゲット値を作成できるようにするために、「データ」ディメンションにはメンバー・マッピングが必要です。

データ統合での要件として、システムでは、統合の実行時にソースからターゲットへのデータの交差のペアを作成するためのメンバー・マッピングを作成します。

「データ」ディメンションのメンバー・マッピングを作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページで、照合コンプライアンス・トランザクション統合の右側にある  をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2. マップ・メンバー・ページの「ディメンション」ドロップダウンで、「データ」を選択します。
3. 「マップ・タイプ」ドロップダウンで、「明示」を選択します。
4.  をクリックします
5. メンバー・マッピングの追加ページの「ソース値」に、*(アスタリスク)を入力します。
アスタリスク(*)は、ソース値を表します。
6. 「ターゲット値」に、トランザクション・タイプのタイプへの参照を入力します。
たとえば、マッピングを「残高の説明」として識別するには、**BEX** と入力できます。
7. 「保存」をクリックします。

照合コンプライアンス残高統合の実行

照合コンプライアンス残高ターゲット・アプリケーションを含む統合をデータ統合で実行すると、データ統合によってソースからデータがインポートされ、ステージングされます。続いて、データ統合によって、Account Reconciliation の事前マップ済トランザクション・インポート・ファイルと同じフォーマットの .CSV ファイルが生成され、インポートするジョブが Account Reconciliation に送信されることにより、データが Account Reconciliation にエクスポートされます。以前にデータ統合からロードされていた残高は上書きされます。

照合コンプライアンス残高ターゲット・アプリケーションにデータをロードするには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページで、照合コンプライアンス残高統合を選択し、▶ をクリックします。
2. 「**インポート・モード**」から、データをインポートする方法を選択します。

使用可能なインポート・モード:

- **追加** - POV の既存の行は変更されず、新しい行が POV に追加されます。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 50 行が含まれるとします。この場合、50 行が追加されます。このロードの後で、POV の行の合計は 150 です。
- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行が TDATASSEG にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。
- **マージ** - (Account Reconciliation のみ)。変更された残高を同じロケーションの既存のデータとマージします。

マージ・モードにより、データが Account Reconciliation に最後にロードされたとき以降に変更された残高が少数である場合に、データ・ファイル全体をロードする必要がなくなります。2 つのロード間でマッピングが変更された場合、お客様は完全なデータ・セットをリロードする必要があります。

たとえば、あるお客様では、1 つの番号の勘定科目 ID に対して 100 行の既存の残高があり、それぞれの金額は \$100.00 です。このお客様がマージ・モードで統合を実行し、ソースには 1 つの勘定科目 ID に対する金額が \$80 の 1 行がある場合、統合の実行後は、100 行の残高があり、そのうちの 99 それぞれの残高は \$100.00、1 つの残高は \$80.00 です。


- **インポートしない** - データのインポートを全部スキップします。
 - **マップして検証** - データのインポートをスキップし、更新されたマッピングを使用してデータを再処理します。
3. 「**エクスポート・モード**」から、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートする方法を選択します。

使用可能なエクスポート・モード・オプション:

- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行がステージング表にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。
- **エクスポートしない** - データのエクスポートを全部スキップします。


4. ソース・システムがファイル・ベースの場合は、「**ファイル名**」で、ロード対象のデータが含まれるデータ・ファイル名を選択します。

ファイル名を指定した場合、「**ルールの実行**」ウィンドウで単一の期間に対してデータを入力する必要があります。

ファイルに移動するには、をクリックします。

5. 「**開始期間**」および「**終了期間**」から、照合コンプライアンス・トランザクションについて定義されている期間を選択します。
6. 「**実行**」をクリックします。

Run Integration: > EBS

Import Mode	Replace	▼
Export Mode	No Export	▼
Start Period	Jun 22	▼ Ⓜ
End Period	Jun 22	▼ Ⓜ
File	EBSSourceData.csv	

Cancel Run

7. Account Reconciliation で、照合の準備をします。

照合コンプライアンス・トランザクションのロード

「データ統合」の統合メカニズムにより、Account Reconciliation のお客様は、照合コンプライアンス・トランザクションを照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションにロードできます。次の照合コンプライアンス・トランザクションをロードできます:

- 残高の説明
- ソース・システムの調整
- サブシステムの調整
- 差異の説明

照合コンプライアンス・トランザクションのロード・プロセスの説明

次に、データ統合を使用して照合コンプライアンス・トランザクションを Account Reconciliation にロードする方法をおおまかに示します。

 **Note:**

データ統合を使用してトランザクションをロードするときのベスト・プラクティスとして、**Account Reconciliation** で総勘定元帳や補助元帳を複製しないことをお勧めします。ERP からのロード・アクティビティは、期末照合のベスト・プラクティスではありません。100 件を超えるトランザクションをロードする必要がある場合、実装担当者は、お客様の要件について理解を深めるために、より多く質問する必要があります。レビュー担当者にとって、期末照合のために多数のトランザクションをレビューすることは困難です。トランザクションがより多い使用事例では、照合コンプライアンスではなく、トランザクション照合が適しています。

データ統合で照合コンプライアンス・トランザクションのロードを設定するには:

1. 照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションを作成します。
[照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
2. ソースおよび照合コンプライアンス・トランザクション・ファイルとターゲット照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーション間の統合を作成します。
統合を作成するときに、ロケーション情報も指定します。
[照合コンプライアンス・トランザクション統合の作成](#)を参照してください。
3. インポート・フォーマットを作成することにより、ソース・ファイルと照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションのディメンション間でディメンションをマップします。
[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。
ディメンションをマップするときには、「データ」ディメンションが必要です。「数値データ」ではなく「すべてのデータ型」を指定する必要があります(たとえば、「区切り - 数値データ」)。
4. 「データ」および「プロファイル」ディメンションをマップして、ロード中にソースからターゲットへのデータの交差のペアを作成するためのマッピングをシステムが作成できるようにします。
他のディメンションについては、ほとんどの属性が **ATTR** ターゲット・ディメンション・クラスにマップされている場合、メンバーのマッピングは必要ありません。ただし、**UD** にマップされている場合は必要です。
[照合コンプライアンス・トランザクションのデータ・メンバーのマッピング](#)を参照してください。
5. 統合を実行します。
[照合コンプライアンス・トランザクション統合の実行](#)を参照してください。

照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションの登録

「データ・エクスポート」カテゴリとアプリケーション・タイプとして照合コンプライアンス・トランザクションを選択して照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションを登録し、アプリケーション名を選択します。

照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションを追加するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「データ・エクスポート」を選択します。
4. 「タイプ」で、**照合コンプライアンス・トランザクション**を選択します。
5. 「アプリケーション」で、**照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーション・トランザクション・タイプ**を選択します。

「アプリケーション名」は、次のトランザクション・タイプを含むドロップダウン・リストです:

- 残高の説明
- ソース・システムの調整
- サブシステムの調整
- 差異の説明

Create Application
✕

Category

Type

Application

Prefix

6. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します(オプション)。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
7. 「OK」をクリックします。

照合コンプライアンス・トランザクション統合の作成

統合を作成して、ファイルから照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションに照合コンプライアンス・トランザクションをロードできます。

1. 「データ統合」 ホーム・ページで、**+** をクリックし、「統合」 を選択します。
「統合の作成」 ビューに、全般ページが表示されます。
2. 「名前」 および 「説明」 に、照合コンプライアンス・トランザクション統合の名前および説明を入力します。
3. 「ロケーション」 に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。

4.  (ソースの選択) をクリックします。

5. 「ソースの選択」 ページから、「ファイル」 をクリックします。

6. 「ファイル・ブラウザ」 で、照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションにロードする元のトランザクション・ファイルを選択し、「OK」 をクリックします。

「受信ボックス」 または 「送信ボックス」 フォルダ、あるいは他の任意のフォルダをダブルクリックすると、フォルダ内のファイルのリストが表示されます。

また、「アップロード」 をクリックし、ファイルに移動してアップロードすることもできます。

オプションで、ファイルベース・ロードを作成し、実行時にロードされるファイルを指定することもできます。ただし、列番号と列名は、ディメンションをマッピングするときのみ指定します。[ディメンションのマッピング](#) を参照してください。

次のファイル・タイプを選択できます。

- カンマ区切りファイル(CSV)
- タブ区切りファイル(TXT)
- カスタム区切りファイル

7.  (ターゲットの選択) をクリックします。

8. 「ターゲットの選択」 ページで、照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションを選択します。


9. 「保存」 をクリックします。

Edit Integration: > RC Explanations TRX Save Cancel


General **Map Dimensions** Map Members Options

* Name * Location

Description Quick Mode

 Source

Selected File: "DM_Unapplied_Unidentified_ExpBal.csv"

 Target

* Category

▶ Location Attributes

ディメンションへの照合コンプライアンス・トランザクションの属性のマッピング

照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションをマップすると、そのアプリケーションのディメンションの詳細がディメンションのマッピング・ページに自動的に移入されます

ディメンション名は、Account Reconciliation の属性名と正確に一致している必要があります。ディメンションが標準属性およびカスタム属性のものである場合、その名前はここで指定したとおりである必要があるため、変更しないでください。

デフォルトでは、「プロファイル」は「勘定科目」(照合勘定科目 ID)ターゲット・ディメンション・クラスにマップされ、「期間」は「期間」ターゲット・ディメンション・クラスにマップされています。

次のディメンションは「属性」ターゲット・ディメンション・クラスに割り当てられており、ATTR1 から ATTR4 列にそれぞれマップされています。これらのディメンションにマッピング・ルールが必要な場合は、それらを参照ディメンション・タイプに変更し、UD (ユーザー定義)列にマップしてください。属性ディメンションにはマッピング・ルールがなくてもかまいません。

Table 17-3 ディメンションのデフォルト・リスト

ディメンション名	ターゲット・ディメンション・クラス	DB 表の列
概略	属性	ATTR1
長い説明	属性	ATTR2
トランザクション日	属性	ATTR3
クローズ日	属性	ATTR4

参照ディメンションの詳細は、[参照ディメンションの追加](#)を参照してください。

次のものは標準ディメンションであり、これらの名前は変更しないでください。使用されていない通貨バケットのディメンションは、削除できます。

Table 17-4 標準ディメンションの詳細

ディメンション名	ターゲット・ディメンション・クラス	DB 表の列
金額(入力)	属性	ATTR5
通貨(入力)	属性	ATTR6
金額(機能)	属性	ATTR7
通貨(機能)	属性	ATTR8
金額(レポート)	属性	ATTR9
通貨(レポート)	属性	ATTR10


その他の標準ディメンションを下に示します。これらは、参照ディメンションにすることも、属性ディメンションにすることもできます。照合コンプライアンス・トランザクションでは、トランザクション自体とそのアクション・プランに同じカスタム属性を割り当てることができるため、システムによって、トランザクションのカスタム属性とアクション・プランのカスタム属性が区別されます。この場合、システムによ

って、アクション・プラン属性のディメンション名の先頭に**アクション・プラン**が追加されます。

Table 17-5 その他の標準ディメンション

ディメンション名	ターゲット・ディメンション・クラス	DB 表の列
子勘定科目 ID - サマリー照合の子トランザクションの子勘定科目 ID。	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
<sub-segment name> — グループ照合のトランザクションのサブセグメント。ディメンション名は、Account Reconciliation のサブセグメント名(「保管」、「エンティティ」など)と一致している必要があります。	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却方法	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却半月簡便法	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却期間	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却開始期間	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却終了日	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
償却元の金額<index>	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
アクション・プラン	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
アクション・プラン・クローズ済	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。
アクション・プラン・クローズ日	参照または属性	任意の UD 列または ATTR 列を選択します。

照合コンプライアンス・トランザクション・アプリケーションのディメンションの詳細を定義するには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページで、照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
2. 「**インポート・フォーマット**」 から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
3. 「**タイプ**」 で、「**区切り - すべてのデータ型**」を選択します。
「区切り - すべてのデータ型」は、区切りファイル・フォーマットからすべてのデータ型をロードします。
4. 「**区切り文字**」 から、出力ファイルの列の区切りに使用する文字を選択します。

区切りファイルには 1 つ以上のレコードが含まれ、指定した区切り文字で各レコードの間隔が設定されます。

使用可能なオプション:

- カンマ(,)
 - パイプ(|)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - タブ
 - チルダ(~)
5. マッピング・グリッドで、ソース・データロード・ファイルのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。
- 照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションからディメンションが自動的に移入されます。
- ファイルに対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。
6. 「保存」をクリックします。

照合コンプライアンス・トランザクションのデータ・メンバーのマッピング

データ統合での要件として、「データ」および「プロファイル」ディメンションをマップして、ロード中にソースからターゲットへのデータの交差のペアを作成するためのマッピングをシステムが作成できるようにします。

他のディメンションについては、ほとんどの属性が ATTR ターゲット・ディメンション・クラスにマップされている場合、メンバーのマッピングは必要ありません。ただし、UD にマップされている場合は必要です。

「データ」および「プロファイル」ディメンションをマップして、ロード中にソースからターゲットへのデータの交差のペアを作成するためのマッピングをシステムが作成できるようにします。

他のディメンションについては、ほとんどの属性が ATTR ターゲット・ディメンション・クラスにマップされている場合、メンバーのマッピングは必要ありません。ただし、UD にマップされている場合は必要です。

システムがターゲット値を作成できるようにするために、「データ」ディメンションにはメンバー・マッピングが必要です。

「データ」ディメンションのメンバー・マッピングを作成するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページで、照合コンプライアンス・トランザクション統合の右側にある ******* をクリックし、「マップ・メンバー」を選択します。
2. マップ・メンバー・ページの「ディメンション」ドロップダウンで、「データ」を選択します。
3. 「マップ・タイプ」ドロップダウンで、「明示」を選択します。

4. **+** をクリックします
5. **メンバー・マッピングの追加** ページの「ソース値」に、* (アスタリスク) を入力します。
アスタリスク(*)は、ソース値を表します。
6. 「ターゲット値」に、トランザクション・タイプのタイプへの参照を入力します。
たとえば、マッピングを「残高の説明」として識別するには、**BEX** と入力できます。
7. 「保存」をクリックします。

照合コンプライアンス・トランザクションの期間の定義

Account Reconciliation トランザクションは、1 つの期間にロードする必要があります。そのためには、グローバル・マッピングを使用して、様々な期間を 1 つの期間にマップします。

照合コンプライアンス・トランザクションのグローバル・マッピング期間を定義するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「期間マッピング」を選択します。
MM/dd/yyyy 形式で日付を指定します。
2. 「グローバル・マッピング」タブを選択します。
3. **+**
をクリックします。
4. 「期間キー」で、ソースからマップする、現在の会計年度の月の最終日を指定します。これは、試算表ロード・プロセス中にデータベースに格納され、試算表レコードのセットを識別するキーの一部となる日付値です。
MM/dd/yyyy 形式で日付を指定します。

照合コンプライアンス・トランザクションのロードでは、データ統合で定義されている期間キーおよび前期間キーを使用して、統合の実行時に、各データ統合期間にマップされたソース一般会計期間を判断します。
5. 「前期間キー」を選択し、(ゴーストを回避するために)先に**\$0.00** を入力する必要があるかどうかを判断するためにエクスポート中に使用される前会計期間キーを指定します(YTD 値が期別カテゴリにロードされた場合、入力する必要があります)

前期間キーは、現在の期間キーのちょうど 1 か月前です。
前期間キーは、現在の期間キーのちょうど 1 か月前です。
6. 次の内容を完了します。
 - a. 期間名; 2018 年 7 月など
 - b. ターゲット期間の月; 8 月など
 - c. ターゲット期間の年
 - d. ターゲット期間の日
 - e. ターゲット年度
7. 「保存」をクリックします。

照合コンプライアンス・トランザクション統合の実行

照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションを含む統合をデータ統合で実行すると、データ統合によってソースからデータがインポートされ、ステージングされます。続いて、データ統合によって、Account Reconciliation の事前マップ済トランザクション・インポート・ファイルと同じフォーマットの CSV ファイルが生成され、インポートするジョブが Account Reconciliation に送信されることにより、データが Account Reconciliation にエクスポートされます。以前にデータ統合からロードされていたトランザクションは、上書きされます。

照合コンプライアンス・トランザクション・ターゲット・アプリケーションにデータをロードするには:

1. 「**データ統合**」 ホーム・ページで、照合コンプライアンス・トランザクション統合を選択し、▶をクリックします。

2. 「**インポート・モード**」 から、データをインポートする方法を選択します。

使用可能なインポート・モード:

- **追加** - POV の既存の行は変更されず、新しい行が POV に追加されます。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 50 行が含まれるとします。この場合、50 行が追加されます。このロードの後で、POV の行の合計は 150 です。
- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行が TDATASSEG にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。
- **マージ**—使用できません。
- **インポートしない** - データのインポートを全部スキップします。
- **マップして検証** - データのインポートをスキップし、更新されたマッピングを使用してデータを再処理します。

3. 「**エクスポート・モード**」 から、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートする方法を選択します。

使用可能なエクスポート・モード・オプション:

- **置換** - ターゲットのすべての POV データをクリアしてから、ソースまたはファイルからロードします。たとえば、最初のロードに 100 行、次のロードに 70 行が含まれるとします。この場合、100 行が削除され、70 行がステージング表にロードされます。このロードの後、行の総数は 70 です。
 - **エクスポートしない** - データのエクスポートを全部スキップします。
4. ソース・システムがファイル・ベースの場合は、「**ファイル名**」で、ロード対象のデータが含まれるデータ・ファイル名を選択します。

ファイル名を指定した場合、「**ルールの実行**」ウィンドウで単一の期間に対してデータを入力する必要があります。

ファイルに移動するには、□をクリックします。

5. 「**開始期間**」および「**終了期間**」から、照合コンプライアンス・トランザクションについて定義されている期間を選択します。

6. 「実行」をクリックします。

Run Integration: > RC Explanations TRX

Import Mode	Replace	▼
Export Mode	Replace	▼
Start Period	Jun 22	▼ 𠄎
End Period	Jun 22	▼ 𠄎
File	DM_Unapplied_Unidentified_ExpBal.c	📄

7. Account Reconciliation で、照合の準備をします。

エクスポートされた仕訳のロード

「トランザクション照合」では、調整またはトランザクションを、二面性を持つ仕訳としてエクスポートし、その後、ERP システムまたはデータ・エクスポート・ファイルにインポートできます。データ統合を使用すると、Accounts Reconciliation Journal Adjustments ソース・システムに関連付けられたデータ・ソースを作成して、その仕訳をデータ・エクスポート・アプリケーションにロードできます。統合で仕訳がエクスポートされるときは、ステータスがオープンで、適用されるフィルタ条件と一致するすべての調整およびトランザクションがエクスポートされます。

エクスポートされた仕訳をロードするには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」メニューから、「アプリケーション」を選択します。
2. ソース **Account Reconciliation Journal Adjustments** アプリケーションを作成します。次の内容を完了します。
 - a. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
 - b. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
 - c. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「データ・ソース」を選択します。
 - d. 「タイプ」で、**Account Reconciliation Journal Adjustments** を選択します。
 - e. 「アプリケーション」で、Account Reconciliation Journal Adjustments アプリケーションを選択します。
 - f. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します(オプション)。接頭辞では最大 10 文字までサポートされます。

- g. 「OK」をクリックします。

Create Application
✕

Category

Type

Application

Prefix

3. ターゲット・アプリケーションを作成します。
 - a. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
 - b. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
 - c. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「データ・エクスポート」を選択します。
 - d. 「タイプ」で、ファイルへのデータ・エクスポートを選択します。
 - e. 「アプリケーション」で、調整をエクスポートするターゲット・アプリケーションを選択します。
 - f. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します(オプション)。
接頭辞では最大 10 文字までサポートされます。
 - g. 「OK」をクリックします。
4. アプリケーション・ページで、アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
5. 「ディメンション」タブを選択します。
6. 「アプリケーション詳細」セクションの「名前」フィールドで、カスタム・アプリケーションの名前を指定します。
7. 「ディメンションの詳細」タブを選択します。
8. 「追加」をクリックします。

9. 「**ディメンション名**」で勘定科目ディメンションの名前を入力してから、「**ターゲット・ディメンション・クラス**」および「**データ表列名**」の各フィールドに「**勘定科目**」を指定します。

「**ターゲット・ディメンション・クラス**」に「**勘定科目**」を指定すると、その値「**勘定科目**」が「**データ表列名**」フィールドに自動的に事前入力されます。





このステップを使用すると、ターゲット・アプリケーションに定義されていないディメンションを作成できます。「**勘定科目**」ディメンション名を作成し、その名前を、ディメンション・タイプによって定義されるプロパティの「**勘定科目**」ターゲット・ディメンション・クラスに関連付ける必要があります。その名前は、ステージング表内の列の表列名を識別する「**勘定科目**」データ表列名にも関連付けます。これらの定義はデータ管理で必要ですが、Account Reconciliation では不要です。




「金額」ディメンションは、ディメンションのマッピング・ページでデフォルト設定されるため作成不要です。

必要に応じて、UD1 から UD20 までや「エンティティ」などの他のディメンション名を作成できます。

10. Account Reconciliation Journal Adjustments ソース・アプリケーションとファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションまたは ERP アプリケーション間の統合を作成します。

次の手順を実行します

- a. 「**データ統合**」ホーム・ページで、 をクリックし、「**統合**」を選択します。
「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。
 - b. 「**名前**」および「**説明**」に、Account Reconciliation Journal Adjustments トランザクション統合の名前および説明を入力します。
 - c. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - d.  (ソースの選択) をクリックします。
 - e. **ソースの選択** ページで、Account Reconciliation Journal Adjustments ソース・アプリケーションをクリックします。
 - f.  (ターゲットの選択) をクリックします。
 - g. **ターゲットの選択** ページで、Oracle ERP Cloud またはファイルへのデータ・エクスポート・アプリケーションを選択します。
 - h. 「**保存**」をクリックします。
11. 「データ統合」ホーム・ページで、Account Reconciliation Journal Adjustment データ・ソース統合の右側にある  をクリックし、「**ディメンションのマッピング**」を選択します。
Account Reconciliation Journal Adjustment データ・ソースを追加すると、アプリケーション内のディメンションが「ディメンションの詳細」タブに自動的に移入されます。
12. 「**インポート・フォーマット**」から、統合で使用するインポート・フォーマットの名前を選択します。
ユーザー定義のインポート・フォーマット名を追加することもできます。
13. 「**ディメンションの詳細**」タブを選択します。

14. 「**ディメンション名**」列にあるすべてのディメンション名を「**ターゲット・ディメンション・クラス**」列にある値「**汎用**」とともにマップし、「**保存**」をクリックします。
15. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合の右側にある  をクリックし、「**マップ・メンバー**」を選択します
16. **マップ・メンバー**・ページで、Accounts Reconciliation Journal Adjustment のソース列およびカスタム・ターゲット・アプリケーションの列間でメンバーをマップします。
「データ」ディメンションの場合はマッピングを追加しないでください。
17. 「**データ統合**」ホーム・ページで、Account Reconciliation Journal Adjustment/トランザクション・マッピング統合の右側にある  をクリックし、「**オプション**」を選択します。
18. 「**フィルタ**」タブをクリックします。
19.  をクリックします。
20. 「**フィルタ**」タブで、トランザクション照合タイプに基づいてすべてのパラメータを入力します。

使用可能なパラメータ:

- **タイプ** — 照合のタイプを指定します。

使用可能なタイプ:

- **トランザクション**
- **調整**

- **照合タイプ** — 「決済」のような照合タイプ ID を指定します。

照合タイプによって、トランザクション照合プロセスでその照合タイプを使用して勘定科目がどのように処理されるかが決定されます。照合されるデータの構造、および照合に使用されるルールが決まります。また、照合タイプは、調整をテキスト・ファイルの仕訳としてエクスポートして ERP システムに戻すために使用します。

- **データ・ソース** — トランザクションの照合トランザクション・タイプが「トランザクション」の場合のデータ・ソースを指定します。

トランザクションの照合トランザクション・タイプが「調整」の場合、このフィールドは空白のままにします。

データ管理に表示されるデータ・ソースの名前は、実際にはトランザクション照合データ・ソースから導出されます。ドロップダウンで使用される規則は、「**照合タイプ名: データ・ソース名**」です。

たとえば、アプリケーションの選択肢は次のようになります:

- InterCo3:AR
- InterCo3:AP1 3
- Bank BAI:BAI_Bank_File
- Bank BAI:GL
- INTERCO2:AR

- INTERCO2:AP
- INTERCO:AR 8
- INTERCO:AP 9
- CLEARING:CLEARING
- フィルタ - 「**タイプ**」をトランザクションとして選択した場合は、トランザクションのフィルタ名を指定します。
フィルタは、次に示すように Account Reconciliation のデータ・ソース構成で定義されます:

「タイプ」を**調整**として選択した場合は、JSON 形式のフィルタ値を指定します。

調整の仕訳のエクスポート時に、特定のトランザクション・タイプまたは会計日付(あるいはその両方)を選択できます

たとえば、月末までの税のトランザクション・タイプを除くすべてのトランザクション・タイプを選択できます。

調整のフィルタを指定するには、「**フィルタ**」フィールドを使用して次を選択します:

- (調整)タイプ - 前のステップで選択した照合タイプで使用する調整タイプを指定します。1 つ以上の値を指定できます。値を選択しない場合、使用されるデフォルトは「**すべて**」です。
- 調整日付 - オペランドおよび日付値を指定します(日付ピッカーを使用して日付を選択します)。フィルタ処理に使用できるオペランドは、EQUALS、BEFORE、BETWEEN および AFTER です。

日付フォーマットは YYYY-MM-DD である必要があります。EQUALS、BEFORE および AFTER オペランドを使用する場合は、JSON 形式 accountingDate を使用し、次に会計日付を指定します。BETWEEN オペランドを選択した場合は、次の JSON 形式を使用します:

- fromAccountingDate (開始会計日付の場合)
- toAccountingDate (終了会計日付の場合)


JSON 形式のサンプルを次に示します:

```
{"adjustmentTypes" : ["Invoice Dispute","Coding Error"],"operator" : "BETWEEN", "fromAccountingDate" : "2022-02-01", "toAccountingDate" : "2022-02-10"}
```

```
{"adjustmentTypes" : ["Invoice Dispute","Coding Error"],"operator" : "EQUALS", "accountingDate" : "2022-02-01"}
```

```
{"operator" : "AFTER", "accountingDate" : "2022-02-01"}
```

```
{"adjustmentTypes" : ["Invoice Dispute","Coding Error"]}
```

21. 「**データ統合**」ホーム・ページで、Account Reconciliation Journal Adjustment/トランザクション・マッピング統合を選択し、Account Reconciliation Journal Adjustment データ・ソース統合の右側にある  をクリックして、「**ワークベンチ**」を選択します。

22. 「ワークベンチ」で、統合を実行してデータのテストおよび検証を行い、データが適切にロードされていることおよびデータが正しいことを確認します。データ統合でデータを変換し、Account Reconciliation で使用できるようステージングします。

統合の実行の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作の EPMAUTOMATE の runIntegration を参照してください。

増分ファイル・アダプタを使用したデータのロード

増分ファイル・アダプタ機能を使用すると、ソース・データ・ファイルを前のバージョンのソース・データ・ファイルと比較して、新しいレコードや変更されたレコードを特定し、そのデータ・セットのみをロードできます。比較前に初期ソース・データ・ファイルをソートしたり、パフォーマンスを改善するために事前ソートしたファイルを提供できます。

この機能を使用するには、初期ソース・データ・ファイルを増分ファイル・アダプタとして登録します。この初期ソース・データ・ファイルは、テンプレートとして使用されます。実際のデータ・ロードは、統合で指定されたファイルから実行され、初期ソース・データ・ファイルと後続のファイルの間でファイル比較が実行されます。それ以降は、1回、2回または何回でもロードできます。最後に実行されたファイルが、後続のロードの評価基準となります。このアダプタでは差異のみがロードされるため、ファイル・インポート中のロードが高速になります。残りのデータ・インポート・プロセスは、ファイルの標準データ・ロードの場合と同じです。

考慮事項:

- ソース・データ・ファイルは、区切りデータ・ファイルである必要があります。
- 使用されるデータ・ファイルには、区切り列を説明する 1 行のヘッダーが含まれる必要があります。
- 数値データと数値以外のデータの両方を統合できます。
- 2 つのファイル間に削除されたレコードがあれば、すべて無視されます。この場合、削除されたレコードは手動で処理する必要があります。
- ファイルが存在しない場合(または、最後の ID を存在しない実行に変更した場合)、ロードはエラーで完了します。
- この機能の使用時のパフォーマンスのレベルは、ソート・オプションによって決まります。ソートを行うと、処理時間が長くなります。ファイルを事前ソートすると、処理が高速になります。
- 増分ロードでは、単一期間データ・ロードのみがサポートされています。複数期間ロードはサポートされていません。
- 増分ロードでは、増分ファイルは置換モードでロードされ、ステージング表に残るのは最終バージョンのファイル比較のみなので、ドリルダウンはサポートされていません。

この対処方法として、完全データ・ロード方法を使用して同じデータ・ファイルを別の場所にロードできます。この場合は、データをターゲット・アプリケーションにエクスポートせずに、データのインポートのみを行う必要があります。

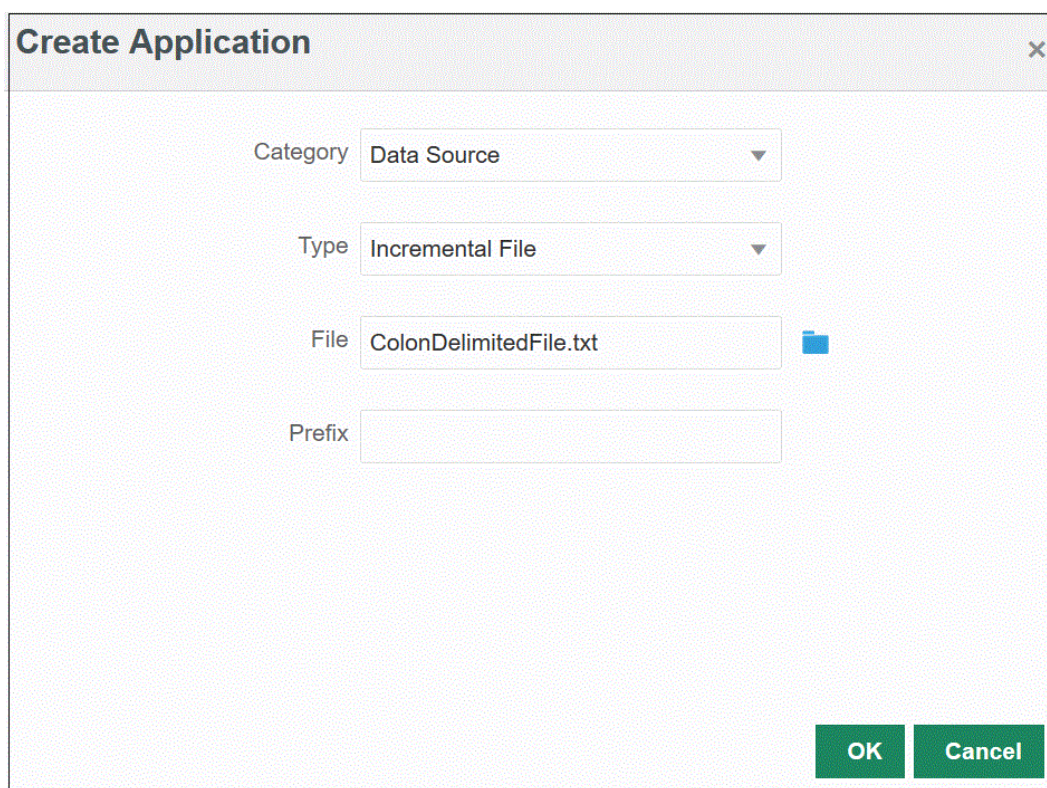
- ソース・データ・ファイルのコピーは、将来比較できるようにアーカイブされます。最後の 5 つのバージョンのみが保持されます。ファイルは最大 60 日間保持

されます。増分ロードが実行されずに 60 日が経過した場合は、最後のプロセス ID を 0 に設定して、ロードを実行してください。


増分ファイル・アダプタの設定

増分ファイル・データ・ソースを登録するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
3. アプリケーションの作成ページで、「カテゴリ」から「データ・ソース」を選択します。






4. 「タイプ」から、**増分ファイル**を選択します。
5. 「ファイル」で、テンプレートとして使用する初期ソース・データ・ファイルを指定します。

 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。

ファイルを選択するときには、次のことに注意してください:


- ソース・データ・ファイルは、区切りデータ・ファイルである必要があります。
 - 使用されるデータ・ファイルには、区切り列を説明する 1 行のヘッダーが含まれる必要があります。
 - 数値データと数値以外のデータの両方をロードできます。
6. **オプション:** 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

7. 「OK」をクリックします。
8. 「データ統合」ホーム・ページで、 (作成)をクリックし、「統合」を選択します。
「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。
9. ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの間の統合を作成し、「保存して続行」をクリックします。
 - a. 「名前」および「説明」に、新しい統合の名前および説明を入力します。
 - b. 「ロケーション」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - c. 「ソース」() ドロップダウンから、「ファイル」を選択します。
 - d. 「ファイル・ブラウザ」から、増分ファイルに移動して選択し、「OK」をクリックします。
増分ファイルを選択したら、「ファイル・オプション」をクリックして、**ファイルのインポート・ページ**で内容のフォーマットをプレビューおよび管理します。
 - e. 「ターゲット」() から、増分データをロードするターゲット・アプリケーションを選択します。
 - f. 「キューブ」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。
 - g. 「カテゴリ」で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。
リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。詳細は、次を参照してください [カテゴリ・マッピングの管理](#)
 - h. **オプション**: 統合に適したロケーション属性を選択します。詳細は、次を参照してください [ロケーションの属性の選択](#)
 - i. 「保存して続行」をクリックします。
10. **ディメンションのマッピング**・ページで、ソースとターゲットの間でディメンションをマップします(インポート・フォーマットを作成します)。

[ディメンションのマッピング](#)を参照してください。

- a. 「タイプ」から、区切りファイル・タイプを選択します。
たとえば、ファイルのフォーマットとして「**区切り - 数値データ**」を選択します。
- b. 「**ファイル区切り文字**」ドロップダウンで区切り文字のタイプを選択します。
使用可能な区切り文字:
 - カンマ(,)
 - 感嘆符(!)

- セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 縦線(|)
 - タブ
 - チルダ(~)
- c. マッピング・グリッドで、ソース・データロード・ファイルのソース列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。
- ターゲット・アプリケーションのディメンションが自動的に移入されます。
- ファイルに対してインポート・フォーマットがすでに定義されている場合、ソース列とターゲット列が自動的にマッピングされます。
- 新規のインポート・フォーマットを追加する場合や、既存のインポート・フォーマットを編集する場合は、次の手順を実行します:
- 「列」で、ファイルからインポートするフィールド番号を指定します。
 - 「ソース・ディメンションの選択」で、ターゲット・アプリケーションに割り当てるソース・ディメンションの名前を指定します。
- 同じディメンションの複数のソース列をターゲット・ディメンションにマッピングできます。たとえば、4 つの"Account"ソース列をマッピングできます。
- ソースまたはターゲットの式を追加します。ソースまたはターゲットから直接値を操作する式を割り当てます。
- [ソース式の使用](#)および[ターゲット式の使用](#)を参照してください。
- d. **オプション:** カンマ区切りファイルの場合、行の右側にある  をクリックし、追加する行をドロップダウンから選択することにより、インポート・フォーマットにマッピングする追加行を選択します。
- 使用可能な行:
- ソース期間
 - 年
 - 期間
 - 期間番号
 - 通貨
 - 属性
 - 説明
 - ディメンション行
 - 勘定科目
 - バージョン
 - エンティティ
 - 表示
- 行をスキップすることもできます。
- 詳細は、次を参照してください [ディメンション・マップの作成](#)

- e. 「保存して続行」をクリックします。
11. マップ・メンバー・ページで、ソースからターゲットにメンバーをマップします。
詳細は、次を参照してください [メンバーのマッピング](#)
12. オプション・ページで、「フィルタ」タブをクリックします。

 ノート:

統合の実行ページの「フィルタ」タブで「ソース・ファイル」、増分処理オプションおよび最後のプロセス ID のオプションを選択することもできます。

13. 「ソース・ファイル」から、ロード対象のデータが含まれるデータ・ファイル名を選択します。データ・ソース・アプリケーションの作成元ファイルと同じファイルにすることも、データと適切なヘッダーを含む別のファイルにすることもできます。

前のように、データを含むファイルを選択します。元のファイルと同じ名前にすることも、新しい名前を付けることもできます。ロードされた 2 つのファイルの間の差異が、ファイル(つまり、増分ロード・ファイル)内に自動的に作成されます。ファイル A.txt に 100 行、ファイル B.txt に 300 行が含まれ、最初の 100 行が同じであるとすると、ID が 0 の場合、最初のロードでファイル A.txt が選択されます。2 回目のロードはファイル B.txt に対して行われます。ID は、A に割り当てられたロード ID を自動的に指します。

14. 増分処理オプションから、ソース・ファイル内のデータをソートする方法を選択します。

使用可能なオプション:

- ソース・ファイルをソートしない - ソース・ファイルは提供されたままの状態と比較されます。このオプションでは、ソース・ファイルが毎回同じ順序で生成されることを想定しています。この場合、ファイル比較が実行された後、新しいレコードと変更されたレコードが抽出されます。このオプションを選択すると、増分ファイル・ロードの実行が高速になります。
- ソース・ファイルをソート - 変更を調べるファイル比較が実行される前に、ソース・ファイルがソートされます。このオプションでは、ソース・ファイルが最初にソートされます。ソートされたファイルは、前にソートされたバージョンのこのファイルと比較されます。大きいファイルをソートすると、多くのシステム・リソースが消費され、実行速度が遅くなります。

 ノート:

ソートしないオプションを使用する統合があったが、後で「ソース・ファイルのソート」オプションに切り替えた場合、ファイルの順序が異なるために、最初のロードの結果が無効になります。それ以降の実行では、データが正常にロードされます。

15. 最後のプロセス ID に、元のソース・データ・ファイルの最後の実行 ID が表示されます。

ロードが元のデータ・ファイルに対する最初の実行である場合、**最後のプロセス ID** に **0** の値が表示されます。

ロードが再度実行されると、**最後のプロセス ID** に最後のロードの実行番号が表示されます。

新しく作成されたファイル比較バージョンおよび元のデータ・ファイルに差異がない場合、またはファイルが見つからない場合、**最後のプロセス ID** の値が、正常に実行された最後のロード ID に割り当てられます。

すべてのデータをリロードするには、**最後のプロセス ID** を **0** に戻し、新しいソース・ファイルを選択してベースラインをリセットします。

16. 「保存」をクリックします。
17. 「データ統合」ホーム・ページから、統合を選択し、▶をクリックします。
18. 統合の実行ページで、「オプション」タブを選択します
19. 次のオプションを設定し、「実行」をクリックします。
 - インポート・モード
 - エクスポート・モード
 - 開始期間
 - 終了期間

統合の実行の詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。

要員新規採用データの一括ロード

新規採用の一括データを要員に統合できます。新規採用の一括データをロードしたり、複数の新規採用の新規採用要請データを一度に変更できます。

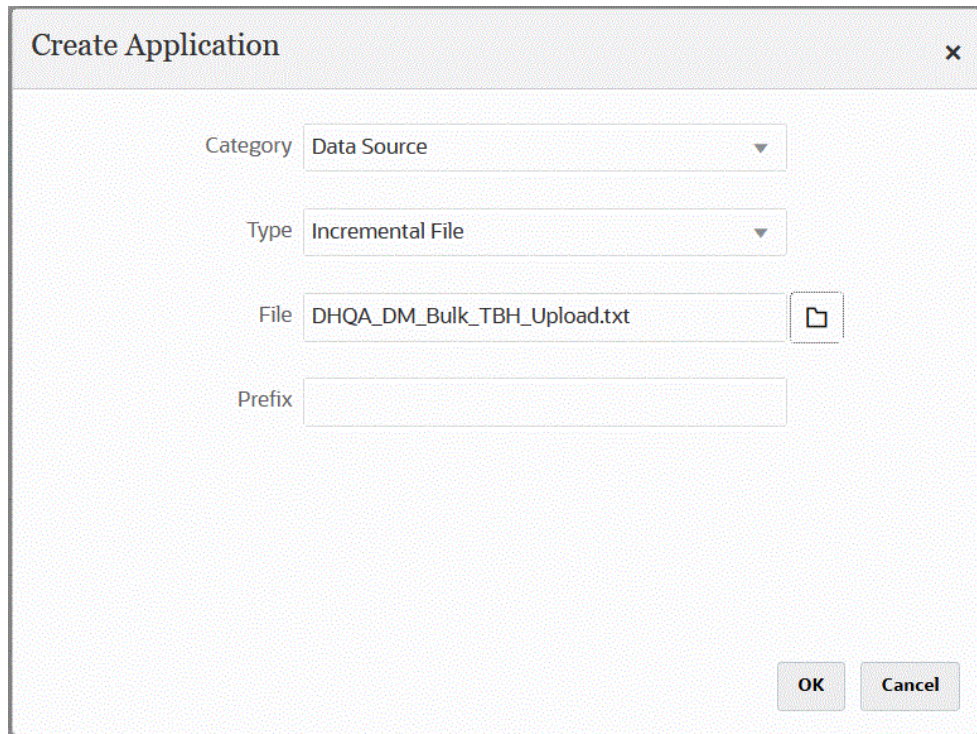
新規採用の一括データは、増分ファイル・アダプタを使用してロードされます。このタイプの統合では、ソース・データ・ファイルが前のバージョンのソース・データ・ファイルと比較され、新しいレコードや変更されたレコードが特定されて、そのデータ・セットのみがロードされます。

「採用要請の追加」を手動で使用して要請を一度に1つずつ追加しなくても、新規採用を一括ロードできます。詳細は、*Planning* モジュールの操作の採用要請の追加を参照してください。

一括ロード・プロセスの説明

新規採用データを要員に一括ロードするには:

1. データ統合で新規採用データをロードする前に、要員の「**新規採用の処理**」一括更新フォームについて使用可能な空の要請がシステムにあるかどうかを確認します。すでにシステム内にある要請についてデータをロードすると、既存の要請データは、データ統合を通じてロードされた新しいレコードに置き換えられます。
2. 「データ統合」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
3. **アプリケーション**・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
4. **アプリケーションの作成**ページで、「**カテゴリ**」ドロップダウンから「**データ・ソース**」を選択します。



Category Data Source


Type Incremental File

File DHQA_DM_Bulk_TBH_Upload.txt

Prefix

OK Cancel

5. 「タイプ」から、**増分ファイル**を選択します。
6. 「ファイル」で、テンプレートとして使用する新規採用の一括ソース・データ・ファイルを指定します。

 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。

ファイルを選択するときには、次のことに注意してください：

- ソース・データ・ファイルは、区切りデータ・ファイルである必要があります。
- 使用されるデータ・ファイルには、区切り列を説明する 1 行のヘッダーが含まれる必要があります。
- 数値データと数値以外のデータの両方をロードできます。

新規採用の一括ファイルを次に示します：

```

DHQA_DM_Bulk_TBH_Upload.txt - Notepad
File Edit Format View Help
Entity,Employee,Job,Version,Project,Account,Property,Value
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Salary Basis,Monthly
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Value,10000.00
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Start Date,No Property,04-18-2022
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_End Date,No Property,05-04-2023
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_FTE,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Applicable Union Code,No Property,NonExecDriver
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Employee Type,No Property,Regular
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Headcount,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Pay Type,No Property,Exempt
Entity02,OMP_Hiring Requisition 5,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Hiring Status,No Property,New
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Salary Basis,Monthly
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Value,10000.00
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Start Date,No Property,07-27-2022
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_FTE,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Applicable Union Code,No Property,NonExecDriver
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Employee Type,No Property,Regular
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Headcount,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Pay Type,No Property,Exempt
Entity02,OMP_Hiring Requisition 6,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Hiring Status,No Property,New
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Salary Basis,Monthly
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Value,10000.00
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Start Date,No Property,12-27-2022
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_FTE,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Applicable Union Code,No Property,ExecDriver
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Employee Type,No Property,Regular
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Headcount,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Pay Type,No Property,Exempt
Entity02,OMP_Hiring Requisition 7,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Hiring Status,No Property,New
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Salary Basis,Monthly
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Basic Salary,OMP_Value,20000.00
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Start Date,No Property,01-03-2022
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_FTE,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Applicable Union Code,No Property,ExecDriver
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Employee Type,No Property,Regular
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Headcount,No Property,1
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Pay Type,No Property,Exempt
Entity02,OMP_Hiring Requisition 8,Job03,OEP_Working,No Project,OMP_Hiring Status,No Property,New

```

7. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

8. 「OK」をクリックします。

9. 「データ統合」ホーム・ページで、**+** (作成)をクリックし、「統合」を選択します。

「統合の作成」ビューに、全般ページが表示されます。

10. ソース・アプリケーションとターゲット・アプリケーションの間の統合を作成し、「**保存して続行**」をクリックします。


- a. 「名前」および「説明」に、新しい統合の名前および説明を入力します。

- b. 「ロケーション」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。

- c. 「ソース」()ドロップダウンから、「ファイル」を選択します。

- d. 「ファイル・ブラウザ」から、新規採用の一括ファイルに移動して選択し、「OK」をクリックします。

新規採用の一括ファイルを選択したら、「ファイル・オプション」をクリックして、**ファイルのインポート・ページ**で内容のフォーマットをプレビューおよび管理します。

- e. 「ターゲット」()から、新規採用の一括データのロード先となる要員アプリケーションを選択します。

- f. 「キューブ」から、ターゲット・システムのプラン・タイプを選択します。

- g. 「カテゴリ」で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。

リストされているカテゴリは、設定時に作成したカテゴリ(「実績」など)です。詳細は、[カテゴリ・マッピングの管理](#)を参照してください。

- 通貨
- 属性
- 説明
- ディメンション行
 - 勘定科目
 - バージョン
 - エンティティ
 - 表示

行をスキップすることもできます。

詳細は、[ディメンション・マップの作成](#)を参照してください。

- e. 「保存して続行」をクリックします。

12. マップ・メンバー・ページで、ソースからターゲットにメンバーをマップします。

すべてのメンバーを変更せずにそのまま要員にマップするには、「**マッピング・タイプ**」で「**すべて**」を選択し、「**追加**」をクリックして、**マップ・メンバーの追加**ページで、「**ソース**」に*を入力し、「**ターゲット**」に*を入力します。

詳細は、[メンバーのマッピング](#)を参照してください。

13. オプション・ページで、「**フィルタ**」タブをクリックします。

- a. 「**ソース・ファイル**」から、ロード対象のデータが含まれるデータ・ファイル名を選択します。データ・ソース・アプリケーションの作成元ファイルと同じファイルにすることも、データと適切なヘッダーを含む別のファイルにすることもできます。

前のように、データを含むファイルを選択します。元のファイルと同じ名前にすることも、新しい名前を付けることもできます。ロードされた 2 つのファイルの間の差異が、ファイル(つまり、増分ロード・ファイル)内に自動的に作成されます。ファイル A.txt に 100 行、ファイル B.txt に 300 行が含まれ、最初の 100 行が同じであるとする、ID が 0 の場合、最初のロードでファイル A.txt が選択されます。2 回目のロードはファイル B.txt に対して行われます。ID は、A に割り当てられたロード ID を自動的に指します。

- b. **増分処理オプション**から、ソース・ファイル内のデータをソートする方法を選択します。

使用可能なオプション:

- ソース・ファイルをソートしない - ソース・ファイルは提供されたままの状態と比較されます。このオプションでは、ソース・ファイルが毎回同じ順序で生成されることを想定しています。この場合、ファイル比較が実行された後、新しいレコードと変更されたレコードが抽出されます。このオプションを選択すると、増分ファイル・ロードの実行が高速になります。
- ソース・ファイルをソート - 変更を調べるファイル比較が実行される前に、ソース・ファイルがソートされます。このオプションでは、ソース・ファイルが最初にソートされます。ソートされたファイルは、前にソートされたバージョンのこのファイルと比較されます。大きいファイルをソートすると、多くのシステム・リソースが消費され、実行速度が遅くなります。

 **Note:**

ソートしないオプションを使用する統合があったが、後で「ソース・ファイルのソート」オプションに切り替えた場合、ファイルの順序が異なるために、最初のロードの結果が無効になります。それ以降の実行では、データが正常にロードされます。

- c. **最後のプロセス ID** に、元のソース・データ・ファイルの最後の実行 ID が表示されます。

ロードが元のデータ・ファイルに対する最初の実行である場合、**最後のプロセス ID** に 0 の値が表示されます。

ロードが再度実行されると、**最後のプロセス ID** に最後のロードの実行番号が表示されます。

新しく作成されたファイル比較バージョンおよび元のデータ・ファイルに差異がない場合、またはファイルが見つからない場合、**最後のプロセス ID** の値が、正常に実行された最後のロード ID に割り当てられます。

すべてのデータをリロードするには、**最後のプロセス ID** を 0 に戻し、新しいソース・ファイルを選択してベースラインをリセットします。




 **Note:**

統合の実行ページの「フィルタ」タブで「ソース・ファイル」、増分処理オプションおよび最後のプロセス ID のオプションを選択することもできます。

14. 「保存」をクリックします。
15. 「オプション」タブを選択し、必要に応じて次のことを行います：
- a. 「カテゴリ」で、ソース・システムのデータを分類し、ターゲット・シナリオ・ディメンション・メンバーにマップするためのカテゴリ・マッピングを選択します。
増分データ・ロードについて別のソース・ファイルを選択した場合は、カテゴリの変更が必要になることがあります。
 - b. 「プラン・タイプ」から、プラン・タイプを選択します。
 - c. 「ロード方法」から、「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」を選択します。
16. 「OWP_Incremental Process Data with Synchronize Defaults」ビジネス・ルールを埋込みモードで登録します。

埋込みモードは、データ・ロード・プロセスの後に実行されるビジネス・ルールを登録するために使用します。このモードはデータ・ロード・プロセスの一部として組み込まれ、ロードされたデータ交差へのアクセスを提供します。このモードは、すべてのデータ型ロード方法を使用している場合にのみ使用できます。埋込みルールはイベントによってトリガーされず、ランタイム・パラメータをサポートしていません。

「OWP_Incremental Process Data with Synchronize Defaults」ビジネス・ルールを登録するには：

- a. 特定の統合のビジネス・ルールを登録するには、**全般**ページで、統合の右側にある  をクリックして「**オプション**」を選択し、**統合の編集**ページで「**ビジネス・ルール**」タブを選択します。
 - b. **ビジネス・ルール** ページで、「**埋込み**」モードをクリックします。
 - c.  をクリックします。
 - d. 「**名前**」から、「**OWP_Incremental Process Data with Synchronize Defaults**」ビジネス・ルールを選択します。
「**名前**」から、実行するビジネス・ルールを指定します。
このフィールドで使用できるビジネス・ルールは、**Calculation Manager** で事前作成され、**Planning** ターゲット・アプリケーションにデータをロードするときにデータ統合で使用できるようになります。
Planning でビジネス・ルール名が変更された場合、ビジネス・ルールを検証しないデータ統合では、新しいビジネス・ルール名が自動的に変更されることはありません。
 - e. 「**保存**」をクリックします。
17. 「**データ統合**」ホーム・ページから、統合を選択し、 をクリックします。
 18. **統合の実行**ページで、「**オプション**」タブを選択します。
 19. 次のオプションを設定し、「**実行**」をクリックします。
 - インポート・モード
 - エクスポート・モード
 - 開始期間
 - 終了期間

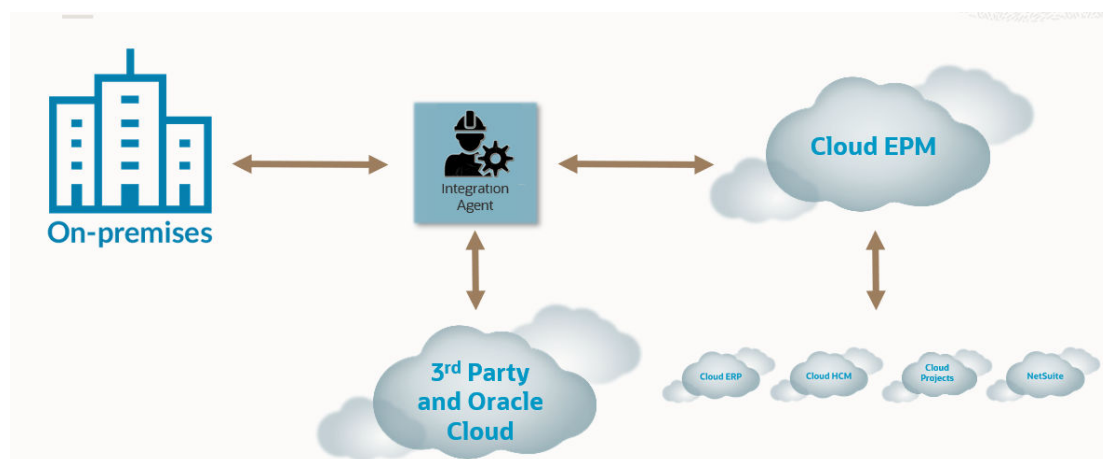
 **Note:**

「開始日」として前年の日付を入力すると、「開始日」の日付は、新規採用のプランの「開始年」、「開始月」および「開始日」にリセットされます。

詳細は、[統合の実行](#)を参照してください

EPM 統合エージェント


EPM 統合エージェントを使用して、オンプレミス・データ・ソースからデータおよびメタデータを抽出し、そのデータを Oracle Enterprise Performance Management Cloud に直接ロードできます。EPM 統合エージェントでは、オンプレミス・リレーショナル・データベースに対して問合せを実行し、データまたはメタデータを EPM Cloud にロードします。EPM 統合エージェントは統合のデータ・ソースとして定義されます。EPM 統合エージェントは、スクリプトを使用して拡張することもでき、サード・パーティの REST API、リレーショナル以外のソース、または Jython、Groovy や Java を使用してアクセス可能なシステムを含む、その他のデータ・ソースにアクセスできます。



EPM 統合エージェントは、同期および非同期の 2 つのモードでデプロイできます。モードにより、オンプレミス・データと EPM Cloud 間の通信を開く方法が決まります。統合が同期モードで実行されると、EPM Cloud では、クラスタ割当てに基づいて EPM Cloud から適切なエージェントへの直接呼出しが開始されます。統合が非同期モードで実行されると、EPM Cloud では、実行する統合ジョブをキューに入れます。エージェントは、待機中のジョブを周期的にポーリングして実行します。

クラスタ割当てを定義することにより、統合ジョブを複数のクラスタに割り当てることができます。クラスタを使用すると、統合ジョブの分散を管理できます。統合ジョブが開始されると、システムでは、ジョブが割り当てられた場所をチェックし、クラスタを判別して、ジョブをそのクラスタに割り当てます。ジョブを実行する優先順位は、クラスタによって決まります。

この章は、2 つの項に分かれています。[EPM 統合エージェントのインストールと構成](#)の項では、企業で EPM 統合エージェントを構成してデプロイするのに必要なステップを説明します。[EPM 統合エージェントを使用した EPM Cloud とオンプレミス間の接続](#)の項では、EPM 統合エージェントをオンプレミス・データ・アダプタとともに使用して、オンプレミス・データ・ソースに接続してデータを取得する方法を説明します。また、同期および非同期モードでクラスタおよび割当てを使用して、統合ジョブを分散する方法も説明します。

目的	視聴するビデオ
EPM 統合エージェントを使用してソース・データを統合する方法の学習	 EPM 統合エージェントを使用したソース・システム・データの活用
EPM 統合エージェントを使用してデータを管理する方法の学習	 EPM 統合エージェントを使用したデータの管理

EPM 統合エージェントのインストールと構成

この項では、EPM 統合エージェントを Oracle Enterprise Performance Management Cloud にデプロイするために完了する必要がある設定および構成タスクについて説明します。

クイック参照:

- [EPM 統合エージェントの構成と開始プロセスの説明](#)
- [EPMAgent ZIP のダウンロード](#)
- [アプリケーション・フォルダの作成](#)
- [EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)
- [EPM 統合エージェントの開始パラメータの構成](#)
- [EPM 統合エージェントの Windows サービスとしての実行](#)
- [EPM 統合エージェントの開始](#)
- [EPM 統合エージェントでのライトバック](#)
- [同期モードの構成](#)
- [EPM 統合エージェントを使用した EPM Cloud とオンプレミス間の接続](#)


EPM 統合エージェントの構成と開始プロセスの説明

次のステップは、EPM 統合エージェントを構成する方法の概要を説明しています。構成のステップ、および EPM 統合エージェントを開始するステップが含まれます。

1. JAVA_HOME 環境変数を設定します。
詳細は、[JAVA_HOME の設定](#)を参照してください。

 **ノート:**

EPM 統合エージェントは、Java 8、11 およびそれ以降がインストールされた Windows および Linux で稼働します。現在のバージョンは Java 19 です。Java 8 の詳細は、<https://www.oracle.com/java/technologies/java8.html> を参照してください。

 **ノート:**

EPM 統合エージェントは、Oracle Java によってのみ認証されています。EPM 統合エージェントは、Open JDK では認証されていません。

- 「データ統合」ホーム・ページから、**EPMAgent ZIP** ファイルをダウンロードします。
詳細は、: [EPMAgent ZIP のダウンロード](#) を参照してください。
- EPMAgent.zip を抽出します。
- ジョブが実行のためにキューに配置されたときに、ジョブの抽出方法を指示するのに使用されるクラスタを作成します。
詳細は、[エージェント・クラスタの理解](#) および [クラスタの追加](#) を参照してください。
デフォルトのクラスタ名は **EPMCLUSTER** です。
- デフォルトでは、EPM 統合エージェントには Oracle の JDBC ドライバが含まれます。
SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバが必要な場合は、[EPM 統合エージェントでの SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバの構成](#) を参照してください。
その他のソース用の JDBC ドライバが必要な場合は、そのドライバをダウンロードしてインストールします。
- アプリケーション・フォルダを作成します。
詳細は、[アプリケーション・フォルダの作成](#) を参照してください。
- EPM エージェント・ユーティリティ** を使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ユーザー・パスワードを暗号化します。
暗号化されたパスワードをコピーして保存します。(次のステップでパラメータとして追加します。)
詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#) を参照してください。
- EPM 統合エージェントの開始パラメータを構成します。
詳細は、[EPM 統合エージェントの開始パラメータの構成](#) を参照してください。
- EPM 統合エージェントを Windows サービスとして実行します。
詳細は、[EPM 統合エージェントの Windows サービスとしての実行](#) を参照してください。
エージェントを開始するのに Windows サービスを使用しない場合は、かわりに、次のステップで説明する bat ファイルを使用します。
- EPM 統合エージェントを開始します。
詳細は、[EPM 統合エージェントの開始](#) を参照してください。

11. 同期モードを構成します。

詳細は、[同期モードの構成](#)を参照してください。

12. 統合フローを選択します。

統合フローは、同期モードまたは非同期モードのいずれかです。モードにより、エージェントが **EPM Cloud** を操作する方法を定義します。**EPM Cloud** から **EPM 統合エージェント**への直接呼出しによる操作か、または、**EPM 統合エージェント**でのポーリングによってデータの **EPM Cloud** 要求が送信された時期を判断する操作のいずれかです。

JAVA_HOME の設定

JAVA_HOME 環境変数は、コンピュータ上で **Java Runtime Environment (JRE)**がインストールされているディレクトリを指します。

次のタスクは、**Windows** または **UNIX** システムに JAVA_HOME を設定するのに必要です。

Windows システムに JAVA_HOME を設定するには:

1. 「**マイコンピュータ**」を右クリックして、「**プロパティ**」を選択します。
2. 「**詳細**」タブで「**環境変数**」を選択し、**Java Runtime Environment (JRE)**の場所を指すように JAVA_HOME を編集します。

たとえば、次のように指定できます:C:\Program Files\Java\jdk1.8\jre

JRE は **Java Development Kit (JDK)**の一部ですが、個別にダウンロードできます。

UNIX システムに JAVA_HOME を設定するには:

Korn および **bash** シェルの場合は、次のように指定します:

```
export JAVA_HOME=jdk-install-dir
export PATH=$JAVA_HOME/bin:$PATH
```

Bourne シェルの場合は、次のように指定します:





```
JAVA_HOME=jdk-install-dir
export JAVA_HOME
PATH=$JAVA_HOME/bin:$PATH
export PATH
```

C シェルの場合は、次のように指定します:

```
setenv JAVA_HOME jdk-install-dir
export JAVA_HOME
PATH=$JAVA_HOME/bin:$PATH
export PATH
setenv PATH $JAVA_HOME/bin:$PATH
export PATH=$JAVA_HOME/bin:$PATH
```

EPMAgent ZIP のダウンロード

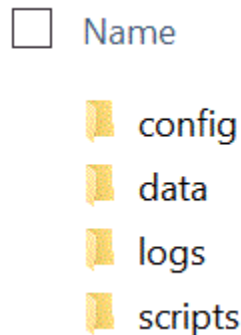
EPMAgent ZIP ファイルをダウンロードするには:

1. ホーム・ページから、「アプリケーション」()をクリックします。
2. 「データ交換」()をクリックし、「データ統合」タブを選択します。
3. オプションで、「ナビゲータ」()をクリックし、「アプリケーション」から「データ交換」()を選択して、データ統合を起動できます。
4. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「エージェントのダウンロード」を選択します。
5. ファイル・マネージャ・ページから、EPMAgent ZIP を宛先フォルダに抽出します。
宛先フォルダは `AGENT_HOME` です。

アプリケーション・フォルダの作成

EPMAgent.zip を *Agent Home* ディレクトリにダウンロードして抽出した後に、`createAppFolder.bat` を使用して、データ・ログおよび構成ファイルを格納するためのアプリケーション・フォルダ構造を作成します。構成ファイルには、すべての初期化パラメータが含まれます。

次のイメージは、`config`、`data`、`logs` および `scripts` という名前のフォルダを含むアプリケーション・フォルダを示します。



アプリケーション・フォルダ構造を作成するには:

1. コマンド・プロンプトで、`cd AGENT_HOME/bin directory` と入力して作業ディレクトリを変更します。
`AGENT_HOME` は、EPMAgent.zip を抽出したディレクトリです。
2. コマンド・プロンプトで、`createAppFolder.bat C:\EPMAgentData` と入力します。
`createAppFolder.bat` の実行が完了すると、アプリケーション・フォルダの作成スクリプトが完了しましたというメッセージが表示されます。

createappfolder.bat を実行すると、スクリプトにより、移入された EPM_AGENT_HOME および EPM_APP_DATA_HOME パラメータを含む INI ファイルが作成されます。

Secure Sockets Layer (SSL)証明書

ノート:

リリース 22.07 更新以降、EPM 統合エージェントをインストールするときに、Secure Sockets (SSL)証明書が含まれた cert フォルダはダウンロードされなくなりました。証明書は、環境変数で識別される JAVA_HOME に自動的に含まれています。空の cert サブ・フォルダは、エージェントのダウンロード時に引き続きインストールされます。

古いバージョンのエージェント(22.07 更新よりも前)を使用する場合は、cert フォルダ内に既存の証明書を保持します。これは、カスタム証明書を使用する場合にも適用されます。

EPM 統合エージェントでの SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバの構成

Microsoft Java Database Connectivity (JDBC)ドライバを使用して EPM 統合エージェントで SQL Server に接続する場合、この項では、ドライバをダウンロードして構成する方法を説明します。

SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバを構成するには:

1. 次の Web サイトから SQL サーバー jar をダウンロードして解凍します: [SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバのダウンロード](#)
ドライバは、JRE8 と互換性のあるドライバであることが必要です。
2. jar ファイル mssql-jdbc-6.4.0.jre8.jar を EPM_AGENT_HOME/lib ディレクトリにコピーします。
たとえば、jar ファイルを C:\EPMAgent\lib ディレクトリにコピーします。
3. agentparams.ini ファイルに **CUSTOM_CLASS_PATH** パラメータを設定して、EPM 統合エージェントの mssql-jdbc-6.4.0.jre8.jar の場所を指定します。
たとえば、CUSTOM_CLASS_PATH=C:\EPMAgent\lib\mssql-jdbc-6.4.0.jre8.jar と指定します
agentparams.ini ファイルへのパラメータの設定の詳細は、[EPM 統合エージェントの開始パラメータの構成](#)を参照してください。
4. データ・ソース・アプリケーション・フィルタに **JDBC_URL** を指定します。
JDBC_URL は次のフォーマットである必要があります:
jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname
5. アプリケーション・フィルタに **JDBC_URL** を指定します。

JDBC_URL は次のフォーマットである必要があります:

```
jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname
```

Oracle データベースへの SSL 接続の構成

EPM 統合エージェントでは、Oracle データベースへの SSL (Secure Sockets Layer) 接続がサポートされています。SSL プロトコルによって、ネットワークレベルの認証、データの暗号化およびデータの整合性が提供されます。

Oracle データベースへの SSL 接続を使用するには、アプリケーション・オプションで JDBC URL を設定し、EPM エージェントの INI ファイルでカスタム JAVA プロパティを定義する必要があります。



Note:

SSL 接続は、Oracle データベースについてのみサポートされています。

「アプリケーション」で JDBC URL を設定するには:

1. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
2. 「アプリケーション」で、Oracle データベース・データ・ソース・アプリケーションの横にある「...」をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
3. アプリケーション詳細ページで、「オプション」タブをクリックします。
4. JDBC URL で、Oracle データベースへの SSL 接続の JDBC ドライバ URL 接続文字列のフォーマットを指定します。

Oracle Thin JDBC ドライバの場合、サービスの JDBC ドライバ URL は、次のフォーマットを使用して Oracle データベースに接続されます:

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCPS)(HOST=<hostname>)(PORT=<portnumber>))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=<servicename>)))
```

SID (セキュリティ識別子)の JDBC ドライバ URL は、次のフォーマットを使用して Oracle データベースに接続されます:

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCPS)(HOST=<hostname>)(PORT=<portnumber>))(CONNECT_DATA=(SID=<sid>)))
```

5. 「保存」をクリックします。

カスタム Java オプションを設定するには:

1. C:\EPMAgentData\config ディレクトリに移動します。
2. agentparams.ini ファイルをダブルクリックし、テキスト・エディタ (Notepad など) を使用して開きます。
3. CUSTOM_JAVA_OPTIONS=フィールドで、次のように指定します:

```
Djdbc.keyStore=<keystore jks file location> -  
Djdbc.keyStorePassword=<encrypted key store password> -  
Djdbc.keyStoreType=JKS -Djdbc.trustStore=<trust store jks file location> -
```

```
Djdbc.trustStorePassword=<encrypted trust store password> -
Djdbc.trustStoreType=JKS
```

 **Note:**

パスワードは、エージェントの `encryptpassword` ユーティリティを使用して暗号化する必要があります。詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

4. `agentparams.ini` ファイルを保存します。

EPM 統合エージェントでの SQL データ・ソース用のカスタム JDBC ドライバの構成

EPM 統合エージェントを使用する場合、タイプ 3 およびタイプ 4 に準拠した JDBC ドライバを使用して、データ・ソースへの接続を確立し、問合せを実行して、結果を抽出できるようになりました。システムでは JDBC ドライバを使用するためのフレームワークのみが提供され、個々のドライバは保証されません。ドライバに特別な要件がある場合も、カスタム・スクリプトを作成する必要があります。

SQL Server 用のタイプ 3 またはタイプ 4 準拠の JDBC ドライバを構成するには:

1. タイプ 3 またはタイプ 4 の JDBC ドライバをダウンロードします。
2. `jar` ファイルを `EPM_AGENT_HOME/lib` ディレクトリにコピーします。
たとえば、`mysql-connector-java-8.0.22.jar` をコピーして `C:\EPMAgent\lib` ディレクトリに貼り付けます。
3. `agentparams.ini` ファイルに **CUSTOM_CLASS_PATH** パラメータを設定して、EPM 統合エージェントの `jar` ファイルの場所を指定します。
たとえば、次のように指定します: `CUSTOM_CLASS_PATH=../lib/mysql-connector-java-8.0.22.jar`

`agentparams.ini` ファイルへのパラメータの設定の詳細は、[EPM 統合エージェントの開始パラメータの構成](#)を参照してください。

4. アプリケーション詳細で **JDBC_URL** を指定します。

JDBC_URL は次のフォーマットである必要があります:

```
jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname
```

次の例は、JDBC Driver および JDBC URL を入力する方法を示しています:

Application Details: SUIANT

Dimensions Options Set Defaults

Property Name	Property Value
Data Extract Query	Query1
Delimiter	,
Credential Store	Cloud
JDBC Driver	com.mysql.jdbc.Driver
JDBC URL	jdbc:mysql://localhost:3306/sample
Username	user
Password	*****
Fetch Size	1000

EPM 統合エージェントの開始パラメータの構成

EPM 統合エージェントの Oracle Enterprise Performance Management Cloud URL および EPM Cloud ドメインの開始パラメータは、agentparams.ini ファイルに定義されます。

ノート:

EPM 統合エージェントの開始パラメータを定義する前に、移入された EPM_AGENT_HOME および EPM_APP_DATA_HOME パラメータを含む INI ファイルを作成する、createAppFolder.bat を実行します。詳細は、[アプリケーション・フォルダの作成](#)を参照してください。

EPM Cloud ユーザーが使用するパスワードを暗号化するには、ecryptpassword.bat を実行する必要があります。詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

EPM 統合エージェントで使用する開始パラメータを構成するには:

1. C:\EPMAgentData\config ディレクトリに移動します。
2. テキスト・エディタ(Notepad など)を使用して、agentparams.ini ファイルをダブルクリックして開きます。

テキスト・ファイルに agentparams.ini ファイルが開きます:

```

AGENT_NAME=EPMAGENT
CLUSTER=EPMCLUSTER
PORT=9090
CLOUD_URL=http://epmcloudserver
CLOUD_DOMAIN=
CLOUD_USER_NAME=
CLOUD_PASSWORD=
LOG_LEVEL=ALL
POLL_INTERVAL=60
EXECUTION_POOL_SIZE=2
REGISTER_WITH_IP=N
JYTHON_HOME=
GROOVY_HOME=
CUSTOM_MEM_ARGS=-Xms128m -Xmx4096m
CUSTOM_JAVA_OPTIONS=
CUSTOM_CLASS_PATH=
CUSTOM_INTERFACE_CLASS_NAME=
NTLM_PROXY_AUTH=N
AMW_IDLE_TIME=15
EPM_AGENT_INBOX=
OAUTH_ENABLED=
CLIENT_ID=
ENABLE_AUTO_COMMIT=N
RETRY_INTERVAL=10
FILE_UPLOAD_SIZE=50

```

3. `EPM_AGENT_HOME` はエージェントのホーム・ディレクトリの名前です。このフォルダには、`bin` および `lib` フォルダが含まれます。

`createappfolder.bat` を実行すると、スクリプトにより、移入された `EPM_AGENT_HOME` パラメータが自動的に作成されます。

フォルダの名前を変更すると、エージェントは新しいロケーションから実行され、ファイルは新しい `EPM_APP_DATA_HOME` フォルダに作成されます。

4. `EPM_APP_DATA_HOME` はアプリケーション・データ・フォルダの名前で、`config`、`log` および `script` フォルダが含まれます。また、`config` フォルダには空の証明書フォルダも含まれており、これは現時点では使用されていません。

`createappfolder.bat` を実行すると、スクリプトにより、移入された `EPM_APP_DATA_HOME` パラメータを含む INI ファイルが作成されます。


5. **AGENT_NAME** で、EPM 統合エージェントの一意の名前を指定します。

名前には文字と数字のみ使用できます。AGENT_NAME に記号または空白を含めることはできません。

6. **CLUSTER** で、エージェントが属するクラスタの名前を指定します。

名前には英数字のみ使用できます。記号(@)やアンパサンド(&)などの特殊記号は使用しないでください。クラスタの作成後は、名前を変更できません。

デフォルトのクラスタ名は **EPMCLUSTER** です。

 **ノート:**

クラスタの名前は、ここで参照される前に、データ統合ですでに定義されている必要があります。詳細は、[クラスタの追加](#)を参照してください。

このパラメータは必須です。

7. **PORT** で、EPM 統合エージェントが実行されるポート番号を指定します。

このパラメータは必須です。

8. **CLOUD_URL** で、エージェントを認証して開始するのに使用される EPM Cloud URL を指定します。

これは、次の例に示すように、エージェントに関連付けられた EPM インスタンスの URL です:

```
https://example-pbcs.us1.oraclecloud.com
```

 **ノート:**

Cloud_URL の最後に、"epmcloud"または"HyperionPlanning"を含めないでください。

このパラメータは必須です。

9. **CLOUD_DOMAIN** で、EPM Cloud URL の一意の名前を指定します。

アイデンティティ・ドメインは、サービス・インスタンスへのアクセスを必要とするユーザーのアカウントを制御します。また、権限を持つユーザーがアクセスできる機能を制御します。サービス・インスタンスはアイデンティティ・ドメインに属します。

管理者はユーザーに表示されるドメイン名を更新できますが、データ管理は、お客様がサービスの契約をした際に指定された元のドメイン名を必要とします。データ管理から EPM Cloud 接続を設定している場合は、ドメイン別名は使用できません。

 **ノート:**

Gen 2 データ・センター以外は、**CLOUD_DOMAIN** パラメータが必要です。

10. **CLOUD_USER_NAME** で、EPM Cloud 環境に存在する管理者ユーザー名を指定します。

ユーザー名は、SSO ユーザー名ではなく、ネイティブ・ユーザーである必要があります。このパラメータは必須です。

11. **CLOUD_PASSWORD** で、管理者ユーザー用の暗号化されたパスワード文字列を指定します。

encryptpassword.bat (Windows の場合)または ecryptpassword.sh (Linux の場合)を実行して、EPM Cloud ユーザー用のパスワードを暗号化し、暗号化されたパスワード文字

列を取得できます。詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

このパラメータは必須です。

- 12. LOG_LEVEL** で、ローカル EPM 統合エージェントのログ・レベルを指定します。

有効なログ・レベルは次のとおりです：

- **すべて** — 最も詳細なレベルを表示し、すべてのログ文を印刷します。
- **情報** — 選択された重要なログを印刷します。
- **エラー** — 最小ロギングを実行し、致命的エラーのみ印刷されます。

すべてのログは、`APPDATA_HOME\logs` フォルダ内のファイルに書き込まれます。

このパラメータはオプションです。「**すべて**」がデフォルトのログ・レベルです。

- 13. POLL_INTERVAL** で、非同期モードで待機してポーリングする時間間隔を指定します。

時間間隔は秒で指定されます。デフォルトの時間間隔は **120** 秒です。

- 14. REGISTER_WITH_IP** で、ホスト名を持つエージェントを登録するには **N** を指定します。IP アドレスを持つエージェントを登録するには **Y** を指定します。

このパラメータはオプションです。

- 15. EXECUTION_POOL_SIZE** で、並列で実行できるジョブの数を指定します。

デフォルトの実行プール・サイズは **2** です。

このパラメータはオプションです。

- 16. JYTHON_HOME** で、Jython がインストールされている最上位レベルのディレクトリを指定します。

これは、Jython をスクリプト言語として使用している場合のみ必要です。

- 17. GROOVY_HOME** で、Groovy がインストールされている最上位レベルのディレクトリを指定します。

これは、Groovy をスクリプト言語として使用している場合のみ必要です。

- 18. CUSTOM_MEM_ARGS** で、カスタム・メモリー引数を使用して Java に渡す標準メモリー引数を上書きするための変数を指定します。

たとえば、パラメータ `CUSTOM_MEM_ARGS=-Xms128m -Xmx4096m` では、**128 MB** が当初の最小メモリー・サイズで、**4096 MB** が最大メモリー・サイズです。

このパラメータはオプションです。

- 19. CUSTOM_JAVA_OPTIONS** で、追加の Java ランタイム・パラメータを指定します。

`CUSTOM_JAVA_OPTIONS` 設定は、EPM 統合エージェントがプロキシ認証メソッドを使用するように構成することもできます。

システムでは次の認証メソッドがサポートされています：


- 単純
- 基本
- ダイジェスト

- NTLM

プロキシ認証メソッドを使用する場合は、プロキシ認証メソッドに基づいて、プロキシ・ホスト名、プロキシ・ポート、プロキシ・ユーザー名および暗号化パスワードをこのフィールドに指定します。

プロキシで Basic 認証を使用する場合は、**CUSTOM_JAVA_OPTIONS** を次のように設定します:

```
-Djdk.http.auth.tunneling.disabledSchemes=""
```

 **ノート:**

jdk.http.auth.tunneling.disabledSchemes ネットワーキング・プロパティに Basic を追加したときに、Oracle Java Runtime では Basic 認証スキームがデフォルトで非アクティブ化されています。その結果、HTTPS のトンネルを設定するときに Basic 認証を必要とするプロキシは、デフォルトでは成功しません。必要な場合は、**jdk.http.auth.tunneling.disabledSchemes** ネットワーキング・プロパティからこの認証スキームを削除することにより、それを再アクティブ化できます。

単純プロキシ認証メソッド:

単純プロキシ認証を有効にするには、上部の「**NTLM_PROXY_AUTH**」フィールドを「**N**」に設定し、「**CUSTOM_JAVA_OPTIONS**」に次のパラメータを含めます:

HTTP の場合は、`-Dhttp.proxyHost=proxy.example.com -Dhttp.proxyPort=80` と指定します

HTTPS の場合は、`-Dhttps.proxyHost=proxy.example.com -Dhttps.proxyPort=443` と指定します

基本またはダイジェスト・プロキシ認証メソッド:

基本またはダイジェスト・プロキシ認証を有効にするには、上部の「**NTLM_PROXY_AUTH**」フィールドを「**N**」に設定し、「**CUSTOM_JAVA_OPTIONS**」に次のパラメータを含めます:

```
-DproxyHost=proxy.example.com -DproxyPort=8080 -DproxyUser=username -DproxyPassword=encryptedpassword
```

NTLM プロキシ認証メソッド:

NTLM プロキシ認証を有効にするには、「**NTLM_PROXY_AUTH**」フィールドを「**Y**」に設定し、「**CUSTOM_JAVA_OPTIONS**」のパラメータに次を含めます:

```
-DproxyHost=proxy.example.com -DproxyPort=8080 -DproxyUser=username -DproxyPassword=encryptedpassword -DproxyDomain=domain
```

20. **CUSTOM_INTERFACE_CLASS_NAME** で、`EpmAgentInterface` を実装する `custom.jar` のクラスの完全修飾クラス名を指定します。

たとえば、`com.mycompany.agent.implementation.MyImplementation` と指定します。

このパラメータはオプションです。

21. **CUSTOM_CLASS_PATH** で、`jar` のフルパスおよび名前を指定します(例:
`C:\AgentDeployment\agenthome\myJarFolder\custom.jar`)

このパラメータはオプションです。

Microsoft Java Database Connectivity (JDBC) ドライバを使用して EPM 統合エージェントで SQL Server に接続する場合は、[EPM 統合エージェントでの SQL Server 用の Microsoft JDBC ドライバの構成](#)を参照してください。

22. NTLM プロキシ認証メソッドを使用するには、**NTLM_PROXY_AUTH** で **Y** を指定します。

NTLM プロキシ認証を使用する場合は、**CUSTOM_JAVA_OPTIONS** でさらにプロキシ・パラメータを指定する必要があります。

基本またはダイジェスト・プロキシ認証を使用する場合、またはプロキシ認証を使用しない場合は、**N** を指定します。

ノート:

スクリプトに Jython または Groovy を使用する場合は、**JYTHON_HOME** または **GROOVY_HOME** を設定します。

拡張機能にカスタム Java を使用する場合は、**CUSTOM_JAVA_OPTIONS**、**CUSTOM_INTERFACE_CLASS** を設定します。

23. **AMW_IDLE_TIME** で、自動化されたメンテナンス・ウィンドウ(AMW)のダウンタイム中または未スケジュールのメンテナンス中に非同期モードで実行するエージェントのアイドル時間値を指定します。

AMW_IDLE_TIME パラメータ値は分単位で設定され、デフォルト設定は 15 分です。より長いアイドル時間を定義することが可能ですが、15 分よりも短いアイドル時間の値は指定できません。**AMW** ダウンタイムは連続した時間間隔で、この間にビジネス・プロセスの自動化されたメンテナンス・タスクが実行されます。

24. **Client_ID** に、アイデンティティ・ドメイン管理者がモバイル・アプリケーションを OAuth 用に構成するときに生成されるクライアント ID を入力します。これは、アプリケーションの「構成」タブの「**全般情報**」の下に表示されます。詳細は、[EPM 統合エージェントでの OAUTH オプションの有効化](#)を参照してください。

クライアント ID は、アイデンティティ・ドメイン管理者がモバイル・アプリケーションを OAuth 用に構成するときに生成されます。これは、アプリケーションの「構成」タブの「**全般情報**」の下に表示されます。

25. **ENABLE_AUTO_COMMIT** で、自動コミット動作を指定します。

ENABLE_AUTO_COMMIT パラメータは、すべてのデータベース操作が実行時にコミットされるトランザクションであるかどうかを決定します。このパラメータは、デフォルトで自動コミットを実行する、あるバージョンの **JDBC** ドライバ(たとえば、**IBM DB2**)でのエージェント処理中に発生する可能性があるエラーに対処します。

デフォルトは **N** です。

26. **RETRY_INTERVAL** で、指定された秒数後の再試行ロジック期間を指定します。

デフォルトは **10** (秒)です。

27. **FILE_UPLOAD_SIZE** で、繰返しでのファイル・アップロードのサイズを選択したメガバイト(MB)値で指定します。

デフォルトでは、ファイル・アップロード・サイズは **50 (MB)** です。

28. agentparams.ini ファイルへの変更を保存します。

開始パラメータを定義した場合は、エージェントを開始できない場合に EPM 統合エージェントの開始パラメータまたはネットワーク接続の問題を特定できる診断モードで、EPM 統合エージェントを実行できます。詳細は、[診断モードでの EPM 統合エージェントの実行](#)を参照してください。

EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化

encryptpassword.bat を使用して、INI ファイルで参照される Oracle Enterprise Performance Management Cloud ユーザー・パスワードを暗号化できます。

EPM Cloud ユーザー・パスワードを暗号化するには:

1. コマンド・プロンプトで次のように入力します:

```
Agent Home\EPMAgent\bin\encryptpassword.bat
```

ノート:

Linux ユーザーは次のように入力します:

```
Agent Home\EPMAgent\bin\encryptpassword.sh
```

EPM パスワード・ユーティリティが起動したら、**クラウド・パスワードの入力**にパスワードを入力し、**[Enter]**を押します。

エージェントのパスワード・エンコーダによって、文字の置換に基づく不明瞭化アルゴリズムが使用されます。エンコーダでは、次の文字のみがサポートされます:

- A
- B
- C
- D
- E
- F
- G
- H
- I
- J
- K
- L
- M
- N
- O

- P
- Q
- R
- S
- T
- U
- V
- X
- Y
- Z
- a
- b
- c
- d
- e
- f
- g
- h
- i
- j
- k
- l
- m
- n
- o
- p
- q
- r
- s
- t
- u
- v
- w
- x
- y
- z
- 0

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- ~
- !
- @
- #
- \$
- ?
- *
- (
-)
- -
- +
- ,
- /
- <

2. **暗号化パスワード:**の後に表示される暗号化パスワードをコピーします。

```
----- EPM Agent Password Utility -----  
Enter cloud password:  
Encrypted Password is :  
b8Nx5u7Er83Rxhj5WDKsXQ[
```

EPM 統合エージェントの開始に使用される INI の `CLOUD_PASSWORD` パラメータに、暗号化パスワードを貼り付けます。

OCI (Gen2)環境での OAuth 2.0 承認プロトコルの使用

EPM 統合エージェントは、OAuth 2.0 認証プロトコルを使用して OCI (Gen 2) Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境にアクセスできます。OAuth は、ユーザー・セキュリティ情報(ユーザー名、パスワードなど)がなくても、サービスが別のサービスを使用できるようにするオープン標準の承認プロトコルです。

OAuth 2.0 承認の使用のプロセスの説明

次のステップは、EPM 統合エージェントの OAuth 2.0 認証を設定する方法をおおまかに示しています。

OAuth 2.0 を設定するには:

1. **パブリック・クライアントとしてのアプリケーションの登録** - アイデンティティ・ドメイン管理者が、アプリケーションを Oracle Cloud Identity Services のパブリック・クライアントとして登録します。ドメイン管理者は、クライアントを登録して適切な登録情報をクライアントのユーザーに提供することで、この認可を提供します。OAuth2 はアプリケーションに適用されます。サブスクリプション全体ではありません。

詳細は、[Oracle Cloud Identity Services のパブリック・クライアントとしてのアプリケーションの登録](#)を参照してください。

2. **EPM 統合エージェントの agentparams.ini の構成** - EPM 統合エージェントの OAuth 認証を有効にし、アイデンティティ・ドメイン管理者がモバイル・アプリケーションを OAuth 用に構成するときに生成されるクライアント ID を指定し、クラウド URL および EPM_APP_DATA_HOME を指定します。

詳細は、[EPM 統合エージェントでの OAUTH オプションの有効化](#)を参照してください。

3. **トークンの再生成** - createoauth token.bat ファイル(Windows の場合)または createoauth token.sh (Linux の場合)を実行して、アクセス・トークンおよびリフレッシュ・トークンが自動的に再生成されるようにします。

詳細は、[createoauth token.bat または createoauth token.sh ファイルの実行によるトークンの生成](#)を参照してください。

Oracle Cloud Identity Services のパブリック・クライアントとしてのアプリケーションの登録

Oracle Cloud Infrastructure (OCI) / Gen 2 アーキテクチャ上の Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境では、環境でのパスワードの使用を回避するという要件を満たすために、EPM Cloud で OAuth 2 アクセス・トークンを使用して REST API を発行できます。

OAuth 2 を使用した認証の設定

EPM 統合エージェントが OCI (Gen 2) Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境にアクセスするために、EPM Cloud サービス管理者はドメイン管理者に、OAuth 2 クライアントを設定し、Identity Domain Cloud Service (IDCS) URL、アプリケーション・スコープおよびクライアント ID を提供するよう要求する必要があります。

クライアントの登録

最初のステップは、クライアント・アプリケーションからのリクエストを認可するようにサービス・プロバイダ構成を更新することです。セキュリティ対策として、Oracle Cloud リソースにアクセスするクライアント・アプリケーションはそうすることを認可

される必要があります。ドメイン管理者は、クライアントを登録して適切な登録情報をクライアントのユーザーに提供することで、この認可を提供します。

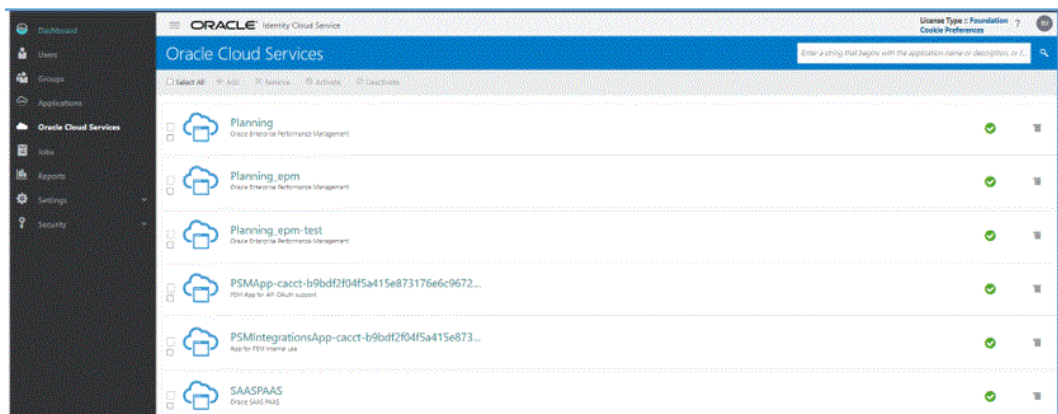
クライアントは、パブリック(データ・センター外)または機密にすることができます。パブリック・クライアントには `client_id` が割り当てられます。機密クライアントは、`client_id` に加えてクライアント・シークレットも持ちます。クライアントは、特定のスコープにアクセスすることも認可されます。選択するアプリケーションのタイプによって、アクセス・トークンのリクエストに使用できる、許可される権限付与タイプが決まります。

クライアント・アプリケーションは、サーバー・リソースにアクセスするためにアクセス・トークンを必要とします。アクセス・トークンを取得するために、クライアントは **IDCS** でサポートされるアクセス権限付与タイプの 1 つを実装します。[リフレッシュ・トークン権限付与タイプ](#)を参照してください。

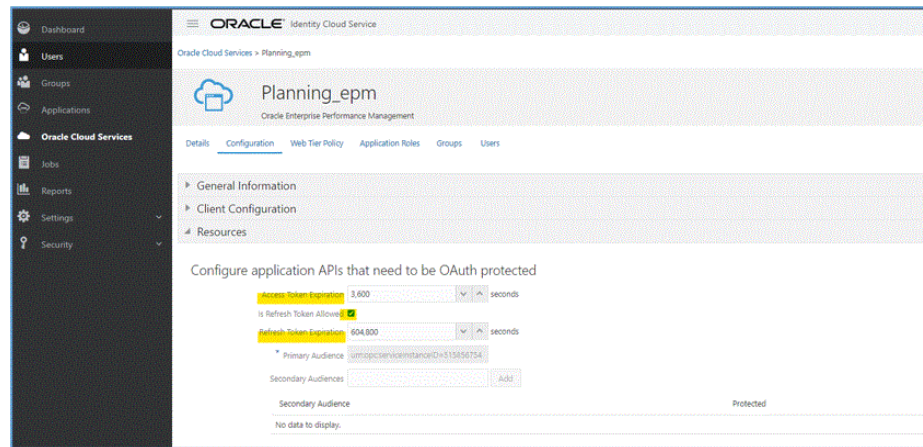
Identity Cloud Service ドメイン管理者は、このトピックのステップに従って、リクエストされたクライアントの **Identity Cloud Service** 管理者コンソールでパブリック・クライアントを作成します。次に、ドメイン管理者は、**Identity Cloud Service** アプリケーション URL およびクライアント ID を **EPM Cloud** サービス管理者と共有します。

クライアントを登録するための **Identity Cloud Service** 管理者のタスク:

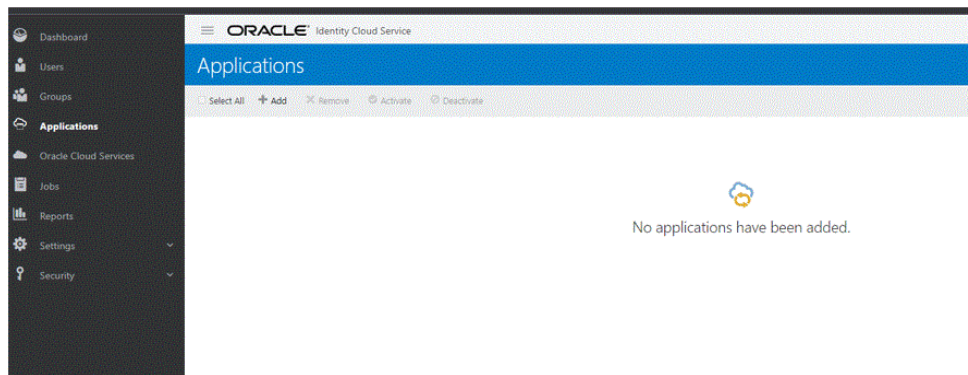
1. **Identity Cloud Service** 管理者コンソールにドメイン管理者としてログインします。



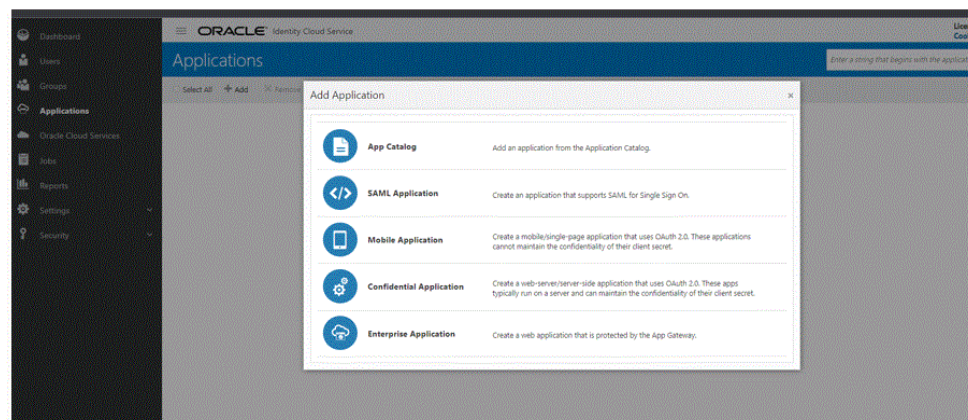
2. 保護される OAuth 2 API のトークン・プロパティを構成します:
 - a. 「ダッシュボード」ドローワーから、「**Oracle Cloud Services**」をクリックし、クラウド・サービスを選択します。
 - b. 「構成」タブの「リソース」で、「**リフレッシュ・トークンの許可**」チェック・ボックスを選択します。



- c. オプション: 「アクセス・トークンの有効期限」および「リフレッシュ・トークンの有効期限」を変更します。「アクセス・トークンの有効期限」の値として 3600 (1 時間)、「リフレッシュ・トークンの有効期限」の値として 604,800 (7 日間)をお勧めします。
 - d. 「保存」をクリックします。
3. 「アプリケーション」ドロワーから、「追加」をクリックします。

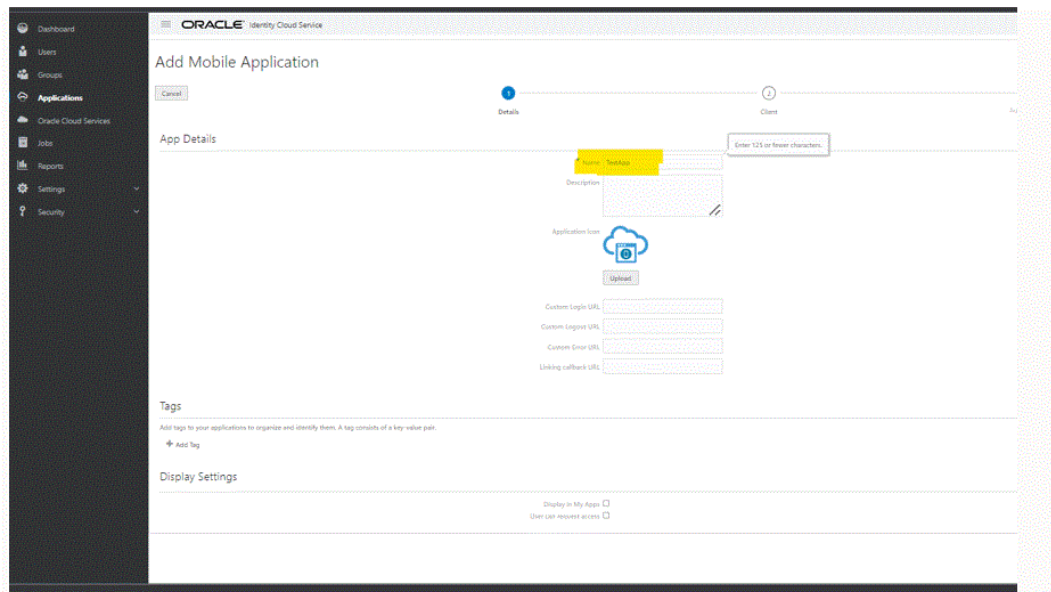


4. アプリケーションの追加ページから、「モバイル・アプリケーション」を選択します。

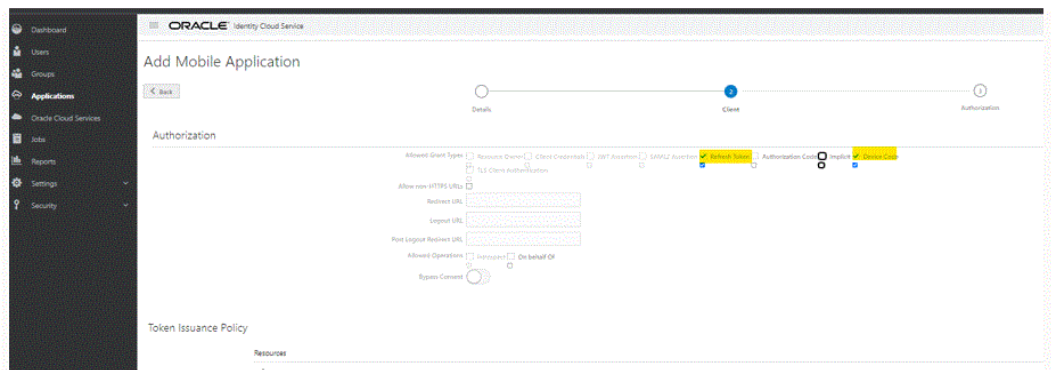


モバイル・アプリケーションの追加の詳細は、[モバイル・アプリケーションの追加](#)を参照してください。

5. 「アプリケーション詳細」セクションの「名前」に、REST クライアントの名前を入力します。

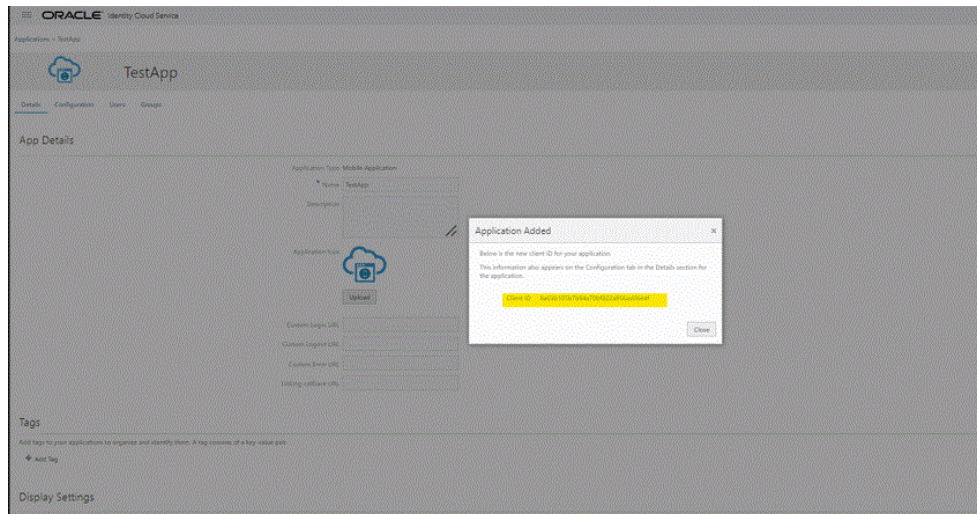


6. オプション: 必要に応じてその他の詳細を追加します。
7. 「次」をクリックします。
8. 「認可」セクションの「許可される権限付与タイプ」で、「リフレッシュ・トークン」および「デバイス・コード」チェック・ボックスを選択します。

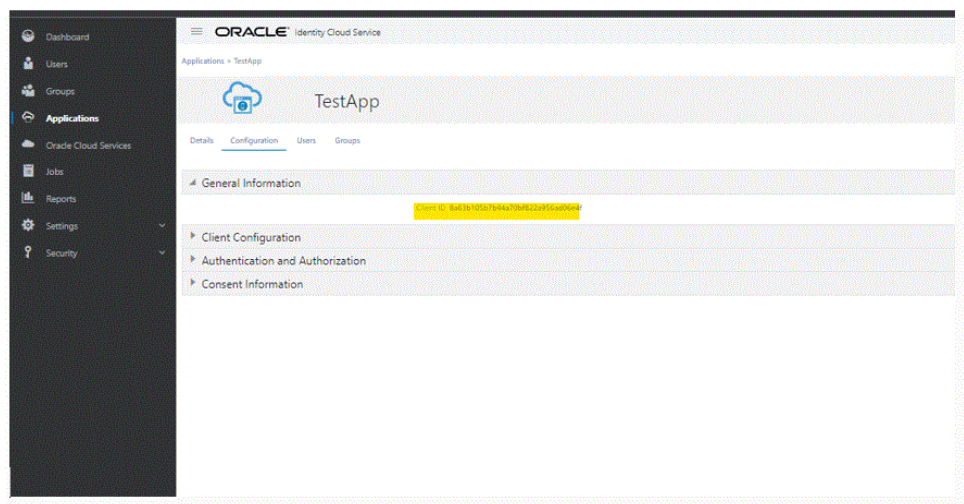


9. 「次」をクリックし、「終了」をクリックします。

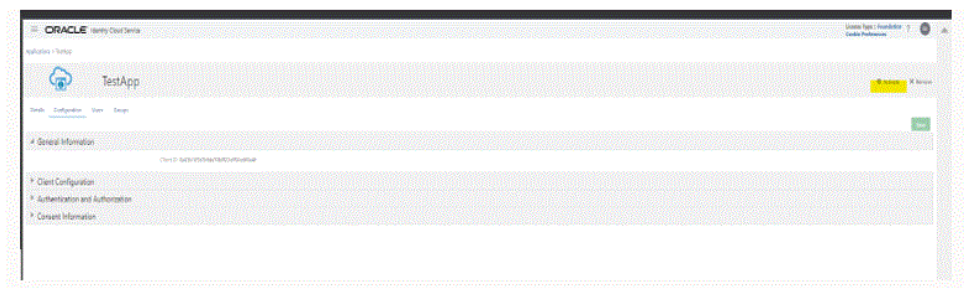
アプリケーションが追加されましたページに、生成されたクライアント ID が表示されます。



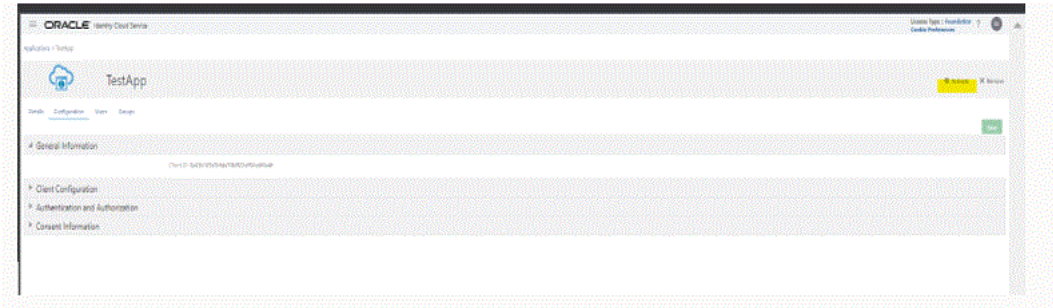
このクライアント ID は、アプリケーションの「構成」タブの「詳細」セクションにも表示されます。



10. この ID をエージェントの `agentparams.ini` の `Client_ID` フィールドにコピーします。EPM 統合エージェントでの OAUTH オプションの有効化を参照してください。
11. アプリケーションが追加されましたページで、「閉じる」をクリックします。
12. 「アクティブ化」をクリックしてクライアントをアクティブ化し、「OK」をクリックします。



メッセージアプリケーション名がアクティブ化されましたが表示されます。




EPM 統合エージェントでの OAUTH オプションの有効化

EPM 統合エージェントに OAuth 2.0 を使用して環境にアクセスするサービス管理者には、agentparams.ini ファイル内に、これらの詳細が必要です。

EPM 統合エージェントで OAUTH オプションを有効にするには:

1. C:\EPMAgentData\config ディレクトリに移動します。
2. agentparams.ini ファイルをテキスト・エディタで開きます。

 *agentparams.ini - Notepad

```
File Edit Format View Help
AGENT_NAME=EPMAGENT
CLUSTER=EPMCLUSTER
PORT=9090
CLOUD_URL=http://epmcloudserver
CLOUD_DOMAIN=
CLOUD_USER_NAME=
CLOUD_PASSWORD=
LOG_LEVEL=ALL
POLL_INTERVAL=60
EXECUTION_POOL_SIZE=2
REGISTER_WITH_IP=N
JYTHON_HOME=
GROOVY_HOME=
CUSTOM_MEM_ARGS=-Xms128m -Xmx4096m
CUSTOM_JAVA_OPTIONS=
CUSTOM_CLASS_PATH=
CUSTOM_INTERFACE_CLASS_NAME=
NTLM_PROXY_AUTH=N
AMW_IDLE_TIME=15
EPM_AGENT_INBOX=
OAUTH_ENABLED=Y
CLIENT_ID=
```

3. **Cloud_URL** で、エージェントを認証して開始するのに使用される Oracle Enterprise Performance Management Cloud URL を指定します。
これは、エージェントに関連付けられた EPM Cloud インスタンスの URL であり、たとえば `http://epmcloudserver` です。
4. **OAUTH_ENABLED** パラメータに、**Y** と入力します。
このフィールドに **N** と入力した場合、OAuth 認証ではなくパスワード認証が使用されます。
5. **Client_ID** に、アイデンティティ・ドメイン管理者がモバイル・アプリケーションを OAuth 用に構成するときに生成されるクライアント ID を入力します。これは、アプリケーションの「構成」タブの「**全般情報**」の下に表示されます。詳細は、[EPM 統合エージェントでの OAUTH オプションの有効化](#)を参照してください。

クライアント ID は、アイデンティティ・ドメイン管理者がモバイル・アプリケーションを OAuth 用に構成するときに生成されます。これは、アプリケーションの「構成」タブの「全般情報」の下に表示されます。

6. agentparams.ini ファイルを保存します。

createoauthtoken.bat または createoauthtoken.sh ファイルの実行によるトークンの生成

ドメイン管理者がクライアントを登録し、IDCS URL およびクライアント ID を提供した後、Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者は createoauthtoken.bat (Windows の場合) または createoauthtoken.sh (Linux の場合) を実行して、アクセス・トークンおよびリフレッシュ・トークンを自動的に再生成できます。

スクリプトによってアクセス・トークンおよびリフレッシュ・トークンが生成され、情報は oauth.properties ファイルに安全に保管されます。

アクセス・トークンは EPM Cloud 情報にアクセスするために使用され、アクセス・トークンの期限が切れると、新しいアクセス・トークンを生成するためにリフレッシュ・トークンが使用されます。

Note:

エージェントを停止し、リフレッシュ・トークンの有効期間(デフォルトで 7 日間)を超えて開始しない場合は、createoauthtoken.bat スクリプトを再実行して新しいトークンのセットを生成する必要があります。

createoauthtoken.bat (Windows) または createoauthtoken.sh (Linux) の実行

createoauthtoken.bat または createoauthtoken.sh を実行するには:

1. コマンド・プロンプトで、次に示すように createoauthtoken.bat または createoauthtoken.sh を実行し、**agent_parameters.ini** ファイルのパスを指定します。

たとえば、次のように指定します:

```
createoauthtoken.bat path to the agent_parameters.ini file.
```

または

```
createoauthtoken.bat "C:\my apphome\config\agentparams.ini"
```

2. createoauthtoken.bat C:\EPMAgent\apphome\config\agentparams.ini を実行すると、コマンド・プロンプト・ウィンドウに次のメッセージが表示されます。

```
D:\ORACLE_PROJECTS\Agent\EPMAgent\EPMAgent\agenthome\bin>createoauthtoken.bat ..\..\apphome\config\agentparams.ini
----- EPM Agent Oauth Utility -----
Open the below verification_uri in a web browser:
      https://idcs-deca433cc38c49c5b7149f43e98089f.identity.preprod.oraclecloud.com:443/ui/v1/device?user_code=KSJKBBGT
a. If prompted for credentials, enter the credentials.
b. When prompted for code, enter the user_code : KSJKBBGT
c. When the Successful message is displayed, close the browser window or tab.
d. Follow the above instructions and press enter key after completing the verification
   in step b within 5 minutes, after which you will see the below messages in command prompt.
      "Updating access token and refresh token in EPM Agent."

Updating access token and refresh token in EPM Agent.

----- EPM Agent Oauth Utility -----
D:\ORACLE_PROJECTS\Agent\EPMAgent\EPMAgent\agenthome\bin>
```

`verification_url` を Web ブラウザで開き、前述のページに示されているステップに従って `user_code` を確認します。`user_code` がブラウザで確認されたら、コマンド・プロンプトで **[Enter]** を押してプロセスを完了します。

- a. 資格証明を求められたら、EPM Cloud ユーザーの資格証明を入力します。
- b. コードを求められたら、`user_code` を入力します。
- c. 成功メッセージが表示されたら、ブラウザ・ウィンドウまたはタブを閉じます。
- d. 前述の手順に従い、5分以内にステップ b の確認を完了した後で **[Enter]** キーを押します。その後、コマンド・プロンプトに次のメッセージが表示されます:
「Updating access token and refresh token in EPM Agent (EPM エージェントでのアクセス・トークンおよびリフレッシュ・トークンの更新)」。

EPM 統合エージェントの Windows サービスとしての実行

EPM 統合エージェントは Windows サービスとしてインストールできるため、ユーザーはエージェントを独自の Windows セッションで実行できます。このサービスは、コンピュータの起動時に自動的に開始でき、一時停止や再起動も可能で、ユーザー・インタフェースは表示されません。Linux コンピュータでは、EPM 統合エージェントはバックグラウンド・プロセスとして開始されます。

次の点に注意してください。

- インストールされると、Windows サービス・コンソールからサービスを Windows サービスとして開始および停止できます。
- 異なるサービス名、エージェント名およびポートを持つ複数のエージェント・サービスを作成して、同時に実行できます。
- 実行時、サービス・ログは、`<serviceName>_<agent_name>_Service_<date>.log` という名前で、エージェントの `EPM_APP_DATA_HOME\logs` フォルダにあります。このログには、エージェントのすべてのコンソール出力が含まれます。
- ヘルプを表示するには、オプション `EPMAgentService.exe -help` を使用するか、Windows エクスプローラーで `EPMAgentService.exe` をダブルクリックします。
- サービスの開始後は、常にログ・ファイルをチェックしてください。
- エージェント名は `params.ini` ファイルに指定される必要があります。Install コマンドにパラメータとして渡すことはできません。

エージェントを **Windows** サービスとしてインストールするには、コマンド・プロンプトから次のコマンドを発行して、bin フォルダにある EPMAgentService.exe インストーラを実行します:

```
EPMAgentService.exe -install service_name path_to_agent_startup_parameter_file
```

- `service_name`: エージェントの **Windows** サービスの一意の名前を指定します。文字および数字を使用できます。スペースおよび特殊文字は使用できません。
- `path_to_agent_startup_parameter_file`: 開始時に使用される agentparams.ini ファイルが格納されているディレクトリのフルパスを指定します。

たとえば、次のように指定できます: C:\EPMAgentData\config\agentparams.ini

Windows サービスとしてのエージェントをアンインストールするには、コマンド・プロンプトから次のコマンドを実行します:

```
EPMAgentService.exe -uninstall service_name
```

EPM 統合エージェントの開始

EPM 統合エージェントは、コマンドラインから、EPM 統合エージェントの名前とファイル名、および開始時に使用される INI ファイルのフルパスを指定して開始できます。

開始時に、エージェントでは、選択した **Oracle Enterprise Performance Management Cloud** URL への認証呼出しを実行して、ユーザーの資格証明を認証します。認証に成功すると、EPM 統合エージェントは、エージェントのホストとポートを **EPM Cloud** 環境のデータベースに格納することによって、**EPM Cloud** 環境に登録されます。

ノート:

Windows サービスを使用してエージェントを開始する場合は、**Windows** サービス・コンソールを使用します。詳細は、[EPM 統合エージェントの Windows サービスとしての実行](#)を参照してください。エージェントを開始するのに **Windows** サービスを使用しない場合は、かわりに、次のステップで説明する **bat** ファイルを使用します。

EPM 統合エージェントを開始するには:

1. 「**スタート**」メニュー(Windows 10 および Windows 7)または「**スタート**」画面(Windows 8.1)から、**コマンド・プロンプト**を起動します。

管理者としてコマンド・プロンプトを実行するには、ショートカットを右クリックまたはタップしたままサブメニューを開き、「**管理者として実行**」をクリックまたはタップします。

2. 2 つのパラメータがある次のコマンドを入力します:

```
epmagent.bat Agent Name ini Parameter file name
```

- `Agent Name`: エージェントの一意の名前を指定します。文字および数字を使用できます。スペースおよび特殊文字は使用できません。

`Agent Name` パラメータは、agentparams.ini ファイルに指定されている場合は無視できます。

- *ini Parameter file name*: 開始時に使用される agentparams.ini ファイルのフルパスを使用したファイル名。

たとえば、エージェント名が agentparams.ini に指定されている場合は、次のように入力します:

```
epmagent.bat C:\EPMAgentData\config\agentparams.ini
```

エージェント名が agentparams.ini に指定されていない場合は、次のように入力します:

```
epmagent.bat myagentname C:\EPMAgentData\config\agentparams.ini
```

診断モードでの EPM 統合エージェントの実行

EPM 統合エージェントを診断モードで実行すると、EPM 統合エージェントを開始できないとき、エージェントの開始パラメータやネットワーク接続に関する問題を識別する方法が提供されます。診断モードを使用すると、システムでエージェントの開始ファイル内のパラメータに対して一連の検証を実行できます。エラーや無効なパラメータが検出されると、そのパラメータに関連するエラーが表示されます。

たとえば、クラウド・パスワードが暗号化されていない場合、メッセージ「Invalid CLOUD_PASSWORD.Please use the encryptpassword utility to generate the CLOUD_PASSWORD」が次のように表示されます:

```
Administrator: Command Prompt
---- Completed Execution of Job:1009 ----
Terminate batch job (Y/N)? Y
C:\EPMAgentDev\bin>epmagent.bat -d C:\EPMAgentDevData\yol\config\agentparams.ini
Initializing agent
Reading parameter File: C:\EPMAgentDevData\yol\config\agentparams.ini
Agent Name is: EPMAGENTDEMO
Agent started in debug mode. Checking configuration...
Checking password...
Checking Certificate...
Diagnostic check completed successfully. Please start the agent without -d option
C:\EPMAgentDev\bin>epmagent.bat -d C:\EPMAgentDevData\yol\config\agentparams.ini
Initializing agent
Reading parameter File: C:\EPMAgentDevData\yol\config\agentparams.ini
Agent Name is: EPMAGENTDEMO
Agent started in debug mode. Checking configuration...
Rewriting ini file in correct format. Backup of original available under temp directory
Checking password...
Checking Certificate...
Diagnostic check completed successfully. Please start the agent without -d option
C:\EPMAgentDev\bin>epmagent.bat -d C:\EPMAgentDevData\yol\config\agentparams.ini
Initializing agent
Reading parameter File: C:\EPMAgentDevData\yol\config\agentparams.ini
Agent Name is: EPMAGENTDEMO
Agent started in debug mode. Checking configuration...
Checking password...
EPMAGENT_110008 : Invalid CLOUD_PASSWORD: Please use the encryptpassword utility to generate the CLOUD_PASSWORD.
Checking Certificate...
Diagnostic check completed successfully. Please start the agent without -d option
C:\EPMAgentDev\bin>
```

Note:

診断モードでは、エージェントは EPM Cloud に登録されませんが、元の開始ファイルは一時ディレクトリにバックアップされます。

検証には次のチェックが含まれます:

- インターネットへのエージェント接続。エージェントから oracle.com へのテスト呼出しを含みます。
- エージェント内での EPM Cloud URL へのエージェント接続。

- お客様の環境でプロキシが有効になっている場合、プロキシ・タイプ(基本、ダイジェストまたは NTML)
- Linux/Mac OS の開始パラメータ・ファイル・エントリで二重引用符が使用されていること。二重引用符を使用すると、シェルでドル記号(\$)、バッククォート(`)、バックスラッシュ(\)および感嘆符(!)を解釈できます
- エージェントのパラメータ・ファイルでパスワードが暗号化されていること。
- パラメータの前または後ろの空白。空白が検出された場合、それらは削除され、パラメータ・ファイルが更新されます。
- ファイルで指定されているコメント。コメント行が検出された場合、診断モードの実行後に削除されます。

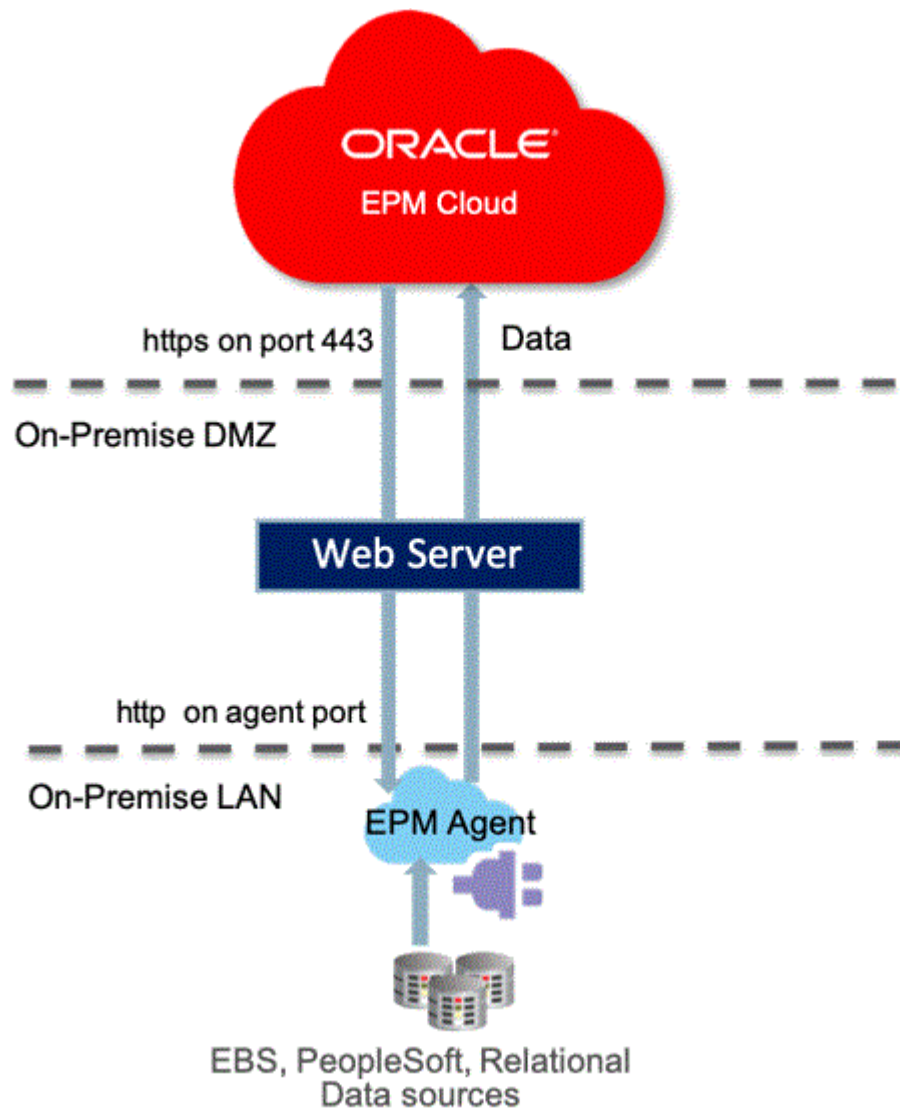
EPM 統合エージェントを診断モードで実行するには:

1. 「スタート」メニュー(Windows 10 および Windows 7)または「スタート」画面(Windows 8.1)から、**コマンド実行ダイアログ**のプロンプトを起動します。
2. **コマンド実行プロンプト**で、**EPM 統合エージェント**を開始します。
たとえば、**C:\EPMagent\bin\epmagent.bat** と入力します。
3. **コマンド実行プロンプト**で、**-d <path to startup parameters>**と入力して、エージェントを診断モードで実行します
たとえば、**-d C:\EPMAgentData\yoll\config\agentparams.ini** と入力します

同期モードの構成

同期モードで、Oracle Enterprise Performance Management Cloud からのインバウンド通信を有効にするゲートウェイとして Web サーバーを構成します。

一般的なデプロイメント・モデルは次に示します:



 ノート:

同期モードの詳細は、[EPM 統合エージェントの理解](#)および[エージェント・クラスターの理解](#)を参照してください。

Web サーバーを同期モードのゲートウェイとして構成するには:

1. CA からの信頼できる証明書を使用する HTTPS Web サーバーを構成します。
2. context/epmagent の要求をエージェント URL にルーティングするために、Web サーバー構成にリバース・プロキシを定義します。

たとえば、Apache サーバーを使用している場合は、次のエントリを httpd.conf ファイルに追加します:

```
VirtualHost *:443
    ProxyPreserveHost On
```

```
ProxyPass /epmagent http://Agent Server:9090/epmagent
ProxyPassReverse /epmagent http://Agent Server:9090/epmagent
/VirtualHost
```

- 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「エージェント」を選択します。
- 「エージェント・クラスタ」画面から、エージェントの名前を選択します。
- 「エージェント」タブの「Web URL」で、次のように Web URL を定義します:

```
https://WebServer URL
```

次のイメージは、「エージェント」タブの「Web URL」フィールドを示します。

EPMCLUSTER : Synchronous					Return
Agents			Assignments		
Name	Physical URL	Web URL	Description	Last Ping	
EPMAGENT	http://.us.oracle.com:9090	http://<WebServer URL>.us.oracle.com		Sep 13, 2019 05:40:55 PM	X

- エージェントが複数ある場合は、次のようにプロキシ設定を定義します:

```
agent1/epmagent http://Agent Server:9090/epmagent
agent2/epmagent http://Agent Server2:9090/epmagent
```

「エージェント」タブで、次のように Web URL を定義します:

```
https://WebServer URL/agent1
https://WebServer URL/agent2
```

ノート:

使用しているネットワークおよび Web サーバー管理を操作して、Web サーバーおよびプロキシ構成を構成することをお勧めします。

EPM 統合エージェントを使用した EPM Cloud とオンプレミス間の接続

この項では、EPM 統合エージェントを使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションとオンプレミス・データ・ソース間の接続を拡張する方法を説明します。

クイック参照:

- [オンプレミス・データ・ソースからのデータの抽出](#)
- [事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタの使用](#)
- [EPM 統合エージェントのドリルダウンの作成](#)
- [EPM 統合エージェントの理解](#)
- [エージェント・クラスタの理解](#)

- [EPM 統合エージェントでのライトバック](#)
- [EPM 統合エージェント・スクリプト](#)

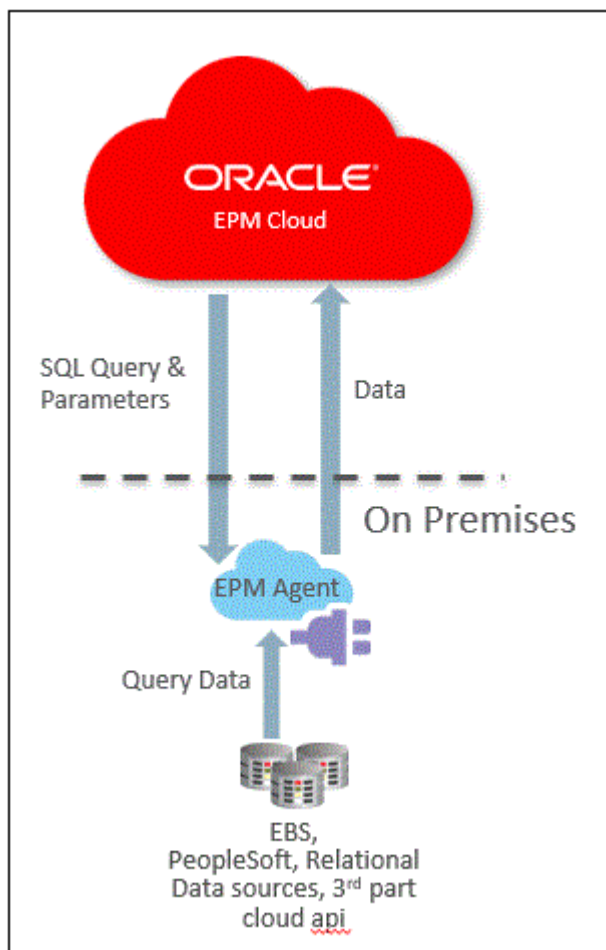
 ノート:

EPM 統合エージェントのインストールおよび構成の詳細は、[EPM 統合エージェントのインストールと構成](#)を参照してください。

EPM 統合エージェントの使用

EPM 統合エージェントは、オンプレミスまたは任意のシステム(サード・パーティのクラウドなど)からデータやメタデータを抽出して変換し、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud** に提供する完全に統合されたソリューションです。

カスタム SQL 問合せまたは事前パッケージ化済問合せを使用して、接続してオンプレミス・データ・ソースからデータをロードし、EBS および PeopleSoft General Ledger からデータをインポートできます。



EPM 統合エージェントの理解

EPM 統合エージェントは、同期および非同期の 2 つのモードでデプロイできます。

同期モードで統合が実行されると、Oracle Enterprise Performance Management Cloud では、クラスタ割当てに基づいてクラウドから適切な EPM 統合エージェントへの直接呼出しが開始されます。EPM 統合エージェントでは、データ抽出プロセスを実行し、データをクラウドに転送します。データが EPM Cloud に転送されると、そのデータはターゲット・アプリケーションにインポート、マップおよびロードされます。このモードでは、EPM Cloud が EPM 統合エージェントと直接通信するため、EPM Cloud からのインバウンド通信を受信するようにオンプレミス環境を構成します。

非同期モードで統合が実行されると、EPM Cloud では、EPM Cloud で実行する統合ジョブをキューに入れます。EPM 統合エージェントでは、指定された間隔でジョブ・キューを絶えずポーリングします。ジョブが検出されると、データ抽出ステップが実行され、データが EPM Cloud に転送されます。データが EPM Cloud に転送されると、そのデータはターゲット・アプリケーションにインポート、マップおよびロードされます。このモードでは、EPM Cloud と EPM 統合エージェント間のすべての通信が常に EPM 統合エージェントから開始されるため、インバウンド通信の構成は必要ありません。ただし、ポーリング頻度によっては実行に遅延が発生する場合があります。

EPM 統合エージェント・プロセスの説明

次のステップは、EPM 統合エージェントを使用して、オンプレミス・データ・ソースからデータまたはメタデータのサブセットをインポートして Oracle Enterprise Performance Management Cloud に直接ロードする方法の概要を説明しています。

1. データ統合で、SQL 問合せを記述し、ソース・システムからデータを抽出します。
詳細は、[SQL 問合せの作成](#)を参照してください。
2. SQL を使用して、ヘッダー・レコードを持つサンプル・データ・ファイルを生成します。
ヘッダー・レコード内の列名は、SQL の列名または列別名と完全に一致する必要があります。名前の大文字と小文字は区別されます。
3. 「アプリケーション」で、オンプレミス・データベース・データ・ソース・アプリケーションを作成し、サンプル・データ・ファイルを選択します。
4. ソース列をマップして、ターゲット・ディメンシオナリティへのソース・ディメンシオナリティの変換方法を指定します。
5. 統合を別のクラスタに割り当てます。クラスタは、独立した EPM 統合エージェントのグループです。クラスタにより、統合のグループ全体で受信ジョブ・トラフィックを分散します。
6. 統合を実行します。

オンプレミス・データ・ソースからのデータの抽出

EPM 統合エージェントを使用して、オンプレミス・データ・ソースからデータを抽出し、そのデータを Oracle Enterprise Performance Management Cloud に直接ロードできます。EPM 統合エージェントでは、オンプレミス・リレーショナル・データベースに対して問合せを実行し、データを EPM Cloud にロードします。

EPM 統合エージェントは、統合用のデータ・ソースとして定義され、実行されると、後でマップして選択したターゲット・アプリケーションにロードされるデータを提供します。

EPM 統合エージェントは、スクリプトを使用して拡張することもでき、サード・パーティのクラウド・アプリケーション、リレーショナル以外のソース、またはスクリプト、レポートや API を使用してアクセス可能なシステムを含む、その他のデータ・ソースにアクセスできます。

この機能を使用して抽出用に作成されたアプリケーションを登録するには、サンプル・データおよび 1 つのヘッダー・レコードのみが含まれたファイルを作成する必要があります。ファイルには、アプリケーション名や SQL 問合せなどは含まれません。ファイル名はアプリケーション名である必要があります。このタイプのデータ・ソースは、「オンプレミス・データベース」タイプのアプリケーションで、アダプタ・ベースのフレームワークを使用します。


オンプレミス・データベース・アダプタを作成するには:

1. データ統合で、問合せ定義を作成し、SQL 問合せを保存します。
これを行うには、[SQL 問合せの作成](#)を参照してください。
データ統合に SQL 問合せをすでに登録している場合は、このステップをスキップします。
2. オンプレミス・データベースから 1 つのヘッダー行を含むファイルを作成します。
ヘッダー行は、ターゲット・ディメンションのディメンション名と完全に一致する必要があります。ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できます。

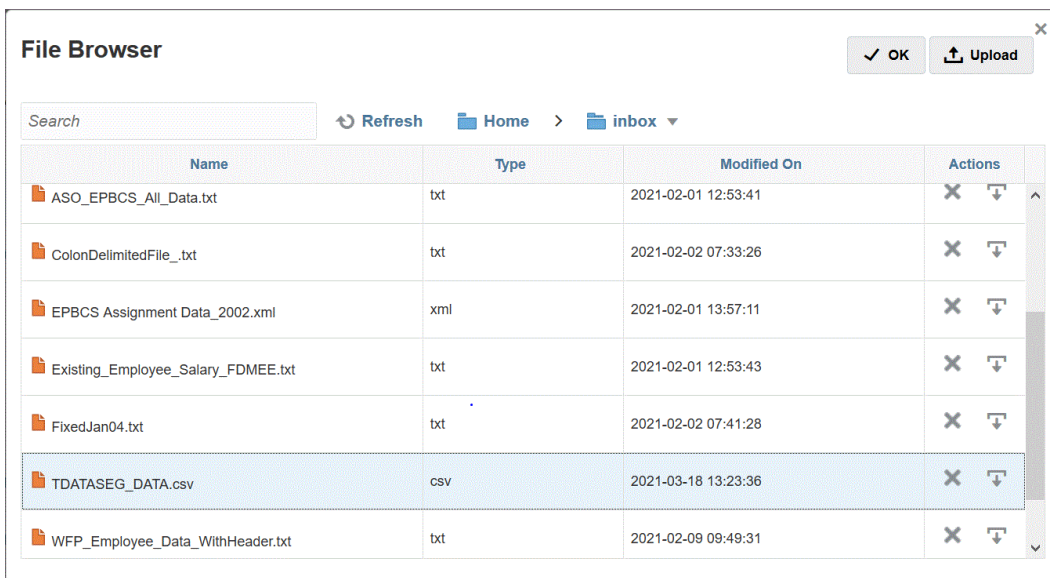
	A	B	C	D	E
1	Entity	Account	Product	Amount	
2	580	DPO	P_200	1233.98	
3	580	7300	P_200	45100.56	
4	580	7850	P_200	4000.33	
5	580	Capital Eq	P_200	-11900.7	
6	511	NI	P_200	17744.81	
7	580	NI	P_200	100	
8	580	NI	P_200	700	

3. ファイルを、ヘッダー行を持つ CSV フォーマット・ファイルとして保存します。
ターゲット・アプリケーションを登録するとき、ファイル・ブラウザを使用してファイルをアップロードします。
4. オンプレミス・データベース・データ・ソースを作成します:
 - a. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
 - b. アプリケーション・ページで、**+** をクリックします。

- c. アプリケーションの作成の「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
- d. 「タイプ」から、オンプレミス・データベースを選択します。
- e. 「ファイル」から、ステップ 1 で作成したファイルを選択します。

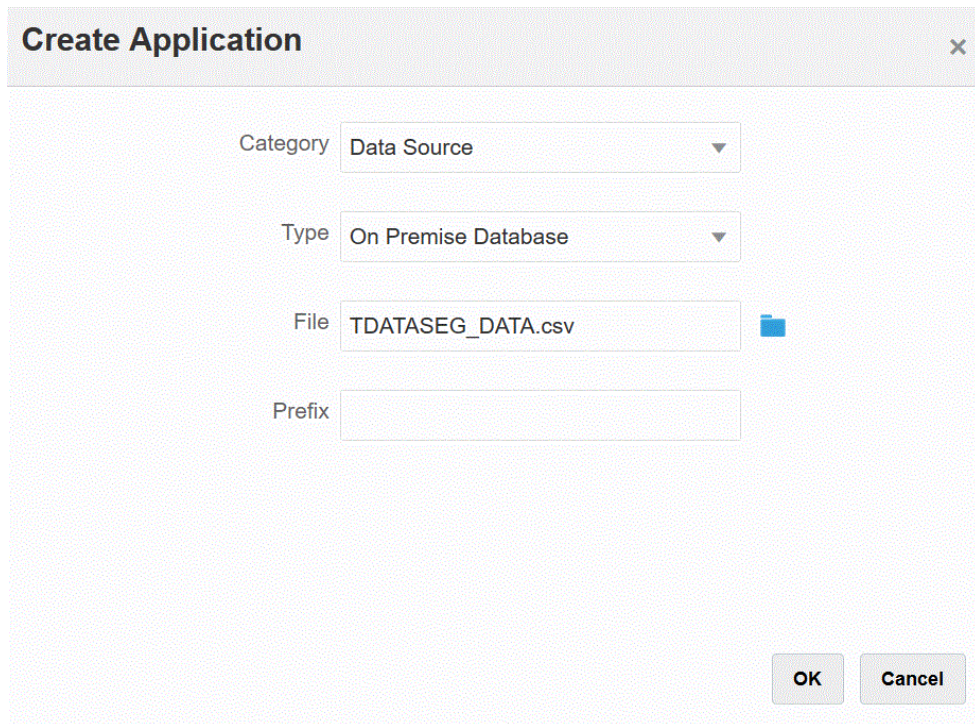
 をクリックし、ファイル・ブラウザ・ページでファイルを参照します。


- 5. 要求されたら、ステップ 1 で作成したファイルを選択します。



- 6. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。



7. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。
8. 「アプリケーション」で、ステップ 3-7 で作成したオンプレミス・データ・ソース・アプリケーションの横にある  をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
9. アプリケーション詳細ページで、「オプション」タブをクリックします。
10. データ抽出問合せで、ファイルに対して実行する SQL 問合せの名前を指定します。
11. 「区切り文字」で、ファイルで使用する区切り文字のタイプを選択します。

使用可能な区切り記号は次のとおりです:

- カンマ(,)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 垂直棒(|)
12. 資格証明ストアで、EPM 統合エージェントで使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプは次のとおりです:

- クラウド
- ファイル

「クラウド」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションにユーザー名/パスワード/接続文字列を格納します。

「ファイル」資格証明ストア・タイプの場合は、JDBC URL、ユーザー名およびパスワードを格納するためにオンプレミス環境にファイルを作成します。ファイル名は `appname.cred` という名前で、`config` ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@host:port/service
username=apps
password=w+Sz+WjKpL8 [
```

ノート:

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` ユーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

13. 「JDBC ドライバ」で、データベース管理システム(DBMS)への接続時に使用する JDBC ドライバのタイプを選択します。

JDBC ドライバの使用可能なタイプは次のとおりです:

- Microsoft SQL Server
- Oracle

14. JDBC URL で、JDBC ドライバ URL 接続文字列を指定します。

JDBC ドライバ URL 接続文字列により、Java を使用してリレーショナル・データベースに接続できます。

Oracle Thin JDBC ドライバの場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:

```
jdbc:oracle:thin:@host:port:sid
jdbc:oracle:thin:@host:port/service
```

MS SQL Server の場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:

```
jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname
```

15. 「ユーザー名」で、オンプレミス・データベースのユーザー名を指定します。
16. 「パスワード」で、オンプレミス・データベースのパスワードを指定します。
17. 「フェッチ・サイズ」で、問合せに対する各データベースのラウンド・トリップでフェッチされる(ドライバで処理される)行数を指定します。
18. 「保存」をクリックします。

次のイメージは、アプリケーション・フィルタを示します:

Application Details: TDATASEG_DATA		Save
Dimensions Options Set Defaults		
Property Name	Property Value	
Data Extract Query	SQLQUERY	
Delimiter	,	
Credential Store	Cloud	
JDBC Driver	Oracle	
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<host>:<port>:<sid>	
Username	administrator	
Password	*****	
Fetch Size	1000	

アプリケーション・オプションの編集

オンプレミス・データベース・ソースを使用するとき、追加のアプリケーションを指定して、選択した条件を満たすレコードのみを返すようにできます。フィルタ条件は 1 つのみでも、複数でも指定でき、戻す値も厳密に指定できます。

オンプレミス・データ・ソースに追加のアプリケーション・オプションを適用するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションの横にある **...** をクリックします
3. オンプレミス・データ・ソースを選択し、「**オプションの編集**」をクリックします。
4. **オプションの編集** ページで、「**追加**」をクリックします。
空白のエントリ・フィールドが表示されます。
5. 「**名前**」に、フィルタの名前を入力します。
たとえば、「**ロケーション**」または「**期間**」と入力します。
入力した名前はバインド・パラメータ、つまり SQL 文の実際の値のプレースホルダです。バインド変数は ~ 文字で囲まれる必要があります。たとえば、"Period" をバインド変数として使用するには、~PERIOD~ と指定します。名前は、SQL 問合せで指定した名前と完全に一致する必要があります。
6. 「**表示プロンプト**」で、データ統合の「**統合の編集**」ページでのフィルタの表示プロンプトの名前を指定します。
7. 「**表示順**」で、「**統合の編集**」ページでのフィルタの表示順を指定します。
このフィールドが空白の場合、カスタム・フィルタを表示できず、デフォルト値がフィルタ値として使用されます。
たとえば、フィルタ・リストの 99 番目にフィルタを表示するには **99** と入力します。表示順は低い順にリストされます。
8. 「**表示レベル**」で、フィルタが表示されるレベルを示すための「**ルール**」を選択します。
9. 「**検証タイプ**」で、「**なし**」を選択します。
10. 「**OK**」をクリックします。

次のグラフィックは、データ管理で「期間」および「ロケーション」アプリケーション・フィルタを設定する方法を示します：

Edit Options: TDATASEG_DATA Save

Name	Display Prompt	Display Order	Property Level	Validation Type	Validation Object	Condition List
Period	Period	91	Integration			
Location	Location	99	Integration			
EXTRACT_QUERY	Data Extract Query	10	Application	None		
DELIMITER	Delimiter	20	Application	Lookup Valdate	COLUMN_DELIMITER_LOV	
CREDSTORE	Credential Store	22	Application	Lookup No Val...	ONPREMISE_CREDSTO...	
JDBC_DRIVER	JDBC Driver	24	Application	Lookup No Val...	JDBC_DRIVER	
JDBC_URL	JDBC URL	26	Application	None		
DB_USER	Username	28	Application	None		
DB_PASSWORD	Password	30	Application	None		
FETCH_SIZE	Fetch Size	32	Application	None		

次のページは、データ統合の「統合の編集」ページに「期間」および「ロケーション」フィルタを表示する方法を示します。

Edit Integration: QEDEMO < Back Next > Save Cancel

Options		Filters
Name	Condition	Value
Period	==	Jan-15
Location	==	Vision_LOC1

SQL 問合せの作成

「問合せ」オプションを使用すると、SQL データ・ソースの作成時に SQL 問合せ定義を保存できます。このタイプのデータ・ソースはオンプレミス・データベース・アダプタに関連付けられ、これにより、EPM 統合エージェントを使用して、オンプレミス・データベースからデータを抽出して Oracle Enterprise Performance Management Cloud にロードできます。

1. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」、「問合せ」の順にクリックします。
2. 「問合せ」画面で、「追加」(+)をクリックします。
3. 「問合せの作成」画面の「問合せ名」で、SQL 問合せ名を指定します。

問合せ名は、SQL データ・ソースをターゲット・アプリケーションに登録する際にデータ抽出問合せを識別するために、データ管理の「アプリケーション・フィルタ」ページでも使用されます。

4. 「問合せ文字列」で、ファイルのヘッダー行に基づいてデータを抽出するのに使用する SQL 文を指定します。

ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できます。

ヘッダー行の文字列を指定するとき、文字列が大/小文字混在の場合は、文字列を二重引用符で囲みます。大/小文字混在の文字列が二重引用符で囲まれていない場合は、大文字として解決されます。

たとえば、ヘッダー行で別名 Acct、Prod、Ent、Amt、Loc、Dat を使用する場合、次のように値を入力できます：

```
SELECT ENTITYX AS "Ent" ,ACCOUNTX AS "Acct",UD3X AS "Prod",AMOUNTX AS "Amt",
L.PARTNAME "Loc", P.PERIODDESC AS "Dat"FROM TDATASEG T, TPOVPARTITION L,
TPOVPERIOD P WHERE T.PARTITIONKEY = L.PARTITIONKEY AND T.PERIODKEY =
P.PERIODKEY AND L.PARTNAME = ~LOCATION~ AND P.PERIODDESC = ~PERIOD~
```

Create Query

Query Name

Query String

```
SELECT Account, Entity, Company, Amount, Dataview
from ALLSYSTEMDATA
WHERE FULLPERIOD = ~PERIOD~ AND PARTNAME = ~LOCATION~
```

5. 「保存」をクリックします。

SQL 問合せでの条件の使用

WHERE 句に続けて、SELECT 文によって返される行の検索条件を指定できます。検索条件は、条件が特定の行について true に評価されたときに値を返します。

有効な条件は次のとおりです:

- 等しい
- 範囲
- 類似
- が次の範囲にない
- 含む

次の点に注意してください。

- SQL 問合せで選択した条件によって返されるパラメータは、データ管理のターゲット・アプリケーション・フィルタ・ページで指定します。
- 複雑な問合せに含まれる=(等しい)記号は、\$パラメータより前に置く必要があります。
- ターゲット・アプリケーション・パラメータには、IN,BETWEEN,NOT IN のように、カンマで区切った値を含めることができます。
- システムによってバインド・パラメータのデータ型が割り当てられます。数値および日付値は、整数および日付として処理されます。他の値はすべて、文字列として扱われます。
- 条件が設定されたフィルタは、データ統合の統合の実行ページの「フィルタ」タブで使用できます。

次の表では、SQL 問合せで使用できる条件について説明します。

条件	説明
EQUAL	<p>2 つの式が等しいかどうかをチェックします。式が等しい場合、条件は true であり、一致したレコードを返します。</p> <p>次の SQL 文が EQUAL 条件について実行されると、顧客 ID が Smith と等しいレコードが返されません:</p> <pre>SELECT * FROM Customers WHERE CustomerID=1</pre>
BETWEEN	<p>特定の範囲の間の値をチェックし、一致した値を返します。</p> <p>BETWEEN 条件は、両端の値を含みます。開始値と終了値が含まれます。</p> <p>BETWEEN 構文:</p> <pre>SELECT column_name(s) FROM table_name WHERE column_name BETWEEN value1 AND value2;</pre>
LIKE	<p>SELECT 文の WHERE 句でワイルドカードを使用してパターン照合を実行し、一致したものを返します。</p> <p>次の 2 つのワイルドカードが LIKE 演算子と組み合わせて使用されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> %: パーセント記号は、0 個、1 個または複数の文字を表します _: アンダースコアは 1 文字を表します <p>LIKE 構文:</p> <pre>SELECT column1, column2, ... FROM table_name WHERE column LIKE pattern</pre>
IN	<p>値リスト内のいずれかの値と同じです。</p> <p>IN 構文:</p> <pre>SELECT column_name1, column_name2, etc FROM table_name WHERE column_name1 IN (value1, value2, etc);</pre>
NOT IN	<p>2 つの式が等しいかどうかをチェックします。式が等しくない場合、条件は true であり、一致しないレコードを返します。</p> <p>NOT IN 構文:</p> <pre>SELECT column_name1, column_name2, etc FROM table_name WHERE column_name1 NOT IN (value1, value2, etc);</pre>

SQL 問合せでの In/Between 条件を使用する数値型フィルタの表示

次の手順では、EPM 統合エージェントによって実行される SQL 問合せで In および Between 条件を使用する数値型フィルタを表示する方法を説明します。

In/Between 条件を使用する数値型フィルタを表示するには:

1. データ統合で、SQL データ・ソースに関連付けられた SQL 問合せを作成します。
問合せ名は、SQL データ・ソースをターゲット・アプリケーションに登録する際にデータ抽出問合せを識別するために、アプリケーション詳細ページで使用されます。
詳細は、[SQL 問合せの作成](#)を参照してください。
2. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
3. アプリケーション・ページで、データ・ターゲット・アプリケーションの右側にある「...」をクリックして、「オプションの編集」を選択します。

Edit Options: Agent							Save
Name	Display Prompt	Display Order	Property Level	Validation Type	Validation Object	Condition List	
EXTRACT_QUERY	Data Extract Query	10	Application	None			
DELIMITER	Delimiter	20	Application	Lookup Validate	COLUMN_DELI ...		
CREDSTORE	Credential Store	22	Application	Lookup No Vali...	ONPREMDB_CR...		
JDBC_URL	JDBC URL	26	Application	None			
DB_USER	Username	28	Application	None			
DB_PASSWORD	Password	30	Application	None			
FETCH_SIZE	Fetch Size	32	Application	None			

4. **+** (「追加」)をクリックします。

この例では、フィルタの名前は **COL1_COND** であり、「表示プロンプト」の名前は **CONDITIONCOLI** です。この名前は、データ統合のターゲット・オプションとしてオプション・ページに表示されます。

Name	Display Prompt	Display Order	Property Level	Validation Type	Validation Object	Condition Lis
COL1_COND	CONDITIONCOLI	90	Integration			

5. 「追加」をクリックし、**EXTRACT_QUERY** のフィルタを追加して、**EXTRACT_QUERY** パラメータの値を指定して、「OK」をクリックします。

フィルタを追加した結果を次に示します:

Name	Display Prompt	Display Order	Property Level	Validation Type	Validation Object	Condition List
EXTRACT_QUERY	TDATA2	10	Application	Number		
DELIMITER	Delimiter	20	Application	Lookup Validate	COLUMN_DELI ...	
CREDSTORE	Credential Store	22	Application	Lookup No Vali...	ONPREMDB_CR...	
JDBC_URL	JDBC URL	26	Application	None	jdbc:oracle:thin:@oracle	
DB_USER	Username	28	Application	None		
DB_PASSWORD	Password	30	Application	None		
FETCH_SIZE	Fetch Size	32	Application	None		
COL1_COND	CONDITIONCOLI	90	Integration	Number		

EXTRACT_QUERY の値は **TDATA2** であり、**CONDITIONALCOLI** では値の範囲が **1 - 1999** の **Between** 条件が使用されています。

- データ統合で、手順 1 の SQL 問合せを選択します。
- ファイルのヘッダー行およびフィルタに基づいてデータを抽出するために使用する SQL 文を指定します。

次の SQL にはフィルタの構文が含まれており、これによりユーザーは **Between** を使用した範囲内の柔軟な勘定科目値から選択できます。等号はないことに注意してください。これはアプリケーション・フィルタの「**条件リスト**」によって提供されます。

Update Query

Query Name: TDATA2

Query String:

```
SELECT ENTITX AS "Ent", ACCOUNTX AS "Acct", UD3X AS "Prod", AMOUNTX AS "Amt", L.PARTNAME "Loc", P.PERIODDESC AS "Dat"
FROM TDATA2 T, T.PARTITION L, T.PROPERIOD P
WHERE T.PARTITIONKEY = L.PARTITIONKEY AND T.PERIODKEY = P.PERIODKEY
AND L.PARTNAME = ~-LOCATION~ AND P.PERIODDESC = ~-PERIOD~ and
ACCOUNTX $COL1_CONDS$
```

Save Cancel

- データ管理で、データ・ルールを更新してフィルタを追加します。
オプションで、実行時に統合の実行ページでの選択によって「フィルタ」タブを更新できます。

Filters		Options	
Name	Condition	Value	
Location	==	BigLoad	
Period	==	Jan-17	
CONDITIONCOL1		1.1993	I

事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタの使用

事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタを使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud からオンプレミス・データ・ソースへの直接接続が可能です。これらのアダプタを使用すると、次からデータをインポートできます：

- EBS GL 残高
- Peoplesoft GL 残高

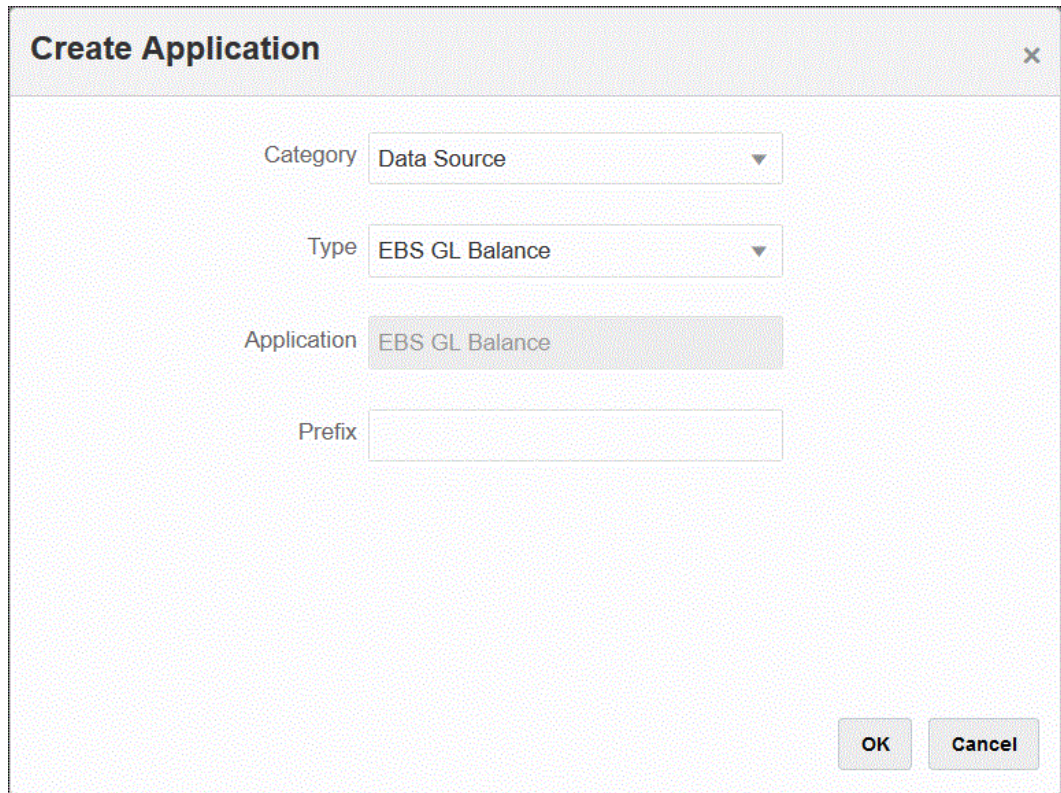
ノート:

事前シード済の EBS GL 残高問合せの詳細は、[E-Business Suite 一般会計 GL の事前シード済の問合せリファレンス](#)を参照してください。

事前シード済の Peoplesoft GL 残高問合せの詳細は、[Peoplesoft General Ledger の事前シード済問合せリファレンス](#)を参照してください。

事前パッケージ化済オンプレミス・アダプタを使用してデータをロードするには：

1. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
2. **アプリケーション**・ページで、**+** をクリックします。
3. **アプリケーションの作成**ページの「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
事前パッケージ化済アダプタのアプリケーション名は、「**アプリケーション名**」に移入されます。
4. 「**タイプ**」から、**EBS GL 残高**または **Peoplesoft GL 残高**のいずれかを選択します。



5. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

6. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。

7. アプリケーション・ページで、**...** をクリックします。

8. アプリケーション詳細ページで、「オプション」タブをクリックします。

9. 「区切り文字」で、ファイルで使用する区切り文字のタイプを選択します。

使用可能な区切り記号:

- カンマ(,)
- 感嘆符(!)
- セミコロン(;)
- コロン(:)
- 垂直棒(|)

10. 資格証明ストアで、EPM 統合エージェントで使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプ:

- クラウド
- ファイル

「クラウド」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションにユーザー名/パスワード/接続文字列を格納します。

「ファイル」資格証明ストア・タイプの場合は、JDBC URL、ユーザー名およびパスワードを格納するためにオンプレミス環境にファイルを作成します。ファイル名は `appname.cred` という名前で、`config` ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@host:port/service
username=apps
password=w+Sz+WjKpL8 [
```

ノート:

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` ユーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

11. **Peoplesoft のみ: 「JDBC ドライバ」** で、データベース管理システム(DBMS)への接続時に使用する JDBC ドライバのタイプを選択します。

JDBC ドライバの使用可能なタイプは次のとおりです:

- Microsoft SQL Server
- Oracle

JDBC ドライバは、Java アプリケーションとデータベースの通信を可能にするソフトウェアです。JDBC ドライバは、データベースへの接続情報を通信し、クライアントとデータベース間で問合せや結果を転送するのに使用されるプロトコルを送信します。

12. **JDBC URL** で、JDBC ドライバ URL 接続文字列を指定します。

JDBC ドライバ URL 接続文字列により、Java を使用してリレーショナル・データベースに接続できます。

Oracle Thin JDBC ドライバの場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:

```
jdbc:oracle:thin:@host:port:sid
jdbc:oracle:thin:@host:port/service
```

SQL Server の場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:

```
jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname
```

13. **「ユーザー名」** で、オンプレミス・データベースのユーザー名を指定します。

14. 「パスワード」で、オンプレミス・データベースのパスワードを指定します。
15. 「フェッチ・サイズ」で、問合せに対する各データベースのラウンド・トリップでフェッチされる(ドライバで処理される)行数を指定します。

Application Details: EBS GL Balance		Save
Dimensions Options Set Defaults		
Property Name	Property Value	
Delimiter	.	
Credential Store	Cloud	
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<host>:<port>:<sid>	
Username	administrator	
Password	****	
Fetch Size	1000	

16. 「保存」をクリックします。

E-Business Suite 一般会計 GL の事前シード済の問合せリファレンス

EPM 統合エージェントを使用すると、事前シード済の問合せを使用して Oracle E-Business Suite ソースから一般会計残高をインポートし、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ターゲット・アプリケーションにロードできるアプリケーションを作成して登録できます。



Note:

元帳および期間は、E-Business Suite の事前シード済の問合せを使用するための必須パラメータです。

次に、EPM 統合エージェントに付随する事前作成済の E-Business Suite の問合せを示します。この問合せを開始ポイントとして使用して、カスタム問合せを作成できます。

```
SELECT
gcc.SEGMENT1          as "Segment1",
gcc.SEGMENT2          as "Segment2",
gcc.SEGMENT3          as "Segment3",
gcc.SEGMENT4          as "Segment4",
gcc.SEGMENT5          as "Segment5",
gcc.SEGMENT6          as "Segment6",
gcc.SEGMENT7          as "Segment7",
gcc.SEGMENT8          as "Segment8",
gcc.SEGMENT9          as "Segment9",
gcc.SEGMENT10         as "Segment10",
gcc.SEGMENT11         as "Segment11",
gcc.SEGMENT12         as "Segment12",
gcc.SEGMENT13         as "Segment13",
gcc.SEGMENT14         as "Segment14",
gcc.SEGMENT15         as "Segment15",
gcc.SEGMENT16         as "Segment16",
gcc.SEGMENT17         as "Segment17",
gcc.SEGMENT18         as "Segment18",
gcc.SEGMENT19         as "Segment19",
gcc.SEGMENT20         as "Segment20",
gcc.SEGMENT21         as "Segment21",
```

```

gcc.SEGMENT22          as "Segment22",
gcc.SEGMENT23          as "Segment23",
gcc.SEGMENT24          as "Segment24",
gcc.SEGMENT25          as "Segment25",
gcc.SEGMENT26          as "Segment26",
gcc.SEGMENT27          as "Segment27",
gcc.SEGMENT28          as "Segment28",
gcc.SEGMENT29          as "Segment29",
gcc.SEGMENT30          as "Segment30",
gb.BEGIN_BALANCE_DR    as "Beg Balance DR",
gb.BEGIN_BALANCE_CR    as "Beg Balance CR",
gb.PERIOD_NET_DR       as "Period Net DR",
gb.PERIOD_NET_CR       as "Period Net CR",
(gb.BEGIN_BALANCE_DR - gb.BEGIN_BALANCE_CR) + (gb.PERIOD_NET_DR-
gb.PERIOD_NET_CR) as "YTD Balance",
(gb.PERIOD_NET_DR-gb.PERIOD_NET_CR) as "Periodic Balance",
CASE
  WHEN ACCOUNT_TYPE IN ('A','L','O') THEN ((gb.BEGIN_BALANCE_DR-
gb.BEGIN_BALANCE_CR) + (gb.PERIOD_NET_DR-gb.PERIOD_NET_CR))
  WHEN ACCOUNT_TYPE IN ('R','E') THEN (gb.PERIOD_NET_DR-
gb.PERIOD_NET_CR)
  ELSE (gb.PERIOD_NET_DR-gb.PERIOD_NET_CR)
END as "Balance by Acct Type",
gb.BEGIN_BALANCE_DR_BEQ as "Func Eq Beg Bal DR",
gb.BEGIN_BALANCE_CR_BEQ as "Func Eq Beg Bal CR",
gb.PERIOD_NET_DR_BEQ    as "Func Eq Period Net DR",
gb.PERIOD_NET_CR_BEQ    as "Func Eq Period Net CR",
(gb.BEGIN_BALANCE_DR_BEQ - gb.BEGIN_BALANCE_CR_BEQ) +
(gb.PERIOD_NET_DR_BEQ-gb.PERIOD_NET_CR_BEQ) as "Func Eq YTD Balance ",
(gb.PERIOD_NET_DR_BEQ-gb.PERIOD_NET_CR_BEQ) as "Func Eq Periodic
Balance",
CASE
  WHEN ACCOUNT_TYPE IN ('A','L','Q') THEN ((gb.BEGIN_BALANCE_DR-
gb.BEGIN_BALANCE_CR) + (gb.PERIOD_NET_DR-gb.PERIOD_NET_CR))
  WHEN ACCOUNT_TYPE IN ('R','E') THEN (gb.PERIOD_NET_DR-
gb.PERIOD_NET_CR)
  ELSE (gb.PERIOD_NET_DR-gb.PERIOD_NET_CR)
END as "Func Eq Balance by Acct Type",
gld.LEDGER_ID          as "Ledger ID",
gld.NAME               as "Ledger Name",
gb.PERIOD_YEAR         as "Period Year",
gb.PERIOD_NAME         as "Period Name",
gb.PERIOD_NUM          as "Perion Number",
gcc.ACCOUNT_TYPE       as "Acoount Type",
gb.CODE_COMBINATION_ID as "Code Combination ID",
gb.CURRENCY_CODE       as "Currecy Code",
gb.ACTUAL_FLAG         as "Balance Type",
  gb.BUDGET_VERSION_ID as "Budget Version ID",
gb.ENCUMBRANCE_TYPE_ID as "Encumbrance Type ID",
gb.TRANSLATED_FLAG     as "Translated",
gb.PERIOD_TYPE         as "Period Type",
  gcc.ENABLED_FLAG     as "Enabled",
gcc.SUMMARY_FLAG       as "Summary Account"
FROM GL_BALANCES gb
, GL_CODE_COMBINATIONS gcc

```



```
,GL_LEDGERS gld
WHERE (1=1)
AND gcc.CODE_COMBINATION_ID = gb.CODE_COMBINATION_ID
AND gb.ACTUAL_FLAG = 'A'
AND gb.TEMPLATE_ID IS NULL
AND gld.LEDGER_ID = gb.LEDGER_ID
AND gld.NAME = ~LEDGER~
AND gb.PERIOD_NAME = ~PERIOD~
```

Peoplesoft General Ledger の事前シード済問合せセリファレンス

EPM 統合エージェントを使用すると、事前シード済の問合せを使用して Peoplesoft ソースから一般会計残高をインポートし、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ターゲット・アプリケーションにロードできるアプリケーションを作成して登録できます。

次に、EPM 統合エージェントに付随する事前作成済の Peoplesoft の問合せを示します：

```
SELECT
    PL.BUSINESS_UNIT           as "Business Unit",
    PL.LEDGER                 as "Ledger",
    PL.ACCOUNT                as "Account",
    PL.ALTACCT               as "Alt Account",
    PL.DEPTID                 as "Department",
    PL.OPERATING_UNIT        as "Operating Unit",
    PL.PRODUCT                as "Product",
    PL.FUND_CODE              as "Fund Code",
    PL.CLASS_FLD              as "Class",
    PL.PROGRAM_CODE           as "Program",
    PL.BUDGET_REF             as "Budget Reference",
    PL.AFFILIATE              as "Affiliate",
    PL.AFFILIATE_INTRA1       as "Affiliate Intra1",
    PL.AFFILIATE_INTRA2       as "Affiliate Intra2",
    PL.CHARTFIELD1            as "Chartfield1",
    PL.CHARTFIELD2            as "Chartfield2",
    PL.CHARTFIELD3            as "Chartfield3",
    PL.PROJECT_ID             as "Project",
    PL.BOOK_CODE              as "Book Code",
    PL.GL_ADJUST_TYPE         as "GL Adjust Type",
    PGA.STATISTICS_ACCOUNT    as "Stat Account",
    PGA.ACCOUNT_TYPE          as "Account Type",
    PGA.DESCR                 as "Account Description",
    PL.CURRENCY_CD           as "Currency",
    PL.STATISTICS_CODE        as "Stat Code",
    PL.FISCAL_YEAR            as "Fiscal Year",
    PL.ACCOUNTING_PERIOD      as "Accounting Period",
    PL.POSTED_TOTAL_AMT       as "Posted Total Amount",
    PL.POSTED_BASE_AMT        as "Posted Base Amount",
    PL.POSTED_TRAN_AMT        as "Posted Tran Amount",
    PL.BASE_CURRENCY          as "Base Currency",
    PL.PROCESS_INSTANCE       as "Process Instance"
FROM PS_LEDGER PL,
     PS_GL_ACCOUNT_TBL PGA
WHERE ( 1=1 )
```

```

AND ( PL.BUSINESS_UNIT = ~BU~
AND PL.LEDGER = ~LEDGER~
AND PL.FISCAL_YEAR = ~YEAR~
AND PL.ACCOUNTING_PERIOD = ~PERIOD~
AND ( PGA.SETID = ( SELECT SETID
                     FROM   PS_SET_CNTRL_REC
                     WHERE  SETCNTRLVALUE = ~BU~
                           AND  RECNAME   =  'GL_ACCOUNT_TBL' )
AND PGA.EFFDT = ( SELECT MAX(B.EFFDT)
                  FROM PS_GL_ACCOUNT_TBL B

                  WHERE PGA.SETID = B.SETID AND PGA.ACCOUNT = B.ACCOUNT )
)
AND ( PL.ACCOUNT=PGA.ACCOUNT )
)

```

EPM 統合エージェント受信ボックス内のファイルからのデータのインポート

ローカルの EPM 統合エージェント inbox フォルダにあるファイルからデータをインポートし、エージェントがそのファイルをアップロードおよび処理するようにできます。

Note:

この機能を使用すると、EPM 統合エージェント受信ボックス内のファイルを使用でき、EPM 自動化コマンドを使用して最初にファイルをインポートする必要がありません。

ファイルを EPM 統合エージェント受信ボックスにステージングするには:

1. <EPMAgentData>アプリケーション・フォルダの下に、ファイルをコピーする受信ボックス・フォルダを作成します。
2. エージェントの開始パラメータ・ファイルの EPM_AGENT_INBOX パラメータ・フィールドで、受信ボックスの場所を指定します。
 - a. <EPMAgentDevData\config>ディレクトリに移動します。
 - b. テキスト・エディタ(Notepad など)を使用して、agentparams.ini ファイルをダブルクリックして開きます。
 - c. EPM_AGENT_INBOX パラメータで EPM 統合エージェント受信ボックスの完全なディレクトリを指定し、ファイルを保存します。



```
*agentparams.ini - No...
File Edit Format View Help
AGENT_NAME=EPMAGENT
CLUSTER=EPMCLUSTER
PORT=9090
CLOUD_URL=http://epmcloudserver
CLOUD_DOMAIN=
CLOUD_USER_NAME=
CLOUD_PASSWORD=
LOG_LEVEL=ALL
POLL_INTERVAL=60
EXECUTION_POOL_SIZE=2
REGISTER_WITH_IP=N
JYTHON_HOME=
GROOVY_HOME=
CUSTOM_MEM_ARGS=-Xms128m -Xmx4096m
CUSTOM_JAVA_OPTIONS=
CUSTOM_CLASS_PATH=
CUSTOM_INTERFACE_CLASS_NAME=
NTLM_PROXY_AUTH=N
AMW_IDLE_TIME=15
EPM_AGENT_INBOX=C:\EPMAgentDevData\yol\inbox
```

3. データ統合ホーム・ページで、ファイルベースの統合の右側にある **...** をクリックし、「**オプション**」を選択します。
4. 「**オプション**」タブを選択します。
5. 「**ディレクトリ**」に#agentinbox と入力し、「**保存**」をクリックします。

Edit Integration: DelimitedFileDL Save ▾

General **Map Dimensions** Map Members Options

Options Clear Region Business Rules

General Option	Target Option
* File Name <input type="text" value="ColonDelimitedFile.txt"/>	Load Method <input type="text" value="All data types with security"/>
Directory <input type="text" value="#agentinbox"/>	Batch Size <input type="text" value="10000"/>
File Name Suffix <input type="text"/>	Drill Region <input type="checkbox"/>
Type <input type="text"/>	Purge Data File <input type="checkbox"/>
Period Key Date <input type="text"/>	Date format for date data <input type="text" value="MM-DD-YYYY"/>
Format <input type="text"/>	Data Dimension for Auto-Increment Line... <input type="text"/>
Category <input type="text" value="Actual"/>	Driver Dimension for Auto-Increment Lin... <input type="text"/>
Cube <input type="text" value="Plan1"/>	
Integration Option 1 <input type="text"/>	

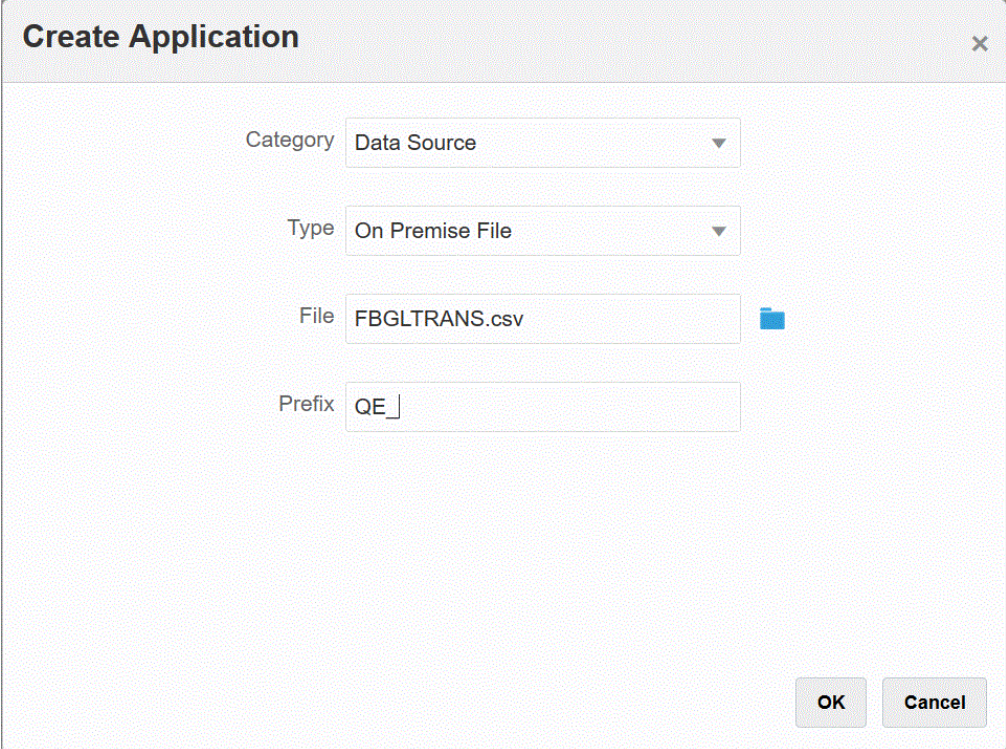
6. ステップ 1 で作成した受信ボックスにファイルをステージングします。



エージェント・ファイル・アダプタの使用

エージェント・ファイル・アダプタを使用すると、オンプレミス・ファイル・データ・ソースから Oracle Enterprise Performance Management Cloud に非常に大きいファイルをロードできます。これにより、クイック・モード方法が拡張され、ステージングおよび処理、パフォーマンス・ボトルネックの除去、およびロード・プロセスのパフォーマンスとスケーラビリティの向上のために、EPM Cloud データベースがバイパスされます。エージェント・ファイル・アダプタには、接続パラメータも問合せパラメータも含まれません。必要なパラメータは、ファイルの名前のみです。ロードには、ヘッダー・レコード付き区切りファイルが必要です。




エージェント・ファイル・アダプタによるクイック・モード方法を使用するには:

1. **オンプレミス・ファイル・アダプタを作成します。**
 - a. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
 - b. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
 - c. 「カテゴリ」から、「データ・ソース」を選択します。
 - d. 「タイプ」から**オンプレミス・ファイル**を選択します。



- e. 「**ファイル**」で、テンプレートとして使用するソース・データ・ファイルを指定します。
 をクリックして、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを検索します。
ファイルを選択するときには、次のことに注意してください：
 - ソース・データ・ファイルは、区切りデータ・ファイルである必要があります。
 - 使用されるデータ・ファイルには、区切り列を説明する 1 行のヘッダーが含まれる必要があります。
 - 数値データと数値以外のデータの両方をロードできます。
 - f. **オプション: 「接頭辞**」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
 - g. 「**OK**」をクリックします。
2. **オンプレミス・データ・ソースと EPM Cloud の間の統合ジョブを作成します:**
- a. 「**データ統合**」ホーム・ページから、 (「追加」アイコン)をクリックします。
 - b. **統合の作成**ページの「**名前**」および「**説明**」に、統合ジョブの名前および説明を入力します。
 - c. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - d. 「**クイック・モード**」スライダをタップしてオンにします。

統合ジョブをクイック・モード方法に関連付けてからジョブを保存した場合、クイック・モードの関連付けを元に戻すことはできません。ただし、統合ジョブを削除することは可能です。

- e.  (ソースの選択)をクリックします。
- f. **ソースの選択**ページで、オンプレミス・ファイル・データ・ソース・アプリケーションの横にある  をクリックします。
- g.  (ターゲットの選択)をクリックします。
- h. **ターゲットの選択**ページから、ターゲットの EPM Cloud アプリケーションを選択します。
- i. 「**保存して続行**」をクリックします。

Create Integration: QEFILE1

< Back Save And Continue > Save Cancel

1 General 2 Map Dimensions 3 Map Members 4 Options

Name: QEFILE Location: QEFile

Description: Direct load:

Source: QE_FBGLTRANS Target: Vision

Cube: Plan1 Category: Actual

3. オンプレミス・ファイル・データ・ソースと EPM Cloud アプリケーションの間でディメンションをマップします:
 - a. **ディメンションのマッピング**ページの「**タイプ**」から、データ・ロード方法のタイプを選択します。

使用可能なオプション:

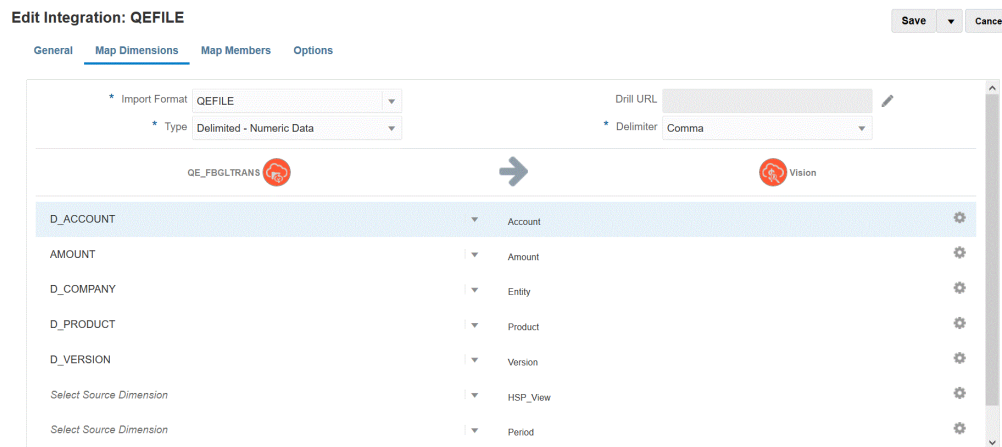
 - 区切り - 数値データ: 数値データ型のみサポートされます。
 - 区切り-すべてのデータ型: 次のデータ型が **Planning** に対してサポートされます
 - 数値
 - テキスト
 - スマートリスト
 - データ
 - b. 次を実行して、マッピング・グリッドで、オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションのソース列を EPM Cloud アプリケーションのディメンションにマップします:
 - i. 「**ソース・ディメンションの選択**」で、EPM Cloud ディメンションにマップするソース・ディメンションの名前を選択します。
 - ii. **オプション**: EPM Cloud ディメンションごとにターゲット式を追加します。

ターゲット式の使用の詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

 **Note:**

クイック・モード方法で SQL ターゲット式タイプを使用することはできません。

ソース式タイプは、クイック・モード方法では使用できません。



c. 「保存して続行」をクリックします。

4. 統合を実行します:

a. 「データ統合」ホーム・ページから、クイック・モード方法に関連する統合ジョブを選択し、▶をクリックします。

b. 統合の実行ページの「モード」ドロップダウンから、統合のエクスポート・モードとして「置換」を選択します。

c. 「期間」ドロップダウンから、データのロード元のソース・ファイルの単一期間を選択します。

統合のディメンションのマッピング・ページで期間ディメンションをマップし、期間のターゲット式を指定している場合、「期間」ドロップダウンは選択に使用できません。期間がマッピングから導出されるためです。

d. 「実行」をクリックします。

EPM 統合エージェントを使用したクイック・モード・ロードの実行

クイック・モード方法を使用し、EPM 統合エージェントを使用してオンプレミス・データ・ソースから Oracle Enterprise Performance Management Cloud にデータをロードします。EPM 統合エージェントを使用してオンプレミス・データ・ソースを EPM Cloud ターゲットと統合すると、オンプレミス・リレーショナル・データベース内のソース・データに対する SQL 問合せの実行、処理のオフロード、ソース・レベルでのデータの抽出と変換、およびデータ・エクスポート・オンプレミス・データベース・ファイルへのデータの直接ロードが実行されます。このようにして、ステージングおよび処理、パフォーマンス・ボトルネックの

除去、およびロード・プロセスのパフォーマンスとスケーラビリティの向上のために、EPM Cloud データベースがバイパスされます。

 **Note:**

データをそのままロードするためのクイック・モード方法の使用については、[データをエクスポートするためのクイック・モード](#)を参照してください。

 **Note:**

クイック・モード方法は、Planning および Planning モジュールでのみ使用できます。

考慮事項:

EPM 統合エージェントを使用したクイック・モード方法に関連する次の点について検討します:

1. クイック・モード・ロード統合ジョブを作成して保存した場合、それを後で標準統合ジョブに変更することはできません。ただし、データ・ロード統合ジョブを削除することは可能です。
2. ディメンションのマッピング時に、ターゲット式タイプはサポートされません。ターゲット式を使用すると、ソースから読み取ったソース値を、ターゲット・アプリケーションにロードされるターゲット・ディメンション値に変換できます。
期間ディメンションで使用できるターゲット式には、`substring()`、`split()`、`map()`、`toPeriod()`および `toYear()`があります。
SQL ターゲット式タイプを除いて、残りのすべてのターゲット式がサポートされます。
3. ディメンションのマッピング時に、ソース式タイプはサポートされません。
4. メンバーのマッピングはサポートされません。
5. レベル 0 データ抽出方法を選択した場合、データ抽出を実行するために、「DM BR データ・エクスポート」ビジネス・ルールが作成されます。
6. 実行時に単一の期間を指定でき、この場合、すべてのデータが単一の期間にロードされます。もう 1 つの選択肢として、`toPeriod` および `toYear` ターゲット式を使用して、ソース・システムの期間名を基に期間ディメンションを導出します。
7. クイック・モード・ロードの実行中は、置換エクスポート・モードのみサポートされます。
インポート・モードは使用できません
8. クイック・モード方法を使用してデータがロードされる場合、ソースへの直接ドリル・スルーが必要です。詳細は、[直接ドリルの使用](#)を参照してください。
9. EPM 自動化では、`runIntegration` コマンドを使用してクイック・モード・ロード統合を実行する必要があります。

クイック・モード・プロセスの説明

ここでは、クイック・モード方法を使用して、オンプレミス・データ・ソースからデータを抽出し、そのデータを EPM 統合エージェントを使用してオンプレミス・データベース・ファイルに直接ロードする方法について説明します。EPM 統合エージェントでは、オンプレミス・リレーショナル・データベースに対して問合せを実行し、データをデータ・エクスポート・ファイルにロードします。

クイック・モード方法を使用するには:

1. SQL 問合せを作成します:

- a. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「問合せ」を選択します。
- b. 「問合せ」画面で、「追加」(+)をクリックします。
- c. 「問合せの作成」画面の「問合せ名」で、SQL 問合せ名を指定します。

問合せ名は、統合用の SQL データ・ソースを登録する際にデータ抽出問合せを識別するために、アプリケーション詳細の「オプション」タブで使用されます。

- d. 問合せ定義を作成し、SQL 問合せを保存します。

Create Query

Query Name: GLTRANS

Query String: SELECT D_COMPANY, D_COST_CENTER, D_PRODUCT, D_PROJECT, D_INTERCOMPANY, D_ACCOUNT, D_VERSION, PERIOD_NAME, CURRENCY_CODE_LEDGER AS CURRENCY, JOURNAL_USD_AMOUNT AS AMOUNT FROM DATA

Save Cancel


詳細は、[SQL 問合せの作成](#) を参照してください。

2. オンプレミス・データベース・ファイルを作成します:

- a. オンプレミス・データベースから 1 つのヘッダー行を含むファイルを作成します。
ヘッダー行は、ターゲット・ディメンションのディメンション名と完全に一致する必要があります。ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できます。
- b. ファイルを、ヘッダー行を持つ CSV フォーマット・ファイルとして保存します。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	COMPANY	COST_CENTER	PRODUCT	PROJECT	INTERCON	ACCOUNT	VERSION	PERIOD_NAME	AMOUNT
2	CO_10001	CC_0000	PR_0000	PJ_00000	IC_00000	AC_211110	Final_FY18	18-Feb	1490.4
3	CO_10001	CC_0000	PR_0000	PJ_00000	IC_00000	AC_211110	Final_FY18	18-Feb	1490.4
4	CO_10001	CC_0000	PR_0000	PJ_00000	IC_00000	AC_211110	Final_FY18	18-Feb	1490.4
5	CO_10001	CC_0000	PR_0000	PJ_00000	IC_00000	AC_211110	Final_FY18	18-Feb	1490.4
6									

- c. オンプレミス・データベース・アプリケーションを登録するとき、ファイル・ブラウザを使用してファイルをロードします。
3. オンプレミス・データベース・ファイル・アプリケーションを登録します:
 - a. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
 - b. アプリケーション・ページで、**+** をクリックします。
 - c. 「アプリケーションの作成」の「カテゴリ」で、「データ・エクスポート」を選択します。
 - d. 「タイプ」から、オンプレミス・データベースへのデータ・エクスポートを選択します。
 - e. 「ファイル」から、ステップ 2 で作成したファイルを選択します。

 をクリックし、ファイル・ブラウザ・ページでファイルを参照します。

- f. オプション: 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。


接頭辞はファイル名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

- g. 「OK」をクリックします。

Create Application ✕

Category:

Type:

File: 

Prefix:

4. オンプレミス・データベース・ファイル・アプリケーションのアプリケーション詳細を定義します:

- a. アプリケーション・ページでオンプレミス・データベース・アプリケーションを選択し、「アクション」メニューから「アプリケーション詳細」タブを選択します。
- b. 「オプション」タブを選択します。

Application Details: GLTRANS Save

Dimensions Options Set Defaults

Property Name	Property Value
Data Extract Query	GTRANS
Delimiter	,
Credential Store	Cloud
JDBC Driver	Oracle
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<host>:<port>:<sid>
Username	user name
Password	●●●●●●
Fetch Size	1000

- c. データ抽出問合せで、ファイルに対して実行する SQL 問合せの名前を指定します。
- d. 「区切り文字」で、ファイルで使用する区切り文字のタイプを選択します:
 - カンマ(,)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 垂直棒(|)

- e. 資格証明ストアで、EPM 統合エージェントで使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプは次のとおりです:

- クラウド
- ファイル

「クラウド」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションにユーザー名/パスワード/接続文字列を格納します。

「ファイル」資格証明ストア・タイプの場合は、JDBC URL、ユーザー名およびパスワードを格納するためにオンプレミス環境にファイルを作成します。ファイル名は appname.cred という名前で、config ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@host:port/service
```

```
username=apps  
password=w+Sz+WjKpL8 [
```




 **Note:**

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` コーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

- f. **JDBC URL** で、JDBC ドライバ URL 接続文字列を指定します。
JDBC ドライバ URL 接続文字列により、Java を使用してリレーショナル・データベースに接続できます。
Oracle Thin JDBC ドライバの場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:
`jdbc:oracle:thin:@host:port:sid`
`jdbc:oracle:thin:@host:port/service`
MS SQL Server の場合、JDBC ドライバ URL には次が含まれます:
`jdbc:sqlserver://server:port;DatabaseName=dbname`
 - g. 「**ユーザー名**」で、オンプレミス・データベースのユーザー名を指定します。
 - h. 「**パスワード**」で、オンプレミス・データベースのパスワードを指定します。
 - i. 「**フェッチ・サイズ**」で、問合せに対する各データベースのラウンド・トリップでフェッチされる(ドライバで処理される)行数を指定します。
 - j. 「**保存**」をクリックします。
5. **オンプレミス・データ・ソースと Oracle Enterprise Performance Management Cloud 間の統合ジョブを作成します:**
- a. 「**データ統合**」ホーム・ページから、 (「追加」アイコン)をクリックします。
 - b. **統合の作成** ページの「**名前**」および「**説明**」に、統合ジョブの名前および説明を入力します。
 - c. 「**ロケーション**」に、新しいロケーション名を入力するか、既存のロケーションを選択して、データのロード先を指定します。
 - d. 「**クイック・モード**」スライダをタップしてオンにします。
統合ジョブをクイック・モード方法に関連付けてからジョブを保存した場合、クイック・モードの関連付けを元に戻すことはできません。ただし、統合ジョブを削除することは可能です。
 - e.  (ソースの選択)をクリックします。

- f. 「ソースの選択」ドロップダウン()から、オンプレミス・データベース・データ・ソース・アプリケーションを選択します。
 - g. 「ターゲットの選択」ドロップダウン()から、オンプレミス・データ・エクスポート・ファイル・アプリケーションを選択します。
 - h. 「保存して続行」をクリックします。
6. オンプレミス・データベース・データ・ソースとオンプレミス・データベース・ファイル・アプリケーションの間でディメンションをマップします:
- a. ディメンションのマッピング・ページの「タイプ」から、データ・ロード方法のタイプを選択します。
使用可能なオプション:
 - 区切り - 数値データ: 数値データ型のみサポートされます。
 - 「区切り-すべてのデータ型」では、次のデータ型が **Planning** に対してサポートされます:
 - 数値
 - テキスト
 - スマートリスト
 - データ
 - b. 次を実行して、マッピング・グリッドで、オンプレミス・データ・ソース・アプリケーションのソース列を EPM Cloud アプリケーションのディメンションにマップします:
 - i. 「ソース・ディメンションの選択」で、ディメンションにマップするソース・ディメンションの名前を選択します。
 - ii. **オプション**: EPM Cloud ディメンションごとにターゲット式を追加します。
ターゲット式の使用の詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。
 - c. 「保存して続行」をクリックします。
7. 「データ統合」ホーム・ページから、直接統合の右側にある  をクリックし、「オプション」を選択します
8. 「オプション」タブをクリックします。
9. 「カテゴリ」で、シナリオ・ディメンションの明示的なソース・フィルタを指定します。

 **Note:**

クイック・モード方法で SQL ターゲット式タイプを使用することはできません。
ソース式タイプは、クイック・モード方法では使用できません。

カテゴリは処理用の POV の必須コンポーネントであるため、統合を定義するときはカテゴリを指定する必要があります。カテゴリはクイック・モード処理のシナリオを決定するためには使用されません。

10. 「データの抽出オプション」で、データを抽出するための方法を選択します:

使用可能なオプション:

- すべてのデータ - 保管されている値と、密ディメンションと疎ディメンションの両方について動的に計算された値が抽出されます。

「すべてのデータ」データの抽出オプションでは、データを抽出するために MDX 問合せエクスポート方法が使用されます。

- 保管された動的算出データ - 疎ディメンションは除き、密ディメンションについてのみ、保管されているメンバーおよび動的に計算されたメンバーについて抽出されます。「保管された動的算出データ」オプションでは、データを抽出するために DATAEXPORT コマンド方法が使用されます。

- 保管済データのみ - 保管されているデータのみを抽出します。動的に計算された値は、このタイプの抽出には含まれません。「保管されたデータのみ」オプションでは、データを抽出するために DATAEXPORT コマンド方法が使用されます。

- レベル 0 データ - ディメンションの最下部のメンバー全体(データベースに格納されている RAW データ)が抽出され、フィルタを適用して出力ファイルに含める列を選択できます。この抽出オプションでは、数値以外のデータをエクスポートすることもできます。「レベル 0 データ」オプションでは、データを抽出するために MAXL エクスポート方法が使用されます。この方法は、サービス管理者のみが使用できます。抽出ステップの実行中は、アプリケーションは読み取り専用です。

クイック・モード方法を選択した場合、次のターゲット・オプションは使用できません:

- 属性列のエクスポート
- データの累計
- データのソート
- ディメンションのピボット

Filters Options

General Option

Category OEP_Actual

Cube

Source Cube OEP_WFP

Period Mapping Type Default

Calendar

Data Extract Option Level 0 Data

- All Data
- Level 0 Data
- Stored Data only
- Stored and Dynamic Calculated Data (Dense only)

11. 「保存」をクリックします。

12. 統合を実行します:

- a. 「データ統合」ホーム・ページから、クイック・モード・ロードに関連する統合ジョブを選択し、▶をクリックします。
- b. 統合の実行ページで、「モード」のデフォルト値は「置換」です。
- c. 期間なしがオプション・ページでの選択だった場合、「期間」ドロップダウンから、データのロード元のソース・ファイルの単一期間を選択します。

統合のディメンションのマッピング・ページで期間ディメンションをマップし、期間のターゲット式を指定している場合、「期間」ドロップダウンは選択に使用できません。期間がマッピングから導出されるためです。

- d. 統合に対してフィルタが定義されている場合、「フィルタ」タブをクリックして、必要に応じて変更します。

Run Integration: DEMOQE

Dimension Name	Filter Condition	
Entity	"ENTITY"	限
Period	"Jan"	限
Year	"FY21"	限

Cancel Run

- e. 「実行」をクリックします。


Run Integration: DEMOQE

Options Filters

Mode ▼

Period ▼ ☰

次の例は、エンティティおよび期間でフィルタされたデータ・エクスポートの結果を示しています。

 Data Export_1981.dat.txt - Notepad

File Edit Format View Help

```
Period,Company,Product,Account,Amount  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,-123  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,0.099999999999854481  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,333.5669999999955  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41111  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51111  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61111  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71111  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81111  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91111  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91112  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91113  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT6,61114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT7,71114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT8,81114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT9,91114  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT1,11115  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT2,21115  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT3,31115  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT4,41115  
Jan,ENTITY1,PRODUCT1,ACCOUNT5,51115
```

クイック・モード方法で使用される期間の定義

クイック・モード方法で使用する期間を定義する場合、実行時に単一の期間を選択することも、データ・ソース内の期間列をマップすることもできます。Oracle Enterprise Performance Management Cloud の期間は、この列から導出されます。

詳細は、次を参照してください：

- [クイック・モード方法の単一期間の選択](#)
- [ソース列から導出されるクイック・モード方法の期間の選択](#)

クイック・モード方法の単一期間の選択

クイック・モード方法に使用する期間を決定する場合、データのロード先にする単一の期間を選択します。この場合は、次に示すように統合の実行ページで単に期間を選択します。

Run Integration: Demo

Mode: Merge

Period: Jun-58

More results available, please filter further.

- Jun-58
- May-58
- Apr-58
- Mar-58
- Feb-58
- Jan-58
- Dec-57

Cancel Run

Note:

統合のディメンションのマッピング・ページで期間ディメンションをマップし、期間のターゲット式を指定している場合、「期間」ドロップダウンは選択に使用できません。期間がマッピングから導出されるためです。

ソース列から導出されるクイック・モード方法の期間の選択

ソース・データにデータ・ソース内の期間列が含まれている場合、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の期間をこの列から導出できます。

ソース・データには、次のような様々な形式の期間が含まれている可能性があります：

- Jan-20
- January-20
- 01-20
- 01/31/20
- 01-Jan-20

ターゲット式を使用してターゲットの年および期間の値を導出したり、日付フィールドと関連する形式を使用して年および期間を導出することもできます。ターゲット式の使用の詳細は、[ターゲット式の使用](#)を参照してください。

ターゲットの年および期間の値を導出するには、次のターゲット式を使用します。

- `substring()` - 文字位置(開始位置)と部分文字列長(抽出する文字数)に基づいて、文字列から文字を抽出して返します。
詳細は、[部分文字列](#)を参照してください。
- `split()` - 区切り文字に基づいてソースの値を分割し、値を分割した後の n 値を返します。この式タイプは、文字列を区切って分割する場合に便利です
詳細は、[分割](#)を参照してください。

日付フィールドと関連する形式を使用して年および期間を導出するには、次のターゲット式を使用します。

- `toPeriod()` - 構文 `toPeriod(field, "<DATE FORMAT>", Mon)` を使用して、ソース・システム期間名を基に期間ディメンション・メンバーを導出します

Edit Target Expression: Period [x] [OK]

▲ ToPeriod parameters (PERIOD, "", "Mon") [minus]

Dimension: Period [v]

Source Period Date Format: [text field]

Hint : Derive Period dimension member based on the source system period name

Use Java simple date format to provide format of the Source Period Name. For example, if the source period is Jan-20 then to derive the Period dimension name use the expression toPeriod(PERIOD, "MMM-yy", "Mon")

Format Letters
y Year
M Month in year
d Day in month

Sample Format
Jan-20 MMM-yy
Jan-2020 MMM-yyyy
01-20 MM-yy
01/01/20 dd/MM/yy

- toYear() - 構文 toYear(field, "<DATE FORMAT>", "FY+YY")を使用して、ソース・システム期間名を基に年ディメンション・メンバーを導出します

Edit Target Expression: Period [x] [OK]

▲ ToYear parameters (PERIOD, "", "FY+YY") [minus]

Dimension: Period [v]

Source Period Date Format: [text field]

Hint : Derive Year dimension member based on the source system period name

Use Java simple date format to provide format of the Source Period Name. For example, if the source period is Jan-20 then to derive the Year dimension name, use the expression toYear(YEAR, "MMM-yy", "FY+YY")

Format Letters
y Year
M Month in year
d Day in month

Sample Format
Jan-20 MMM-yy
Jan-2020 MMM-yyyy
01-20 MM-yy
01/01/20 dd/MM/yy

<DATEFORMAT>は単純な Java 日付形式です。単純な Java 日付形式の詳細は、<https://docs.oracle.com/javase/8/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html> を参照してください。

Map は別のターゲット式で、入力フィールド、または *substr*、*split* などの式および一連のキー値のペアを含むフィールドを、マッピングのために構文

`map(substr(field,1,2),P1:Jan|P2:Feb|P3:Mar|...)` を使用して受け入れることができます



Note:

map ターゲット式は任意の式で使用できます。

EPM 統合エージェントでのライトバック

EPM 統合エージェントでは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションからオンプレミス・データベースへのデータの移動を可能にすることによって、ライトバックがサポートされます。この機能を使用するには、オンプレミス・データベースにデータをエクスポートするデータ・エクスポート・アプリケーションを登録します。

- 単純な方法—アプリケーションを登録し、表名を指定し、表のすべての列をアプリケーションに含めます。INSERT 文が自動的に生成され、データがロードされます。

この方法を使用するには、エクスポートする列のリストを含む CSV ファイルを作成します。列の名前は、表の列名と完全に一致している必要があります。ファイルの名前は、アプリケーションの名前である必要があります。

- 高度な方法—問合せ定義ページで INSERT 文を指定します。INSERT 文には、値の表および列とアプリケーションのディメンション名を含めます。この方法を使用すると、わかりやすいディメンション名を付けることができ、TO_DATE、TO_NUMBER などの SQL 関数およびデータ型変換などの文字列演算を実行するその他の関数を使用することもできます。

この方法を使用するには、エクスポートする列のリストを含む CSV ファイルを作成します。列のリストは、INSERT 文で使用する列名と完全に一致している必要があります。ファイルの名前は、アプリケーションの名前である必要があります。

また、エージェントは、BefExport と AftExport という 2 つのイベント・スクリプトをライトバックの実行中に実行できます。BefExport イベントを使用すると、表にデータを挿入する前にアクションを実行するか、またはデフォルトの挿入処理を上書きできます。AftExport イベントを使用すると、表にデータを挿入した後で、処理後のクリーンアップを実行できます。

ライトバック機能は、SYNC モードと ASYNC モードの両方で実行されているエージェントに対してサポートされています。

EPM 統合エージェント・ライトバックのプロセスの説明

EPM 統合エージェントを使用してオンプレミス・データベースにライトバックするには:

1. EPMAgent ZIP をダウンロードします。

これが EPM 統合の最初のインストールである場合は、[EPM 統合エージェントのインストールと構成](#)を参照してください。

EPM 統合エージェントの既存のインストールがある場合は、EPMAgent.ZIP をダウンロードして解凍します。ini ファイルまたは証明書を更新する必要はありません。

2. オプション: ライトバックの実行中に、BefExport と AftExport という 2 つのイベント・スクリプトを実行できます。

BefExport イベントを使用すると、表にデータを挿入する前にアクションを実行するか、またはデフォルトの挿入処理を上書きできます。*AftExport* イベントを使用すると、表にデータを挿入した後で、処理後のクリーンアップを実行できます。

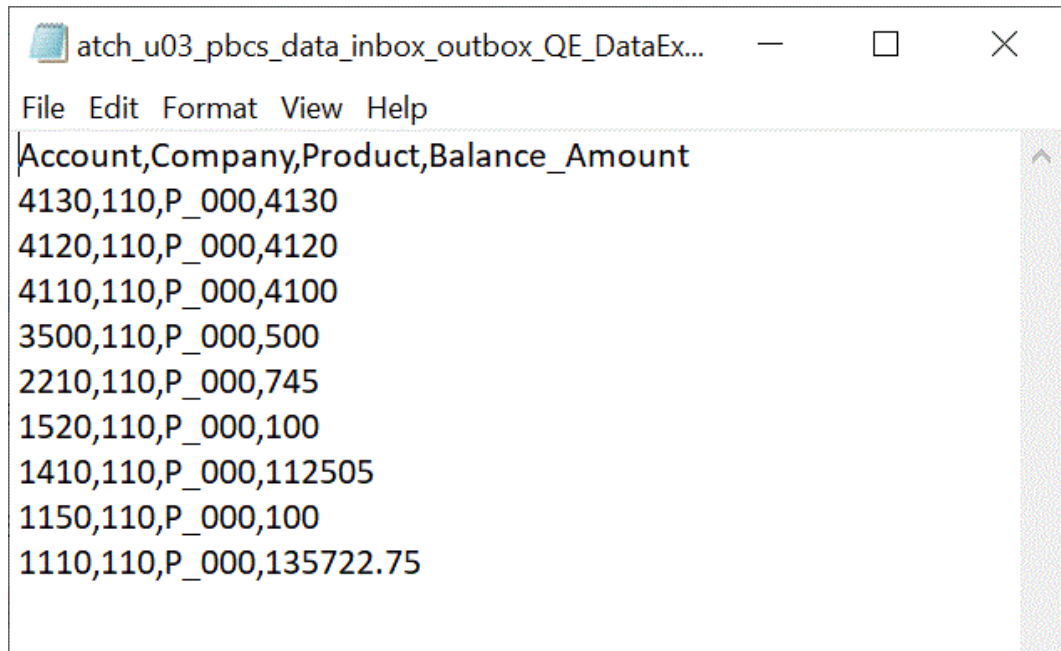
3. オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションを登録します。
詳細は、[オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの登録](#)を参照してください。
4. データ・エクスポート・アプリケーションの**アプリケーション詳細の「ディメンション」**タブに移動し、ヘッダー・レコードの列名がデータのロード先の表の列名または列別名と完全に一致することを確認します。
名前の大文字と小文字は区別されます。
詳細は、[ライトバックのアプリケーション詳細ディメンションの設定](#)を参照してください。
5. 「ターゲット・ディメンション・クラス」で「金額」列を指定し、データ列名列をクリアします。
6. オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの**アプリケーション詳細の「オプション」**タブに移動し、データのロードの処理方法を指定します。表名を指定し、INSERT 文を自動的に生成できます。問合せ定義ページで INSERT 問合せを記述し、文をデータをロードするためのメソッドとして使用することもできます。
オンプレミス・データベースの資格証明、JDBC 接続情報、ユーザー名およびパスワードを指定する必要もあります。
詳細は、[データ・エクスポート・アプリケーションのアプリケーション詳細の定義](#)を参照してください。
7. 次のタスクを完了して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションをデータ・エクスポート・ファイルと統合します。

タスク	説明	詳細情報
全般	ファイルベース統合および直接統合のソースの統合を追加または編集します。	データ統合の定義
ディメンションのマッピング	データ・ソースの列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。	ディメンションのマッピング
メンバーのマッピング	ディメンションをマッピングして、ソース・フィールドの値をターゲット・ディメンション・メンバーに変換する方法を指定します。	メンバーのマッピング
オプション	データをインポートおよびエクスポートするためのオプションを定義します。また、ソース・フィルタを定義します。	データ統合オプションの設定

8. 統合を実行します。
統合の実行の詳細は、[統合の実行](#)を参照してください。
統合が実行されると、EPM 統合エージェントによってエクスポート・プロセスが EPM Cloud で開始されます。エージェントによってエクスポート・データがダウ

ンロードされます。また、選択した方法に基づいて、エージェントによって適切な INSERT 文が作成され、データがターゲット表にロードされます。

出力ファイルを「プロセスの詳細」からダウンロードして、エクスポートされたデータを確認できます。ライトバックのデータベース列名は、次に示すように、生成されたファイル内で列ヘッダーとして指定されています。



```

atch_u03_pbc_data_inbox_outbox_QE_DataEx...
File Edit Format View Help
Account,Company,Product,Balance_Amount
4130,110,P_000,4130
4120,110,P_000,4120
4110,110,P_000,4100
3500,110,P_000,500
2210,110,P_000,745
1520,110,P_000,100
1410,110,P_000,112505
1150,110,P_000,100
1110,110,P_000,135722.75

```

次に示すように、ジョブのログ・ファイルを「プロセスの詳細」から開いて、ライトバックの実行の詳細を表示できます:



```

QE_DataExport_372.log.txt - Notepad
File Edit Format View Help
Jun-04 11:47:46:101 :: ***** Starting execution for sessionId:372 at: Jun-04 11:47:46:098*****
Jun-04 11:47:46:103 :: Process Writeback Request with data:-----Writeback Request Data-----
jobType:WRITEBACK
sessionId:372
credStore:CLOUD
table:WBTESTBAL
Data File:QE_DataExport_372.dat
Target Application:QE_DataExport
-----
Jun-04 11:47:46:104 :: -----Downloading Data File: QE_DataExport_372.dat -----
Jun-04 11:47:46:194 :: ----- File Download Complete-----
Jun-04 11:47:46:206 :: ----- Creating Insert Statements for table: WBTESTBAL -----
Jun-04 11:47:46:215 :: ----- Insert Statements:INSERT into WBTESTBAL(Account,Company,Product,Balance_Amount)values('4130','110','P_000','4130')
Jun-04 11:47:46:221 :: ----- Executing Custom Event :BefWriteback -----
Jun-04 11:47:46:429 :: ----- Query Execution: START -----
Jun-04 11:47:46:502 :: ----- Query Execution: END -----
Jun-04 11:47:46:504 :: ----- Completed execution for sessionId:372 -----
Jun-04 11:47:46:505 :: ----- Executing Custom Event :AftWriteback -----
Jun-04 11:47:46:671 :: Commencing file upload of log file:C:\EPMAgentDevData\yof\logs\372.log
2020-06-04 09:47:53,326 INFO [AIF]: Appending EPM agent log to process:: END
2020-06-04 09:47:53,326 DEBUG [AIF]: Updating Agent Processes: SUCCESS
2020-06-04 09:47:53,330 DEBUG [AIF]: Updating process steps: SUCCESS
2020-06-04 09:47:53,335 DEBUG [AIF]: On Prem Export Complete.
2020-06-04 09:47:53,335 DEBUG [AIF]: *****

```


オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの登録

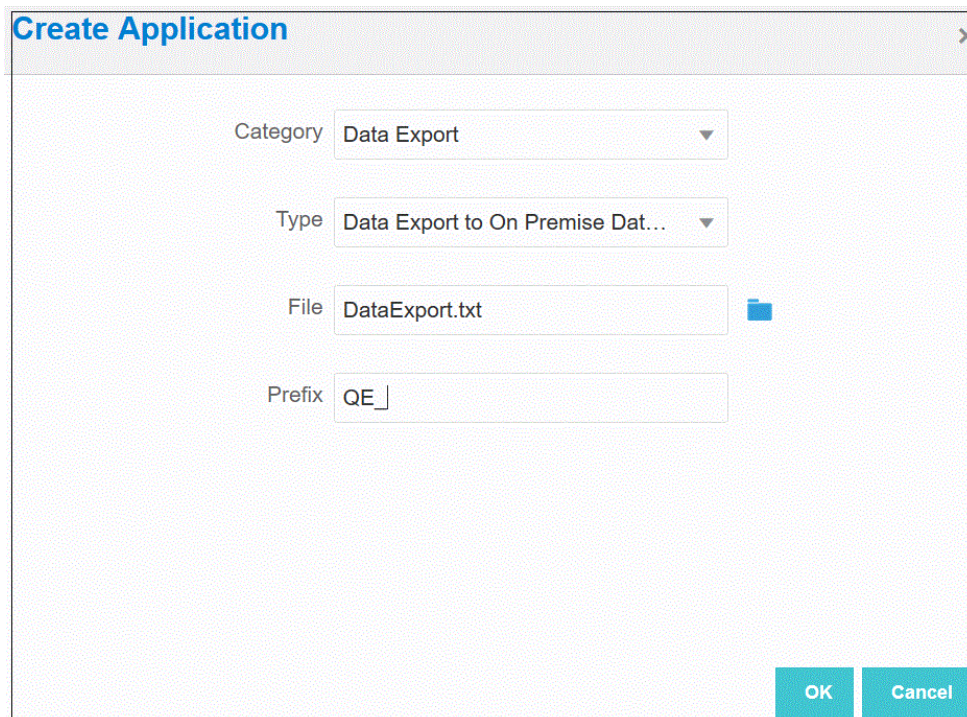
オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションを登録し、データのエクスポート先の列に関連付けるファイルを指定します。

データ・エクスポート・アプリケーションを登録するには

1. エクスポートする列のリストを含む CSV ファイルを作成します。

CSV ファイルの名前は、アプリケーションの名前である必要があります。単純な方法を使用する場合、列の名前は表の列の名前である必要があります。INSERT 問合せの場合、列の名前は任意ですが、INSERT 文内の名前と一致している必要があります。

2. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。
3. アプリケーション・ページで、**+**（「追加」アイコン）をクリックします。
4. 「カテゴリ」から、「データ・エクスポート」を選択します。
5. 「タイプ」から、**オンプレミスへのデータ・エクスポート**を選択します。
6. 「ファイル名」から、**手順 1** のファイルの名前を選択します。
 をクリックして移動し、**ファイル・ブラウザ**・ページからファイルを選択できます。
7. **オプション: 「接頭辞」** で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。
接頭辞はファイル名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。
8. 「OK」をクリックします。



ライトバックのアプリケーション詳細ディメンションの設定

オンプレミス・データベースにライトバックするプロセスの一部として、ヘッダー・レコードの列名が完全に一致することを確認する必要があります。

「ターゲット・ディメンション・クラス」が「金額」の「金額」ディメンションを指定し、データ列名列の値をクリアする必要もあります。

アプリケーション詳細で「金額」列を指定するには:

1. **アプリケーション** ページから、オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
2. **アプリケーション詳細** ページから、「**ディメンション**」タブをクリックします。
3. 「**ディメンション名**」列から、「**金額**」ディメンションを選択します。
4. 分類を「**金額**」に変更し、データ列名を削除します。
5. 「**保存**」をクリックします。

データ・エクスポート・アプリケーションのアプリケーション詳細の定義

アプリケーション詳細を使用して、EPM 統合エージェントによるデータのライトバックの処理方法を指定します。また、オンプレミス・データベースの資格証明および JDBC 接続情報を指定する必要もあります。

オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションのアプリケーション詳細を定義するには:

1. **アプリケーション** ページから、オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
2. **アプリケーション詳細** ページから、「**オプション**」タブをクリックします。
3. 「**表名**」で、データのロード先の表名を指定します。

オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションのディメンションの名前は、表の列の名前と一致している必要があります。データをロードする INSERT 文が自動的に生成され、すべてのフィールドのテキストが挿入されます。

このフィールドで表名を指定する場合は、**挿入問合せ**フィールドで INSERT 文を指定しないでください。

Application Details: QE_DataExport		Save	< Return
Dimensions Options			
Property Name	Property Value		
Batch Size	1000		
Table Name	WBTESTBAL		
Insert Query			
Credential Store	Cloud		
Workflow Mode	Full		
JDBC Driver	Oracle		
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<server>:XXX:EPM		
Username	User Name		
Password	*****		

4. **挿入問合せ**で、問合せ定義ページで作成されるカスタム INSERT 文に関連付ける SQL 問合せの名前を指定します。

INSERT 問合せには、値の表および列とアプリケーションのディメンション名が含まれている必要があります。この方法を使用すると、わかりやすいディメンション名を付けることができ、TO_DATE、TO_NUMBER などの SQL 関数およびデータ型変換などの文字列

演算を実行するその他の関数を使用することもできます。詳細は、[カスタム INSERT 問合せでのライトバック](#)を参照してください。

INSERT 問合せを指定する場合は、「**表名**」フィールドで表名を指定しないでください。

Property Name	Property Value
Batch Size	1000
Table Name	
Insert Query	AGENTINSERT
Credential Store	Cloud
Workflow Mode	Full
JDBC Driver	Oracle
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@<server>:XXX:EPM
Username	User Name

5. **資格証明ストア**で、EPM 統合エージェントで使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプは次のとおりです:

- クラウド
- ファイル

「**クラウド**」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションに**ユーザー名/パスワード**接続文字列を格納します。

「**ファイル**」資格証明ストア・タイプの場合は、**JDBC URL**、ユーザー名およびパスワードを格納するためにオンプレミス環境にファイルを作成します。ファイル名は `appname.cred` という名前で、`config` ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@slc04aye.us.oracle.com:1523:fzer1213
username=apps
password=w+Sz+WjKpL8 [
```

ノート:

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` ユーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

6. 「**JDBC ドライバ**」で、データベース管理システム(DBMS)への接続時に使用する JDBC ドライバのタイプを選択します。
JDBC ドライバの使用可能なタイプは次のとおりです：
 - Microsoft SQL Server
 - Oracle
7. 「**ユーザー名**」で、オンプレミス・データベースのユーザー名を指定します。
8. 「**パスワード**」で、オンプレミス・データベースのパスワードを指定します。
9. 「**保存**」をクリックします。

カスタム INSERT 問合せでのライトバック

EPM 統合エージェントを使用してデータをライトバックする際に、カスタム INSERT 問合せを記述し、この問合せ文をデータのロード時にメソッドとして使用できます。この機能により、わかりやすいディメンション名を付けることができ、**TO_DATE**、**TO_NUMBER**などの SQL 関数およびデータ型変換などの文字列演算を実行するその他の関数を使用することもできます。

オンプレミス・データベースにライトバックする際に使用する INSERT 問合せを指定するには:

1. 「**データ統合**」ホーム・ページから、「**アクション**」、「**問合せ**」の順にクリックします。
2. 「**問合せ**」画面で、「**追加**」(+)をクリックします。
3. 「**問合せの作成**」画面の「**問合せ名**」で、INSERT 問合せ名を指定します。

問合せ名は、アプリケーション詳細の「オプション」タブの挿入問合せフィールドで使用されます。詳細は、[データ・エクスポート・アプリケーションのアプリケーション詳細の定義](#)を参照してください。

4. 「**問合せ文字列**」で、ファイルのヘッダー行に基づいてデータをライトバックするために使用する INSERT 文を指定します。

表名および列名を含む INSERT 文を記述します。

VALUES では、アプリケーションのディメンション名を~~で囲んで指定します。これらは、エクスポートされたデータ・ファイルの実際の値で置き換えられます。

この例では、ACCT、COMP、PROD、PRDDATE、BAL_AMT は WBTESTDT 表にあります。Account、Company、Product、AsofDate および Balance Amount は、アプリケーションのディメンションの名前です。

Update Query

Query Name AGENTINSERT

Query String

```
INSERT INTO WBTESTDT
(ACCT,COMP,PROD,PRDDATE,BAL_AMT)
VALUES
(~Account~,~Company~,LTRIM(~Product
ID~,~P_~),TO_DATE(~AsofDate~, 'DD-MON-YYYY'),~Balance
Amount~)
```

Save Cancel

5. 「保存」をクリックします。

EPM 統合エージェントにライトバックするための実践的なテクニック

このトピックでは、EPM 統合エージェントを使用して、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションからオンプレミス・データ・ウェアハウスにデータをロードするために必要なステップについて説明します。データをロードするには、異なる 2 つの方法を使用できます：

1. 「アプリケーション」オプションの表名と「アプリケーション・ディメンション」の表の列でそれぞれデータをロードします。(EPM 統合エージェントで Insert 問合せが自動的に生成されます)。
2. カスタム SQL Insert 問合せを使用して、表名と列でデータをロードします。

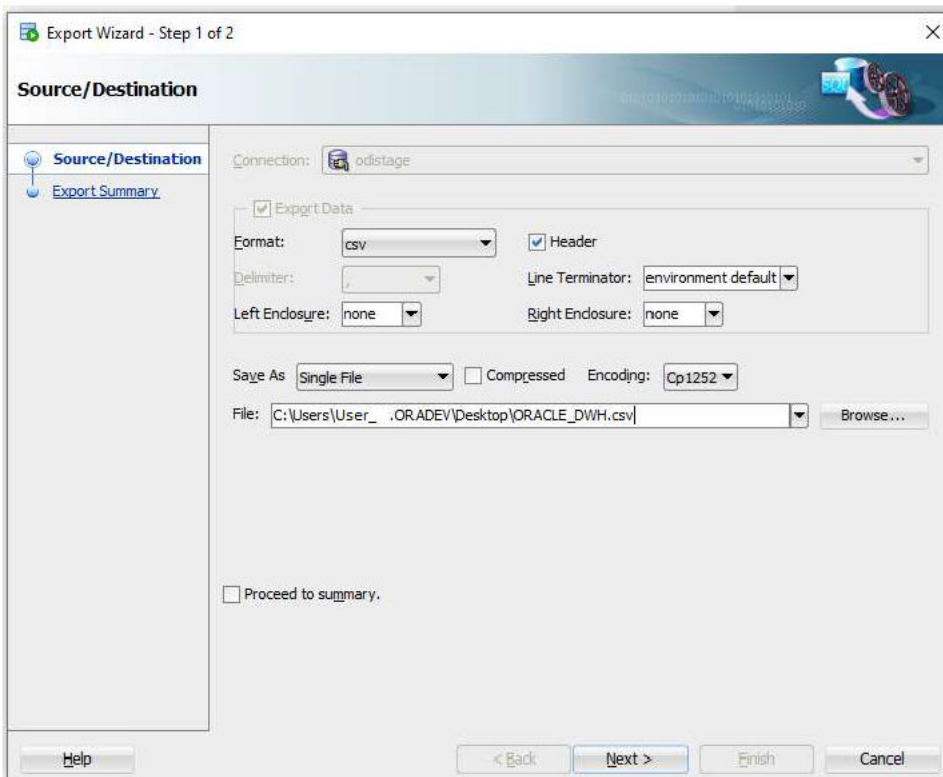
EPM 統合エージェントを使用して、EPM Cloud アプリケーションからオンプレミス・データ・ウェアハウスにデータをロードするには：

1. データがエクスポートされる **RDBMS** 表を作成します。

この例では、VISION_DATA という名前の表に、Vision アプリケーションのすべてのディメンションと、BATCH_ID および DATA_AMOUNT という 2 つの追加の列があります。BATCH_ID 列を使用して、EPM Cloud からデータ統合のプロセス ID を移入します。DATA_AMOUNT 列を使用して、「金額」列を移入します。

COLUMN_NAME	DATA_TYPE	NULLABLE	DATA_DEFAULT	COLUMN_ID	COMMENTS
1 BATCH_ID	NUMBER(6,0)	No	(null)	1 (null)	
2 ACCOUNT	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	2 (null)	
3 ENTITY	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	3 (null)	
4 HSP_VIEW	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	4 (null)	
5 PERIOD	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	5 (null)	
6 PRODUCT	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	6 (null)	
7 SCENARIO	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	7 (null)	
8 VERSION	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	8 (null)	
9 YEAR	VARCHAR2(50 BYTE)	No	(null)	9 (null)	
10 DATA_AMOUNT	NUMBER(20,6)	Yes	(null)	10 (null)	

- 列名のヘッダー・レコードを含めることで、表の内容をアプリケーション登録用の CSV ファイルにエクスポートします。



CSV 出力ファイルは次のようになります:

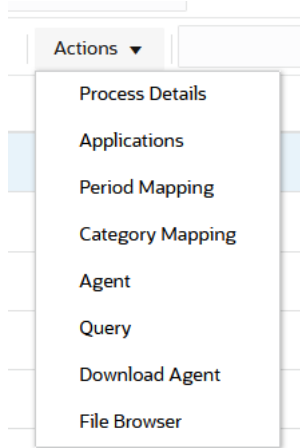
```

1 BATCH_ID,ACCOUNT,ENTITY,HSP_VIEW,PERIOD,PRODUCT,SCENARIO,VERSION,YEAR,DATA_AMOUNT
2

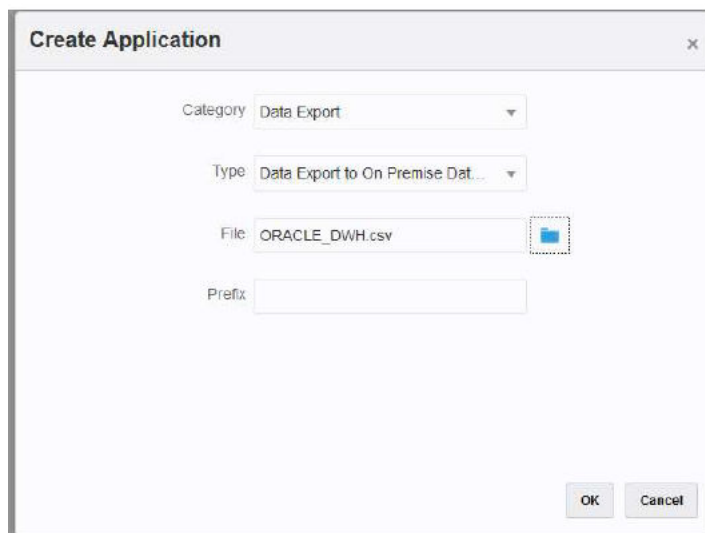
```

これらの列がターゲット表の列を正確に表すものとして処理されます。列名に基づいて SQL insert 文が生成されます。

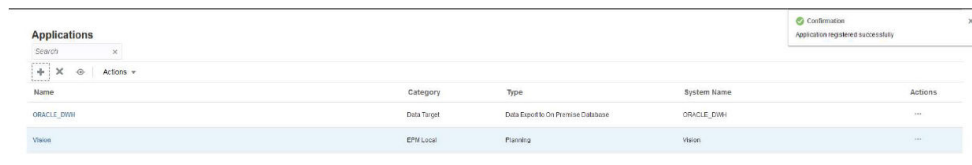
- 「データ交換」、「データ統合」タブ、「アクション」メニューの順に移動して、「アプリケーション」を選択します。



4. アプリケーション・ページで次の手順を実行し、ライトバック・プロセス用の「データ・エクスポート」アプリケーションを登録します:
 - a. 「カテゴリ」で、「データ・エクスポート」を選択します。
 - b. 「タイプ」で、オンプレミス・データベースへのデータ・エクスポートを選択します。
 - c. ステップ 2 で作成したファイルをアップロードして選択します。



データ・エクスポート・アプリケーションが作成され、アプリケーションの名前は、アプリケーションの登録に使用したファイル名と一致します。



5. アプリケーション・ページで、アプリケーションの右側にある ******* をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
6. 「ディメンション」タブを選択します。

アプリケーション登録プロセスで、CSV ファイルのすべての列のディメンション分類として「汎用」が自動的に割り当てられ、それに応じて「データ表列名」も割り当てられます。

Application Details: ORACLE_DWH

Dimensions Options Set Defaults

Dimension Name	Dimension Classification	Data Table Column Name	Mapping Sequence	Column Sequence
ACCOUNT	Generic	UD1		2
BATCH_ID	Generic	ACCOUNT		1
DATA_AMOUNT	Generic	UD9		10
ENTITY	Generic	UD2		3
HSP_VIEW	Generic	UD3		4
PERIOD	Generic	UD4		5
PRODUCT	Generic	UD5		6
SCENARIO	Generic	UD6		7
VERSION	Generic	UD7		8
YEAR	Generic	UD8		9

7. 「勘定科目」、「金額」、「期間」および「年」列を適切に分類します:

- 列がインポート・フォーマットでソース列にマップされ、ソース・フィールドに常に値がある場合、その列は「勘定科目」として分類されます。次の例では、「ACCOUNT」列が「勘定科目」に分類されています。このディメンションの「データ表列名」は「ACCOUNT」として分類されています。
- DATA_AMOUNT を「金額」として分類し、「データ表列名」は空白のままにします。
- YEAR を「年」として分類し、「データ表列名」は空白のままにします。
- PERIOD を「期間」として分類し、「データ表列名」は空白のままにします。

Application Details: ORACLE_DWH

Dimensions Options Set Defaults

Dimension Name	Dimension Classification	Data Table Column Name	Mapping Sequence	Column Sequence
ACCOUNT	Account	ACCOUNT		2
BATCH_ID	Generic	UD1		1
DATA_AMOUNT	Amount			10
ENTITY	Generic	UD2		3
HSP_VIEW	Generic	UD3		4
PERIOD	Period			5
PRODUCT	Generic	UD4		6
SCENARIO	Generic	UD5		7
VERSION	Generic	UD6		8
YEAR	Year			9

- アプリケーション・ページで、アプリケーションの右側にある **...** をクリックし、「アプリケーション詳細」を選択します。
- 「オプション」タブを選択します。
- 「表名」、「JDBC URL」およびデータベース資格証明を指定します。

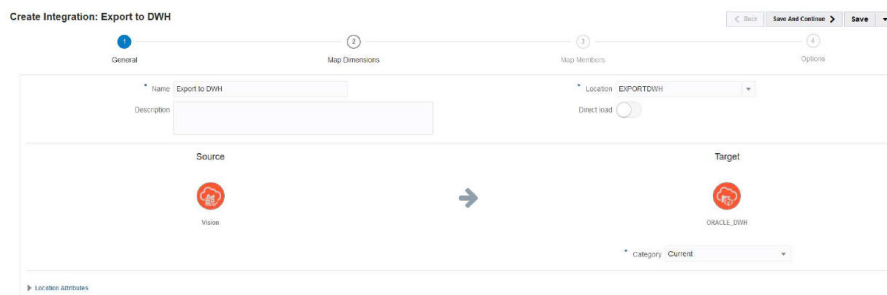
「問合せの挿入」フィールドは空白のままにします。「問合せの挿入」を指定していない場合は、アプリケーション・ディメンションがターゲット・データベース列と同一の名前を示していると見なされます。アプリケーション・ディメンションには、ライトバック・プロセスで移入する必要があるターゲット表の各列が含まれている必要があります。そうでない場合、統合は失敗します。

Application Details: ORACLE_DWH

Property Name	Property Value
Batch Size	1000
Table Name	VISION_DATA
Insert Query	
Credential Store	Cloud
JDBC Driver	Oracle
Workflow Mode	Full
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@host:port/service
Username	odstage
Password	*****

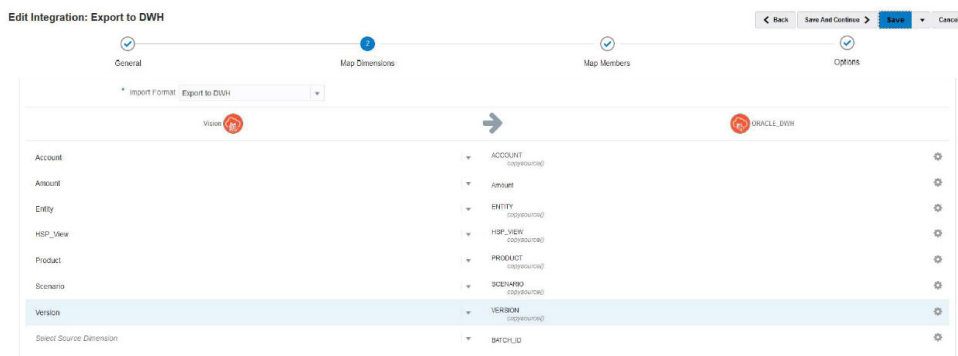
11. ソース・アプリケーションとターゲットの EPM Cloud アプリケーションの間の統合を作成します。

次の例は、ソース Vision Planning アプリケーションと ORACLE_DWH というターゲット・データ・エクスポート・アプリケーションを示しています。

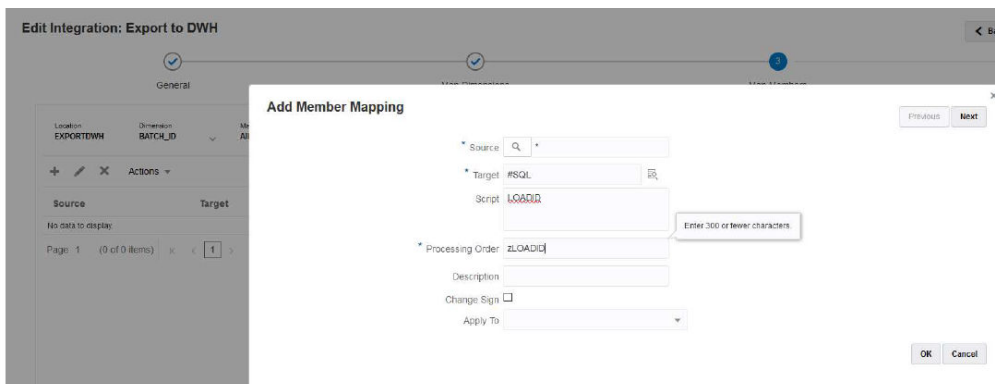


12. すべての列をマップし、「金額」と「BATCH_ID」を除くすべてのディメンションのターゲット式として `copysource()` を使用します。

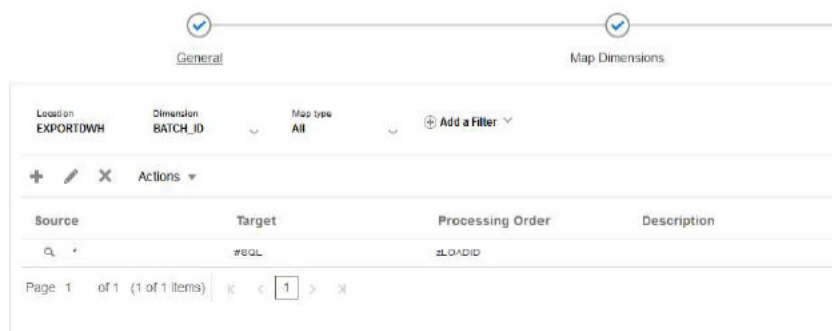
式はメンバー・マッピングで `BATCH_ID` に適用されます。「金額」ディメンションにはターゲット式がありません。



13. 「マップ・メンバー」から、TDATESEG_T 表の LOADID 列を使用して、`BATCH_ID` の #SQL マッピングを作成します。



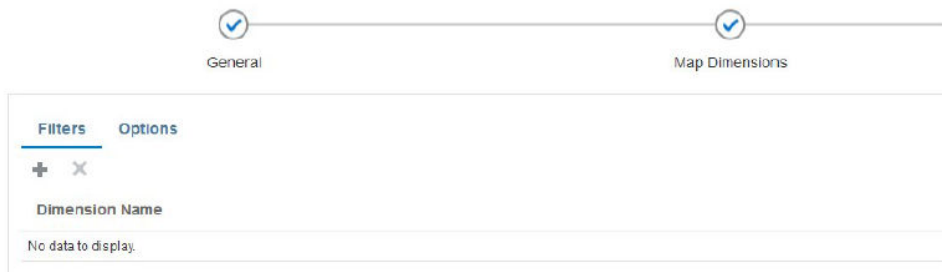
Edit Integration: Export to DWH



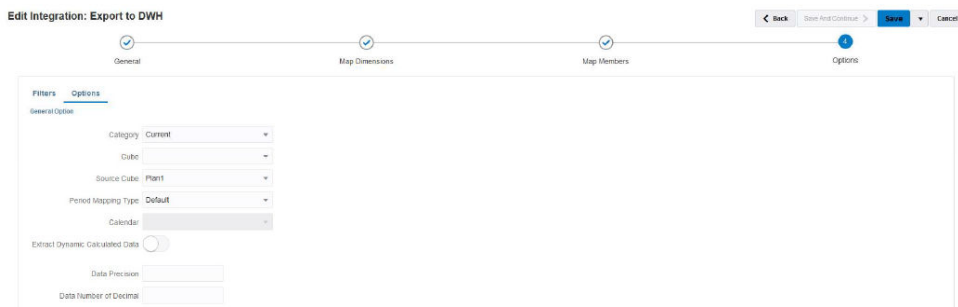
14. 「オプション」の「フィルタ」で、必要に応じてソース・プランニング・アプリケーションのフィルタを指定します。

次の例では、Vision アプリケーションからすべてのデータ(期間の開始から終了の範囲)がターゲット・アプリケーションにインポートおよびエクスポートされるため、フィルタは選択されていません。

Edit Integration: Export to DWH



15. 「オプション」の「ソース・キューブ」で、ソース・キューブ(プラン・タイプ)を指定します。次に「期間マッピング・タイプ」で、「デフォルト」を指定します。その後、次に示すように「保存」をクリックします。



- ターゲット・データベースにアクセスできるオンプレミス・ホストで EPM 統合エージェントを起動します。

```
C:\WINDOWS\System32\cmd.exe - epmagent.bat C:\Oracle\EPMAgent\bin\windows\agentparams.ini
D:\Oracle\EPMAgent\bin>epmagent.bat D:\Oracle\EPMAgent\bin\windows\agentparams.ini
Initializing agent
Reading parameter file: D:\Oracle\EPMAgent\bin\windows\agentparams.ini
Agent Name is: THISHETTY
Starting Agent ...
Registering agent to cloud
Reading SSL certificates
D:\Oracle\EPMAgent\cert\DigicertSHA2SecureServerCA.crt
Proxy authentication is not enabled
Agent mode is : ASYNC
Successfully registered agent to cloud http://slc12otx.us.oracle.com:9000 with agent URL http://THISHETTY-LAP.oracledev.oraclecorp.com:9090
Agent THISHETTY started successfully on port:9090
```

- 「データ統合」で、指定された期間範囲で統合を実行します。
次の例では Jan-16 から Dec-16 が選択されています:



- オンプレミス・エージェントが EPM Cloud からジョブの詳細をフェッチしていることを確認し、プロセスが完了するまで待ちます。

```
---- Making Polling call to cloud at :Mar-27 14:15:20:175----
Completed Polling of Job from queue
---- Making Polling call to cloud at :Mar-27 14:15:26:311----
Completed Polling of Job from queue
Retrieving Job details for Job Id:3
Executing extract for Job Id:3
---- Executing Job:3 ----
---- Making Polling call to cloud at :Mar-27 14:15:32:810----
Completed Polling of Job from queue
---- Completed Execution of Writeback Job:3 ----
```

Executing Integration: Export to DWH

19. 「プロセスの詳細」で、ログ・ファイルを開き、エクスポートされたデータ・レコードの合計数と Insert 問合せ文を書き留めます:

```

2021-03-27 08:45:22,735 INFO [AIF]: -----START EXPORT STEP-----
2021-03-27 08:45:22,762 INFO [AIF]: Executing the following script: @rload.py
2021-03-27 08:45:23,873 INFO [AIF]: No business rules found for load Id:3
2021-03-27 08:45:27,180 INFO [AIF]: Executing the following script: @rload.py
2021-03-27 08:45:26,561 INFO [AIF]: Total number of data records exported: 772
2021-03-27 08:45:24,572 INFO [AIF]: Request Payload:{"targetApplication":"ORACLE_DWH","credential":{"password":"PASSWORD HOLDER","driver":"oracle.jdbc.OracleDriver","jdbcUrl":"jdbc:oracle:thin@thethetty-
log:REG/inst@DB","username":"admin"},"integration":{"export to
DWH":{"location":"EXPORTDWH","dataFile":"ORACLE_DWH_3.dat","insertQuery":"","sessionId":"3","jobType":"WRITEBACK","insertSize":1000,"sourceApplication":"EPM","credStore":"CLOUD","tableName":"VISION_DATA"}}
2021-03-27 08:45:24,583 INFO [AIF]: Retrieved CPM Cluster name:EPWCLUSTER
2021-03-27 08:45:24,584 INFO [AIF]: Retrieved Cluster Node:ACWC
2021-03-27 08:45:24,585 INFO [AIF]: Calling agent extract ASYNC mode: BEGIN
2021-03-27 08:45:24,585 INFO [AIF]: Request Payload Length:419
2021-03-27 08:45:24,681 INFO [AIF]: Appending EPM agent log to process: BEGIN
Mar-27 14:15:27:882 :: ***** Starting execution for sessionId:3 at: Mar-27 14:15:27:81*****
Mar-27 14:15:27:882 :: Process Writeback Request aId: data.
-----Writeback Request Data-----
JobType:WRITEBACK
sessionId:3
credStore:CLOUD
table:VISION_DATA
Insert Query:
Data File:ORACLE_DWH_3.dat
Target Application:ORACLE_DWH
Rule Name:Export to DWH
Location:EXPORTDWH
Source Application:EPM
-----
Mar-27 14:15:27:883 :: ----- Downloading Data File: ORACLE_DWH_3.dat -----
Mar-27 14:15:28:351 :: ----- File Download Complete-----
Mar-27 14:15:28:351 :: ----- Creating Insert Statements for table: VISION_DATA -----
Mar-27 14:15:28:558 :: ----- Insert Statements:INSERT INTO VISION_DATA(BATCH_ID,ACCOUNT,ENTITY,HSP_VTDN,PERIOD,PRODUCT,SCENARIO,VERSION,YEAR,DATA_AMOUNT)VALUES
('3','7498','438','BaseData','Feb','P_000','Actual','Working','P710','R347.20000000000001')
-----
Mar-27 14:15:30:970 :: ----- Query Execution: START -----
Mar-27 14:15:37:188 :: ----- Query Execution: END -----
Mar-27 14:15:27:882 :: ----- Completed execution for sessionId:3 -----
Mar-27 14:15:27:882 :: ----- Executing Custom Event :AIFExport -----
Mar-27 14:15:28:365 :: ----- Commencing file upload of log file:3.log
2021-03-27 08:45:44,683 INFO [AIF]: Appending EPM agent log to process:: END
2021-03-27 08:45:44,690 INFO [AIF]: Executing the following script: @rload.py
2021-03-27 08:45:44,768 INFO [AIF]: No business rules found for load Id:3
2021-03-27 08:45:44,815 INFO [AIF]: -----END EXPORT STEP-----
2021-03-27 08:45:46,926 INFO [AIF]: Executing the following script: @rcheck.py
2021-03-27 08:45:45,832 INFO [AIF]: No business rules found for load Id:3
2021-03-27 08:45:45,834 INFO [AIF]: Executing the following script: @rcheck.py
2021-03-27 08:45:45,137 INFO [AIF]: No business rules found for load Id:3
2021-03-27 08:45:45,385 INFO [AIF]: KPIEE Process End, Process ID: 3

```

20. レコードがターゲット・データベースに正常にエクスポートされたことを確認します。クラウドのプロセス ID がデータベースの BATCH_ID 列に正常にマップされていることに注意してください。

BATCH_ID	ACCOUNT	ENTITY	HSP_VIEW	PERIOD	PRODUCT	SCENARIO	VERSION	YEAR	DATA_AMOUNT
1	3 7450	430	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	8347.2
2	3 7510	430	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	3500.8
3	3 7530	430	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	2300
4	3 7620	430	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	24300
5	3 7660	430	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	9188
6	3 7310	430	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	18776.55
7	3 5800	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	167105.78
8	3 6100	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	19412.7
9	3 6140	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	21559.7
10	3 7120	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	122500
11	3 7410	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	14323.2
12	3 7420	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	18476.8
13	3 7440	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	197600
14	3 7450	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	8366.2
15	3 7510	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	3500.8
16	3 7530	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	1900
17	3 7620	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	18900
18	3 7640	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	1594
19	3 7650	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	201
20	3 7660	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	9188
21	3 7670	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	399
22	3 7690	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	159
23	3 7699	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	33
24	3 7310	440	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	179.54
25	3 5800	450	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	122522.46
26	3 7420	550	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	18476.8
27	3 7450	550	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	8347.2
28	3 7510	550	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	3500.8
29	3 7660	550	BaseData	Feb	P_000	Actual	Working	FY16	2756.4

21. EPM Cloud の Insert 問合せを使用して、同じデータを **VISION_DATA_2** という別の表にエクスポートします。

INSERT 問合せにより、複雑な SQL 式を使用してデータベースの列をマッピングできます。SQL 式は、クラウド・データベース(Oracle)ではなく、ターゲット・データベースで実行されます。これにより、MS SQL サーバー、MYSQL など、データベースのタイプに固有の SQL 式を柔軟に使用できるようになります。また、別の表のサブ問合せを使用して列の値を導出することもできます。

次の例では:

- BATCH_ID の名前が BATCH_NUMBER に変更されました。
- ENTITY の名前が ORGANIZATION に変更されました。
- YEAR 列と PERIOD 列が削除され、同じ列に年と期間の両方を移入する PERIOD_NAME 列が作成されました。
- DATA_AMOUNT のスケールは、小数点以下 2 桁のみを格納するように縮小されました。

別の一連の列名でアプリケーションがすでに登録されているため、アプリケーションを登録する CSV ファイルは必要ありません。SQL Insert 問合せを使用する利点は、SQL Insert 問合せを使用して実際の列名をマップする際に、登録されたアプリケーションの列名を使用できる点です。したがって、アプリケーションには、ターゲット・データベースの実際の列名とはまったく異なるディメンションが含まれている可能性があります。アプリケーションのディメンションは、ターゲット・データベース表に移入されている実際の列のサブセットのみを示すこともできます。

詳細は、次を参照してください:[カスタム INSERT 問合せでのライトバック](#)

INSERT 問合せの値は、ターゲット・ディメンション名を~~ (チルダ)で囲むことで示されます。たとえば、データ・エクスポート・アプリケーションの ABC という

ディメンションをデータベースの DEF 列にマップする必要がある場合は、DEF 列の値を ~ABC~ と指定します。

22. 次の値で新しい問合せを作成します:
 - a. BATCH_ID を BATCH_NUMBER に再マップします。
 - b. 接頭辞 「Acc」 を使用します(例: ACCOUNT)。
 - c. 接頭辞 「Org」 を使用します(例: ORGANISATION)。
 - d. 期間と年を連結して PERIOD_NAME にします。
 - e. 接頭辞 「Prd」 を使用します(例: PRODUCT)。
 - f. DATA_AMOUNT を小数点第 2 位に丸め処理します。

Create Query

Query Name:

Query String:

```
INSERT into
VISION_DATA_2(BATCH_NUMBER,ACCOUNT,ORGANISATION,HSP_VIEW,PERIOD_NAME,PR
ODUCT,SCENARIO,VERSION,DATA_AMOUNT)
values(~BATCH_ID~, 'Acc.'||~ACCOUNT~, 'Org.'||~ENTITY~, ~HSP_VIEW~, ~PERIOD~||~YEAR~,
'Prd.'||~PRODUCT~, ~SCENARIO~, ~VERSION~, round(~DATA_AMOUNT~, 2))
```

Confirmation Query Name available.
New Query Name is available for creation.

23. 「アプリケーション詳細」 で、登録されたデータ・エクスポート・アプリケーションの問合せ名を指定し、「表名」 は空白のままにします。

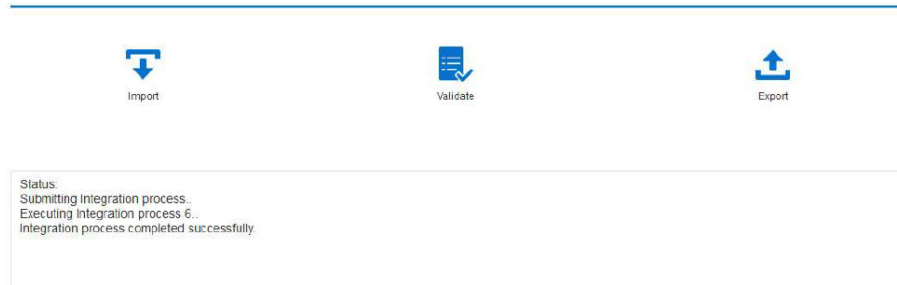
Application Details: ORACLE_DWH

Dimensions Options Set Defaults

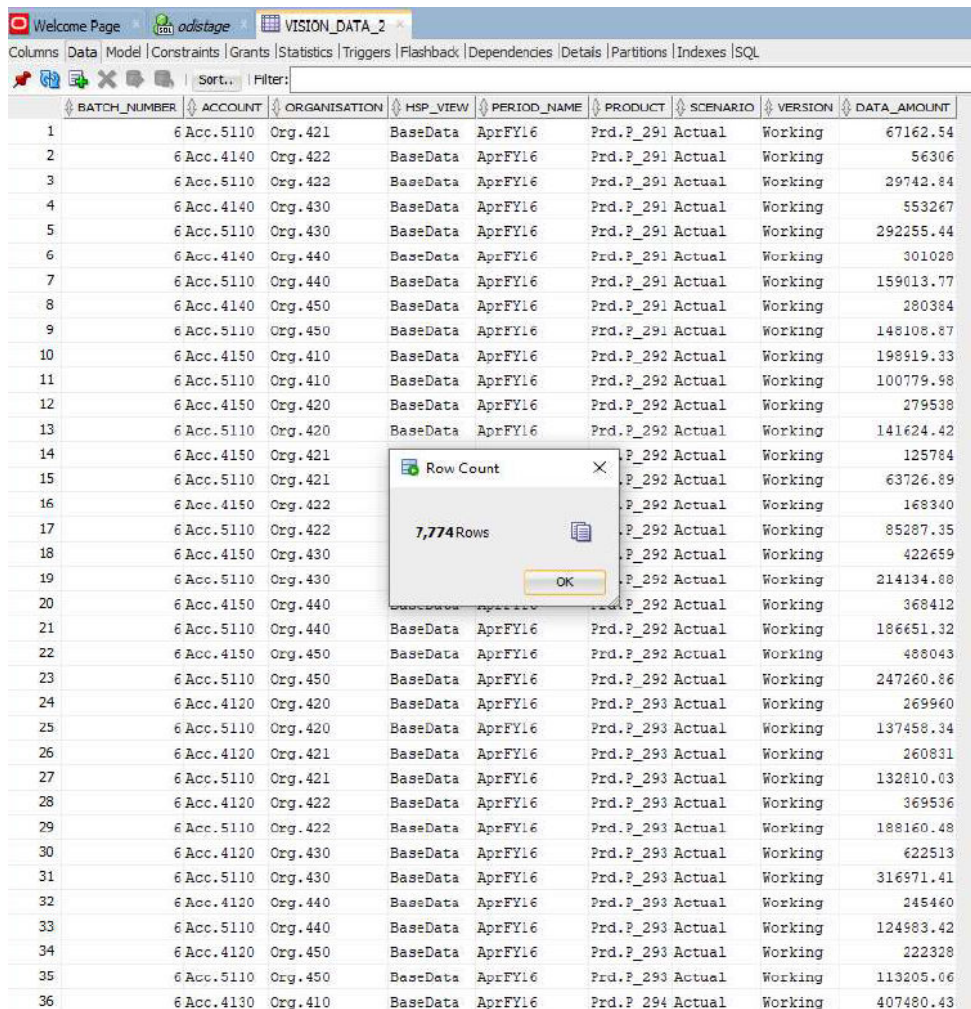
Property Name	Property Value
Batch Size	1000
Table Name	
Insert Query	InsertVisionData
Credential Store	Cloud
JDBC Driver	Oracle
Workflow Mode	Full
JDBC URL	jdbc:oracle:thin:@thshetty-lap:8821/ShettyDB
Username	odistage
Password	*****

24. 期間範囲について統合プロセスを再度実行し、プロセスが正常に完了するまで待ちます。

Executing Integration: Export to DWH



25. 宛先表が正しく移入されていることを確認します。



BATCH_NUMBER	ACCOUNT	ORGANISATION	HSP_VIEW	PERIOD_NAME	PRODUCT	SCENARIO	VERSION	DATA_AMOUNT
1	6 Acc. 5110	Org. 421	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	67162.54
2	6 Acc. 4140	Org. 422	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	56306
3	6 Acc. 5110	Org. 422	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	29742.84
4	6 Acc. 4140	Org. 430	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	553267
5	6 Acc. 5110	Org. 430	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	292255.44
6	6 Acc. 4140	Org. 440	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	301020
7	6 Acc. 5110	Org. 440	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	159013.77
8	6 Acc. 4140	Org. 450	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	280384
9	6 Acc. 5110	Org. 450	BaseData	AprFY16	Prd. P_291	Actual	Working	148108.87
10	6 Acc. 4150	Org. 410	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	198919.33
11	6 Acc. 5110	Org. 410	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	100779.98
12	6 Acc. 4150	Org. 420	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	279538
13	6 Acc. 5110	Org. 420	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	141624.42
14	6 Acc. 4150	Org. 421	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	125784
15	6 Acc. 5110	Org. 421	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	63726.89
16	6 Acc. 4150	Org. 422	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	168340
17	6 Acc. 5110	Org. 422	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	85287.35
18	6 Acc. 4150	Org. 430	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	422659
19	6 Acc. 5110	Org. 430	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	214134.08
20	6 Acc. 4150	Org. 440	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	368412
21	6 Acc. 5110	Org. 440	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	186651.32
22	6 Acc. 4150	Org. 450	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	488043
23	6 Acc. 5110	Org. 450	BaseData	AprFY16	Prd. P_292	Actual	Working	247260.86
24	6 Acc. 4120	Org. 420	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	269960
25	6 Acc. 5110	Org. 420	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	137458.34
26	6 Acc. 4120	Org. 421	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	260831
27	6 Acc. 5110	Org. 421	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	132810.03
28	6 Acc. 4120	Org. 422	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	369536
29	6 Acc. 5110	Org. 422	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	188160.48
30	6 Acc. 4120	Org. 430	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	622513
31	6 Acc. 5110	Org. 430	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	316971.41
32	6 Acc. 4120	Org. 440	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	245460
33	6 Acc. 5110	Org. 440	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	124983.42
34	6 Acc. 4120	Org. 450	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	222328
35	6 Acc. 5110	Org. 450	BaseData	AprFY16	Prd. P_293	Actual	Working	113205.06
36	6 Acc. 4130	Org. 410	BaseData	AprFY16	Prd. P_294	Actual	Working	407480.43

EPM 統合エージェント・ライトバックのイベント・スクリプト

EPM 統合エージェントによって、ライトバックの実行中に BefExport と AftExport という 2 つのイベントが実行されます。これらのイベントを使用して、カスタム・コードを実行し、標準処理をバイパスし、カスタム・データ・セットを生成します。このデータ・セットは、オンプレミス・データベースで使用できるようになっているデータ・ファイルに含まれます。

BefExport および AftExport イベントで渡されるカスタム API パラメータ。

名前	説明
JOBID	ライトバック実行のジョブ ID
JOBTYPE	ジョブ WRITEBACK のタイプ
EXPORT_DATA_FILE	エクスポート・データ・ファイルの名前(フル・パス)

BefExport イベントの使用

EPM 統合エージェントを使用してライトバックする際に、BefExport イベントを使用して、表にデータを挿入する前にアクションを実行するか、またはデフォルトの挿入処理を上書きできます。

次のスクリプト例は、ライトバック前に実行される外部 API を呼び出す方法を示しています。

この例の BefExport イベント:

- agentContextParams マップの内容を出力します
- データの挿入先の表名をフェッチして出力します。
- 挿入問合せをフェッチして出力します
- エージェント・プロセス・ログに情報メッセージを出力します。このエントリは、EPM_APP_DATA_HOME\logs および epmagent.log のプロセス・ログに記録されます。

EPM 統合エージェントのコンテキスト関数の詳細は、[EPM 統合エージェントのコンテキスト関数](#)を参照してください。

このスクリプトは例としてのみ提供されており、障害に対する保証はされず、ユーザーはこのスクリプトに関連する質問や問題について Oracle サポートにサービス・リクエストを提出できません。

```
import sys
import java

'''
Before export custom script. This script will be called before the writeback
begins execution.
'''
#print Begin: BefExport.py

#print 'Event Type is: ' + event

'''
Print the contents of the agentContextParams map which is an unmodifiable
map.
'''
#print 'JOBTYPE: ' + agentContext["JOBTYPE"]
#print 'EPM_APP_DATA_HOME: ' + agentContext["EPM_APP_DATA_HOME"]
#print 'WRITEBACK_DATA_FILE: ' + agentContext["WRITEBACK_DATA_FILE"]
#print 'JOBID: ' + str(agentContext["JOBID"])
#print 'INTEGRATION: ' + agentContext["INTEGRATION"]
#print 'LOCATION: ' + agentContext["LOCATION"]
```

```
#print 'SOURCE_APPLICATION: ' + agentContext["SOURCE_APPLICATION"]
#print 'TARGET_APPLICATION: ' + agentContext["TARGET_APPLICATION"]

'''
getTable() Method to fetch the table name into which the data will be
inserted. This is
passed from cloud to the agent during the writeback execution call.
'''
#print "Printing Table Name: " + agentAPI.getTable()

'''
getInsertQuery() Method to fetch the insert query. This is the query
which is
passed from cloud to the agent during the writeback execution call.
'''
#print "Printing Query: " + agentAPI.getInsertQuery()

'''
Log an info message to the agent process log. This entry will be
logged only to the process log in EPM_APP_DATA_HOME\logs
folder and not to epmagent.log. The log entry will be created at INFO
log level.
'''
#agentAPI.logInfo("SAMPLE: INFO log message from script")

'''
Log an severe message to the agent process log. This entry will be
logged into the process log in EPM_APP_DATA_HOME\logs
folder and also into epmagent.log. The log entry will be created at
SEVERE log level.
'''
#agentAPI.logError("SAMPLE: SEVERE log message from script")

'''
Uncomment to skip the export data execution. The writeback execution
can be skipped only during the
BEFORE_EXPORT event. This will skip the execution of the insert
statements. The cloud process will be marked as failed in the Export
data step.
'''
#agentAPI.skipAction('true')

'''
Return false in case of error, which will throw an exception in the
agent.
'''

#print "End: BefExport.py"
```


AftExport イベントの使用

EPM 統合エージェントを使用してライトバックする際に、AftExport を使用して、表にデータを挿入した後で処理後のクリーンアップを実行します。

次のスクリプト例は、ライトバック後に実行される外部 API を呼び出す方法を示しています。

この例の AftExport イベント:

- agentContextParams マップの内容を出力します
- エージェント・プロセス・ログに情報メッセージを出力します。このエントリは、EPM_APP_DATA_HOME\logs のプロセス・ログに記録されます。
- エージェント・プロセス・ログに、すべての重大エラー・メッセージを出力します。このエントリは、EPM_APP_DATA_HOME\logs のプロセス・ログに記録されます。

EPM 統合エージェントのコンテキスト関数の詳細は、[EPM 統合エージェントのコンテキスト関数](#)を参照してください。

このスクリプトは例としてのみ提供されており、障害に対する保証はされず、ユーザーはこのスクリプトに関連する質問や問題について Oracle サポートにサービス・リクエストを提出できません。

```
import sys

'''
After export custom script. This script will be called after the writeback
finishes execution.
'''
#print "Begin: AftExport.py"

#print 'Event Type is: ' + event

'''
Print the contents of the agentContextParams map which is an unmodifiable
map.
'''
#print 'JOBTYPE: ' + agentContext["JOBTYPE"]
#print 'EPM_APP_DATA_HOME: ' + agentContext["EPM_APP_DATA_HOME"]
#print 'WRITEBACK_DATA_FILE: ' + agentContext["WRITEBACK_DATA_FILE"]
#print 'JOBID: ' + str(agentContext["JOBID"])
#print 'INTEGRATION: ' + agentContext["INTEGRATION"]
#print 'LOCATION: ' + agentContext["LOCATION"]
#print 'SOURCE_APPLICATION: ' + agentContext["SOURCE_APPLICATION"]
#print 'TARGET_APPLICATION: ' + agentContext["TARGET_APPLICATION"]

'''
Log an info message to the agent process log. This entry will be logged only
to the process log in EPM_APP_DATA_HOME\logs
folder and not to epmagent.log. The log entry will be created at INFO log
level.
'''
#agentAPI.logInfo("SAMPLE: INFO log message from script")
```

```
'''  
Log an severe message to the agent process log. This entry will be  
logged into the process log in EPM_APP_DATA_HOME\logs  
folder and also into epmagent.log. The log entry will be created at  
SEVERE log level.  
'''  
#agentAPI.logError("SAMPLE: SEVERE log message from script")  
  
'''  
Return false in case of error, which will throw an exception in the  
agent.  
'''  
returnValue = 'true'  
  
#print "End: AftExport.py"
```

エージェント・クラスタの理解

クラスタを使用して、統合ジョブを分散できます。

次に、複数のクラスタを定義するビジネス・シナリオの例をいくつか示します:

- ソース・システムは地理的に分散されています。ネットワーク遅延を避けるために、各データ・センター・ロケーションに 1 つ以上のエージェントをデプロイできます。
- 組織内の様々なビジネス・ユニットは、ジョブを独立して保護および管理します。
- 組織では、様々なタイプのソース・システムを使用します。たとえば、**E-Business Suite (EBS)**および **Peoplesoft** が異なるデータ・センターに配置されます。セキュリティおよびデータ量は異なり、データ抽出プロセスを独立して管理します。
- 各種ソースのデータ・ロード頻度は異なります。レポート作成およびドリルダウンのソースとして、データ・ウェアハウス・ステージング・システムを使用できます。データは対話型モードで毎日ロードされ、ドリルダウンがサポートされます。月末の連結プロセスのみのソースとして別の **ERP** システムを使用でき、すべてのデータ・ロードはバッチ処理されます。これらのデータ・ソースごとに異なるクラスタを定義できます。

クラスタ割当てを定義することにより、統合を複数のクラスタに割り当てることができます。次のエンティティ・タイプ別に、統合を適切なクラスタに割り当てることができます:

- 統合(データ・ルール)
- ロケーション
- ターゲット・アプリケーション

統合ジョブが開始されると、システムでは、ジョブが割り当てられた場所をチェックし、クラスタを判別して、ジョブをそのクラスタに割り当てます。ジョブを実行する優先順位は、エンティティ・タイプによって決まります。統合はロケーションより優先され、ロケーションはターゲット・アプリケーションより優先されます。

各クラスタ内で複数のエージェントを使用して、ロード・バランシングおよび高可用性を向上できます。エージェント構成 INI ファイルで、エージェントをクラスタに関連付けます。EPM 統合エージェントを開始すると、エージェントがクラスタに自動的に関連付けられ、クラスタに割り当てられたジョブが実行されます。クラスタ内のロード・バランシングの手順は、実行モードが同期か非同期かによって決まります。



同期モードでは、ラウンド・ロビン・プロセスが使用され、クラスタに属するエージェントにジョブが割り当てられます。詳細は、[同期モードの構成](#)を参照してください。

非同期モードでは、エージェントが異なる時間に開始するように設定して、高可用性を実現します。たとえば、間隔を 10 分に設定し、別のエージェントを 1 時間 5 分後に開始すると、別のエージェントは 1 時間 10 分後に開始されます。その結果、エージェントは 5 分ごとにチェックされます。

ノート:





選択したエンティティ (ロケーション、アプリケーションまたは統合) が別のクラスタに再割り当てされると、前のクラスタ割当ては削除され、新しい割当てに自動的に置換されます。

統合ジョブを抽出しても、ジョブのインポートおよび検証ステータスに影響しません。次に示すように、抽出が正常に実行されても、インポートおよび検証は失敗します:

Status	Process Step	Process Start Time	Process End Time
	Extract data from Datasource AGAgentQry	Sep 09, 2019 08:09:28 PM	Sep 09, 2019 08:09:42 PM
	Import data from file AGAgentQry_166.dat for Period Dec-18	Sep 09, 2019 08:09:42 PM	Sep 09, 2019 08:09:43 PM

クラスタの追加

クラスタを追加するには:

1. ホーム・ページから、「アプリケーション」 () をクリックします。
2. 「データ交換」 () をクリックし、「データ統合」タブを選択します。
3. オプションで、「ナビゲータ」 () をクリックし、「アプリケーション」から「データ交換」 ( Data Exchange) を選択して、データ統合を起動できます。
4. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「エージェント」を選択します。

Name	Description	Mode
EPMCLUSTER	Cluster for On-premise Integration	Synchronous

Agent	Integration	Process Id	Status
EPMAGENT	KS_EBSQL	949	●
EPMAGENT	KS_EBSQL	948	●
EPMAGENT	KS_EBSQL	947	●
EPMAGENT	KS_EBSQL	946	●
EPMAGENT	KS_EBSQL	945	●
EPMAGENT	KS_EBSQL	944	●
EPMAGENT	KS_EBSQL	943	●

- 「エージェント・クラスタ」ページから、「追加」をクリックします。
- 「エージェント・クラスタの作成」ページで、「クラスタ名」フィールドにクラスタ名を指定します。
名前には英数字のみ使用できます。記号(@)やアンパサンド(&)などの特殊記号は使用しないでください。クラスタの作成後は、名前を変更できません。
- 「クラスタ・モード」で、統合フローを選択します。
使用可能なモードは次のとおりです：
 - 同期
 - 非同期
- 「説明」で、クラスタに関する追加情報を指定します。
- 「保存」をクリックします。

Create Agent Cluster

Cluster Name

Cluster Mode

Description

統合ジョブの割当て

抽出を実行するエージェントによってクラスタ内で統合ジョブが抽出される時、割当てを使用して優先順位付けができます。エンティティ (ロケーション、アプリケーションまたは統合) を割り当て、選択したクラスタに関連付けて、抽出の順序を設定できます。

統合ジョブを割り当てるには:

1. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「エージェント」を選択します。
2. 「エージェント・クラスタ」ページから、統合ジョブを追加するクラスタの名前を選択します。
3. 「エージェント」タブをクリックし、クラスタから割当てで使用するエージェントの名前を選択します。


EPMCLUSTER : Synchronous Return

Agents			Assignments	
Name	Physical URL	Web URL	Description	Last Ping
EPMAGENT	http://...us.oracle.com:9090	http://<WebServer URL> us.oracle.com		Sep 13, 2019 05:40:55 PM

次の点に注意してください。

- 名前 — クラスタに割り当てられたエージェントの名前。
 - 物理 URL — Web URL がリバース・プロキシを介して要求をリダイレクトする IP アドレスとポートを表します。
 - Web URL — Oracle Enterprise Performance Management Cloud が要求を送信する Web アドレスを表します。
「Web URL」フィールドは変更できます。
 - 前回の Ping — システムでホストが使用可能であることを最後にチェックした日時。
4. 「割当」タブをクリックし、「タイプ」ドロップダウンからエンティティのタイプを選択します。

有効なエンティティ・タイプは次のとおりです:

- アプリケーション
 - 統合
 - ロケーション
5. 「エンティティ」ドロップダウンから、エンティティを選択します。
 6. オプション: 「追加/削除」ボタン()をクリックして、新規割当てを追加したり、既存の割当てを削除します。

ASYNCR : Asynchronous Return

Agents		Assignments	
Type	Entity		
Integration	EBS_LOC_DL1		...
Integration	Agent_LOC1_DL1		...

EPM 統合エージェント・スクリプト

EPM 統合エージェントでは標準機能に対する拡張機能が用意されており、ユーザーは、Java または Jython/Groovy スクリプトを使用して任意のデータ・ソースに接続したり、ビジネス要件に基づき定義済問合せを条件付きで変更できます。EPM 統合エージェントでの標準 SQL 処理により、Oracle Enterprise Performance Management Cloud にアップロードされるデータ・セットが作成され、スクリプトを使用すると、標準処理をバイパスしてカスタム・データ・セットを作成でき、このデータ・セットは EPM 統合エージェント処理の一部として EPM Cloud にアップロードされます。

イベント

EPM 統合エージェントで実行されるステップは次のとおりです:

1. Oracle Enterprise Performance Management Cloud に指定された EPM 統合エージェントのデータ・ソースで定義された SQL を処理します。
2. SQL 結果セットを準備して、定義済データ・ソースから EPM Cloud に転送します。

これらのステップは、"抽出"および"アップロード"ステップと呼ばれます。EPM 統合エージェントのスクリプトは、カスタム・スクリプトを定義できるこれら 2 つのプロセス・ステップに関連して、4 つのイベントをサポートしています。イベントは次のとおりです:

イベント	スクリプト名	説明
Before Extract	BefExtract.py BefExtract.groovy	エージェント抽出処理の前に実行されるスクリプト。SQL 処理の前に任意の処理を実行する場合は、そのコードをこのスクリプトに含める必要があります。
After Extract	AftExtract.py AftExtract.groovy	エージェント抽出処理の後に実行されるスクリプト。抽出後に、agent/MyData/data フォルダ内の dat 接尾辞を持つジョブ ID を含むファイルが準備されます。
Before Upload	BefUpload.py BefUpload.groovy	データ・ファイルが EPM Cloud にアップロードされる前に実行されるスクリプト。EPM Cloud にアップロードされるファイルは、agent/MyData/data フォルダにある <jobID>.dat ファイルです。
After Upload	AftUpload.py AftUpload.groovy	データ・ファイルが EPM Cloud にアップロードされた後に実行されるスクリプト。

ノート:

ライトバックの実行中に使用される EPM 統合エージェントの BefExport および AftExport イベントの詳細は、[EPM 統合エージェント・ライトバックのイベント・スクリプト](#)を参照してください。

サンプル・スクリプトは、エージェントがインストールされたローカル・マシン上の agent/Sample/jython および agent/Sample/groovy フォルダから使用できます。スクリプトが agent/MyData/scripts フォルダに配置されている場合、システムではスクリプトのインスタンスを実行します。たとえば、BefExtract スクリプトのみを実行する場合は、このスクリプトのみを agent/MyData/scripts フォルダに保存します。

前述の 4 つのカスタム・メソッドを実装する Java クラスの独自の実装を作成することもできます。Agent/Sample フォルダに例が用意されていますが、このアプローチを選択する場合は次の点を考慮してください:

- 統合ロジックを **Java** で直接実装する場合、スクリプトを agent/MyData/scripts フォルダに保存する必要はありません。**Java** 実装では常に 4 つのイベントが実行され、それらのイベントのスクリプト・ファイルが存在しない場合は、カスタマパートナが定義した **Java** ロジックのみが処理されます。
- **Java** クラス・ファイル CustomEvent.java を作成でき、このファイルは、agent-interface.jar に存在するインタフェース EPMAgentInterface を実装します(たとえば、public class CustomEvent は EPMAgentInterface() を実装します)。
- CustomEvent.class は、agent-interface.jar 内に oracle.epm.aif.agent.agentinterface.CustomEvent.class としてパッケージ化できます。agent-interface.jar 以外の別の jar にパッケージ化する場合、この jar は CUSTOM_CLASS_PATH エージェント開始パラメータに含まれる必要があります。
- oracle.epm.aif.agent.agentinterface.CustomEvent.class とは異なるクラス名を使用する場合は、完全修飾された **Java** クラス名を使用して開始パラメータ CUSTOM_INTERFACE_CLASS_NAME を設定する必要があります。
- 定期的な **EPM Cloud** リリース・サイクルで、開発によって固定または新規のバージョンが提供されるたびに agent-interface.jar が更新されることに注意してください。カスタム・イベント・クラスは開発およびテスト目的で使用できますが、本番デプロイメントの場合は、カスタマイズが上書きされないように別の jar を保持することをお勧めします。

EPM 統合エージェントの API メソッド

EPM 統合エージェントには、ログ・ファイルのテキストの指定、バインド変数や問合せの更新などのアクション、および特別な問合せまたは **SQL** 以外のデータ・ソースが使用されている場合に、**SQL** 処理ステップをスキップするように **EPM** 統合エージェントに指示するアクションを実行するために、スクリプトで使用できる多数のメソッドが用意されています。

EPM 統合エージェントの API メソッドは次のとおりです:

API メソッド	説明	例
logInfo()	エージェント・プロセス・ログに情報メッセージを記録します。このエントリは、EPM_APP_DATA_HOME\logs フォルダのプロセス・ログ、 Oracle Enterprise Performance Management Cloud のジョブ・ログに記録されますが、ローカルの epmagent.log には記録されません。ログ・エントリは、 INFO ログ・レベルで作成されます。	agentAPI.logInfo("SAMPLE: INFO log message from script")

API メソッド	説明	例
logError()	エージェント・プロセス・ログにエラー・メッセージを記録します。このエントリは、EPM_APP_DATA_HOME\logs フォルダのプロセス・ログ、EPM Cloud のジョブ・ログ、および epmagent.log にも記録されません。ログ・エントリは、SEVER ログ・レベルで作成されます。	agentAPI.logError("SAMPLE : SEVER log message from script")
setBindVariables()	setBindVariables() メソッドを使用して、抽出問合せのバインド変数を更新します。これは、befExtract スクリプトにのみ適用されます。 バインド変数は、キーとして変数 NAME および VALUE を含む、各変数の Java マップ・エントリとして渡される必要があります。	newBindVar = dict({'PERIOD':'Feb-05', 'LEDGER':'Vision Operations (USA)'}) jmap = java.util.HashMap() (キーの場合)newBindVar.keys(): jmap[key] = newBindVar[key] agentAPI.setBindVariables(jmap)
getBindVariables()	getBindVariables() メソッドを使用して、抽出問合せのバインド変数をフェッチします。各バインド変数はマップに格納され、キー NAME および VALUE を使用してバインド変数を定義します。	bindVariables = agentAPI.getBindVariables() (エントリの場合)bindVariables.entrySet(): print entry.key, entry.value
updateQuery()	updateQuery() メソッドを使用して、抽出問合せを更新します。これは、befExtract スクリプトにのみ適用されます。	agentAPI.updateQuery("SELECT * FROM TDATESEG")
getQuery()	getQuery() メソッドを使用して、抽出実行呼出し中に EPM Cloud から EPM 統合エージェントに渡される問合せをフェッチします。	print "Printing Query: " + agentAPI.getQuery()

API メソッド	説明	例
skipAction()	<p>skipAction() メソッドを使用して、カスタム抽出ルーチンが EPM 統合エージェントで使用されている場合にデータの抽出ステップをスキップします。</p> <p>抽出実行は befExtract スクリプトでのみスキップできることに注意してください。</p> <p>保存された問合せを実行するのではなく、EPM Cloud にアップロードするデータ・ファイルを提供する場合は、EPM Cloud へのアップロード時に、<process ID>.dat という名前のファイルが MyData/data フォルダに保存されている必要があります。つまり、befExtract、aftExtract または befUpload スクリプトで、ファイルがこのフォルダに保存されている必要があります。</p>	agentAPI.skipAction('true')

EPM 統合エージェントのコンテキスト関数

EPM 統合エージェント API のコンテキスト関数は、スクリプト・ライターの重要なコンテキスト情報を提供するのに使用できます。

コンテキスト関数は次のとおりです:

関数	説明
agentContext["JOBTYPE"]	エージェントで実行されるジョブ・タイプを提供します。現時点では、JOBTYPE プロセスは EXTRACT および DRILL です。
agentContext["EPM_APP_DATA_HOME"]	EPM 統合エージェントの開始時に使用する INI ファイルに指定されたデータ・ホームを提供します。
agentContext["DELIMITER"]	Oracle Enterprise Performance Management Cloud からデータ・ソース・エントリの一部として指定したファイル区切り文字を提供します。
agentContext["DATAFILENAME"]	EPM Cloud にアップロードされるファイルのパスと名前を提供します。ファイル名を手動で作成するかわりに、この関数を使用します。
agentContext["JOBID"]	EPM Cloud に送信された統合からのジョブ ID を提供します。
agentContext["INTEGRATION"]	実行される INTEGRATION の名前を提供します。
agentContext["WRITEBACK_DATA_FILE"]	EPM Cloud からダウンロードされるライトバック・データ・エクスポート・ファイルのパスおよび名前を提供します。ファイル名を手動で作成するかわりに、この関数を使用します。

関数	説明
<code>agentContext["LOCATION"]</code>	EPM Cloud に送信された統合からのロケーションを提供します。
<code>agentContext["SOURCE_APPLICATION"]</code>	EPM Cloud に送信された統合からのソース・アプリケーションを提供します。
<code>agentContext["TARGET_APPLICATION"]</code>	EPM Cloud に送信された統合からのターゲット・アプリケーションを提供します。

EPM 統合エージェント・スクリプト例

次のスクリプト例は、為替レートを提供し、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の「データ交換」セクションに定義された統合によって処理可能なフォーマットでデータのアップロードを準備する外部 API を呼び出す方法を示します。EPM Cloud の設定ステップでは、エージェント・インスタンスを統合データ・ソースとして使用し、EPM アプリケーションをターゲットとして使用します。このスクリプトは例としてのみ提供されており、障害に対する保証はされず、ユーザーはこのスクリプトに関連する質問や問題について Oracle サポートにサービス・リクエストを提出できません。

```
''' This jython script calls an external API to get exchange rates,
and then generates a file which is picked up by the EPM Integration
Agent '''

import json
import urllib2

''' Turn off SQL processing by AGENT '''

agentAPI.skipAction('true')

''' Set Proxy for HTTP call. Needed when connected via VPN '''

proxy = urllib2.ProxyHandler({'http': 'www-proxy.example.com:80'
'https': 'www-proxy.example.com:80'})
opener = urllib2.build_opener(proxy) urllib2.install_opener(opener)

''' Set up URL for rates download. Please see the URL for additional
information in regards to options. '''

currency = 'USD'
ratesurl = 'https://api.exchangeratesapi.io/latest?base=' + currency
fxrates = urllib2.urlopen(ratesurl)
text = json.loads(fxrates.read())
allrates = text['rates']

agentAPI.logInfo("Jython Script - RateExtract: URL - " + str(ratesurl))

''' Generate file for loading into the EPM Cloud '''

outfilename = agentContext["DATAFILENAME"]
outfile = open(outfilename, "w")
```

```
''' Generate header row '''

outfile.write("Account,Currency,Entity,From Currency,Scenario,View,Rate" +
chr(10))

''' Generate a row for each rate '''

for toCur,toRate in allrates.iteritems():
    mystr = "Ending Rate" + "," + str(toCur) + "," + "FCCS_Global
Assumptions" + "," + "FROM_" + str(currency) + "," + "Actual" + "," +
"FCCS_Periodic" + "," + str(toRate) + chr(10)
    outfile.write(mystr)

outfile.close()

agentAPI.logInfo("Jython Script - RateExtract: Output File Name - " +
str(outfilename))
```

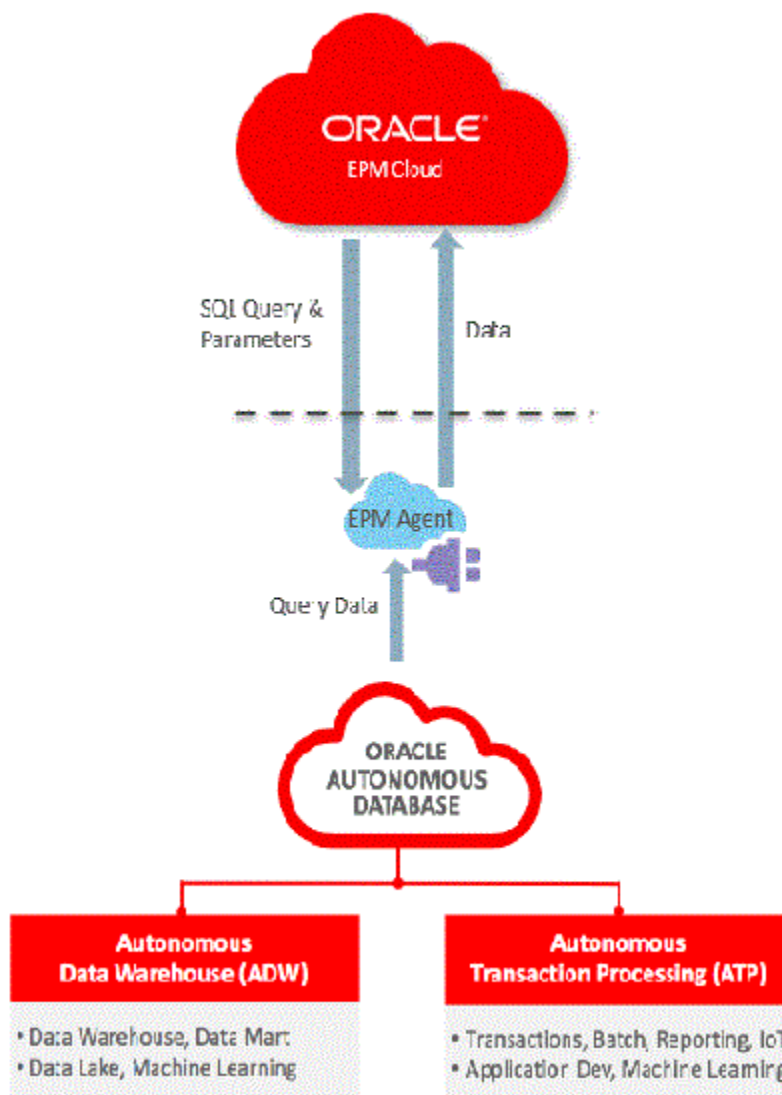
EPM 統合エージェントを使用した Oracle Autonomous Database データの統合

EPM 統合エージェントを使用して、Oracle Autonomous Database と Oracle Enterprise Performance Management Cloud の間で、データを直接統合できます。このタイプの統合では、Oracle Autonomous Database で実行されているステージング・アプリケーションまたはその他のアプリケーションからソース・データを抽出できます。EPM Cloud から、Oracle Autonomous Database の選択したレポート用データ・ウェアハウスにデータをエクスポートすることもできます。

Oracle Autonomous Database は、ハイエンドの Oracle ハードウェア・システムで最適化された完全自動データ・ウェアハウスおよびトランザクション処理のワークロードを備えた包括的なクラウド・エクスペリエンスです。Oracle Autonomous Database では、弾力的にスケールリングされる使いやすい完全自律型データベースが提供され、高速な問合せパフォーマンスが実現します。

サービスである Oracle Autonomous Database には、データベース管理は不要です。ハードウェアを構成または管理する必要も、ソフトウェアをインストールする必要もありません。Oracle Autonomous Database では、データベースのプロビジョニング、データベースのパックアップ、データベースのパッチ適用とアップグレード、およびデータベースの拡張または縮小が処理されます。Oracle Autonomous Database の詳細は、[Autonomous Database の FAQ](#)。を参照してください

Oracle Autonomous Database に対してデータをロードまたはライトバックする場合、Oracle Autonomous Database と EPM Cloud の間に接続を確立するために、EPM 統合エージェントが使用されます。お客様はローカル・ネットワークにエージェントをインストール(オンプレミスのデータ・ソースからデータを抽出するためにお客様が現在エージェントを使用している方法と同様)するか、Oracle Cloud Infrastructure (OCI)コンピュート・インスタンスにエージェントをインストールして、データベース接続を構成できます。コンピュート・インスタンスは、ホストする仮想サーバーに処理能力とメモリー容量を提供します。この手法は、お客様にソリューションのスケラビリティと柔軟性をもたらします。



EPM Cloud と Oracle Autonomous Cloud の統合により、お客様は、データをドリルダウンして、クイック・モード方法を使用したロードを実行することもできます。

Oracle Autonomous Database への接続プロセスの説明

EPM 統合エージェントには、お客様が Oracle Enterprise Performance Management Cloud と Oracle Autonomous Database の間の双方向統合を実行できる即時利用可能なソリューションが用意されています。

EPM Cloud と Oracle Autonomous Database の間のデータを統合する大まかなステップは次のとおりです:

1. Oracle Cloud Infrastructure Autonomous Database に接続します。
2. ローカル・ネットワークのサーバーまたは Oracle Cloud Infrastructure コンピュート・インスタンスに EPM 統合エージェントをインストールします。

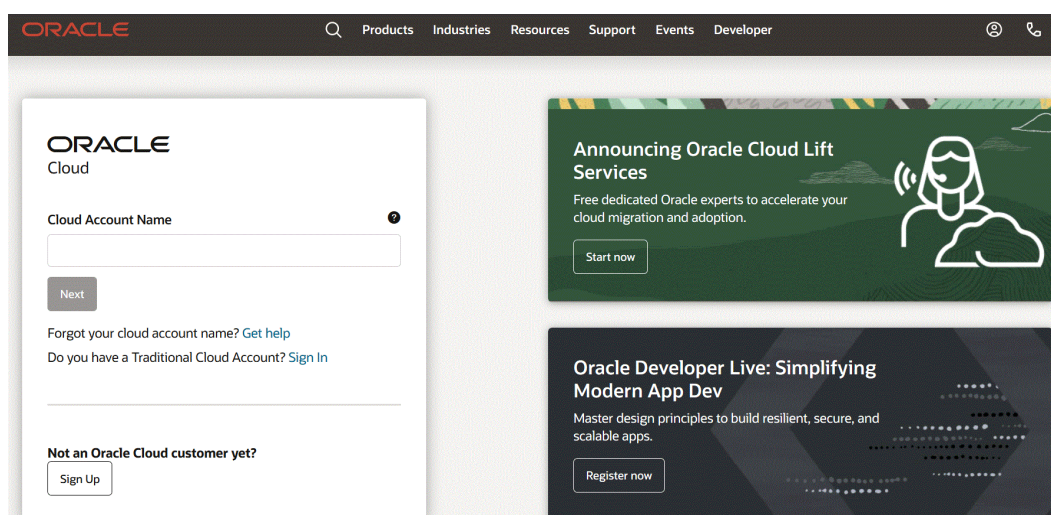
3. Oracle Cloud Infrastructure からウォレットをダウンロードします。
4. ウォレットをエージェント・サーバーにコピーして解凍します。
5. Oracle Autonomous Database データ・ソース・アプリケーションまたはデータ・エクスポート・アプリケーション(あるいはその両方)を構成します。
6. 統合を設定します。
7. 統合を実行します。

Oracle Cloud Infrastructure への接続

次のステップでは、作成された自律型データベース・インスタンスに接続しているものとします。自律型データベース・インスタンスの作成の詳細は、[開始および Autonomous Transaction Processing のプロビジョニング](#)を参照してください。

Oracle Autonomous Database に接続するには:

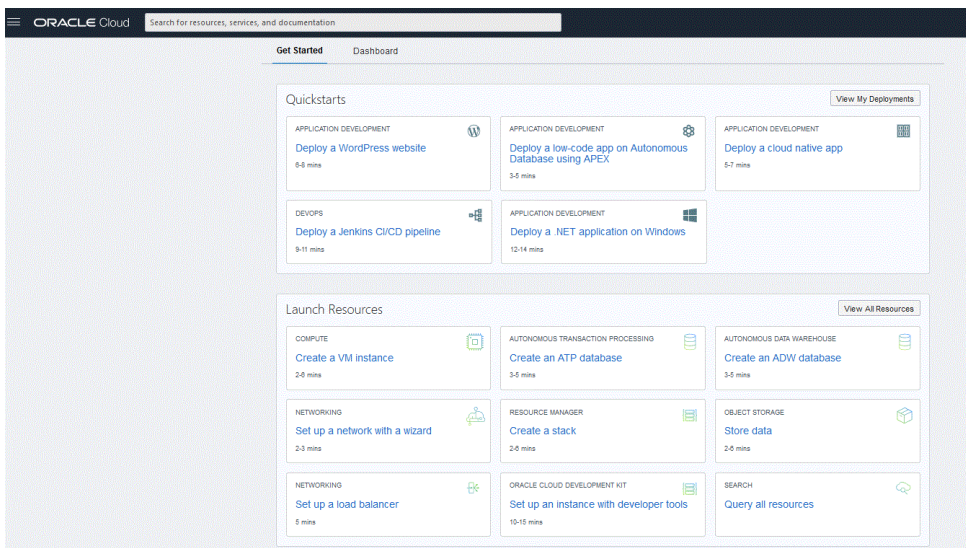
1. <https://cloud.oracle.com> からサインインします。
2. 「Cloud Account Name」にクラウド・アカウント名を入力して、「Next」をクリックします。



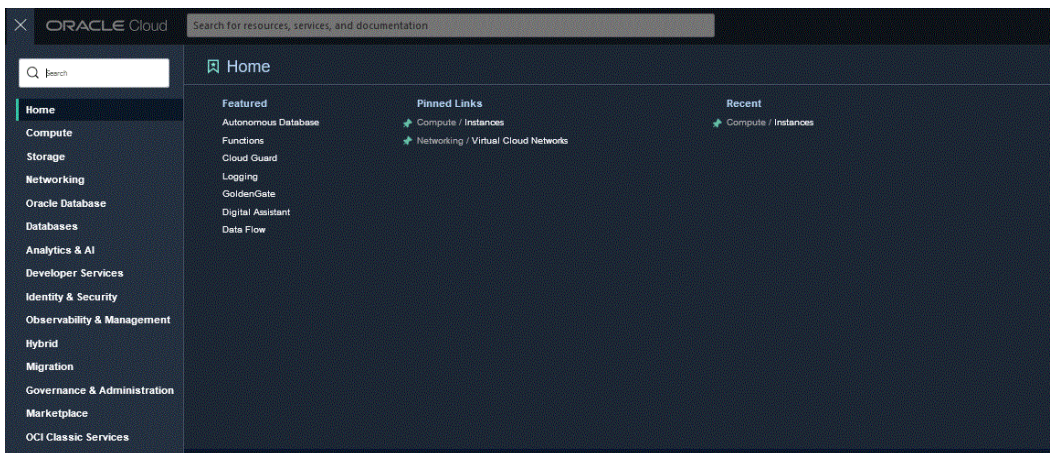
3. Oracle Cloud アカウント・サインイン・ページで、「User Name」にユーザー名、「Password」にパスワードを入力し、「Sign In」をクリックします。

The screenshot shows the Oracle Cloud Account Sign In page for user 'doc_user'. The page has a white background with a blue header bar. The Oracle Cloud logo is at the top center. Below it, the user name 'doc_user' and 'Oracle Cloud Account Sign In' are displayed. There are two input fields: 'User Name' with a placeholder 'User name or email' and 'Password' with a placeholder 'Password'. A large blue 'Sign In' button is centered below the fields. At the bottom, there is a link 'Need help signing in? Click here' and a link 'Cookie Preferences'.

4. 開始ページの左上のナビゲータ(☰)をクリックして、上位レベルのナビゲーションの選択肢を表示します。

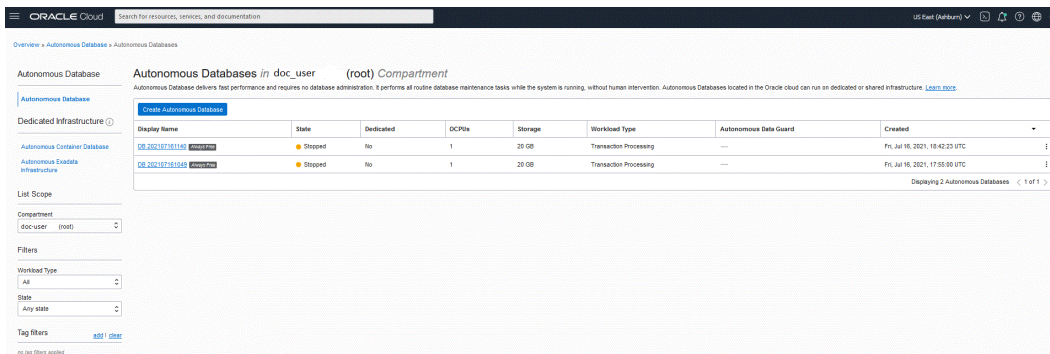


5. ホーム・ページをクリックして、「注目」で「Autonomous Database」をクリックします。

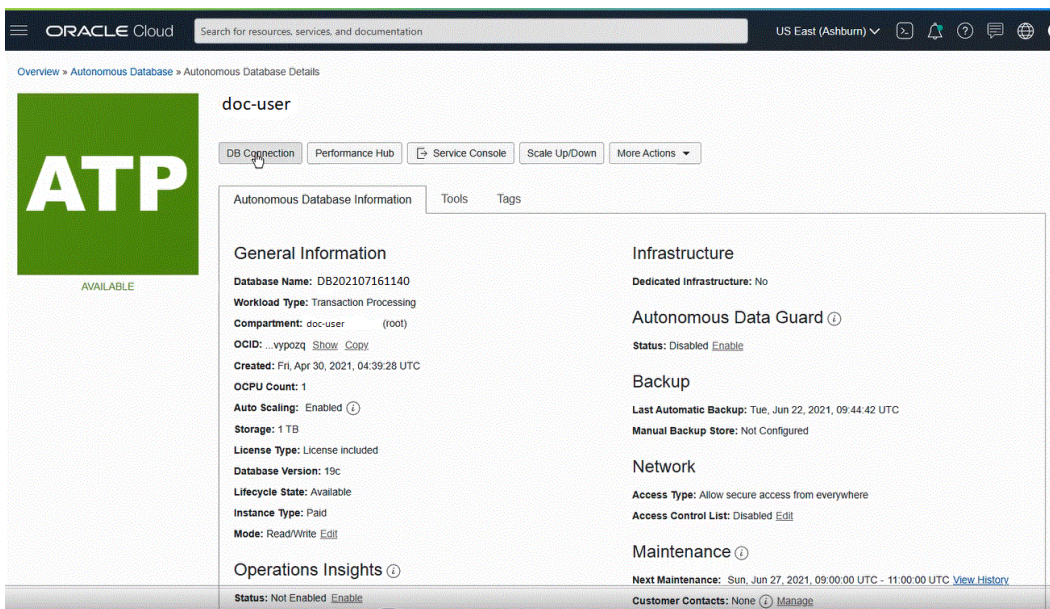


Autonomous Data ページが開き、現在のリージョンおよびコンパートメントのデータベースのリストが表示されます。

- Autonomous Database ページの「表示名」で、接続する自律型データベースを選択します。



- 「DB 接続」をクリックします。

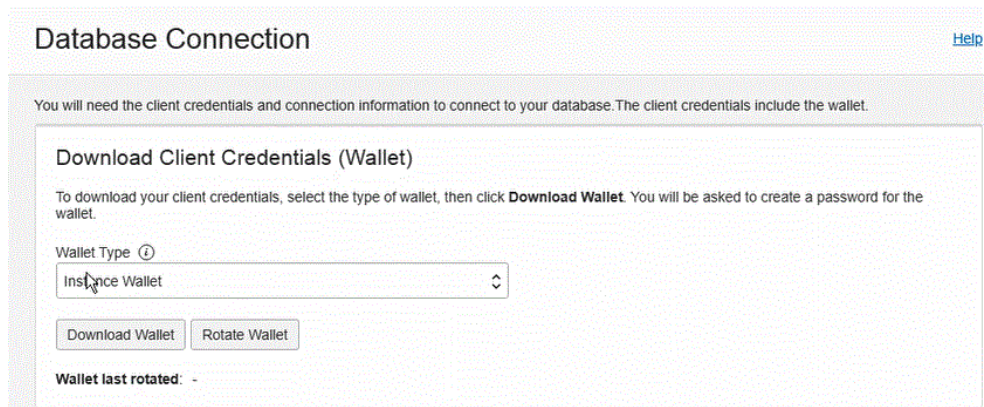


- データ接続 ページで、ウォレット・タイプを選択して、データベースに接続するためのクライアント資格証明および接続情報を指定します。

ウォレットは、秘密キー、証明書および信頼できる証明書(これらはすべて、厳密認証のために SSL によって使用されます)を含む、認証および署名資格証明を格納する、パスワードで保護されたコンテナです。

使用可能なウォレット・タイプは次のとおりです:

- **インスタンス・ウォレット:** 単一データベース専用のウォレット。これは、データベース固有のウォレットを提供します。
- **リージョナル・ウォレット:** 特定のテナントおよびリージョンのすべての Autonomous Database 用のウォレット(これには、クラウド・アカウントが所有するすべてのサービス・インスタンスが含まれます)。



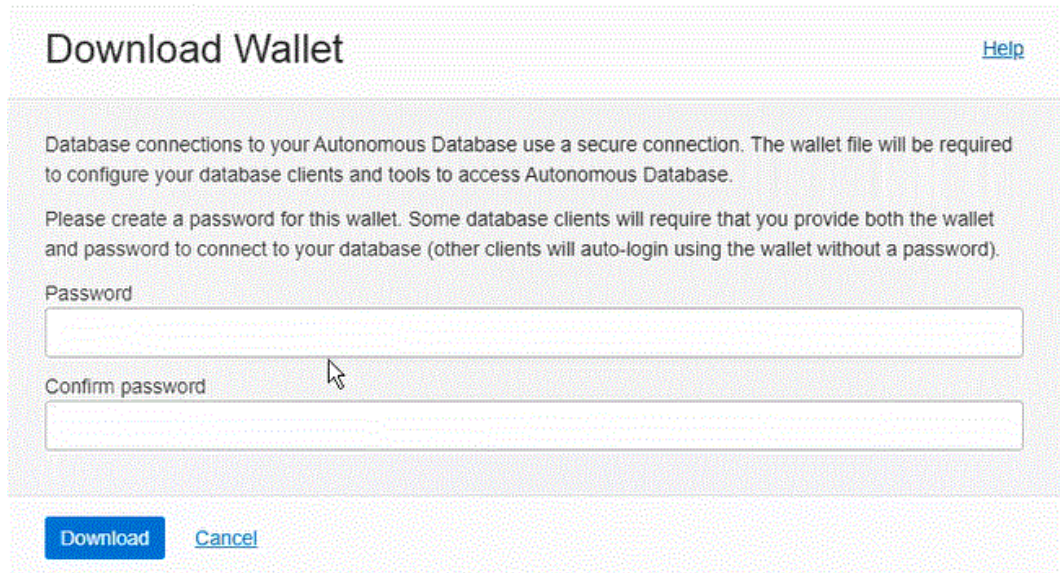
The screenshot shows a web interface titled "Database Connection" with a "Help" link. Below the title, a message states: "You will need the client credentials and connection information to connect to your database. The client credentials include the wallet." The main section is titled "Download Client Credentials (Wallet)" and contains the following text: "To download your client credentials, select the type of wallet, then click **Download Wallet**. You will be asked to create a password for the wallet." Below this text is a "Wallet Type" dropdown menu with a help icon, currently showing "Instance Wallet". There are two buttons: "Download Wallet" and "Rotate Wallet". At the bottom, it says "Wallet last rotated: -".

 **Note:**

「**インスタンス・ウォレット**」を使用してデータベース固有のウォレットをエンド・ユーザーに提供し、可能な場合常にアプリケーションで使用されるようにすることをお勧めします。リージョナル・ウォレットは、リージョン内のすべての **Autonomous Database** への潜在的なアクセスが必要な管理目的のみで使用される必要があります。

9. 「**ウォレットのダウンロード**」をクリックします。
10. 「**ウォレットのダウンロード**」ダイアログで、「**パスワード**」フィールドにウォレットのパスワードを入力して、「**パスワードの確認**」フィールドでパスワードを確認します。

ウォレット内のキーを暗号化するパスワードを指定するよう求められます。パスワードは 8 文字以上で、1 つ以上の文字と 1 つ以上の数字または特殊文字を含める必要があります。このパスワードによって、ダウンロードされたクライアント資格証明ウォレットが保護されます。



Download Wallet [Help](#)

Database connections to your Autonomous Database use a secure connection. The wallet file will be required to configure your database clients and tools to access Autonomous Database.

Please create a password for this wallet. Some database clients will require that you provide both the wallet and password to connect to your database (other clients will auto-login using the wallet without a password).

Password

Confirm password

Download [Cancel](#)

11. 「ダウンロード」をクリックして、クライアントのセキュリティ資格証明の zip ファイルを保存します。
デフォルトでは、ファイル名は `Wallet_ dbname.zip` です。このファイルは、任意のファイル名で任意のローカル・フォルダに保存できます。
12. 「閉じる」をクリックします。

 **Note:**

SQL Developer を使用して Oracle Autonomous Database に接続する場合は、[SQL Developer の Autonomous Transaction Processing への接続](#)を参照してください。

Oracle Autonomous Database に接続するための EPM 統合エージェントの構成

この項では、Oracle Autonomous Database に接続するために EPM 統合エージェントを構成する方法について説明します。次の構成ステップについて説明します：

- [ローカル・ネットワーク上での EPM 統合エージェントの構成](#)
- [コンピューター・インスタンス上での EPM 統合エージェントの構成](#)

ローカル・ネットワーク上での EPM 統合エージェントの構成

Oracle Autonomous Database に対してデータをロードまたはライトバックする際には、組織のネットワーク内のローカル・コンピュータにエージェントをインストールします。

ローカル・ネットワーク内で EPM 統合エージェントを構成するには：

1. データ統合で、最新の **EPMAgent ZIP** をダウンロードします。
 - a. 「データ交換」()をクリックし、「データ統合」タブを選択します。

オプションで、「ナビゲータ」(☰)をクリックし、「アプリケーション」から「データ交換」(Data Exchange)を選択して、データ統合を起動できます。

- b. 「データ統合」ホーム・ページから、「アクション」をクリックし、「エージェントのダウンロード」を選択します。
- c. ファイル・マネージャ・ページから、**EPMAgent ZIP** を宛先フォルダに抽出します。

宛先フォルダは AGENT_HOME です。

2. Oracle Autonomous Database への接続を作成した場合は、ウォレットをダウンロードしたフォルダに移動します。

デフォルトでは、zip のファイル名は `Wallet_databasename.zip` です。

ウォレットの作成の詳細は、[Oracle Cloud Infrastructure への接続](#)を参照してください。

3. ウォレットを <EPMAgentDevData/config>などの構成ディレクトリにコピーするか、`EPM_APP_DATA_HOME` の下にウォレット・ディレクトリを作成します。
4. ウォレットを選択して解凍します。

Name	Type	Compressed size	Password pr...	Size
cwallet.sso	SSO File	7 KB	No	
ewallet.p12	Personal Information Exchange	7 KB	No	
keystore.jks	JKS File	3 KB	No	
ojdbc.properties	PROPERTIES File	1 KB	No	
README	File	2 KB	No	
sqlnet.ora	ORA File	1 KB	No	
tnsnames.ora	ORA File	1 KB	No	
truststore.jks	JKS File	3 KB	No	

5. テキスト・エディタで `tnsnames.ora` ファイルを開き、次の例で示すようにプロキシ・サービスとプロキシ・ポートを置換して、サービスの記述にプロキシのエントリを追加します:

```
myadb_high = (description= (retry_count=20)(retry_delay=3)
(address=(https_proxy=myproxy.sample.com) (https_proxy_port=80))
```

`tnsnames.ora` ファイルは、ローカル・ネーミング・メソッドの接続記述子にマップされたネットワーク・サービス名またはリスナーのプロトコル・アドレスにマップされたネット・サービス名を含む構成ファイルです。このプロキシ情報は、そのネットワーク内でエージェントを実行するために必要です。

```
tnsnames.ora.txt - Notepad
File Edit View

mcebs_high = (description= (retry_count=20)(retry_delay=3)(address=(protocol=tcps)(port=1234)(host=adb.us-
anywhere-1.oraclecloud.com)(https_proxy=www-proxy.us.oracle.com)(https_proxy_port=80))(connect_data=(service_name=
123456789_mcebs_high.adb.oraclecloud.com))(security=(ssl_server_dn_match=yes)))

mcebs_low = (description= (retry_count=20)(retry_delay=3)(address=(protocol=tcps)(port=1234)(host=adb.us-
anywhere-1.oraclecloud.com)(https_proxy=www-proxy.us.oracle.com)(https_proxy_port=80))(connect_data=(service_name=
123456789_mcebs_low.adb.oraclecloud.com))(security=(ssl_server_dn_match=yes)))

mcebs_medium = (description= (retry_count=20)(retry_delay=3)(address=(protocol=tcps)(port=1234)(host=adb.us-
anywhere-1.oraclecloud.com)(https_proxy=www-proxy.us.oracle.com)(https_proxy_port=80))(connect_data=(service_name=
123456789_mcebs_medium.adb.oraclecloud.com))(security=(ssl_server_dn_match=yes)))
```

6. `tnsnames.ora` ファイルを保存します。

Cloud Infrastructure (OCI) コンピュート・インスタンスへの EPM 統合エージェントのデプロイ

Oracle Autonomous Database に対してデータをロードまたはライトバックする場合、Oracle Cloud Infrastructure (OCI) コンピュート・インスタンスに EPM 統合エージェントを配置できます。

コンピュート・ホストをプロビジョニングして管理できるように、Oracle Cloud Infrastructure でコンピュート・インスタンスが提供されます。ホストする仮想サーバーに処理能力とメモリー容量を提供するなど、コンピュートとアプリケーションの要件を満たすように、必要に応じてインスタンスを作成できます。インスタンスを作成した後は、コンピュータから安全にアクセスして、再起動し、ボリュームをアタッチおよびデタッチして、完了したら終了できます。終了すると、インスタンスのローカル・ドライブに加えた変更は失われます。

Oracle Cloud Infrastructure コンピュート・インスタンスに EPM エージェントをデプロイすることには、次のメリットがあります：

- 単純なインストール
- ファイアウォールやオンプレミス環境でポートを開くなどの特殊なネットワーク構成は必要ありません。
- すべてのデータ・トラフィックはクラウド内で行われ、オンプレミス環境へのデータ転送は発生しません。

コンピュート・インスタンスが使用されると、エージェントによって Oracle Enterprise Performance Management Cloud と Oracle Autonomous Database の間の接続が確立されます。この手法は、お客様にソリューションのスケラビリティと柔軟性をもたらします。引き続き、データ統合内で Oracle Autonomous Database アダプタ、SQL 問合せ、マッピングなどの統合定義を作成する必要があります。

コンピュート・インスタンスの作成

EPM 統合エージェントをインストールする Oracle Cloud Infrastructure コンピュート・インスタンスを作成して、Oracle Autonomous Database に対してデータをロードおよびライトバックします。さらに、ホスト・システムのその他のツール、ユーティリティおよびその他のリソースへのローカル・アクセス権限を取得します。この実装では、セキュアな接続を確立して `opc` ユーザーとしてログインするためのセキュア・シェル (SSH) クライアント・ソフトウェアを使用します。

コンピュート・インスタンスの作成を開始する前に、次が必要になります：

- 特定のコンパートメントでコンピュート・インスタンスを管理するアクセス権、特定の VCN およびサブネットを使用するアクセス権および接続する専用データベースに関する情報を表示するアクセス権を持つ Oracle Cloud ユーザー・アカウント。
- Oracle Cloud コンピュート・インスタンスの作成時に使用するコンパートメント名、VCN およびサブネット。この情報は自律型データベース管理者またはテナンシ管理者に問い合わせてください。

コンピュート・インスタンスを作成するには：

1. <https://cloud.oracle.com> からサインインします。
2. 「Cloud Account Name」にクラウド・アカウント名を入力して、「Next」をクリックします。

3. 「User Name」にユーザー名、「Password」にパスワードを入力し、「Sign In」をクリックします。
4. Oracle Cloud Infrastructure ページの左上のナビゲーション・メニューをクリックして、上位レベルのナビゲーションの選択肢を表示します。
5. 「コンピューター」をクリックして、「コンピューター」で「インスタンス」をクリックします。
6. インスタンス・ページで、「インスタンスの作成」をクリックします。

7. コンピューター・インスタンスの作成 ページで、「SSH キーの追加」ペインに移動して、「キー・ペアを自動で生成」をクリックします。

SSH は、2 台のコンピュータ間にセキュアな通信を提供するための、2 つのキー(公開キーおよび秘密キー)を使用する暗号ネットワーク・プロトコルです。SSH では、デフォルトでポート **22** を使用します。

秘密キーはユーザーが保持し(そのユーザー以外には公開されません)、公開キーは、通常 ssh-copy-id コマンドを使用してサーバーに送信されます。サーバーに公開キーが格納(および認可済としてマーク)されます。サーバーで、対応する秘密キーを持つことを証明できるすべてのユーザーに対して、アクセスが許可されるようになります。秘密キーはユーザーが保持し(そのユーザー以外には公開されません)、公開キーはサーバーに送信されます。

8. 「秘密キーの保存」と「公開キーの保存」のオプションを選択して、後で参照可能なディレクトリに両方のキーを保存します。

9. 「作成」をクリックします。
10. インスタンス・ページで、インスタンスの名前をクリックして、インスタンスの詳細を表示します。

11. 「インスタンス・アクセス」の「パブリック IP アドレス」で、IP アドレスをコピーして保存します。
リモート・ホストに接続する場合は、パブリック IP アドレスを指定する必要があります。

```
Instance Access
You connect to a running Linux instance using a Secure Shell (SSH) connection. You'll need the private key from the SSH key pair that was used to create the instance.
Public IP Address: 150.136.82.64 Copy
Username: opc
```

Putty を使用したコンピュート・インスタンスへの接続

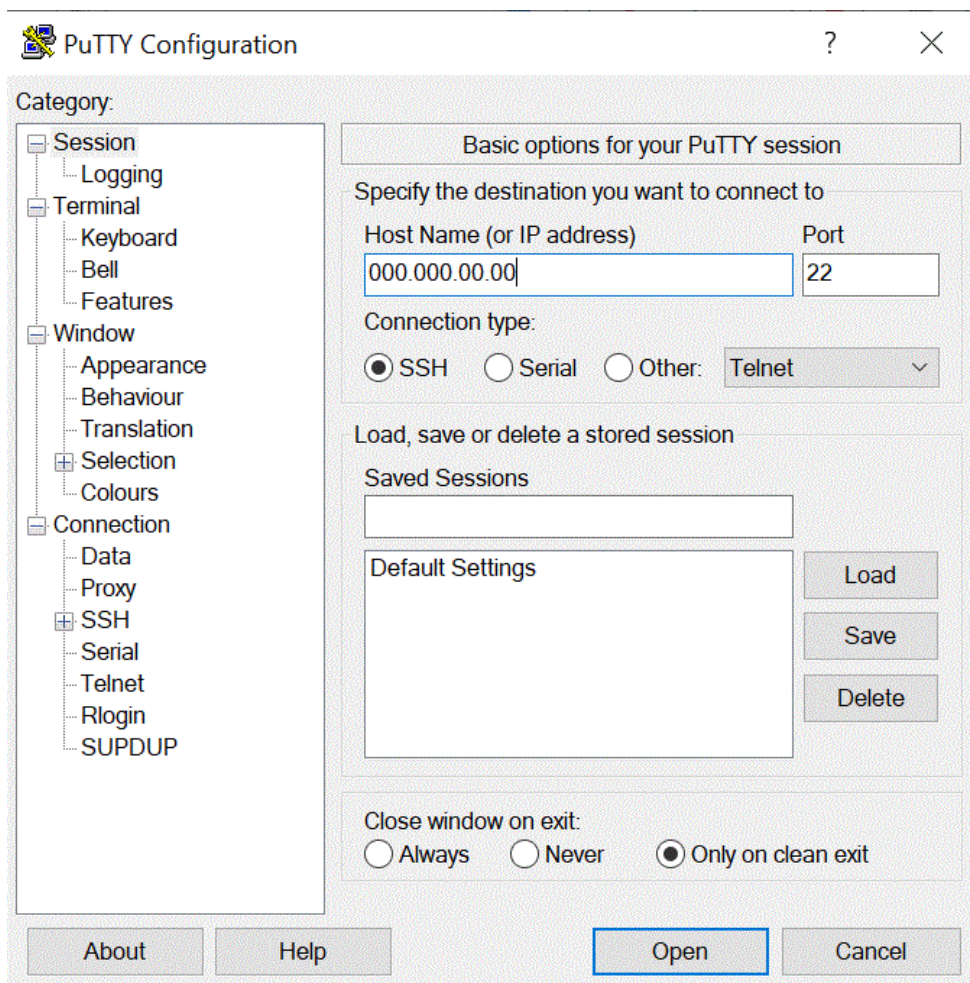
セキュア・シェル(SSH)またはリモート・デスクトップ接続を使用すると、実行中のインスタンスに接続できます。ほとんどの UNIX 形式のシステムには、デフォルトで SSH クライアントが含まれています。Windows 10 と Windows Server 2019 のシステムには、Oracle Cloud Infrastructure で生成された SSH キーを使用してインスタンスを作成した場合に必要な [OpenSSH クライアント](#)が含まれています。その他の Windows バージョンでは、<http://www.putty.org> から取得可能な PuTTY と呼ばれる無料の SSH クライアントを使用して、コマンド・ラインに接続できます

開始する前に、インスタンスに接続するための次の情報が必要です:

- インスタンスのパブリック IP アドレス。コンソールのインスタンス詳細ページからアドレスを取得できます。ナビゲーション・メニューを開き、「**コンピュート**」をクリックします。「**コンピュート**」で、「**インスタンス**」をクリックします。次に、インスタンスを選択します。または、コア・サービス API の [ListVnicAttachments](#) と [GetVnic](#) の操作を使用できます。
- インスタンスのデフォルトのユーザー名。Linux、CentOS または Windows のプラットフォーム・イメージを使用してインスタンスを起動した場合、ユーザー名は `opc` です。Ubuntu のプラットフォーム・イメージを使用してインスタンスを起動した場合、ユーザー名は `ubuntu` です。
- Linux インスタンスの場合: インスタンスの起動時に使用した SSH キー・ペアの秘密キー部分のフルパス。キー・ペアの詳細は、[Linux インスタンスでのキー・ペアの管理](#)を参照してください。
- Windows インスタンスの場合: 初めてインスタンスに接続する場合は、インスタンスの初期パスワードが必要です。コンソールのインスタンス詳細ページからパスワードを取得できます。

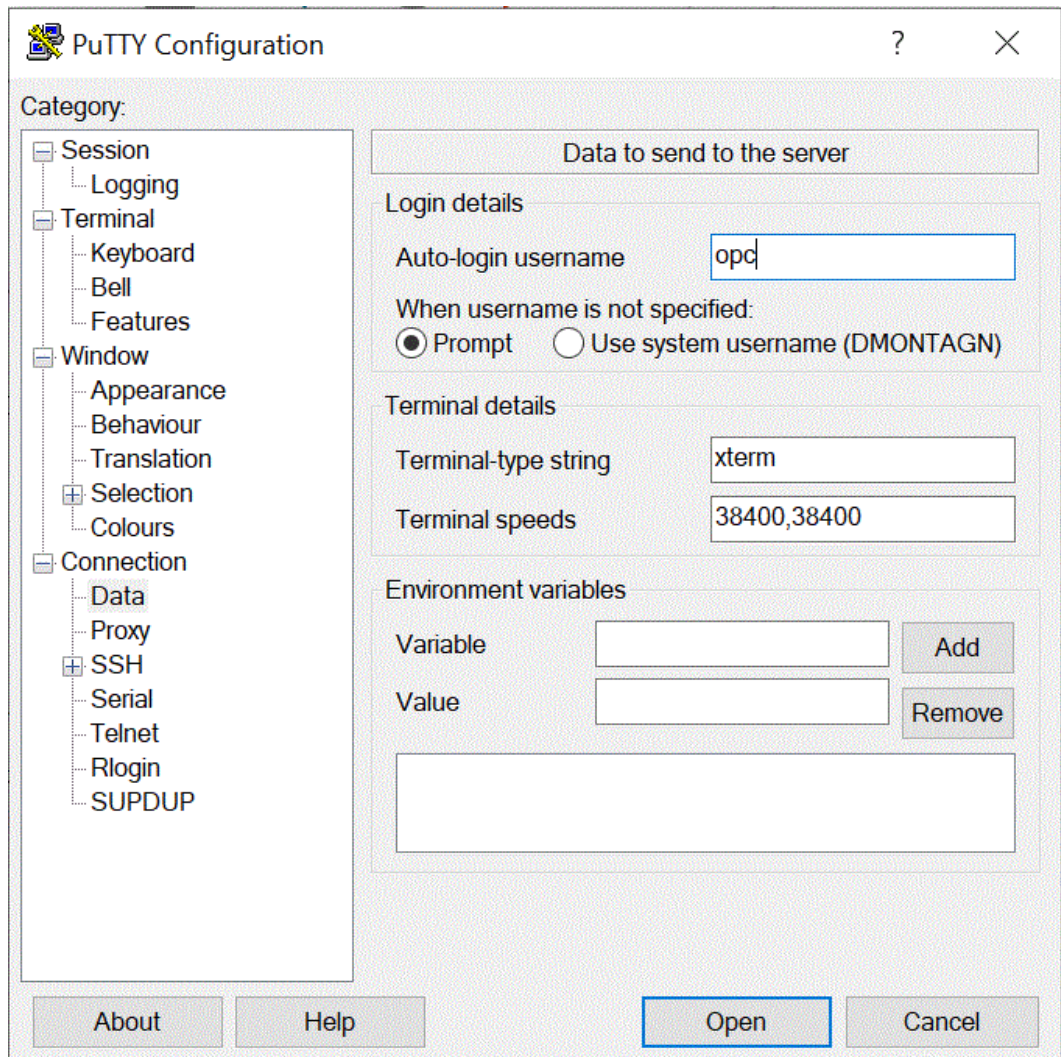
コンピュート・インスタンスに接続するには:

1. PuTTY を起動します。
2. **Basic** ページの「**Host Name**」に、コンピュート・インスタンスの作成時にコピーして保存したパブリック IP アドレスを入力します。
3. 「**Port**」番号では、デフォルト値の **22** のままにします。

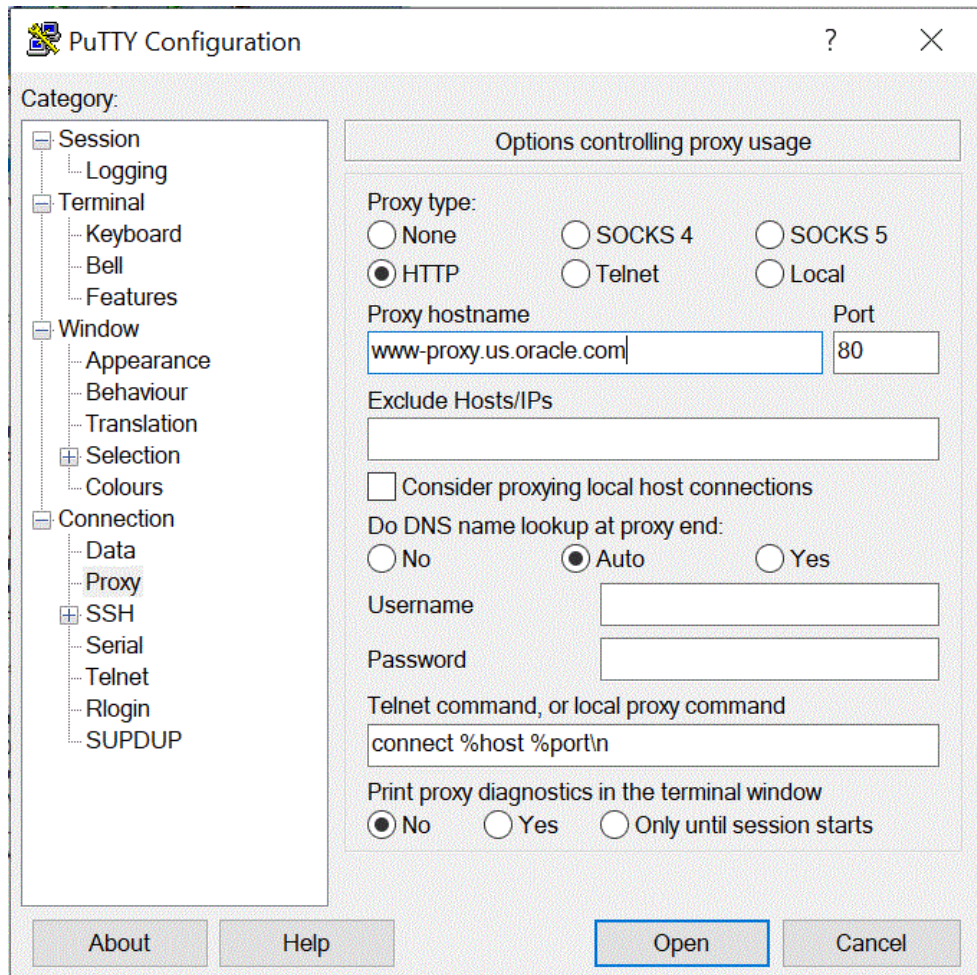


4. 「Connection」の「Data」の「Auto-login user name」に、**opc**と入力します。

opc ユーザーは、バックアップやパッチ適用などの、コンピュータ・ノードへのルート・アクセスが必要な操作を実行できます。このユーザーは、sudo コマンドを使用して、コンピュータ・インスタンスへのルート・アクセス権を取得できます。

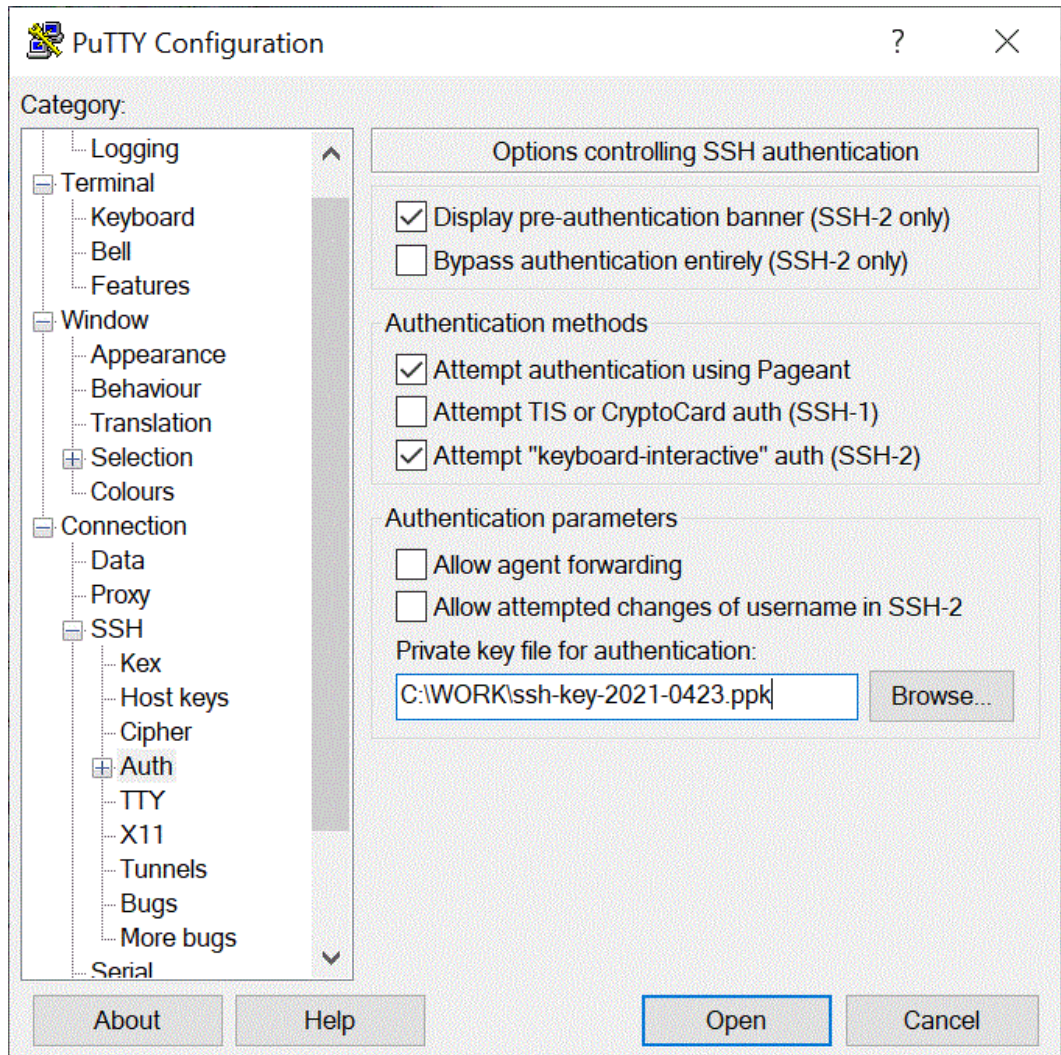


5. 「Connection」の「Proxy」の「Proxy Type」で、「HTTP」を選択します。
6. 「Proxy hostname」に、お客様のプロキシ・サーバーのアドレスを入力します。
7. 「Port」番号では、80 のポート番号を維持します。



8. 「Connection」の「+SSH」を展開して「Auth」を選択します。
9. 「Private key file for authentication」に、コンピュータ・インスタンスの作成時に受け取った秘密キーを入力します。

 をクリックして、保存した秘密キーに移動することもできます。



10. 「Open」をクリックして、コンピュータ・インスタンスを起動します。

次の例では、エージェントがすでに「Compute」インスタンスにインストールされて、開始されています。

```

opc@partnertrain:~/EPMAgentData/config
[opc@partnertrain ~]$ pwd
/home/opc
[opc@partnertrain ~]$ ls
EPMAgent EPMAgentData pbcscer Wallet_demo.zip
[opc@partnertrain ~]$ cd EPMAgent
[opc@partnertrain EPMAgent]$ ls
bin cert EPMAgent.zip lib Sample
[opc@partnertrain EPMAgent]$ cd ../EPMAgentData/
[opc@partnertrain EPMAgentData]$ ls
config data logs scripts
[opc@partnertrain EPMAgentData]$ cd config/
[opc@partnertrain config]$ ls
agentparams.ini ewallet.p12 ojdbc.properties sqlnet.ora truststore.jks
cwallet.sso keystore.jks README tnsnames.ora Wallet_demo.zip
[opc@partnertrain config]$

```

WSCP を使用したコンピュート・インスタンスへの接続

セキュア・シェル(SSH)またはリモート・デスクトップ接続を使用すると、実行中のインスタンスに接続できます。ほとんどの UNIX 形式のシステムには、デフォルトで SSH クライアントが含まれています。Windows 10 と Windows Server 2019 のシステムには、Oracle Cloud Infrastructure で生成された SSH キーを使用してインスタンスを作成した場合に必要な [OpenSSH クライアント](#)が含まれています。その他の Windows バージョンでは、<http://www.putty.org> から取得可能な PuTTY と呼ばれる無料の SSH クライアントを使用して、コマンド・ラインに接続できます

開始する前に、インスタンスに接続するための次の情報が必要です:

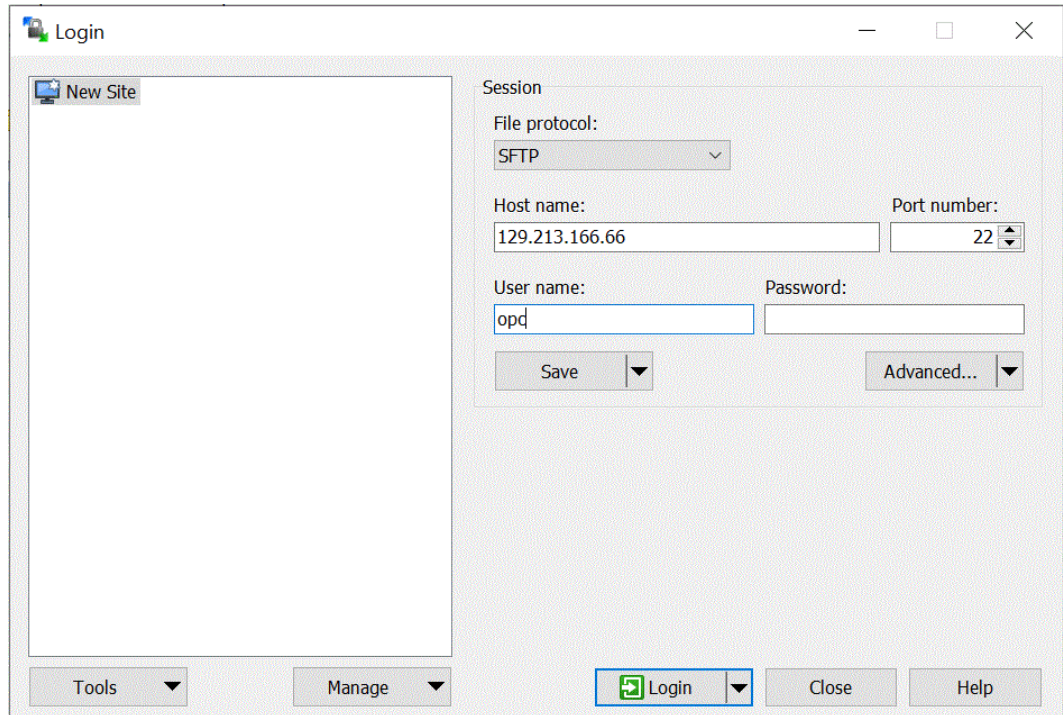
- インスタンスのパブリック IP アドレス。コンソールのインスタンス詳細ページからアドレスを取得できます。ナビゲーション・メニューを開き、「**コンピュート**」をクリックします。「**コンピュート**」で、「**インスタンス**」をクリックします。次に、インスタンスを選択します。または、コア・サービス API の [ListVnicAttachments](#) と [GetVnic](#) の操作を使用できます。
- インスタンスのデフォルトのユーザー名。Linux、CentOS または Windows のプラットフォーム・イメージを使用してインスタンスを起動した場合、ユーザー名は opc です。Ubuntu のプラットフォーム・イメージを使用してインスタンスを起動した場合、ユーザー名は ubuntu です。
- Linux インスタンスの場合: インスタンスの起動時に使用した SSH キー・ペアの秘密キー部分のフルパス。キー・ペアの詳細は、[Linux インスタンスでのキー・ペアの管理](#)を参照してください。
- Windows インスタンスの場合: 初めてインスタンスに接続する場合は、インスタンスの初期パスワードが必要です。コンソールのインスタンス詳細ページからパスワードを取得できます。

コンピュート・インスタンスに接続するには:

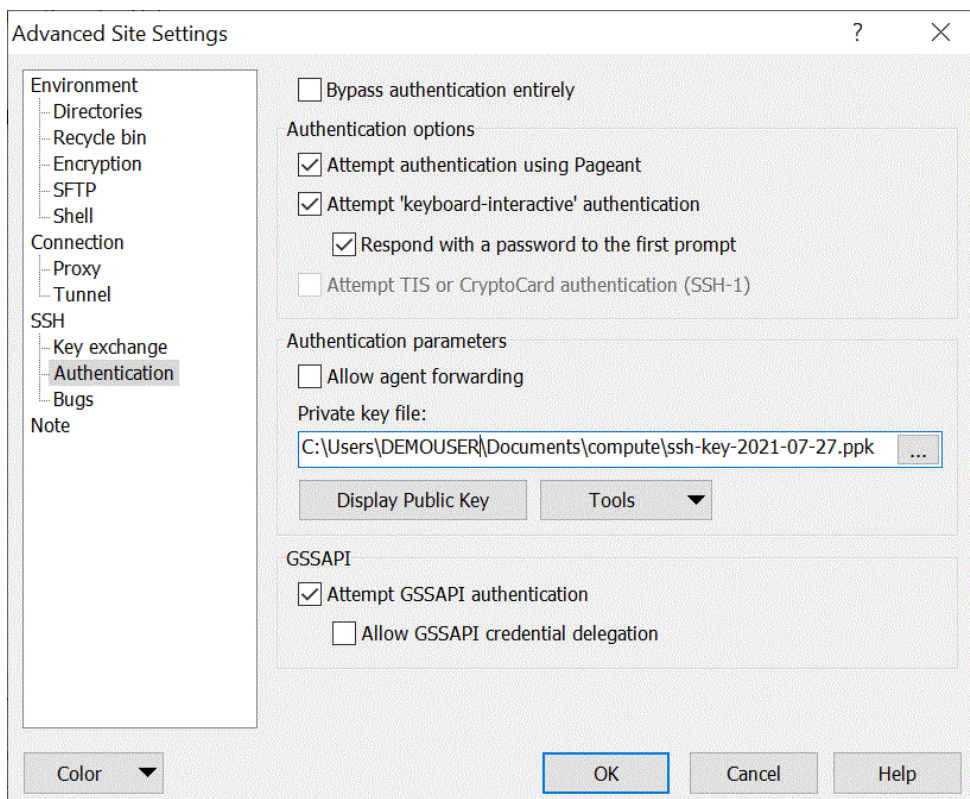
1. WinSCP を起動します。
2. WinSCP ページで、「**Session**」、「**New Session**」の順に選択します。

3. **Login** ページの「**Host Name**」に、コピーして保存した**パブリック IP アドレス**を入力します。
4. 「**Port**」番号では、デフォルト値の **22** のままにします。
5. 「**User name**」に、**opc** と入力します。

opc ユーザーは、バックアップやパッチ適用などの、コンピューター・ノードへのルート・アクセスが必要な操作を実行できます。このユーザーは、sudo コマンドを使用して、コンピューター・インスタンスへのルート・アクセス権を取得できます。

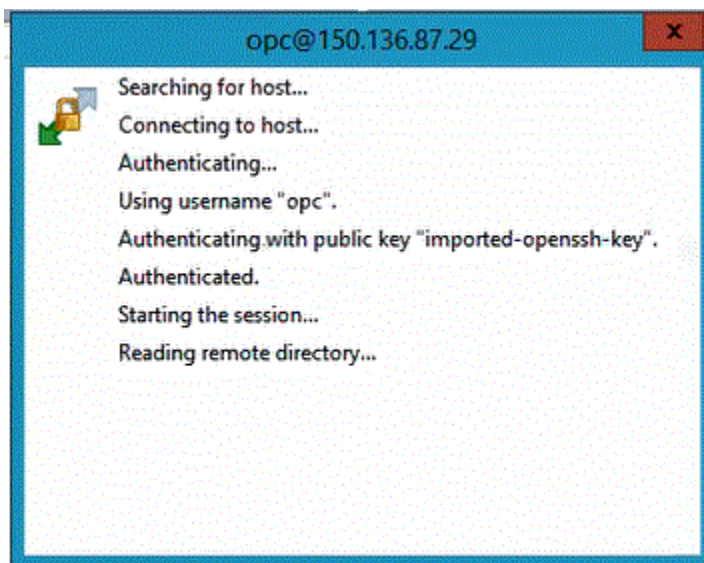


6. 「**Advanced**」ドロップダウンから、「**Advanced**」を選択します。
7. **Advanced Site Settings** ページで、「**Connection**」、「**Proxy**」の順に選択します。
8. 「**Proxy Type**」ドロップダウンから、「**HTTP**」を選択します。
9. 「**User name**」に、お客様のプロキシ・サーバーを入力します。
10. 「**Port**」番号では、**80** のポート番号を維持します。
11. 「**SSH**」、「**Key exchange**」、「**Authentication**」の順にクリックします。
12. 「**Private key file**」で、 をクリックして、保存した秘密キーに移動します。
13. 「**OK**」をクリックします。



14. Login ページで、「Login」をクリックします。

opc のログイン情報を認証しているメッセージが表示されます。



コンピュータ・インスタンス上での EPM 統合エージェントの構成

Oracle Cloud コンピュータ・インスタンスを作成したら、それに接続して、EPM 統合エージェントおよびその他の関連コンポーネントを転送してインストールする必要があります。

 **Note:**

この実装では、セキュアな接続を確立して opc ユーザーとしてログインするためのセキュア・シェル(SSH)クライアント・ソフトウェアを使用します。

コンピュータ・インスタンス・システムの作成を開始する前に、次の必要になります:

- 特定のコンパートメントでコンピュータ・インスタンスを管理するアクセス権、特定の VCN およびサブネットを使用するアクセス権および接続する専用データベースに関する情報を表示するアクセス権を持つ **Oracle Cloud ユーザー・アカウント**。
- **Oracle Cloud** コンピュータ・インスタンスの作成時に使用するコンパートメント名、VCN およびサブネット。この情報は自律型データベース管理者またはテナンシ管理者に問い合わせてください。
- コンピュータ・インスタンスで **EPM 統合エージェント**をインストールして構成する場合は、次のファイルが必要です:
 - EPMAgent.zip
 - ウォレット
 - Oracle Enterprise Performance Management Cloud で使用する SSL 証明書
- ファイルを転送するための WinSCP。WinSCP は、<https://winscp.net/eng/index.php> から入手できる無料ダウンロードです

コンピュータ・インスタンスで **EPM 統合エージェント**を構成するには:

1. ホスト名、ユーザー名、パスワードおよび SSH キーを使用してコンピュータ・インスタンスに接続します。
コンピュータ・インスタンスへの接続の詳細は、[Putty を使用したコンピュータ・インスタンスへの接続](#)または [WSCP を使用したコンピュータ・インスタンスへの接続](#)を参照してください。
その他の接続情報は[インスタンスへの接続](#)に記載されています。
2. OCI yum サービスから利用可能な RPM を使用して、OCI コンピュータ・シェイプで実行されている Oracle Linux に **Oracle Java** をインストールします。
Oracle Java のインストールの詳細は、[Oracle Cloud Infrastructure への Oracle Java のインストール方法](#)。を参照してください
3. ホスト名、ユーザー名およびパスワードを指定し、「**ログイン**」をクリックして、**WinSCP** にログインします。
WinSCP が開き、Windows ファイル・エクスプローラに似たディレクトリ構造が表示されます。
4. 次のファイルを、ソース・ディレクトリからコンピュータ・インスタンスのディレクトリにドラッグ・アンド・ドロップして転送します:
 - **EPMAgent.zip**。
最新の EPMAgent.zip は、データ統合でローカル・ネットワークからダウンロードできます。詳細は、[EPMAgent ZIP のダウンロード](#)を参照してください。
 - **ウォレット**—ウォレット・ファイルには、Autonomous Database サービス・コンソールからのクライアント資格証明が格納されます。

ウォレットの詳細は、[Oracle Cloud Infrastructure への接続](#)を参照してください。

- **SSL 証明書**—EPM Cloud で使用される証明書。

証明書は、EPM Cloud と EPM 統合エージェント間の暗号化された接続を使用可能にするのに必要です。

オプションで、scp コマンド・ライン・ユーティリティを使用して、ローカル・システムからリモート・システムにファイルおよびディレクトリを安全にコピーすることもできます。SCP コマンド構文のフォーマットは次のとおりです:

```
scp [OPTION][user@]SRC_HOST:]file1 [user@]DEST_HOST:]file2
```

Linux および Mac で、この構成に必要な EPM 統合エージェント・コンポーネントを転送する際に使用できるサンプルの scp コマンドを次に示します。

```
scp -i /Users/Oracle/Documents/oci/ssh-key-private.key epmagent.jar  
opc@<OCI_INSTANCE_PUBLIC_IP_ADDRESS>:/home/opc/epmagent.jar
```

```
scp -i /Users/Oracle/Documents/oci/compute/ssh-key-private.key  
epm.cer opc@<OCI_INSTANCE_PUBLIC_IP_ADDRESS>:/home/opc/epm.cer
```

```
scp -i /Users/Oracle/Documents/oci/compute/ssh-key-private.key  
Wallet-epm.zip opc@<OCI_INSTANCE_PUBLIC_IP_ADDRESS>:/home/opc/  
Wallet-epm.zip
```

5. 宛先フォルダに **EPMAgent.zip** を抽出します。
通常、宛先フォルダは<AGENT_HOME>です。
6. ウォレットを構成ディレクトリにコピーするか、<EPMAgentDevData\config>または<EPM_APP_DATA_HOME>にウォレット・ディレクトリを作成して、解凍します。
7. 証明書を<EPM_AGENT_HOME/cert>ディレクトリにコピーします。
8. コンピュート・インスタンスでエージェントを開始します。
詳細は、[EPM 統合エージェントの開始](#)を参照してください。

Oracle Autonomous Database から EPM Cloud へのデータのロード

Oracle Autonomous Database でデータベースに対してリレーショナル・データベース SQL 問合せを実行して Oracle Autonomous Database からデータを抽出し、ローカル・ネットワークの EPM 統合エージェントを使用して Oracle Enterprise Performance Management Cloud にデータまたはメタデータをロードできます。

EPM 統合エージェントは、統合用のデータ・ソースとして定義され、実行されると、後でマップして選択したターゲット・アプリケーションにロードされるデータを提供します。

データをロードする前提条件として、Oracle Autonomous Database に接続する必要があります。また、Oracle ウォレットをすでにダウンロードしている必要があります。ウォレットにより、複数のドメインにまたがるデータベース資格証明を管理するためのシンプルで簡単な方法が提供されます。

Oracle Autonomous Database から EPM Cloud にデータをロードするには:

1. データ統合で、問合せ定義を作成し、SQL 問合せを保存します。

これを行うには、[SQL 問合せの作成](#)を参照してください。

データ統合に SQL 問合せをすでに登録している場合は、このステップをスキップします。

2. ソース・データから 1 つのヘッダー行を含むファイルを作成します。

ヘッダー行は、ターゲット・ディメンションのディメンション名と完全に一致する必要があります。ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できます。

	A	B	C	D	E
1	Entity	Account	Product	Amount	
2	580	DPO	P_200	1233.98	
3	580	7300	P_200	45100.56	
4	580	7850	P_200	4000.33	
5	580	Capital Eq	P_200	-11900.7	
6	511	NI	P_200	17744.81	
7	580	NI	P_200	100	
8	580	NI	P_200	700	

3. ファイルを、ヘッダー行を持つ CSV フォーマット・ファイルとして保存します。

アプリケーションを登録するとき、ファイル・ブラウザを使用してファイルをアップロードします。

4. Oracle Autonomous データ・ソース・アプリケーションを登録します:

- a. 「**データ統合**」ホーム・ページの「**アクション**」から、「**アプリケーション**」を選択します。
- b. **アプリケーション**・ページで、**+** をクリックします。
- c. **アプリケーションの作成**の「**カテゴリ**」から、「**データ・ソース**」を選択します。
- d. 「**タイプ**」から「**Oracle Autonomous Database**」を選択します。
- e. 「**ファイル**」から、ステップ 8 で作成したファイルを選択します。

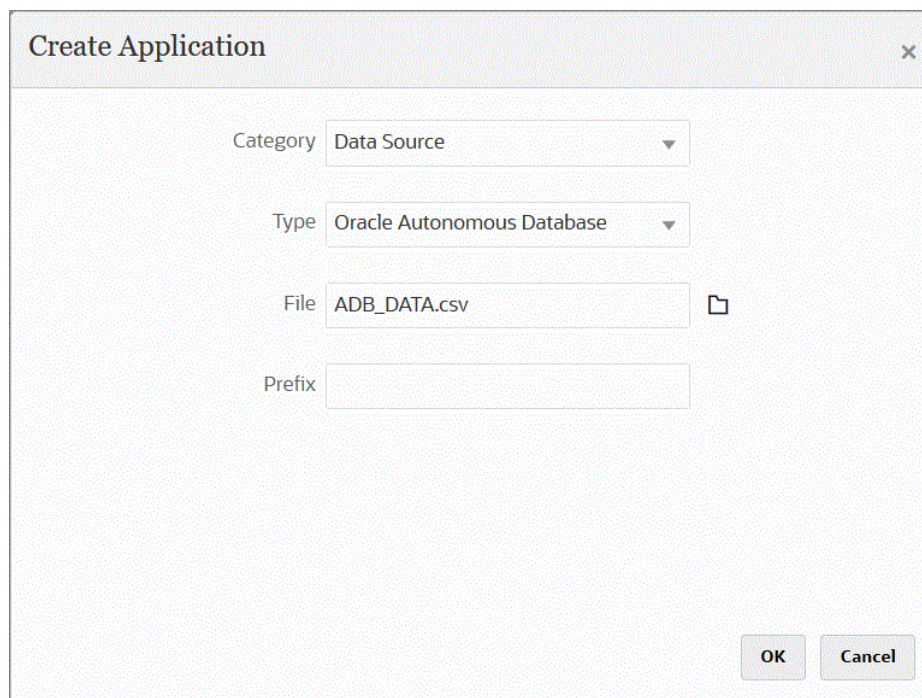


をクリックし、ファイル・ブラウザ・ページでファイルを参照します。

- f. 「**接頭辞**」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。

- g. 「**OK**」をクリックし、「**保存**」をクリックします。



5. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。
6. **アプリケーション** ページで、Oracle Autonomous データ・ソース・アプリケーションの横にある **...** をクリックして、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
7. **アプリケーション詳細** ページで、「**オプション**」タブをクリックします。
8. **データ抽出問合せ** で、ファイルに対して実行する SQL 問合せの名前を指定します。
9. 「**区切り文字**」で、ファイルで使用する区切り文字のタイプを選択します。

使用可能な区切り記号は次のとおりです:

- カンマ(,)
 - 感嘆符(!)
 - セミコロン(;)
 - コロン(:)
 - 垂直棒(|)
10. **資格証明ストア**で、EPM 統合エージェントで使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプは次のとおりです:

- クラウド
- ファイル

「**クラウド**」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションに**ユーザー名/パスワード**接続文字列を格納します。

「**ファイル**」資格証明ストア・タイプの場合は、Oracle Autonomous Database 接続用の JDBC URL、ユーザー名およびパスワードを格納するファイルを作成します。URL フォーマットには、JDBC URL、ウォレット・フォルダへのパス、ユー

ザー名およびパスワードが含まれる必要があります。ファイル名は `appname.cred` という名前です。config ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@<tns_name>?TNS_ADMIN=<path_to_wallet_folder>
```

.cred ファイルのエントリの例は次のようになります:

```
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@epmdevdb0_low?TNS_ADMIN=C:\ATP
Connection\epmdevdb0_wallet
username=apps
password=w+Sz+WjKpL8[
```

 **Note:**

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` ユーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

11. 「**ユーザー名**」に、Oracle Autonomous Database に接続するために使用したユーザー名を指定します。

SQL Developer を使用して Oracle Autonomous Database に接続する場合は、SQL Developer のユーザー名とパスワードを指定します。

12. 「**パスワード**」に、Oracle Autonomous Database に接続するために使用したパスワードを指定します。

13. **サービス名**に、サービス名を指定します。

`tnsnames.ora` ファイルを開き、接続に関連するサービス名を選択して、サービス名を確認できます。サービス名は、接続記述子に含まれるデータベース・ネットワーク・アドレスにマップされた別名です。

データベースに接続する場合は、サービス名を選択する必要があります。Autonomous Data Warehouse 接続のサービス名のフォーマットは、次のとおりです:

- `databasename_high`
- `databasename_medium`
- `databasename_low`

これらのサービスは、LOW、MEDIUM および HIGH のコンシューマ・グループにマップされます。

たとえば、Data Warehouse のワークロード・タイプで Autonomous Database を作成し、データベース名として DB2020 を指定する場合、サービス名は次のとおりです:

- db2020_high
- db2020_medium
- db2020_low

db2020_low サービスを使用して接続する場合、接続では LOW のコンシューマ・グループが使用されます。

これらのコンシューマ・グループの基本特性は、次のとおりです:

- **HIGH:** 多くのリソース、最も低い同時実行性。問合せは並列で実行されます。
- **MEDIUM:** 比較的少ないリソース、比較的高い同時実行性。問合せは並列で実行されます。

MEDIUM のサービス同時実行性の制限を変更できます。詳細は、[MEDIUM のサービス同時実行性の制限の変更](#)を参照してください。

- **LOW:** 最も少ないリソース、最も高い同時実行性。問合せは順次実行されます。

14. 「**フェッチ・サイズ**」で、問合せに対する各データベースのラウンド・トリップでフェッチされる(ドライバで処理される)行数を指定します。


15. **ウォレットの場所**に、EPM 統合エージェント・サーバーの、ウォレットをダウンロードして解凍したディレクトリの場所を指定します。

Application Details: ADB_DATA Save

Property Name	Property Value
Data Extract Query	ABS_SOURCE_DATA
Delimiter	,
Credential Store	Cloud
Username	admin
Password	*****
Service Name	db2020_high
Wallet Location	C:\EPMAgentADBData\bix\config
Fetch Size	1000

16. 「**保存**」をクリックします。

17. 次を完了して、Oracle Autonomous Database データ・ソースと EPM Cloud の統合を終了します:

タスク	説明	詳細情報
全般	ファイルベース統合および直接統合のソースの統合を追加または編集します。	データ統合の定義
<div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p> Note:</p> <p>同じ場所が使用されていても、ターゲット・アプリケーションがオンプレミス・ソースから Oracle Autonomous Database ソースに変更されている Oracle Autonomous Database 統合を編集すると、統合は実行時に失敗します。</p> </div>		
ディメンションのマッピング	データ・ソースの列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。	ディメンションのマッピング
メンバーのマッピング	ディメンションをマッピングして、ソース・フィールドの値をターゲット・ディメンション・メンバーに変換する方法を指定します。	メンバーのマッピング
オプション	データをインポートおよびエクスポートするためのオプションを定義します。また、ソース・フィルタを定義します。	データ統合オプションの設定
統合の実行	統合が実行されると、EPM 統合エージェントによってエクスポート・プロセスが EPM Cloud で開始されます。エージェントによってエクスポート・データがダウンロードされます。また、選択した方法に基づいて、エージェントによって適切な INSERT 文が作成され、データがターゲット表にロードされます。 出力ファイルを「 プロセスの詳細 」からダウンロードして、エクスポートされたデータを確認できます。ライトバックのデータベース列名は、次に示すように、生成されたファイル内で列ヘッダーとして指定されています。	詳細は、 統合の実行 を参照してください

EPM Cloud から Oracle Autonomous Database へのデータのライトバック

EPM 統合エージェントでは、Oracle Enterprise Performance Management Cloud アプリケーションからローカル・ネットワークの Oracle Autonomous Database へのデータの移動を可能にすることによって、ライトバックがサポートされます。この機能を使用するには、Oracle Autonomous Database の選択したレポート用データ・ウェアハウスにデータをエクスポートするデータ・エクスポート・アプリケーションを登録します。

また、エージェントは、BefExport と AftExport という 2 つのイベント・スクリプトをライトバックの実行中に実行できます。BefExport イベントを使用すると、表にデータを挿入する前にアクションを実行するか、またはデフォルトの挿入処理を上書きできます。AftExport イベントを使用すると、表にデータを挿入した後で、処理後のクリーンアップを実行できます。

ライトバック機能は、SYNC モードと ASYNC モードの両方で実行されているエージェントに対してサポートされています。

Oracle Autonomous Database にデータをライトバックするには:


1. データ統合で、ライトバックするソース・データから 1 つのヘッダー行を含むファイルを作成します。

ヘッダー行は、ターゲット・ディメンションのディメンション名と完全に一致する必要があります。ディメンション名への SQL 問合せに列名の別名を使用できます。

	A	B	C	D	E
1	Entity	Account	Product	Amount	
2	580	DPO	P_200	1233.98	
3	580	7300	P_200	45100.56	
4	580	7850	P_200	4000.33	
5	580	Capital Eq	P_200	-11900.7	
6	511	NI	P_200	17744.81	
7	580	NI	P_200	100	
8	580	NI	P_200	700	

2. ファイルを、ヘッダー行を持つ CSV フォーマット・ファイルとして保存します。
アプリケーションを登録するとき、ファイル・ブラウザを使用してファイルをアップロードします。
3. **Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート**のタイプを指定して、データ・エクスポート・アプリケーションを登録します。


- a. 「データ統合」ホーム・ページの「アクション」から、「アプリケーション」を選択します。

- b. アプリケーション・ページで、 をクリックします。

- c. 「アプリケーションの作成」の「カテゴリ」で、「データ・エクスポート」を選択します。

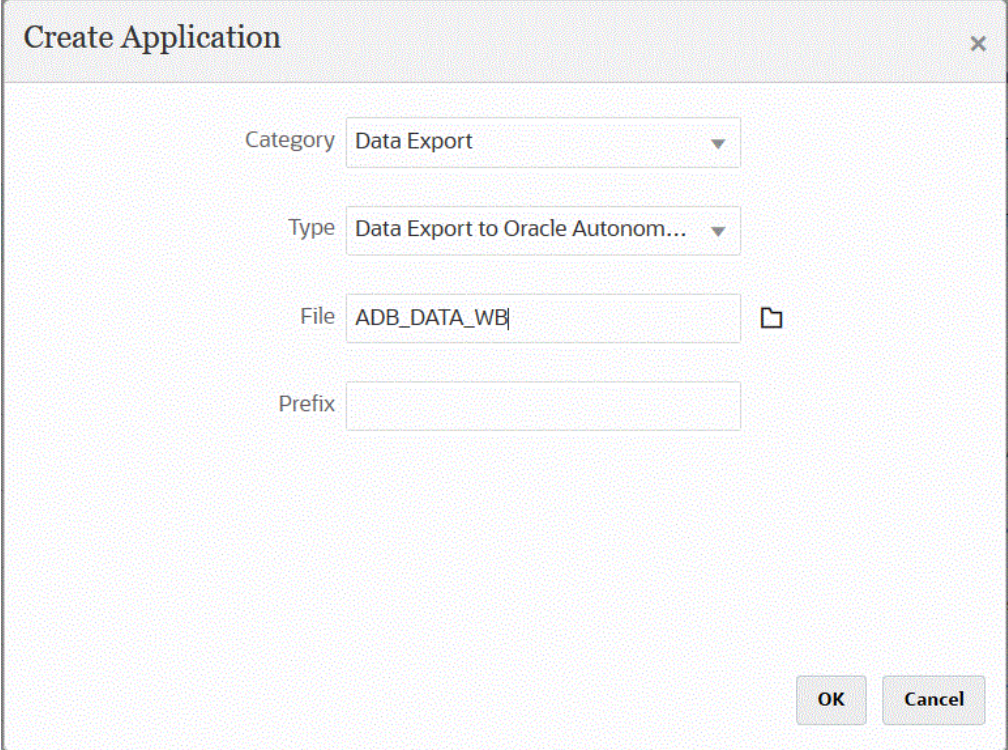
- d. 「タイプ」から **Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート**を選択します。

- e. 「ファイル」から、ステップ 2 で作成したファイルを選択します。

 をクリックし、ファイル・ブラウザ・ページでファイルを参照します。

- f. 「接頭辞」で、アプリケーション名を一意にする接頭辞を指定します。

接頭辞はアプリケーション名と連結されて、一意のアプリケーション名を形成します。たとえば、アプリケーションに既存のアプリケーションと同じ名前を付ける場合は、接頭辞としてイニシャルを割り当てることができます。



- g. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。
4. **アプリケーション** ページで、Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート・ソース・アプリケーションの横にある **...** をクリックして、「**アプリケーション詳細**」を選択します。
 5. Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート・ソース・アプリケーションの **アプリケーション詳細** の「**ディメンション**」タブに移動し、ヘッダー・レコードの列名がデータのロード先の表の列名または列別名と完全に一致することを確認します。
名前の大文字と小文字は区別されます。
詳細は、[ライトバックのアプリケーション詳細ディメンションの設定](#)を参照してください。
 6. **アプリケーション詳細** ページで、「**オプション**」タブをクリックします。
 7. 「**バッチ・サイズ**」で、ファイルからメモリーに一度に読み込まれる行数を指定します。このパラメータは主にパフォーマンスのために使用されます。データがロードされる時、この設定により、キャッシュに格納されるレコード数が決まります。たとえば、**1000** を指定すると、**1,000** 件のレコードがキャッシュに格納されます。同様に、**5000** を指定すると、**5,000** 件のレコードがキャッシュに格納されてコミットされます。
この設定をサーバー・メモリーによって決定し、必要に応じて調整します。
 8. 「**表名**」で、データのロード先の表名を指定します。
オンプレミスへのデータ・エクスポート・アプリケーションのディメンションの名前は、表の列の名前と一致している必要があります。データをロードする **INSERT** 文が自動的に生成され、すべてのフィールドのテキストが挿入されます。
このフィールドで表名を指定する場合は、**挿入問合せ** フィールドで **INSERT** 文を指定しないでください。

9. **挿入問合せ**で、問合せ定義ページで作成されるカスタム INSERT 文に関連付ける SQL 問合せの名前を指定します。

INSERT 問合せには、値の表および列とアプリケーションのディメンション名が含まれている必要があります。この方法を使用すると、わかりやすいディメンション名を付けることができ、TO_DATE、TO_NUMBER などの SQL 関数およびデータ型変換などの文字列演算を実行するその他の関数を使用することもできます。詳細は、[カスタム INSERT 問合せでのライトバック](#)を参照してください。

INSERT 問合せを指定する場合は、「**表名**」フィールドで表名を指定しないでください。

10. **資格証明ストア**で、EPM 統合エージェントで使用する資格証明ストアのタイプを指定します。

資格証明ストアの使用可能なタイプは次のとおりです:

- クラウド
- ファイル

「**クラウド**」資格証明ストア・タイプの場合は、アプリケーションに**ユーザー名/パスワード/接続文字列**を格納します。

「**ファイル**」資格証明ストア・タイプの場合は、Oracle Autonomous Database 接続用の JDBC URL、ユーザー名およびパスワードを格納するファイルを作成します。URL フォーマットには、JDBC URL、ウォレット・フォルダへのパス、ユーザー名およびパスワードが含まれる必要があります。ファイル名は `appname.cred` という名前、config ディレクトリに格納する必要があります。

ファイルには、次の行が含まれる必要があります:

```
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@<tns_name>?  
TNS_ADMIN=<path_to_wallet_folder>
```

.cred ファイルのエントリの例は次のようになります:

```
jdbcurl=jdbc:oracle:thin:@epmdevdb0_low?TNS_ADMIN=C:\ATP  
Connection\epmdevdb0_wallet  
username=apps  
password=w+Sz+WjKpL8 [
```

ノート:

両方の資格証明ストア・タイプで使用するパスワードは暗号化されている必要があります。

タイプが「クラウド」ストアの場合は、ユーザー・インタフェースにパスワードを通常の方法で入力します。システムによってパスワードが暗号化され格納されます。

タイプが「ファイル」ストアの場合は、`encryptpassword` ユーティリティを使用してパスワードを暗号化し、ファイルにパスワードを格納する必要があります。パスワードの暗号化の詳細は、[EPM Cloud ユーザー・パスワードの暗号化](#)を参照してください。

11. 「ワークフロー・モード」で、データがどのようにロードされるかの方法を指定します。

デフォルトでは、データ管理のデータ・ロード・プロセスは、データ・ロード・プロセスの完全監査を行い、ワークベンチでデータをドリルダウンして表示できる、適切に定義されたプロセス・フローを使用して設計されています。ただし、完全データ・フローは、監査目的でデータをアーカイブするため、処理時間が長くなる可能性があります。ワークフロー・モード・オプションによって、大量のデータを処理するとき、または監査が不要で、パフォーマンスが重要な要件の場合に、柔軟な解決策を提供できます。

次の 3 つのワークフロー・モード・オプションがあります。

- 完全
- 完全、アーカイブなし
- 単純

「完全」オプションは、データをロードする際のデフォルト・フローです。データはステージング表間で標準的な方法でロードされ、データをワークベンチに表示でき、ドリルダウンがサポートされています。

「完全、アーカイブなし」オプションの場合は、「完全」モードと同じ方法でデータがロードされますが、データ・ロード・プロセスの最後にステージング表からデータが削除されます。インポート・ステップの後にのみ、データをワークベンチに表示できます。「完全、アーカイブなし」モードでは、ドリルダウンは使用できません。この方法は、ロード・プロセス時にデータを確認して検証するが、監査やドリルダウンは必要でない場合に便利です。

この方法を使用してもパフォーマンスは向上しませんが、データを今後の参照のために保持しないため、使用領域が制限されます。

「単純」オプションの場合は、ステージング表間のデータの移動を制限します。ドリルダウンは使用できず、データをワークベンチに表示できません。この方法を使用するとパフォーマンスが向上し、監査やドリルダウンが必要でない場合に便利です。

「単純」オプションの場合は、ステージング表間のデータの移動を制限します。ドリルダウンは使用できず、データをワークベンチに表示できません。この方法を使用するとパフォーマンスが向上し、監査やドリルダウンが必要でない場合に便利です。

12. 「ユーザー名」に、Oracle Autonomous Database に接続するために使用したユーザー名を指定します。

SQL Developer を使用して Oracle Autonomous Database に接続する場合は、SQL Developer のユーザー名とパスワードを指定します。

13. 「パスワード」に、Oracle Autonomous Database に接続するために使用したパスワードを指定します。

14. サービス名に、サービス名を指定します。

tnsnames.ora ファイルを開き、接続に関連するサービス名を選択して、サービス名を確認できます。サービス名は、接続記述子に含まれるデータベース・ネットワーク・アドレスにマップされた別名です。

データベースに接続する場合は、サービス名を選択する必要があります。Autonomous Data Warehouse 接続のサービス名のフォーマットは、次のとおりです：

- *database_name_high*
- *database_name_medium*
- *database_name_low*

これらのサービスは、LOW、MEDIUM および HIGH のコンシューマ・グループにマップされます。

たとえば、Data Warehouse のワークロード・タイプで Autonomous Database を作成し、データベース名として DB2020 を指定する場合、サービス名は次のとおりです：

- db2020_high
- db2020_medium
- db2020_low

db2020_low サービスを使用して接続する場合、接続では LOW のコンシューマ・グループが使用されます。

これらのコンシューマ・グループの基本特性は、次のとおりです：

- **HIGH:** 多くのリソース、最も低い同時実行性。問合せは並列で実行されます。
- **MEDIUM:** 比較的少ないリソース、比較的高い同時実行性。問合せは並列で実行されます。
MEDIUM のサービス同時実行性の制限を変更できます。詳細は、[MEDIUM のサービス同時実行性の制限の変更](#)を参照してください。
- **LOW:** 最も少ないリソース、最も高い同時実行性。問合せは順次実行されます。

15. **ウォレットの場所**に、EPM 統合エージェント・サーバーの、ウォレットをダウンロードして解凍したディレクトリの場所を指定します。
16. 勘定科目データをエクスポート前に要約し、結果を 1 つ以上の列にグループ化する場合は、**データの累計**で、「はい」と入力します。

勘定科目データをエクスポート前に要約せず、結果を 1 つ以上の列にグループ化しない場合は、「いいえ」と入力します。

Application Details: ADB_DATA_WB Save

Property Name	Property Value
Batch Size	1000
Table Name	
Insert Query	AGENTINSERT
Credential Store	Cloud
Workflow Mode	Simple
Username	admin
Password	*****
Service Name	db2020_high
Wallet Location	c:\EPMAgentADBData\bin\config
Accumulate Data	No

17. 「保存」をクリックします。
18. 次のタスクを完了して、EPM Cloud アプリケーションを Oracle Autonomous Database へのデータ・エクスポート・アプリケーションと統合します。

タスク	説明	詳細情報
全般	ファイルベース統合および直接統合のソースの統合を追加または編集します。	データ統合の定義

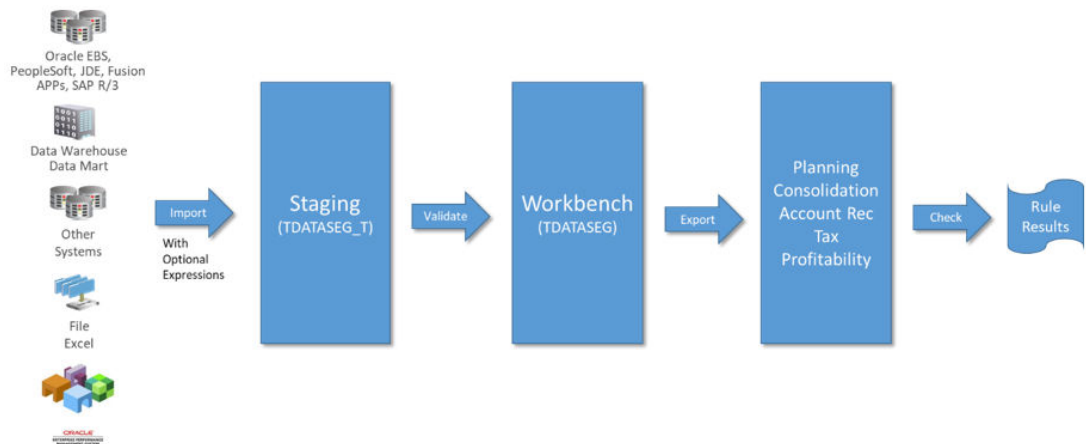
タスク	説明	詳細情報
ディメンションのマッピング	データ・ソースの列をターゲット・アプリケーションのディメンションにマッピングします。	ディメンションのマッピング
メンバーのマッピング	ディメンションをマッピングして、ソース・フィールドの値をターゲット・ディメンション・メンバーに変換する方法を指定します。	メンバーのマッピング
オプション	データをインポートおよびエクスポートするためのオプションを定義します。また、ソース・フィルタを定義します。	データ統合オプションの設定
統合の実行	統合が実行されると、EPM 統合エージェントによってエクスポート・プロセスが EPM Cloud で開始されます。エージェントによってエクスポート・データがダウンロードされます。また、選択した方法に基づいて、エージェントによって適切な INSERT 文が作成され、データがターゲット表にロードされます。 出力ファイルを「 プロセスの詳細 」からダウンロードして、エクスポートされたデータを確認できます。ライトバックのデータベース列名は、次に示すように、生成されたファイル内で列ヘッダーとして指定されています。	統合の実行

A

データ統合でのパフォーマンス・チューニング

データ統合では、マルチステップのワークフローを使用してデータを変換し、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスにロードします。ワークフローの各ステップはこのプロセスを制御および管理するために使用され、各ステップはプロセス全体の全体的なパフォーマンスに貢献します。データ統合内では、顧客のパフォーマンス要件を満たすようにワークフローと変換ステップを調整するためのユーザーが選択できるオプションが用意されています。

ワークフロー・プロセスの概要は次のとおりです:



プロセス全体を調整するには、各ステップを分析して、必要な詳細レベル、データ量、データ変換およびドリル・スルー要件を決定する必要があります。これらの要因がデータ統合で選択および構成されたオプションを推進し、目的の結果をもたらします。次のステップの例では、ワークフロー・タイプとして「完全」ワークフロー・モードを使用し、「数値データのみ」のロード方法を使用します。

ジョブ・ログの分析

チューニング作業の開始点はジョブ・ログです。統合が完了すると、実行ダイアログまたはプロセスの詳細ページからジョブ・ログをダウンロードできます。ジョブ・ログを効果的に分析するには、次のようなデータ統合プロセスの各ステップを理解することが重要です:

- ステップ 1: TDATASEG_T 表へのファイルのステージングおよびロード
- ステップ 2: 以前のデータ・ロードのクリーンアップ
- ステップ 3: マッピング・ルールの処理
- ステップ 4: TDATASEG の以前の統合のクリーンアップ
- ステップ 5: TDATASEG_T から TDATASEG へのマッピング結果のコピー
- ステップ 6: マッピング結果の検証
- ステップ 7: ファイルの生成とターゲットへのロード

ジョブ・ログの追加情報は次を参照してください: [ジョブ・ログに関するその他の考慮事項](#)

ステップ 1: TDATESEG_T 表へのファイルのステージングおよびロード

このステップを使用して、処理のためにシステムを初期化し、マッピングに使用される一時表にソース・データをロードします。百万行のデータ・ファイルのサンプル・ログ・ファイルのセクションを次に示します:

```
2021-07-10 22:33:16,523 INFO [AIF]: FDMEE Process: 51, Log Level: 5
2021-07-10 22:33:16,523 INFO [AIF]: Location : PartnerTraining01-MM (Partitionkey:14)
2021-07-10 22:33:16,524 INFO [AIF]: Period Name : Jan-21 (Period Key:1/31/21 12:00 AM)
2021-07-10 22:33:16,524 INFO [AIF]: Category Name: MillionRow (Category key:25)
2021-07-10 22:33:16,524 INFO [AIF]: Rule Name : PartnerTraining01-MM (Rule ID:13)
2021-07-10 22:33:18,710 DEBUG [AIF]: FDMEE Version: 21.07.04
2021-07-10 22:33:18,710 INFO [AIF]: Log File Encoding: UTF-8
2021-07-10 22:33:19,273 INFO [AIF]: -----START IMPORT STEP-----
2021-07-10 22:33:19,395 DEBUG [AIF]: FileData.extractDataFromSource - START
2021-07-10 22:33:19,396 DEBUG [AIF]: CommData.getRuleInfo - START
2021-07-10 22:33:19,402 DEBUG [AIF]:
```

この例では、プロセスは 22:33:16,523 としてログ・レベル 5 で開始されました。チューニングおよびデバッグ時には、ログ・レベル 5 を使用して処理実行の詳細全体を表示することをお勧めします。次の図は、TDATESEG_T 表へのロードの完了を示しています。

```
2021-07-10 22:33:21,025 INFO [AIF]: EPMFDM-140274:Message - File Name Sample_file_1048576_Rows.dat
periodKey2021-01-31
GL PeriodName0
2021-07-10 22:33:21,025 INFO [AIF]: EPMFDM-140274:Message - Instantiating ExpressionInterpreter
2021-07-10 22:33:21,386 INFO [AIF]: EPMFDM-140274:Message - PROCESS ID: 51
PARTITIONKEY: 14
IMPORT GROUP: PartnerTraining01-MM
FILE TYPE: DELIMITED
DELIMITER: ,
SOURCE FILE: Sample_file_1048576_Rows.dat
PROCESSING CODES:
-----
BLANK..... Line is blank or empty.
NN..... Non-Numeric, Amount field contains non numeric characters.
TC..... Type Conversion, Amount field could not be converted to a number.
ZP..... Zero Suppress, Amount field contains a 0 value and zero suppress is ON.
SKIP FIELD..... SKIP field value was found
NULL ACCOUNT VALUE..... Account Field is null
SKIP FROM SCRIPT..... Skipped through Script
HEADER ROW..... Header Row
ERROR_INVALID_PERIOD..... Invalid period specified in the file.

2021-07-10 22:37:32,637 INFO [AIF]: EPMFDM-140274:Message - Rows Loaded: 1048576
Rows Rejected: 0
```

ログは、1,048,576 行がロードされ、0 行が拒否されたことを示しています。マッピング前のステージングとファイル・ロードのおおよその時間は 4 分 16 秒でした。ファイルベース・ロードではこのステップに関して調整できるものはないため、これはプロセス全体の固定構成要素です。ユーザーは、ロード・プロセス時に選択したイベント中に実行するビジネス・ルールを指定できることに注意してください。ビジネス・ルールを含めた場合は、これらのパフォーマンスも要求どおりであることを確認します。ビジネス・ルールのパフォーマンスはデータ統合によって制御されないため、それらがパフォーマンスの問題の原因となっている場合は、ターゲット・アプリケーションで調整する必要があります。

ステップ 2: 以前のデータ・ロードのクリーンアップ

このステップを使用して、次に示すように、TDATESEG_T 表と AIF_PROCESS_PERIODS 表のデータをクリーンアップします:

```
2021-07-10 22:37:34,086 DEBUG [AIF]: intermediateCommit: True, skipRegularSql: False
2021-07-10 22:37:34,088 INFO [AIF]: Executing delete statement:
2021-07-10 22:37:34,088 DEBUG [AIF]:
DELETE FROM TDATESEG_T
WHERE LOADID < 51
AND EXISTS ( SELECT 1 FROM AIF_PROCESSES p WHERE p.RULE_ID = 13 AND p.PROCESS_ID = TDATESEG_T.LOADID )

2021-07-10 22:37:34,092 INFO [AIF]: Successfully executed delete statement
2021-07-10 22:37:34,095 DEBUG [AIF]:
DELETE FROM AIF_PROCESS_PERIODS
WHERE PROCESS_ID < 51
AND EXISTS ( SELECT 1 FROM AIF_PROCESSES p WHERE p.RULE_ID = 13 AND p.PROCESS_ID = AIF_PROCESS_PERIODS.PROCESS_ID )
```

TDATESEG_T のデータは日次メンテナンス・ウィンドウ中にクリアされます。再起動後にプロセスを実行している場合、このステップは非常に短時間で完了しますが、後続のロードは速度が遅くなる可能性があります。「完全」ワークフロー・モードでは、TDATESEG_T のデータは実行の最後に削除されます。「単純」ワークフローでは、実行の最後に削除されません。前回の実行で百万行を超える行がある場合、バッチ削除が実行されますが、これは単独の削除よりも時間がかかります。

ステップ 3: マッピング・ルールの処理

マッピング・プロセスでは、チューニングによって結果を改善でき、ユーザーはプロセスの速度を制御できます。ログ・ファイルには、処理されたマッピング・ルールとともに、マッピング・ルールの処理に使用された SQL が表示されます。

これらの例では、ワイルドカード「*から*へ」マッピング・ルールが各ディメンションに使用されており、これらはユーザーが実装できる最も時間のかかるルールです。「*から*へ」ルールごとにデータ・セットのフルパスが実行されるため、百万行のデータ・セットがあつて 5 つの「*から*へ」マッピング・ルールがある場合、5 百万行のデータベース読取りが行われます。行数が増えると、マッピング時間が大幅に増加します。その他の考慮事項は 1 回の実行で処理される期間数に関するものであり、データ・セット内の各期間に対してマッピング・プロセスが実行されます。このことも、完全なデータ・セットを処理するのに必要な時間の増加につながります。

この例では、最初のマッピング・ルールを次に示します(これは勘定科目ディメンションの「*から*へ」ルールです):

```
Processing Mappings for Column 'ACCOUNT'
2021-07-10 22:37:34,775 DEBUG [AIF]:
UPDATE TDATESEG_T
SET ACCOUNTX = ACCOUNT
,ACOUNTR = 201
,ACCOUNTF = 3
WHERE LOADID = 51
AND PARTITIONKEY = 14
AND CATKEY = 25
AND (ACCOUNTX IS NULL OR ACCOUNTX = '')
AND (1=1)
AND PERIODKEY = '2021-01-31'
2021-07-10 22:38:07,915 INFO [AIF]: Data Rows Updated by Location Mapping '10' (LIKE): 1048576
```

このマッピング・ルールは約 33 秒で完了し、プロセスの進行に従い、同様のルールはそれぞれ 35 から 53 秒で処理されます。この例からわかるように、同様のマッピング・ルールを追加すると、マッピング中の処理時間が引き続き消費されます。

ステップ 4: TDATESEG の以前の統合のクリーンアップ

マッピングが正常に完了すると、TDATESEG 表から以前の実行が削除されます。(TDATESEG 表はワークベンチのデータが格納される場所です。)これが統合の最初の実行である場合、前期間のデータがないため、このステップはすぐに完了します。以前のデータが大量にある場合、このステップには長時間かかる可能性があります。

次に示すように、バッチ・サイズ・パラメータを使用して TDATESEG 表からデータのチャンクを削除し、削除プロセスが個々の SQL 文の処理制限に達しないようにします。削除文の数を制限するようにバッチ・サイズを調整することで、このステップを調整できます。この実行ではバッチ・サイズは **1000** に設定されていますが、より大きく設定することもできます。後続の実行では、このステップは約百万レコードの以前のロードを削除するために 6 分かかりました。

Note:

データはバッチ・サイズに基づいて処理用にメモリーにロードされ、メモリーが不足する可能性があるため、バッチ・サイズはあまり大きく設定しないでください。システム・メモリーは **Oracle Enterprise Performance Management Cloud** に共通であり、インスタンスの他の領域に影響を与える場合があります。

```
2021-07-10 22:40:22,760 INFO [AIF]: Executing delete statement using batch method
2021-07-10 22:40:22,763 DEBUG [AIF]: batchSize: 1000
2021-07-10 22:40:22,763 DEBUG [AIF]: SELECT rowid FROM TDATESEG WHERE LOADID < 51 AND PARTITIONKEY = 14 AND CATKEY = 25 AND RULE_ID = 13 AND PERIODKI
2021-07-10 22:40:22,775 INFO [AIF]: Successfully executed delete statement using batch method
2021-07-10 22:40:22,775 INFO [AIF]: Number of Rows deleted from TDATESEG: 0
```

ステップ 5: TDATESEG_T から TDATESEG へのマッピング結果のコピー

以前の結果が TDATESEG 表から削除された後、マップされた新しいデータは、ワークベンチからアクセスできるように TDATESEG 表に移動されます。これはデータ・ロード・プロセスのもう 1 つの時間のかかるステップであり、ここでもバッチ・サイズ・パラメータを使用して、TDATESEG 表へのマッピング結果の挿入をチャンク化し、単一の SQL の処理制限に達しないようにします。

この例では、バッチ・サイズが **1000** に設定されており、データの移動に **1049** バッチが必要です。TDATESEG_T 表から TDATESEG 表にデータを移動するのにかかった合計時間は 5 分 26 秒でした。

```

2021-07-10 22:40:23,434 DEBUG [AIF]:
INSERT INTO TDATASEG (
DATAKEY, PARTITIONKEY, CATKEY, PERIODKEY,CURKEY, DATAVIEW, CALCACCTTYPE, CHANGESIGN, JOURNALID
,AMOUNT, AMOUNTX, AMOUNT_PTD, AMOUNT_YTD, DATA, DATAK, DESC1, DESC2
,ACCOUNT, ACCOUNTX, ACCOUNTR, ACCOUNTF, ENTITY, ENTITYX, ENTITYY, ENTITVF, ICP, ICPX, ICPR, ICPF
,UD1, UD1X, UD1R, UD1F, UD2, UD2X, UD2R, UD2F, UD3, UD3X, UD3R, UD3F, UD4, UD4X, UD4R, UD4F
,UD5, UD5X, UD5R, UD5F, UD6, UD6X, UD6R, UD6F, UD7, UD7X, UD7R, UD7F, UD8, UD8X, UD8R, UD8F
,UD9, UD9X, UD9R, UD9F, UD10, UD10X, UD10R, UD10F, UD11, UD11X, UD11R, UD11F, UD12, UD12X, UD12R, UD12F
,UD13, UD13X, UD13R, UD13F, UD14, UD14X, UD14R, UD14F, UD15, UD15X, UD15R, UD15F, UD16, UD16X, UD16R, UD16F
,UD17, UD17X, UD17R, UD17F, UD18, UD18X, UD18R, UD18F, UD19, UD19X, UD19R, UD19F, UD20, UD20X, UD20R, UD20F
,ATTR1, ATTR2, ATTR3, ATTR4, ATTR5, ATTR6, ATTR7, ATTR8, ATTR9, ATTR10, ATTR11, ATTR12, ATTR13, ATTR14
,ATTR15, ATTR16, ATTR17, ATTR18, ATTR19, ATTR20, ATTR21, ATTR22, ATTR23, ATTR24, ATTR25, ATTR26, ATTR27
,ATTR28, ATTR29, ATTR30, ATTR31, ATTR32, ATTR33, ATTR34, ATTR35, ATTR36, ATTR37, ATTR38, ATTR39, ATTR40
,ARCHIVEID, HASMEMOITEM, STATICDATAKEY, LOADID, RULE_ID, CODE_COMBINATION_ID,STAT_BALANCE_FLAG, VALID_FLAG )
VALUES (1130025,14,25,'2021-01-31 00:00:00.0','[NONE]', 'YTD',9,0,NULL,11111,11111,NULL,NULL,NULL,NULL,NULL, 'ACCOUNT1', 'ACCOUNT1',201
2021-07-10 22:40:23,725 DEBUG [AIF]: Executing batch number: 1
2021-07-10 22:40:24,120 DEBUG [AIF]: Executing batch number: 2
2021-07-10 22:40:24,699 DEBUG [AIF]: Executing batch number: 3
2021-07-10 22:40:25,063 DEBUG [AIF]: Executing batch number: 4
...
2021-07-10 22:46:58,103 DEBUG [AIF]: Executing batch number: 1047
2021-07-10 22:46:58,468 DEBUG [AIF]: Executing batch number: 1048
2021-07-10 22:46:58,736 DEBUG [AIF]: Executing partial batch number: 1049
2021-07-10 22:46:58,834 INFO [AIF]: Successfully executed insert statement using batch method
2021-07-10 22:46:58,834 INFO [AIF]: Number of Rows inserted into TDATASEG: 1048576

```

データが TDATASEG に移動された後、TDATASEG_T 内のデータは削除されます。このプロセスもバッチ・サイズ・パラメータを使用しており、この例では、一時データを削除するプロセスに 5 分 5 秒かかりました。

ステップ 6: マッピング結果の検証

次のステップでは、欠落しているマッピングがないかマッピング結果を確認します。これは 1 ステップのプロセスであり、比較的短時間です。VALID_FLAG = "Y" の行がカウントされ、プロセス実行の TDATASEG 表の合計行数と比較されます。数値が同じ場合は、マッピング・プロセスが成功したことを示します。無効な行は VALID_FLAG = "N" に更新されます。

```

Validate Data Mappings for Period 'Jan-21'
2021-07-10 22:52:04,389 DEBUG [AIF]:
SELECT COUNT(*) ROW_COUNT
FROM TDATASEG
WHERE LOADID = 51
AND (PARTITIONKEY = 14 AND CATKEY = 25 AND PERIODKEY = '2021-01-31' AND RULE_ID = 13 AND VALID_FLAG = 'Y'

```

ステップ 7: ファイルの生成とターゲットへのロード

最後のステップでは、ターゲット・ビジネス・プロセスにロードされるファイルを生成します。このプロセスでは、ファイル、ドリル領域の生成および Oracle Enterprise Performance Management Cloud へのロードに 1 分 45 秒かかります。このステップには、ターゲット・アプリケーションのビジネス・ルールや他の計算も含まれる場合があります。ファイルがデータ統合から離れたら、ターゲット・アプリケーションでチューニングを行う必要があります。

ジョブ・ログに関するその他の考慮事項

選択したロード方法も、プロセスの最後のステップでデータがロードされときのパフォーマンスに影響することに注意してください。「数値データのみ」オプションでは、Oracle Essbase に直接ロードされ、すべての検証チェックとセキュリティ・チェックはバイパスされます。Planning を使用する場合、データをロードする最も速い方法です。

ユーザーが「セキュリティ保護されたすべてのデータ型」を選択した場合は、ユーザー役割に応じてアウトライン・ロード・ユーティリティ (OLU) または importDataSlice API が使用されます。OLU は、ユーザーが管理者であり、管理者のデータの検証設定が「いいえ」に設定されている場合に使用されます。importDataSlice API は、管理者以外のユーザーの場合、または管理者がロードしていて、管理者のデータの検証が「はい」に設定されている場合に使用されます。importDataSlice API は、データの完全なチェックを実行し、すべての検証設定とセキュリティ設定に従いますが、最も遅い方法です。

チューニングに関する考慮事項

統合のチューニングに使用できる様々な戦略があり、次のものがあります:

- SQL マッピング
- 式
- 「単純」ワークフロー・モード
- クイック・モード

チューニング・パフォーマンスの追加情報は次を参照してください: [その他の考慮事項](#)

SQL マッピング

SQL マッピング機能は複雑なマッピング要件に使用でき、複数のワイルドカード「*から*へ」マッピング・ルールをデータベースの単一パスに置き換えるために使用することもできます。

この例では、マッピングに約 3 分かかりますが、単一の SQL マッピング・ルールを使用すると約 30 秒しかかかりません。単一の SQL マッピング・ルールを使用してすべての類似ルールを置き換えることができ、次のようになります:

The screenshot shows the 'Edit Member Mapping' dialog box with the following fields and values:

- Source: [Search icon] *
- Target: #SQL
- Script: ACCOUNT, ENTITYX=ENTITY, UD1X=UD1, UD3X=UD3
- Processing Order: 10
- Description: [Empty]
- Change Sign:
- Apply To: [Dropdown menu]

生成されて実行される実際の SQL は次のとおりです:

```
Processing Mappings for Column 'ACCOUNT'
2021-07-15 14:54:34,333 DEBUG [AIF]:
      UPDATE TDATESEG_T
      SET ACCOUNTX = ACCOUNT,
ENTITYX=ENTITY,
UD1X=UD1,
UD3X=UD3
      ,ACCONTR = 201
      ,ACCOUNTF = 3
WHERE LOADID = 75
AND PARTITIONKEY = 14
AND CATKEY = 25
AND (ACCOUNTX IS NULL OR ACCOUNTX = '')
AND (1=1)
AND PERIODKEY = '2021-01-31'
2021-07-15 14:54:59,646 INFO [AIF]: Data Rows Updated by Location Mapping '10' (LIKE): 1048576
```

この場合、SQL マッピングは ACCOUNT ディメンションで定義され、他の「*から*へ」マッピング・ルールは削除されました。この 1 つの SQL マッピング・ルールの合計時間は 29 秒で、他のマッピング・ルールは必要ありませんでした。

ACCOUNT および ENTITY ディメンションはそれらの名前で参照できますが、他のディメンションは UD ディメンションにマップされます。SQL マッピングに必要なディメンションのセットを見つけるには、アプリケーション定義またはログ・ファイルを調べて、使用するディメンションを確認する必要があります。この例では、Product と Scenario が UD1 と UD3 にマップされます。ソース・ディメンション・メンバーは X のない列を使用し、マップされた値は接尾辞として X が付いた列にあります。ACCOUNT ディメンションの場合、ソース・ファイルからの値は ACCOUNT という名前の列にあり、マップされた値は ACCOUNTX 列に格納されます。SQL マッピングは各ディメンションの X 列を設定するために使用されます。

これらの同じタイプのマッピングを Account Reconciliation で使用できますが、Profile ディメンションは ACCOUNT として分類されるため、Profile ディメンションの SQL マッピングは ACCOUNT ディメンションで指定する必要があることに注意してください。Account Reconciliation の他のディメンションは、アプリケーション定義で定義されたマッピングに基づいて参照する必要があります。

マッピングのタイプごとにリソースの使用方法が異なり、マッピングのパフォーマンスは次の順序となります。Explicit が最も速く、Multi-Dim が最も遅くなります：

1. EXPLICIT
2. IN
3. BETWEEN および LIKE
4. MULTI-DIM

Multi-dim マッピングは最も遅いマッピングであり、EXPLICIT と LIKE マッピングの組合せを使用する必要がある複雑な使用事例では multi-dim のルールを制限しようとしています。たとえば、ENTITY = 100 AND ACCOUNT LIKE 4*などです。

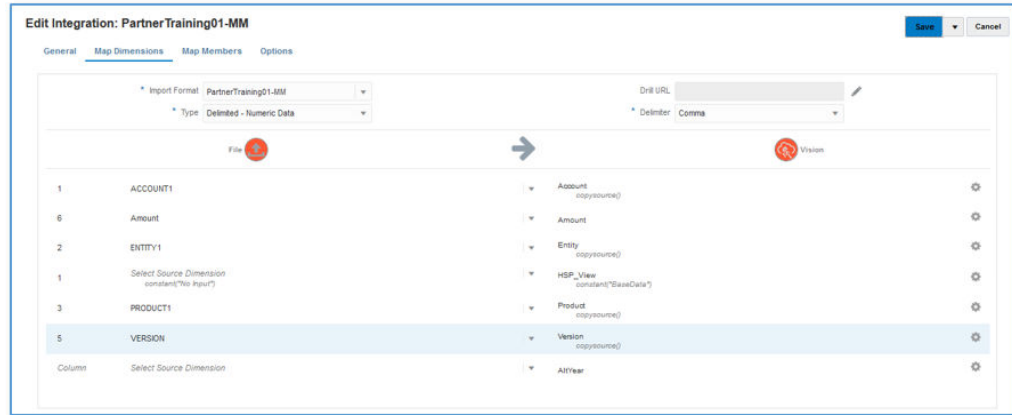
追加のチューニング戦略として、ソース・ディメンションを組み合わせることで、multi-dim マッピングを explicit マッピングに置き換えることができる場合があります。たとえば、ENTITY=100 AND ACCOUNT=4100 の場合、ENTITY と ACCOUNT をソースとして連結し、100-4000 の EXPLICIT マッピングを定義できます。

 **Note:**

データ量が非常に多い(3 百万行を超える)場合のパフォーマンスは似ていますが、SQL マッピングはデータベース・ガバナーの制限により失敗することがあります。インポート式はデータのインポート時に処理され、SQL 操作を伴わないため、インポートが失敗することはありません。このため、データ量が非常に多い場合は、SQL マッピングのかわりにインポート式を使用することをお勧めします。

式

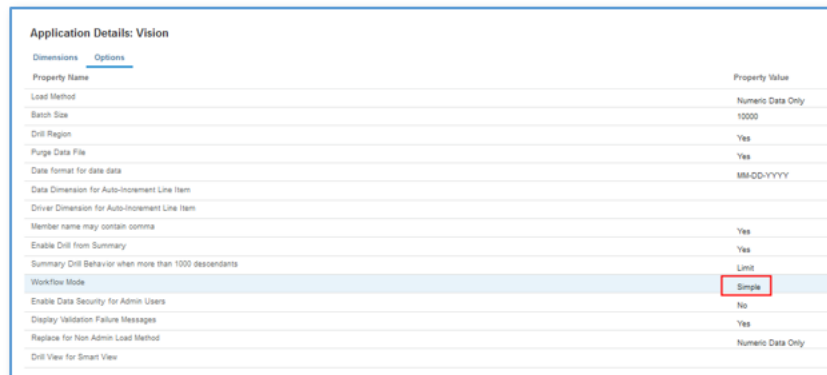
マッピング・ルールのかわりに式を使用することもでき、この手法はパフォーマンスの向上にも役立ちます。「*から*へ」の"like"マッピング・ルールを置き換えるには、CopySource 式を使用でき、次のようになります：



この式は「*から*へ」マッピングと同じことを行い、SQL 文を使用した表のスクランを介してではなく、インポート中に適用されます。式のパフォーマンスは単一の SQL マッピング・ルールを使用する場合とほぼ同じですが、データベース・ガバナーの制限のためにマッピングが失敗しないように、データ量が多い場合は式を使用することをお勧めします。(式はロード・プロセスのインポート・ステップ中に処理されます。)

「単純」ワークフロー・モード

「単純」ワークフロー・モードでは、TDATASEG 表がバイパスされ、データはターゲットに直接ロードされます。この手法により、TDATASEG へのデータのコピーと、TDATASEG からの削除が不要になります。唯一の注意点は、データ統合ランディング・ページへのドリル・スルーが使用できないことです。(直接ドリルを使用したドリル・スルーは可能です。)



この「単純」ワークフロー・モードと式を使用して、ロード・プロセス全体で 5 分 16 秒かかりました:

```

*Vision_77.log - Notepad
File Edit Format View Help
2021-07-15 19:51:09,058 INFO [AIF]: FDMEE Process: 77, Log Level: 5
2021-07-15 19:51:09,058 INFO [AIF]: Location : PartnerTraining01-MM (Partitionkey:14)
2021-07-15 19:51:09,058 INFO [AIF]: Period Name : Jan-21 (Period Key:1/31/21 12:00 AM)
2021-07-15 19:51:09,058 INFO [AIF]: Category Name: MillionRow (Category key:25)
2021-07-15 19:51:09,058 INFO [AIF]: Rule Name : PartnerTraining01-MM (Rule ID:13)
2021-07-15 19:51:12,279 DEBUG [AIF]: FDMEE Version: 21.07.04
2021-07-15 19:51:12,279 INFO [AIF]: Log File Encoding: UTF-8
2021-07-15 19:51:13,024 INFO [AIF]: -----START IMPORT STEP-----
2021-07-15 19:51:13,156 DEBUG [AIF]: FileData.extractDataFromSource - START
2021-07-15 19:51:13,156 DEBUG [AIF]: CommData.getRuleInfo - START
...
2021-07-15 19:56:25,878 DEBUG [AIF]: CommData.updateRuleStatus - END
2021-07-15 19:56:25,878 DEBUG [AIF]: Comm.updateProcess - START
2021-07-15 19:56:25,886 DEBUG [AIF]: Comm.updateProcess - END
2021-07-15 19:56:25,889 DEBUG [AIF]: The fdmAPI connection has been closed.
2021-07-15 19:56:25,889 DEBUG [AIF]: Comm.finalizeProcess - END
2021-07-15 19:56:25,889 INFO [AIF]: FDMEE Process End, Process ID: 77
Ln 11, Col 4 100% Unix (LF) UTF-8

```

クイック・モード

複雑な変換を必要としない大量のデータ・ロードには、クイック・モードを検討する必要があります。クイック・モードは、ワークフロー・プロセスのほとんどのステップとデータベース表をバイパスしますが、単純な変換の式をサポートします。おおまかなベンチマークとして、クイック・モードでは1分当たり約1,000,000行をターゲット・アプリケーションにロードできます。ユーザーは、クイック・モードでも直接ドリル機能を使用でき、ドリル時にデータ統合ランディング・ページをバイパスできます。

Note:

クイック・モードは Oracle Essbase にロードする場合にのみ使用でき、Account Reconciliation やトランザクション照合にロードする場合はサポートされません。

その他の考慮事項

統合を定義する場合、ワークフロー・モードとロード方法は、特定のデータ量に基づいて、ロードのパフォーマンスに直接影響を及ぼします。最大約500,000ソース・レコード/行をロードする場合、「数値データのみ」のロード方法を使用する場合は、任意のワークフロー・モードを使用することをお勧めします。

セキュリティ保護されたすべてのデータのロード方法を使用する場合、ユーザー定義のセキュリティに関して、ターゲット・アプリケーションに対して各行が検証されるため、データのロードに時間がかかることが予想されます。

1,000,000行を超えるファイルをロードする場合、ターゲット・オプションの「バッチ・サイズ」設定に基づいて、TDATESEG_T表とTDATESEG表からバッチ更新およびバッチ削除が実行されます(ターゲット・オプションの定義を参照)。場合によっては、1,000,000行を超えるファイルが、それぞれが1,000,000行未満のファイルに分割されることがあり、これにより通常、パフォーマンスが向上します。ユーザーは、ファイルごとに1つずつ、複数の統合を作成し、これらの統合をバッチに結合してバッチを並列モードで実行し、ファイルの分割

によって達成されたパフォーマンスを維持できます。これにより、分割ファイルの複数のルールを開始する単一の実行ポイントが提供されます。

次の表に、ワークフロー・モード、ロード方法およびデータ量に関する推奨事項を示します。

Table A-1 推奨されるワークフロー・モード、ロード方法およびデータ量

ワークフロー・モード	ロード方法	行数
「完全」ワークフロー	数値データのみ	最大約 3 百万行
「単純」ワークフロー	数値データのみ	最大約 4-5 百万行
「完全」ワークフロー	管理ユーザー セキュリティ保護されたすべてのデータ 管理者のデータの検証 = はい	500,000 行未満
「完全」ワークフロー	管理ユーザー セキュリティ保護されたすべてのデータ 管理者のデータの検証 = いいえ(これにより、アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してターゲットにロードされます)	最大約 3 百万行
クイック・モード	数値データのみ	任意の行数
クイック・モード 管理者のデータの検証 = はいはサポートされていません。	管理ユーザー セキュリティ保護されたすべてのデータ 管理者のデータの検証 = いいえ(これにより、アウトライン・ロード・ユーティリティを使用してターゲットにロードされます)	任意の行数

 **Note:**

統合のチューニングはやや専門的であり、すべての場合に同じ手法を適用できるわけではありません。チューニングは通常、最終的なソリューションに到達するために複数回の反復が必要であり、チューニングに対処するための時間をすべての実装に含める必要があります。

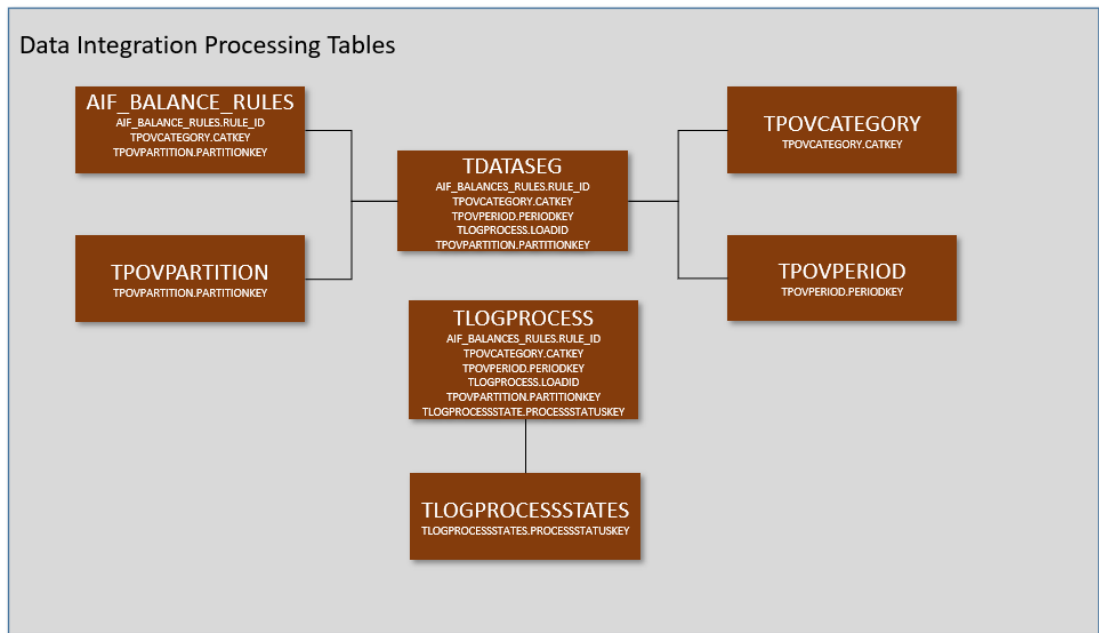
B

データ統合スキーマに対するレポートの作成

データ統合でレポートを作成するお客様を支援するために、次の図にデータ統合の各処理表の概要を示します。

データ統合の処理表

次の図は、データ統合の処理表とその相互の関係を示しています。



データ統合の表の定義

次のデータ統合の表について表の定義を示します:

- [AIF_BALANCE_RULES 表の定義リファレンス](#)
- [TDATASEG 表の定義リファレンス](#)
- [TLOGPROCESS 表の定義リファレンス](#)
- [TLOGPROCESSTATES 表の定義リファレンス](#)
- [TPOVCATEGORY 表の定義リファレンス](#)
- [TPOVPARTITION 表の定義リファレンス](#)
- [TPOVPERIOD 表の定義リファレンス](#)

AIF_BALANCE_RULES 表の定義リファレンス

Table B-1 AIF_BALANCE_RULES の定義

AIF_BALANCE_RULES の列	AIF_BALANCE_RULES の定義
RULE_ID	NUMBER(15,0) NOT NULL ENABLE
RULE_NAME	VARCHAR2(80 CHAR) NOT NULL ENABLE
PARTITIONKEY	NUMBER(10,0)
CATKEY	NUMBER(10,0)
APPLICATION_ID	NUMBER(15,0) NOT NULL ENABLE
SOURCE_SYSTEM_ID	NUMBER(15,0) NOT NULL ENABLE
SOURCE_LEDGER_ID	NUMBER(15,0)
IMPGROUPKEY	VARCHAR2(20 CHAR)
PLAN_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
SOURCE_APP_PLAN_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
MULTI_PERIOD_FILE_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)
RULE_DESCRIPTION	VARCHAR2(400 CHAR)
STATUS	VARCHAR2(30 CHAR)
FILE_NAME_STATIC	VARCHAR2(256 CHAR)
FILE_PATH	VARCHAR2(256 CHAR)
FILE_NAME_DATE_FORMAT	VARCHAR2(30 CHAR)
FILE_NAME_SUFFIX_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
PERIOD_MAPPING_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
CALENDAR_ID	VARCHAR2(100 CHAR)
RULE_ATTR1	VARCHAR2(100 CHAR)
RULE_ATTR2	VARCHAR2(100 CHAR)
RULE_ATTR3	VARCHAR2(100 CHAR)
RULE_ATTR4	VARCHAR2(100 CHAR)
DIRECT_FILE_LOAD_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)
LEDGER_GROUP	VARCHAR2(10 CHAR)
INCL_ZERO_BALANCE_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)
BALANCE_SELECTION	VARCHAR2(30 CHAR)
AMOUNT_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
BALANCE_METHOD_CODE	VARCHAR2(30 CHAR)
BALANCE_TYPE	VARCHAR2(1 CHAR)
BAL_SEG_VALUE_OPTION_CODE	VARCHAR2(30 CHAR)
EXCHANGE_RATE_OPTION_CODE	VARCHAR2(30 CHAR)
EXCHANGE_BEGIN_RATE_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
EXCHANGE_END_RATE_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
EXCHANGE_AVERAGE_RATE_TYPE	VARCHAR2(30 CHAR)
DATA_SYNC_OBJECT	VARCHAR2(255 CHAR)
DATA_SYNC_OBJECT_ID	VARCHAR2(50 CHAR)
INCLUDE_ADJ_PERIODS_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)
BALANCE_AMOUNT_BS	VARCHAR2(10 CHAR)

Table B-1 (Cont.) AIF_BALANCE_RULES の定義

AIF_BALANCE_RULES の列	AIF_BALANCE_RULES の定義
BALANCE_AMOUNT_IS	VARCHAR2(10 CHAR)
AS_OF_DATE	DATE
BLANK_PERIODKEY	DATE
BR_MEMBER_NAME	VARCHAR2(80 CHAR)
BR_MEMBER_DISP_NAME	VARCHAR2(80 CHAR)
CURRENCY_CODE	VARCHAR2(10 CHAR)
DP_MEMBER_NAME	VARCHAR2(80 CHAR)
LEDGER_GROUP_ID	NUMBER(15,0)
VERSION	VARCHAR2(80 CHAR)
SIGNAGE_METHOD	VARCHAR2(30 CHAR)
LOAD_OPTIONS	VARCHAR2(2000 CHAR)
ICP_LOAD	VARCHAR2(1 CHAR)

TDATESEG 表の定義リファレンス

Table B-2 TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
DATAKEY	NUMBER(31,0) NOT NULL ENABLE	データの各行に対してシステムによって生成される一意キー
PARTITIONKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE	ロケーション・キー。ロケーション情報を取得するために TPOVPARTITION と結合します。
CATKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE	カテゴリ・キー。カテゴリ情報を取得するために TPOVCATEGORY と結合します。
PERIODKEY	DATE NOT NULL ENABLE	期間キー。データ管理と EPM 期間のマッピングの詳細を取得するために TPOVPERIOD と結合します。
DATAVIEW	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT 'YTD' NOT NULL ENABLE	Enterprise Resource Planning (ERP) システムからデータを取得する場合、ファイルの場合は YTD にハード・コードされ、貸借対照表の場合は YTD、損益計算書の場合は PTD に設定されます。
CURKEY	VARCHAR2(25 CHAR) DEFAULT	データの通貨コード。
CALCACCTTYPE	NUMBER(6,0) DEFAULT 9 NOT NULL ENABLE	行がソースからインポートされたか、ロジック・グループによって計算されたかを示します: <ul style="list-style-type: none"> • 9=インポートされた • 5=計算されエクスポートされた • 1=計算されたがエクスポートされない
CHANGESIGN	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	インポートされた金額の符号を反転する必要があるかどうかを指定します: <ul style="list-style-type: none"> • 0=変更なし • 1=符号を反転

Table B-2 (Cont.) TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
JOURNALID	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	仕訳の ID。ユーザー指定値
AMOUNT	NUMBER(38,12) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースからロードされる金額
AMOUNTX	NUMBER(38, 12) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	変換ルール適用後の金額。この値が、ターゲット・アプリケーションにロードされます。
DESC1	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	説明はファイルからインポートできます。
DESC2	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	説明はファイルからインポートできます。
ACCOUNT	VARCHAR2(300 CHAR) NOT NULL ENABLE	ソースの勘定科目メンバー
ACCOUNTX	VARCHAR2(2000 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後の勘定科目メンバー
ACOUNTR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATEMAPSEG の DATAKEY を参照します。
ACCOUNTF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
ENTITY	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースのエンティティ・メンバー
ENTITYX	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後のエンティティ・メンバー。この値はエクスポートされます。
ENTITYR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATEMAPSEG の DATAKEY を参照します。
ENTITYF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
ICP	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの ICP
ICPX	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後の ICP この値はエクスポートされます。
ICPR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATEMAPSEG の DATAKEY を参照します。
ICPF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
UD1	VARCHAR2(280 CHAR) DEFAULT	ソースの UD1
UD1X	VARCHAR2(280 CHAR) DEFAULT	マッピング・ルール処理後の UD1。この値はエクスポートされます。
UD1R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	このディメンションで使用されるマッピングのキー。TDATEMAPSEG の DATAKEY を参照します。

Table B-2 (Cont.) TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
UD1F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	マップ・タイプ: <ul style="list-style-type: none"> • 1=例外 • 3=次の値の間 • 4=範囲
UD2	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD2
UD2X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD2X
UD2R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD2R
UD2F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD2F
UD3	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD3
UD3X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD3X
UD3R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD3R
UD3F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD3F
UD4	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD4
UD4X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD4X
UD4R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD4R
UD4F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD4F
UD5	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD5
UD5X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD5X
UD5R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD5R
UD5F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD5F
UD6	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD6
UD6X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD6X
UD6R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD6R
UD6F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD6F
UD7	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD7
UD7X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD7X
UD7R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD7R
UD7F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD7F
UD8	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD8
UD8X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD8X
UD8R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD8R
UD8F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD8F

Table B-2 (Cont.) TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
ARCHIVEID	NUMBER(31,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	将来使用予定
HASMEMOITEM	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	将来使用予定
STATICDATAKEY	NUMBER(31,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	将来使用予定
UD9	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD9
UD9X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD9X
UD9R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD9R
UD9F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD9F
UD10	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD10
UD10X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD10X
UD10R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD10R
UD10F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD10F
UD11	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD11
UD11X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD11X
UD11R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD11R
UD11F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD11F
UD12	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD12
UD12X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD12X
UD12R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD12R
UD12F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD12F
UD13	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD13
UD13X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD13X
UD13R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD13R
UD13F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD13F
UD14	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD14
UD14X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD14X
UD14R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD14R
UD14F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD14F
UD15	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT	ソースの UD15
UD15X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD15X
UD15R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD15R

Table B-2 (Cont.) TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
UD15F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD15F
UD16	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD16
UD16X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD16X
UD16R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD16R
UD16F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD16F
UD17	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD17
UD17X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD17X
UD17R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD17R
UD17F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD17F
UD18	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD18
UD18X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD18X
UD18R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD18R
UD18F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD18F
UD19	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD19
UD19X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD19X
UD19R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD19R
UD19F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD19F
UD20	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD20
UD20X	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ソースの UD20X
UD20R	VARCHAR2(10, 0 CHAR) DEFAULT	ソースの UD20R
UD20F	VARCHAR2(6, 0 CHAR) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	ソースの UD20F
ATTR1	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される

Table B-2 (Cont.) TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
ATTR2	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
		<p> Note:</p> <p>Financial Consolidation and Close からデータをインポートするときは、属性列 ATTR2 および ATTR3 を他のディメンション・マッピングに使用しないでください。</p>
ATTR3	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
		<p> Note:</p> <p>Financial Consolidation and Close からデータをインポートするときは、属性列 ATTR2 および ATTR3 を他のディメンション・マッピングに使用しないでください。</p>
ATTR4	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR5	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される

Table B-2 (Cont.) TDATASEG 表のリファレンス

TDATASEG の列名	TDATASEG の定義	TDATASEG の説明
ATTR6	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR7	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR8	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR9	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR10	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR11	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR12	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR13	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	制限あり。ロジック・グループがロケーションに割り当てられる場合は、ロジック・アイテムの格納に使用されます。
ATTR14	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR15	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR16	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR17	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR18	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR19	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR20	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR21	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR22	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR23	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR24	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR25	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR26	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR27	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR28	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR29	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される

Table B-2 (Cont.) TDATESEG 表のリファレンス

TDATESEG の列名	TDATESEG の定義	TDATESEG の説明
ATTR30	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR31	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR32	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR33	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR34	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR35	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR36	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR37	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR38	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR39	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
ATTR40	VARCHAR2(300 CHAR)	ユーザー定義属性 - 必要に応じてマッピングまたはドリル・スルーで使用される
DATA	VARCHAR2(2000 CHAR)	
DATA_X	VARCHAR2(2000 CHAR)	
DATAR	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	
DATAF	NUMBER(6,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE	
CODE_COMBINATION_ID	VARCHAR2(500 CHAR)	Oracle E-Business Suite との統合に使用されます。
AMOUNT_YTD	NUMBER(29,12)	YTD 金額。E-Business Suite、Peoplesoft、Fusion データ・ソースに使用されます。
AMOUNT_PTD	NUMBER(29,12)	PTD 金額。E-Business Suite、Peoplesoft、Fusion データ・ソースに使用されます。
LOADID	NUMBER(15,0)	この行を作成または更新したプロセス ID。
RULE_ID	NUMBER(15,0)	この行の作成に使用されたデータ・ルール ID。詳細を取得するために AIF_BALANCE_RULES と結合します。
STAT_BALANCE_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)	残高が統計かどうかを示します: <ul style="list-style-type: none"> • Y=統計 • N=残高
VALID_FLAG	VARCHAR2(1 CHAR)	行に有効なマッピングがあるかどうかを示します: <ul style="list-style-type: none"> • Y=有効 • N=無効 • I=無視

TLOGPROCESS 表の定義リファレンス

Table B-3 TLOGPROCESS 表の定義リファレンス

TLOGPROCESS の列	TLOGPROCESS の説明
PARTITIONKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE
CATKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE
PERIODKEY	DATE NOT NULL ENABLE
RULE_ID	NUMBER(15,0) NOT NULL ENABLE
PROCESSIMP	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSIMPNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL,
PROCESSVAL	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSVALNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSEXP	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSEXPNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSENTLOAD	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSENTLOADNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSENTVAL	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSENTVALNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSCERT	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSCERTNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSASSES	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSASSESNOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSCHILDDONE	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSCHILDDONENOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSUD1	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSUD1NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSUD2	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSUD2NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSUD3	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSUD3NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSUD4	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSUD4NOTE	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
PROCESSENDTIME	DATE DEFAULT TO_DATE('01/01/1900', 'MM/DD/YYYY') NOT NULL ENABLE
BLNWCDIRTY	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
BLNLOGICDIRTY	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
BLNVALDIRTY	NUMBER(1,0) DEFAULT 1 NOT NULL ENABLE
INTLOCKSTATE	NUMBER(6,0) DEFAULT 50 NOT NULL ENABLE
PROCESSTATUS	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
LOADID	NUMBER(15,0)

TLOGPROCESSTATES 表の定義リファレンス

Table B-4 TLOGPROCESSTATES 表のリファレンス

TLOGPROCESSTATES の列	TLOGPROCESSTATES の説明
PROCESSTATUSKEY	NUMBER(10,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PROCESSTATUSDESC	VARCHAR2(100 CHAR)
PROCESSTATUSCODE	VARCHAR2(10 CHAR)

TPOVCATEGORY 表の定義リファレンス

Table B-5 TPOVCATEGORY 表の定義リファレンス

TPOVCATEGORY の列	TPOVCATEGORY の定義
CATKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE
CATNAME	VARCHAR2(20 CHAR) NOT NULL ENABLE
CATDESC	VARCHAR2(50 CHAR) DEFAULT NULL
CATTARGET	VARCHAR2(75 CHAR) NOT NULL ENABLE
CATFREQ	VARCHAR2(10 CHAR) DEFAULT 'M' NOT NULL ENABLE

TPOVPARTITION 表の定義リファレンス

Table B-6 TPOVPARTITION 表の定義

TPOVPARTITION の列	TPOVPARTITION の定義
PARTITIONKEY	NUMBER(10,0) NOT NULL ENABLE
PARTNAME	VARCHAR2(20 CHAR) NOT NULL ENABLE
PARTDESC	VARCHAR2(100 CHAR) DEFAULT NULL
PARTNOTES	VARCHAR2(255 CHAR) DEFAULT NULL
PARTLASTIMPFIL	VARCHAR2(250 CHAR) DEFAULT NULL
PARTLASTEXPFIL	VARCHAR2(250 CHAR) DEFAULT NULL
PARTIMPGRP	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTLOGICGRP	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTVALGRP	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTVALENTGRP	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTCURRENCYKEY	VARCHAR2(25 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTPARENT	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT NULL

Table B-6 (Cont.) TPOVPARTITION 表の定義

TPOVPARTITION の列	TPOVPARTITION の定義
PARTTYPE	NUMBER(6,0) DEFAULT 2 NOT NULL ENABLE
PARTSEQMAP	NUMBER(1,0) DEFAULT 0 NOT NULL ENABLE
PARTDATAVALUE	VARCHAR2(100 CHAR) DEFAULT NULL,
PARTSEGMENTKEY	NUMBER(6,0) DEFAULT 1 NOT NULL ENABLE,
PARTCONTROLSTYPE	NUMBER(10,0) DEFAULT 1 NOT NULL ENABLE
PARTCONTROLSGROUP1	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTCONTROLSGROUP2	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTCONTROLSAPPROVER	VARCHAR2(255 CHAR) DEFAULT NULL
PARTCONTROLSAPPROVERPROXY	VARCHAR2(255 CHAR) DEFAULT NULL
PARTCONTROLSREDFLAGLEVEL	NUMBER(10,0) DEFAULT 6 NOT NULL ENABLE
PARTLOGICGROUP	VARCHAR2(20 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTINTGCONFIG1	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT NULL
PARTINTGCONFIG2	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT NULL
PARTINTGCONFIG3	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT NULL
PARTINTGCONFIG4	VARCHAR2(300 CHAR) DEFAULT NULL
PARTADAPTOR	VARCHAR2(10 CHAR) DEFAULT '[NONE]' NOT NULL ENABLE
PARTSOURCESYSTEMID	NUMBER(15,0)
PARTSOURCELEDGERID	NUMBER(15,0)
PARTTARGETAPPLICATIONID	NUMBER(15,0)
PARTPARENTKEY	NUMBER(10,0)
PARTSOURCEAPPLICATIONID	NUMBER(15,0)
PARTTARGETSOURCESYSTEMID	NUMBER(15,0)

TPOVPERIOD 表の定義リファレンス

Table B-7 TPOVPERIOD 表の定義

TPOVPERIOD の列	TPOVPERIOD の定義
PERIODKEY	DATE NOT NULL ENABLE
PRIORPERIODKEY	DATE NOT NULL ENABLE
PERIODDESC	VARCHAR2(20 CHAR) NOT NULL ENABLE
PERIODTARGETM	VARCHAR2(80 CHAR) NOT NULL ENABLE
PERIODTARGETQ	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT NULL
PERIODTARGETY	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT NULL,

Table B-7 (Cont.) TPOVPERIOD 表の定義

TPOVPERIOD の列	TPOVPERIOD の定義
PERIODTARGETD	VARCHAR2(80 CHAR) DEFAULT NULL
YEARTARGET	VARCHAR2(80 CHAR) NOT NULL ENABLE

C

データ統合の問題のトラブルシューティング

データ統合での問題のトラブルシューティングについては、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*の次のトピックを参照してください:

Table C-1 データ統合の問題のトラブルシューティング

データ統合での問題	ヒント
データ統合エラー	<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド</i> のデータ統合エラーの処理
データ統合での EPM Cloud の役割	<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド</i> のデータのロードに必要な役割
データのインポートまたはエクスポート	<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド</i> のデータ管理およびデータ統合の問題のトラブルシューティング
問合せおよびサポート	<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド</i> の問合せ